

文化財		
地域番号	都道府県	地域協議会名
001	北海道	小樽市日本遺産推進協議会
002	新潟県	「越後長岡」観光振興委員会
003	新潟県	十日町市文化観光推進協議会
004	新潟県	佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会
005	岐阜県	白川村多言語解説協議会
006	滋賀県	公益社団法人長浜観光協会
007	京都府	大原野保勝会
008	兵庫県	高砂市観光施設多言語案内制作協議会
009	奈良県	十津川村インバウンド受入協議会
010	島根県	鉄の道文化圏推進協議会
011	山口県	やまぐち萩往還語り部の会
012	福岡県	「西の都」日本遺産活性化協議会
013	熊本県	山鹿市観光推進協議会
014	熊本県	菊池市
015	熊本県	阿蘇カルデラツーリズム推進協議会（多言語解説整備部会）
016	大分県	竹田市多言語解説協議会
031	東京都	皇居三の丸尚蔵館

地域番号	001	協議会名	小樽市日本遺産推進協議会	
解説文番号	タイトル	ワード数	想定媒体	
001-001	北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽 / 日本遺産候補地域ストーリー	501-750	WEB	
001-002	北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽 / 日本遺産候補地域ストーリー	250ワード以内	アプリQRコード パンフレット	
001-003	天狗山からの眺望（小樽港） / 天狗山からの眺望（小樽港）	251-500	アプリQRコード パンフレット WEB	
001-004	旧手宮鉄道施設 / 旧手宮鉄道施設	501-750	WEB	
001-005	旧手宮鉄道施設 / 旧手宮鉄道施設	250ワード以内	アプリQRコード パンフレット	
001-006	小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群 / 小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群	251-500	アプリQRコード パンフレット WEB	
001-007	旧手宮線散策路（手宮線跡及び附属施設） / 旧手宮線散策路（手宮線跡及び附属施設）	501-750	WEB	
001-008	旧手宮線散策路（手宮線跡及び附属施設） / 旧手宮線散策路（手宮線跡及び附属施設）	250ワード以内	アプリQRコード パンフレット	
001-009	小樽港北防波堤 / 小樽港北防波堤	251-500	アプリQRコード パンフレット WEB	
001-010	小樽港湾事務所みなとの資料コーナー収蔵防波堤関係資料（波力公式を含む） / 小樽港湾事務所みなとの資料コーナー収蔵防波堤関係資料（波力公式を含む）	250ワード以内	アプリQRコード パンフレット WEB	
001-011	北浜地区倉庫群 / 北浜地区倉庫群	501-750	WEB	
001-012	北浜地区倉庫群 / 北浜地区倉庫群	250ワード以内	アプリQRコード パンフレット	
001-013	旧右近倉庫 / 旧右近倉庫	250ワード以内	アプリQRコード WEB	
001-014	旧広海倉庫 / 旧広海倉庫	250ワード以内	アプリQRコード WEB	
001-015	旧小樽倉庫 / 旧小樽倉庫	251-500	アプリQRコード WEB	

001-016	南浜地区倉庫群 / 南浜地区倉庫群	251-500	アプリQRコード パンフレット WEB
001-017	旧木村倉庫 / 旧木村倉庫	251-500	アプリQRコード WEB
001-018	旧嶋谷倉庫 / 旧嶋谷倉庫	250ワード 以内	アプリQRコード WEB
001-019	旧高橋倉庫 / 旧高橋倉庫	251-500	アプリQRコード WEB
001-020	旧岡崎倉庫（3棟） / 旧岡崎倉庫（3棟）	251-500	アプリQRコード パンフレット WEB
001-021	旧日本郵船(株)小樽支店及び付属倉庫群 / 旧日本郵船(株)小樽支店及び付属倉庫群	250ワード 以内	アプリQRコード パンフレット WEB
001-022	日本銀行旧小樽支店 / 日本銀行旧小樽支店	501-750	WEB
001-023	日本銀行旧小樽支店 / 日本銀行旧小樽支店	250ワード 以内	アプリQRコード パンフレット
001-024	旧三井銀行小樽支店 / 旧三井銀行小樽支店	501-750	WEB
001-025	旧三井銀行小樽支店 / 旧三井銀行小樽支店	250ワード 以内	アプリQRコード パンフレット
001-026	色内銀行街 / 色内銀行街	501-750	WEB
001-027	色内銀行街 / 色内銀行街	250ワード 以内	アプリQRコード パンフレット
001-028	旧北海道拓殖銀行小樽支店 / 旧北海道拓殖銀行小樽支店	251-500	アプリQRコード WEB
001-029	色内通り、堺町通りの商店 / 色内通り、堺町通りの商店	501-750	WEB
001-030	色内通り、堺町通りの商店 / 色内通り、堺町通りの商店	250ワード 以内	アプリQRコード パンフレット
001-031	旧岩永時計店 / 旧岩永時計店	250ワード 以内	アプリQRコード WEB
001-032	旧金子元三郎商店 / 旧金子元三郎商店	250ワード 以内	アプリQRコード WEB

001-033	田中酒造店 / 田中酒造店	250ワード 以内	アプリQRコード WEB
001-034	旧荒田商会 / 旧荒田商会	250ワード 以内	アプリQRコード WEB
001-035	旧北海雑穀(株) / 旧北海雑穀(株)	250ワード 以内	アプリQRコード WEB
001-036	旧小樽商工会議所 / 旧小樽商工会議所	250ワード 以内	アプリQRコード パンフレット WEB
001-037	JR小樽駅本屋およびプラットホーム / JR小樽 駅本屋およびプラットホーム	501-750	WEB
001-038	JR小樽駅本屋およびプラットホーム / JR小樽 駅本屋およびプラットホーム	250ワード 以内	アプリQRコード パンフレット
001-039	繁栄期の料亭、ホテル建築群 / 繁栄期の料 亭、ホテル建築群	501-750	WEB
001-040	繁栄期の料亭、ホテル建築群 / 繁栄期の料 亭、ホテル建築群	250ワード 以内	アプリQRコード パンフレット
001-041	旧光亭 / 旧光亭	250ワード 以内	アプリQRコード WEB
001-042	旧魁陽亭 / 旧魁陽亭	250ワード 以内	アプリQRコード WEB
001-043	旧越中屋ホテル / 旧越中屋ホテル	250ワード 以内	アプリQRコード WEB
001-044	小樽運河 / 小樽運河	251-500	WEB
001-045	小樽運河 / 小樽運河	250ワード 以内	アプリQRコード パンフレット
001-046	奥沢水源地水道施設 / 奥沢水源地水道施 設	251-500	アプリQRコード パンフレット WEB
001-047	運河完成後の倉庫群 / 運河完成後の倉庫 群	251-500	アプリQRコード パンフレット WEB
001-048	旧浪華倉庫 / 旧浪華倉庫	251-500	アプリQRコード WEB
001-049	旧北海製罐倉庫(株)事務所棟・工場・倉庫 / 旧北海製罐倉庫(株)事務所棟・工場・倉庫	251-500	アプリQRコード パンフレット WEB

001-050	小樽市総合博物館所蔵9.5ミリ動画資料 / 小樽市総合博物館所蔵9.5ミリ動画資料	250ワード以内	アプリQRコード パンフレット WEB
001-051	中村善策作風景画 / 中村善策作風景画	250ワード以内	アプリQRコード パンフレット WEB
001-052	小樽運河を守る会関係資料 / 小樽運河を守る会関係資料	251-500	アプリQRコード パンフレット WEB
001-053	藤森茂男作風景画 / 藤森茂男作風景画	250ワード以内	アプリQRコード パンフレット WEB
001-054	兵庫写真コレクション / 兵庫写真コレクション	250ワード以内	アプリQRコード パンフレット WEB

001-001

The Story of Otaru

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽 /

日本遺産候補地域ストーリー

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Story of Otaru

Otaru's people are central to the story of the city and its transformation from a fishing village to a major shipping hub and now a national leader in heritage preservation. Starting with the fishermen who moved to this northern outpost to make their fortunes from herring in the nineteenth century, Otaru has been driven by a pioneer spirit.

The proletarian writer Kobayashi Takiji (1903–1933) spent his youth in Otaru and set his novels and short stories in the city. He described it as “the heart of Hokkaido.”

Kobayashi saw Otaru as the center of Hokkaido's power, a port from which resources from the island's vast interior were shipped throughout Japan and to the world, and a destination for the steady flow of settlers seeking to begin new lives.

Waves of prosperity

In 1865, Otaru was a fishing village of around 300 households. Fishermen moved to Otaru from southern Hokkaido, drawn by the large shoals of herring that spawned in the waters off the coast each spring. Processed into fertilizer for cotton and indigo, much of the catch was then transported by wooden merchant ships along the Sea of Japan coast to ports and wholesale markets in southwestern Honshu.

As fishing methods improved, the annual herring catch increased. In 1897, it was close to 100,000 tons. Sometimes the whole community helped to land the fish on the beaches. Local accounts from the mid-twentieth century recall days when the herring catch was so large that schools would close for the day, so that the teachers and parents of school children could help transport the herring.

Fishing families amassed wealth and built grand mansions in Otaru, furnished with the latest goods from Osaka, Kyoto, and Tokyo. They frequented luxury restaurants and fine art stores in the city.

A growing port city

In the late nineteenth century, the Meiji government (1868–1912) resolved to develop and settle the resource-rich northern island of Hokkaido, and Otaru became a hub of the new frontier. In 1882, Hokkaido's first railway opened to transport coal from inland mines to the port at Otaru, and the coal helped fuel the government's industrialization drive.

Between 1869 and 1926, some 2.27 million people from other parts of Japan moved to Hokkaido to make their fortunes, and many landed at the port of Otaru. Some settled there, and by 1920 Otaru had grown from a fishing village to a thriving city of over 100,000.

A booming economy

A new trade route to southern Sakhalin opened after the Russo-Japanese War (1904–1905), further elevating Otaru's economic importance. Subsequently, branches of trading companies and banks moved to the city, hotels opened to accommodate international traders, and Otaru became Hokkaido's financial center.

Japan's top architects made the banking district around Ironai Street a showcase for modern architecture. In the 1930s, the street was lined with an impressive mix of Renaissance Revival, Art Deco, and early Modernist buildings. The local government invited Japan's leading civil engineers to design modern infrastructure for the city, including breakwaters, waterworks, canals, and public parks that are still in use today.

Turning tides

In the 1960s, the main source of the nation's energy shifted from coal to oil, and Otaru lost its status as a major coal shipping port. In the same decade, a plan was proposed to reclaim the canal that had fallen into disuse, demolish warehouses, and build new

roads. A grassroots citizens' movement arose to protect the canal, which was seen as a symbol of the city's former glory.

After years of debate, the city authorities modified the plan. Part of the canal was reclaimed in the 1980s, and a promenade was constructed along the remaining section of the canal to encourage people to return to the area. New businesses opened in the former warehouses, stores, and banks, and a burgeoning tourism industry developed to sustain the community and preserve the city's heritage. The citizen-led movement influenced other cities across the country to consider how to balance development and preservation.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽

この町のストーリーの中心は小樽市民です。この町が漁村から主要な貿易拠点へと変遷した際に中心にいた小樽市民が、現在では遺産保護の国家的リーダーです。19世紀にニシンにより財を成すために北の前哨基地に移住してきた漁師をはじめとして小樽は開拓者精神により突き動かされてきました。

プロレタリア作家の小林多喜二（1903年-1933年）は若いころ小樽で過ごし、その小説や短編の土台を小樽で作りました。彼は小樽を「北海道の心臓」と評しました。小林は、北海道の広大な内陸にある資源が（小樽から）日本中、世界中に出荷されること、新たな人生のスタートを求める移住者の絶え間ない流れの目的地であることなどから小樽を北海道の力の中心と考えていました。

繁栄の波

1865年当時、小樽は300世帯ほどの漁村でした。毎年春になると、小樽沖の海域に放卵するニシンの大群に惹かれて、北海道南部から漁師が小樽に移住してきました。漁獲量のほとんどは、綿畑や藍畑で使用する肥料に加工され、木造商船で日本海沿いを通って本州南部の卸売市場に輸送されていました。

漁獲法が改善され、ニシンの毎年の漁獲量が増えていきました。1897年には、10万トンに迫るほどになりました。時には地域社会全体の協力を得て魚の水揚げを行っていました。20世紀半ばの地元の記録によると、ニシンの漁獲量が非常に多かったので学校を休みにし、先生や生徒の親もニシンの運搬を手伝っていたようです。

漁師の家は財を成し、小樽に、大阪・京都・東京から取り寄せた最新の設備を備えた豪邸を建てました。彼らはこの街の豪華なレストランや美術店に足繫く通いました。

成長を遂げた港町

19世紀の終わりになると、明治政府（1868年-1912年）が資源の豊富な北の島である北海道への開拓・移住を決め、小樽は新天地の中心となりました。1882年には、内陸の鉱山から小樽港に石炭を輸送するために北海道初の鉄道が開業し、石炭は政府による工業化の原動力となりました。

1869年から1926年にかけて、およそ227万人が財を成そうと日本各地から北海道に移住してきましたが、その多くが小樽港に上陸しました。一部の人たちはそのまま小樽に住み、1920年までに漁村であった小樽は10万人を超える繁栄の町へと成長しました。

急成長する経済

日露戦争（1904年-1905年）後、樺太の南部までの新たな通商路が開通し、小樽の経済的重要性がさらに増しました。その後、貿易会社や銀行の支店がこの町に移転し、海外からやって来る貿易商の宿泊施設としてホテルが開業し、小樽は北海道の金融の中心となりました。

日本の一流建築家の手により、色内通り周辺の銀行地区は近代建築の展示の場となりました。1930年代にこの通りは、ルネッサンス・リバイバル様式建造物、アールデコ風建造物、近世初期の建造物が印象的に融合し、立ち並んでいました。地元自治体は国内の一流土木技師を招聘し、防波堤、浄水場、運河、公共公園など、この町の近代インフラの設計を要請し、これらは現在も使用されています。

形勢の変化

1960年代になると、国のエネルギーの主流が石炭から石油へと変遷し、小樽は石炭の主要な出荷港としての地位を失いました。その頃には使われなくなった小樽運河を埋め立て、倉庫を取り壊し、新しい道路を作る計画が持ち上がりました。この町のかつての栄華のシンボルとして考えられていた小樽運河を守ろうという草の根運動が市民の間で沸き起こりました。

数年に及ぶ話し合いの末、この町の当局が当初の計画を修正しました。1980年代に小樽運河の一部を埋め立て、また人々がここに戻ってきてくれるよう、小樽運河の残った部分に沿って遊歩道を建設しました。地域社会を支え、この町の遺産を守れるよう、かつて倉庫や商店や銀行であったところで新たな事業が開業され、急成長している観光産業が発展してコミュニティを維持し、街の遺産を保護しました。この市民主導の動きが日本各地の町に影響を及ぼし、いかに成長と保護のバランスを取るかについて考えさせるようになりました。

001-002

The Story of Otaru

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽 /
日本遺産候補地域ストーリー
【想定媒体】 アプリQRコード / パンフレット

できあがった英語解説文

The Story of Otaru

Otaru's people are central to the story of the city and its transformation from a small fishing village to a major shipping hub and today a national leader in heritage preservation. Starting with the fishermen who moved to this northern outpost to make their fortunes from herring in the nineteenth century, Otaru has been driven by a pioneer spirit.

In the late nineteenth century, the Meiji government (1868–1912) resolved to develop and settle the resource-rich northern island of Hokkaido, and Otaru became a pulsing hub of the new frontier. In 1882, Hokkaido's first railway opened to transport coal from inland mines to the port at Otaru, and the coal helped fuel the government's industrialization drive. Major Japanese banks established branches in the city to cater to the growing numbers of traders, merchants, and shipping companies. By the 1920s Otaru was the financial center of Hokkaido.

In the 1960s, the main source for the nation's energy needs shifted from coal to oil. Otaru's financial vigor diminished as a result, and the city lost its status as a coal shipping port. In the same decade, a plan was proposed to reclaim the canal that had fallen into disuse, demolish warehouses, and build new roads. A grassroots citizens' movement arose to protect the canal, and after years of debate the city authorities modified the plan.

Part of the canal was reclaimed in the 1980s, and a promenade was constructed along the remaining section. Otaru gained a new identity as a city that successfully preserved its heritage

while repurposing many historical buildings. The citizen-led movement influenced other cities across the country to consider how to balance development and preservation.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽

この町のストーリーの中心は小樽市民です。この町が小さな漁村から主要な貿易拠点へと変遷した際に中心にいた小樽市民が、現在では遺産保護の国家的リーダーです。19世紀にニシンにより財を成すために北の前哨基地に移住してきた漁師をはじめとして、小樽は開拓者精神により突き動かされてきました。

19世紀の終わりになると、明治政府（1868年–1912年）が資源の豊富な北の島である北海道への開拓・移住を決め、小樽は新天地の中心となりました。1882年には、内陸の鉱山から小樽港に石炭を輸送するために北海道初の鉄道が開業し、石炭は政府による工業化の原動力となりました。増加を続ける貿易商や商人、海運会社に対応するため、日本の大手銀行がこの町に支店を設立しました。1920年代まで小樽は北海道の金融の中心でした。

1960年代になると国のエネルギーの主流が石炭から石油へと変わり、その結果小樽の経済力は徐々に衰退し、小樽は石炭の出荷港としての地位を失いました。その頃には使われなくなった小樽運河を埋め立てて倉庫を取り壊し、新しい道路を作る計画が持ち上がりました。すると、小樽運河を守ろうという草の根運動が市民の間で沸き起こり、数年に及ぶ話し合いの末、この町の当局が当初の計画を修正しました。

1980年代に小樽運河の一部を埋め立て、小樽運河の残った部分に沿って遊歩道を建設しました。小樽は歴史的建造物を別の用途に使いながらも遺産の保護に成功した町として、新たなアイデンティティを得ました。この市民主導の動きが日本各地の町に影響を及ぼし、どのように成長と保護のバランスを取るかについて考えさせるようになりました。

001-003

The View from Mt. Tengu

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】天狗山からの眺望（小樽港） /

天狗山からの眺望（小樽港）

【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

The View from Mt. Tengu

Five observation platforms near the peak of Mt. Tengu (532.5 m) afford views of Otaru and its port. On a clear day, the view extends to Mt. Shokanbetsu (1,491 m) on the far side of Ishikari Bay. To the west of Mt. Tengu, the mountainous Shakotan Peninsula juts out into the Sea of Japan. The Otaru Tenguyama Ropeway offers easy access to the observation decks, reaching the upper slopes of Mt. Tengu in around four minutes.

The city below

The way that Otaru hugs the coastline is apparent in the view from Mt. Tengu. The city began with a small port that developed around the mouth of the Katsunai River. Later, when the first railway line opened in the late nineteenth century, the city developed along the rail line towards the Temiya Coal Pier at the north end of the port.

Traces of the rail line to the coal pier are still visible in parts of the city center. Elegant banks and hotels built near the canal in the nineteenth and early twentieth centuries are reminders of the city's prosperity and a testament to residents' preservation efforts.

The introduction of skiing to Hokkaido

Mt. Tengu is one of Hokkaido's oldest ski areas and served as the venue for the first All Japan Ski Championships in 1923. Skiing was introduced to Japan in 1911 when Lieutenant Colonel Theodor von Lerch (1869–1945) of the Austro-Hungarian Empire taught the technique to Japan's 58th Infantry Regiment in Niigata Prefecture. Skiing arrived in Otaru after a high school teacher learned how to ski in Niigata in 1912 and

brought back skis for his students. That same year, von Lerch skied down Mt. Yotei (1,898 m) in nearby Kutchan, and skiing quickly took off in Hokkaido. Mt. Tengu became a popular ski area, given its easy access from the city.

Natural features

In early May, a lone cherry tree known as “Tengu Sakura” reaches full bloom near the summit ropeway station. The tree is a native Ezo Yamazakura (lit. “Hokkaido mountain cherry”) believed to be over 100 years old. A 1.6-kilometer-long hiking trail loops through the forest around the mountain summit. White birch, Monarch birch, and Erman’s birch grow along the trail. In warmer seasons, hikers may see the white-bellied green pigeon that inhabits the area from spring to autumn. The rare black woodpecker, a protected species and National Natural Monument, lives in the forests of Mt. Tengu throughout the year. Ezo red fox and Yezo deer may be spotted in the snow in winter.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

天狗山

天狗山（532.5 m）頂上付近の5つの展望台から小樽の街と小樽港の眺めを楽しむことができます。晴れた日には石狩湾の向こう側に暑寒別岳（1,491 m）を見ることができます。天狗山の西方には山の多い積丹半島が日本海に突き出しています。天狗山の上部斜面まで約4分で行く小樽天狗山ロープウェイを使うと展望デッキまで簡単にアクセスできます。

眼下に見える街

天狗山から見ると、小樽の街が海岸線を抱え込んでいる様子がよくわかります。この街は勝納川の河口付近に作られた小さな港から始まりました。その後19世紀後半に最初の鉄道が開通すると、町は鉄道に沿って港の北端の手宮栈橋に向かって発展しました。

石炭栈橋までの鉄道線路跡は今でも街の中心部分に見ることができます。運河近くに建てられた19世紀と20世紀初頭の優美な銀行やホテルが街の繁栄や、住民たちの保存活動の証を彷彿とさせます。

北海道へのスキーの伝来

天狗山は、北海道で最も歴史あるスキー場の1つであり、1923年の第1回全日本スキー選手権大会の開催地として役割を果たしました。スキーはオーストリア＝ハンガリー帝国のテオドール・フォ

ン・レルヒ中佐（1869年–1945年）が新潟県で日本の歩兵第58連隊に技術を教えた1911年に日本に導入されました。高校教師が1912年に新潟でスキーの方法を学び、生徒のためにスキー板を持ち帰ったことで小樽に伝わりました。同年、フォン・レルヒは、倶知安近くの羊蹄山（1,898 m）でスキーを滑り、あっという間に北海道でスキーが始まりました。街からのアクセスのよさもあり、天狗山は、人気のスキー場となりました。

地勢

5月の上旬には、「テングサクラ」として知られる一本の桜の木が頂上のロープウェイの駅の近くで満開を迎えます。この木は樹齢100年を超えていると考えられている自生のエゾヤマザクラ（学名：Hokkaido mountain cherry）です。全長1.6キロのハイキング道が山頂周辺の森林を通り抜けています。白樺、鶉松明樺、岳樺が、ハイキング道沿いに生い茂っています。暖かい季節にはハイカーは春から秋にかけてこのエリアに生息するアオバトを見るかもしれません。保護種であり、国の天然記念物である珍しいウマゲラが1年を通じて天狗山の森林で暮らしています。冬になると、雪の中にキタキツネやこの土地特有のエゾシカを見つけられるかもしれません。

001-004

Former Temiya Railway Facility

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧手宮鉄道施設 / 旧手宮鉄道施設

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Former Temiya Railway Facility

The Temiya Railway Facility in Otaru was built in the late nineteenth century to house and maintain Hokkaido's first locomotives. It is now part of the Otaru Museum and explains the history of Hokkaido's early railways through scale models, photographs, and original rail cars and steam locomotives. Some original features including a locomotive depot are still in use and are open to the public. Several structures at the facility are designated Important Cultural Properties.

American railway engineer Joseph Crawford (1842–1924) was hired to develop the railway from the coal mine at Horonai (present-day Mikasa) to Otaru via Sapporo. Crawford ordered American-made steam locomotives for the line from H.K. Porter & Co. in Pennsylvania and passenger cars from Harlan & Hollingsworth in Delaware. The first section of the line between Temiya and Sapporo opened in 1880, and the full line was completed in 1882. Several of the engines and carriages that Crawford ordered are displayed at the facility, along with railway stock from later periods.

Locomotive Depot No. 3

This is the oldest extant brick depot in Japan and was completed in 1885, with bays to accommodate three locomotives. The depot is both functional and elegant, with decorative brickwork, a bow roof, arched windows with keystones, and herringbone-patterned wooden doors.

Engines enter through large wooden doors at the front of the fan-shaped building. Sash windows on both sides and at the back of the building, and windows above the front

doors provide light for maintenance staff to inspect and repair the locomotives. Clerestory windows along the roof monitor admit extra light, and the three chimneys on the roof discharge smoke produced during engine inspection.

Locomotive Depot No. 1

The No 1. depot held five locomotives and was completed in 1908. It currently houses the oldest working steam locomotive in Hokkaido, known as The Iron Horse (Porter 4514). The two bays on the right side (when viewed from the turntable) are original, but the three bays on the left were restored in 1996, resulting in a subtle variation in brick coloration. It has arched windows above the doors, a row of high windows on the front, and sash windows at the back to provide lighting and ventilation.

Turntable

Since steam locomotives only travel forward, turntables are needed to change direction. The steel turntable in front of the depots was manufactured by Yokogawa Bridge Engineering Works in Tokyo in 1919. It was originally manually operated but converted to compressed air later. It is now used to operate The Iron Horse (Porter 4514), which makes several runs a day on a section of track on the museum grounds.

Water tank

Steam locomotives consume a large amount of water and fuel (wood or coal). Some haul a rail vehicle called a tender, containing water and fuel to keep them running over long distances. The steel tank in the rail yard was built around 1916 to supply water for the tender. A long spout from the tank filled the tender with water, and the brickwork base acted as insulation against freezing weather.

Dangerous goods storage

The stone warehouse was built around 1898 for storing flammable goods such as paint and petroleum. It is one of the few remaining buildings from the nineteenth century.

Retaining wall

To facilitate loading coal onto cargo ships, the Temiya Coal Pier, an elevated pier 313 meters long and 20 meters high was constructed at the port in 1911. Trains accessed the pier via tracks running along a gradient, which was supported by a brick retaining

wall. Once a coal wagon reached the pier, its load would be emptied via a hatch in the underside of the wagon, down chutes onto the ship waiting below. Although the pier was dismantled in 1944, this 85-meter-long section of the retaining wall remains.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧手宮鉄道施設

小樽の手宮鉄道施設は19世紀の終わりに北海道初の機関車を収蔵・保全するために建てられました。現在は小樽総合博物館の一部として縮尺模型、写真、元の鉄道車両や蒸気機関車によって北海道の初期の鉄道の歴史を伝えています。機関庫など当時の設備のいくつかは今でも使用されており、一般公開されています。施設内のいくつかの建物は重要文化財に指定されています。

アメリカ人鉄道技術者ジョセフ・クロフォード（1842年-1924年）が幌内（現在の三笠市）の炭鉱から札幌を経由して、小樽までの鉄道線路を造るために雇われました。クロフォードはペンシルバニアのH.K.ポーター社にアメリカ製蒸気機関車を、デラウェアのハーラン&ホーリングスウォース社に客車を注文しました。手宮・札幌間の最初の鉄道区間は1880年に開通し、1882年には全線が完成しました。クロフォードが注文したエンジンや客車のいくつかはのちに購入した車両とともに施設に展示されています。

第3機関庫

これは日本で最も古い現存している煉瓦造機関庫で、1885年に完成しました。3台の機関車を収蔵することができる格納庫を備えています。この機関庫は機能的かつ優雅で、装飾的な煉瓦組み、弓型の屋根、要石付きのアーチ窓、ニシンの骨の図柄（ヘリンボーン）の木製ドアが備わっています。

扇形の建物の前側にある木製の大きなドアから車体が入ります。建物の両側と後ろ側には上げ下げ窓が設置されており、前側のドアの上の窓から保守保全人員が機関車の点検、修理を行えるよう、光が差し込むようになっています。越屋根に沿った高窓からも光が差し込み、屋根についている3本の煙突から車体の点検中に発生する煙を輩出することができます。

第1機関庫

第1機関庫は5台の機関車を収蔵でき、1908年に完成しました。現在、この機関庫にはアイアンホース号（Porter4514）として知られている北海道で一番古い現役の蒸気機関車が収納されています。（転車台から見て）右側の2つの格納庫は元々あったものです。しかし、左側の3つの格納庫は1996年に復元されたものなので煉瓦造りの色がわずかに異なります。建物の正面には、ドアの上にアーチ窓、正面に高窓の列があり、後ろ側には上げ下げ窓があって、光の取り込みと換

気を行っています。

転車台

蒸気機関車は前にしか進めないの、方向転換のための転車台が必要です。機関区の前にあるスチール製の転車台は、1919年、東京の横河橋梁製作所（現：横河ブリッジ）により製造されました。これは元々、手動で操作するものでしたが、のちに圧縮空気使用に変わりました。転車台は現在、博物館の敷地内の線路区間を1日数回走行するアイアンホース号（ポーター4514）を操作するために使用されています。

貯水タンク

蒸気機関車は大量の水と燃料（木または石炭）を消費します。なかには長距離の走行を継続するための水や燃料を載せた炭水車を運ぶ場合もあります。1916年ごろに造られた車両基地の中にあるスチール製のタンクは炭水車に水を供給していました。タンクから出た長い噴出口が炭水車に水を満たし、煉瓦造りの基礎は凍り付くような天気からの断熱の役目を果たしていました。

危険物の保管

塗料や石油などの可燃物を保管するための石造りの倉庫が1898年ごろに建てられました。これは19世紀から残っている数少ない建築物の1つです。

土留め壁（擁壁）

蒸気船への石炭の積み込みを容易にするため、1911年、港に長さ313メートル、高さ20メートルの高架栈橋である手宮石炭栈橋が建てられました。列車は勾配に沿って土留め壁に支えられた軌道を通って栈橋に到着します。石炭を乗せた荷車が栈橋に着くと荷車の下にあるハッチから荷が下ろされ、下に泊まっている船までシュートで運ばれます。栈橋は、1944年に取り壊されましたが、土留め壁のうち、この85メートルは今でも残っています。

001-005

Former Temiya Railway Facility

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧手宮鉄道施設 / 旧手宮鉄道施設

【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット

できあがった英語解説文

Former Temiya Railway Facility

The Temiya Railway Facility in Otaru was built in the late nineteenth century to house and maintain Hokkaido's first locomotives. It is now part of the Otaru Museum and explains the history of Hokkaido's early railways through scale models, photographs, and original rail cars and steam locomotives.

In the late nineteenth century, American railway engineer Joseph Crawford (1842–1924) was hired to develop a railway line from the coal mine at Horonai (present-day Mikasa) to Otaru via Sapporo. The first section of the line between Temiya and Sapporo opened in 1880, and the full line was completed in 1882.

Several structures at the facility are designated Important Cultural Properties. These include Japan's oldest surviving brick depot (1885), with bays for three locomotives, and another brick depot (1908) which houses five. The doors of the depots open to a steel turntable (1919). The turntable is now used to operate The Iron Horse steam engine, which makes several runs a day on a section of track on the museum grounds.

Other structures on the grounds include a water tank constructed around 1916 that supplied steam locomotives, utilizing a gravity-fed system. The stone warehouse was built around 1898 for storing flammable goods such as paint and petroleum. Part of the original retaining wall remains for an elevated pier that was constructed at the port in 1911 to facilitate loading coal from the railway into waiting cargo ships.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧手宮鉄道施設

小樽の手宮鉄道施設は19世紀の終わりに北海道初の機関車を収蔵・保全するために建てられました。現在は小樽総合博物館の一部として縮尺模型、写真、元の鉄道車両や蒸気機関車によって北海道の初期の鉄道の歴史を伝えています。

19世紀の終わりに、アメリカ人鉄道技術者ジョセフ・クロフォード（1842年-1924年）が幌内（現在の三笠市）の炭鉱から札幌を経由して小樽までの鉄道線路を造るために雇われました。手宮・札幌間の路線の最初の区間は1880年に開線し、全線は1882年に完成しました。

手宮鉄道施設内のいくつかの建造物は重要文化財に指定されています。3台の機関車を収蔵することができる格納庫を備えた、日本で最も古い現存している煉瓦造機関庫（1885年）、5台の機関車を収蔵するもうひとつの煉瓦造機関庫（1908年）があります。機関庫のドアを開けるとスチール製転車台（1919年）があります。転車台は今は博物館の敷地内の線路区間を1日数回走行する蒸気機関車アイアンホース号を操作するために使用されています。

その他にも重力給水システムを利用し蒸気機関車に水を供給していた1916年ごろに造られた貯水タンクがあります。塗料や石油などの可燃物を保管するための石造りの倉庫が1898年ごろに建てられました。鉄道から待機している貨物船への石炭の積み込みを容易にするため1991年に港に建てられた高架栈橋のための元の土留め壁（擁壁）の一部が今でも残っています。

001-006

Locomotives in the Otaru City Museum Collection

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群 /
小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群
【想定媒体】 アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

Locomotives in the Otaru City Museum Collection

In 1869, the Meiji government invited former samurai families and other people from around Japan to settle and help develop Hokkaido, an undertaking considered essential to Japan's prosperity and defense. Railways contributed to the development of the vast northern island by facilitating migration and the development of agriculture and mining.

Opening a new frontier

The government brought in experts from the United States who had experience with similarly harsh environments to develop Japan's "new frontier." American railway engineer Joseph Crawford (1842–1924) established Hokkaido's first train line between the newly opened Horonai coal mine in Horonai (present-day Mikasa) and the Temiya Coal Pier, a loading facility at Otaru Port. The first section opened in 1880 between Temiya and Sapporo, and the whole line became operational two years later.

American technology

Crawford ordered American-made steam locomotives for the line from H.K. Porter & Co. in Pennsylvania and passenger cars from Harlan & Hollingsworth in Delaware. The small, lightweight locomotives (16.5 tons) built by the Porter Company were ideal for Hokkaido's early railways which used inexpensive, easy-to-lay narrow gauge rails. The first two locomotives, which arrived in Hokkaido in 1880, were named Yoshitsune and Benkei; later engines were named Hirafu, Mitsukuni, Nobuhiro, and Shizuka, all after historical figures. Shizuka, which arrived in 1885, is housed at Otaru City Museum, with other historical rolling stock.

Shizuka (7106)

Shizuka was the sixth steam locomotive made for the Horonai Railway in 1884. It has the classic appearance of an American locomotive of the time: an engine with a bulging chimney called a diamond stack (to prevent sparks and embers from escaping) and a wooden “cow catcher” on the front. Shizuka operated in Hokkaido until 1917.

Taisho (7150)

The second steam locomotive made in Japan was named Taisho, meaning “great victory.” It was modeled after American steam locomotives and manufactured at the Temiya railway works of the Hokkaido Tanko Railway in 1895. It is the oldest extant domestic-made steam locomotive in Japan and bears the red polar star that the Hokkaido Development Commission adopted as a symbol of the frontier at the time.

The Iron Horse (Porter 4514)

The Iron Horse is the oldest working steam locomotive in Hokkaido and was manufactured in 1909 by the Porter Company. In summer, it makes several round trips a day for passengers within the museum grounds, running along a single track with a manual turntable at each end. The museum offers a rare opportunity to see an original locomotive in operation.

Snowplows

Heavy snowfalls make operating trains in Hokkaido a challenge. In 1881, a snowplow was made by customizing a regular freight car with metal wedges on the front and rear. Snowplow locomotives were later imported from the United States to help clear tracks. A Russell snowplow from 1910 and a rotary snowplow manufactured in 1923 by the American Locomotive Company of New York are on display.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群

1869年、明治政府は旧武家や日本中の人々に日本の繁栄、防衛にとって重要と考えられていた役割を果たす北海道に定住し、その開拓を手助けするよう要請しました。鉄道は移住や開拓を

推し進めることにより、広大な北の島の開拓に寄与しました。

新天地を開く

政府は日本の「新天地」を切り開くため、アメリカから同じような厳しい環境での経験を有する専門家を連れてきました。アメリカ人鉄道技術者ジョセフ・クロフォード（1842年-1924年）は、北海道初の鉄道線路を、新しく開鉱した幌内（現在の三笠市）の幌内炭鉱と、小樽港の積み込み施設がある手宮石炭栈橋の間に造りました。手宮・札幌間の最初の区間は1880年に開線し、その2年後全線が運行可能となりました。

アメリカの技術

クロフォードは、ペンシルバニアのH.K.ポーター社にアメリカ製鉄道線路用の蒸気機関車、デラウェアのハーラン&ホーリングスウォース社に客車を注文しました。敷設が容易で安価な狭軌レールを使用していた北海道の初期の鉄道にとっては、ポーター社が造る小さく、軽量の機関車（16.5トン）が理想的でした。1880年に到着した北海道初の2台の機関車は「義経」号、「弁慶」号と名付けられ、その後の車両は「比羅夫」号、「光国」号、「信広」号、「しづか（静）」号と名付けられました。これらの名前はすべて歴史上の人物にちなんでいます。1885年にやって来た「静」号は、その他の歴史的車両といっしょに、小樽市総合博物館に収容されています。

「しづか（静）」号（7106形）

「しづか（静）」号は1884年に幌内鉄道のために造られた蒸気機関車第6号でした。当時のアメリカ機関車が持つクラシックな外観をしており、ダイヤモンドスタック（火の粉や残り火を撒き散らさないためのもの）と呼ばれる作り付けの煙突が付いた車体で、前部には木製の「カウキャッチャー」がついていました。小樽での機関車の運行は、1917年まで続きました。

「大勝」号（7150形）

日本で造られた蒸気機関車第2号は「大勝利」を意味する「大勝」と名付けられました。これは、アメリカの蒸気機関車をモデルに1895年に北海道炭礦鉄道の手宮の鉄道工場で製造されたものです。これは、日本で最も古い、現存している国産蒸気機関車であり、当時の国境のシンボルとして北海道開拓使が採用した北極星がついています。

アイアンホース号（ポーター4514）

アイアンホース号は北海道におけるもっとも古い、現役の蒸気機関車で、1909年に、ポーター社により製造されました。夏には乗客を乗せて博物館の敷地内の単線を一日数回往復し、端まで来ると、手で転車されます。この博物館は元々の機関車が稼働しているのを見られる稀な機会を提供しています。

除雪車

大雪により北海道を走る鉄道には大きな問題がありました。1881年、通常の貨物用車両の前面

と後部にメタル製楔をカスタマイズし、除雪車を造りました。のちに、線路をきれいにするため、アメリカから除雪機関車が輸入されました。1910年からのラッセル式除雪車、ニューヨークのアメリカン・ロコモティブが1923年に製造したロータリー除雪車が展示されています。

001-007

Former Temiya Line Walking Path

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧手宮線散策路（手宮線跡及び附属施設） /
旧手宮線散策路（手宮線跡及び附属施設）
【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Former Temiya Line Walking Path

A 1.6-kilometer walking path follows a section of Hokkaido's first railway line through the banking and commercial districts of Otaru to the Former Temiya Railway Facility. The tracks and some level crossing gates have been preserved. Walking the path affords a glimpse of what life was like in the old city as it developed as a major trade hub. At some points, the trains that transported coal and other commodities to the port passed barely a meter from the front doors of homes.

Hokkaido's first railway

The Temiya Line was the first section of the Horonai Railway, which opened in 1882 to connect the new coal mine in Horonai (now Mikasa City) to a coal loading pier at Temiya in Otaru Port. Steam locomotives transported coal on the Horonai Railway to Otaru for shipment to the main island of Honshu, and carried goods and passengers between Otaru and destinations in central Hokkaido.

During the Meiji period (1868–1912), the Japanese government prioritized the development of Hokkaido as a northern frontier. As part of the policy to modernize the nation, engineers and agricultural experts were engaged who had experienced the rapid industrialization following the American Civil War (1861–1865) and who were familiar with harsh winters like those in Hokkaido. Railway engineer Joseph Crawford (1842–1924) was hired to develop Hokkaido's first train lines.

Built for local conditions

Hokkaido railway tracks were built using the same narrow gauge (1,067 mm) rails

used on the main island of Honshu, which were cheaper and easier to lay than the standard gauge (1,435 mm) rails widely used in Europe. Small, lightweight locomotives (16.5 tons) and rail cars were custom-built for the railway. The first two engines in Hokkaido were named Yoshitsune and Benkei, after legendary Japanese warriors of the twelfth century. One month before the Temiya Line officially opened in 1880, Crawford and his engineers made a trial run on Benkei. Accounts of the time record the astonishment of the citizens of Otaru to see a steam locomotive for the first time.

Changing priorities

In the 1880s, the Horonai Railway operated one round trip per day between Temiya and Sapporo. Passengers paid one yen for a one-way trip, which took three hours. By 1906, the volume of coal being shipped from Otaru had become so high that passenger services were suspended to prioritize more lucrative coal transport. In response to campaigning by residents, an extra track was added in 1912 to accommodate passenger trains. Temiya Station became freight-only, and a new dedicated passenger station was built a few hundred meters up the line.

The end of the line

The Temiya section of the Horonai Railway remained a vital link between inland Hokkaido and Otaru Port until 1985 when service was finally suspended. As the rail network in Hokkaido developed, passenger trains from Sapporo and Hakodate passed through the new Otaru Station further inland, while freight and coal continued to use the Temiya Line, with limited local passenger services. Passenger trains on the Temiya Line were ultimately discontinued in 1962. Freight services continued to operate on the line until 1985.

The passenger station platform next to the rail line near the Ironai banking district remains, waiting for a train that never comes. It is a reminder of the Temiya Line's presence in the daily lives of Otaru's citizens as the port city flourished.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧手宮線散策路

小樽の銀行・商業地区を通過して旧手宮鉄道施設までつながる北海道初の鉄道線路の一区画に続く1.6キロの散策路があります。線路やいくつかの踏切遮断機が保存されています。通った跡を歩いていくと、主要な貿易の拠点として発展したときのその古い街での生活の様子がかすかに見受けられます。いくつかの場所で、石炭やその他商品を港に輸送した列車が家屋の正面ドアから1メートルも離れていないところを通過していました。

北海道初の鉄道

手宮線は幌内鉄道の最初の区間で、幌内（現在の三笠市）の新しい炭鉱を小樽港の手宮にある石炭載積栈橋につなげるために1882年に開通しました。蒸気機関車が幌内鉄道で本州に出荷する石炭を運び、小樽と北海道中部の目的地間を商品や乗客を乗せて走りました。

明治時代（1868年–1912年）、日本政府は北の新天地として北海道を開拓することを優先しました。日本の近代化を図る政策の一環として、南北戦争（1861年–1865年）の終わりのアメリカの急速な産業化を経験し、同じような厳しい冬季気象条件に精通しているアメリカ人技術者や農業専門家を雇い入れました。アメリカ人鉄道技術者であるジョセフ・クロフォード（1842年–1924年）を、北海道初の鉄道線路を造るために雇い入れました。

現地の状況に合わせた建設

北海道鉄道線路は、ヨーロッパで広く使われていた標準ゲージ（1,435mm）レールを敷くよりも安価で、かつ容易な本州で使用されているものと同じ狭軌レール（1,067mm）を使って造られました。小さく、軽量の機関車（16.5トン）と鉄道車両が、この線路用に特注で造られました。北海道初の2台の機関車は、12世紀の伝説の日本の武人にちなんで、「義経」号と「弁慶」号と名付けられました。手宮線が1880年に正式に開通する1か月前に、クロフォードと彼の技術者は、「弁慶」号に乗って試運転を行いました。当時の記録には、小樽市民が蒸気機関車を初めて見る様子が記録されています。

変化する優先順位

幌内鉄道は1880年代、手宮・札幌間を1日1往復運行していました。乗客は片道あたり1円の運賃を支払い、所要時間は3時間でした。1906年までに、小樽から出荷される石炭の積載量が多くなり、利益の上がる石炭輸送を優先させるため乗客サービスを一時停止しました。住民によるキャンペーン（反対運動）に応じて1912年に旅客列車を運行するために線路を追加しました。手宮駅は、貨物輸送専用となり、新しい乗客専用の駅が幌内線の数百メートル上に造られました。

路線の終焉

幌内鉄道手宮線は1985年に最終的に廃止されるまで、北海道内陸部と小樽港の間をつなぐ欠かせない路線でした。北海道の鉄道網の発達に伴い、札幌や函館からの旅客車両はさらに内陸にある新小樽駅を通過するようになりましたが、地元の乗客向けの一部のサービスと貨物・石炭の輸送は引き続き手宮線を使っていました。手宮線の旅客サービスは最終的に、1962年に廃止さ

れました。貨物サービスは、1985年まで、運行を続けました。

旅客駅のプラットフォームは、もう来ることのない列車のために、色内銀行地区近くの鉄道線路の隣に今なお残っています。これが、この港町が繁栄していたときの小樽市民の日々の生活の中での手宮線の存在を彷彿とさせます。

001-008

Former Temiya Line Walking Path: Tracing Otaru's Railway Legacy

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧手宮線散策路（手宮線跡及び附属施設） /

旧手宮線散策路（手宮線跡及び附属施設）

【想定媒体】 アプリQRコード / パンフレット

できあがった英語解説文

Former Temiya Line Walking Path: Tracing Otaru's Railway Legacy

A 1.6-kilometer walking path follows a section of Hokkaido's first railway line through Otaru's historic banking and commercial districts to the Temiya Railway Facility. The preserved tracks and level crossing gates of the discontinued Temiya Line offer a glimpse into the city's past as a bustling hub of trade, where trains once rumbled within arm's reach of homes. The Temiya Line was the first section of the Horonai Railway, which opened in 1882 to connect the new coal mine in Horonai (now Mikasa City) to a coal loading pier at Temiya in Otaru Port.

The Temiya line ran from the Temiya Railway Facility to Otaru Station, which was later renamed Minami-Otaru Station. Steam locomotives transported coal on the Horonai Railway to Otaru via Sapporo for shipment to the main island of Honshu, and carried goods and passengers between Otaru and destinations in central Hokkaido.

Passenger trains made one trip per day between Temiya and Sapporo, and the journey took three hours. As the rail network in Hokkaido developed, passenger trains from Sapporo and Hakodate passed through the new Otaru Station further inland. Freight and coal continued to use the Temiya Line, with limited local passenger services. Passenger trains on the Temiya Line were ultimately discontinued in 1962, but freight services continued until 1985. A passenger station platform near the Ironai banking district is a reminder of the Temiya Line's integral role in Otaru's development.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧手宮線散策路：小樽の鉄道遺産をたどって

小樽の歴史ある銀行・商業地区を通って旧手宮鉄道施設までつながる北海道初の鉄道線路の一区画に続く1.6キロの散策路があります。廃線となった手宮線の線路や遮断機が保存されており、かつては家々に手が届く範囲で電車が轟音を響かせる賑やかな貿易拠点として栄えた街の過去を垣間見ることができます。1882年、幌内（現在の三笠市）の新しい炭鉱と小樽港手宮の石炭積載栈橋を結ぶ幌内鉄道の第1期区間として手宮線が開業しました。

手宮線は手宮鉄道施設からのちに南小樽駅と改名される小樽駅まで走っていました。蒸気機関車が幌内鉄道で本州に出荷する石炭を運び、小樽と北海道中部の目的地間を商品や乗客を乗せて走りました。

旅客列車は手宮・札幌間1日1往復し、3時間かかりました。北海道の鉄道網の発達に伴い札幌や函館からの客車はさらに内陸部にある新小樽駅を通過するようになりました。地元の乗客向けの一部のサービスと貨物・石炭の輸送は引き続き手宮線を使いました。最終的に手宮線の旅客サービスは1962年に廃止されましたが、貨物サービスは1985年まで続けられました。色内銀行街近くの旅客駅プラットフォームは小樽の発展に欠かせない手宮線の役割を思い出させます。

001-009

Otaru Port North Breakwater

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 小樽港北防波堤 / 小樽港北防波堤

【想定媒体】 アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

Otaru Port North Breakwater

A concrete breakwater stretches 1,289 meters across the bay near the former Temiya Coal Pier. Otaru was the main hub for sea traffic in Hokkaido. It is a deep-water port that is partially protected by a cape on the north side. By the end of the nineteenth century, however, as more vessels frequented the port, the storms and rough seas of winter caused increasing damage to ships and their cargo. In 1897, construction began on the breakwater to better protect the port.

Taming the waves

Civil engineer Hiroi Isami (1862–1928) devised a wave power formula to calculate the optimum height and angle of the barrier and used it to design the breakwater, made up of blocks weighing between 14 and 24 tons. He determined that stacking the blocks at an angle to the waves would best reduce the impact of heavy seas. On the surface, the breakwater appears to be a narrow concrete jetty, 7.3 meters wide. Under the waterline, blocks stacked like steps on the seaward side break the waves.

In nineteenth-century Japan, breakwaters were often made of large, uncut stones stacked together without mortar, similar to the construction of defensive castle walls. Using concrete, Hiroi designed interlocking blocks that could withstand the heaviest seas. Domestic concrete production was in its early days, and the concrete used a few years earlier in breakwaters at Sasebo in Nagasaki Prefecture and Yokohama in Kanagawa Prefecture was already starting to crack. Hiroi came up with the idea that adding volcanic ash to the concrete mix would increase durability, and he put his idea to the test by making around 60,000 samples of various compositions.

The father of modern civil engineering

Hiroi was born into a samurai family of the Tosa domain (present-day Kochi Prefecture), but his family lost their status and income when the samurai class was abolished after the Tokugawa shogunate fell in 1867. At age 10, Hiroi moved to an uncle's home in Tokyo to study, then later moved to the new frontier of Hokkaido and entered Sapporo Agricultural College at age 15. He was 21 when he visited the United States, first to work on improvement projects on the Mississippi River, then designing railway bridges.

Hiroi returned to Japan after four years in the United States and two years in Germany. He worked as a professor at Sapporo Agricultural College for two years, then joined Tokyo Imperial University (the present-day University of Tokyo) as a lecturer. His students went on to work on projects around the world, including the construction of the Panama Canal. During his twenty-year tenure, he donated his time as an advisor on construction projects across Japan from major bridges to dams and hydroelectric works. After more than 100 years, the Otaru Port North Breakwater still protects the port from heavy seas, and Hiroi's wave force formula remained in use until the 1980s in the design of ports around the world.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

小樽港北防波堤

旧手宮石炭棧橋近くのコンクリート製の防波堤は、石狩湾を横切り1,289メートルにわたり延びています。小樽は、北海道における海上交通の主要な拠点でした。小樽は北側の岬に一部守られた水深の深い港です。しかし、19世紀の終わりに多くの船舶が港に頻繁に来るようになるにつれ、冬の嵐や荒波により、船やその積み荷のダメージが増加しました。1897年、港を守るために、北側の防波堤の建設が始まりました。

波を制御する

土木技師である廣井勇（1862年–1928年）は防壁の最適な高度と角度を計算するために波力公式を考案し、それを使って14-24トンの重さのブロックからできた防波堤を設計しました。彼はブロックを波に対してある角度に積み上げるのが荒波の衝撃を一番うまく減らすということを断定しました。水面上では、その防波堤は幅7.3メートルの幅の狭いコンクリート製の棧橋に見えます。水面下では、海に面した側に階段状に積まれたブロックにより、波が砕かれます。

19世紀の日本では、防波堤は防御的な城壁の建築と同じように、モルタルを使わないで大きな無削石を互いに積み重ねて造られていました。廣井はコンクリートを使うことで、荒波に耐えられるインターロッキングブロックを設計することができました。国内におけるコンクリート生産はまだ始まったばかりのときで、長崎県佐世保や神奈川県横浜の防波堤で数年前から使用されているコンクリートにはすでにひびが入り始めていました。廣井は、コンクリート混合物に火山灰を加えることで耐久性が増すというアイデアを思いつき、約60,000種の混合サンプルを作ってこのアイデアを検証しました。

現代の土木工学の創始者

廣井は、土佐藩（現在の高知県）の武士の家に生まれましたが、1867年に徳川幕府が滅び、武士階級が廃止されると、一族は、地位と収入を失いました。廣井は、10歳のとき、勉強をするために東京の叔父の家に移り、その後北海道の新天地に移り住み、15歳で札幌農学校に入学しました。21歳のときに、アメリカに渡り、最初はミシシッピ川改修プロジェクトに取り組み、その後、鉄道橋の設計を行いました。

廣井は、アメリカで4年、ドイツで2年過ごした後、日本に戻りました。廣井は札幌農学校で2年間教授として働き、その後東京帝国大学（現在の東京大学）に講師として参加しました。彼の生徒たちはパナマ運河の建設など世界中のプロジェクトに携わりました。20年間の講義の間、彼は大規模な橋からダム・水力発電まで、日本中の建設プロジェクトにアドバイザーとして貢献しました。100年以上たった今でも、小樽港北防波堤は、荒波から港を守っており、廣井の波力公式は、1980年代まで世界中の港の設計で用いられました。

001-010

Otaru Port Museum

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】小樽港湾事務所みなとの資料コーナー収蔵防波堤関係資料（波力公式を含む） / 小樽港湾事務所みなとの資料コーナー収蔵防波堤関係資料（波力公式を含む）

【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

Otaru Port Museum

Models, materials, and photographs related to the construction of the North Breakwater and subsequent breakwater projects in Ishikari Bay are on display at the Otaru Port Museum. The museum is located in the Otaru Port Office, which was established in 1897 as the site office for the construction of the Otaru Port North Breakwater. Construction began on the breakwater in 1897 under the direction of civil engineer Hiroi Isami (1862–1928), using the latest machinery from overseas and new materials and techniques developed by Hiroi.

Hiroi devised a wave power formula to calculate the optimum height and angle of the breakwater as well as a range of interlocking concrete blocks to suit the wave conditions and the shape of the seabed. His calculations and designs optimized the performance of the breakwater while reducing material costs. Scale cross-sectional models of the breakwater and the concrete blocks, which each weighed between 14 and 24 tons, help visitors visualize Hiroi's design.

Photographs of the British-made steam-powered stacking machine that was used to place the concrete blocks in the sea show the scale of the construction project. The machine, called Titan, had a lifting capacity of 24 tons and moved on rails that were laid along the breakwater as construction progressed. With a crew of nine (including two divers to check the alignment of the blocks underwater), the Titan could install about 16 blocks per day.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

おたるみなと資料館

北防波堤の建設、石狩湾のその後の防波堤プロジェクトに関する模型、資料、写真が、おたるみなと資料館に展示されています。おたるみなと資料館は、小樽港北防波堤の建設のための現場事務所として1897年にできた小樽港湾事務所に併設されています。この防波堤の建設は、土木技師である廣井勇（1862年-1928年）の指揮のもと、1897年に始まり、海外からの最新の機械、廣井が作り出した新しい材料、技術が使用されました。

廣井は波力公式を考案のうえ、防波堤の最適な高度と角度、ならびに波の状態や海底の形状に合うようなさまざまなインターロッキングブロックを計算しました。廣井の計算と設計は、防波堤の性能を最適化すると同時に、材料コストを削減しました。ここを訪れた人は、その防波堤の縮尺断面模型と、1つあたり14-24トンの重さのコンクリートブロックを見ると、廣井の設計を思い描くことができます。

海の中にコンクリートブロックを据え付けるために使用した、イギリス製の蒸気スタッキング装置の写真から、この建設プロジェクトの規模が分かります。「タイタン」と呼ばれるこの装置は、24トンの吊り上げ能力があり、建設が進むにつれ、防波堤沿いに置かれたレールの上を移動しました。9名の作業員（水中でブロックの整列状況を確認するダイバー2人を含む）により、タイタンで1日に約16個のブロックを設置することができました。

001-011

Warehouses in the Kitahama Area

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】北浜地区倉庫群 / 北浜地区倉庫群

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Warehouses in the Kitahama Area

Otaru was already an important port for sea freight and trade in the mid-nineteenth century, but its economy and population grew rapidly when Hokkaido's first railroad opened in 1882, bringing coal from inland mines to the port. Land reclamation efforts created additional areas along the coast to accommodate the needs of the expanding port. The Kitahama district was established on reclaimed land in 1889. Many warehouses were built in Kitahama, which had convenient access to the waterfront and railroads. A number of these warehouses were owned by merchant shipowners based in the Hokuriku region of Honshu which includes the prefectures of Ishikawa, Fukui, Niigata, and Toyama.

Six of the warehouses built by such merchant shipowners remain in the Kitahama area, near the north end of Otaru Canal. They are built from tuff stone from Otaru and Sapporo, fixed to a timber framework. The stone served as protection from fires, while the timber framework was quick and cheap to build.

1. Former Ukon Warehouse

The Ukon Warehouse was built in 1894 for merchant shipowners from Fukui Prefecture. It is a large gable-roofed warehouse. The Ukon family logo of two parallel black lines resembling chopsticks, is displayed on the front of the warehouse. The logo was also used on their store fronts and staff uniforms. The warehouse originally had a monitor roof. However, in 1924, dynamite being carried to a freight train exploded at Temiya Station, damaging nearby buildings, including the Ukon Warehouse. The roof was rebuilt, and the truncated shape of its roofline is a reminder of the incident.

2. Former Hiroumi Warehouse

The Hiroumi Warehouse is a large timber-framed stone warehouse built in 1889. The Hiroumi family were shipowners from Kaga in Ishikawa Prefecture, who established a warehouse business in Otaru in 1889. They traded in marine products and co-founded a marine insurance service with the Ukon family at the end of the nineteenth century. The warehouse has two large stone arched doorways for loading cargo.

3. Former Masuda Warehouse

The Masuda Warehouse was built in 1903. Like the Hiroumi family, the Masuda family were shipowners from Kaga. In the 1880s, they operated eight wooden *kitamaebune* merchant ships and three European-style sailing vessels. The warehouse is a two-story stone structure built on a wooden frame, with a gabled roof. Today, these Ukon, Hiroumi, and Masuda Warehouses are used for storage by the Kitaichi Glass Company, which operates a retail store and café in the Kimura Warehouse on Sakaimachi Street.

4. Former Oie Warehouse

The Oie Warehouse has decorative double-arched stonework over the two doors on its wide front and a monitor roof with windows. It was built in 1891 by the Oie family, shipowners from Kaga in Ishikawa Prefecture.

5. Former Shibusawa Warehouse

The Shibusawa Warehouse complex is a series of three connected stone buildings dating from 1895. A large stone structure with a gabled roof set back from the street connects two smaller buildings in front. The complex was built by the Endo family, but in 1915 it was purchased by industrialist Shibusawa Eiichi (1840–1931). Shibusawa is known as the “Father of Japanese Capitalism” for his work in developing modern businesses in Japan. The warehouse is currently open as a café.

6. Former Otaru Warehouse

The Otaru Warehouse complex was built in 1890 on newly reclaimed land by Nishitani Shohachi and Nishide Magozaemon, who were merchant shipowners from Kaga. The warehouses are built around a courtyard, where cargo was unloaded and processed. Several of the buildings now serve as the Otaru Museum.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

北浜地区倉庫群

小樽は 19 世紀中頃にはすでに海上貨物と貿易の重要な港でしたが、1882 年に内陸の鉱山から港に石炭を運ぶ北海道初の鉄道が開通すると、小樽の経済と人口は急速に成長しました。拡大する港の需要を満たすため海岸沿いに新たな土地が造成されました。北浜地区は1889年の埋め立てで作られました。これらの倉庫の多くは石川県、福井県、新潟県、富山県などの北陸地方に基盤を置く商船主が所有していました。

小樽運河の北端に近い北浜地区にはこれらの商船主によって建てられた倉庫のうち6棟の倉庫が残っています。小樽と札幌で採れた凝灰石を木材の骨組みに固定して造られています。石は火災に強く、木の枠組みは早く安価に建設できました。

1. 旧右近倉庫

右近倉庫は 1894 年に福井県の商船主のために建てられました。切妻屋根を持つ大型倉庫です。簷に似た2本の平行な黒い線である右近家の印が倉庫の正面に記されています。この印は右近家の店先や店員の制服にも使われていました。倉庫は元々、越屋根でした。しかし、1924年に手宮駅で貨物列車に運ばれていたダイナマイトが爆発し、右近倉庫など近隣の建物が被害を受けました。屋根は再建され、屋根の切り取られた形状がその事故を思い起こさせます。

2. 旧広海倉庫

広海倉庫は1889年に建てられた大きな木骨石造り倉庫です。広海家は石川県加賀出身の船主で、1889年に小樽で倉庫業を始めました。広海家は海産物を取引し、19世紀末には右近家とともに海上保険サービスを開始しました。この倉庫には貨物を積み込むための2つの大きな石造りのアーチ型出入口があります。

3. 旧増田倉庫

増田倉庫は1903年に建てられました。増田家は広海家と同じく加賀の船主でした。1880年代には木造北前船8隻とヨーロッパ式帆船3隻を運用していました。倉庫は木骨2階建ての石造りで、切妻造りの屋根がついていました。現在、これらの右近倉庫、広海倉庫、増田倉庫は堺町通りの木村倉庫内で小売店とカフェを運営する北一硝子株式会社の倉庫として使用されています。

4. 旧大家倉庫

大家倉庫には広い正面の2つの扉の上の装飾的な二重アーチ型の石積みと窓のための越屋根があります。1891年に石川県加賀の船主大家家によって建造されました。

5. 旧渋沢倉庫

渋沢倉庫は1895年に建てられた3棟の石造り建造物が連なった建物です。道路から奥に入った切妻屋根の大きな石造りの建造物が正面にある2つの小さな建物を繋いでいます。この倉庫は遠藤家によって建てられ、1915年に実業家渋沢栄一（1840年－1931年）に購入されました。渋沢は、日本の近代経済の発展に尽力した功績で「日本資本主義の父」として知られています。この倉庫は現在カフェとして営業しています。

6. 旧小樽倉庫

小樽倉庫は1890年に加賀の商船主である西谷庄八と西出孫左衛門によって、新たに埋め立てられた土地に建てられました。倉庫は貨物が陸揚げされ、加工されていた中庭の周りに建てられています。現在、倉庫のいくつかは小樽市総合博物館として使われています。

001-012

Warehouses in the Kitahama Area

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】北浜地区倉庫群 / 北浜地区倉庫群

【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット

できあがった英語解説文

Warehouses in the Kitahama Area

After Hokkaido's first railway opened in 1882 to carry coal from inland mines to Otaru's ports, the city's economy and population grew rapidly. Land reclamation efforts created additional areas along the coast to accommodate the needs of the expanding port. The Kitahama district was established on reclaimed land in 1889. Many warehouses were built in Kitahama, which had convenient access to the waterfront and railroads.

Six stone warehouses built by merchant shipowners remain in Kitahama near the north end of Otaru Canal. Three warehouses were built near the Temiya Railway Facility by families from Fukui and Ishikawa Prefectures. These are the Hiroumi Warehouse, built in 1889; the Ukon Warehouse, built in 1894; and the Masuda Warehouse, built in 1903.

The other three warehouses are close to Chuo Street, about halfway along the canal. They are the Otaru Warehouse, built in 1890; the Oie Warehouse built in 1891; and the Shibusawa Warehouse, built in 1895. The warehouses face the canal, where barges moored to unload merchandise from ships in the harbor. Each warehouse has distinctive features, from the decorative double-arched stonework over the doors of the Shibusawa Warehouse to the protective figures of mythical sea creatures on the roof ridges of the Otaru Warehouse buildings.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

北浜地区倉庫群

内陸の鉱山から小樽港に石炭を輸送するために1882年に北海道初の鉄道が開業した後、この町の経済と人口は急成長しました。拡大する港の需要を満たすため埋め立てによって海岸沿いに新たな土地が造成されました。北浜地区は、1889年に埋立地の上に造られました。ウォーターフロントや手宮線へのアクセスが便利な北浜に多くの倉庫が建てられました。

小樽運河の北端近くの北浜には、現在も商船主が建てた6つの石造倉庫が残っています。手宮鉄道施設近くの3つの倉庫は福井県と石川県出身の一族により建てられたものです。1889年建造の広海倉庫と、1894年建造の右近倉庫、1903年建造の増田倉庫です。

他の3つの倉庫は中央通りの近くの小樽運河沿い、その中間に位置しています。1890年建造の小樽倉庫と、1891年建造の大家倉庫、1895年建造の澁澤倉庫です。これらの3つの倉庫は小樽運河に面しており、ここに舢舨が停泊して船から港への荷下ろしをしていました。澁澤倉庫の戸の上部に取り付けられた二重アーチの装飾的な石細工や小樽倉庫建物群の越屋根の上ののせられた伝説の海の生き物の守り彫像など、倉庫にはそれぞれ特徴があります。

001-013

Former Ukon Warehouse

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 旧右近倉庫 / 旧右近倉庫

【想定媒体】 アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Ukon Warehouse

The Ukon Warehouse, built in 1894, is located at the north end of Otaru Canal. It is a large gable-roofed warehouse, typical of the Kitahama area. The Ukon family were *kitamaebune* merchant shipowners from Kono in Fukui Prefecture. The family logo, two parallel black lines resembling chopsticks, is displayed on the front of the warehouse. The logo was also used on their store fronts and staff uniforms.

The Ukon family established a base in Otaru in the 1890s, operating warehousing and fishing businesses. They were one of Japan's leading shipping agents, and also co-founded a marine insurance business.

The warehouse originally had a monitor roof, like the Hiroumi Warehouse next to it. However, in 1924, dynamite being carried to a freight train exploded at Temiya Station, damaging nearby buildings, including the Ukon warehouse. The roof was rebuilt, and the truncated shape of its roofline is a reminder of the incident.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧右近倉庫

1894年に建てられた右近倉庫は小樽運河の北端に位置しています。北浜地区でよく見られる切妻屋根を持つ大きな倉庫です。右近家は福井県河野出身の北前船主です。箸に似た2本の平行な黒い線である右近家の印が倉庫の正面に記されています。この印は右近家の店先や店員の制服にも使われていました。

右近家は1890年代に小樽に基盤を確立し、倉庫業、漁場経営を営みました。右近家は日本有数の海運商の1つで、海上保険サービスの共同創始者でもありました。

倉庫は元々隣の広海倉庫と同様に越屋根でした。しかし1924年、手宮駅で貨物列車に運ばれていたダイナマイトが爆発し、右近倉庫など近隣の建物が被害を受けました。屋根は再建されましたがその切り取られた形状がこの事故を思い起こさせます。

001-014

Former Hiroumi Warehouse

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 旧広海倉庫 / 旧広海倉庫

【想定媒体】 アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Hiroumi Warehouse

The Hiroumi Warehouse is a timber-framed stone warehouse built in 1889. The warehouse is distinguished by large arched stone doorways on the front and back of the building for loading cargo. The Hiroumi family were shipowners from Kaga in Ishikawa Prefecture, who established a warehouse business in Otaru in 1889. They traded in marine products and co-founded a marine insurance service with the Ukon family at the end of the nineteenth century. The Hiroumi shipping business was headquartered in Osaka and operated both wooden *kitamaebune* sailing ships and steamships made in England.

Like the other warehouses at the northern end of Otaru Canal, the Hiroumi Warehouse was built on reclaimed land in the Kitahama district. When the warehouse was built, the harbor was immediately in front of it and Temiya Station only a few hundred meters away, making it an ideal location for transporting and storing cargo from both land and sea. More land was reclaimed in front of the warehouses around 1914 when construction started on Otaru Canal.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧広海倉庫

広海倉庫は1889年に建てられた木造骨組みの石造り倉庫です。この倉庫は建物の前後に荷物を積み込むための大きな石造りアーチ型出入口があるのが特徴です。広海家は石川県の加賀出身の商船主で、1889年に小樽で倉庫業を開始しました。広海家は海産物を扱い、19世紀末に右近家とともに海上保険サービスを開始しました。広海海運会社は大阪に本社を置き、木造

北前船と英国製蒸気船を運航していました。

小樽運河の北端にある他の倉庫と同様、広海倉庫は北浜地区の埋立地に建てられました。建設当時は倉庫の目の前に港があり、また手宮駅も数百メートルの距離にあって陸海問わず荷物の輸送・保管に最適な立地でした。小樽運河の建設が始まった1914年頃には倉庫の前のさらに多くの土地が埋め立てられました。

001-015

Former Otaru Warehouse

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 旧小樽倉庫 / 旧小樽倉庫

【想定媒体】 アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Otaru Warehouse

The Otaru Warehouse complex was built in 1890 on newly reclaimed land by Nishitani Shohachi and Nishide Magozaemon, who were merchant shipowners from Kaga. The warehouses are built around a courtyard, where cargo was unloaded and processed.

Pairs of ceramic mythical sea creatures (*shachihoko*) decorate the roof ridge of each building. Commonly seen on castles, this motif was believed to protect against fire and was a symbol of wealth. Similar figures also appear on the roof of the Iwanaga Clock Store on Sakaimachi Street.

Several of the buildings now serve as the Otaru Museum, which traces the city's history through scale models, photographs, artworks, and other artifacts. A section of the museum recreates a typical shopping street in the early nineteenth century, with full-size models of stores and merchant houses. Other displays focus on the wildlife in the mountains and forests surrounding Otaru with realistic life-size dioramas.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧小樽倉庫

小樽倉庫は加賀の商船主、西谷庄八と西出孫左衛門によって1890年に新しく埋め立てられた土地に建てられました。倉庫は貨物の積み込みや加工をしていた中庭の周りに建てられました。

各建物の屋根の棟には一対の陶器製の伝説の海の生き物（シャチホコ）像が飾られています。城でよく見られるこのモチーフは、火災から守ると信じられ、また富の象徴でした。堺町通りの岩永時計店の屋上にも同様の像が見られます。

いくつかの建物は現在小樽市総合博物館として使用されており、縮尺模型、写真、美術品やその他の工芸品を通して小樽市の歴史をたどっています。博物館の一部には店舗や商家の実物大の模型があり、19世紀初頭の典型的な商店街が再現されています。他の展示では小樽周辺の山や森の野生動物に焦点を当てたリアルな実物大のジオラマが展示されています。

001-016

Warehouses in Minamihama District

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 南浜地区倉庫群 / 南浜地区倉庫群
【想定媒体】 アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

Warehouses in Minamihama District

After Hokkaido's first railway opened in 1882 to carry coal from inland mines to Otaru for shipping, the economy and population of the city grew rapidly. Land reclamation efforts created additional areas along the coast to accommodate the needs of the expanding port. The new districts of Sakaimachi, Ironai, Kitahama, and Minamihama were established on reclaimed land in 1889, forming the city's commercial center. Wholesalers built warehouses and stores on Sakaimachi Street in the Minamihama district in the early twentieth century, many of which remain.

Some wholesalers made their fortunes by speculating on commodities such as beans grown in Hokkaido. They bought them cheaply in bulk, then stored them until prices rose. The former Kimura, Shimatani, and Takahashi Warehouses in the Minamihama district are reminders of Otaru's past prosperity and symbols of the city's recent economic revival.

Former Kimura Warehouse

The Kimura Warehouse was built in 1894 and is the only remaining warehouse of nine owned by the Kimura family. It was first used to store fertilizer made from herring caught in the waters off Otaru. The fertilizer was then shipped to the indigo and cotton fields of southwestern Honshu. The warehouse retains many of its original features, including a stone corridor with rails for guiding hand carts from the port into the warehouse. After the herring industry collapsed in the mid-twentieth century due to overfishing, the warehouse was used to store dry goods. Otaru's position as a major port gradually diminished and by the 1960s the Kimura Warehouse, like many other warehouses and stores in the area, was left empty. The warehouse was renovated by

Kitaichi Glass in 1983 to serve as a retail store and restaurant. After the successful restoration and repurposing of the historical building, other businesses opened in former warehouses along Sakaimachi Street and around the canal, creating an attractive shopping area.

Former Shimatani Warehouse

The Shimatani Warehouse was built in 1892 for steamship company Shimatani Kisen. It is built of volcanic tuff fixed to a wooden frame. The stone is around 15 centimeters thick and, along with the metal door and metal shutters on the small upper windows, it protected the contents from fire. Between 1880 and 1910, there were 16 large fires in Otaru. These devastated the wooden buildings but caused minimal damage to the Shimatani Warehouse and the other stone-clad warehouses around the city. The warehouse is now open to the public as a café.

Former Takahashi Warehouse

The Takahashi Warehouse was built in 1923 by the Takahashi family, who sold rice and seafood and produced miso and soy sauce. The family became wealthy through commodity speculation in the early twentieth century, buying up adzuki beans and storing them until the price rose to sell for a profit. In 1989, the warehouse was renovated and opened as a stained glass museum, exhibiting stained glass windows recovered from churches in England and Europe.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

南浜地区倉庫群

内陸の鉱山から小樽港に石炭を輸送するため1882年に北海道初の鉄道が開業し、この町の経済と人口は急成長しました。拡大する港の需要を満たすため、新たな土地が海沿いに造成されました。1889年には、埋め立て地に堺町、色内、北浜、南浜という新しい地区が誕生し、この町の商業中心地となりました。20世紀初めには、卸売業者が南浜地区の堺町通りに倉庫や商店を建て、その多くは現在も残っています。

一部の卸売業者は北海道産の豆類などの生活必需品に投機しました。彼らはこれらを大量に安く買い付け、その後価格が上がるまで貯蔵することで財を成しました。旧木村倉庫、旧嶋谷倉庫、旧高橋倉庫は小樽の過去の繁栄を思い起こさせるものであり、この町の近年の経済復興のシンボルとして存在しています。

旧木村倉庫

木村倉庫は1894年に建てられ、木村家が所有していた9つの倉庫のうち唯一現在も残っている倉庫です。当初は小樽沖の海域で漁獲されたニシンから作られた肥料を貯蔵するために使用されていました。肥料は本州南西部の藍畑や綿畑に出荷されました。この倉庫には、手車用のガイドレールを取り付けた港から倉庫までつながっている石の廊下など、元々あった多くの特徴が残っています。20世紀半ばに乱獲によりニシン産業が衰退すると、乾物を貯蔵するためにこの倉庫を使用するようになりました。主要港としての小樽の地位はしだいに消え去り、1960年代までに、このあたりの他の多くの倉庫や商店と同じように、木村倉庫はもぬけの殻となりました。この倉庫は1983年に北一硝子により改修され、小売店兼レストランとなりました。この歴史建造物の改修と再利用が成功を収めた後、他の企業も堺町通り沿いや小樽運河近くの旧倉庫をオープンさせ、魅力的なショッピングエリアを作り上げました。

旧嶋谷倉庫

嶋谷倉庫は1892年に蒸気船会社である嶋谷汽船のために建てられました。この倉庫は、凝灰岩を木の骨組みに固定して造られています。石の厚みは15センチほどで、上部にある小窓には鋼製の鎧戸と扉が取り付けられており、火災から建物の内部を守る役割をしていました。1880年から1910年にかけて、小樽では大火災が16回発生しました。この火災により木造建造物は壊滅しましたが、嶋谷倉庫やこの町周辺の他の石造り倉庫は、ごくわずかな被害ですみました。この倉庫は、現在カフェとして一般に公開されています。

旧高橋倉庫

高橋倉庫は米や海産物を販売し、味噌や醤油を生産していた高橋家により、1923年に建てられました。高橋家は、20世紀初めに、生活必需品に投機すること、つまり、小豆を買い占め、その後価格が上がるときまで貯蔵してから販売して利益を得ることで、財を成しました。この倉庫は1989年に改修され、スタンドグラス美術館としてオープンし、イギリスやヨーロッパの教会で実際に使用されていたものを元の状態に修復したスタンドグラス窓を展示しています。

001-017

Former Kimura Warehouse

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 旧木村倉庫 / 旧木村倉庫

【想定媒体】 アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Kimura Warehouse

The Kimura family built their warehouse in 1894 to store fertilizer made from herring caught in the waters off Otaru. The fertilizer was then shipped to the indigo and cotton fields of southwestern Honshu. It is the only remaining warehouse of nine that belonged to the family and is one of the largest warehouses on Sakaimachi Street, which was the trade and retail center of the city until the mid-twentieth century. The building was renovated in 1983 by Kitaichi Glass as a retail store and restaurant. After the successful restoration and repurposing of the historical building, other businesses opened in former warehouses along Sakaimachi Street and around the canal, creating an attractive shopping area.

Built to last

Sakaimachi Street was built on reclaimed land, and the warehouses on the port side of the street were close to the water's edge. Fertilizer was unloaded from ships in front of the Kimura warehouse and transported by wheeled handcarts, guided on rails. A stone corridor with cart rails still divides the warehouse building into two parts. After the herring industry collapsed in the mid-twentieth century due to overfishing, the warehouse was used to store dry goods. When Otaru's position as a major seaport diminished in the 1960s, it was left empty, along with many other warehouses on the street. The Kimura Warehouse was built of volcanic stone on a frame of Sakhalin fir and Ezo spruce, with cypress floors. The building has remained in good condition for over a century.

Otaru's glass heritage

Kitaichi Glass has deep roots in Otaru, opening in 1901 as Asahara Glass. The

company made hand-blown glass oil lamps at a time when electricity was not yet common and oil lamps were a necessity of daily life. Asahara Glass later manufactured glass floats for herring fishing nets. By the 1920s, the company had around 400 employees, and was one of the largest glass makers in Hokkaido. As electricity and plastics became widespread, the demand for glass lamps and floats diminished, and by 1960, Asahara Glass was the only remaining glass manufacturer in Otaru.

In 1971, the sales department was renamed Kitaichi Glass, and the company began manufacturing and selling lamps as nostalgic mementos, alongside other glass products. The lamps remain a popular souvenir of Otaru. The entrance hall of Otaru Station is lit with glass lamps from Kitaichi Glass, using electric bulbs in place of oil. The Kitaichi Hall restaurant occupies half the former warehouse and is illuminated by 167 glass oil lamps that are lit by hand each morning.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧木村倉庫

木村家は小樽沖で獲れたニシンから作られた肥料を保管するため1894年に倉庫を建てました。この肥料は本州南西部の藍畑や綿畑に出荷されました。この倉庫は木村家が所有していた9つの倉庫のうち唯一残っているもので、20世紀半ばまで市の貿易と小売の中心地だった堺町通りにある最大の倉庫の1つです。この建物は1983年に北一硝子が物販・飲食店として改装しました。歴史ある建物の改修と再利用が成功したのをきっかけに他の経営者が堺町通り沿いや運河周辺の旧倉庫をオープンさせ、魅力的な商店街を生み出しました。

継続のための建造

堺町通りは埋め立て地に作られており、通りの港側の倉庫は水際にはありました。肥料は木村倉庫前で漁船から降ろされレールに沿って車輪付き手押し車で運ばれました。このレールのある石造りの廊下が倉庫の建物を2つに分けています。20世紀半ばに乱獲のためニシン産業が崩壊した後、この倉庫は乾物を保管するために使用されていました。1960年代に小樽の主要な港としての地位が低下すると、通りにある多くの倉庫と同様に空き家となりました。トドマツとエゾマツの骨組みに小樽軟石で建てられたヒノキ床の倉庫です。1世紀以上経っても良好な状態を保っています。

小樽のガラス遺産

1901年に浅原硝子として創業した北一硝子は小樽に深く根付いています。電気がまだ普及しておらずオイルランプが生活必需品であった時代に手吹きガラスのオイルランプを製造しました。その後、

浅原硝子はニシン漁網用のガラス浮きを製造しました。1920年代までに従業員数約400人に達し北海道最大規模のガラスメーカーの一つとなりました。電気とプラスチックの普及とともにガラス製のランプや浮きの需要は減少し、1960年には小樽に残る唯一のガラスメーカーになりました。

1971年に販売部門の名称を北一硝子に変更して、その他のガラス製品とともに懐かしい思い出の品としてランプを製造・販売することにしました。ランプは小樽のお土産として今でも人気があります。小樽駅エントランスホールは油の代わりに電球を使った北一硝子のガラスランプで照らされています。旧倉庫の半分を占めるレストラン「北一ホール」には、毎朝167個のガラスオイルランプが手作業で灯されます。

001-018

Former Shimatani Warehouse

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 旧嶋谷倉庫 / 旧嶋谷倉庫

【想定媒体】 アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Shimatani Warehouse

The Former Shimatani Warehouse was built in 1892 for storing rice and is now open to the public as a café. The Shimatani family were *kitamaebune* merchant shipowners from Yamaguchi Prefecture, mainly trading rice. They were quick to adapt to changing times, transitioning to steamships in 1895 and transporting goods for other merchants.

The building is one of around 350 timber-framed stone warehouses in Otaru. Timber-framed warehouses could be built more quickly and economically than all-stone buildings, and the style became common in Japanese port towns. Many of the warehouses built in Otaru in the late nineteenth and early twentieth centuries share the same timber frame and stone construction, using blocks of locally quarried tuff, each around 15 centimeters thick.

The thickness of the stone gives the building structural integrity and protects the contents from cold and fire. Between 1880 and 1910, there were around 16 large fires in Otaru. Over 2,000 houses were damaged in one that broke out a few blocks south of Otaru Station in 1902, but the stone-clad warehouses were relatively unscathed.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧嶋谷倉庫

旧嶋谷倉庫は1892年に米貯蔵用に建てられ、今ではカフェとして一般公開されています。嶋谷家は山口県出身で、北前船という商船を所有し、主に米を取り扱っていました。彼らは時代の変

遷にいち早く順応し、1895年に蒸気船に移行し、他の商人のために物の輸送を行いました。

この建物は小樽にある約350の木造骨組みの石造り倉庫のうちの一つです。木造骨組みの倉庫はすべてが石造りの倉庫に比べて早くかつ経済的に建てることができたので、日本の港町ではこのスタイルが一般的になりました。19世紀末と20世紀初頭に小樽に建てられた倉庫の多くは、地元で切り出された約15センチメートルの厚さの凝灰岩ブロックを使用しています。

この石の厚さが建物に構造的完全性を与え、貯蔵物を寒さや火災から守っています。1880年から1910年の間に、小樽で約16回大火が発生しました。1902年に小樽駅の数ブロック北側で発生した大火で2,000を超える家屋が損傷を受けましたが、石で覆われた倉庫は比較的無傷でした。

001-019

Former Takahashi Warehouse

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 旧高橋倉庫 / 旧高橋倉庫

【想定媒体】 アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Takahashi Warehouse

The Takahashi Warehouse was built in 1923 to store goods for wholesale trade. In 1989, the building was renovated and opened as a stained glass museum, exhibiting stained glass windows recovered from churches in England and Europe. Most of the windows on display date from the early twentieth century.

Takahashi Naoji (1856–1926) was 18 years old when he came to Otaru from his hometown in Niigata. He worked as a clerk at a dry goods store for three years to learn the trade before establishing his own business. He began brewing miso and soy sauce and set up a business with his younger brother in 1899, handling consignment sales of rice, miso, soy sauce, and marine products.

The Takahashis became wealthy in the early twentieth century through commodity speculation, buying up beans and grains cheaply and storing them until the price rose to sell for a profit. When the war in Europe in 1914 affected the export of beans from major European producers such as Romania and Hungary, Otaru merchants including the Takahashi family took advantage of the situation. Takahashi Naoji bought up much of Hokkaido's adzuki bean harvest for one season and negotiated with one of Japan's largest shipping companies, Nippon Yusen Kaisha (now known as NYK Line), to ship directly to a trading company in London. Takahashi Naoji was known as the “Adzuki Shogun” when he later entered politics—though it is believed he came up with this name himself.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧高橋倉庫

高橋倉庫は、卸売り用の商品を貯蔵するために1923年に建てられました。この倉庫は1989年に改修され、ステンドグラス美術館としてオープンし、イギリスやヨーロッパの教会で実際に使用されていたものを元の状態に修復したステンドグラス窓を展示しています。展示されている窓のほとんどは、20世紀初めに作られたものです。

故郷の新潟から小樽にやって来たとき、高橋直治（1856年–1926年）は18歳でした。高橋直治は3年間荒物商の店員として働き、そこで商いを学んだあと、独立しました。高橋直治は、味噌や醤油の醸造を始め、1899年に弟と一緒に米、味噌、醤油、水産物などの商品の取引を行う会社を開業しました。

高橋家は20世紀初めに生活必需品に投機すること、つまり、豆や穀物を安く買い占め、その後価格が上がるときまで貯蔵してから販売して利益を得ることで、財を成しました。1914年にヨーロッパで起こった戦争により、ルーマニアやハンガリーなどヨーロッパの主要生産国からの豆類の輸出に影響が及ぶようになると、高橋家をはじめとする小樽商人はこの状況を利用しました。高橋直治は1シーズン分の北海道の小豆の収穫の多くを買い占め、日本の大手海運会社の1つである、日本郵船会社（現在は日本郵船株式会社として知られる）と交渉のうえ、ロンドンの貿易会社に直接出荷しました。高橋直治は、後に政界に進出したとき、「小豆将軍」として称されるようになりましたが、高橋直治自身がこの名を思い付いたと考えられています。

001-020

The Tanaka Sake Brewery and the Former Okazaki Warehouses

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧岡崎倉庫（3棟） / 旧岡崎倉庫（3棟）

【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

The Tanaka Sake Brewery and the Former Okazaki Warehouses

The Tanaka Sake Brewery was one of 50 sake breweries in Otaru when it was founded in 1899. Today, Tanaka is the only remaining sake brewery in the city. Under the wartime regime in 1944, sake brewing in Otaru was consolidated under a single entity to control supply and pricing, and the Tanaka Sake Brewery operated as a retail-only business. In 1996 Tanaka Sake Brewery bought the Okazaki Warehouses and resumed brewing.

Sake brewing is typically conducted in winter when it is easier to control the fermentation temperature and avoid bacterial contamination. However, with Otaru's cool, dry climate and improvements in brewing technology, the Tanaka Sake Brewery has been able to brew sake year-round. Visitors can observe the process regardless of the season and taste fresh, unpasteurized sake throughout the year. Most of the sake is sold locally.

Tanaka Sake is brewed with spring water from Mt. Tengu in Otaru, drawn from a well next to the brewery. All the rice used in the brewing process is grown in Hokkaido. Tours of the brewery are free and do not require prior reservations for groups of fewer than 10 people. Tastings are available of sake, fruit liqueurs, and non-alcoholic drinks such as amazake, a sweetened fermented rice drink.

The brewery operates out of the Okazaki Warehouses in three stone buildings connected by wooden corridors. The warehouses were built south of the city center between 1902 and 1905 by the Okazaki family. They started their business making

miso and soy sauce before selling rice and general merchandise, and warehousing goods for other merchants.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

田中酒造と旧岡崎倉庫

田中酒造は1899年の創業当時、小樽に50軒あった酒蔵のうちの1軒でした。現在では、田中酒造はこの町で唯一残っている酒蔵です。1944年の戦時体制のもと、小樽での酒造りは供給と価格を管理する1つの組織のもとで統合されており、田中酒造は小売りに限定した商いをしていました。1996年に田中家は岡崎倉庫を購入し醸造業を復活させました。

酒造りは通、発酵温度の管理や菌の混入回避が容易となる冬場に行います。しかし、小樽の涼しく乾燥した気候と醸造技術の進歩のおかげで、田中酒造は年間を通じての酒造りを行うことができました。田中酒造では、季節を問わず、酒造りの工程を見学し、年間を通じて造りたての生酒を試飲することができます。ほとんどの酒は現地でのみ販売されています。

田中酒造では酒の醸造の際に醸造所の隣にある井戸から汲み上げた小樽の天狗山の沸き水を使用しています。醸造の工程で使用される米はすべて北海道産のものを使用しています。無料で醸造所の見学ツアーを実施しており、10名以下の団体であれば事前予約の必要はありません。日本酒や果実酒、さらには甘く発酵させた米のお酒である甘酒などのノンアルコール飲料が試飲可能です。

この醸造所は木の廊下でつながった3棟の石造り建造物から成る岡崎倉庫で操業しています。この倉庫は1902年から1905年にかけて岡崎家によりこの町の中心から南の方に建てられました。岡崎家は、味噌や醤油を作る商いを始め、その後、米や雑貨を売ったり、他の商人のために商品の収納を行っていました。

001-021

Former Otaru Branch of Nippon Yusen

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 旧日本郵船(株)小樽支店及び付属倉庫群 /
旧日本郵船(株)小樽支店及び付属倉庫群
【想定媒体】 アプリQRコード / WEB / パンフレット

できあがった英語解説文

Former Otaru Branch of Nippon Yusen

The stately Nippon Yusen building at the northern end of Otaru Canal is a reminder of the prosperity of the city in its heyday. It was completed in 1906 for Nippon Yusen Kaisha (now known as NYK Line), one of Japan's largest shipping companies. At the time, Japan's leading architects were designing the city's buildings, using the finest materials and cutting-edge technology.

The Nippon Yusen building and its adjacent stone warehouse were designed by Satachi Shichijiro (1856–1922). Satachi was one of the first students of British architect Josiah Conder (1852–1920) at the present-day University of Tokyo. His design embodies the Renaissance Revival style that was popular in Europe. The building's symmetrical layout, mansard roof, dormer windows, and incorporation of stone for both structural and ornamental purposes are typical of the style.

The building incorporates the latest innovations from overseas to counter Hokkaido's cold winters, including steel shutters from the United States, a boiler room in the basement for steam heating, and double-glazed windows. Much of the first floor is an open-plan space where administrative employees managed cargo shipments and staffed the high wooden counters where passengers could purchase ship tickets. At the time, Nippon Yusen had a fleet of around 58 steamships taking goods and passengers to ports in China, Europe, India, the United States, and Australia.

On the second floor, a conference room and private lounge include parquet floors and decorative plaster moldings, and the walls are papered with *kinkarakami*, gilded and

embossed Japanese paper that resembles European gilt leather.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧日本郵船(株)小樽支店及び付属倉庫群

小樽運河の北の端にある堂々とした日本郵船の社屋を見ると、全盛期の街の繁栄が思い出されます。これは、日本の大手海運会社の1つである、日本郵船会社（現在は「日本郵船株式会社」として知られる）のために1906年に完成しました。当時は、日本の一流建築家が最高品質の材料、先端技術を駆使して、この街の建物を設計していました。

日本郵船の社屋と隣接する石造り倉庫は佐立七次郎（1856年-1922年）により設計されました。佐立は、現在の東京大学でイギリスの建築家であるジョサイア・コンドル（1852年-1920年）の一期生のうちの1人でした。彼の設計は、ヨーロッパで流行していたルネッサンス・リバイバル様式を体現したものでした。建物の左右対称のレイアウト、マンサード屋根（腰折れ屋根）、ドーマーウィンドー（屋根窓）、構造上かつ装飾用の石の組み込みはこの様式の典型です。

この社屋には、アメリカのスチール製シャッター、地下にある、スチーム暖房のためのボイラー室、二重ガラス窓など、北海道の寒い冬に対抗するための最新の世界的な技術革新が用いられていました。1階の大部分は広いスペースで、ここで管理職員が出荷管理をしたり、乗客が船のチケットを買う背の高い木製カウンターに職員が並んだりしていました。その当時、日本郵船会社は、中国、ヨーロッパ、インド、アメリカ、オーストラリアの港に物や乗客を運ぶ蒸気船約58隻を保有していました。

2階は寄木張りの床が敷き詰められ、装飾石膏の造形が施された会議室や専用ラウンジがあり、ヨーロッパのギルトレザーに似せた、金箔が張られ、浮彫が施された日本の紙である、金唐紙の壁紙が貼られています。

001-022

Bank of Japan Otaru Museum

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 日本銀行旧小樽支店 / 日本銀行旧小樽支店

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Bank of Japan Otaru Museum

The Bank of Japan's Otaru Branch was designed to reflect the wealth of the city and the financial power of the national bank. By the mid-1920s, some twenty-five banks were operating in Otaru, compared with thirteen banks in Hokkaido's capital, Sapporo. Otaru was the gateway to Hokkaido in the late nineteenth century; goods and settlers arrived through the port, and commodities such as grain were shipped to various destinations in Honshu, as well as Russia and Europe. The banks facilitated financial transactions and international currency exchange, for the growing port city.

Currency reform

Under the regime of the Tokugawa shoguns (1603–1867), gold and silver coinage was used for international trade. Unequal trade treaties between the shogunate and foreign powers in the mid-nineteenth century undervalued Japanese currency and large quantities of gold were taken out of the country as a result. In response, the Bank of Japan was founded in 1882 to issue banknotes and reform Japan's monetary and financial systems. It came a year after the Meiji government (1868–1912) introduced the yen as the official currency.

In 1885, the Bank of Japan issued its first notes, which were guaranteed in exchange for silver. Then, in 1887, Japan followed many Western countries in adopting gold as the standard for its currency. A branch of the Bank of Japan opened in Otaru in 1893 to facilitate financial transactions in Hokkaido. As well as handling the storage, receipt, and circulation of treasury funds, the Otaru Branch, as it became known, purchased gold panned in Hokkaido to build up its gold reserves.

Symbols of success

A new building for the Bank of Japan in Otaru was constructed over three years from 1909 to 1912. It was designed in the Renaissance Revival style by Tatsuno Kingo (1854–1919), and his protégé Nagano Uheiji (1867–1937). Tatsuno was one of Japan's most famous architects at the time and is best remembered for designing the Bank of Japan Head Office (1896) in Tokyo's Nihonbashi and the red brick Marunouchi building of Tokyo Station (1914). He was one of the first students of British architect Josiah Conder (1852–1920) at the Imperial College of Engineering (now the Faculty of Engineering at the University of Tokyo).

The two-story Otaru Branch building used new construction methods, including a steel-frame structure and concrete-coated floors and roof for fire prevention. Steel roof trusses made it possible to create a large open space for the banking hall without support pillars. A mezzanine gallery overlooks the banking hall, allowing bank managers to observe the activity below. Throughout the interior, Tatsuno incorporated the symbol of the Bank of Japan—a stylized yen motif. The circular design is printed on Japanese banknotes to this day.

The building's brickwork exterior is covered with cement to resemble stone and protect the bricks from rain and snow. The building has four domes along the roof on the north side, and a four-story watchtower overlooking Otaru Port on its southeast corner.

In operation until 2002, the bank was restored and opened to the public as the Bank of Japan Otaru Museum in 2003. Exhibits include scale models of Otaru's financial district and the original bank vault. Admission is free.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日本銀行旧小樽支店

日本銀行小樽支店は、街の富と国営銀行の金融力を反映するよう設計されました。1920年代半ばまでに、北海道の県庁所在地である札幌が13行であるのに対し、小樽市内でおよそ25行の

銀行が営業していました。小樽は、19世紀の終わりには北海道の玄関口となっていました。つまり、物や移住者は小樽港から到着し、穀物などの商品はロシアやヨーロッパ同様に本州のあらゆる場所へ輸出されていました。成長する港町のために、銀行は金融取引と国際通貨交換を促進していました。

通貨改革

徳川幕府（1603年-1867年）の下、国際貿易では、金貨と銀貨が使用されていました。19世紀半ばにおける幕府と外国勢力の間の不平等な通商条約により、日本の通貨が過小評価され、その結果、大量の金が海外に流出しました。これに対応して銀行券を発行し、日本の通貨・金融制度を改革するため、1882年に日本銀行が設立されました。明治政府（1868年-1912年）が公式通貨として「円」を導入した1年後のことでした。

1885年に日本銀行が最初の紙幣を発行し、紙幣は銀との交換が保証されていました。その後、1887年に、日本は、多くの西洋諸国の後に続き、貨幣の基準として金を採用しました。北海道での金融取引を推し進めるため、1893年、日本銀行の支店が小樽に開設されました。財政資金の保管、受領、循環を取り扱うだけでなく、小樽支店は、世に知られるようになるにつれ、北海道で採られた金を買い付け、自らの金準備を構築しました。

成功の象徴

小樽の日本銀行の新社屋が1909年から1912年までの3年で建設されました。これは、辰野金吾(1854年-1919年)と彼の弟子長野宇平治（1867年-1937年）が設計した、ルネッサンス・リバイバル様式によるものでした。辰野は、その当時の日本でもっとも有名な建築家の1人であり、東京日本橋にある日本銀行本店（1896年）や赤レンガ造りの東京駅丸の内駅舎（1914年）を設計したことで、最も記憶に残っています。辰野は、帝国工科大学（現在の東京大学工学部）で、イギリスの建築家であるジョサイア・コンドル（1852年-1920年）の一期生のうちの1人でした。

2階建ての小樽支店の社屋では、鉄骨骨組構造、防火用のコンクリート打ちの床や屋根など、新しい建築法を用いました。鉄骨屋根小屋組を用いることにより、支柱を使わず、銀行ホールの広いオープンスペースを創り出すことが可能となりました。中2階の回廊から銀行ホールを見渡せるようになっており、ここから銀行支店長が階下での様子を見ることができました。内装全体を通して、辰野は日本銀行のシンボルである、「図案化された円」を組み込みました。この丸いデザインは今日に至るまで日本銀行券に印刷されています。

社屋の煉瓦造りの外装は石に似せたセメントで覆われ、雨や雪から煉瓦を守っています。北側の屋根に沿って4つのドーム、南東の角には小樽港を見渡せる4階建ての望楼が取り付けられています。

この銀行は2002年まで営業され、2003年に復元されて「日本銀行旧小樽支店金融資料館」と

して一般公開されました。展示物には、小樽の金融地区の縮尺模型、元の銀行金庫室などがあります。入場料は無料です。

001-023

Bank of Japan Otaru Museum

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 日本銀行旧小樽支店 / 日本銀行旧小樽支店
【想定媒体】 アプリQRコード / パンフレット

できあがった英語解説文

Bank of Japan Otaru Museum

The Bank of Japan's Otaru Branch building was completed in 1912 by one of Japan's leading architects with ornate details and construction methods new at the time. The building was designed to reflect Otaru's financial power in the early twentieth century and is now open as a museum. Photographs and scale models explain the history of Japan's currency system and Otaru's economic growth.

The elegant Renaissance Revival building was designed by renowned architect Tatsuno Kingo (1854–1919) and his protégé Nagano Uheiji (1867–1937). Tatsuno was one of Japan's most famous architects at the time and is best remembered for designing the Bank of Japan Head Office (1896) in Tokyo's Nihonbashi and the red brick Marunouchi building of Tokyo Station (1914).

The symbol of the Bank of Japan, a stylized yen motif, is repeated throughout the interior in plaster moldings. The motif is printed on Japanese banknotes to this day. The building's brickwork exterior is covered with cement to resemble stone and protect the bricks from rain and snow. The building has four domes along the roof on the north side, and a four-story watchtower overlooking Otaru Port on its southeast corner. Entry to the museum is free.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日本銀行旧小樽支店

日本銀行小樽支店の建物は日本を代表する建築家の一人によって、華麗な細部と当時の新工法で 1912 年に完成しました。この建物は 20 世紀初頭の小樽の金融力を反映するよう設計され、現在では博物館としてオープンしています。写真や縮尺模型を通じて日本の通貨制度と小樽の経済成長を伝えています。

エレガントなルネッサンス リバイバル様式の建物は有名な建築家辰野金吾 (1854年-1919 年) と彼の弟子である長野宇平次 (1867 年-1937 年) によって設計されました。辰野は当時日本で最も有名な建築家の一人であり、東京日本橋の日本銀行本店 (1896年) や赤レンガの東京駅丸の内駅舎 (1914年) の設計でよく知られています。

様式化された円のモチーフである日本銀行のシンボルが石膏の方で内装全体に使用されています。このモチーフは今日まで日本の紙幣に印刷されています。建物のレンガ造りの外観は石に似せたセメントでおおわれており、雨や雪からレンガを保護しています。北側の屋根に沿った4つのドームと南西の角の小樽港を見渡せる4階建ての望楼を備えています。博物館への入場は無料です。

001-024

Former Otaru Branch of Mitsui Bank

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧三井銀行小樽支店 / 旧三井銀行小樽支店
【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Former Otaru Branch of Mitsui Bank

The Otaru Branch of Mitsui Bank was built in 1927 and operated until 2002. The building was restored and reopened as a museum in 2016. Parts of the bank that were once off-limits to the public are now accessible and exhibits in the open-plan banking hall trace the development of the Ironai banking district.

The building was designed in 1927 by Sone Tatsuzo (1853–1937) in the Italian Renaissance Revival style, inspired by the opulent merchant houses of fourteenth- and fifteenth-century Italy. Sone designed the building with a steel frame and reinforced concrete structure, based on lessons learned from the Great Kanto Earthquake of 1923. The exterior is covered in a layer of granite to resemble solid stone and decorated with Greco-Roman motifs. This building was a symbol of Otaru's financial vigor in the early twentieth century when it was one of twenty-five banks in the city.

Wealth and innovation

Above the banking hall were offices and three reception rooms for important clients. One room remains much as it was in 1927, with decorative wallpaper, velvet curtains, and velvet-upholstered couches. Glass jars on a shelf display samples of the commodities once traded through Otaru, including herring-based fertilizer, beans, and flax. The samples date from the 1940s.

In the basement is a walk-in vault with safety deposit boxes for customers. It is surrounded by a tiled corridor with a channel to drain the condensation which formed on the cool basement walls in summer.

Otaru's financial district evolves

Mitsui Bank opened an Otaru branch in 1880 near the newly built Kaiuncho Station (later named Minami-Otaru Station). This southern part of the city was the commercial center until 1881, when a fire destroyed most of the buildings, including the bank and the train station. Most businesses moved further north, closer to the port. From 1887, banks and trading houses were established in the Ironai district, close to the new commercial center. When Mitsui Bank relocated to Ironai Street in 1898, it was one of ten banks in the area. By 1926 there were twenty-five banks in Otaru.

From the kimono trade to a banking powerhouse

Mitsui Bank was established in Tokyo in 1876 as Japan's first private bank. The Mitsui family started dealing in kimonos in 1673 before launching a money exchange business. Mitsui Bank handled the government funds for the development of Hokkaido until 1882, when the Bank of Japan was established. In the late twentieth century, Mitsui Bank merged with several others and now operates as Mitsui Sumitomo Banking Corporation. The Otaru Branch of Mitsui Bank is a National Important Cultural Property and is part of Otaru Art Base, five historical buildings that are open to the public as museums and art galleries.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧三井銀行小樽支店

三井銀行小樽支店は1927年に建設され、2002年まで営業していました。この建物は改修され、2016年に博物館として再開しました。かつては一般公開されていなかった銀行は、今では立ち入り可能で、オープンプランの銀行ホールでの展示で色内銀行街の発展を辿っています。

この建物は、14世紀から15世紀のイタリアの豪華な商家にインスピレーションを得たイタリアルネサンスリバイバル様式で、曾禰達蔵（1853年-1937年）によって1927年に設計されました。曾禰は1923年の関東大震災の教訓を踏まえ、鉄骨鉄筋コンクリート造りの建物を設計しました。外観は堅い石に似せた御影石の層に覆われ、ギリシャ・ローマのモチーフで装飾されています。この建物は、この街にある25銀行のうちの1つであった20世紀初頭には、小樽の金融力の象徴でした。

富とイノベーション

銀行ホールの上にはオフィスと重要な顧客のための3つの応接室がありました。応接室の一つは

1927 年当時のままで、装飾的な壁紙、ベルベットのカーテン、ベルベット張りのソファが置かれています。棚にあるガラス瓶にはニンシを原料とした肥料、豆、亜麻など、かつて小樽で取引されていた商品のサンプルが展示されています。このサンプルは 1940 年代のものです。

地下にはアーチ天井の貸金庫室があります。夏に冷たい地下室の壁に生じる結露を排出する水路を備えたタイル張りの回廊に囲まれています。

進化する小樽の金融街

三井銀行は1880年新設の開運町駅（後の南小樽駅）近くに小樽支店を開設しました。市の南部にあたるこの地区は1881 年の火災で銀行や駅を含むほとんどの建物が焼失するまで商業の中心地でした。ほとんどの企業はさらに北の港近くに移転しました。1887年以降、新しい商業中心地に近い色内地区に銀行や商社が設立されました。三井銀行が 1898 年に色内通りに移転した時点では、この地域にあった 10 の銀行のうちの 1 つでした。1926 年には小樽に 25 の銀行がありました。

着物貿易から銀行の中心地へ

三井銀行は1876年に日本初の民間銀行として東京に設立されました。三井家は1673年に着物の取り扱いを始め、その後両替商を始めました。三井銀行は1882 年に日本銀行が設立されるまで北海道開発のための政府資金を扱っていました。20 世紀後半に三井銀行は他のいくつかの銀行と合併し、現在は三井住友銀行として運営されています。三井銀行小樽支店は国の重要文化財であり、5つの歴史的建造物が博物館や画廊として一般公開されている小樽芸術村の一部となっています。

001-025

Former Otaru Branch of Mitsui Bank

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧三井銀行小樽支店 / 旧三井銀行小樽支店
【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット

できあがった英語解説文

Former Otaru Branch of Mitsui Bank

The Otaru Branch of Mitsui Bank was built in 1927 and operated until 2002. The building was restored and reopened as a museum in 2016. Visitors can see parts of the bank that were once off-limits to the public and learn about the development of the Ironai banking district from the early twentieth century, through exhibits in the open-plan banking hall.

In the basement is a walk-in vault with safety deposit boxes for customers. It is surrounded by a tiled corridor with a channel to drain the condensation which formed on the cool basement walls in summer.

The building was designed by architect Sone Tatsuzo (1853–1937) in the Italian Renaissance Revival style, inspired by the opulent merchant buildings of fourteenth- and fifteenth-century Italy. Sone designed the building with a steel frame and reinforced concrete structure, based on lessons learned from the Great Kanto Earthquake of 1923.

The Otaru branch was a symbol of the city's financial vigor in the early twentieth century when Mitsui was one of twenty-five banks in Otaru. Sone was a classmate of Tatsuno Kingo (1854–1919), who designed the Bank of Japan Otaru Branch in 1912. The Mitsui Bank Otaru Branch building is part of Otaru Art Base, five historical structures that are open to the public as museums and art galleries.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧三井銀行小樽支店

三井銀行小樽支店は1927年に建設され、2002年まで営業していました。この建物は改修され、2016年に博物館として再開しました。かつては立ち入りが禁止されていた銀行の一部を見学し、オープンプランの銀行ホールでの展示を通じて20世紀初頭からの色内銀行街の発展を学ぶことができます。

地下にはアーチ天井の貸金庫室があります。夏に冷たい地下室の壁に生じる結露を排出する水路を備えたタイル張りの回廊に囲まれています。

この建物は、14世紀から15世紀のイタリアの豪華な商人の建物にインスピレーションを得て、建築家曾禰達蔵（1853年-1937年）によってイタリアルネッサンスリバイバル様式で設計されました。曾禰は1923年の関東大震災の教訓を踏まえ、鉄骨鉄筋コンクリート造りの建物を設計しました。

小樽支店は三井銀行が小樽の25銀行のうちの1つであった20世紀初頭には、この街の金融力の象徴でした。曾禰氏は、1912年に日本銀行小樽支店を設計した辰野金吾（1854年-1919年）の同級生でした。三井銀行小樽支店は、5つの歴史的建造物が博物館や画廊として一般公開されている小樽芸術村の一部となっています。

001-026

From Prosperity to Preservation: Otaru's Ironai Banking District

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】色内銀行街 / 色内銀行街

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

From Prosperity to Preservation: Otaru's Ironai Banking District

The view along Nichigin Street from the intersection with Ironai Street reveals the history of a modern city. In a radius of some 500 meters, the buildings of the distinguished banks that made Otaru the economic center of the north are eminent examples of modern Japanese architecture. Ten of the original twenty-five bank buildings remain, some designed by the leading Japanese architects of the early twentieth century.

A new financial frontier

The first financial institutions in Otaru were moneylenders and pawnbrokers that catered to the influx of fishermen and fortune seekers during the “herring gold rush” of the late nineteenth century. By 1897, the annual herring catch in Otaru was close to 90,000 tons, and the city's population grew from about 2,000 at the beginning of the Meiji era (1868–1912), to over 100,000 in the 1920s. This rapid growth created a need for larger, government-regulated banks.

Mitsui Bank was the first to arrive in Hokkaido, setting up a branch in Hakodate in 1876 and another in Otaru in 1880. The bank handled the government funds for the development of Hokkaido until 1882, when the Bank of Japan was established. Early banks contributed to Otaru's fledgling economy by offering loans at lower interest rates than the moneylenders, issuing checks with a value equivalent to paper money, and offering currency exchange services to international traders.

A showcase for Japan's modern architecture

The number of banks increased rapidly from three in 1887 to ten in 1897 and twenty-five by the mid-1920s, making Otaru the financial center of Hokkaido. The earliest extant bank building is the Dai-hyakujusan National Bank Otaru Branch, which was completed in 1893 on Sakaimachi Street. It is a rare surviving example of a warehouse-style bank, fusing Japanese and European styles.

At the beginning of the twentieth century, Japanese banks adopted classical European architectural styles to express wealth, integrity, and stability. As the Meiji government studied monetary and financial systems overseas, Japan's leading architects also looked to Europe and America for inspiration. Four of the most prominent architects of the early twentieth century studied under British architect Josiah Conder (1852–1920) at the present-day University of Tokyo. They went on to build the Bank of Japan's Otaru Branch (1912) on Nichigin Street and the Otaru Branch of Mitsui Bank (1927) on Ironai Street.

In contrast to earlier bank buildings, those built in the 1920s—such as the Otaru branches of Hokkaido Takushoku Bank (1923), Mitsubishi Bank (1924), and Dai Ichi Bank (1924)—feature smooth facades with simple columns and minimal surface decorations. They are typical examples of the restrained neoclassical style then popular in Europe and America for civic buildings and institutions.

The financial downturn that saved a historical streetscape

Many of the original bank buildings in Otaru have survived due to a number of environmental and historical factors. There has been a relative absence of earthquakes throughout the city's history, and during World War II, the city suffered no major damage from air raids.

The city's financial decline also contributed to their preservation. In the mid-twentieth century as the main source for the nation's energy needs shifted from coal to oil, Otaru lost its status as a coal shipping port. Many financial institutions and trading companies subsequently withdrew from Otaru in the 1960s, leaving their stately buildings vacant. Had the economy continued to flourish, they might have been replaced with new buildings in more contemporary styles. In a way, Otaru's financial

decline saved the banks of the Ironai district.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

色内銀行街

色内通りとの交差点からの日銀通り沿いの眺めは近代都市の歴史を物語っています。半径約 500 メートルの範囲にある小樽を北の経済中心地に仕上げた名門銀行の建物群は日本の近代建築の粋を集めています。当時の 25 棟の銀行建物のうち 10 棟が残っており、その一部は 20 世紀初頭の日本の一流建築家によって設計されました。

新たな金融フロンティア

小樽最初の金融機関は19 世紀後半の「ニシンのゴールドラッシュ」の際に流入した漁師や富を求め人々に対応した金貸しと質屋でした。1897 年までに小樽市の年間ニシン漁獲量は 9万 トン近くになり、市の人口は明治時代（1868年-1912 年）の初めの約 2,000 人から1920 年代には 10万人以上に増加しました。この急速な成長により政府の規制下にある大規模な銀行の必要性が生まれました。

三井銀行は北海道に初めて進出した銀行で1876年に函館に支店を、1880年には小樽に支店を開設しました。三井銀行は1882年に日本銀行が設立されるまで北海道開発のための政府資金を扱っていました。銀行は貸金業者よりも低い金利で融資を提供し、紙幣と同等の価値を持つ小切手を発行し、国際貿易業者に外貨両替サービスを提供することで小樽の新興経済に貢献しました。

日本近代建築のショーケース

銀行の数は 1887 年の 3 行から 1897 年には 10 行、1920 年代半ばには 25 行へと急速に増加し、小樽は北海道経済の中心地になりました。現存する最古の銀行建築は1893年に堺町通りに完成した第百十三国立銀行小樽支店です。和と洋が融合した現存する珍しい倉庫型銀行です。

20世紀初頭、日本の銀行は富、誠実さ、安定性を表現するために古典的なヨーロッパの建築様式を採用しました。明治政府が海外の通貨と金融システムを研究するにつれて、日本の主要な建築家もインスピレーションを求めてヨーロッパやアメリカに目を向けました。20 世紀初頭の最も著名な建築家 4 人は現在の東京大学で英国人建築家ジョサイア・コンドル（1852年-1920 年）に師事しました。彼らは日銀通り沿いに小樽日本銀行（1912 年）、と色内通りに三井銀行小樽支店（1927 年）を建設しました。

初期の銀行建築とは対照的に1920年代に建てられた北海道拓殖銀行（1923年）、三菱銀行（1924年）、第一銀行（1924年）の小樽支店などはシンプルな柱と最小限の装飾を備えた滑らかなファサードが特徴です。これらは、当時ヨーロッパやアメリカで公共の建物や施設向けに人気があった、抑制された新古典主義スタイルの典型的な例です。

歴史ある街並みを救った財政不況

小樽の当時の銀行建物の多くは数々の環境的・歴史的要因に救われました。1 つはこの都市の歴史を通じて比較的地震がなかったこと、そして第二次世界大戦中に空襲による大きなダメージがなかったことです。

街の経済力の衰退も保存に貢献しました。20世紀にこの国のエネルギー需要の主流が石炭から石油に代わり、小樽は石炭出荷港としての地位を失いました。そのため1960年代に小樽から多くの金融機関や商社が撤退し、重厚な建物は空き家となりました。経済が繁栄し続けていたらより現代的なスタイルの新しい建物に建て替えられたかもしれません。ある意味、小樽の財政悪化が色内地区の銀行を救ったのです。

001-027

The Ironai Banking District

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】色内銀行街 / 色内銀行街

【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット

できあがった英語解説文

The Ironai Banking District

The view along Nichigin Street from the intersection with Ironai Street reveals the history of a modern city. In a radius of some 500 meters, the buildings of the distinguished banks that made Otaru the economic center of the north are eminent examples of modern Japanese architecture. Ten of the original twenty-five bank buildings remain, some designed by the leading Japanese architects of the early twentieth century.

The first banks and warehouses were established around Minami Otaru, but after the area was almost completely destroyed by a fire in 1881, the commercial center was moved north to the Ironai district, where it remains today. The district is like a museum of modern architecture, lined with banks and trading houses from the late nineteenth to mid-twentieth centuries.

Banks adopted classical architectural styles to express wealth, integrity, and stability. Architects looked to Europe and America for inspiration: the Bank of Japan's Otaru Branch (1912) was designed in the Renaissance Revival style by Tatsuno Kingo (1854–1919) and his protégé Nagano Uheiji (1867–1937). It incorporates Baroque elements, such as decorative masonry and turrets. The Otaru Branch of Mitsui Bank (1927) was designed in the simpler Italian Renaissance Revival style by Sone Tatsuzo (1853–1937).

In the mid-twentieth century, Otaru's financial vigor diminished as the main source for the nation's energy needs shifted from coal to oil, and the city lost its status as a coal

shipping port. Many banks withdrew from Otaru, leaving their stately buildings vacant, until they were restored as museums and other facilities.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

色内銀行街

色内通りとの交差点からの日銀通り沿いの眺めは近代都市の歴史を物語っています。半径約 500 メートルの範囲にある小樽を北の経済中心地に仕上げた名門銀行の建物群は日本の近代建築の粋を集めています。当時の25の銀行の建物のうち 10 棟が残っており、そのいくつかは 20 世紀初頭の日本の一流建築家によって設計されました。

最初の銀行と倉庫は南小樽周辺に設立されましたが、1881 年にこの地域が火災でほぼ完全に焼失した後、商業の中心地は北の色内地区に移転され現在に至っています。この地区は19 世紀後半から 20 世紀半ばまでの銀行や商社が立ち並ぶ近代建築の博物館のような場所です。

銀行は、富、誠実さ、安定性を表現するために古典的な建築様式を採用しました。建築家たちはヨーロッパとアメリカにインスピレーションを求めました。日本銀行小樽支店（1912 年）は辰野金吾（1854年 -1919 年）と彼の弟子である長野宇平次（1867年-1937 年）によってルネサンス リバイバル様式で設計されました。装飾的な石積みや塔などのバロック様式の要素が組み込まれています。三井銀行小樽支店（1927 年）は曾禰達蔵（1853年-1937 年）によってよりシンプルなイタリア ルネサンス リバイバル様式で設計されました。

20世紀半ば、この国のエネルギー需要の主流が石炭から石油へ移行するにつれて小樽の財政力は低下し、小樽は主要な石炭積出港としての地位を失いました。多くの銀行が小樽から撤退し、その荘厳な建物は博物館やその他の施設として改修されるまで空き家でした。

001-028

Former Hokkaido Takushoku Bank, Otaru Branch

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧北海道拓殖銀行小樽支店 /
旧北海道拓殖銀行小樽支店
【想定媒体】アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Hokkaido Takushoku Bank, Otaru Branch

The Nitori Museum of Art opened in 2017 in the former Hokkaido Takushoku Bank's Otaru Branch. The Takushoku Bank branch was built in 1923 at the height of Otaru's economic prosperity, the same year Otaru Canal was completed. It was one of the largest buildings in Hokkaido at the time, with a bank and rental offices filling four floors, and a basement with a vault.

The bank relocated in 1969 as Otaru's economic vigor diminished, and the building sat empty until it was reopened as a hotel in 1989. The property underwent several changes of ownership before being converted into an art museum. There are around 300 artworks on display over the four floors and the basement. The collection focuses on artists active when Otaru was at the peak of its prosperity, including modern Japanese paintings (*nihonga*) by Yokoyama Taikan (1868–1958) and Kawai Gyokudo (1873–1957), and Western-style paintings by Kishida Ryusei (1891–1929). The basement is used for special exhibitions.

The former first-floor sales area is a large open-plan space with six Grecian-style columns. The marble floor is inlaid with motifs representing Otaru's history as a port city—the decorative floor dates to 1989, when the building was a hotel. The first floor now holds a collection of stained glass windows by Louis Comfort Tiffany (1848–1933), made for St. John's Episcopal Church in New Jersey in 1915 and salvaged when the church closed in the 1990s. The windows are backlit so that viewers can appreciate the opalescent effects that Tiffany captured in his glasswork.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧北海道拓殖銀行小樽支店

2017年、旧北海道拓殖銀行小樽支店に似鳥美術館が開設されました。この拓殖銀行の支店は小樽の経済的繁栄の絶頂期であった1923年に建てられ、同年、小樽運河が完成しました。当時、北海道最大級の建物の1つに数えられており、地上4階のフロアに銀行と貸事務所が、地下には金庫室がありました。

北海道拓殖銀行は小樽の経済力が衰退した1969年に移転し、1989年にホテルとして再オープンするときまでもぬけの殻となっていました。美術館に生まれ変わるまでこの建物の所有者は何度も変わりました。地上4階のフロアと地下には、およそ300の芸術作品が展示されています。所蔵作品は、横山大観（1868年-1958年）や川合玉堂（1873年-1957年）の近代日本絵画（「日本画」）や、岸田劉生（1891年-1929年）の洋画など、小樽が繁栄の絶頂にあったときに活躍していた芸術家の作品が主です。地下は特別展のために使用されています。

1階の旧営業室は6本の古典的なグレコ様式の柱に支えられた開放的な大空間です。大理石が敷き詰められた床には港町としての小樽の歴史を表すモチーフがちりばめられています。この装飾的な床は1989年に造られたもので、当時この建物はホテルでした。現在も、1階には、1915年にルイス・コンフォート・ティファニー（1848年-1933年）がニュージャージーのセント・ジョンズ・エписコパル教会のために作製し、1990年代にこの教会が閉鎖されたときに回収されたステンドグラス窓のコレクションが展示されています。ティファニーが自身のガラス製品の中で捉えた乳光効果を感じられるよう、窓は後ろからライトで照らされています。

001-029

The Historical Streetscapes of Sakaimachi and Ironai

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】色内通り、堺町通りの商店 /

色内通り、堺町通りの商店

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

The Historical Streetscapes of Sakaimachi and Ironai

A large number of merchant houses, warehouses, and banks from the late nineteenth and early twentieth centuries have been preserved on Sakaimachi and Ironai Streets, making them popular destinations for shopping and sightseeing. Rickshaws carry visitors around the area as they did over a century ago at the peak of Otaru's prosperity.

On the waterfront

Otaru's rise to financial power began with herring fishing. Herring was made into a valuable fertilizer that was shipped to southwestern Honshu for use in cotton and indigo fields. In the late nineteenth century, the annual herring catch was close to 90,000 tons, and Otaru expanded rapidly as the "herring gold rush" brought wealth and an influx of new businesses.

Although Otaru had a deep harbor suitable for shipping, the city's mountainous terrain meant there was very little flat land suitable for building the necessary infrastructure. Land reclamation efforts created additional areas along the coast to accommodate the needs of the expanding port. The new districts of Sakaimachi, Ironai, Kitahama, and Minamihama were established on reclaimed land in 1889, forming the city's commercial center. At the time, Sakaimachi Street was right on the waterfront.

Before work began on Otaru Canal in 1914, merchants built their stores and warehouses along Sakaimachi Street for access to the water. Barges ferrying goods from ships in the harbor could moor directly in front of the warehouses. Wholesalers opened, dealing in sugar, cotton, rice, and other commodities.

A prosperous, modern city

Sakaimachi Street developed as a wholesale and shopping district. Photographs of Otaru from the early twentieth century show a mix of bankers and retail staff wearing suits and customers in kimonos, along with horse carts, rickshaws, and the occasional automobile. A brass band was employed to perform on the balcony of the Iwanaga Clock Store to attract customers, adding to the street's lively atmosphere.

To the north of the Myoken River, Sakaimachi Street becomes Ironai Street. Banks and trading companies opened along Ironai Street, and it became the city's banking district. The number of banks increased rapidly, from three in 1887 to sixteen in 1907. The Bank of Japan Otaru Branch opened in 1912, cementing Otaru's position as Hokkaido's economic center.

Challenging times

By the mid-twentieth century, Otaru's economy was in decline. Other ports on Hokkaido's east coast offered more convenient shipping routes to Tokyo, and the main source for the nation's energy needs switched from coal, once shipped from Otaru, to oil. Many banks moved to Sapporo, which was established as the administrative capital of Hokkaido in 1886, and shoppers took advantage of improved rail connections to visit the large department stores in the capital. The crowds that once thronged Sakaimachi Street dwindled, and by the 1960s, many warehouses, stores, and banks stood empty.

Saving Otaru's history and reviving the city's fortunes

In the 1960s, the local government proposed to fill in Otaru Canal to build a new six-lane roadway. The proposal led to community efforts to save the canal, and these marked the beginning of a preservation movement to revitalize Otaru's historical downtown. In the 1980s, the two sides reached a compromise, and part of the canal was saved. It was revived as an attractive strolling area with paved walkways, streetlamps, and decorative bridges. The large Kimura Warehouse was renovated in 1983 by Kitaichi Glass as a retail store and restaurant, drawing visitors. This success inspired other businesses to move into the warehouses along Sakaimachi Street and around Otaru Canal, creating an attractive shopping area. Today, the Arata Trading Company shipping offices and the Takahashi Warehouse, which once stored adzuki

beans, are part of Otaru Art Base, five historical buildings that are open to the public as museums and art galleries. The grand two-story brick offices of the Kyosei Company, once one of Hokkaido's leading rice mills and grain merchants, have been restored as a music box emporium.

The old Etchuya Hotel, built on Ironai Street in 1931 as a hotel for international traders, has been restored and reopened as the Unwind Hotel, and the nearby Chamber of Commerce Building is now an annex of the OMO5 Hotel. Several former banks are open to the public as museums. Some are part of Otaru Art Base. The historical appeal of these once-empty buildings has played a large part in the city's economic revival.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

色内通り、堺町通りの商店

堺町通りや色内通りには19世紀後半から20世紀初頭の商家や倉庫、銀行が数多く保存されておりショッピングや観光の拠点として人気です。1世紀以上前、小樽の繁栄の頂点にあったときと同じように人力車が観光客をこのエリアに運びます。

ウォーターフロント

小樽の経済力の台頭はニシン漁から始まりました。ニシンは貴重な肥料に加工され本州南西部の綿花畑や藍畑に使用するため出荷されました。19世紀末にはニシンの年間漁獲量が9万トン近くに上り、「ニシンのゴールドラッシュ」が富と新たな企業の流入をもたらして小樽は急速に発展しました。

小樽には海運に適した深い港がありましたが、山がちな地形のため必要なインフラ整備に適した平地がほとんどありませんでした。拡大する港の需要を満たすため埋め立てで新しい土地が造成されました。1889年、市の商業中心地となる堺町、色内、北浜、南浜が埋立地の上に造成されました。当時、堺町通りはまさにウォーターフロントでした。

1914年に小樽運河の工事が始まる前、商人は海へのアクセスを考えて堺町通り沿いに店舗や倉庫を建てました。港の船から商品を運ぶ小舟は倉庫の前に直接停泊することができます。砂糖、綿花、米などの商品を扱う問屋が開業しました。

豊かな近代都市

堺町通りは卸売りやショッピングの地区として発展しました20世紀初頭の小樽の写真にはスーツを

着た銀行員や小売店のスタッフ、着物を着た顧客が、馬車、人力車、そして時折自動車とともに写っています。岩永時計店のベランダでは集客のためのブラスバンドによる演奏が行われ、通りに活気を与えました。

妙見川の北側で堺町通りが色内通りになります。色内通り沿いには銀行や商社が開業し、小樽の銀行街となりました。小樽の銀行の数は、1887年の3行から1907年には16行へと急速に増加しました。1912年には日本銀行小樽支店が開設され、小樽は北海道の経済の中心地としての地位を確立しました。

困難な時代

20世紀半ばになると小樽の経済は衰退していきました。北海道東海岸の他の港が東京へのより便利な航路を提供し、国のエネルギー需要の主流がかつて小樽から出荷されていた石炭から石油に切り替わりました。多くの銀行が北海道行政の首都として確立された札幌に移転し、買い物客は鉄道の便が改善されたため札幌の大型デパートを訪れました。かつて堺町通りに押し寄せていた人出は減り、1960年代には多くの倉庫、店舗、銀行が空き家になりました。

小樽の歴史を守り、街の繁栄を取り戻す

1960年代、地元政府は小樽運河を埋め立てて新たに6車線の道路を建設することを提案しました。この提案が運河を保存するための地域社会の取り組みに繋がり、小樽の歴史的な中心街を活性化するための保存運動の始まりとなりました。1980年代に二者が妥協に達し運河の一部が保存されました。舗装された歩道、街灯、装飾的な橋が設置され、魅力的な散策エリアとして復活しました。広い木村倉庫は、北一硝子が1983年に小売店兼レストランとして改修され、訪問客を呼び込みました。この成功をきっかけに他の企業が堺町通り沿いや小樽運河周辺の倉庫を魅力的な商店街に作り上げました。現在、荒田商会の出荷事務所とかつて小豆を保管していた高橋倉庫は、5つの歴史的建造物を博物館や画廊として公開した小樽芸術村の一部となっています。かつて北海道有数の精米所および穀物商社であった共生株式会社のレンガ造りの2階建ての立派な事務所はオルゴール専門店に改装されました。

1931年に色内通りに貿易商向けのホテルとして建てられた旧越中屋ホテルがアンワインドホテルとして改装オープンし、近くの商工会議所ビルはOMO5ホテルの別館となっています。かつての銀行のいくつかは博物館として一般公開されています。いくつかは小樽芸術村の一部です。かつて空き家だったこれらの建物の歴史的魅力は都市の経済復興に大きな役割を果たしてきました。

001-030

The Historical Streetscapes of Sakaimachi and Ironai

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】色内通り、堺町通りの商店 /
色内通り、堺町通りの商店
【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット

できあがった英語解説文

The Historical Streetscapes of Sakaimachi and Ironai

Numerous merchant houses, warehouses, and banks from the late nineteenth and early twentieth centuries are preserved on Sakaimachi and Ironai Streets. These districts, once the hub of banking and warehousing, are now popular destinations for shopping and sightseeing.

Although Otaru had a deep harbor suitable for shipping, The city's mountainous terrain left little flat land suitable for building. Land reclamation efforts created additional areas along the coast to accommodate the needs of the expanding port. The new districts of Sakaimachi, Ironai, Kitahama, and Minamihama were established on reclaimed land in 1889, forming the city's commercial center. At the time, Sakaimachi Street passed along the waterfront, and merchants built stores and warehouses along the street for convenient cargo transfer. By the end of the nineteenth century, the economy in Otaru was booming, and Sakaimachi Street was the commercial center of the city.

Some 25 banks, along with trading companies, opened around Ironai Street, and it became the city's banking district. In the early twentieth century, Otaru was Hokkaido's economic center. By the mid-twentieth century, however, Otaru's economy declined as other ports on Hokkaido's eastern coast offered more convenient shipping routes to Tokyo. Banks and larger stores moved to Sapporo, and their buildings in Otaru stood empty.

In the late 1970s, a preservation movement took shape to revitalize Otaru's historical

downtown. Over time the area was revitalized, and businesses began opening in the former warehouses. The large Kimura Warehouse was renovated in 1983 by Kitaichi Glass as a retail store and restaurant, drawing visitors. More businesses moved into the historical buildings to create an attractive shopping area. Several former banks are now open to the public as museums and art galleries. The historical appeal of these once-empty buildings played a large part in the city's economic revival.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

色内通り、堺町通りの商店

堺町通りと色内通りには19世紀後半から20世紀初頭の商家、倉庫、銀行が数多く保存されています。かつて銀行や倉庫の中心地であったこれらの地区は現在ではショッピングや観光の目玉となっています。

小樽には出荷に適した深い港がありますが、山がちな地形のため建築に適した平地がほとんどありません。拡大する港の需要を満たすために海岸沿いを埋め立てて新しい土地を造成しました。1889年に埋立地に境町、色内、北浜、南浜という新しい地区ができ、この街の経済の中心地となりました。当時、堺町通りはまさにウォーターフロント沿いにあり、商人は荷の受け渡しに便利な通り沿いに店舗や倉庫を建てました。19世紀末までに小樽の経済は活況を呈し、堺町通りは商業の中心地でした。

色内通り周辺には約25の銀行や商社が開業し、市の銀行街になりました。20世紀初めには、小樽は北海道の経済の中心地でした。しかし、20世紀半ば頃には北海道東海岸の他の港が東京へのより便利な航路を提供したため小樽の経済は衰退しました。銀行や大型店は札幌に移転し、小樽の建物は空き家となりました。

1970年代後半、小樽の歴史ある下町を再興しようと保存運動が起こりました。次第にこの地区は復活し、旧倉庫で事業がオープンし始めました。1983年、北一硝子が大きな木村倉庫を小売店とレストランとして改修して訪問客を呼び込みました。多くの企業が歴史的建造物に移り、魅力的な商店街を作りました。かつての銀行のいくつかは現在、博物館や画廊として一般公開されています。かつては空き家だったこれらの建物の歴史的魅力が都市の経済復興に大きな役割を果たしました。

001-031

Former Iwanaga Clock Store

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧岩永時計店 / 旧岩永時計店

【想定媒体】アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Iwanaga Clock Store

Five generations of the Iwanaga family sold watches and clocks from an elegant two-story stone building on Sakaimachi Street in Otaru's old shopping district. The Iwanaga Clock Store dates from the early twentieth century. It stands out among the other buildings on the street for its ornate details and large balcony on the second floor. Photographs from the early twentieth century show the balcony being used as a stage for regular performances by a brass band employed by the store. The band performed in striking red and white uniforms, likely to attract customers.

Like many of the warehouses and stores built in Otaru in the early twentieth century, the Iwanaga Clock Store was constructed with a timber framework clad with volcanic stone. However, design elements drawn from both Edo-period (1603–1867) merchant houses and European architecture add a sense of affluence. Pairs of ceramic mythical sea creatures (*shachihoko*) decorate the roof ridge of each building. Commonly seen on castles, this motif was believed to protect against fire and was a symbol of wealth. The arched French doors with decorative masonry on the second floor and the stone columns topped with stylized foliage are typical of the Renaissance Revival style that was fashionable in Europe and the United States in the 1890s.

Currently, the property is occupied by the Otaru Music Box Store Sakaimachi, but the Iwanaga family still runs a business selling timepieces and jewelry on Miyako Street, a few blocks away.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧岩永時計店

岩永家は 5 世代にわたり、小樽の商店街の中の堺町通りにある石造りの優雅な 2 階建ての建物で時計を販売していました。岩永時計店は20世紀初頭に創業しました。通りにある他の建物の中でもその凝った装飾と 2 階の大きなバルコニーが際立っています。20世紀初頭の写真にはこのバルコニーが店で雇われているブラスバンドによる定期的な演奏のステージとして使用されていたことが示されています。このバンドは客を呼び込むためか印象的な赤と白のユニフォームを着て演奏していました。

20世紀初頭に小樽に建てられた多くの倉庫や店舗と同様、岩永時計店も木の骨組みに火山石を被せて建てられました。しかし、江戸時代（1603 年-1867 年）の商家とヨーロッパの建築の両方から取り入れられたデザイン要素が、豊かな雰囲気を与えています。一对の陶器製の伝説の海の生き物（シャチホコ）像が各建物の屋根に飾られています。このモチーフは城でよく見られ、火災から守ると信じられ、富の象徴でした。2 階の装飾的な石積みを備えたアーチ型のフランス風扉と様式化された葉で覆われた石の柱は1890 年代にヨーロッパとアメリカで流行したルネッサンス リバイバル様式の典型です。

小樽オルゴール堂堺町店は現在敷地外で営業していますが、岩永家は数ブロック離れた都通りで今も時計や宝石を販売するビジネスを営んでいます。

001-032

Former Kaneko Motosaburo Store

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧金子元三郎商店 / 旧金子元三郎商店

【想定媒体】アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Kaneko Motosaburo Store

The Kaneko Motosaburo Store was built around 1895 after the previous store building burned down. The sturdy stone construction and fireproof features indicate the importance that local merchants and traders placed on protecting their merchandise. Kaneko Motosaburo (1869–1952) was a prominent trader who sold marine products on consignment and moved into shipping, farming, and other fields of business. He was elected the first head of Otaru Ward in 1891 and went on to a career in politics at the local and prefectural level.

The store is one of five along Sakaimachi Street that has *udatsu* firewalls at the front of the building. These stone walls, capped with roof tiles, were designed to prevent fire from spreading from one property to the next in cities where buildings were built close together. The second floor of the building was used for storing merchandise, and its windows were protected by fireproof plastered shutters. The building is a typical example of a Meiji-era (1868–1912) store in Otaru. Today, the building is occupied by an accessories store.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧金子元三郎商店

金子元三郎商店は、以前の店舗建物の焼失後、1895年ごろに建てられました。頑丈な石でできた構造や防火性能を有していることから、地元の商人や貿易商が自身の商品を守ることに重きを置いていたことが分かります。金子元三郎（1869年–1952年）は卓越した貿易商であり、水産物の委託販売を行い、その後、海運業、農業、その他の商いにも手を広げました。金子元三郎

は、1891年に初代小樽区長に選任され、その後、地元や北海道で政界に進出しました。

堺町通り沿いには、建物の正面に「うだつ」（防火壁）が上げられている場所が5箇所ありますが、金子元三郎商店はそのうちの1つです。上部を瓦で覆われているこの石の壁は、建物が密集して建てられている町で火災が起きた時に隣まで燃え広がらないよう造られたものです。建物の2階部分は、商品の貯蔵に使用されており、窓には耐火性のある漆喰塗りの鎧戸が取り付けられ、火災から守る役割をしていました。この建物は、明治時代（1868年-1912年）に小樽にあった店舗の典型です。現在、この建物にはアクセサリーショップが入っています。

001-033

Tanaka Sake Brewery Main Store

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 田中酒造店 / 田中酒造店

【想定媒体】アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Tanaka Sake Brewery Main Store

The Tanaka Sake Brewery was one of 50 sake breweries in Otaru when it was founded in 1899. Today, Tanaka is the only remaining sake brewery in the city. The Tanaka Sake Brewery Main Store opened on the site of the original brewery in 1927. The wooden building is typical of stores built in Otaru in the early twentieth century, with long eaves to protect customers and the shopfront from snow in winter.

Many of the original hand-carved wooden signs have been preserved, including the original shop sign and advertisements for various brews from the early twentieth century. Under the wartime regime in 1944, sake brewing in Otaru was consolidated under a single entity to control supply and pricing, and Tanaka Sake Brewery operated as a retail-only business. In 1996, Tanaka Sake Brewery purchased the Okazaki Warehouses, three stone buildings to the south of Otaru's commercial center and resumed brewing. Tanaka Sake is brewed with spring water from Mt. Tengu in Otaru and rice grown in Hokkaido. Free sake tasting is provided at the main store and in the brewery.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

田中酒造店

田中酒造は、1899年の創業当時、小樽に50軒あった酒蔵のうちの1軒でした。現在では、田中酒造はこの町で唯一残っている酒蔵です。1927年に、元の醸造所があった場所に田中酒造本店が開店しました。その木造の建物は、客や店先を冬の間の雪から守るための長い軒が付けられており、20世紀初めに小樽に建てられた店舗の特徴をよく示しています。

元々使用していた店の看板、20世紀以降のさまざまな醸造酒の広告など、初期の木製の手彫り看板が数多く保存されてきました。1944年の戦時体制のもと、小樽での酒造りは、供給と価格を管理する1つの組織のもとで統合されており、田中酒造は小売りに限定した商いをしていました。1996年に田中酒造店は小樽の商業中心地から南の方に建てられた3棟の石造り建造物から成る岡崎倉庫を購入し、醸造業を復活させました。田中酒造では、酒の醸造の際に小樽にある天狗山の沸き水と北海道産の米を使用しています。本店と醸造所では、無料で酒の試飲ができます。

001-034

Former Arata Trading Company

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧荒田商会 / 旧荒田商会

【想定媒体】アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Arata Trading Company

The office of the Arata Trading Company was constructed in 1935 in Art Deco style. Symmetrical bands of white stone emphasize the clean lines of the square two-story building. The arched stone entrance is the only departure from the strict linear design.

The building is connected to the Takahashi and Shimatani Warehouses by a courtyard. The exterior has been restored, and the former office has a museum shop and a café. It serves as the entrance to the Stained Glass Museum housed in the Takahashi Warehouse.

Arata Takichi (1877–1965) moved from Fukui Prefecture to Otaru at age 28, first trading in marine products before moving into shipping. The Arata Trading Company building served as the shipping company's administration office. It was built on the waterfront, on land newly reclaimed from the harbor.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧荒田商会

1935年、アールデコ様式建築で荒田商会の本店事務所が建てられました。左右対称に帯状に配置された白い石によって四角形の2階建て建物のすっきりした美しいラインが強調されています。アーチ型をした石の入り口のみが厳密な線形のデザインとは異なります。

この建物は、高橋倉庫や嶋谷倉庫と中庭でつながっています。外装は元の状態に修復され、旧事

務所はミュージアムショップ（美術館売店）やカフェになっています。この建物は高橋倉庫にあるステンドグラス美術館の入り口になっています。

28歳のときに福井県から小樽に移住してきた荒田太吉（1877年–1965年）は、当初海産物の取引を行い、その後、海運業に手を広げました。荒田商会の建物は、海運会社の管理事務所の役割をしていました。この建物は、港を新たに埋め立てたところにあるウォーターフロントに建てられました。

001-035

Former Hokkai Millet Company

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧北海雑穀(株) / 旧北海雑穀(株)

【想定媒体】アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Hokkai Millet Company

The Hokkai Millet Company opened on Sakaimachi Street in 1907 and engaged in consignment sales and trade of millet and other grains until they went out of business in 1931. The building was restored and repurposed in 2022 as a glass gallery, which offers glass craft workshops.

The two-story building occupies a corner of Otaru's busy Sakaimachi shopping street and combines Japanese and European architectural styles. The shape is similar to a typical wooden merchant house of the Edo period (1603–1867) but is clad in volcanic stone. The external stonework of the building is carved with geometric designs, likely influenced by the Renaissance Revival architecture popular in Europe in the late nineteenth century.

It stands out from earlier buildings on the street for its *udatsu* firewalls at the front of the building. These stone walls, capped with roof tiles, were designed to prevent fire from spreading from one property to the next in cities where buildings were built close together. The firewalls were adopted by property owners on Sakaimachi Street following a fire in 1902 that destroyed many commercial buildings in the area.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧北海雑穀(株)

北海雑穀株式会社は、1907年に堺町通りにて開業し、1931年に廃業するまで、雑穀やその他

の小穀物の委託販売や取引を行っていました。建物は2022年に元の状態に修復されて硝子ギャラリーとして再利用され、現在はガラス工芸品のワークショップを開催しています。

この2階建ての建物は小樽の活気ある堺町商店街の角に建っており、和式と洋式を融合した建築様式となっています。その形状は江戸時代（1603年-1867年）の典型的な木造の商家に似ていますが、火山岩でおおわれています。外装の石細工は、彫刻された幾何学模様を特徴としており、おそらく20世紀の終わりにヨーロッパで人気のあったルネッサンス・リバイバル建築の影響を受けていると思われます。

建物の正面に上げられている「うだつ」（防火壁）があるため、この通りにあるこれより古い建物よりも目立っています。上部を瓦で覆われているこの石の壁は、建物が密集して建てられている町で火災が起きた時に隣まで燃え広がらないよう造られたものです。この防火壁は、このあたりの数多くの商業建物を壊滅させた1902年の火災の後、堺町通りの土地建物の所有者に取り入れられました。

001-036

Former Otaru Chamber of Commerce and Industry

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧小樽商工会議所 / 旧小樽商工会議所

【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

Former Otaru Chamber of Commerce and Industry

This former office of the Otaru Chamber of Commerce and Industry was built in Art Deco style in 1933. The facade of the three-story reinforced concrete building is covered in carved Chitose stone from Komatsu in Ishikawa Prefecture, prized for its golden color. The portico entrance is covered with white marble from Tosa (present-day Kochi Prefecture, on the island of Shikoku) and trimmed with patterned copper. The quality of materials and the workmanship of the details reflects Otaru's economic vigor at the time. The building is now part of a hotel.

Local merchants and business people established a Chamber of Commerce in 1895 to represent their interests as the volume of trade through Otaru increased in the late nineteenth century. They celebrated the new association with a banquet for over 200 guests at Kaiyotei restaurant in 1897. Chamber of Commerce members petitioned the local and national governments on issues including taxes on commercial buildings, relocating railway lines, adding new roads and sea routes, and opening trade with Russia and China. They also worked to attract new schools and financial institutions to Otaru.

The Otaru Chamber of Commerce and Industry used the building until 2009, when they moved to a more modern office. It was later sold to the OMO5 Hotel and renovated as a restaurant and lounge, keeping some of the original fittings and furnishings.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧小樽商工会議所

1933年、アールデコ様式で小樽商工会議所の旧事務所が建てられました。鉄筋コンクリート造り3階建ての建物の正面には、その黄金色のために珍重される石川県小松から取り寄せた千歳石に彫刻が施されたものが並んでいます。また、柱廊のある入り口は、土佐（現在の四国高知県）から取り寄せた白い大理石で覆われ、模様をついた銅で縁取られています。細部の金属や加工の質が、当時の小樽の経済力を反映しています。現在、この建物はホテルの一部になっています。

19世紀の終わりに小樽を経由した貿易取引高が増加すると、地元の商人や実業家は、自分たちの権益を表そうと、1895年に商工会議所を設立しました。1897年、彼らは魁陽亭に200人以上の招待客を招いて祝宴を開き、この新しい協会を祝いました。商工会議所の会員は、商業建物に課される税金、鉄道路線の移転、道路や航路の新設、ロシアや中国との貿易の自由化などの問題について、地元自治体や日本政府に嘆願しました。彼らはまた、小樽への新たな学校や金融機関の誘致にも取り組みました。

小樽商工会議所は2009年にもっと近代的な事務所に移るまでこの建物を使用していました。その後、この建物はOMO5ホテルに売却されレストランやラウンジに改修されましたが、元々あった建具や備え付け家具のいくつかは現在も残っています。

001-037

JR Otaru Station: The Gateway to the Port City

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 JR小樽駅本屋およびプラットホーム /
JR小樽駅本屋およびプラットホーム
【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

JR Otaru Station: The Gateway to the Port City

Visitors arriving in Otaru by rail can see the harbor as soon as they come out of the Otaru Station building. Chuo Street runs downhill from the station to the water, and when strong westerly winds blow in winter, waves running along the breakwaters are visible from the front of the station building. Passengers arriving at Otaru Station in the early twentieth century would have seen dozens of sailing ships and steamships moored in the harbor, with barges ferrying goods and passengers to shore.

New connections

Otaru Station opened in 1903 and the line to Hakodate, Hokkaido's southernmost city, opened a year later. Before Otaru Station was built, Minami-Otaru Station was the city's main station and connected to the coal-loading pier in the northern part of Otaru Port.

A modern station for a growing city

The current station building is made of steel-framed reinforced concrete and was completed in 1934. The symmetrical Art Deco design of the entrance hall is typical of large station buildings at the time.

A brass bell in front of the station entrance was rung to announce the imminent arrival of each train, a tradition that continued until around 1965. There is still a bell in front of the station, and it is a popular spot for taking photographs. Anyone is free to ring the bell.

Illuminating the entrance hall

Natural light floods the entrance hall through six tall windows along the front of the building, supplemented by the light of 333 glass lanterns donated by local glass company Kitaichi Glass. Although they are powered by electricity today, they resemble the original hand-blown glass oil lamps that the company began making in 1901.

Memories on Platform 4

Platform 4 looks much as it did in 1903, apart from some modifications made in 1934 and recent additions such as an escalator and additional lighting. The original steel beams used for the roof frames and support pillars along the platforms were imported from overseas. One of the pillars on Platform 4 is inscribed with the name “BV & Co Ltd” and the date 1902. It was sourced from Bolckow, Vaughan & Co., Ltd in Yorkshire, England, one of the world’s biggest steel producers at the time.

At the north end of the platform, a framed life-size image of popular actor Ishihara Yujiro (1934–1987) commemorates his visit to Otaru to film a long-running television drama. Although born in Kobe, he spent some of his childhood in Otaru and often returned to visit. In the image, taken in 1978, he stands on Platform 4, known locally as “Yujiro’s Platform.”

上記解説文の仮訳（日本語訳）

JR小樽駅本屋およびプラットホーム

鉄道を使って小樽にやって来ると、小樽駅から出たすぐ目の前に港が見えます。小樽駅から伸びている中央通りは海に向かって下り坂で、冬になると駅舎の前から強い西風に煽られて防波堤沿いに波が打ち寄せているのが見えます。20世紀初めには、小樽駅に降り立つと、数十隻の帆前船や汽船が港に停泊し、舳が岸まで荷物や乗客を運んでいるのが見えていました。

新しい接続

小樽駅は1903年に開業し、翌年には北海道最南端の町である函館までの路線が開通しました。小樽駅が建設される前までは南小樽駅がこの町の主要駅であり、小樽港北側にある石炭積み下ろし用ドックとつながっていました。

成長を遂げた町の近代的な駅

現在の駅舎は鉄筋コンクリート造りで、1934年に完成しました。左右対称に配置された入り口ホールのアールデコ風デザインは当時の大きな駅舎でよく使われていました。

小樽駅の入り口正面にある真鍮製の鐘を鳴らし、列車が入ってくるのを知らせていました。この慣例は1965年ごろまで続きました。現在も小樽駅の正面には鐘があり、人気の写真撮影スポットとなっています。誰でもこの鐘を鳴らすことができます。

入り口ホールを照らす

駅舎正面にある背の高い6つの窓から差し込む自然光と、地元のガラスメーカーである北一硝子により寄贈された333個のガラス製ランタンが相まって、入り口ホールは光で溢れています。現在は、これらランタンには電力が供給されていますが、北一硝子が1901年に作製を始めた初代の手吹きガラスのオイルランプに似せてあります。

4番ホームの思い出

4番ホームは1934年に行われた改造や、エスカレーターや追加の照明などの最近の増設を除けば、1903年当時の姿とほとんど変わっていません。1903年当時プラットホームに取り付けられていた屋根組や支柱に使用されていた元の鉄骨梁は、海外から輸入されたものでした。4番ホームにある支柱の1つには、「BV & Co Ltd」の社名と1902年という日付が刻まれています。これは、イギリスのヨークシャーにあるボルコウ・ヴォーン株式会社から調達した原物です。ボルコウ・ヴォーン株式会社は、当時世界最大の鉄鋼メーカーの1つでした。

4番ホームの北の端に人気俳優石原裕次郎（1934年-1987年）が長期テレビドラマの撮影のために小樽を訪れたのを記念して、額装された等身大パネルが置かれています。石原裕次郎は神戸で生まれましたが、幼少期の数年を小樽で過ごし、その後、頻繁に小樽を訪れていました。石原裕次郎は、1978年に撮影されたこのパネルの中で4番ホームに立っており、この4番ホームは、地元では「裕次郎ホーム」として知られています。

001-038

JR Otaru Station: The Gateway to the Port City

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 JR小樽駅本屋およびプラットホーム /
JR小樽駅本屋およびプラットホーム
【想定媒体】 アプリQRコード / パンフレット

できあがった英語解説文

JR Otaru Station: The Gateway to the Port City

Otaru Station opened in 1903 and the line to Hakodate, Hokkaido's southernmost city, opened a year later. Passengers arriving at Otaru in the early twentieth century would have seen dozens of sailing ships and steamships moored in the harbor, with barges ferrying goods to the shore.

The current station building is made of steel-framed reinforced concrete and was completed in 1934. The symmetrical Art Deco design of the entrance hall is typical of large station buildings at the time.

Natural light floods the entrance hall through six tall windows along the front of the building, supplemented by the light of 333 glass lanterns donated by local glass company Kitaichi Glass. Although they are powered by electricity today, they resemble the original hand-blown glass oil lamps that the company began making in 1901.

Platform 4 looks much as it did in 1903, apart from some modifications made in 1934 and recent additions such as an escalator and additional lighting. At the north end of the platform, a framed life-size image of popular actor Ishihara Yujiro (1934–1987) commemorates his visit to Otaru to film a long-running television drama. Although born in Kobe, he spent some of his childhood in Otaru and often returned to visit. In the image, taken in 1978, he stands on Platform 4, known locally as “Yujiro’s Platform.”

上記解説文の仮訳（日本語訳）

JR小樽駅本屋およびプラットホーム

小樽駅は1903年に開業し、翌年には北海道最南端の町である函館までの路線が開通しました。20世紀初めには、小樽駅に降り立つと、数十隻の帆前船や汽船が港に停泊し、舳が岸まで荷物や乗客を運んでいるのが見えていました。

現在の駅舎は鉄筋コンクリート造りで、1934年に完成しました。左右対称に配置された入り口ホールのアールデコ風デザインは当時の大きな駅舎によく使われていました。

駅舎正面にある背の高い6つの窓から差し込む自然光と、地元のガラスメーカーである北一硝子により寄贈された333個のガラス製ランタンが相まって、入り口ホールは光で溢れています。現在は、これらランタンには電力が供給されていますが、北一硝子が1901年に作製を始めた初代の手吹きガラスのオイルランプに似せてあります。

4番ホームは1934年に行われた改造や、エスカレーターや追加の照明などの最近の増設を除けば、1903年当時の姿とほとんど変わっていません。4番ホームの北の端に人気俳優石原裕次郎（1934年-1987年）が長期テレビドラマの撮影のために小樽を訪れたのを記念して、額装された等身大パネルが置かれています。石原裕次郎は神戸で生まれましたが、幼少期の数年を小樽で過ごし、その後、頻繁に小樽を訪れていました。石原裕次郎は1978年に撮影されたこのパネルの中で4番ホームに立っており、この4番ホームは、地元では「裕次郎ホーム」として知られています。

001-039

Restaurants and Hotels in Otaru's Golden Age

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 繁栄期の料亭、ホテル建築群 /

繁栄期の料亭、ホテル建築群

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Restaurants and Hotels in Otaru's Golden Age

From the late nineteenth to early twentieth century, Hokkaido's most opulent restaurants and hotels were in Otaru. Starting as a fishing village in 1865, Otaru grew rapidly to a bustling port town of around 60,000 by the turn of the century.

By the end of the nineteenth century, the annual herring catch in Otaru was close to 90,000 tons. The abundance of herring made fishermen and traders wealthy and brought an influx of fortune seekers looking to make the most of the “herring gold rush.” Most of the herring was made into fertilizer and was in demand for the production of cotton and indigo grown in southwestern Honshu.

New wealth and leisure

Newly wealthy families built mansions in Otaru, importing the finest furnishings, fashions, and building materials from Kyoto and ports along the Sea of Japan coast. Restaurants and fine art stores catered to the rich, and inns and hotels opened to accommodate merchants from the mainland and abroad.

Lavish entertainments

High-class restaurants opened to entertain wealthy merchants, fishermen, politicians, and celebrities. They featured windows set with imported glass, gaslit chandeliers, decorative features carved from exotic woods, and large banquet halls and performance spaces for dance and music recitals. During the Taisho era (1912–1926) some 600 geisha entertained Otaru's wealthy citizens at these exclusive establishments. As the economy slowed in the mid-twentieth century, most of the restaurants closed

down and merchant families moved away. The few restaurants that remain, including the Kaiyotei and Kotei, are closed for restoration or have been repurposed as private facilities.

The Kaiyotei opened near Sakaimachi Street between 1885 and 1890, hosting merchants, politicians, and celebrities until it closed in 2015. The restaurant expanded in the Taisho era, and the current structure consists of three connected wings built at different time periods. The Kotei was a branch of a popular restaurant in Tokyo's Shinjuku district that opened in Otaru in the wealthy Shinonome-cho neighborhood in 1937. Otaru's Kotei accepted guests only by introduction and provided the services of geisha. It had tatami-floored banquet rooms and a cypress-floored stage for dance and music performances. Until the 1950s, there were at least five such restaurants in Shinonome-cho.

Luxurious accommodations

With the influx of merchants and foreign traders in the late nineteenth century and early twentieth century, inns opened around the waterfront and near train stations in the city. The Etchuya Hotel, which today operates as the Unwind Hotel, was Otaru's first European-style hotel. It was built in 1931 to accommodate the growing number of overseas traders and merchants coming to Otaru. The hotel was an annex of the nearby Etchuya Ryokan, a traditional inn founded in 1877. Although the inn had appeared in English-language guidebooks since the early 1900s, the owners thought a modern luxury hotel would be more appealing to international guests.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

繁栄期の料亭、ホテル建築群

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、北海道で最も豪華なレストランやホテルは小樽にありました。1865 年に漁村として始まった小樽は世紀の変わり目までに人口約 6 万人の賑やかな港町へと急速に成長しました。

19 世紀末までに小樽のニシン年間漁獲量は 9 万トン近くに達しました。ニシンが豊富に採れたことで漁師や商人は裕福になり、「ニシンのゴールドラッシュ」の恩恵にあずかろうと富を求める人々が町に殺到しました。ニシンの大部分は肥料に加工され、本州南西部で育つ綿花や藍の生産に必要

とされました。

新たな富と余暇

新興の裕福な家族は京都や日本海沿岸の港から最高級の家具、ファッション、建築資材を輸入して、小樽に邸宅を建てました。小樽には富裕層向けのレストランや美術店が作られ、国内外からの商人を受け入れる旅館やホテルもオープンしました。

豪華なエンターテインメント

豪商、漁師、政治家、著名人をもてなすために高級レストランがオープンしました。輸入ガラスがはめ込まれた窓、ガス灯シャンデリア、エキゾチックな木から彫られた装飾品、そしてダンスや音楽リサイタルのための大きな宴会ホールやパフォーマンススペースが特徴でした。大正時代（1912年-1926年）には、約600人の芸妓がこれらの高級店で小樽の裕福な市民を楽しませていました。20世紀半ばに経済が減速したためほとんどのレストランが閉店し、商家が移転しました。魁陽亭や光亭などいくつか残っている施設は改修のため閉鎖されているか、民間の施設として再利用されています。

魁陽亭は1885年から1890年にかけて堺町通り近くにオープンし、2015年に閉店するまで商人、政治家、著名人をもてなしました。レストランは大正時代に拡張され、現在の建物は異なる時期に建てられた3つの棟がつながった構成になっています。光亭は東京の新宿区にある人気料亭の支店で1937年に小樽の裕福な地区である東雲町にオープンしました。小樽の光亭は一見さんお断りで、芸妓のサービスを提供していました。畳敷きの宴会場とダンスや音楽のパフォーマンスが行われる檜敷きステージがありました。1950年代まで東雲町にはこのようなレストランが少なくとも5軒ありました。

豪華な宿泊施設

19世紀末と20世紀初頭に商人や外国貿易商が流入すると、ウォーターフロントや駅近くに旅館がオープンしました。現在アンワインドホテルとして営業している越中屋ホテルは小樽初の欧風ホテルです。小樽に来る海外貿易商や商人の増加に対応するために1931年に建設されました。このホテルは近くにある1877年創業の伝統的な旅館、越中屋旅館の別館でした。この越中屋旅館は1900年代初頭から英語のガイドブックに掲載されていましたが、オーナーはモダンで豪華なホテルの方が海外からのゲストにとって魅力的だと考えていました。

001-040

Restaurants and Hotels in Otaru's Golden Age

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 繁栄期の料亭、ホテル建築群 /
繁栄期の料亭、ホテル建築群
【想定媒体】 アプリQRコード / パンフレット

できあがった英語解説文

Restaurants and Hotels in Otaru's Golden Age

From the late nineteenth to early twentieth century, Hokkaido's most luxurious restaurants and hotels were in Otaru. They served wealthy fishermen and merchants who had made their fortunes from the abundant shoals of herring that came to spawn off the coast of Otaru each spring.

By the end of the nineteenth century, the annual herring catch was close to 90,000 tons, and the "herring gold rush" brought an influx of workers, merchants, and fortune-seekers to the city. Most of the herring was made into fertilizer and shipped to the cotton and indigo fields in southwestern Honshu.

Restaurants and fine art stores catered to Otaru's wealthy residents, and inns and hotels opened to accommodate merchants from the mainland and abroad. During the Taisho era (1912–1926), some 600 geisha entertained guests at Otaru's exclusive *ryotei* restaurants. Most of these restaurants were demolished as the economy slowed in the mid-twentieth century. A few remain, including the Kaiyotei and the Kotei, but are closed to the public.

The Etchuya Hotel, which today operates as the Unwind Hotel, was Otaru's first European-style hotel. It was built in 1931 to accommodate the growing number of overseas traders and merchants coming to Otaru. The hotel was an annex of the nearby Etchuya Ryokan, whose owners thought a modern luxury hotel would be more appealing to international guests.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

繁栄期の料亭、ホテル建築群

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて北海道で最も豪華なレストランやホテルは小樽にありました。毎年春に小樽沖に産卵するニシンの大群から富を築いた裕福な漁師や商人をもてなしていました。

19 世紀末までにニシンの年間漁獲量は 9 万 トン近くに達し、「ニシンのゴールドラッシュ」により労働者、商人、富を求める人々がこの都市に流入しました。ニシンの大部分は肥料に加工され、本州南西部の綿花畑や藍畑に出荷されました。

小樽の新興富裕層向けのレストランや美術店、本州や海外からの承認をもてなす旅館やホテルがオープンしました。大正時代（1912年-1926年）には約600人の芸妓がおり、小樽の高級料亭で客をもてなしていました。これらのレストランのほとんどは20 世紀半ばの経済低迷に伴って取り壊されました。魁陽亭や光亭などいくつかが残っていますが非公開となっています。

現在アンワインドホテルとして営業している越中屋ホテルは小樽初の欧風ホテルです。小樽に来る海外貿易商や商人の増加に対応するために1931 年に建設されました。このホテルは近くにある越中屋旅館の別館で、オーナーはモダンで豪華なホテルの方が海外からのゲストにとってより魅力的だと考えました。

001-041

Former Kotei Restaurant

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧光亭 / 旧光亭

【想定媒体】アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Kotei Restaurant

The steep streets of the Shinonome-cho district were once lined with the homes of Otaru's wealthy merchants. The Kotei Restaurant opened there in 1937 as a traditional place of entertainment that accepted guests only by introduction and provided the services of geisha. Such restaurants were typically used for important private business or political meetings. A series of interconnected two-story buildings provided separate dining areas and performance spaces.

The Kotei was a branch of a restaurant in Tokyo's Shinjuku district. It was built in *sukiya-zukuri* style with interior decoration based on the simple aesthetics of tea ceremony rooms. The central building has a tea room on the first floor and a large tatami-floored hall above for hosting parties. Adjoining the hall is a room with a cypress-floored stage for dance and music performances. Until the 1950s, there were at least five such restaurants in the area, and the sounds of shamisen and koto music were said to fill the air.

In the postwar years, Otaru's importance as a trade port faded. Oil replaced coal as Japan's main source of energy, and herring fishing, which had built the fortunes of many merchants and shipowners, collapsed due to overfishing. The Kotei was repurposed in 1957 as a private villa, and its architectural features have been preserved. The building is not open to the public.

上記解説文の訳（日本語訳）

旧光亭

急な坂の多い東雲町地区はかつて、小樽の豪商たちの倉庫が立ち並んでいました。光亭は、紹介のある客だけが入れて芸者遊びができる遊興の場として1937年にこの地区で創業しました。こうした料亭は通常、重要な商談や政治的な会合に利用されていました。何棟かの二階建ての建物が連なって中で行き来できるようになっており、食事ができる個室や演舞場も備わっていました。

光亭は、東京の新宿地区にある料亭の支店でした。「数寄屋造り」という様式で建てられており、茶室の質素な美意識に基づいた内装が施されていました。中央の棟の1階には茶室、2階には大人数が入れる畳敷きの大広間があります。また、大広間には踊りや音楽用の檜床の舞台を備えた部屋が隣接しています。1950年代までこの地区には同じような料亭が少なくとも5軒あり、三味線や琴の音が響いていたと言います。

戦後になると貿易港としての小樽の重要度は低下しました。日本の主要なエネルギー源だった石炭は石油に取って代われ、多くの商人や船主に富をもたらしていたニシン漁は乱獲のため衰退しました。光亭は1957年に個人の別荘に生まれ変わりましたが、建築物としての特徴は今も保存されています。現在、一般には公開されていません。

001-042

Former Kaiyotei Restaurant

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧魁陽亭 / 旧魁陽亭

【想定媒体】アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Kaiyotei Restaurant

The Kaiyotei hosted wealthy merchants, politicians, and celebrities for almost 150 years. The restaurant is believed to have opened in its present location near Sakaimachi Street between 1885 and 1890. The restaurant was expanded in the Taisho era (1912–1926), and the current structure consists of three connected wings built at different times. The banquet hall of the central building is the oldest part of the property and was likely rebuilt after a fire in 1894.

The Kaiyotei reflected Otaru’s changing fortunes as a commercial port. Its first patrons were newly wealthy merchant shipowners and fishermen enjoying their riches from the herring trade. Some existing features reflect the prosperity of Otaru in the early twentieth century, including windows set with imported glass, gaslit chandeliers, and decorative pillars made of palm wood. One of the large banquet rooms was remodeled after World War II for use as a club for the Occupation Forces. The restaurant remained in business until 2015. The Kaiyotei is currently not open to the public.

上記解説文の訳（日本語訳）

旧魁陽亭

魁陽亭は、ほぼ150年にわたり豪商や政治家、著名人をもてなしてきました。1885年から1890年の間に境町通り近くの現在の場所で創業したとされています。この料亭は大正時代（1912年-1926年）に増築されて、現在は異なる時代に建てられた3つの翼部がつながった構造になっています。中央建物の宴会場は当文化遺産の最も古い部分で、1894年の火災後に再建されたようです。

魁陽亭は、小樽の商港としての栄華盛衰を反映していました。創業当初のひいき客は、新たに富裕層となった商船主やニシン漁で富をなした漁師でした。今も残っている輸入ガラスをはめ込んだ窓やガス灯のシャンデリア、ヤシの木製の飾り柱といったものからは、20世紀初頭の小樽の繁栄ぶりがうかがえます。大宴会場の1つは第二次世界大戦後に進駐軍の社交場として利用するよう改築されました。料亭としては2015年まで営業していました。魁陽亭は現在、一般には公開されていません。

001-043

Former Etchuya Hotel

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧越中屋ホテル / 旧越中屋ホテル

【想定媒体】アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Etchuya Hotel

The Etchuya Hotel was Otaru's first hotel built in European architectural style. It was completed in 1931 to accommodate the growing number of overseas traders and merchants coming to Otaru. In the early twentieth century, Otaru was the most prosperous city in Hokkaido. When war broke out in Western Europe in 1914, grain, beans, sulfur, and other commodities were shipped from Otaru to Europe, and this international trade contributed to a building boom of banks, hotels, and restaurants.

The hotel was an annex of the Etchuya Ryokan, a traditional inn founded in 1877. Although the inn had appeared in English-language guidebooks since the early 1900s, the owners thought a modern luxury hotel would be more appealing to international guests. After visiting European-style hotels in Kobe and Yokohama, they commissioned a four-story building in Art Deco style, distinguished by two columns of bay windows down the center of the facade. The triangle motif of the Etchuya Ryokan is repeated in stained glass windows and carved on the stone lintel above the main entrance.

Ten years after it opened, the Etchuya Hotel was requisitioned by the Japanese army as an officers' club, then, at the end of World War II, it was taken over by U.S. forces for accommodations. After the American occupation ended in 1952, the building served as a company dormitory for a time before it was reopened in 2019 as the Unwind Hotel. Many of the original features have been preserved, including the front facade and some of the stained-glass windows. The Etchuya Ryokan is still in business, on the same block.

上記解説文の訳（日本語訳）

旧越中屋ホテル

越中屋ホテルは、小樽で初めてヨーロッパ建築様式で建てられたホテルでした。増加を続ける海外から小樽にやって来る貿易商や商人が宿泊する施設として1931年に完成しました。20世紀初頭、小樽は北海道で最も繁栄している都市でした。1914年に西ヨーロッパで戦争が勃発すると、小樽からヨーロッパへ向けて穀物・豆类・硫黄などの物品が出荷されるようになり、この国際貿易の波に乗る形で銀行や宿泊施設、料亭の建設ブームが訪れました。

越中屋ホテルは、1877年創業の伝統的な旅館の越中屋旅館の別館でした。この旅館は1900年代初頭から英語のガイドブックにも掲載されていましたが、旅館経営者らはモダンで豪華なホテルであれば外国の宿泊客にもよりアピールできると考えました。神戸や横浜にあるヨーロッパ式ホテルを視察した後、旅館経営者らは、建物正面の中央の下の出窓のある2本の柱が特徴的な、アールデコ様式の4階建てホテルを発注しました。越中屋旅館の三角のモチーフがステンドグラスの窓に繰り返しあしらわれており、正面玄関の上にあるまぐさ石にも彫り込まれています。

創業から10年経った時、越中屋ホテルは日本軍に将校の社交場として徴発され、その後、第二次世界大戦の終わりに宿泊施設としてアメリカ軍に収用されました。1952年にアメリカによる占領が終わると、ホテルの建物は一時社員寮として使用された後、2019年にアンワインドホテルとして再開しました。建物正面やいくつかのステンドグラスの窓など、創業当時の特徴を数多くとどめています。越中屋旅館は現在も、同じ場所で営業しています。

001-044

Otaru Canal

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】小樽運河 / 小樽運河

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Otaru Canal

A paved walkway and gas lamps line the historic Otaru Canal. Warehouses that were built to serve the trading port in the early twentieth century now house restaurants, stores, and museums. This scenic corner of the city was made possible through dedicated local efforts going back to the 1960s.

The canal is the result of a nine-year project started in 1914 to ease the transfer of goods between the cargo ships anchored in the bay and the warehouses along the shore. Plans to fill in the canal to make new roads in the 1960s led to a grassroots effort to preserve Otaru's cultural heritage.

A thriving frontier port

During the Meiji era (1868–1912), the port city grew rapidly through trade, the booming herring industry, and migration. The annual herring catch in the waters around Otaru had reached around 90,000 tons by the late 1880s. The port was crowded with merchant ships bringing goods and provisions from Osaka and along the coast of the Sea of Japan, then returning south laden with fertilizer made from herring. Many settlers from Honshu and other parts of the country passed through Otaru under a government scheme that offered land grants and financial assistance. Hokkaido's first train line opened in 1880 to transport coal from the inland Horonai Coal Mine to Otaru's port area to be shipped across the country to fuel Japan's industrialization.

Building the canal

By the early twentieth century, Otaru was the largest commercial port in northern

Japan. The port had become congested and was running out of mooring space for the barges that transferred goods and passengers from ship to shore. The solution was to reclaim a string of narrow islands running parallel to the shore. That reclamation project ran from 1914 to 1923 and created a 40-meter-wide waterway between the islands and the shore. New warehouses were built on the islands, which stretched about 1.3 kilometers and were connected to the mainland by a series of bridges. The waterway provided warehouse access and additional mooring space for the barges. It later became known as the Otaru Canal.

Changing fortunes

Large cargo ships gradually replaced wooden sailing ships, and in 1937, a new wharf allowed steamships to dock and unload without using barges, greatly diminishing the role of the canal. Around the same time, the main source for the nation's energy needs shifted from coal to oil, and Otaru's position as a key port for Hokkaido faded into history. The canal became a graveyard for disused barges.

Symbol of Otaru renewal

In 1966, the local government proposed reclaiming the canal and demolishing the warehouses to build a three-lane road and modernize the city. However, a group of residents organized a movement in 1973 to save the canal and the historic townscape. Grassroots preservation movements were unusual in Japan, and the residents' efforts to clean the canal and campaign for alternative solutions gained national attention. In the 1980s, the campaigners reached a compromise with the government. Part of the canal was reclaimed to make a new road, and other sections were reduced to widen an existing road. A paved walkway and gas lamps were installed along the canal and the warehouses were restored to serve as restaurants, stores, and museums. The north side of Otaru Canal remains much as it was, lined with small fishing vessels and cruise boats in place of the barges that once helped build the city's fortunes.

上記解説文の訳（日本語訳）

小樽運河

舗装された歩道とガス灯が歴史ある小樽運河に並んでいます。20世紀初頭、貿易港の需要を満たすためにたてられた倉庫が今ではレストランや店舗、博物館を収容しています。景色の良いこの

街角は1960年代に遡る地元住民のひたむきな努力によって実現しました。

この運河は湾に停泊する貨物船と海岸に沿って立ち並ぶ倉庫の間での商品の運搬を容易にするために、1914年に始まった9か年運河建設事業の成果です。1960年代に新しい道路を作るために運河を埋め立てる計画が持ち上がると、小樽の文化遺産を保全しようという草の根運動に繋がりました。

繁栄する国境の港

明治時代（1868年-1912年）にこの港町は貿易と好景気のニシン漁産業、そして移民により急成長しました。1880年代末には小樽近海のニシンの年間漁獲高が約9万トンに達しました。大阪や日本海沿岸から品物や食料を積んできてその後ニシンから作った肥料を積んで南へと戻っていく商船で港が混雑しました。内陸の幌内炭鉱から小樽港エリアまで石炭を運搬するため1880年に北海道初の鉄道が開設され、全国に出荷された石炭が日本の工業化を支えました。

運河の建設

20世紀初頭までに、小樽は北日本最大の商港となっていました。港が混雑するようになり、船から岸まで荷物や乗客を運ぶ舢舨を停泊させるスペースが不足するようになりました。これを解決するために海岸に平行に走る狭い島々の一列を埋め立てることにしました。1914年から1923年にかけて、埋め立てプロジェクトが実施され、幅40メートルの水路が作られました。新しい倉庫がその島々に建てられましたが、それが延長1.3キロメートルほどに達したので、倉庫と本土との間にいくつも橋が架けられました。水路ができたことで倉庫に船を乗り付けることができるとともに、舢舨を停泊させるスペースに余裕ができました。この水路が後に小樽運河として知られるようになりました。

運命の変化

木造の帆船は次第に巨大な貨物船に置き換わり、1937年に新たな栈橋が完成して舢舨を使わずに蒸気船が着岸して積荷を下せるようになったため、運河の役割は大幅に減少しました。ほぼ同時期に、この国のエネルギー需要の主流が石炭から石油に代わり、北海道の主要港としての小樽の地位は歴史の中に消えていきました。そして、運河は使われなくなった舢舨の廃棄場となりました。

小樽再生のシンボル

1966年に地元自治体が、3車線道路を敷設して町を近代化するために運河を埋め立てて倉庫群を取り壊すことを提案しました。しかし、1973年に住民団体が運河と歴史的都市景観を保全するための運動を組織しました。草の根の保護運動は日本ではまだ珍しかったので、運河をきれいにして代替案を求める運動を起こした住民たちの取り組みは全国的な注目を集めました。1980年代に保護運動は自治体との間に妥協点を見出すに至りました。運河の一部は新しい道路を造るために埋め立てて、他の部分は既存の道路を拡幅するにとどめることになりました。運河沿いには舗装された歩道とガス灯が設置されて、倉庫群はレストランや店舗、博物館として利用するために改修されました。小樽運河の北側は昔の面影を色濃く残しており、かつて町の富を築くのに一役買

った舳に代わって小型の釣り船やクルーズ船が並んでいます。

001-045

Otaru Canal

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】小樽運河 / 小樽運河

【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット

できあがった英語解説文

Otaru Canal

A paved walkway and gas lamps line this historic canal, and former warehouses now house restaurants, stores, and museums. Otaru Canal is both a reminder of the city's history as a vital trading port in the early twentieth century and a symbol of local preservation efforts.

In the early twentieth century, Otaru was the largest commercial port in northern Japan. Merchant ships brought goods and provisions from Honshu, then returned laden with herring caught near Otaru. Barges plied the bay, ferrying goods and passengers between the ships and shore. Coal was shipped across the country to fuel Japan's industrial growth, brought to Otaru via Hokkaido's first train line, opened in 1882.

As trade through the port increased, the shoreline became congested with barges. From 1914 to 1923, a string of narrow islands were reclaimed parallel to the shore, with a 40-meter-wide waterway between. The waterway provided additional mooring space for the barges and later became known as the Otaru Canal.

Eventually, large cargo ships replaced wooden sailing ships, and in 1937, a new wharf allowed ships to dock and unload without using barges. Around the same time, the main source for the nation's energy needs shifted from coal to oil, eroding Otaru's position as a major port. The canal fell into disuse.

When plans emerged to reclaim the canal and remove neighboring warehouses for

road expansion in 1966, local residents campaigned to save the area. After reaching a compromise in the 1980s, much of the canal and surrounding warehouses were restored. The north side of Otaru Canal remains much as it was, lined with small fishing vessels in place of the barges that once helped build the city's fortunes.

上記解説文の訳（日本語訳）

小樽運河

舗装された歩道とガス灯が歴史ある小樽運河に並び、以前は倉庫だった建物が今ではレストランや店舗、博物館を収容しています。小樽運河は20世紀初頭に活気ある貿易港だった町の歴史を思い出させるとともに、地元住民の保護活動のシンボルとなっています。

20世紀初頭、小樽は北日本最大の商港でした。商船は、本州から品物や食料を運んできて、小樽近海でとれたニシンを積んで戻って行きました。舢舨が湾内を行き来して、船と岸壁の間で品物や乗客を運びました。1882年に開通した北海道初の鉄道で小樽まで輸送された石炭が日本中に出荷されて日本の工業化の原動力となりました。

港を通る貿易の増加に伴い海岸は舢舨で混雑するようになりました。1914年から1923年にかけて、幅40メートルの水路を挟んで岸壁に平行に並ぶ幅の狭い島々の列が埋め立てられました。水路ができたことで舢舨が停泊するスペースに余裕ができ、後に小樽運河として知られるようになりました。

やがて木造の帆船は次第に巨大な貨物船に置き換わり、1937年に新たな埠頭が完成して舢舨を使わずに船が着岸して積荷を下せるようになりました。同じ頃、この国のエネルギー需要の主流が石炭から石油に代わり、主要港としての小樽の地位は損なわれていきました。そして、運河も使われなくなりました。

1966年に、道路拡張のため運河を埋め立てて隣接する倉庫群を撤去する計画が浮上すると、地元住民がこの地域を保護するため運動を起こしました。1980年代に和解に至った後、運河の大部分とその周りの倉庫群が改修されました。小樽運河の北側はほぼ昔のままで、かつてこの街が財を成すのを助けた舢舨の代わりに小型の釣り船が並んでいます。

001-046

The Okusawa Waterworks

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】奥沢水源地水道施設 / 奥沢水源地水道施設

【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

The Okusawa Waterworks

Improving the water supply of Otaru became critical as the city developed rapidly in the late nineteenth century. Otaru grew from a fishing village of around 2,000 people to a booming port city of some 90,000 by the late nineteenth century. The number of ships visiting the port also increased the demand for fresh water. In 1907, construction began on the Okusawa Waterworks, consisting of the Okusawa Dam, Okusawa Water Filtration Plant, and a stepped spillway on the Katsunai River in southeastern Otaru.

The waterworks is not open for tours, but visitors can stand on a bridge near the dam to watch overflow water cascade down the wide, stone steps of the spillway. Each step is shaped like a shallow basin to control the force and turbidity of the water. Long and short stones are laid alternately along the edge of each step to slow and direct the water, creating a draping effect. The stone steps and walls of the spillway were all laid by hand.

The city commissioned civil engineer and scholar Nakajima Eiji (1858–1925) to direct the construction of the dam and water purification plant. Nakajima studied sanitary engineering and water supply construction in the United States and Europe before working on water supply systems for the Imperial Palace in Tokyo. Most of the construction on the dam and spillway was done by hand and, because of the cold climate and heavy snow, it took almost seven years to complete.

上記解説文の訳（日本語訳）

奥沢水源地水道施設

19世紀後半に小樽が急成長を遂げるにつれて、小樽の水供給の改善が深刻な問題になりました。19世紀後半には2,000人ほどの漁村であった小樽が、約9万人の新興港町に成長しました。小樽港にやって来る船舶の数も、真水の需要を高めました。1907年、奥沢ダム、奥沢浄水場、小樽南東部を走る勝納川の階段式溢流路で構成される奥沢水源地水道施設の建設が始まりました。

奥沢水源地水道施設の見学ツアーは実施されていませんが、奥沢ダム近くの橋の上に立って越流水が放水路の幅の広い石階段を急降下するのを見ることができます。各段が浅い滝つぼのような形をしており、水の勢いや濁りをコントロールする役割をしています。各段の縁には長い石と短い石が交互に組み立てられており、水の勢いを和らげ、水の流れを導く役割をし、すだれ効果を生み出しています。溢流路の石階段と壁はすべて手作業で組み立てられました。

小樽市は、土木技師で学者でもある中島鋭治教授（1858年-1925年）に奥沢ダムと奥沢浄水場の建設の指揮を委託しました。中島教授はアメリカとヨーロッパで衛生工学や給水設備工事について学び、その後、東京にある皇居の給水施設に取り組みました。奥沢ダムや溢流路の工事のほとんどは手作業で行われ、寒冷な気候や豪雪のため、完成までにおおよそ7年かかりました。

001-047

Warehouses along Otaru Canal

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 運河完成後の倉庫群 / 運河完成後の倉庫群
【想定媒体】 アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

Warehouses along Otaru Canal

The warehouses lining Otaru Canal form some of the most iconic views of the city. They were built on reclaimed land after the canal was completed in 1923. At that time, the warehouses opened to the canal on one side, allowing convenient access for loading and unloading cargo.

During World War I (1914–1918), the port was used for grain exports from Hokkaido to Europe, and Otaru’s warehousing industry expanded rapidly. The former Naniwa Warehouse located at the south end of the canal is one of the largest remaining warehouses in Otaru. The timber-framed stone structure was built in 1925. In 2022, it was repurposed as the House of Western Art, part of Otaru Art Base, five historical buildings that are open to the public as museums and art galleries.

The former Shinoda Warehouse (now a restaurant) is one of few brick buildings along the canal. It was completed in 1925 and used to store grain and imported goods. The Shibusawa Warehouse next door was built the same year. The Shibusawa-soko-bu (later named Shibusawa Warehouse Company) already owned several warehouses in Tokyo and expanded into Otaru in 1915. The walls of several warehouses along the canal are marked with the company’s logo, known as the *ryugo*, or “standing drum.”

Many warehouses stood empty in the 1960s and 1970s during Otaru’s economic downturn. However, with the efforts of the Otaru Canal Preservation Association, the canal and surrounding historical area were revived in the 1980s as a popular

sightseeing destination. Many of the warehouses were renovated and repurposed as restaurants, shops, and museums.

上記解説文の訳（日本語訳）

運河完成後の倉庫群

小樽運河沿いに並んだ倉庫群は、小樽の最も象徴的な眺めのいくつかを形成しています。これらの倉庫群は、1923年に小樽運河が完成した後、埋め立て地に建てられたものです。当時、これらの倉庫群は片側に小樽運河側開口部があり、荷物の揚げ降ろしに便利でした。

第一次世界大戦（1914年-1918年）中、小樽港は北海道からヨーロッパへの穀物輸出に使用され、小樽の倉庫業は急速に拡大しました。小樽運河の南端にあった旧浪華倉庫は、現存している小樽最大の倉庫のうちの1つです。この木骨石造り倉庫は1925年に建てられました。2022年、この建物は5つの歴史的建造物から成る小樽芸術村の一部、西洋美術館として再利用されることになりました。

旧篠田倉庫（現在はレストラン）は、小樽運河沿いでは数少ない煉瓦造り建造物のうちの1つです。この倉庫は1925年に完成し、穀物や輸入品の保管に使用されていました。隣の澁澤倉庫も同年に建てられました。澁澤倉庫部（のちに澁澤株式会社と命名）は、この時すでに東京に数棟の倉庫を所有しており、1915年に小樽に進出しました。運河沿いのさらに数棟の倉庫の壁には、「りうご（立鼓）」として知られる会社のロゴが記されています。

小樽の経済的衰退が見えた1960年代、1970年代には、多くの倉庫がもぬけの殻となりました。しかし、小樽運河を守る会の努力により小樽運河とその周辺の歴史的エリアは、1980年代、人気観光地として復活しました。倉庫群の多くは改修され、レストラン、小売店、美術館として再利用されることになりました。

001-048

Former Naniwa Warehouse

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧浪華倉庫 / 旧浪華倉庫

【想定媒体】アプリQRコード / WEB

できあがった英語解説文

Former Naniwa Warehouse

The Naniwa Warehouse is located at the south end of Otaru Canal and is one of the largest remaining warehouses in Otaru. The timber-framed stone structure was built in 1925, with over 2,644 square meters of open-plan space; it opened onto the canal for convenient loading and unloading.

In 2022, the building was repurposed as the House of Western Art. It is part of Otaru Art Base, five historical buildings that are open to the public as museums and art galleries. The museum's collection dates from Otaru's heyday, featuring stained glass windows, Art Nouveau and Art Deco glassware, furniture, porcelain, and other Western art objects produced in Europe and the United States from the late nineteenth to the early twentieth century.

Five rooms over two floors include collections of glass from well-known French artists, including Emile Gallé (1846–1904), August Daum (1853–1909), Antonin Daum (1864–1930), and René Lalique (1860–1945). One room is dedicated to ornate porcelain vases and figurines from German manufacturer Meissen. In the largest room, collections of furniture in Victorian, Art Nouveau, and Art Deco styles are arranged in room sets.

The warehouse was built by Naniwa, one of several warehouse companies founded following the expansion of Japanese shipping in the late nineteenth century. Otaru became one of Japan's leading warehousing centers owing to a rapid increase in cargo passing through the port from Japan, Russia, and Europe.

The Naniwa Warehouse Company was a subsidiary of the Suzuki Trading Company, headed by Suzuki Yone (1852–1938), known at the end of World War I as “the richest woman in Japan.” The company was a conglomerate with diverse interests, dealing in sugar, camphor oil, flour, rice, real estate, steel, mining, and shipping. The Suzuki Trading Company went bankrupt in 1927 as Japan, along with most of the world, slid towards the Great Depression.

上記解説文の訳（日本語訳）

旧浪華倉庫

旧浪華倉庫は小樽運河の南端にあり、現存している小樽最大の倉庫のうちの1つです。2,644平方メートルを超えるオープンスペースを備えたこの木骨石造り建造物は1925年に建てられたもので荷物の揚げ降ろしに便利のように小樽運河側に開口部がありました。

2022年、この建物は西洋美術館として再利用されることになりました。これは博物館や画廊として一般公開されている5つの歴史的建造物である小樽芸術村の一部です。この美術館の所蔵品は、小樽の繁栄の絶頂期のときからあったものであり、19世紀の終わりから20世紀初めにかけてヨーロッパやアメリカで作製されたステンドグラス窓、アールヌーボー調・アールデコ調のガラス製品、調度品、陶磁器、その他の西洋の美術品を特徴としています。

2つの階にある5つの部屋には、エミール・ガレ（1846年–1904年）、オーギュスト・ドーム（1853年–1909年）、アントナン・ドーム（1864年–1930年）、ルネ・ラリック（1860年–1945年）など、有名なフランスの芸術家によるガラス細工の所蔵品が展示されています。そのうちの1つの部屋は、ドイツのメーカーであるマイセン製の装飾のある陶磁器の花瓶や小立像（人形）に特化しています。一番大きな部屋には、ヴィクトリア調・アールヌーボー調・アールデコ調の調度品の所蔵品が部屋用の一そろいとして配置されています。

旧浪華倉庫は、19世紀の終わりにおける日本の海運業の拡大後に設立された数社の倉庫会社のうちの1社である浪華により建設されました。日本、ロシア、ヨーロッパから小樽港を経由する貨物が急速に増えたことにより、小樽は日本有数の倉庫センターの1つとなりました。

浪華倉庫株式会社は、第一次世界大戦の終戦時に「日本で最も裕福な女性」として知られていた、鈴木よね（1852年–1938年）が率いる鈴木商店の子会社でした。鈴木商店は、砂糖、樟脳油、小麦粉、米、不動産、鉄鋼、採掘、海運など、さまざまな権益を有する複合企業体でした。鈴木商店は、世界のほとんどの国とともに日本が世界大恐慌に傾いていく1927年に倒産しました。

001-049

Former Hokkai Seikan Otaru Factory No. 3 Warehouse 小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】旧北海製罐倉庫(株)事務所棟・工場・倉庫 /

旧北海製罐倉庫(株)事務所棟・工場・倉庫

【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

Former Hokkai Seikan Otaru Factory No. 3 Warehouse

The Hokkai cannery and warehouses are located on a reclaimed island at the northern end of the Otaru Canal and are symbols of Otaru's industrial heritage. Hokkai Seikan Otaru Factory No. 3 Warehouse was built in 1924 for the Hokkaican Company a year after the canal was completed. The warehouse operated until 2020, when the aging structure became difficult to maintain.

Empty tin cans were stored at the warehouse for packing salmon and crab caught off the coast of Russia's Kamchatka Peninsula, north of Hokkaido. Tsutsumi Shokai (now the Hokkaican Company) built its first cannery on the Kamchatka Peninsula in 1910, which led to the development of industrial fishing in the Sea of Okhotsk, with large factory ships moored off Kamchatka to process seafood for export.

Under the peace treaty following Japan's victory in the Russo-Japanese War (1904–1905) fishing rights were granted to Japanese fleets in the Sea of Okhotsk and along the coast of Russia's Kamchatka Peninsula. The agreement led to a boom in Japanese fisheries moving into the area. Salmon canning peaked in 1937, with some 2.5 million cases of canned salmon (each case held 48 cans) exported by steamship that year—almost 90 percent went to the United Kingdom.

Ample storage space was needed for the large volume of cans, and the four-story warehouse was designed to maximize internal space. It has a total floor area of over 7,000-square-meters, most of which was devoted to can storage. Workers used external stairways and decks to move around the warehouse, and cans were transferred

between floors via external elevators and spiral chutes.

The warehouse was donated to Otaru City in 2021 and is sometimes open for tours and music events. The exterior, with its distinctive spiral chutes, is illuminated at night.

上記解説文の訳（日本語訳）

旧北海製罐倉庫(株)事務所棟 工場・倉庫

旧缶詰倉庫は小樽運河北端の埋め立て島にあり、小樽市の産業遺産の象徴です。北海製罐小樽工場第3倉庫は運河が完成した翌年、1924年に北海製罐株式会社のために建設されました。倉庫は老朽化により維持が困難となった2020年まで稼働していました。

北海道北部、ロシアのカムチャツカ半島沖で獲れたサケやカニを梱包するための空きブリキ缶が倉庫に保管されていました。堤商会（現在の北海製罐株式会社）は1910年にカムチャツカ半島に最初の缶詰工場を建設しました。これがオホーツク海の産業漁業の発展につながり、カムチャツカ沖には輸出用の魚介類を加工するための大型工場船が停泊しました。

日露戦争（1904年-1905年）での日本の勝利後の平和条約により、オホーツク海とロシアのカムチャツカ半島沿岸での漁業権が日本の船隊に認められました。この協定によりこの地域への日本の漁業進出がブームとなりました。サーモン缶製造は1937年にピークに達し、その年約250万ケース（各ケース48缶入り）のサーモン缶詰が汽船で輸出され、そのほぼ90%が英国に送られました。

大量の缶のための広い保管スペースが必要でした。4階建ての倉庫は内部空間を最大限に活用するように設計されていました。延床面積は7,000平方メートルを超え、そのほとんどが缶の保管庫でした。作業員は倉庫内を移動するために外部の階段とデッキを使用し、缶は外部のエレベーターとスパイラルシュートを介してフロア間で移送されました。

倉庫は2021年に小樽市に寄贈され、ツアーや音楽イベントなどに時々開放されています。スパイラルシュートが特徴的な外観は夜間ライトアップされています。

001-050

Moving Image Material at Otaru Museum

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】小樽市総合博物館所蔵9.5ミリ動画資料 /
小樽市総合博物館所蔵9.5ミリ動画資料
【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

Moving Image Material at Otaru Museum

The prosperity of Otaru in the Taisho and early Showa eras (1912–1945) is evident in the collection of home movies at Otaru Museum. Footage from more than 200 recordings depicts scenes from daily life: ordinary citizens strolling the shopping streets of Otaru, shoveling snow, hauling herring nets, and watching steam locomotives. The museum shows selections from the archives.

Many of these scenes were filmed with a Pathé Baby movie camera, a relatively inexpensive and easy-to-use amateur film system developed by the French film equipment company Pathé in 1922. The compact, hand-cranked movie camera used 9.5mm film. It was smaller than a standard hardback novel and weighed just over half a kilogram.

Camera shops in Otaru sold film, cameras, tripods, and projectors for showing home movies, but most 9.5mm film would have needed to be sent to Yokohama for developing. Filmmaking would have been an expensive hobby at the time, and the fact that some 200 films remain indicates the economic and cultural prosperity of the city.

上記解説文の訳（日本語訳）

小樽市総合博物館所蔵9.5ミリ動画資料

大正から昭和初期（1912年-1945年）の小樽の繁栄は小樽市総合博物館のホームムービーのコレクションにはっきりと刻まれています。200以上の映像が小樽の商店街を散策したり、雪かき

をしたり、ニシン網を引いたり、蒸気機関車を眺めたりする一般市民の日常生活を描いています。博物館ではアーカイブから厳選した作品を展示しています。

これらのシーンの多くはパテベビーのムービーカメラで撮影されました。パテベビームービーカメラは1922年にフランスの映画機器会社パテによって開発された比較的安価で使いやすいアマチュア向けフィルムシステムです。9.5mmフィルムを使用するコンパクトな手回しムービーカメラは標準的なハードカバー本よりも小さく、重さは500グラム強でした。

小樽のカメラ店ではフィルム、カメラ、三脚、ホームムービー上映用のプロジェクターなどを販売していましたが、ほとんどの9.5mmフィルムは現像するため横浜に送らなければいけませんでした。当時、映画製作はお金のかかる趣味だったと思われ、約200本のフィルムが残っているということが街の経済的、文化的繁栄を物語っています。

001-051

Nakamura Zensaku – Impressions of Otaru

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】中村善策作風景画 / 中村善策作風景画

【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

Nakamura Zensaku – Impressions of Otaru

The landscapes of Otaru have inspired many artists, and the works of Nakamura Zensaku (1901–1983) in particular are associated with the city. Throughout his life, Nakamura continued to paint the landscape of his hometown in a style characterized by vivid colors and lively compositions. Otaru's distinct landscape of mountains and sea was a common theme of his works.

The Nishiya family were shipowners who founded the first warehousing business in Otaru. They recognized Nakamura's talent when he was in his early teens. After completing his schooling, he worked for the family, studying art at night with a group of young artists at the Otaru Western Painting Institute.

In 1924, as Nakamura was preparing to move to Tokyo to study art full-time, the Nishiyas loaned him a villa for six months in the hills above Otaru, so that he could focus on painting. In his twenties, Nakamura discovered the work of French Post-Impressionist painter Paul Cézanne (1839–1906) and was inspired to paint Otaru's landscapes using similar broad brushstrokes and vivid colors. In 1925, his work was selected for the Nika-ten Exhibition in Tokyo, one of Japan's most prestigious competitive art exhibitions.

He returned to his hometown every year, capturing the city as it rapidly modernized, and its natural environment changed. Many of Nakamura's prewar works were destroyed during the bombing of Tokyo in 1942, but a significant number are on display in the Otaru City Museum of Art Nakamura Zensaku Memorial Hall.

上記解説文の訳（日本語訳）

中村善策作風景画

小樽の風景は多くの芸術家にインスピレーションを与えてきましたが、特に中村善策（1901年-1983年）の作品といえば小樽を思い出します。中村は鮮やかな色彩と生き生きとした構成を特徴とするスタイルで、生涯を通じて故郷の風景を描き続けました。山や海は彼の作品に共通するテーマです。

西谷家は船主で小樽初の倉庫業を興しました。彼らは中村が10代前半の頃からその才能を認めていました。学業を修めた後は西谷家のために働き、夜は小樽洋画研究所で若手芸術家たちとともに美術を学びました。

1924年、中村が専門的に美術を学ぶために東京に移る準備をしていたとき、西谷家は中村が絵を描くことに集中できるよう小樽の小高い丘にある別荘を半年間貸し与えました。20代の頃中村はフランスのポスト印象派の画家ポール・セザンヌ（1839年-1906年）の作品に出会い、インスピレーションを受けて同じような幅広い筆致と鮮やかな色彩で小樽の風景を描きました。1925年、日本で最も権威のある美術品展の一つである東京の二科展に彼の作品が入選しました。

彼は毎年故郷に戻り、小樽が急速に近代化し、自然環境が変化する様子を描写しました。中村の戦前の作品の多くは1942年の東京大空襲で焼失しましたが、相当数が市立小樽美術館中村善策記念ホールに展示されています。

001-052

The Otaru Canal Preservation Association

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】小樽運河を守る会関係資料 /
小樽運河を守る会関係資料
【想定媒体】アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

The Otaru Canal Preservation Association

The formation of the Otaru Canal Preservation Association in 1973 marked a turning point in the city's identity, transitioning Otaru from a fading commercial port to a historical city that balances conservation and urban development. In the mid-1960s, a proposal to reclaim Otaru Canal for a new road caused public outcry and led to an influential preservation movement. Local efforts ultimately saved much of the canal and prompted discussions at a national level about how preserving urban heritage can revitalize communities. A collection of posters, banners, news articles, and other paraphernalia generated by the movement are periodically displayed at the Otaru Museum.

City in decline

During wartime, government regulations shifted the focus of economic activity in Hokkaido to Sapporo. The banks that had once earned Otaru its reputation as the economic center of Hokkaido began to withdraw. Around the same time, the main source for the nation's energy needs shifted from coal to oil, and Otaru subsequently lost its status as a major coal shipping port. Other ports along the southeast coast of Hokkaido provided more convenient shipping routes to Tokyo, and road and rail transport eventually surpassed shipping for cargo transportation. Otaru's economy stagnated, and by the mid-1950s it was known as a "city in decline."

Grassroots preservation efforts

The barges that once plied the Otaru Canal were slowly decaying, and silt accumulated in the unused waterways; the old warehouse buildings remained standing only for a lack of money or incentive to tear them down. In 1966, in an effort to boost the

economy, the local government proposed a new six-lane road to ease congestion and improve truck access to the port. The Otaru Canal Landfill Project proposed filling in the canal and demolishing the surrounding warehouses. This galvanized a group of residents to form the Otaru Canal Preservation Association. Across the city, shops, cafés, and restaurants displayed posters that highlighted the architectural and cultural heritage that could be lost and positioned Otaru Canal as an intrinsic part of Otaru's identity.

Changing fortunes

The efforts of the Association failed to gain traction at first: the local government was unwilling to compromise and gaining support for preservation based solely on the canal as a nostalgic symbol was largely unsuccessful. However, in the late 1970s, new members with fresh ideas joined the campaign and developed a plan to revitalize the city through tourism, using the canal and stone-clad warehouses as the main assets. This won the support of local businesses and received widespread media attention. It became a community campaign to develop Otaru's economy. In the early 1980s, the government agreed on a plan to narrow some sections of the canal to make way for the planned road, while adding attractive walkways and street lights to the remaining parts. Now, tourism far outstrips freight as the driver of the local economy. Otaru's preservation movement saved much more than a canal.

上記解説文の訳（日本語訳）

小樽運河を守る会関係資料

1973年に小樽運河を守る会が設立されたことは、小樽を衰退しつつある商業港から保全と都市開発のバランスがとれた歴史都市へと転換するという都市アイデンティティの転換点となりました。1960年代半ば、小樽運河を埋め立てて新しい道路を建設するという提案は市民の反発を引き起こし、影響力のある保存運動に繋がりました。地元努力により最終的に運河の大部分が救われ、都市遺産の保存がコミュニティをどのように活性化できるかについて全国レベルでの議論が行われるようになりました。この運動のポスター、横断幕、ニュース記事、その他の道具のコレクションが小樽市総合博物館で定期的に展示されています。

衰退する街

戦時中、政府の規制により北海道の経済活動の中心は札幌に移行しました。かつて小樽が北海道経済の中心地であるという名声をもたらした銀行は撤退を始めました。そのころ、国のエネルギー

需要の主流が石炭から石油へ移行し、それにより小樽は石炭の主要積出港としての地位を失いました。北海道の南東海岸沿いの他の港が東京へのより便利な輸送ルートを提供し、最終的に貨物輸送においては道路輸送と鉄道輸送が海運を上回りました。小樽の経済は停滞し、1950年代半ばには「衰退する街」として知られるようになりました。

草の根の保護活動

かつて小樽運河を行き来していた小舟はゆっくりと朽ち、使われていない水路には沈泥が蓄積していました。古い倉庫の建物は取り壊すお金も補助金もなかったためそのまま放置されていました。1966年、経済を活性化する取り組みの一環として地元政府は渋滞を緩和し港へのトラックのアクセスを改善するために新しい6車線の道路を提案しました。小樽運河埋め立て計画は運河を埋め立て、周囲の倉庫を取り壊すというものでした。これをきっかけに住民らが集まり「小樽運河を守る会」が結成されました。街中のショップ、カフェ、レストランには、失われる可能性のある建築遺産や文化遺産を強調した、小樽運河を小樽のアイデンティティの本質的な部分として位置づけるポスターが掲示されました。

運命を変える

守る会の努力は当初あまり成果を上げることができませんでした。地元政府は妥協する気がなく、ノスタルジックなシンボルとしての運河のみに基づいた保存への支持を得ることは全くできませんでした。しかし1970年代後半になると新しいアイデアを持った新しいメンバーが運動に参加し、運河と石造りの倉庫を主な資産として観光を通じて街を活性化する計画を策定しました。これは地元企業の支持を獲得しメディアでも広く注目されました。これが小樽経済発展のための地域運動となりました。1980年代初頭、政府は運河の一部の区間を、道路を作るために狭くし、残りの部分に魅力的な歩道と街路灯を追加する計画に合意しました。現在、観光業は貨物をはるかに上回り、地域経済の牽引役となっています。小樽の保存運動は運河以上のものを救ったのです。

001-053

Fujimori Shigeo — Artist and Advocate

小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 藤森茂男作風景画 / 藤森茂男作風景画

【想定媒体】 アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

Fujimori Shigeo — Artist and Advocate

Fujimori Shigeo (1936–1987) was an activist supporting preservation of the Otaru Canal, using art to draw attention to the canal and surrounding warehouses during the city’s economic decline. In his commercial work, Fujimori designed signage and posters, but in the mid-1960s he turned to painting and sketching to support community preservation efforts, creating over 150 landscape paintings of the canal and warehouses in his lifetime.

At the height of Otaru’s economic vigor in the 1920s and 1930s, artists were drawn to Otaru Canal to capture bustling scenes of barges plying the waters and porters unloading cargo. Even in its decline, some artists found a certain bleak beauty in the scenery of decaying barges, disused buildings, and the muddy canal. The Otaru City Museum of Art has numerous canal paintings by local artists in its collection.

Fujimori served as executive director of the Otaru Canal Preservation Movement for several years and was instrumental in planning events to revitalize the city. In the mid-1960s, he helped launch the Otaru Ushio Festival (Otaru Tide Festival). The annual event runs over three days each July and now attracts around a million visitors with fireworks, music, and a parade of almost 10,000 dancers through the city streets.

One of Fujimori’s last works, *Red Canal*, was painted in 1985 when workers began to reclaim part of the canal for a new road. Fujimori wanted to preserve the entire canal and is said to have expressed his frustration by covering the image in a wash of red ink.

上記解説文の訳（日本語訳）

藤森茂男作風景画

藤森茂男（1936年-1987年）は小樽運河の保存を支援する活動家で、小樽の経済が衰退する中、アートを使って運河と周囲の倉庫に注目を集めました。藤森は商業的な仕事で看板やポスターをデザインしていましたが、1960年代半ばにコミュニティの保存活動を支援するために絵画やスケッチに転向し運河や倉庫の風景画を生涯で150枚以上制作しました。

1920年代から1930年代の小樽の経済力の絶頂期に画家たちは小樽運河に引き寄せられ、運河を行き交う小舟や荷物を降ろすポーターのにぎやかな風景を描きました。衰退期にあっても朽ち果てた小舟、使われなくなった建物、泥だらけの運河の風景にある種の荒涼とした美しさを見出した芸術家もいました。市立小樽美術館は地元画家による数多くの運河絵画を所蔵しています。

藤森は小樽運河保存運動の事務局長を数年間務め、街を活性化するイベントの企画に尽力しました。1960年代半ばには「小樽潮まつり」を立ち上げる手伝いをしました。この毎年恒例のイベントは毎年7月に3日間にわたって開催され、花火や音楽、市街を練り歩く約1万人のダンサーのパレードで現在約100万人の来場者を魅了しています。

藤森の遺作群の一つである「赤い運河」は作業員が道路のために運河の一部を埋め立て始めた1985年に描かれました。運河全体を保存したいと考えていた藤森は絵を赤インクで塗り、不満を表したといわれています。

001-054

Memories of Otaru — The Hyogo Photograph Collection 小樽市日本遺産推進協議会

【タイトル】 兵庫写真コレクション / 兵庫写真コレクション

【想定媒体】 アプリQRコード / パンフレット / WEB

できあがった英語解説文

Memories of Otaru — The Hyogo Photograph Collection

Some 5,000 photographs taken between 1975 and 1980 depict Otaru as a city in decline.

After the 1950s, other ports on Hokkaido's east coast offered more convenient shipping routes to Tokyo, and the main source for the nation's energy needs switched from coal, once shipped from Otaru, to oil. Banks and businesses moved to Hokkaido's capital, Sapporo. Against this backdrop, Hyogo Katsundo (1942–2004), a professional photographer from Sapporo, took thousands of photographs of the city, recording decaying barges, faded signage, narrow back alleys, and quiet shopping streets.

This collection of photographs is a rare record of Otaru before revitalization efforts began in the 1980s. The works stand in stark contrast to the restored warehouses, elegant streetlamps, and attractive landscaping of the city today. Hyogo bequeathed the collection to the Otaru Museum of History and Nature, where a changing selection of the photographs is on display.

上記解説文の訳（日本語訳）

兵庫写真コレクション

1975年から1980年にかけて撮影された約5,000枚の写真に衰退する都市としての小樽が写し出されています。1950年代以降、北海道東岸の港が東京へのより便利な航路を提供し、国のエネルギー需要の主流が小樽から出荷されていた石炭から石油に代わりました。銀行や企業は北海道の首都、札幌に移転しました。このような状況を背景に、札幌出身のプロ写真家、兵庫

勝人（1942年-2004年）は市内の写真を何千枚も撮影し、朽ち果てた小舟、色褪せた看板、狭い路地裏、静かな商店街などを記録しました。

この写真コレクションは1980年代に復興運動が始まる前の小樽の貴重な記録です。これらの作品は今日の小樽の改装された倉庫やエレガントな街灯、魅力的な景観とはまったく対照的です。兵庫はコレクションを小樽市総合博物館に遺贈し、厳選された写真が順次展示されています。

地域番号	002	協議会名	「越後長岡」観光振興委員会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
002-001	山古志の棚田・棚池 / 山古志の棚田・棚池の概要		750	WEB
002-002	山古志の棚田・棚池 / 山古志の棚田・棚池の概要		500	アプリQRコード
002-003	寺泊 魚の市場通り / 寺泊 魚の市場通りの概要		500	WEB
002-004	寺泊 魚の市場通り / 寺泊 魚の市場通りの概要		500	アプリQRコード
002-005	山古志闘牛場 / 山古志闘牛場の概要		750	WEB
002-006	山古志闘牛場 / 山古志闘牛場の概要		500	アプリQRコード
002-007	中山隧道 / 中山隧道の概要		500	WEB
002-008	中山隧道 / 中山隧道の概要		500	アプリQRコード
002-009	もみじ園、巴ヶ丘山荘 / もみじ園、巴ヶ丘山荘の概要		500	WEB
002-010	もみじ園、巴ヶ丘山荘 / もみじ園、巴ヶ丘山荘の概要		500	アプリQRコード
002-011	松籟閣 / 松籟閣の概要		750	WEB
002-012	長岡の日本酒 / 長岡の日本酒の概要		750	WEB
002-013	栃尾のあぶらげ / 栃尾のあぶらげの概要		500	WEB
002-014	笹団子 / 笹団子の概要		500	WEB
002-015	生姜醤油ラーメン / 生姜醤油ラーメンの概要		500	WEB
002-016	へぎそば / へぎそばの概要		500	WEB
002-017	国営越後丘陵公園 / 国営越後丘陵公園の概要		750	WEB
002-018	雪国植物園 / 雪国植物園の概要		500	WEB
001-019	雪国植物園 / 雪国植物園の概要		500	アプリQRコード
002-020	楽山苑 / 楽山苑の概要		500	WEB
002-021	楽山苑 / 楽山苑の概要		500	アプリQRコード
002-022	妙法寺 / 妙法寺の概要		750	WEB

002-001

Ornamental Carp Breeding in Yamakoshi

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 山古志の棚田・棚池 / 山古志の棚田・棚池の概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Ornamental Carp Breeding in Yamakoshi

The Yamakoshi area of Nagaoka is known for breeding and raising *nishikigoi*, multicolored ornamental carp considered beautiful enough to be called “living jewels.” Of more than 150 *nishikigoi* breeders in the Nagaoka region, approximately 90 commercial and hobby farms are based in Yamakoshi. Each year, many people visit to buy carp from breeders dedicated to the highest standards of care and quality. The koi were historically raised in water-filled terraced rice paddies on the steep slopes of the valley, and they are still kept in some of the terraced ponds in summer. Farmers and breeders put great effort into the maintenance and conservation of the traditional terraced scenery, which can be admired from locations such as Nikoniko Hiroba or Yakushi no Oka. The views are particularly impressive in early summer when colorful sunsets reflect off the water in the fields and ponds.

The History of Nishikigoi Breeding in Yamakoshi

The residents of Yamakoshi began breeding *nishikigoi* (literally “brocaded carp”) approximately two centuries ago. Before that, they had raised plain black *magoi* carp as food for the winter, as it was difficult to hunt or travel to procure provisions during periods of heavy snow. *Magoi* eggs were placed in flooded rice paddies in the spring, where the fish would spawn and mature among the rice plants. Once the carp reached a certain size, they were moved to dedicated terraced ponds. Before snowfall, the fish were transferred to easily accessible household ponds, where they became a ready source of protein. It is said that a fish with a red pattern was found among the black carp sometime in the early nineteenth century, and instead of eating it, the farmers decided to breed it to produce more colorful koi. Since then, scientific research and selective breeding have resulted in approximately 100 different color variations of decorative *nishikigoi*.

The *nishikigoi* of Yamakoshi became known throughout the country after the Tokyo Taisho Exhibition that took place in 1914. In 1916, hybrid crossbreeding replaced pure strain breeding and was used to produce an even greater variety of color patterns. Over time, Yamakoshi *nishikigoi* gained a following among buyers and koi hobbyists abroad, and Yamakoshi breeders were among the first in Japan to sell their carp internationally. In 2004, the Chuetsu earthquake in Niigata Prefecture caused extensive damage in Yamakoshi, ruining koi ponds and forcing residents to evacuate. Despite the setback, *nishikigoi* breeders managed to rebuild in just three years and revived their businesses with the assistance of other breeders and koi enthusiasts across the country. Today, Yamakoshi *nishikigoi* are prized additions to fish ponds throughout the world. During the selling season, the mountain village becomes a bustling marketplace as potential buyers arrive from across the globe to choose their own “living jewels.”

A Year at a Nishikigoi Farm

The breeding season begins in April and May, when selected *nishikigoi* are paired off with the hope that they produce offspring with the desired color patterns. Although the exact approach may vary by breeder, the typical method involves having the fish deposit eggs on artificial aquatic grasses in breeding pools. The eggs are then moved to a different pool to hatch safely with the other fry. In the following months, the fish undergo periodic culling based on pattern, state of health, and other criteria. Of the approximately 200,000 carp spawned, only 500 to 1,000 make it to adulthood.

Throughout the summer, farmworkers make sure that each koi gets the proper amount of food, is free of worms or parasites, and is protected from scavenging animals. Each farm maintains multiple ponds to separate young fry and adult fish by size or color pattern, and farmers must regularly inspect the ponds to ensure that the koi remain healthy as they grow.

In October and November, the *nishikigoi* are transferred to more protected greenhouse pools for the winter, and until April they are raised indoors. During this time, potential buyers visit to select carp and breeders enter their best specimens in trade shows and contests. Specially designed boxes are used to ship the purchased *nishikigoi* inside bags of cold, oxygenated water that keeps the fish calm. When spring comes, the

remaining carp are released back into outdoor ponds to continue growing, and the spawning cycle begins again for a new generation of *nishikigoi*.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

山古志錦鯉養鯉

長岡市山古志地域は、「生きた宝石」と呼ばれるほど美しい錦鯉の生産地として知られています。長岡地方の150軒以上ある養鯉場のうち、約90軒の商業用および趣味の養鯉場が山古志に拠点を置いています。最高水準の飼育と品質を提供する生産者から錦鯉を購入するために、毎年多くの人々が山古志を訪れます。かつて、鯉は谷の急斜面にある水を張った棚田で飼育されており、現在も夏に一部の棚池で飼育されています。養鯉場の業者や鯉の生産者は、伝統的な棚田の景観の維持・保全に力を入れており、その景観はにこにこひろばや薬師の陵などから眺めることができます。初夏に色とりどりの夕日が田んぼと池の水面に反射する景色は、特に感動的です。

山古志の錦鯉養鯉の歴史

山古志の住民は、約2世紀前に錦鯉の養鯉を始めました。それまで、豪雪期には食料調達のために狩猟したり、移動したりすることが困難だったため、冬の食料として黒い真鯉の養鯉を始めたという歴史があります。春、真鯉の卵を水の張った田んぼに移動し、孵化した後は稲とともに成長していきます。鯉がある程度の大きさに達すると、専用の棚池に移動します。雪が降り始める前に、鯉は家から簡単にアクセスできる家庭用の池に移され、家族のタンパク源となりました。19世紀初期に黒い鯉の中に混じって赤い模様のある鯉が見つかり、それを食する代わりに、よりカラフルな鯉を生産するためにその鯉を養鯉することになったと言われています。それ以来、科学的な研究と品種改良により、約100種類の異なる色彩の錦鯉が誕生しました。

山古志の錦鯉は、1914年の東京大正博覧会により全国に知られるようになりました。1916年に純系交配に取って代わって雑種交配が行われ、さらに多様な色模様が生み出されました。時が経つにつれ、山古志の錦鯉は海外のバイヤーや鯉愛好家の間で人気を博すようになり、山古志の養鯉場は錦鯉を世界に向けて販売した日本最初の業者の一つとなりました。2004年の新潟県中越地震では、山古志に甚大な被害が発生し、鯉の池が荒廃し、住民が避難を余儀なくされました。生産者らはその逆境にもかかわらず、全国の飼育者や鯉愛好家の協力を得てわずか3年で再建に成功し、事業を復活させました。現在、山古志の錦鯉は世界中の池で珍重されています。販売シーズンには、自身の「生きた宝石」を選ぼうと世界中から買い手が集まり、山の村はにぎやかな市場となります。

錦鯉養鯉場の一年

繁殖期は4月から5月に始まり、希望の色模様の鯉の誕生が期待され、選ばれた錦鯉がつかいにされます。方法は生産者によって異なる場合がありますが、代表的な方法としては、鯉が産卵池の

人工水草に卵を産みます。そして、他の稚魚と一緒に安全に孵化させるために、卵を別の池に移します。その後数ヵ月間、それらの鯉は色模様、健康状態、そしてその他の基準に基づいて定期的の間引かれます。約20万匹の中から大人になれるのはわずか500～1,000匹です。

夏の間、養鯉場の労働者は、各鯉に適切な量の餌が与えられているか、虫や寄生虫が寄り付かない状態に保たれているか、また鯉を捕食する動物から守れるようになっているかを確認します。各養鯉場では、稚魚と成魚を大きさや体色のパターンによって区別するために複数の池が用意され、鯉の健全な成長のため、池を定期的に変換しています。

10月と11月に、錦鯉は冬に向けて保護された温室の池に移動され、4月まで室内で飼育されます。この時期は、購入希望者が鯉を選びに訪れます。また、生産者が錦鯉のベストな個体を展示会やコンテストに出品します。購入された鯉の輸送には、落ち着かせておくために冷たい酸素水の袋が入った、特別な箱を利用します。春が来ると、残った鯉は屋外の池に放たれ成長を続け、新しい世代の錦鯉の産卵サイクルが再び始まります。

002-002

Ornamental Carp Breeding in Yamakoshi

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 山古志の棚田・棚池 / 山古志の棚田・棚池の概要

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Ornamental Carp Breeding in Yamakoshi

Yamakoshi has long been known for breeding and raising *nishikigoi*, multicolored ornamental carp considered beautiful enough to be called “living jewels.” The practice eventually spread across Japan and led to the creation of an international industry worth billions of yen. Of more than 150 *nishikigoi* breeders in the Nagaoka region, approximately 90 commercial and hobby farms are based in Yamakoshi. Many people visit each year to buy carp from breeders dedicated to the highest standards of care and quality. Usually, farms require visitors to make an appointment, but the terraced rice fields and the ponds where some of the *nishikigoi* are raised can be seen throughout Yamakoshi.

Where to See Nishikigoi and Terraced Rice Fields

Large, brightly colored carp can be seen swimming in a pool outside the Yamakoshi Branch Office of Nagaoka City Hall and in an aquarium inside the neighboring Orataru Culture Exchange Center. An illustrated guide provided on the Orataru Center aquarium shows the many officially recognized color variations of *nishikigoi*.

At present, *nishikigoi* are raised on numerous dedicated farms throughout the area, but ponds among the terraced rice paddies are still used for keeping koi in the summer, as in centuries past. Designated viewing areas around Yamakoshi overlook the scenery of rice fields and ponds, which is especially impressive in early summer when colorful sunsets reflect off the water. In addition to Yakushi no Oka, other popular locations are Nikoniko Hiroba, a viewing area behind the Yamakoshi Branch Office, and Ipponsugi near the Koshi Kogen Ski Area.

The History of Nishikigoi Breeding in Yamakoshi

The practice of breeding *nishikigoi* (literally “brocaded carp”) in Yamakoshi began approximately two centuries ago. Originally, villagers raised plain black *magoi* carp as a winter food source. The fish eggs were placed in terraced rice paddies in spring to spawn and mature among the rice plants. Once the carp reached a certain size, they were moved to dedicated ponds on the terraces and then transferred to protected household ponds before snowfall. It is said that a fish with red patterning was discovered among the black *magoi* and used for breeding sometime in the early nineteenth century. In the years since, selective breeding has resulted in approximately 100 different color variations of decorative *nishikigoi*.

The *nishikigoi* of Yamakoshi became known throughout the country after the Tokyo Taisho Exhibition held in 1914. In 1916, breeders found a way to produce a greater variety of colors and patterns through hybrid crossbreeding. Over time, Yamakoshi *nishikigoi* gained a following among buyers and koi hobbyists abroad, and Yamakoshi breeders were among the first in Japan to sell their carp internationally. Farms in Yamakoshi were heavily damaged in the 2004 Chuetsu earthquake in Niigata Prefecture, but *nishikigoi* breeders managed to rebuild and revive their businesses with the assistance of other breeders and koi enthusiasts across the country. Today, Yamakoshi *nishikigoi* are considered prized additions to fish ponds throughout the world. During the selling season, the mountain village becomes a bustling marketplace as potential buyers arrive from across the globe to choose their own “living jewels.”

上記解説文の仮訳（日本語訳）

山古志錦鯉養鯉

山古志地域は、古くから「生きた宝石」と呼ばれるほど美しい錦鯉の生産地として知られています。この錦鯉の養鯉はやがて日本中に広がり、数十億円規模の国際産業の創出につながりました。長岡地域の錦鯉養鯉業者約150社のうち、約90の商業用および趣味の養鯉場が山古志に拠点を置いています。最高水準の飼育と品質を提供する生産者から錦鯉を購入するため、毎年多くの人が養鯉場を訪れます。通常、養鯉場の訪問は要予約ですが、一部の錦鯉が飼育されている棚田や棚池は今でも山古志全域で見ることができます。

錦鯉と棚田の見られる場所

長岡市山古志支所の屋外や、隣接するやまこし復興交流館おらたる内の水槽では、大きく生き生きとした錦鯉が泳ぐ姿を見られます。おらたるの水槽には公式に認定されている錦鯉の体色のバリエーションが記載されているシートが掛けられています。

現在では錦鯉はいくつかの専用の養鯉場で飼育されていますが、谷の急斜面にある棚田では、今でも夏には昔と同じように鯉を飼育するために使用されています。山古志周辺の指定されている展望ポイントからは、棚田や棚池の景色が一望でき、特に水面に色とりどりの夕日が反射する初夏の光景は感動的です。薬師の陵のほか、にこにこひろばや山古志支所裏の展望台、古志高原スキー場の近くの「一本杉」も人気のスポットです。

山古志の錦鯉養鯉の歴史

山古志での錦鯉の養鯉は約2世紀前に始まりました。もともと村人は冬の食糧として黒の真鯉を飼育していました。春に真鯉の卵を棚田に移し、孵化した稚魚は稲作とともに成長していきます。鯉がある程度の大きさに達すると、棚田上の専用池に移動し、雪が降る前に保護された家庭用池に移されました。19世紀初頭に、黒い真鯉の中に赤い模様の鯉が発見され、交配に使われたと言われています。それ以来数年にわたる品種改良により約100種類の異なる体色の錦鯉が誕生しました。

1914年の東京大正博覧会の後、山古志錦鯉は全国的に知られるようになりました。1916年に雑種交配が導入され、さらに多様な体色の色彩が誕生しました。時が経つにつれ、山古志錦鯉は海外のバイヤーや鯉愛好家の間で人気を博すようになり、山古志の養鯉者は錦鯉を初めて海外に販売した業者の一つとなりました。2004年に発生した新潟県中越地震により、山古志の養鯉場は大きな被害を受けましたが、全国の他の飼育者や鯉愛好家の協力を得て経営を再建し、復活させることに成功しました。現在、山古志の錦鯉は世界中の池で珍重されています。販売シーズンになると、自身の「生きた宝石」を選ぶために世界中から買い手が集まり、山の村はにぎやかな市場となります。

002-003

Teradomari Fish Market Street

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】寺泊 魚の市場通り / 寺泊 魚の市場通りの概要
【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Teradomari Fish Market Street

Nagaoka residents and sightseers alike head to Teradomari Fish Market Street to visit shops that specialize in fresh fish, regional products, and souvenirs. Colorful signs, countless types of seafood on display, and lively conversations between vendors and customers contribute to the atmosphere of the bustling market. Teradomari Fish Market Street is located within walking distance of the Sea of Japan coast, allowing visitors to enjoy food and shopping near the ocean.

History

The Teradomari area has been a trade hub for more than four centuries. It was one of the stops for merchant vessels known as *kitamaebune* (“north-bound ships”) that sailed the coastal route between the Seto Inland Sea and the Sea of Japan. Two important trading roads, Hokkoku Kaido and Mikuni Kaido, ran from Teradomari to large centers of commerce in present-day Nagano and Gunma Prefectures, respectively. Teradomari Fish Market Street was established in 1974 with the opening of the fresh seafood shop Kakujo Gyorui. At present, the market consists of around a dozen stores, the majority of which specialize in seafood. Although trade routes and practices have changed over the centuries, Teradomari Fish Market Street still provides marine products and other goods to people from near and far.

Marine Products

Storefronts and shop aisles are filled with fish of all shapes and sizes, as well as crab, shrimp, octopus, squid, shellfish, and more. Fresh catches are chilled on beds of ice, allowing customers to inspect the wide assortment of options. Some merchants offer skewers of grilled fish or other seafood that can be eaten right away. Another specialty

is *banyajiru*, a savory seafood soup made with ingredients that change daily. Outdoor benches and tables are available for enjoying the market food or taking a short break, and some stores operate sit-down restaurants on the second floor of their buildings.

Other Regional Products and Souvenirs

In addition to fresh fish, the stores offer many Niigata specialties such as soy sauce, miso paste, and products made from the prefecture's renowned rice, including crackers, *mochi* and *dango* sweets, and high-quality sake. Ice cream, shaved ice, and traditional Japanese confections are available for those who want a break from savory foods. Whether buying seafood, choosing gifts for friends and family, or just browsing, Teradomari Fish Market Street has something of interest for everyone.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

寺泊 魚の市場通り

長岡市民も観光客も新鮮な魚介類や地元の特産品、土産物を求めて寺泊魚の市場通りを訪れます。色とりどりの看板、数え切れないほどの魚介類、活気ある店員と客との会話など、賑やかな市場の雰囲気の特徴です。寺泊魚の市場通りは日本海から徒歩圏内にあり、海の近くで食事や買い物を楽しむことができます。

歴史

寺泊は、4世紀以上にわたって貿易の中心地でした。寺泊は、瀬戸内海と日本海の間沿岸航路を往復する北前船（北行きの船）の中継地のひとつでした。寺泊には北国街道と三国街道という2つの主要な交易路が通っており、現在の長野県と群馬県の大きな商業の中心地へと通じていました。寺泊魚の市場通りは、1974年に鮮魚店「角上魚類」が開店したことで誕生しました。現在は十数店舗が軒を連ね、その大半が魚介類を専門に扱っています。交易ルートや地域の慣習は数世紀にわたって変化してきましたが、寺泊魚の市場通りは今もなお、近隣や遠方からの買い物客に海産物やその他の商品を提供しています。

海産物

店先や店の通路には、大小さまざまな魚のほか、カニ、エビ、タコ、イカ、貝類などが所狭しと並んでいます。獲れたての魚介類が氷の上で冷やされ、客は豊富な品揃えの中から選ぶことができます。その場で魚やその他の海産物を串焼きにして食べられるものを提供する店もあります。また、日替わりの具材を使った海鮮汁「番屋汁」も名物です。屋外のベンチやテーブルでは市場で売られている

食べ物を楽しんだり、軽く休憩ができる他、建物の2階でお座敷スタイルのレストランを営業している店もあります。

その他の特産品・お土産

鮮魚のほかに、醤油や味噌、県の名産米を使ったせんべい、餅、団子、そして上質なお酒など新潟県の名産品も数多く取り扱っています。塩気ある食べ物からひと休みしたい人にはアイスクリームやかき氷、伝統的な和菓子があります。海産物を買うもよし、友人や家族へのお土産を選ぶもよし、ただ見て回るだけでもよし、寺泊魚の市場通りは誰もが楽しめるところです。

002-004

Teradomari Fish Market Street

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】寺泊 魚の市場通り / 寺泊 魚の市場通りの概要

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Teradomari Fish Market Street

This street is lined with stores that specialize in fresh seafood, regional products, and souvenirs. It is located within walking distance of the Sea of Japan coast, facing Sado Island, and allows visitors to enjoy food and shopping near the ocean.

A Brief History

The Teradomari area has been a hub for maritime and land-based trade for more than four centuries. It served as a port of call for merchant vessels known as *kitamaebune* (“north-bound ships”) that sailed the coastal route between the Seto Inland Sea and the Sea of Japan. The modern market was established in 1974 with the opening of the fresh seafood shop Kakujo Gyorui. At present, Teradomari Fish Market Street consists of around a dozen shops that sell marine products and other goods to customers from near and far.

Marine Products

The market shops offer fish of all shapes and sizes, as well as crab, shrimp, octopus, squid, shellfish, and more. Fresh catches are chilled on beds of ice, so that customers can get a closer look at the available options. Some stores offer skewers of grilled fish or other seafood that can be eaten right away. This cooking style is called *hamayaki*, which refers to grilling fresh fish on the beach or near a fishing port. Another specialty is *banyajiru*, a savory seafood soup du jour. The ingredients change daily, reflecting how fishermen of the past cooked meals from what they had available. Benches and tables are set up outdoors for eating market foods or taking a short break, and some stores operate sit-down restaurants on their second floors. Popular menu options include *kaisendon* (bowls of rice topped with raw seafood), sushi, and crab dishes.

Other Regional Products and Souvenirs

In addition to fresh fish, the stores sell many regional specialties, including rice crackers, *mochi* and *dango* sweets, sake made from high-quality Niigata rice, soy sauce, and miso paste. Ice cream, shaved ice topped with syrup (*kakigori*), and traditional Japanese sweets are available in addition to savory foods. A distinctive frozen dessert sold at the market is *shio* soft serve, a cerulean blue treat reminiscent of the ocean. Its flavor is sweet and creamy with a hint of salt to match the kanji character for *shio*, which signifies sea water and the tides.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

寺泊 魚の市場通り

この通りには、新鮮な魚介類や特産品、そして土産物を扱う店舗が軒を連ねています。佐渡島を望む日本海から徒歩圏内にあり、海の近くで食事や買い物を楽しむことができます。

略史

寺泊は、4世紀以上にわたって海上交易と陸上交易の拠点でした。瀬戸内海と日本海間の航路を往復する北前船（北行きの船）と呼ばれる商船の寄港地でした。1974年に鮮魚店「角上魚類」が開店し、現代の市場が開設されました。現在、寺泊魚の市場通りには十数店舗が並び、近隣や遠方から訪れる買い物客に海産物やその他の商品を提供しています。

海産物

市場の店では、大小さまざまなサイズの魚のほか、カニ、エビ、タコ、イカ、貝類などを買うことができます。獲れたての魚介類が氷の上で冷やされており、お客様が間近でオプションを見ることができます。魚介類を串焼きにし、その場で食べられるように提供している店もあります。これを「浜焼き」と呼び、新鮮な魚を浜辺や漁港の近くで焼くことを指します。もうひとつの名物は風味豊かな海鮮汁「番屋汁」です。具材は日替わりで、かつて漁師たちがその日に獲れた魚を使って調理していたことに由来しています。屋外のベンチやテーブルでは食事を楽しんだり、軽く休憩ができる他、2階でお座敷スタイルのレストランを営業している店もあります。人気メニューは海鮮丼（ご飯の上に生の魚介類を乗せたもの）や寿司、そしてカニ料理などです。

その他の特産品とお土産

店舗では、鮮魚の他におせんべいやお餅、お団子、上質な新潟県産米から作られた日本酒、醤油や味噌など、地域の特産品も数多く販売されています。塩気ある食べ物に加え、アイスクリーム、細かく砕いた氷にシロップをかけたかき氷、そして伝統的な和菓子が揃っています。市場で販売され

ている特徴的な冷たいスイーツとして、海を連想させる鮮やかなブルーの「潮ソフトクリーム」があります。海水と潮の満ち引きを意味する「潮」という漢字に合わせてほんのり塩味が効いており、甘くてクリーミーな味わいです。

002-005

Tsunotsuki Bullfighting Tournaments in Yamakoshi

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 山古志闘牛場 / 山古志闘牛場の概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Tsunotsuki Bullfighting Tournaments in Yamakoshi

Yamakoshi is one of nine places in Japan still holding traditional contests of strength between bulls. The practice is thought to have started in this rural, mountainous area in southeastern Nagaoka about a thousand years ago, when villagers relied on cattle for farm work and transportation. Bouts between bulls served as entertainment when the animals were not involved in planting or harvesting crops. The pastime became more organized in the Edo period (1603–1867) and was particularly popular in the late nineteenth and early twentieth centuries. Activities were briefly suspended in 2004, after an earthquake caused extensive damage in the area, but the tradition was revived through efforts of the Yamakoshi residents and support received from other bullfighting communities across the country.

Competitions between bulls in the ring are called *tsunotsuki* (literally “horn thrusting”) in Yamakoshi, while people in other regions use the words for “bullfighting” or “bull sumo.” It is a nationally designated Important Intangible Folk Cultural Property.

No Winners or Losers

Tsunotsuki in Yamakoshi is differentiated from other types of bullfighting by the effort to prevent injury to the bulls. In Yamakoshi, they were primarily farm animals that performed important tasks, such as field work and transporting goods on steep mountain roads unsuitable for horses. The bulls were raised and kept in the owner’s home and were often considered members of the family. If a bull were seriously injured in a fight, it would be unable to work, dramatically impacting the livelihood of its owner. In addition, allowing clear winners and losers in the bouts could lead to negative feelings among villagers in the small community.

For these reasons, it became tradition in Yamakoshi to declare a draw before either of the bulls got hurt. The bull handlers in the ring, called *seko*, closely watch each bout to decide when it is best to separate the animals. The draw is announced at the climax of the match, after both bulls have displayed their strength and entertained the spectators, or when it seems that one bull might overpower or hurt the other.

Tsunotsuki Tournaments

Several aspects of the *tsunotsuki* bullfighting tradition in Yamakoshi resemble sumo wrestling. Tournaments are held from May through November, taking place on weekends once or twice a month at the Yamakoshi Bullring. They are comprised of ten to thirteen bouts, beginning with training matches for young bulls and followed by competitions between stronger and more experienced animals that are expected to clash more dramatically.

At the beginning, the bullring is ritually purified with salt and sake, and the *seko* handlers gather in a circle with organizers to clap and raise their arms in hope for a safe tournament. During the bouts, an announcer in the ring narrates the action, providing information about the animals and passionate commentary. The early matches are held between bulls with ropes tied to their nose rings in case the *seko* need to guide or separate them quickly. The bulls in later matches are sometimes released to compete more freely. When the draw is declared, ropes are swiftly attached to the bulls' back legs to pull them apart, and the *seko* force themselves between the animals to separate their horns if needed.

The Competing Bulls

The bulls who take part in the Yamakoshi *tsunotsuki* tournaments debut in the spring when they are three years old. There is no set retirement age, and bulls as old as nineteen have competed in the ring. Although the bulls that historically participated in *tsunotsuki* were primarily farm animals, now they are kept exclusively for the matches. Each bull is given a masculine, dramatic-sounding name in keeping with traditions found in sumo wrestling. The names may also contain references to the bull owners' businesses. Currently, there are approximately 50 bulls taking part in tournaments.

The Yamakoshi Bullring

The bullring is located on the top of a hill surrounded by rice fields. A bus is available to take spectators from Nagaoka Station to the bullring on tournament days, but most people travel by car. A low wall on one side of the path to the ring displays information about the history of Yamakoshi *tsunotsuki*, including Edo-period illustrations and black-and-white photographs portraying life with the bulls and scenes of airlifting them to safety after the 2004 earthquake. The ring can accommodate around 1,500 people, and thin cushions for the seats are provided at the venue. Several stalls set up on tournament days sell food, drinks, and handmade goods. Admission costs 2,500 yen for adults and is free for children under 16.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

山古志の角突き闘牛大会

山古志は、伝統的な牛の力比べが今も行われている全国9カ所のうちの1カ所です。この長岡市南東部の山あいの田園地帯で始まったこの慣習は、約1,000年の歴史があると考えられており、山古志の村民が農作業と移動を牛に頼っていた時代にまで遡ります。雄牛同士の試合は、牛が作物の植え付けや収穫期に携わっていない時の娯楽として親しまれてきました。この娯楽は江戸時代（1603年～1867年）により組織化され、19世紀後半から20世紀初期には特に人気がありました。2004年の地震により地域に甚大な被害が発生したため、角突きは一時中断されましたが、山古志村民の努力と全国の闘牛コミュニティの支援により、この伝統を復活させることができました。

山古志では、牛が闘牛場で競争することを「角突き」と呼びますが、他の地域の人々は「闘牛」や「牛相撲」という呼び名を使います。国の重要無形民俗文化財に指定されています。

勝者も敗者もない

山古志の角突きが他の闘牛と違うのは、牛の怪我を防ぐ努力が払われていることです。山古志では、牛は主に農耕のための動物であり、馬が通れない険しい山道での畑仕事や荷物の運搬など、重要な仕事を担っていました。牛は飼い主の家で育てられ、家族の一員としてみなされました。もしも、牛が闘いで大怪我をすれば、働けなくなり、飼い主の生活に大きな影響を与えることになります。さらに、試合で勝者と敗者が明確になると、小さなコミュニティ内の村人の間に負の感情を生じさせる可能性があります。

こうした理由から、山古志ではどちらかの牛が怪我をする前に引き分けを宣言するのが風習となりました。闘牛場の「勢子」と呼ばれる試合の担い手は、それぞれの闘いを注意深く観察し、いつ牛を引き離すのが最適かを判断します。引き分けは、闘いのクライマックスに、双方の牛が個々の強さを

誇示して観客を楽しませた後、または一方の牛が相手を圧倒するか傷つける可能性があると思われるときに宣言されます。

牛の角突き大会

山古志の角突きの伝統は、いくつかの点が相撲に似通っています。大会は5月から11月まで、月に1～2回週末に山古志闘牛場で開催されます。大会は10～13試合で構成され、若い牛同士の試合から始まり、その後より劇的な衝突が予想される強力で経験豊富な牛同士の試合へと続きます。

最初は、闘牛場が塩と酒で清められる儀式が行われ、勢子は主催者とともに輪になり、手打ちをしたり手を上げたりして大会の安全を祈願します。試合中、闘牛場では試合内容が発表され、牛に関する情報や試合の出来事に関する情熱的な解説の場内アナウンスがあります。最初の数試合は、勢子がすぐに誘導したり引き離したりできるよう、鼻輪をロープで繋がれた牛の間で行われます。後の試合では、より自由に闘うために牛が解放されることもあります。引き分けが宣言されると、素早く牛の後ろ足にロープを掛けて離し、勢子は必要に応じて牛の間に入り込み、角を引き離します。

試合する雄牛

山古志角突き大会に出場する牛は3歳の春にデビューします。引退年齢は定められておらず、19歳の牛も闘牛場に出ることもあります。伝統的には角突きに参加する牛は主に家畜でしたが、現在では角突きの専用牛として飼育されています。それぞれの牛には、相撲との類似性に合わせて、男らしく、ドラマチックな響きの名前が付けられています。飼い主の商売にちなんだ名前の場合もあります。現在、約50頭の牛が大会に参加しています。

山古志闘牛場

闘牛場は田んぼに囲まれた丘の上にあります。大会当日は長岡駅から闘牛場まで観客を乗せるバスが運行されますが、ほとんどの人は車で訪れます。闘牛場への道の片側にある低い壁には、江戸時代の挿絵や牛との生活、2004年の地震後に牛を安全な場所へ空輸するシーンを描いた白黒写真など、山古志角突きの歴史を紹介する情報が展示されています。闘牛場の収容人数は約1,500人で、座席に置くための薄いクッションが用意されています。大会当日には、食べ物、飲み物、手芸品などを販売する屋台がいくつか出店しています。入場料は大人2,500円で、15歳以下の子供は無料です。

002-006

Tsunotsuki Bullfighting Tournaments

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 山古志闘牛場 / 山古志闘牛場の概要

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Tsunotsuki Bullfighting Tournaments

Yamakoshi is one of nine places in Japan that still preserve the culture of traditional bullfighting competitions. The practice is believed to have started about one thousand years ago, when Yamakoshi farmers relied on cattle for farm work and bouts between bulls served as occasional entertainment. The pastime became more organized in the Edo period (1603–1867) and was particularly popular in the late nineteenth and early twentieth centuries. In Yamakoshi, the tradition of pitting bulls against each other in the ring is called *tsunotsuki* (literally “horn thrusting”), while people in other regions use the words for “bullfighting” or “bull sumo.” It is a nationally designated Important Intangible Folk Cultural Property.

No Winners or Losers

Yamakoshi *tsunotsuki* is differentiated from other types of bullfighting by the effort to prevent injury to the animals. Historically, the bulls who participated in the bouts in Yamakoshi were predominantly farm animals that performed field work and transported goods. If a bull were seriously injured, it would dramatically impact the owner’s livelihood. Furthermore, allowing clear winners and losers could cause negative feelings between villagers in the small community. For these reasons, it became tradition in Yamakoshi to declare every match a draw before either of the bulls got hurt. The handlers in the ring, called *seko*, closely watch each bout and call a draw when both bulls have displayed their strength or when it seems that one bull might overpower the other.

Tsunotsuki Tournaments

Several aspects of the *tsunotsuki* bullfighting tradition in Yamakoshi resemble sumo

wrestling. Tournaments are scheduled from May through November, and each is comprised of ten to thirteen bouts. They begin with training matches between young bulls and work up to competitions between stronger and more experienced animals.

First, the bullring is ritually purified with salt and sake, and the *seko* handlers gather in a circle with organizers, raising their arms together in hope for a safe tournament. During the bouts, an announcer in the ring narrates the action in Japanese, providing information about the animals and passionate commentary. The early matches are held between bulls with ropes tied to their nose rings in case they need to be separated quickly, but bulls in later matches are sometimes released to compete more freely. When a draw is declared, ropes are attached to the bulls' back legs to pull them apart, and the *seko* force themselves between the animals to separate their horns if necessary.

The Competing Bulls

In Yamakoshi, bulls debut in the spring *tsunotsuki* tournaments when they are three years old. In the past, the participating bulls were primarily farm animals, but today they are kept exclusively to take part in matches. Each bull is given a dramatic-sounding, masculine name, which is sometimes a reference to the name of their owner's business. At present, there are about 50 bulls participating in tournaments, hailing both from Yamakoshi and other places across the country that still preserve similar traditions.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

山古志の角突き闘牛大会

山古志は、伝統的な闘牛大会が今も行われている日本に現存する9カ所のうちの1カ所です。この慣習は1000年前に始まったと考えられており、当時、山古志の農民は農作業を牛に依存しており、牛同士の試合が時折娯楽として行われていました。娯楽は江戸時代（1603年～1867年）に、より組織化され、19世紀後半から20世紀初期には特に人気がありました。山古志の闘牛は、他の地域で「闘牛」や「牛相撲」という呼び名が使われるのとは異なり、「角突き」と呼ばれます。国の重要無形民俗文化財に指定されています。

勝者も敗者もない

山古志の角突きが他の闘牛と大きく違うのは、牛の怪我を防ぐ努力が払われていることです。歴史的に、山古志の牛は主に農耕や荷物の運搬のための動物でした。牛が大怪我をすれば、飼い主の生活に大きな影響を与えることになります。さらに、戦いで勝者と敗者が明確になると、小さなコミュニティ内の村人の間に負の感情を生じさせる可能性があります。こうした理由から、山古志ではどちらかの牛が怪我をする前に引き分けを宣言するのが風習となりました。闘牛場の「勢子」と呼ばれる試合の担い手は、それぞれの闘いを注意深く観察し、双方の牛が個々の強さを誇示して観客を楽しませた時、または一方の牛が相手を圧倒するか傷つける可能性があると思われるときは引き分けを宣言します。

牛の角突き大会

山古志の闘牛は、いくつかの点が相撲に類似しています。大会は5月から11月まで、各大会は10～13試合で構成されています。若い牛同士の試合から始まり、その後より強力で経験豊富な牛同士の試合へと続きます。

はじめに闘牛場が塩と酒で清められ、勢子は主催者とともに輪になり、手打ちをしたり手を上げたりして大会の安全を祈願します。試合中、闘牛場では日本語で試合内容が発表され、教育的要素のある情報や情熱的な解説の場内アナウンスがあります。最初の数試合は、すぐに誘導したり引き離したりする必要がある場合に備えて、鼻輪をロープで繋がれた牛の間で行われ、後の試合では、より自由に闘うために牛が解放されることもあります。引き分けが決まると、素早く牛の後ろ足にロープを掛けて離し、勢子は必要に応じて牛の間に分け入り角を引き離します。

試合する雄牛

山古志闘牛大会に出場する牛は3歳の春にデビューします。昔は、伝統的には角突きに参加する牛は主に家畜でしたが、現在では角突き専用として飼育されています。それぞれの牛には、男らしく、ドラマチックな名前が付けられています。飼い主の商売にちなんだ名前の場合もあります。現在、山古志と闘牛の伝統がある別の地域から約50頭の牛が大会に参加しています。

002-007

Old Nakayama Tunnel

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 中山隧道 / 中山隧道の概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Old Nakayama Tunnel

The old Nakayama Tunnel in the Komatsugura area of southeastern Nagaoka is the longest hand-dug tunnel in Japan, stretching for 877 meters. It was built by the residents of Komatsugura between 1933 and 1949 as an alternative to a long and dangerous mountain pass. For almost 50 years, the tunnel provided a safer route to the neighboring villages and was enlarged twice to allow passage for horse carts and then automobiles. It was closed to traffic in 1998, when the new Nakayama Tunnel was completed nearby. The western side of the old tunnel still allows visitors to walk along part of the route and view the original structure. For safety reasons, entry is not permitted beyond the first 70 meters.

The Need for a Safer Route

Komatsugura did not have a general store or a hospital, so the residents had to rely on the nearby villages, Hirokami and Koide (both in present-day Uonuma), for medical treatment and certain daily necessities. The only way to reach the two villages was by a poorly maintained four-kilometer mountain path, and heavy winter snowfall made the journey especially dangerous. As a result, some residents could not receive urgent medical care and others got into accidents while attempting to travel the path. This eventually spurred the Komatsugura community to devise a way to bypass the mountain route. The plan for building the tunnel was finalized in 1932, and construction began on November 12th, 1933.

Construction of the Tunnel

Funds for construction were largely raised through donations from the community and through the sale of land and other assets. The villagers worked in shifts to dig the

tunnel with pickaxes and shovels. Wooden minecarts were used to remove the excavated earth and stone, and bellows pumped fresh air into the deeper parts of the tunnel. In addition to the slow speed of manual digging, flooding and fundraising issues lead to delays, and the Second Sino-Japanese War (1937–1945) caused a four-year interruption in construction. In 1949, workers digging from the east and from the west finally joined the two sections of the tunnel, completing the 16-year project.

Legacy

The old Nakayama Tunnel was slated for demolition after closure, but community members launched an initiative to preserve the structure in recognition of its historical significance. Donations were used to produce a documentary detailing the tunnel's importance to the residents of Komatsugura and the struggles they faced during construction. The film *Horumaika* (Should We Dig?) was released in 2003 and won several awards, contributing to the successful preservation of the tunnel.

The Japan Society of Civil Engineers lists the old Nakayama Tunnel as a valuable example of the country's civil engineering heritage.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

中山隧道

長岡南東部の小松倉地区にある中山隧道は、全長877メートルの手掘りによる日本最長トンネルです。長く危険な峠道の代替手段として、1933年から1949年にかけて小松倉の住民たちにより建設されました。約50年間、この隧道は近隣の村へ続く安全なルートとして機能し、馬車や自動車の通行のために2回拡張されました。1998年、近くに新中山トンネルが完成したため、隧道は車両通行止めとなりました。中山隧道の西側から、訪問者はルートの一部を歩くことができ、構造物を見ることができます。安全上、入り口より70メートル先の進入は禁止されています。

より安全なルートの必要性

小松倉には雑貨店や病院がなく、住民は医療や一部の日用品を近くの広神村と小出（いずれも現魚沼市）に頼らなければなりませんでした。2つの村に行くための唯一の手段は、整備が行き届いていない4kmの峠道だったため、冬の大雪の期間は特に危険が伴いました。そのため、緊急の治療を受けられなかったり、道を移動中に事故に遭ったりする村人もいました。これをきっかけに、小松倉のコミュニティは峠道を迂回する方法を考案するようになりました。1932年に隧道建設の計画を決定し、1933年11月12日に中山隧道の工事が開始されました。

隧道の工事

建設資金は主にコミュニティからの寄付と土地やその他の資産の売却によって集められました。村人は交代制で働きながらツルハシとシャベルでトンネルを掘りました。掘削した土砂や石は木製のトロツコで搬出し、隧道の奥の方に新鮮な空気を送り込むため、ふいごが使用されました。手作業による掘削は速度が遅いことに加えて、洪水や資金調達の問題により遅れが生じ、さらに日中戦争（1937年～1945年）が原因で建設が4年間中断となりました。1949年、東と西それぞれから掘り進めていた人たちがついにトンネル内で対面し、16年間のプロジェクトが完了しました。

遺産

旧中山隧道は閉鎖後取り壊しが予定されていましたが、歴史的な重要性を認識し、住民が率先となって保存する取り組みを始めました。寄付金を活用し、小松倉の住民にとっての隧道の重要性と建設中に直面した課題を詳述するドキュメンタリーが制作されました。映画「掘るまいか」は2003年に公開され、複数の賞を獲得し、トンネルの保存に貢献しました。

日本の土木学会は中山隧道を国の土木遺産の貴重な例としています。

002-008

Old Nakayama Tunnel

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 中山隧道 / 中山隧道の概要

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Old Nakayama Tunnel

The old Nakayama Tunnel is the longest hand-dug tunnel in Japan at 877 meters. It was built by the residents of Komatsugura from 1933 to 1949 as an alternative to a dangerous four-kilometer mountain path. Komatsugura did not have a general store or a hospital, so the route was used to reach the neighboring communities of Hirokami and Koide (both in present-day Uonuma). When travel conditions were poor, residents lost access to urgent medical treatment and many daily necessities. Such hardships, along with accidents along the mountain route, eventually spurred the construction of the tunnel. For almost 50 years, it provided a safer route from Komatsugura to the nearby villages. In 1998, a new Nakayama Tunnel was opened to accommodate modern vehicles, and the old tunnel was closed due to multiple cave-ins and rockfalls.

The Tunnel Today

At present, entry to the old Nakayama Tunnel is not permitted beyond the first 70 meters for safety reasons, but the accessible section retains much of the tunnel's original atmosphere. Recent additions, such as large steel frames, protective metal mesh, and better lighting, have improved safety and visibility. Signboards at the entrance provide information about the tunnel, its timeline, archive photos, as well as data about other hand-dug tunnels in the country. The Japan Society of Civil Engineers lists the old Nakayama Tunnel as a valuable example of the country's civil engineering heritage.

Filming a Documentary to Preserve the Tunnel

A poster for the documentary *Horumaika* (Should We Dig?) about the old Nakayama Tunnel, released in 2003, is displayed at the entrance next to an old photograph of the

workers who dug the tunnel. Film production began in 1998 and was funded by the residents of Komatsugura to raise awareness of the tunnel's historical importance and prevent its demolition. To aid the storytelling and the filming process, two short side tunnels were carved in the wall. The nearest one shows how the original tunnel looked before it was expanded to allow for the passage of horse-drawn carts and then automobiles. Inside this space is a replica of one of the wooden minecarts that were used to remove the excavated earth and stone.

Video Walkthrough

Although visitors can only walk through part of the tunnel, the rest can be viewed in a video tour accessible via the QR code on one of the signboards near the entrance. For example, the video shows where short sections of the tunnel were widened so that people traveling on foot could let vehicles pass. There is also footage of numerous marks left by cars that collided with the roughly carved walls in the narrow space.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

中山隧道

中山隧道は長さ877メートルで、手掘りによる日本最長のトンネルです。危険な4キロメートルある峠道の代替手段として、1933年から1949年にかけて小松倉地区の住民によって建設されました。小松倉には雑貨店や病院がなく、峠道は近隣の広神村と小出（いずれも現魚沼市）に行くために使われていました。峠越えの条件が悪かったときは、村民は緊急の治療や多くの日用品へのアクセスを失いました。このような困難と、峠越えでの事故などを受け、トンネル建設に拍車がかかりました。ほぼ50年にわたり、隧道は小松倉から近隣の村へのより安全なルートとしての役割を果たしました。1998年、現代の車両通行のために新中山トンネルが完成し、隧道は複数の陥没や落石による危険があったため通行止めになりました。

今日の隧道

現在、中山隧道は安全上入り口から70メートル先の進入は禁止されていますが、見学可能な区間は当時の雰囲気ほとんど残っています。この区域の安全性と視認性を向上させるために、大きな鉄骨フレーム、崩落防止の金網、より良い照明などが近頃設置されました。入り口の看板には、隧道に関する情報、その年表、アーカイブ写真、そして全国の他の手掘りトンネルの情報が掲示されています。日本の土木学会は中山隧道を国の土木遺産の貴重な例としています。

隧道を保存するためのドキュメンタリー映画撮影

2003年に公開された中山隧道を題材にしたドキュメンタリー映画「掘るまいか」のポスターが、入り口のトンネルを掘った人々の古い写真の隣に掲示されています。映画の製作は、隧道の歴史的な重要性の認識を広め、トンネルの取り壊しを防ぐことを目的として、小松倉の住民からの寄付金をもとに1998年に始まりました。ストーリーを伝えるため、そして撮影に活用するため、壁2カ所に短いサイドトンネルが掘られました。入口にから近い方は、馬車や車両の通行用に拡張される前の、元の隧道の様子が見て取れます。その内部には、掘削した土砂や石を搬出する際に使われた木製のトロツコのレプリカの一つが展示されています。

動画ウォークスルー

訪問者が通れるのは隧道の一部のみですが、残りの部分は、入り口近くの看板の1つにあるQRコードからアクセスできるビデオツアーで見ることができます。例えば動画では、徒歩で移動する人たちが車両に道を譲れるよう、横幅が拡張された短い区間も確認できます。また、狭い空間の中で荒く削られた壁にぶつかる車の痕跡も数多く映っています。

002-009

Momijien Garden and Tomoegaoka Villa

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 もみじ園、巴ヶ丘山荘 / もみじ園、巴ヶ丘山荘の概要
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Momijien Garden and Tomoegaoka Villa

Tomoegaoka Villa was built in 1896 by the affluent Takahashi family, and a large garden with maple and cherry trees was planted around it. In 1989, the property became a public garden known as Momijien (“maple garden”). It contains approximately 400 trees, many of which are over 150 years old; various seasonal flowers and plants, water features, stone lanterns, and Buddhist statues decorate the grounds. Momijien is popular in spring for cherry blossoms and in autumn for brightly colored foliage and an event called the Momiji Matsuri (Maple Festival), held from late October to late November.

Momijien is open from 9:00 a.m. to 5:00 p.m. every day except Wednesdays from April through November. Admission to the garden is free, but a guided tour of Tomoegaoka Villa (in Japanese) costs 200 yen and requires an advance reservation. Near the entrance gate is the Takakugura Café, a converted traditional storehouse where customers can purchase drinks, sweets, and light meals. The café is open on Mondays, Tuesdays, Thursdays, and Fridays.

Maple Garden

Momijien covers around 4,000 square meters, and most of its trees are maples. Five species of maple were specially brought from Kyoto when the garden was originally planted; among them, the classic Japanese maples (*Acer palmatum*) are the most numerous. In autumn, the garden is illuminated in the evenings for the Maple Festival. The colors of the leaves are usually the brightest in mid-November.

In addition to maples, Momijien contains Yoshino cherry (*Prunus yedoensis*) and mountain cherry trees (*Cerasus jamasakura*). It was the first garden in Niigata Prefecture where Yoshino cherries from Tokyo were planted as an experiment to see if they could survive the cold northern winters. At present, the trees are thriving, adding delicate pink shades to the landscape when they bloom in spring. Other seasonal flowers can be seen along the garden paths, and the eastern side of Momijien offers a panoramic view of the city. Several stone Buddhist sculptures, including one of Kannon, the bodhisattva of compassion, are placed throughout the grounds.

Tomoeagaoka Villa

Until the early twentieth century, Tomoeagaoka Villa belonged to the Takahashi family, wealthy landowners from the Kamiya area of present-day Nagaoka. The construction was ordered by Takahashi Kuro (1851–1922), the tenth head of the family. He was a politician dedicated to improving the lives of people from the lower socioeconomic classes during Japan’s industrial revolution. Many influential guests visited Tomoeagaoka Villa to debate and exchange ideas, including Sidney Webb (1859–1947), a British economist and reformer, and his wife Beatrice Webb (1858–1943), a sociologist and socioeconomic researcher.

The villa is a single-story, hipped-roof structure built in the *yosemune-zukuri* architecture style. Inside, there is a tea room and several traditional parlors with poetic names such as Sakura no Ma (“cherry chamber”), Momiji no Ma (“maple chamber”), Irori no Ma (“hearth chamber”), and Matsuki no Ma (“pine chamber”). The view of the garden from the Momiji no Ma is considered one of the best, particularly in spring when the maple leaves are fresh and green, or in autumn when they turn vibrant shades of red and orange.

Tomoeagaoka Villa is a Registered Tangible Cultural Property of Japan.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

もみじ園と巴ヶ丘山荘

巴ヶ丘山荘は裕福な高橋家によって1896年に建てられ、周囲にはモミジや桜が植わる大きな庭園を有しています。1989年に「もみじ園」と呼ばれる公共の庭園になりました。庭園に植わる400

本を数える木の多くは樹齢150年を超えています。季節の花々や植物、石灯籠、利水の装飾物、仏像などが境内を彩ります。もみじ園は、春は桜、秋は鮮やかな紅葉と10月末から11月下旬までのもみじ祭りで人気の観光スポットです。

もみじ園は4月から11月の間は水曜日を除いて毎日開園しており、時間は午前9時から午後5時です。庭園は入場無料ですが、巴ヶ丘山荘のガイドツアー（日本語のみ）は200円の費用と事前予約が必要です。入口の門の近くには蔵を改装した「高九蔵Cafe」があり、ドリンクやスイーツ、軽食を提供しています。カフェは月曜日、火曜日、木曜日、金曜日に営業しています。

もみじの庭園

もみじ園は約4,000平方メートルで、園内の木のほとんどがモミジです。庭園創設の際に京都から特別に5種類のモミジが持ち込まれました。5種類の中、最も本数が多いのは日本に古くから伝わるイロハモミジです。秋にはもみじ祭りが開催され、庭園内は夜間ライトアップされます。普段、紅葉の色合いが最も鮮やかになるのは11月中旬です。

もみじ園の庭園にはモミジの他にソメイヨシノやヤマザクラもあります。ここでは、東京のソメイヨシノが北国の寒い冬に耐えられるかどうかの実験するために、新潟県で初めて植えられた場所です。現在、木々は生い茂り、春の開花時期には風景に可憐なピンクの色合いを添えます。他にも園内の散策路には季節の花が見られ、もみじ園の東側では市街地のパノラマビューが一望できます。境内には観音菩薩などの石仏が安置されています。

巴ヶ丘山荘

20世紀初頭まで巴ヶ丘山荘は現在の長岡市神谷地域の大地主、高橋家が所有していました。山荘の建設を命じたのは、一族の10代目当主である高橋九郎(1851年～1922年)でした。彼は、日本の産業革命期に社会的地位の低い人々の生活向上に尽力したことで知られる政治家でした。英国の経済学者で改革者であるシドニー・ウェブ（1859年～1947年）と、その妻で社会学者及び社会経済研究者であるベアトリス・ウェブ（1858年～1943年）を含む多くの影響力のあるゲストが巴ヶ丘山荘を訪れ、彼と討論や意見交換を行いました。

山荘は寄棟造平屋建てです。内部には茶室と「桜の間」、「もみじの間」、「囲炉裏の間」、「松の間」などのポエム的な名前が付けられたいくつかの伝統的な座敷があります。もみじの葉が瑞々しい緑色に染まる春や、鮮やかな赤やオレンジ色に変わる秋、もみじの間からの眺めは特に素晴らしいと言われています。

巴ヶ丘山荘は国の登録有形文化財です。

002-010

Momijien Garden and Tomoegaoka Villa

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 もみじ園、巴ヶ丘山荘 / もみじ園、巴ヶ丘山荘の概要
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Momijien Garden and Tomoegaoka Villa

The vast grounds of Momijien contain approximately 400 trees, many of which are maple and cherry trees that are over 150 years old. The lush garden and the traditional Tomoegaoka Villa were originally created in 1896 for the Takahashi family, who were wealthy landowners in the neighboring Kamiya area. At present, Momijien is a public garden that is particularly popular in spring for cherry blossoms and in autumn for the brightly colored foliage, which is illuminated at night for the Momiji Matsuri (Maple Festival) held from late October to late November.

Admission to the garden is free, but a guided tour (in Japanese) of Tomoegaoka Villa, a Registered Tangible Cultural Property of Japan, costs 200 yen and requires an advance reservation. Momijien is closed on Wednesdays and in winter (from December through March). A small traditional storehouse near the entrance gate has been converted into the Takakugura Café, where customers can purchase drinks, sweets, and light meals. The café is open on Mondays, Tuesdays, Thursdays, and Fridays.

Maple Garden

Momijien (“maple garden”) covers around 4,000 square meters. Befitting the garden’s name, many of the trees on the vast grounds are maples. Five species of maple were specially brought from Kyoto when the garden was originally planted, and among them, the classic Japanese maples (*Acer palmatum*) are the most numerous.

The garden also contains Yoshino cherry (*Prunus yedoensis*) and mountain cherry trees (*Cerasus jamasakura*). Momijien was the first garden in Niigata Prefecture to plant Yoshino cherry trees from Tokyo to see whether they could survive the cold northern winters. Now, these trees are thriving, adding delicate pink hues to the landscape each spring.

Various seasonal flowers, including azaleas, lilies, wisterias, and hydrangeas, grow along the garden paths. Several stone sculptures of Buddhist divinities, including Kannon, the bodhisattva of compassion, and Yakushi Buddha, the deity of medicine and healing, are placed throughout the grounds. An overlook on the eastern side of Momijien offers a wide view of the city districts below.

Tomoegaoka Villa

The layout of Momijien is centered on Tomoegaoka Villa, which used to be a residence of the Takahashi family in the late nineteenth and early twentieth centuries. Takahashi Kuro (1851–1922), the tenth head of the family, ordered the construction of the villa. He was a politician dedicated to improving the welfare of people in lower socioeconomic classes during Japan’s rapid industrialization. Many influential guests visited him in the villa to debate and exchange ideas, including Sidney Webb (1859–1947), a British economist and reformer, and his wife Beatrice Webb (1858–1943), a sociologist and socioeconomic researcher.

The villa is a single-story, hipped-roof structure built in the *yosemune-zukuri* architecture style. It contains a tea room and a number of traditional parlors with poetic names such as Sakura no Ma (“cherry chamber”), Momiji no Ma (“maple chamber”), Irori no Ma (“hearth chamber”), and Matsuki no Ma (“pine chamber”). The view of the maple garden when sitting on the tatami-mat floor of the Momiji no Ma is considered one of the best in the villa.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

もみじ園と巴ヶ丘山荘

もみじ園の広大な敷地には、樹齢150年を超えるモミジやサクラなど約400本の木々が植えられています。緑豊かで活気に満ちた庭園と伝統的な巴ヶ丘山荘は、もともと隣接する神谷地区の裕福

な地主であった高橋家のために1896年に造られました。現在もみじ園は公共の庭園として、春は桜の名所、秋は、10月末から11月下旬までのもみじ祭りで夜間ライトアップによる色鮮やかな風景が特に人気です。

庭園は入場無料ですが、国の登録有形文化財である巴ヶ丘山荘のガイドツアー（日本語のみ）は200円の費用と事前予約が必要です。もみじ園は水曜と冬期（12月から3月）は休園日です。庭園入口の門近くの伝統的な小さな蔵を改装した「高九蔵Cafe」では、ドリンクやスイーツ、軽食を提供しています。カフェは月曜日、火曜日、木曜日、金曜日に営業しています。

もみじの庭園

もみじ園の面積は約4,000平方メートルです。庭園の名にふさわしく、広大な敷地の木々の多くはモミジです。庭園創設の際、京都から特別に持ち込まれた5種類のモミジの木のうち、最も本数が多いのは日本に古くから伝わるイロハモミジです。

庭園にはソメイヨシノやヤマザクラの桜もあります。ここでは、東京のソメイヨシノが北国の寒い冬に耐えられるかどうかを実験するために、新潟県で初めて植えられた場所です。現在、木々は生い茂り、春の開花時期には庭に可憐なピンクの色合いを添えます。

園内の散策路にはツツジ、ユリ、藤、そしてアジサイなど季節の花々が植えられています。境内には慈悲の観音菩薩や医学の薬師如来などの石仏が安置されています。もみじ園の東側の展望台からは眼下の市街地を一望できます。

巴ヶ丘山荘

もみじ園の設計は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて高橋家の別荘だった巴ヶ丘山荘を中心に構成されています。別荘の建設を命じたのは、10代目当主の高橋九郎（1851年～1922年）でした。彼は、日本の急速な工業化の時代に社会的地位の低い人々の福祉の向上に尽力した政治家でした。英国の経済学者で改革者であるシドニー・ウェブ（1859年～1947年）と、その妻で社会学者及び社会経済研究者であるベアトリス・ウェブ（1858年～1943年）を含め、多くの著名なゲストが別荘を訪れ、彼と討論や意見交換を行いました。

別邸は平屋の寄棟造で構成されています。建物内には茶室のほか「桜の間」、「もみじの間」、「囲炉裏の間」、「松木の間」などのポエム的な名前がついた伝統風な座敷が数多くあります。もみじの間の畳に座り眺めるもみじ庭園の眺めは、もみじ園の中でも最も素晴らしいといわれています。

002-011

Shoraikaku (Former Hirasawa Family Residence)

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】松籟閣 / 松籟閣の概要

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Shoraikaku (Former Hirasawa Family Residence)

The former residence of Hirasawa Yonosuke (b. 1885), the founder of Asahi-Shuzo Sake Brewing Company, was completed in 1934 and skillfully combines traditional Japanese architecture and art deco-inspired elements. Shoraikaku, the poetic name of the residence, can be translated as “pavilion of the sound of wind rustling in the pines.” The building was moved to its current location in 2002 to make space for the expanded Asahi-Shuzo headquarters. To preserve the valuable structure, it was transferred intact rather than through disassembling and subsequent reassembling. The house suffered extensive damage in an earthquake in 2004, but was restored to its original grandeur with the company’s financial support.

Shoraikaku is a nationally designated Important Cultural Property. Visitors can explore the many rooms of the residence and the surrounding garden from April to November on Mondays, Wednesdays, Fridays, and Saturdays. The opening hours are 11:00 a.m. to 3:00 p.m. Admission is free.

Tour of the House

Guests calling on the Hirasawa family at Shoraikaku came in through the main entrance, which has a gabled roof and a large carriage porch. The bell-shaped *katomado* window by the formal entryway is decorated with a pine-needle design in reference to the name of the residence. Today, visitors use the side entrance, passing through hallways where the floors are made from single long boards of polished zelkova wood. Knots or damaged spots in the flooring planks are fitted with pieces of wood skillfully shaped like gourds, mountains, and other motifs.

Past a small parlor or through the anteroom just inside the main entrance is the Shorai no Ma reception room. The large space has a high coffered ceiling, paintings of birds and flowers on the cabinet doors, a palm-tree pillar in the tokonoma alcove, and transoms carved with eagle and owl figures. In summer, the sliding doors are replaced with *sudare* reed blinds, evoking an image of luxurious palaces of old. Adjoining the Shorai no Ma is the altar room, which contains a large Buddhist altar and a household Shinto altar installed above it. The Buddhist altar is particularly impressive, with an elaborately engraved metal lock and intricate lacquered panels featuring depictions of seasonal birds and flowers created using gold and mother-of-pearl.

Behind the Shorai no Ma is a Western-style dining room with parquet flooring and large glass windows overlooking the side garden. Down the hallway is a Western-style bedroom that incorporates elements of art deco, which was the height of fashion at the time. The wall that the bedroom shares with the hallway has a round stained-glass window with a colorful geometric pattern, and the doors to the connected study are decorated with two long, thin bands of mosaic glass tiles. The study, called Asahi no Ma (“dawn chamber”), is a more traditional Japanese space that served as the private room of the head of the house. The pillar in the tokonoma is made of rare *Senna siamea* wood, the transom latticework forms a traditional auspicious pattern, the edges of the ceiling are adorned with delicate strips of woven wood, and many other design features are used to embellish the room.

A particularly notable section of Shoraikaku is a Western-style, brick-and-stucco drawing room that was added to the eastern part of the house. The ceiling is decorated with classic plaster reliefs around a four-light chandelier, the walls are covered with dark floral wallpaper, and the far side of the room has a fireplace flanked by stained-glass windows. Despite the mostly Western design, a Japanese-style painting hangs above the fireplace. The piece, titled *The Evening Lake*, was created by Fukuda Toyoshiro (1904–1970), a famous twentieth-century artist.

Other spaces in the house include a children’s room, a bedroom once used by the matriarch of the family, a Japanese-style dining room, and a large multipurpose room.

The Gardens

Shoraikaku is surrounded by greenery, with a garden containing approximately 100 pine trees and 100 maple trees. Parts of the garden have been added or modified in recent years, but the western side remains unchanged since the 1930s, when the residence was first built. The older section of the garden has a *karaike* (“dry pond”) feature, rimmed by pine trees on three sides. The *karaike* is decorated with large rocks, a stone lantern, and a mossy bridge, as if it were a normal pond, but it was never intended to hold water.

The inner courtyard garden contains a small pond, a decorative water basin, and a large stone lantern. The garden can be viewed from the three corridors that surround it, as well as from the Asahi no Ma, the Shorai no Ma, and the Western-style dining room.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松籟閣（旧平澤家住宅）

朝日酒造の創立者である平澤與之助（生1885年）の旧住宅は1934年に完成し、伝統的な日本の建築とアール・デコ調の要素が巧みに組み合わせられています。「松籟閣」という詩的な建物の名前は、「松のそよぐ風の音の閣」と訳すことができます。朝日酒造本社が増築されることになったため、松籟閣は2002年に現在の場所に移転されました。貴重な建物を保存するため、解体・再組立を行わずに丸ごと移転されました。2004年の地震で甚大な被害を受けましたが、朝日酒造の資金援助により元の壮麗な姿を取り戻しました。

松籟閣は国指定重要文化財です。訪問者は、4月から11月までの月曜日、水曜日、金曜日、土曜日に住宅の多くの部屋と周囲の庭園を散策できます。営業時間は午前11時から午後3時までです。入場は無料です。

住宅のツアー

かつて松籟閣に平澤家を訪ねる客は、切妻屋根と大きな車寄せのある正玄関から入りました。正玄関の脇にある鐘形の花頭窓には、住宅の名前にちなんで松葉文様が施されています。現在、訪問者は横からの入り口を使用し、磨かれたケヤキの長い一枚板で作られた床の廊下を通ります。床板の節目や傷みは、瓢箪や山などのモチーフをかたどった木の破片を使って、巧みに隠されています。

小座敷を通り、正玄関を入ってすぐのところに、「松籟の間」という応接室があります。その広い部屋には高い格天井があり、戸棚には鳥や花の絵が描かれ、床の間にはヤシの木の柱が使われ、欄間には鷺や梟の姿が彫られています。夏には襖がすだれに変わり、昔の豪華な邸宅を彷彿とさせます。松籟の間の隣には仏間があり、大きな仏壇とその上に神棚が設置されています。仏壇は特に感動的で、精巧な彫刻が施された金属製の錠前と、季節の鳥や花を描いた金と螺鈿を利用した複雑な漆塗りのパネルが備わっています。

松籟の間の後ろには、寄木細工の床と庭を望む大きなガラス窓が備わる洋式のダイニングルームがあります。廊下の先には、当時、日本で特に流行していたアール・デコの要素を取り入れた洋式の寝室があります。寝室と廊下を隔てる壁には、カラフルな幾何学模様の丸いステンドグラスの窓があり、隣接する書斎へのドアは、モザイクガラスのタイルによって細長くストライプの形状が装飾されています。「朝日の間」と呼ばれるこの書斎は、当主の私室としての役割を果たした日本風の伝統的な空間です。床の間の柱には希少な木材タガヤサンを使用し、欄間の格子は伝統的な吉祥文様が表現され、天井の縁には繊細に編まれた網代をあしらうなど、他にも多くの意匠が部屋の装飾のために使用されています。

松籟閣の特に注目すべき部分は、東側に追加されたレンガと漆喰の洋式の応接間です。天井は4灯のシャンデリアの周りに古典的な漆喰レリーフで装飾され、壁に濃い色の花柄の壁紙が貼られ、奥には暖炉があり、両側にはステンドグラスの窓が2つあります。この部屋は主に洋風のデザインですが、暖炉の上には20世紀の有名な画家、福田豊四郎（1904年～1970年）の日本画「暮沼」が飾られています。

他にも子供部屋やかつて女主が使用していた寝室、和式のダイニングルーム、広い多目的室などがあります。

庭園

松籟閣は緑に囲まれ、庭園には松と楓がそれぞれ約100本植えられています。近年、庭園の一部に追加や改修が行われましたが、西側は1930年代に邸宅が建てられた当時の姿をそのまま残しています。庭園の古い部分には、三方を松の木で囲われた枯池があります。枯池は、大きな岩、石灯籠、苔むした橋などで装飾されており、あたかも水を張るための普通の池であるかのように見えますが、もともと水を貯めることを目的としたものではありません。

中庭には小さな池、装飾的な水鉢、大きな石灯籠があります。この庭園はそれを囲む3つの回廊や朝日の間、松籟の間、洋式のダイニングルームから眺めることができます。

002-012

Nagaoka Sake

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 長岡の日本酒 / 長岡の日本酒の概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Nagaoka Sake

Nagaoka is a famous production center of sake (*nihonshu*), an alcoholic beverage made from fermented rice. Many cities in Niigata Prefecture have breweries due to their northern location and abundant natural resources, but Nagaoka has the most, with a total of sixteen. Sake in Nagaoka is brewed during cold, snowy winters using soft water, superior-grade rice, and low-temperature fermentation. The city's most popular sake products are often described as light and dry (as opposed to sweet) with a clean finish.

An Ideal Climate

The climate in Nagaoka is particularly suitable for brewing sake. In winter, the region is blanketed in heavy snow, and the snowmelt from the mountains provides ample soft water with low mineral content, contributing to the sake's delicate flavor.

Nagaoka breweries can maintain stable production conditions due to high accumulation of snow and minimal temperature fluctuations between day and night in winter. This helps control the propagation of the special mold for making *koji* (steamed rice cultivated with the mold) and the fermentation rate of the sake mash: a mixture of yeast, more steamed rice, *koji*, and water.

The region's climate also contributes to the quality of rice. In spring, snowmelt is directed to rice paddies so that the seedlings have a reliable source of quality water. Summers are warm but not scorching, and the plants grow robustly in the long daylight hours. When the golden ears of rice become heavy with grain in autumn, it is

time for the harvest. After the outer layers of the grains are polished away, Niigata's famous rice can be used to produce sake.

Echigo Toji and the Art of Brewing

Over the centuries, sake brewers in Echigo Province (present-day Niigata Prefecture) built on their experience and honed their skills to make the most of the region's climate and natural bounty. The resulting brewing style came to be known as Echigo Toji, referencing the name of the old province and the title of a master brewer, *toji*. While every team member at a brewery plays an important role, the *toji* leads the process and holds the ultimate responsibility for every aspect of sake production.

In Nagaoka, *toji* and their teams have passed down the knowledge and techniques for successful sake brewing in the Echigo Toji style for generations. Sake is considered to be "alive" and therefore must be closely monitored and managed throughout the entire production process. For example, *koji* in a vat of sake mash converts rice starch into simple sugars (such as glucose), and the yeast immediately begins to ferment these into alcohol. The mash in the vat must be frequently examined to assess the fermentation rate, check the balance of the ingredients, and determine when the next batch of mash should be added.

Enjoying Sake in Nagaoka

There are countless ways to become better acquainted with sake in Nagaoka, be it sampling drinks, learning about sake production, or shopping for famous sake brands. To enjoy the sake culture in a traditional townscape, stroll through the brewery town of Settaya, a historic area with long-established shops that specialize in making soy sauce, miso paste, and sake. In Settaya, there are two sake breweries and Yoshinogawa Sake Museum Joh-gura, which features educational videos, photographs, and tools related to sake production. There is a small tasting bar in the museum, next to the souvenir store. Several breweries in Nagaoka offer facility tours and sake tasting. Please note that some locations require reservations.

Ponshukan Marketplace in Nagaoka Station has a tasting room with about a hundred varieties of sake, making it a popular stop for residents and tourists alike. One wall is lined with three long rows of vending machines, each dispensing a different

kind of sake. Visitors pay 500 yen at the counter to receive a cup and five tokens to exchange for drink samples from the dispensers. Most options cost one token, but a few premium selections are more expensive. Outside the tasting room, Ponshukan has a large assortment of souvenirs from Nagaoka and other parts of Niigata Prefecture.

For food and drink aficionados, the streets of Nagaoka are lined with bars and restaurants that offer a wide variety of dining and sake-drinking options. Regional specialties such as Tochio *aburage* deep-fried tofu, Niigata-style *tarekatsu* pork cutlets, and fresh seafood caught in the Sea of Japan can be paired with different kinds of sake to create meals that capture the flavors and the atmosphere of Nagaoka.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

長岡の酒

長岡は、米の発酵飲料である酒（日本酒）の有名な産地です。新潟県は北に位置し、豊かな自然資源があるため多くの町に酒蔵が存在しますが、長岡市が最も多く、合計16の酒蔵があります。長岡の酒は、雪の降る寒い冬に軟水と良質な米を使用し、低温発酵で醸されます。最も人気のある長岡の清酒類は甘口ではなく、軽くて辛口、すっきりとした後味と評されることが多いです。

理想的な気候

長岡の気候は酒造りに特に適しています。冬には大雪に覆われ、雪解け後に山を流れ落ちる豊富な水はミネラル分が少なく軟水であるため、酒は繊細な味わいとなります。

冬には、豪雪で覆われ昼夜の気温の変化が少ないため、長岡の酒蔵は生産条件を保つことができます。これは、麴（カビで培養した蒸米）を作るための特別なカビの繁殖や醪（酵母、更に蒸米、麴、水の混合物）の発酵速度などの制御に役立ちます。

地域の気候は米の品質にも影響します。春になると雪解け水が田んぼに流れ込み、稲の苗に良質な水を供給します。夏は暑いですが灼熱ではなく、長い日照時間の中で稲はたくましく成長します。秋に黄金色に実った稲穂がたわわに実ると収穫の時期を迎えます。米粒の外層を精米すると、新潟地域の名産米を使った酒を造ることができます。

越後杜氏と酒造りの芸術

越後国（現在の新潟県）の酒造家は、何世紀にもわたって地域の気候や自然の恵みを最大限に活かすために経験を積み、技術を磨き続けてきました。その結果として生まれた醸造スタイルは、

かつての国の名前と酒造りの熟練者の称号である杜氏にちなんで、「越後杜氏」として知られるようになりました。酒蔵のチームメンバー全員が重要な役割を果たしますが、杜氏はプロセスを主導し酒製造のあらゆる側面に対して最終的な責任を負います。

長岡では、杜氏とそのチームは「越後杜氏」スタイルの酒造りを成功させるための知識と技術を代々受け継いできました。酒は「生きている」と考えられ、製造工程全体を通じて厳密な監視と管理が必要となります。例えば、醪の桶の中の麴は米のでんぷんを単糖類（ブドウ糖など）に変換し、酵母は直ちにそれをアルコールへと発酵させ始めます。発酵速度を評価し、成分のバランスをチェックし、次の醪をいつ追加するかを決定するために、桶の中の醪を頻りに検査する必要があります。

長岡での酒の楽しみ方

長岡では試飲をしたり、酒の製造について学んだり、有名な銘柄の酒を購入するなど、酒に親しむ方法が数えきれないほどあります。昔ながらの街並みの中で酒の文化を愉しむなら、醤油、味噌、酒の老舗が集まる撰田屋という醸造の歴史ある街を散策してみませんか。撰田屋には2つの酒蔵と酒づくりに関するビデオや写真、道具などを展示する「吉乃川酒ミュージアム醸蔵」があります。ミュージアム内には、土産物店の隣に小さなテイastingバーが設置されています。長岡のいくつかの酒蔵では見学や啀き酒を行っています。施設によっては予約が必要な場合もありますのでご注意ください。

長岡駅の「ぼんしゅ館」には、約100種類の酒が揃う利き酒コーナーがあり、住民だけでなく観光客にも人気です。壁一面には、おもちゃやお菓子の自動販売機のような啀き酒の長いマシンが3列に並んでおり、それぞれのマシンが異なる種類の酒を提供します。訪問者はカウンターで500円を支払い、猪口1杯とトークン5枚を受け取り、マシンから酒のサンプルを購入します。ほとんどの選択肢はトークン1枚ですが、一部のプレミアム商品はより高めです。啀き酒コーナーの他に「ぼんしゅ館」では、長岡や新潟県の他の地方のお土産を豊富に取り揃えています。

グルメとお酒の愛好家のために、長岡の通りには、さまざまな食事やお酒のオプションを提供するバーやレストランが並んでいます。栃尾のあぶらげや新潟風タレかつ、日本海で獲れた新鮮な魚介類などの郷土料理を様々な酒と合わせて、長岡の味と雰囲気を感じられるお料理としてお楽しみください。

002-013

Tochio Aburage Deep-Fried Tofu

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 栃尾のあぶらげ / 栃尾のあぶらげの概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Tochio Aburage Deep-Fried Tofu

A deep-fried tofu product from Nagaoka called Tochio *aburage* is characterized by its particularly large size, crispy outer skin, and fluffy inner texture. Each block of Tochio *aburage* is approximately 20 centimeters long, 10 centimeters wide, and 3 centimeters thick, which is much bigger than other similar products. Those who are familiar with Japanese cuisine may notice that the word *aburage* is a variant of *abura-age*, a common term for deep-fried tofu.

Aburage Origin Stories

Aburage is thought to have originated in Tochio, an area in the northeastern part of Nagaoka, during the Edo period (1603–1867). How and why it was created is unknown, but some believe that a priest from nearby Akiba Shrine asked a tofu maker to come up with a special souvenir for the shrine’s numerous pilgrims. According to another story, *aburage* was developed as a snack to pair with sake during meetings related to horse trading in Tochio, which was one of the three largest horse markets in Echigo Province (present-day Niigata Prefecture). At the time, it was common for horse owners and merchants to discuss business and reach verbal agreements over food and drink, rather than to sign written contracts.

Production

Tochio *aburage* is deep-fried once to make it expand and a second time to make the outside crispy. First, blocks of firm, high-quality tofu are deep-fried at approximately 110 degrees Celsius for 15 to 20 minutes. This way, the tofu cooks slowly and greatly increases in size, which creates the distinctly airy, spongy inner texture. Next, the blocks of tofu are moved to vats where oil is heated to about 175 degrees Celsius and

are deep-fried for just a few minutes, producing the characteristically crispy outer skin. The cooked *aburage* blocks are then removed from the vats, skewered on rods, and placed on a rack to cool and drain excess oil. Each shop uses its own tofu recipes and deep-frying techniques, resulting in slightly different flavors and textures.

How to Enjoy Aburage

Tochio *aburage* can be eaten freshly fried at tofu shops, ordered at restaurants that offer regional cuisine, or purchased precooked and reheated at home. At establishments with eat-in options, *aburage* is sliced into bite-sized strips and served with toppings such as soy sauce, miso paste, or flavored salts. When purchasing packaged *aburage* to prepare at home, it is recommended to reheat it in a frying pan to maintain the crispy outer texture. Please note that packaged *aburage* should be kept refrigerated and consumed within about five days.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

栃尾のあぶらげ（揚げ豆腐）

長岡の揚げ豆腐「栃尾あぶらげ」は、非常に大ぶりで、外はサクサク、中はふんわりとした食感が特徴です。栃尾あぶらげは1枚が長さ約20センチ、幅約10センチ、厚さ約3センチで他の似たような油揚げ商品よりもかなり大きいサイズです。日本料理に詳しい人なら、「あぶらげ」という言葉が揚げ豆腐の一般用語である「油揚げ」の異なる言い方であることに気づくかもしれません。

あぶらげ起源物語

あぶらげは、江戸時代（1603年～1867年）に長岡市北東部の栃尾で発祥したと考えられています。どのように誕生したのかは不明ですが、近くの秋葉神社の神官が豆腐屋に依頼し、大勢の参拝客のために作ったのが始まりとの説があります。その他、越後の国（現在の新潟県）の三大馬市場の一つであった栃尾で、馬の取引のため集まる人々への酒のつまみとして開発されたという説もあります。当時は書面による契約書に署名するのではなく、馬主と商人が飲食をしながら商談し、口頭で契約することが一般的でした。

生産

栃尾あぶらげは一度揚げて膨らみを出し、二度目に揚げると外がパリッと仕上がります。最初に、上質な木綿豆腐を約110℃で15～20分揚げます。そうすると、豆腐はゆっくりと調理され、サイズが非常に大きくなり、独特のふわふわとしたスポンジのような内側の食感が生まれます。次に、約175℃に熱した油が入った専用フライヤーで数分間揚げると、特徴的なパリッとした外側に仕上がります。

ます。調理が済んだあぶらげを鍋から取り出し、棒で串に刺してラックに置き、冷まして余分な油を取り除きます。各店、それぞれ独自の豆腐レシピや揚げ方があるため、味や食感が微妙に異なります。

あぶらげの楽しみ方

栃尾あぶらげは、豆腐屋さんで揚げたてを味わったり、郷土料理店で注文したり、調理済みのものを購入して自宅で温めたりすることができます。イトイン可能な店ではあぶらげを一口サイズにスライスし、醤油、味噌、味塩などのトッピングを添えて提供します。パック入りのものを購入してご家庭で調理する場合は、表面のパリっとした食感を残すためにフライパンで温め直すことをおすすめします。なお、袋入りあぶらげは冷蔵保存し、5日以内に召し上がりください。

002-014

Sasa Dango Dumplings

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 笹団子 / 笹団子の概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Sasa Dango Dumplings

Some of the most popular traditional confections from Niigata Prefecture are *sasa dango*: steamed, chewy *dango* (rice flour dumplings) that come wrapped in *sasa* bamboo leaves. The sweet but not excessively saccharine treats are made from Niigata's renowned rice, mugwort, and red bean paste. Long before confectioneries began producing *sasa dango* in large quantities, many Niigata residents made them at home, using bamboo leaves for their antiseptic properties to prevent spoilage. Some families continue the practice to this day.

Sasa Dango Production

To make *sasa dango*, crushed mugwort leaves are kneaded into a rice flour-based mixture, resulting in a sticky, jade-colored dough with an herbal taste. The dough is then used to cover a ball of sweet red bean paste. Next, the resulting dumpling is wrapped in several bamboo leaves and securely tied with a string of sedge (a grass-like plant). While typical *dango* are spherical, *sasa dango* are cylindrical. Both the shape and the tying method are reminiscent of straw bales that were historically used to store and transport rice. The tied *sasa dango* are steamed in batches, which infuses the dumplings with subtle flavors from the bamboo leaves. To eat *sasa dango*, untie the sedge string and peel back the leaves, like a banana, to reveal the green, chewy dumpling inside.

Seasonal Associations

Sasa dango are traditionally associated with spring, when mugwort is in season. In Niigata Prefecture, there is a long-standing custom of eating *sasa dango* for the early May celebration of Tango no Sekku (also known as Children's Day). This is notable

because in many other regions, the preferred Tango no Sekku confection is oak leaf-wrapped *kashiwa mochi*. Although *sasa dango* consumption remains highest in spring, they are now available throughout the year and are a popular gift from Niigata in any season. Please note that *sasa dango* kept at room temperature should be eaten within two to four days (depending on the shop where they were made).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

笹団子

新潟県の伝統的なお菓子といえば、笹団子。笹の葉に包まれたモチモチの蒸し団子（米粉の英語でいうdumpling）です。過度に甘すぎないお菓子は、新潟の名産である米、よもぎ、そして小豆の餡で作られています。笹団子が大量生産されるずっと前から、新潟県では多くの家庭が腐敗を防ぐ目的で笹の葉を使い、団子を作ってきました。今日でもその習慣を続けている家庭があります。

笹団子の製造

笹団子を作るには、挽いて細かくしたヨモギの葉を米粉ベースの粉の中に混ぜ合わせ、粘りがあり、ハーブ香りのする翡翠色の生地仕上げます。そして丸めたあんこを生地で包みます。次に、仕上がった団子を数枚の笹の葉で包み、スゲ（草のような植物）の紐でしっかりと結びます。一般的に団子は丸い形をしていますが、笹団子は円筒形です。形状も結び方も、歴史的に米の保管や輸送に使用されていた俵に似ています。結ばれた笹団子を数個まとめて同時に蒸すと、笹の葉の香りが団子に移ります。笹団子を食べるときはスゲの紐をほどき、バナナのように葉を剥くと、中から緑色のモチモチした団子が現れます。

季節に関すること

笹団子は伝統的にヨモギの季節である春を連想させます。新潟県では、子供の日としても知られる端午の節句の5月初旬のお祝いに笹団子を食べる習慣が古くからあります。他の多くの地域に普段選ばれる端午の節句の菓子は柏の葉で包んだ柏餅ですから、これは注目すべき内容です。笹団子の消費量は依然として春が最も多いですが、現在では一年中販売されており、新潟土産として季節を問わず人気があります。笹団子は常温で保存する場合は（製造したお店によって）2～4日以内に食べるように注意しましょう。

002-015

Shoga Joyu Ramen (Ginger and Soy Sauce Ramen)

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 生姜醤油ラーメン / 生姜醤油ラーメンの概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Shoga Joyu Ramen (Ginger and Soy Sauce Ramen)

A Nagaoka comfort food called *shoga joyu* ramen is a savory noodle soup brimming with ginger and soy sauce flavors. It is considered one of the best varieties in Niigata Prefecture, which is famous for the quality of its ramen. Due to the popularity of *shoga joyu* ramen, it is also known as Nagaoka-style ramen.

Shoga joyu ramen is characterized by a mellow ginger taste, which results from cooking this key ingredient in soy sauce-flavored broth. Simmering the ginger yields a smoother flavor compared to adding raw or pickled ginger as a garnish. Each shop uses its own recipe for the soup broth, but the ramen toppings are generally the same: spinach, fermented bamboo shoots (*menma*), spring onions, slices of roasted pork, and a sheet of nori seaweed. As with other types of ramen, a popular way to enjoy it is to hold the chopsticks in one hand and the Chinese soup spoon (*rengé*) in the other, alternating between eating the noodles and sipping the warm, savory broth.

Ramen originated in China, but Japan has developed its own distinct variations, and ramen enthusiasts often travel the country to try regional specialties. One might assume that *shoga joyu* ramen is a warm comfort food for Nagaoka's snowy winters, but it is in high demand year-round. Fans of the dish praise it as a hearty, reasonably priced meal with a rich and satisfying flavor.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

生姜醤油ラーメン

長岡のソウルフードは生姜醤油ラーメンと呼ばれる、生姜と醤油の風味豊かな麺入りスープです。品質を誇るラーメンとして有名で、新潟県でも最高一杯とされています。生姜醤油ラーメンはその人気から、長岡系ラーメンとも呼ばれています。

生姜醤油ラーメンは、醤油味のスープで要となる材料の生姜を煮込むことで引き出される、まろやかな生姜の風味を特徴としています。生姜を煮ることで、生の生姜や紅生姜を具として加えるよりも柔らかな味わいになります。スープは各店舗独自のレシピで作られていますが、具はほぼ同じで、ほうれん草や発酵させたタケノコ（メンマ）、ネギ、チャーシュー、海苔一枚です。他のラーメンの種類と同様に、一方の手に箸、もう一方の手にレンゲを持ち、麺を食べたり温かい風味良好なスープをすすったりして食べるのが人気の食べ方です。

ラーメンは中国発祥ですが、日本では独自のバリエーションが発展しており、ラーメン愛好家は地域の名物を食べるために日本中を旅することがよくあります。生姜醤油ラーメンは、長岡の雪深い冬に食べる温かいソウルフードだと思われるかもしれませんが、年間を通じて高い需要があります。この料理のファンはボリュームがあり、手頃な価格で、豊かで満足感のある味わい深い食事として高く評価しています。

002-016

Hegi Soba Noodles

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】へぎそば / へぎそばの概要

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Hegi Soba Noodles

A variety of soba (buckwheat noodles) from Niigata Prefecture, known as *hegi soba*, is made with seaweed as a binding agent and served coiled into bite-sized portions on a tray called a *hegi*. The seaweed binding agent makes these noodles smoother and more elastic than regular soba. The taste, texture, and presentation of *hegi soba* have made it a popular dish among residents and visitors alike.

A Brief History

Soba noodles can be made from buckwheat flour alone, but often incorporate a binding agent, most commonly wheat flour. The binding agent used in *hegi soba* is a variety of red seaweed (*funori*). Due to its sticky properties, the seaweed has historically been utilized as a thickening agent in cooking and as an adhesive paste in crafts, textiles, and hairstyling products. For example, the same red seaweed has long been used in Niigata to smooth and strengthen spun thread. *Hegi soba* was supposedly developed in the Chuetsu region of Niigata Prefecture, which includes Nagaoka, when a soba shop owner recognized the potential of using *funori* as a binding agent for noodles. Careful research and experimenting with ingredient ratios eventually led to the creation of what is now known as *hegi soba*.

How to Enjoy Hegi Soba

Hegi soba is always served cold, looped in small portions that resemble skeins of thread. Such presentation is considered both attractive and practical. Cold soba noodles tend to tangle and stick together, making it difficult to pick up the desired quantity. Serving *hegi soba* arranged in coils makes it possible to get the perfect amount for each mouthful.

The *hegi soba* noodles are sometimes topped with nori seaweed strips, but are otherwise served bare, with no additions or seasoning. Instead, the meal comes with a cup of cold *tsuyu*, savory dipping sauce made from dashi broth and soy sauce. To eat *hegi soba*, pick up a loop of noodles with chopsticks and dip them in the *tsuyu* before eating.

Various condiments can be added to the *tsuyu* to alter and enhance the flavor of the meal. Common choices include chopped spring onions, wasabi, *shichimi* spice, and ground sesame seeds. Try *hegi soba* with the plain *tsuyu* first and then experiment by adding small quantities of toppings at a time to see how the flavors change. At some point, waitstaff may place a pot of hot *soba-yu* (water that was used to boil the noodles) on the table. After eating all the noodles, pour the *soba-yu* into the remaining *tsuyu* to make a warm, soup-like beverage to finish the meal.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

へぎそば

「へぎそば」として知られている新潟県のそばは、海藻をつなぎとして使用し、一口大に巻いて「へぎ」と呼ばれるトレイに盛り付けて提供されます。海藻のつなぎにより、通常のそばよりも滑らかで弾力性のある麺になります。へぎそばの味や食感や盛り付けの見た目は、住民だけでなく観光客にも人気の料理です。

略史

そばはそば粉だけから作ることもありますが、多くの場合つなぎが使われ、中でも小麦粉が最も一般的です。へぎそばのつなぎには紅藻の一種である布海苔（ふのり）が使われています。この海藻はその粘着性により、歴史的に調理用の増粘剤として、また工芸品や織物、そしてヘアスタイリング製品の粘着剤として利用されてきました。例えば、新潟県では、紡いだ糸を滑らかにし、強くするために布海苔が古くから使われてきました。へぎそばは、そば屋の店主が布海苔を麺のつなぎとして使用できることに着目し、新潟の中越地域で開発されたと言われています。徹底的な調査と材料の配合比率を研究した結果、現在のへぎそばが誕生しました。

へぎそばの楽しみ方

へぎそばは常に冷たく、紡いだ糸を巻き整えたかのように、小さく曲げて束にしたものが提供されます。このような盛り付けは魅力的かつ実用的であると考えられます。冷たいそばは絡んで互にくっ付き

やすく、適量をすくえないことがあります。へぎそばはコイル状に並べて盛り付けられているので、毎回ちょうど良い量を頂くことができます。

へぎそばには海苔がトッピングされることもありますが、それ以外は何も加えたり味付けしたりせずにそのまま提供されます。代わりに、だしと醤油から作られた冷たいつゆという風味豊かなつけ汁が入ったカップが付いてきます。へぎそばを食べるときは、麺の束を箸でつまみ、つゆに浸して食べます。

さまざまな調味料をつゆに加えて、料理の風味を変えたり強めたりすることができます。一般的には、刻みネギ、わさび、七味、すりゴマなどがチョイスされます。まずは普通のつゆだけでへぎそばを味わってから、次に少量ずつトッピングを加えて味の変化を楽しんでみましょう。食事の最中で店員が温かいそば湯（麺を茹でる際に使用した湯）の入ったポットをテーブルの上に置くことがあります。そばを全て食べ終えた後、残ったつゆにそば湯を注ぎ温かいスープのような飲み物を作って食事を終えます。

002-017

Echigo Hillside Park

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 国営越後丘陵公園 / 国営越後丘陵公園の概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Echigo Hillside Park

The Echigo Hillside Park is a national government park on the western edge of Nagaoka with a vast recreational area that contains carefully landscaped gardens, nature trails, and an abundance of indoor and outdoor attractions. The park's sprawling 340 hectares are split into two main areas, the northern Kenko (Health Promotion) Zone and the southern Satoyama Field Museum. The Kenko Zone is mostly dedicated to recreational activities and includes a large rose garden, a fountain pond, and several playgrounds. In contrast, the Satoyama Field Museum primarily consists of natural landscapes with extensive areas for hiking and exploring. Numerous trails, attractions, and exhibits make it possible for visitors of all ages to enjoy the park year-round.

Admission, Services, and Amenities

A one-day pass is 450 yen for adults, 210 yen for those aged 65 and older, and free for children in junior high school and younger. Two-day passes cost 500 yen and 250 yen, respectively. Admission is free from December to March. Ample paid parking is available in front of the main gate.

Strollers, wheelchairs, tarps, walkers, and tents can be borrowed free of charge at the main gate. During weekends and national holidays, visitors can use free shuttle buses to easily access different areas of the park. Small shops and cafés, a restaurant, and several rest areas provide comfortable indoor spaces to relax and recharge. Coin lockers, accessible restrooms, nursing rooms, first-aid facilities, and smoking areas are also available.

Kenko Zone

One of the most popular attractions in the Kenko Zone is the Fragrant Rose Garden, where winding paths allow for a leisurely stroll among 2,400 colorful rose bushes representing around 800 species. The garden is divided into eight main areas featuring native and non-native rose species. For example, the Fragrance Area groups roses by scent type, such as fruity or spicy, and the Color Area showcases the roses through a gradation of hues.

The nearby Flower Garden is a large, 3,000-square-meter space dedicated to seasonal flowers. From April to May, it is covered with 180,000 brightly colored tulips, and during August, tall, vibrant sunflowers herald the end of summer. In September and October, approximately 300,000 pink, purple, and white cosmos flowers bloom on the grounds.

The park's iconic, cloud-shaped "fluffy dome" trampolines, slides, ziplines, and the grass sledding area are popular with children. A big water-themed playground with spouting water tunnels, fountains, and water-pumping cannons is perfect for families and helps to stave off summer heat. A musical fountain show occurs every 30 minutes at the nearby pond's Fantasy Fountain; on summer evenings, the streams of water are illuminated by colorful lights. Some of the winter pastimes are skiing, sledding, and a snowshoe course through the forest.

Other areas in the Kenko Zone include a space for outdoor activities, an observatory that offers a 360-degree view of the park, and picnic spaces with barbecue equipment available for rent.

A special land plot located on the way to the observatory is dedicated to *yukiwariso* (literally "flower that breaks through the snow"), also known as hepatica or bird's-eye primrose. These flowers, a symbol of Nagaoka, are among the first to appear as the snow melts, blooming in pink, white, and bluish-purple hues. *Yukiwariso* primroses have become rarer due to habitat loss and overpicking, but they are carefully cultivated in the Echigo Hillside Park. The dedicated area contains approximately 200,000 plants, and about 10,000 more are added every year.

Satoyama Field Museum Area

Satoyama (literally “village mountains”) were mountainous areas where people used to farm, forage, and gather firewood, using the natural resources in a sustainable way that helped conserve the local ecosystems. In the center of the Satoyama Field Museum, two traditional houses stand beside a rice field, reminiscent of a village from the past. The smaller house is a restored thatched-roof building from the Edo period (1603–1867). It retains the layout and appearance of a rural home, complete with old furnishings, and provides a sense of what everyday life may have been like in Echigo Province (present-day Niigata Prefecture). The larger house was constructed using materials recovered from a Meiji-period (1868–1912) building. The exhibits include items typically used in *satoyama*, such as agricultural equipment and straw outerwear, as well as displays related to silk production.

On the nature trails, leisurely walks or longer hikes across the forests and fields are a great chance to encounter the many birds, tanuki racoon dogs, hares, and other wildlife that inhabit the area. Along the Flower Forest trail, wild grasses and flowers abound from spring to autumn, and over a million dogtooth violets bloom shortly after winter’s end. The trail leads to an observation point with a panoramic view of the surrounding landscape and the Three Mountains of Echigo (Mt. Hakkai, Mt. Echigo-Komagatake, and Mt. Nakanodake).

Two wetlands provide habitat for various aquatic plants, insects, and amphibians, including the Japanese black salamander, and serve as important conservation sites for several endangered species. The dirt trails, wooden bridges, and boardwalks ensure easy passage around the wetlands and closeup views of the bountiful flora and fauna.

Other activities in this zone include “park golf” (a cross between croquet and golf) with free equipment and a playground with a small obstacle course designed for younger children.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

越後丘陵公園

越後丘陵公園は、長岡市の西端に位置する国営公園で、その広大なレクリエーションエリアには手入れの行き届いた庭園や自然遊歩道、そして豊富な屋内外のアトラクションがあります。広さは340ヘクタールで、北側の「健康ゾーン」と南側の「里山フィールドミュージアム」の2つの主要エリアに分かれています。健康ゾーンでは主にレクリエーション活動が行われており、大きなバラ園や噴水と池、そしていくつかの遊び場などがあります。対照的に、里山フィールドミュージアムは主に自然景観で構成されており、ハイキングや散策のための広大なエリアが設けられています。多数のトレイルやアトラクション、展示物などで、あらゆる年齢層の訪問者が一年中公園を楽しむことができます。

入場料、サービス、アメニティ

1日券は大人450円、65歳以上210円、中学生以下は無料です。2日券はそれぞれ500円、250円です。12月から3月までは入場無料です。正門前には広々とした有料駐車場があります。

正門にてベビーカー、車椅子、防水シート、歩行器、テントを無料で借りることができます。週末や祝日には無料シャトルバスが運行されており、園内の各エリアへ簡単にアクセスできます。小さなショップやカフェ、レストラン、そしていくつかの休憩所があり、リラックスして休息できる快適な屋内スペースを提供しています。コインロッカー、多目的トイレ、授乳室、救護室、喫煙所もあります。

健康ゾーン

健康ゾーンで最も人気のある場所の1つは、「香りのバラ園」です。曲がりくねった小道があり、約800種、2,400本の色とりどりのバラの茂みの中をゆっくりと散策できます。庭園では、在来種と外来種のバラを8つの主要エリアに分けて生育しています。例えば、「香りのエリア」はフルーティーやスパイシーといったバラの香りのタイプごとに分けられており、「色彩のエリア」はバラの花の色によるグラデーションが作られています。

すぐ近くにある「花の丘」は、季節の花をテーマにした3,000平方メートルの広々とした空間です。4月から5月にかけては、鮮やかな色の180,000本のチューリップが咲き誇り、8月には背の高い鮮やかな色合いのひまわりが夏の終わりを告げます。9月から10月にかけては、ピンクや紫、白のコスモスが約300,000本咲きます。

公園を象徴する雲の形をした「ふわふわドーム」のトランポリン、滑り台、ジップライン、芝そりエリアは子供たちに人気です。水が勢いよく噴出するトンネル、噴水、水を汲み上げる大砲を備えた水をテーマにした大きな遊び場は、家族連れに最適で、夏の暑さ対策として役立ちます。「音楽噴水」では30分ごとに音楽に連動した噴水ショーの演出があり、夏の夜には、水の流れが色とりどりの光で照らされます。冬の娯楽としては、スキーやそり滑り、森の中のスノーシューコースなどがあります。

その他、健康ゾーンにはアウトドアができるスペース、公園を360度見渡せる展望台、そしてバーベキュー用品のレンタルができるピクニックスペースなどがあります。

展望台への道の途中の、専用エリアには雪割草（英語でヘパティカ、バースアイプリムローズとも呼ばれる）が植えられています。雪が解けると真っ先に現れる花の一種で、ピンクや白、青紫色に咲き、長岡市のシンボルとされています。雪割草は生息地の減少と乱獲により希少になってしまいましたが、国営越後丘陵公園では大切に育てられています。専用エリアには約20万株があり、毎年約1万株が追加されます。

里山フィールドミュージアム

里山（文字通り「里（村）の山」）は、人々が農耕、木の実や山菜などの採集、薪集めを行っていた山の麓の地で、地域の生態系の保護に役立つ持続可能な方法で天然資源を利用していました。里山フィールドミュージアムの中心には、田んぼの横に2軒の古民家が建っており、昔ながらの村のように見えます。小さい方の家は、江戸時代（1603年～1867年）の茅葺き民家を復元したものです。田舎の家の間取りと見た目をそのまま残し、古い調度品が揃っている様子は、越後国（現在の新潟県）での日常生活がどのようなものだったのかを感じさせてくれます。大きい方の家は、明治時代（1868年～1912年）の建物から回収された素材を使用して建設されました。農機具や蓑などの里山で使われていた品々や養蚕関連の品々も展示されています。

自然遊歩道で森や野原の中をゆっくり散歩することや、長時間のハイキングをすることは、この地域に生息する多くの鳥、タヌキ、野ウサギ、その他の野生動物に出会える絶好のチャンスとなります。「花の森」の遊歩道には、春から秋にかけて野草や花々が豊富に生い茂り、冬が終わるとすぐに100万本を超えるカタクリが開花します。遊歩道は、越後三山（八海山、越後駒ヶ岳、中ノ岳）と周囲の風景を一望できる展望ポイントへと続いています。

2カ所ある湿地は、さまざまな水生植物、昆虫、クロサンショウウオを含む両生類の生息地となっており、複数の絶滅危惧種の重要な保護地としても機能しています。未舗装の道、木製の橋、遊歩道を歩いていると、湿地周りの散策や豊かな動植物を間近で観察することができます。

このゾーンでは他にも、無料の貸出道具一式を備えたパークゴルフ（クロッケーとゴルフの融合）や、小さな子供向けに造られた小さな障害物コースのある遊び場などのアクティビティが利用可能です。

002-018

Yukiguni Botanical Gardens

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】雪国植物園 / 雪国植物園の概要

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Yukiguni Botanical Gardens

The Yukiguni (“Snow Country”) Botanical Gardens contain over 850 species of plants native to the snow-heavy *satoyama* areas of Nagaoka. *Satoyama* (literally “village mountains”) are areas in the foothills where people traditionally farmed, foraged, and gathered firewood. The use of natural resources was carefully managed in a sustainable way that helped conserve local ecosystems. With technological advances and urban migration, *satoyama* no longer play a part in people’s daily lives. Without adequate maintenance, these valuable ecosystems are increasingly becoming overgrown and damaged by invasive species, threatening their biodiversity. The Yukiguni Botanical Gardens are specially dedicated to preserving a balanced *satoyama* environment without any alpine, coastal, non-native, or ornamental plants. Even though the grounds look somewhat wild compared to more decorative, manicured gardens, they represent an authentic natural environment that encourages visitors to spend time exploring, learning, and enjoying the scenery.

The Yukiguni Botanical Gardens are open between mid-March and mid-November from 9:00 a.m. to 5:00 p.m. Admission is 400 yen for adults, 50 yen for students, and free for pre-school children. Guided tours are available with prior reservation by phone. Please note that tours take one to two hours and are conducted in Japanese.

A Haven for Native Species through the Seasons

Many species of native plants bloom from spring to autumn at the Yukiguni Botanical Gardens. Some notable spring flowers are *yukiwariso* primrose (*Hepatica nobilis* var. *japonica*), dogtooth violet, mountain cherry, and rabbit-ear iris. Summer is the season for Ezo hydrangea, bellflower, silk tree, and several types of lilies. The species that

bloom in autumn include willow herb, red spider lily, Japanese beautyberry, gentian, and Japanese silverleaf (*tsuwabuki*). Various birds, insects, and other animals can be seen in the gardens throughout the year, including close to 80 species of birds, 45 species of butterflies, 40 species of dragonflies, and forest animals such as rabbits and tanuki raccoon dogs.

Yukiwariso Primrose: A Symbol of Nagaoka

One of the plants that the Yukiguni Botanical Gardens are particularly focused on preserving is *yukiwariso* (literally “flower that breaks through the snow”), also known as hepatica or bird’s-eye primrose. These flowers are among the first to appear as the snow melts, making them a symbol of the coming spring. They bloom low to the ground in pink, white, and bluish-purple, blanketing *satoyama* slopes as a colorful herald of the changing seasons. *Yukiwariso* primroses have become rarer due to habitat loss and overpicking, but in Nagaoka they are carefully cultivated at the Yukiguni Botanical Gardens, Myohoji Temple, and the Echigo Hillside Park.

A Place for the Community

The Yukiguni Botanical Gardens were created in 1984 to serve the community and promote nature conservation. The staff are primarily volunteers, including senior citizens dedicated to passing on their knowledge to younger generations. Students attend classes at the gardens, and public courses are held on topics that appeal to children, such as raising rhinoceros beetles. Fireflies can be seen from mid-June to early July during special seasonal night hours. Birdwatching events guided by the Nagaoka Wild Bird Society take place in spring and autumn.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雪国植物園

雪国植物園には、長岡市の多雪地帯の里山エリアに自生する植物が850種以上あります。里山とは、人々が伝統的に農耕、木の実や山菜などの採集、薪集めを行った山麓の地帯です。天然資源の使用は、地域の生態系の保護に役立つ持続可能な方法で慎重に管理されてきました。技術の進歩と都市への人口移動により、里山は人々の日常生活の一部ではなくなりました。適切な手入れ不足でこれらの繊細な生態系は次第に過剰に生い茂りすぎ、外来種によっても被害を受け、その生物多様性が脅かされています。雪国植物園は、高山植物や海岸植物、外来植物、観賞植物などのない、バランスのとれた里山の環境を維持することに力を入れています。装飾的で綺

麗に手入れされた庭園と比べると、この場所はいくぶん野生的に見えますが、訪問者が景色を探索し、学び、楽しむことに時間を費やせる本物の自然環境を提供しています。

雪国植物園の開園期間は、3月中旬から11月中旬まで、開園時間は午前9時から午後5時までです。入園料は大人400円、学生50円、就学前児童は無料です。ガイド付きツアーは電話での事前予約制です。ツアーの期間は1～2時間で、日本語で行われます。

四季を通じた在来種の楽園

雪国植物園では、春から秋にかけて、複数の在来植物が咲き誇ります。春の代表的な花としては、雪割草 (*Hepatica nobilis* var. *japonica*)、カタクリ、ヤマザクラ、カキツバタなどがあります。夏はエゾアジサイ、キキョウ、ネムノキ、数種類のユリなどの植物が見られます。秋に花を咲かせるのは、アカバナ、ヒガンバナ、ムラサキシキブ、リンドウ、ツワブキなどがあります。植物園には、80種近くの鳥、45種の蝶、40種のトンボ、森林動物であるウサギやタヌキなど、年間を通じて様々な鳥や昆虫やその他の動物が見られます。

長岡のシンボル「雪割草」

雪国植物園が特に保護に力を入れている植物の一つは雪割草です。英語でヘパティカ、バースアイプリムローズとも呼ばれます。雪が解けると真っ先に現れる花の一種で、春の訪れの象徴とみなされます。ピンク、白、青紫色で地面に近い低めの位置で咲き、季節の移り変わりを色鮮やかに告げる花として里山の斜面を覆い尽くします。雪割草は生息地の減少と乱獲により希少になってしまいましたが、長岡市では雪国植物園や妙法寺、国営越後丘陵公園などで大切に育てられています。

コミュニティのための場所

雪国植物園は、自然保護の推進に加えてコミュニティの場として1984年に設立されました。スタッフは主にボランティアで、その中には若い世代に知識を伝えることを目指す高齢者も含まれています。学生が園内で授業を受けることもあり、カブトムシの飼育など子供の興味を引くテーマの公開講座も開催されます。6月中旬から7月上旬の季節の特別夜間開園ではホタルが見られます。春と秋には「長岡野鳥の会」の後援のもと探鳥会が開催されます。

002-019

Yukiguni Botanical Gardens

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 雪国植物園 / 雪国植物園の概要

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Yukiguni Botanical Gardens

The Yukiguni (“Snow Country”) Botanical Gardens contain more than 850 species of plants native to the snow-heavy *satoyama* areas of Nagaoka. *Satoyama* (literally “village mountains”) are areas in the foothills where people used to farm, forage, and gather firewood. The use of natural resources was carefully managed in a sustainable way that helped conserve local ecosystems. With the advance of technology and depopulation of rural areas, *satoyama* no longer play a part in people’s daily lives. Left alone, these delicate ecosystems revert to regular forestland, increasingly becoming overgrown and damaged by invasive species, which threatens their biodiversity. The Yukiguni Botanical Gardens are dedicated to preserving a balanced *satoyama* environment without any alpine, coastal, non-native, or ornamental plants.

Navigating the Gardens

Seasonal flowers that are currently in bloom are marked on a large map (in Japanese) to the right of the ticket counter. The map also has photos showing what birds, butterflies, and other insects might be encountered. Exploring every path through the Yukiguni Botanical Gardens may take up to five hours, so checking the seasonal map is recommended before planning a route within the available time.

A Haven for Native Species through the Seasons

Various native plants bloom in the gardens from spring to autumn. These include *yukiwariso* primrose (*Hepatica nobilis* var. *japonica*), dogtooth violet, mountain cherry, and rabbit-ear iris in spring; Ezo hydrangea, bellflower, silk tree, and several types of lilies in summer; and willow herb, red spider lily, Japanese beautyberry, gentian, and Japanese silverleaf (*tsuwabuki*) in autumn. Many birds, insects, and other

animals can be seen throughout the year, including close to 80 species of birds, 45 species of butterflies, 40 species of dragonflies, and forest animals such as rabbits and tanuki raccoon dogs.

Yukiwariso Primrose: A Symbol of Nagaoka

One of the plants that the Yukiguni Botanical Gardens are particularly focused on preserving is *yukiwariso* (literally “flower that breaks through the snow”), which is also known as hepatica or bird’s-eye primrose. These flowers are one of the first to appear as the snow melts, making them a symbol of the coming spring. They bloom low to the ground in pink, white, and bluish-purple, blanketing the *satoyama* slopes as a colorful herald of the changing seasons. *Yukiwariso* flowers have become rarer due to habitat loss and overpicking, but in Nagaoka they are carefully cultivated at the Yukiguni Botanical Gardens, Myohoji Temple, and the Echigo Hillside Park.

A Place for the Community

The Yukiguni Botanical Gardens were created in 1984 to serve the community and promote nature conservation. The staff are primarily volunteers, including many senior citizens dedicated to passing on their knowledge to younger generations. Special public courses are held at the gardens on topics that appeal to children. Fireflies can be seen from mid-June to early July during special night hours. Birdwatching events under the auspices of the Nagaoka Wild Bird Society take place in spring and autumn.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雪国植物園

雪国植物園には、長岡市の多雪地帯の里山エリアに自生する植物が850種以上あります。里山とは、人々が習慣的に農耕、木の実や山菜などの採集、薪集めを行った山麓の地帯です。天然資源の使用は、地元の生態系の保護に役立つ持続可能な方法で慎重に管理されてきました。技術の進歩と農村地域の人口過疎化に伴い、里山は人々の日常生活の一部ではなくなりました。放置しておくと、これらの繊細な生態系は過剰に生い茂りすぎ、外来種によっても被害を受け、その生物多様性が脅かされています。雪国植物園は、高山植物や海岸植物、外来植物、観賞植物などのない、バランスのとれた里山の環境を維持することに力を入れています。

庭園内を散策する

チケット料金所の右側にある植物園の大きな地図には、現在咲いている季節の花が（日本語で）表示されています。また、地図に貼られている写真は、どのような鳥、蝶、その他の昆虫に遭遇できるかがわかるようになっています。雪国植物園をすべて散策するには最大5時間かかる場合があるため、季節ごとの地図を確認し、予定の時間内に回れる散策ルートをもっとて計画しておくことをお勧めします。

四季を通じた在来種の楽園

雪国植物園では、春から秋にかけて、複数の在来植物が咲き誇ります。春は雪割草（*Hepatica nobilis* var. *japonica*）、カタクリ、ヤマザクラ、カキツバタ、夏はエゾアジサイ、キキョウ、ネムノキ、数種類のユリなど、秋にはアカバナ、ヒガンバナ、ムラサキシキブ、リンドウ、ツワブキなどが咲きます。また、80種近くの鳥、45種の蝶、40種のトンボ、森林動物であるウサギやタヌキなど、年間を通じて多くの鳥や昆虫やその他の動物を見ることができます。

長岡のシンボル「雪割草」

雪国植物園が保護に特に力を入れている植物の一つは雪割草です。英語でヘパティカ、バースアイプリムローズとも呼ばれます。雪が解けると真っ先に現れる花の一種で、春の訪れの象徴とみなされます。ピンク、白、青紫色で地面に近い低めの位置で咲き、季節の移り変わりを色鮮やかに告げる花として里山の斜面を覆い尽くします。雪割草は生息地の減少と乱獲により希少になってしまいましたが、長岡市では雪国植物園や妙法寺、国営越後丘陵公園などで大切に育てられています。

コミュニティのための場所

雪国植物園は、自然保護活動に加えてコミュニティの場として1984年に設立されました。スタッフは主にボランティアで、その中には若い世代に知識を伝えることを目指す多くの高齢者も含まれています。植物園の施設では子供に魅力があるテーマの特別公開講座が開催されます。6月中旬から7月上旬の特別夜間開園にはホタルが見られます。春と秋には「長岡野鳥の会」の後援のもと探鳥会が開催されます。

002-020

Rakuzan'en Garden

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 楽山苑 / 楽山苑の概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Rakuzan'en Garden

The Rakuzan'en Garden is located on the former grounds of a villa once owned by the Osakaya Miwa family, who were wealthy merchants in the Edo period (1603–1867). The garden is laid out on a steep slope, and the main building commands a panoramic view of the Yoita area of Nagaoka and the mountains beyond. In mid-May, when azalea bushes are in bloom, a special light-up event is held at night with a tea service, concerts, and other performances.

The Osakaya Miwa Family

The Miwa family originally belonged to the warrior class of Etchu Province (present-day Toyama Prefecture), but later moved to Nagaoka and found employment with the Osakaya merchant family. Eventually, they received permission to set up a branch shop in Yoita under the Osakaya name. During the Edo period, the Osakaya Miwa grew wealthy by operating merchant ships that transported rice, salt, and seafood to Kyoto and Osaka and brought textiles, medicines, books, and other goods to Nagaoka. In the mid-eighteenth century, the Osakaya Miwa were considered one of the wealthiest merchant families in the country.

Rakuzantei and the Garden Grounds

The path up the slope winds along castle-like retaining walls, leading to the Rakuzantei house, the heart of the Rakuzan'en Garden. Rakuzantei was built in 1892 by Miwa Juntaro, the 11th head of the Osakaya Miwa family. Though the structure may appear simple, meticulous craftsmanship was employed to create an elegant and comfortable place for entertaining guests. For example, some of the pillars on the veranda were omitted to provide a better view of the town below, and decorative

touches in the sitting rooms, bathroom, and hallways were designed to delight visitors. Substantial investment went into understated, subtle elements of the house and the front garden, including stones transported from across the country and rare woods used in the tokonoma alcoves.

Further up the slope is Sekisui'an, a replica of a tea house that is now preserved at the Northern Culture Museum in the city of Niigata. Beyond Sekisui'an is a small Kannondo Hall that enshrines an eleven-headed sculpture of Kannon, the bodhisattva of compassion, thought to have been carved in the fourteenth century. The multiple heads of this type of Kannon statue are depicted with a wide range of emotions, such as crying, scowling, gazing serenely, and laughing.

Poet-Monk Ryokan

The Osakaya Miwa family maintained a friendship with Ryokan (1758–1831), a Soto Zen Buddhist monk, poet, and calligrapher. Ryokan was born near Nagaoka and spent much of his life as a hermit in the region. He sometimes visited the villa and was particularly close with Ikyoni and Saichi, the daughter and the younger brother of the sixth head of the family, respectively. Saichi eventually became Ryokan's disciple.

Two memorial stones in the Rakuzan'en Garden bear words written by Ryokan. One reproduces a letter sent to Ikyoni while the monk was traveling, asking her to take care of her health during the cold winter. The other quotes Ryokan's writings after Saichi's death, in which the poet-monk contemplates the coming spring that he must spend without his friend.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

楽山苑

楽山苑は、江戸時代（1603年～1867年）の豪商、大坂屋三輪家が所有していた別邸の跡地にあります。当苑は急斜面に位置し、主屋から長岡市与板エリアとその向こうの山々が一望できます。ツツジが咲き誇る5月中旬には、特別に夜間ライトアップが開催され、お茶会やコンサート、他の演目が催されます。

大坂屋三輪家

三輪家はもともと越中国（現在の富山県）の武家でしたが、のちに長岡に移り住み、商家・大坂屋で職を見つけました。その後三輪家は与板に大坂屋の屋号で支店を出す許可を得ました。江戸時代、大坂屋三輪家は米や塩、海産物を京都や大阪に運び、帰りは織物や薬、書籍、その他さまざまな品を長岡に運び入れる廻船業で成功し、豪商となりました。18世紀半ばには、大坂屋三輪家は国の最も裕福な商家の一つとみなされていました。

楽山亭と庭園

城のような擁壁に沿って曲がりくねった坂道を登ると、楽山苑の中心である建物「楽山亭」に至ります。楽山亭は、1892年に大坂屋三輪家11代当主、三輪潤太郎によって建てられました。建物はシンプルに見えますが、お客様をもてなすための優雅で快適な空間を作るため、丁寧な工夫が施されています。例えば、ベランダの柱の一部を省くことで眼下の街並みを眺めやすくしたり、茶室や浴室、廊下などに客人をもてなすための装飾があります。建物と前庭には、全国から運ばれた石や床の間の珍しい木材など、控えめでさりげない要素に対し多額の投資が行われました。

坂をさらに上ったところに、現在は新潟市の北方文化博物館に保存されている茶室「積翠菴」を再現した建物が建っています。積翠菴の先には小さな観音堂があり、14世紀に彫られたとされる十一面観音像が安置されています。この観音像の面は、泣いたり、しかめ面をしたり、平穏に見つめたり、笑ったりなど、さまざまな感情が表現されています。

僧侶・歌人の良寛

大坂屋三輪家は、歌人と書家である曹洞宗の僧侶、良寛（1758年～1831年）と親交がありました。良寛は長岡近郊に生まれ、人生の大部分をこの地域で隠居者として過ごしました。時折別荘を訪れ、特に6代当主の娘である維馨尼と弟の佐一とそれぞれ親交を深めました。後に佐一は良寛の法弟となりました。

楽山苑にある2つの石碑には良寛の言葉が刻まれています。一つは良寛が旅行中に維馨尼に送った、寒い冬の健康を気遣った手紙を再現したものです。もう一つは、佐一の死後に書かれた良寛の引用で、友人がいない中で過ごさなければならぬ来春について思いを巡らせています。

002-021

Rakuzan'en Garden

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 楽山苑 / 楽山苑の概要

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Rakuzan'en Garden

The Rakuzan'en Garden is located on the former grounds of a villa once owned by the Osakaya Miwa family, who were wealthy merchants in the Edo period (1603–1867). The garden is laid out on a steep slope, and the main building was designed to command a panoramic view of the surrounding town and mountains. In mid-May, when the many azalea bushes are in bloom, a light-up event is held at Rakuzan'en after sunset that includes a tea service, concerts, and other performances.

Rakuzantei and the Garden Grounds

A path lined with castle-like retaining walls leads up to the Rakuzantei house, which was built in 1892 by the 11th head of the Osakaya Miwa family. Though the structure may appear simple, skillful craftsmanship was employed to create an elegant and comfortable place for entertaining guests. For example, some of the pillars on the veranda were omitted to provide a better view of the town below, and decorative touches in the sitting rooms, bathroom, and hallways were designed to delight guests. Significant investment went into subtle elements of the house and the front garden, such as stones specially brought from around the country and rare woods used in the tokonoma alcoves.

Further up the slope is Sekisui'an, a replica of a tea house that is now preserved at the Northern Culture Museum in the city of Niigata. Past Sekisui'an is a small Kannon Hall that enshrines a statue of Kannon, the bodhisattva of compassion, in the eleven-headed form. The sculpture is thought to have been carved in the fourteenth century.

The Osakaya Miwa Family

The Miwa family belonged to the warrior class before moving to Nagaoka and finding employment with the Osakaya merchant family. They were eventually granted permission to set up a branch shop in Yoita (now part of Nagaoka). The family grew wealthy by operating merchant ships that transported rice, salt, and seafood to Kyoto and Osaka and brought back textiles, medicines, books, and other goods. In the mid-eighteenth century, the Osakaya Miwa were regarded as one of the wealthiest merchant families in the country.

Poet-Monk Ryokan

The Osakaya Miwa family maintained a friendship with Ryokan (1758–1831), a famous Soto Zen Buddhist monk, poet, and calligrapher. Ryokan was born near Nagaoka and spent a large part of his life as a hermit in the region. He sometimes visited the villa and was particularly close with Ikyoni and Saichi, the daughter and the younger brother of the sixth head of the family, respectively. Saichi eventually became Ryokan's disciple.

Two memorial stones in the Rakuzan'en Garden bear words written by Ryokan. One reproduces a letter sent to Ikyoni while the monk was traveling, asking her to take care of her health during the cold winter. The other quotes Ryokan's writings after Saichi's death, in which the poet-monk thinks about the coming spring that he must spend without his dear friend.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

楽山苑

楽山苑は、江戸時代（1603年～1867年）の豪商、大坂屋三輪家の別邸の跡地にあります。庭園は急斜面に造られ、主屋からは周囲の町や山々を一望できるように設計されています。ツツジが咲き誇る5月中旬には、日没後にライトアップのイベントが開催され、お茶会やコンサート、他の演目などが催されます。

楽山亭と庭園

城のような擁壁に沿った道を進むと、1892年に大坂屋三輪家の11代目当主によって建てられた楽山亭があります。建物はシンプルに見えますが、お客様をもてなすための優雅で快適な空間を作

るため、丁寧な技法が施されています。例えば、ベランダの柱の一部を省くことで、眼下に広がる街並みを眺めやすくなるよう配慮し、茶室や浴室、廊下などに客人をもてなすための装飾があります。建物と前庭には、全国から運ばれた石や床の間の珍しい木材など、控えめでさりげない要素に対し多額の投資が行われました。

坂をさらに上ったところに、現在は新潟市の北方文化博物館に保存されている茶室「積翠菴」を再現した建物が建っています。積翠菴の先には小さな観音堂があり、十一面観音菩薩像が安置されています。この仏像は14世紀に彫られたと考えられています。

大坂屋三輪家

武家であった三輪家は、長岡に移住し商家・大坂屋で職を見つけました。のちに、与板（現長岡市）に支店を構える許可を得ました。大坂屋三輪家は廻船業を運営し、米や塩、海産物を京都や大阪に運び、帰りは織物や菜、書籍、その他さまざまな品を運び入れて、富を築きました。18世紀半ばには、大坂屋三輪家は日本で最も裕福な商家の一つとみなされていました。

僧侶・歌人の良寛

大坂屋三輪家は、有名な歌人と書家である曹洞宗の僧侶、良寛（1758年～1831年）と親交がありました。良寛は長岡近郊に生まれ、人生の大部分をこの地域で隠居者として過ごしました。時折別荘を訪れ、特に6代当主の娘である維馨尼と弟の佐一とそれぞれ親交を深めました。後に佐一は良寛の法弟となりました。

楽山苑にある2つの石碑には良寛の言葉が刻まれています。一つは良寛が旅行中に維馨尼に送った、寒い冬の健康を気遣った手紙を再現したものです。もう一つは良寛が佐一の死後に書かれた内容の引用で、大切な友人がいない中で過ごさなければならぬ来春について思いを巡らせています。

002-022

Myohoji Temple

「越後長岡」観光振興委員会

【タイトル】 妙法寺 / 妙法寺の概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Myohoji Temple

Myohoji was the first head temple (*honzan*) of the Nichiren school of Buddhism built in the Shin'etsu region (present-day Niigata and Nagano Prefectures). It is located on the slope of a low mountain that used to be the site of a fourteenth-century castle in Washima, a rich agricultural area of Nagaoka. Nichiren Buddhism has multiple *honzan* temples across Japan, and as one of them, Myohoji is an important pilgrimage destination for the school's followers. The temple is surrounded by nature and is popular for seasonal flower-viewing, autumn colors, and moss-covered scenery.

History

The influential monk Nichiren (1222–1282) began to preach an interpretation of Buddhism focusing on the Lotus Sutra in 1253. Over time, he gained a large following and had many disciples, who continued to spread his teachings after his death.

Myohoji was founded in 1306 by order of Kazama Nobuaki (d. 1354), a lord from the Shin'etsu region who was reportedly healed from a sickness by Nissho (1221–1323), a direct disciple of Nichiren. Kazama became Nissho's patron, and to commemorate the 25th anniversary of Nichiren's death, he sponsored the founding of the temple that would become Myohoji. It was initially constructed in Kamakura, the seat of the shogun's government, but after Nissho expressed regret over the lack of a high-ranking temple to spread Nichiren's teachings in the north, Myohoji was moved to present-day Nagaoka in 1323.

Most of the temple was reduced to ashes in 1868 during the Boshin War (1868–1869), which was waged between the forces of the new government established under Emperor Meiji (1852–1912) and the supporters of the Tokugawa shogunate. Since

then, Myohoji has been rebuilt on a smaller scale and now welcomes Nichiren followers and other visitors from around the country and abroad.

Temple Grounds

Myohoji is known as the “temple where the flowers bloom.” In spring, the rare *yukiwariso* primrose appears on the mountain slopes, and weeping cherry trees blossom near the Nitenmon Gate. Summer brings blue hydrangeas and delicate lotus flowers, and when autumn comes, tree leaves change to warm shades of red and yellow. For most of the year, the grounds are carpeted with lush green moss.

In the Hondo (Main Hall), the mandala originally created by Nichiren, which is regarded as the principal object of worship, is represented by a group of Buddhist sculptures and objects. A pagoda bearing the sacred words *namu myoho renge kyo* (“glory to the Lotus Sutra”) is flanked by the statues of Shakyamuni, the historical Buddha, and Taho, the Buddha of Abundant Treasures. Each Buddha is accompanied by two bodhisattvas and two guardian deities of the cardinal directions. At the front of the formation is a brightly painted statue of Nichiren. For a guided visit to the Hondo, please inquire at the temple office. Note that tours are provided in Japanese and only when volunteers or temple staff are available.

To the right of the Hondo is the small Kaisando (Founder’s Hall), where daily memorial services are held in honor of Kazama Nobuaki. Next to the Kaisando is the Senbutsudo (Hall of a Thousand Buddhas), a former sutra repository that now enshrines the spirits of the victims of the Boshin War. On the doors of the earthen building are well-preserved plaster reliefs of a dragon and a traveling monk. At the end of a stone path covered with moss is Shichimengu Shrine, which was built in 1693. According to legend, as Nichiren was traveling to his place of exile on Sado Island, he came across a village that was tormented by a malevolent spirit. Using the power of the holy sutras, Nichiren changed the spirit into a guardian called Shichimen, who took the form of a beautiful maiden and a dragon. Now, Shichimen is worshipped as a protector deity of Nichiren Buddhists.

The red Nitenmon Gate, built in 1682, the black Shikyakumon Gate, built in 1677, and Shichimengu Shrine are the only structures at Myohoji that predate the Boshin War. Both gates are designated Tangible Cultural Properties by the city of Nagaoka.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

妙法寺

妙法寺は、信越地方（現在の新潟県と長野県）に最初に建てられた日蓮宗の本山寺院です。長岡市の農業豊かな和島エリアに位置し、14世紀に城があった低山の斜面にあります。日蓮宗には日本全国に複数の本山があり、その一つである妙法寺は、日蓮宗の信徒にとって重要な巡礼先です。自然に囲まれたこの寺院は、四季折々の花や秋の紅葉、苔むす景色が人気です。

歴史

影響力のある僧侶、日蓮（1222年～1282年）は、1253年に法華経を中心とする自身の仏教の解釈を説き始めました。時間が経つにつれ、多くの信徒を獲得し、多くの弟子を持ち、死後も弟子が日蓮の教えを広め続けました。妙法寺は、日蓮の直弟子である日昭（1221年～1323年）が病気を治癒したとされる、信越地方の領主であった風間信昭（1354年没）の命により1306年に開山されました。風間は日昭の後援者となり、日蓮の25回忌にあたり妙法寺となる寺院の建立を後援しました。当初、妙法寺は将軍の所在地である鎌倉に建立されましたが、日昭が北越に日蓮の教えを広める高位の寺院がないことに遺憾の意を表したため、1323年に妙法寺は現在の長岡の地に移転されました。

1868年、明治天皇（1852年～1912年）のもとに樹立された勤皇方軍と徳川幕府方軍の間の戊辰戦争（1868年～1869年）中に妙法寺の大部分が灰燼に帰しました。その後、規模を縮小して再建され、現在、国内外からの日蓮信徒やその他の拝見者を迎えています。

境内

妙法寺は「花の咲くお寺」として知られています。春には山の斜面に珍しいユキワリソウが現れ、二天門付近には枝垂桜が咲きます。夏には青いアジサイや繊細な蓮の花が咲き、秋になると木々の葉が赤や黄色の温かみのある色合いに変わります。一年のほとんどの期間、境内は緑豊かな苔で覆われています。

本堂にある仏像群などが、ご本尊である日蓮作の曼荼羅を表すとされています。「南無妙法蓮華経」という聖なる言葉が記された宝塔の両側には、歴史上の仏陀である釈迦如来と多宝如来の像が置かれています。各如来には2体の菩薩と2体の方位の守護神である天王が伴います。正面には色鮮やかな日蓮聖像が安置されています。本堂の参詣のご希望の方はどうぞ寺務所までお問

い合わせください。参詣案内は日本語で行われ、ボランティアまたは寺院のスタッフが対応できる場合に限りです。

本堂の右側には小さな開山堂があり、そこで風間信昭の供養が毎日行われています。開山堂の近くには、かつての経蔵である千佛堂があり、現在、戊辰戦争の犠牲者を吊っています。土造りの建物の扉には、保存状態の良い龍と旅の僧侶の石膏レリーフが施されています。苔に覆われた石畳の先には、1693年に建立された七面宮があります。伝説によると、日蓮は流刑地である佐渡島へ向かう途中、悪霊に悩まされている村に出くわしました。日蓮は経典の力を用いて、その霊を美しい乙女と龍の姿をした七面という守護神に変えました。現在、七面神は日蓮宗徒の守護神として崇められています。

妙法寺に戊辰戦争以前から残る建造物は、1682年建立の赤い二天門、1677年建立の黒い四脚門、そして七面宮だけです。両門とも長岡市有形文化財に指定されています。

地域番号	003	協議会名	十日町市文化観光推進協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
003-001	十日町の積雪期用具 / 十日町市博物館		251～500ワード	Webページ
003-002	十日町の積雪期用具 / 十日町市博物館		250ワード以内	看板
003-003	へぎそば / 小嶋屋総本店、越後十日町小嶋屋本店、越後十日町小嶋屋和亭、繁蔵田麦そば		250ワード以内	Webページ
003-004	へぎそば		250ワード以内	看板
003-005	ツケナとコーナ（保存食文化） / 道の駅クロステン十日町、四季彩館べじぱーく、いろりとほたるの宿せとぐち、十日町のか～ちゃんと作る採れたてごっつお、山菜取り体験		251～500ワード	Webページ
003-006	ツケナとコーナ（保存食文化）		250ワード以内	看板
003-007	松苧神社本殿		251～500ワード	Webページ その他（アプリ）
003-008	松苧神社本殿		250ワード以内	看板
003-009	神宮寺観音堂・山門 / 神宮寺		250ワード以内	Webページ その他（アプリ）
003-010	旧室岡家住宅		251～500ワード	Webページ
003-011	旧室岡家住宅		250ワード以内	看板
003-012	節季市・チンコロ / チンコロづくり体験 https://www.tokamachishikankou.jp/blog/31942/		250ワード以内	Webページ
003-013	節季市・チンコロ		250ワード以内	看板
003-014	十日町雪まつり		251～500ワード	Webページ
003-015	十日町雪まつり		250ワード以内	看板
003-016	清津峡		251～500ワード	Webページ
003-017	田代の七ツ釜		250ワード以内	Webページ

003-018	田代の七ツ釜	250ワード以内	看板
003-019	棚田 / 儀明の棚田、留守原の棚田	251～500ワード	Webページ その他（アプリ）
003-020	美人林 / 越後松之山「森の学校」キョロロ	251～500ワード	Webページ その他（アプリ）
003-021	美人林 / 越後松之山「森の学校」キョロロ	250ワード以内	看板
003-022	遺跡出土品 / 十日町市博物館	251～500ワード	Webページ
003-023	織物文化 / 十日町市博物館	251～500ワード	Webページ
003-024	織物文化 / 十日町市博物館	250ワード以内	看板
003-025	織物工程 / 十日町市博物館	250ワード以内	Webページ
003-026	織物工程	250ワード以内	看板
003-027	染物工程 / 吉澤織物、翠山、青柳	251～500ワード	Webページ
003-028	染物工程	250ワード以内	看板
003-029	大地の芸術祭（現代アート） / 越後妻有里山現代美術館MonET、まつだい雪国農耕文化村センター「農舞台」、光の館、清津峡溪谷トンネル	251～500ワード	Webページ
003-030	ほんやらどう / いろりとほたるの宿せとぐち	250ワード以内	Webページ
003-031	ほんやらどう	250ワード以内	看板
003-032	河岸段丘 / ラフティング（ミオンなかさと）	250ワード以内	Webページ
003-033	温泉 / 松之山温泉	250ワード以内	Webページ
003-034	温泉	250ワード以内	看板
003-035	凌雲閣 /	250ワード以内	Webページ
003-036	酒造りの工程 / 松乃井酒造所	251～500ワード	Webページ
003-037	酒造りの工程 / 松乃井酒造所	250ワード以内	看板

		内	
003-038	雪国とは	251～500ワード	Webページ
003-039	雪国の建築	251～500ワード	Webページ
003-040	モデルコース1：積雪期用具・へぎそば・保存食文化・神宮寺・節季市（チンコロ） / 十日町市博物館	751ワード以上	その他（SNS）
003-041	モデルコース2：棚田・美人林・遺跡出土品・織物文化・きもの製作工程 / 十日町市博物館	751ワード以上	その他（SNS）
003-042	モデルコース3：大地の芸術祭・ほんやらどう・河岸段丘・温泉・酒造りの工程 / 十日町市博物館	751ワード以上	その他（SNS）

003-001

Tools for the Snow, Snow as a Tool

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 十日町の積雪期用具 / 十日町市博物館

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Tools for the Snow, Snow as a Tool

Over millennia, the people of Tokamachi have developed a multitude of specialized tools to manage the heavy snowfall. In winter, snow reaches an average height of 2 meters, and more than 50 centimeters may fall in a single day. The Tokamachi landscape is a world of white for half the year, from the first flurries around late November until the last snowmelt in April.

To deal with the snow, residents need tools to move, remove, and compress it. They also need the means to move themselves and goods around. Many of their tools, like sleds and shovels, have easily discernible uses, but the purpose of others may be less apparent. One example is the long, serrated blades called “snow saws” (*yukikiri-nokogiri*) that are essential to clearing snow off roofs. First, a paddle-like tool (*koshiki*) is used to scrape off looser snow from the roof’s surface and expose damp, compacted snow that has become hard as ice. Snow saws are used to remove this hardened snow in large chunks.

Other snow-related tools may be more universal but have unexpected features. The flexible, oversized snowshoes called *sukari* have a rice-straw rope that runs from the front of the bamboo frame to the wearer’s hand. Normally, *sukari* would be too long to walk in, but the wearer can use them like regular snowshoes by pulling the front of the frame up and back with the rope. Releasing the rope, however, creates more surface area for tamping down snow. In this way, wearers can cross deep, unbroken snow and make a path for others not wearing snowshoes. Today, *sukari* have largely been replaced by snow blowers and other mechanized or mass-produced tools, but they were traditionally used to create communal pathways. Older residents would set out in

the early morning to clear routes for children going to school.

Some tools relate to food preparation and preservation. These include the grid-like wooden racks (*hidana*) used to hang vegetables over hearth fires to dry, or the woven straw mats laid over piles of snow to prevent them from melting in summer. Thus protected, blocks of snow could be cut from the piles with snow saws and used for refrigeration in the hotter months.

During the long winters, when people were largely confined indoors and agriculture ground to a halt, residents turned their hands to making and maintaining these life-supporting tools. Using natural materials, such as rice straw, bamboo, and ramie plant fibers, they crafted everything from clothing to fishing baskets. Many of these items were cured and strengthened using the snow itself. In a process called *yukizarashi*, the materials were first laid out on the snow. Over time, ultraviolet rays from sunlight and hydrogen ions released by melting snow bleached and softened the fibers.

These tools tell the story of life in snow country. They also demonstrate the human ingenuity, communal solidarity, and connection to the natural world that are Tokamachi's heritage. Collectively, the tools have been designated Important Tangible Folk Cultural Properties.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雪のための道具、道具としての雪

十日町の人々は、何千年もの間、豪雪と共存しながら、雪を扱うさまざまな専門的な道具を生み出してきた。一日に降る雪の量は50センチを超え、積雪の高さは年平均2メートルにもなる。11月下旬の初雪から4月の雪解けまで、十日町は1年の半分を真っ白な世界で過ごすことになる。

雪と付き合うには、雪を移動させたり、取り除いたり、圧縮したりする道具が必要だ。また、自身や物資を移動させる手段も必要だ。ソリやスコップなど、用途がわかりやすい道具は多いが、用途がわかりにくい道具もある。例えば、「雪切りノコギリ」。屋根の雪下ろしに欠かせない。「コシキ」と呼ばれる道具は、表面の緩い雪を削り取るのに使われるが、底の湿った雪は圧縮されて氷のように硬くなる。それを大きな塊にして切り落とすのが「雪切りノコギリ」である。

他の道具はもっと一般的かもしれないが、意外な特徴を備えている。そのひとつが「スカリ」である。柔軟性のある特大のスノーシューで、竹の骨組みの先端から履く人の手元まで藁のロープが通っている。通常、スカリは長すぎて歩行が困難だが、ロープで骨組みの前部を引き上げたり戻したりすることで、通常のスノーシューのように使用することができる。一方でロープを離すと、雪を踏み固める面積が増える。こうすることで、切れ目のない深い雪を渡ると同時に、スノーシューなしでも通れる道を作ることができる。今日では、スノーブローヤやその他の機械化された、あるいは大量生産された道具に取って代わられたスカリだが、昔は地域の共同通路を作るために使われていた。年配の住民は、早朝から子供たちの通学路を確保するために出かけた。

食べ物の準備や保存に係る道具もある。たとえば、野菜を火にかけて乾燥させるために使われた格子状の木製の棚（火棚）や、夏の気温上昇で雪が溶けるのを防ぐために雪の山に敷く藁の編物などだ。保護された雪は、雪用のこぎりでブロック状に切り出され、暑い季節の冷蔵用に使われた。

長い冬の間、農業が中断され、屋内に閉じこもった人々は、生活を支える道具を作り、維持するために働いた。稲わら、竹、カラムシなどの天然素材を使い、衣服から魚籠まで、あらゆるものを作った。興味深いことに、これらのアイテムの多くは雪そのものによって強化された。「雪ざらし」と呼ばれる工程で、雪の上に材料を並べ、太陽光の紫外線と雪解け水が放出する水素イオンが繊維を漂白、柔軟させたのだ。

これらの道具の数々は、雪国の生活を物語っている。また、十日町の遺産である人々の知恵、共同体の団結力、自然界とのつながりを示している。これらの道具はまとめて、重要有形民俗文化財に指定されている。

003-002

Snow Tools

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 十日町の積雪期用具 / 十日町市博物館

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Snow Tools

The first settlers in the Tokamachi area arrived more than 10,000 years ago. Over millennia of living with heavy snowfalls, they devised many specialized tools for surviving in snow country. These include items for snow removal, implements for food preparation and storage, special garments and footwear, and vehicles for transporting people and goods. There are also toys, crafting equipment, fishing gear, and ceremonial implements. In total, the Tokamachi City Museum has around 4,000 snow-related artifacts in its collection.

Most of these traditional objects were made from natural materials like wood, rice straw, bamboo, and ramie plant fibers. During the long winter months, when agricultural work was finished for the season and people were largely confined indoors, they used their time to make and maintain these life-supporting tools. Snow itself was used to craft some of them through a technique called *yukizarashi*. Items were laid out on the snow, where the hydrogen ions from melting snow and reflected ultraviolet rays cured and softened the fibers.

In 1991, these tools were collectively designated Important Tangible Folk Cultural Properties.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雪の道具

人類が初めて十日町地方に移住してきたのは、今から1万年以上も前のことである。何千年もの間、豪雪地帯で生活してきた彼らは、雪国で生き延びるために多くの特殊な道具を考案した。除雪のための道具、食料の調理や貯蔵のための道具、衣服や履物、人や物を運ぶための乗り物など

である。また、玩具、工芸品、漁具、儀式用具などもある。十日町市博物館が所蔵する雪道具は、全部で約4,000点にのぼる。

これらの伝統的な道具のほとんどは、木、稲わら、竹、苧麻などの天然素材から作られている。農作業が一時的に停止し、人々が屋内に閉じこもる長い冬の間、その時間を使って生命を支えるこれらの道具を作り、維持したのである。雪ざらしと呼ばれる技法で、雪そのものを利用して作られたものもある。雪を敷き詰め、雪解け水が放出する水素イオンと紫外線の反射で繊維を柔軟にさせるのだ。

1991年、これらの道具は一括して重要有形民俗文化財に指定された。

003-003

The Threads of *Hegi* Soba

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】へぎそば / 小嶋屋総本店、越後十日町小島屋本店、
越後十日町小嶋屋和亭、繁蔵田麦そば

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

The Threads of *Hegi* Soba

Hegi soba, a variation of Japan’s traditional buckwheat noodles, is a prime example of how food reflects culture. It is deeply connected to the history of Niigata Prefecture and was born from agricultural conditions and local weaving traditions.

Buckwheat noodles are usually made with wheat flour as a binder. However, Niigata’s climate is not suited to the production of wheat. In the early nineteenth century, residents discovered a readily available and rather unusual replacement: *funori* seaweed. Weavers in the region had long applied *funori* to their thread as “sizing,” an adhesive that strengthens thread fibers to prevent them from breaking during the weaving process. When *funori* is used in the creation of soba noodles, it imparts a faint green tinge and a pleasantly slippery texture.

The presentation of *hegi* soba also derives from local textile culture. The noodles are served in a *hegi*, a flat, wooden tray of the sort used to store buttons or bits of thread. In addition, the bite-sized portions of *hegi* soba are arranged in rows of the same figure-eight loops Tokamachi’s weavers used for skeins of thread.

When eaten, *hegi* soba is dipped in a rich, soy-based sauce called *mentsuyu*. In other parts of Japan, wasabi and sliced green onion are usually added to the dipping sauce, but in Tokamachi, spicy *karashi* mustard is often used instead.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

へぎそば

食は文化を映し出すが、へぎそば（日本の伝統的な蕎麦の一種）はその典型である。へぎそばは新潟県の歴史と深く結びついており、雪国の農業事情と地元の織物の伝統から生まれた。

蕎麦は通常、小麦粉をつなぎに使用して作られる。しかし、新潟の気候は小麦の生産に適していない。19世紀初頭、新潟県民は入手しやすい、やや珍しい代用品であるフノリという海藻を発見した。この地方の織物業者は、糸を織る過程で糸が切れないように繊維を強化する「サイジング」の粘着剤として、昔からフノリを糸に塗っていた。蕎麦にフノリを使うと、ほのかな緑色を帯び、通常よりややツルツルした食感になる。

へぎそばは、その土地の織物文化の賜物でもある。へぎとは、ボタンや糸の切れ端を入れるのに使うような、平らで万能な木のお盆のことである。一口サイズのへぎそばは、十日町の織物職人が糸を認（かせ）にするときに使った八の字の輪が並んでいる。

食べるときには、へぎそばをめんつゆという濃厚な醤油ベースのつゆにつけて食べる。他の地域では、わさびやネギを入れるのが一般的だが、十日町では代わりにカラシを入れることが多い。

003-004

Hegi Soba

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】へぎそば

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Hegi Soba

Hegi soba is Tokamachi's regional version of soba buckwheat noodles. This variation on the traditional Japanese dish is deeply connected to the local textile industry. The noodles are gathered in neat bundles that resemble looped skeins of thread and are served in a shallow wooden tray called a *hegi*, which weavers once used to store thread, buttons, and other small objects. Also, the soba dough includes an ingredient called *funori*. Weavers once applied this glue-like seaweed to delicate threads to strengthen them, and the *funori* in *hegi* soba performs the same function.

Buckwheat flour lacks gluten, so soba noodles usually incorporate some wheat flour as a binder to help them hold together when boiled. Tokamachi is not a wheat-producing region, however, so soba makers in the area historically substituted ground vegetables like burdock root. In the early nineteenth century, a local chef decided to try *funori* instead and found the resulting noodles had a pale green color and pleasantly slippery texture. In 1933, construction on a nearby hydroelectric power plant brought in workers and engineers from around the country. Many tried *hegi* soba while in the area, and they later spread word of it around the country.

To eat *hegi* soba, pick up a full skein of noodles and dip it in the cup of *mentsuyu* sauce. Taste this first bunch of noodles without any condiments to judge the base flavor. Then try the rest with spicy *karashi* mustard and sliced green onion. The onion can be added to the sauce, but the mustard should be applied directly to the next skein of noodles before picking them up.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

へぎそば

へぎそばは、十日町のご当地そばである。この伝統的な日本料理のバリエーションは、地元の織物の伝統と深く結びついている。麺は、輪になった糸の認め（かせ）のようにきれいに束ねられ、かつて織物職人が糸や道具を保管するために使った「へぎ」と呼ばれる浅い木の盆で提供される。そば生地には、ふのりという成分も含まれている。ふのりは糊のような役割をする海藻で、かつては機織り職人が繊細な糸を丈夫にするために塗っていた。

へぎそばのふのりは、同じように補強の役割を果たしている。蕎麦は通常、茹でたときにそばの形が切れないように、つなぎとして小麦粉を入れる。しかし、十日町は小麦の産地ではないため、この地域の蕎麦屋は昔からごぼうなどのすりおろした野菜で代用していた。19世紀初頭、地元の料理人がふのりを使ってみたところ、淡い緑色でツルツルとした食感の麺ができた。1933年、近くに水力発電所が建設され、全国から労働者や技術者が集まった。多くの人がこの地でへぎそばを食べ、後に全国にその評判を広めた。

へぎそばの食べ方は以下の通りである。まず、麺を一束手に取り、器に入っためんつゆにつける。次に、最初の一束は何もつけずに味わい、そばの本来の味を味わう。残りはからしと刻みネギで食べる。ネギはつゆに入れてもいいが、からしは麺に直接つけてから取るほうがよい。

003-005

Winter Meal Planning: Food Preservation in Tokamachi 十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】ツケナとニーナ（保存食文化） / 道の駅クロステン十日町、四季彩館べじぱーく、いろりとほたるの宿せとぐち、十日町のか～ちゃんと作る採れたてごっつお、山菜取り体験

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Winter Meal Planning: Food Preservation in Tokamachi

With snow on the ground for nearly half the year, survival in Tokamachi has always required planning ahead. Snow-country food culture revolves around storing up enough food for the winter, so strategies such as food preservation and careful use of resources are an important part of everyday life.

One traditional dish exemplifies how seasonal vegetables are used all winter long: *tsukena*, a type of pickled greens that can be found in nearly every household in the Tokamachi area. *Tsukena* is made by pickling *nozawana* greens in salt. *Nozawana* (a member of the turnip family) is planted in early autumn, and the whole crop is harvested around the time of the first snow. The greens are carefully washed and salted, turning them into *tsukena*. Over the winter months, *tsukena* is served as a side dish with meals or as a snack. As spring nears, *tsukena* begins to ferment, giving it an acidic taste. The greens are then removed from their salty brine, rinsed, and simmered. At this point they become a dish called *niina* (literally, “boiled greens”). Through this multi-stage process, Tokamachi residents are able to extend the shelf life of autumn greens until the snow melts.

Long-term, cyclical food-storage strategies are common in snow country. A key example is carp cultivation, once a common way to ensure a protein supply during winter. In warmer months, farmers stocked their irrigation ponds with carp, which kept the water clear of algae. Household waste, even used wash water, was tossed in to supplement the fishes’ diet. Before the pond froze over in winter, the carp were driven into a shoreside fish trap. When temperatures dropped, they entered a state of torpor

and were readily accessible as a food source all winter. In spring, the uneaten carp thawed and were released to repopulate the pond.

Other common methods of food preservation included snow storage and smoke drying. Traditional households were equipped to perform these processes themselves. They had rice-straw containers just outside the door to keep daikon radishes and other root vegetables at temperatures just above freezing. Houses also had a special drying rack above the hearth called a *hidana*. Vegetables, fish, and other foodstuffs could be hung from the *hidana* and slowly preserved by the heat and smoke rising from the daily cookfires. Miso was fermented by suspending it in containers from a roof beam or pole above the *hidana*.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

一年を通しての食事計画：十日町の食料保存

一年の半分近くが雪に覆われる十日町で生き延びるには、常に前もって計画を立てる必要がある。伝統的な食文化は、冬に備えて十分な食料を蓄えることを基本としているため、食料の保存や資源を大切に活用するといった概念は、日常生活の重要な要素となっている。現代の流行語になるずっと前から、十日町の人々は廃棄物ゼロのライフスタイルを送っていた。

季節の野菜を通年で楽しむ代表的な料理が、十日町地域のほとんどの家庭で見られる「ツケナ」だ。野沢菜を塩漬けにしたものだ。野沢菜は秋の初秋に植えられ、初雪が降る頃にすべて収穫される。そして、丁寧に洗って塩漬けにし、ツケナにする。冬の間、ツケナは食事のおかずやおつまみとして出される。春が近づくと、ツケナは発酵を始め、酸味を帯びる。そこでツケナの塩気を抜き、水洗いして煮込む。この時点で「ニーナ」と呼ばれる料理になる。十日町の人々は、このような何段階もの工程を経て、雪解けまで秋菜の賞味期限を延ばすことができるのだ。

長期的、周期的な食料貯蔵方法は、雪国では一般的である。その主な例が鯉の養殖で、かつては冬の間のタンパク質補給のための一般的な方法だった。暖かい季節になると、農家は灌漑池に鯉を放し飼いにし、藻の発生を防いだ。家庭ゴミや使い終わった食器を洗った水も、魚の餌を補うために使われた。冬に池が凍る前に、鯉は岸辺に設置された生け簀に追い込まれた。気温が下がると、鯉は冬眠状態に入り、冬の間、餌として簡単に手に入るようになった。春になると、食べられなかった鯉は覚醒し、再び池に放たれた。

その他の一般的な食料保存方法には、雪中貯蔵や燻煙乾燥がある。伝統的な家庭では、これら

を自分たちで行う設備が整っていた。大根などの根菜を氷点下ぎりぎりの温度で保存するために、玄関のすぐ外に稲わら入れがあった。また、囲炉裏の上にはヒダナと呼ばれる専用の乾燥棚があった。野菜や魚などの食材をヒダナに吊るし、毎日の焚き火から立ち上る熱と煙でじっくりと保存することができた。

003-006

Tsukena Pickles and *Niina* Stews

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 ツケナとニーナ（保存食文化）

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

***Tsukena* Pickles and *Niina* Stews**

Traditional food culture in snow country revolves around storing enough food for winter, so pickling and other techniques for food preservation are essential. In Tokamachi, this approach is epitomized by a method of salt-curing a widely cultivated turnip green called *nozawana*.

Nozawana is planted in early autumn, and around the time of the first snow, the whole crop is harvested, carefully washed, and salted. After roughly a day, it becomes a pickle known locally as *tsukena*. Through the winter months, *tsukena* is served as a side dish with meals or as a snack. By the time spring comes, the *tsukena* has begun to ferment. Rather than spoiling, however, the *tsukena* is eaten as a new incarnation called *niina*. Cooks rinse out the salt and add the greens to simmered dishes and stews, further extending their shelf life. The fermentation also brings the benefit of immune-boosting lactic acids.

Tsukena and *niina* are still served in nearly every household in Tokamachi as an essential part of the winter table. Although the pickles are now commercially available, many people continue to make their own, following family recipes passed down for generations.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ツケナとニーナ

雪国の伝統的な食文化は、冬を越せるだけの食料を蓄えることにあり、漬物をはじめとする保存食の技術は欠かせない。十日町では、野沢菜という広く栽培されているカブの塩漬けがその代表だ。

野沢菜は、初秋に植えられ、初雪の頃にすべて収穫され、丁寧に洗って塩漬けにされる。1日

ほどすると、地元では「ツケナ」と呼ばれる漬物になる。冬の間、ツケナは食事のおかずやおつまみとして出される。春になると、ツケナは発酵を始める。しかし、ツケナは腐るのではなく、ニーナと呼ばれる新たな姿になっていく。料理人は塩を洗い流し、煮物やなべに加えることで、保存期間をさらに延ばすことができる。発酵により、免疫力を高める乳酸の効果も加わる。

ツケナとニーナは、今でも十日町のほぼすべての家庭で、冬の食卓に欠かせないものとして食べられている。現在は市販されているが、代々受け継がれてきた家庭のレシピを守り、自家製を続けている人も多い。

003-007

Matsuo Shrine

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 松苧神社本殿

【想定媒体】 Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Matsuo Shrine

This isolated Shinto shrine on top of Mt. Matsuo has been a key part of the religious and cultural life of Tokamachi for more than a millennium. It also hosts a significant coming-of-age ceremony for young boys each spring.

Historical sources suggest the shrine was founded in 807 to honor the deity Nunakawa-hime, who was associated with ramie (a plant central to the region's weaving tradition). The current sanctuary, which dates to 1497, is among the oldest thatched-roofed wooden structures in Niigata Prefecture. It was registered an Important Cultural Property of Japan in 1978 and was fully rethatched in 2019.

The shrine's longevity in the punishing snow-country winters is partly due to its architecture. The steep slope of the thatched roof causes snow to slide off rather than build up, protecting the roof from potentially crushing loads. Numerous thick support columns help to bear the weight of snow and wet thatch.

The most significant festival at Matsuo Shrine is Nanatsu Mairi, held annually on May 8. Local boys who turned seven during the previous year make the journey from the village of Inubushi, at the foot of the mountain, to the shrine at its summit, a climb of 360 meters over about 3 kilometers. This is a challenging hike for children of that age, particularly as snow may still be on the ground, but the entire community comes out to help them ascend. After prayers and a ceremony at the shrine, everyone descends the mountain and the boys' extended families hold celebrations in their honor.

Two important artifacts belonging to the shrine are a short sword and a signaling fan (*gunbai*). The fan is said to have been offered to the enshrined deity by Uesugi Kenshin (1530–1578), a powerful daimyo who governed the area in the sixteenth century. For security reasons, the items are not housed in the shrine itself. Replicas are on display at the Matsudai History Museum.

With no road to the shrine other than a narrow mountain path, all tools and materials used to maintain the structure over its 500 years of existence have had to be carried to the site. Historically, residents undertook this labor themselves as a reflection of the shrine's importance to the community.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松芋神社

松芋山の山頂にあるこの神社は、千年以上もの間、十日町の宗教的・文化的生活の重要な部分を担ってきた。また、毎年春には男児の重要な成長祈願の儀式も執り行われる。

歴史的な資料によると、この神社は807年に、芋麻（この地域の織物の伝統の中心的な植物）に関連する神である奴奈川姫を祀るために創建されたとされている。現在の本殿は1497年に建てられたもので、茅葺き屋根の木造建築としては新潟県最古級のものである。1978年に国の重要文化財に登録され、2019年に屋根の葺き替えが行われた。

雪国の厳しい冬に神社が長持ちするのは、その建築様式にも一因がある。茅葺き屋根の急勾配は、雪が積もるよりも滑り落ちるのを促し、屋根を押しつぶす恐れのある負荷から守る。多数の太い支柱は、雪と濡れた茅の重みに耐えるのに役立っている。

松芋神社の最も重要な祭りは、毎年5月8日に行われる「セツ詣り」である。前年に7歳になった地元の少年たちが、麓の犬伏集落から山頂の神社まで、標高360メートルの約3キロの山道を登り参拝する。まだ雪が残っていることもあり、年頃の子供たちには難しいコースだが、地域総出で子供たちの登頂をサポートする。神社での祈りと儀式の後、全員が再び山を下り、少年たちの家族が彼らの栄誉を称える祝宴を開く。

この神社に伝わる2つの重要な遺物は、16世紀にこの地域を治めていた有力大名、上杉謙信（1530-1578）が神に捧げたとされる短刀と軍配である。防犯上の理由から神社には納められていないが、レプリカがまつだい郷土資料館に展示されている。

003-008

Matsuo Shrine

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 松苧神社本殿

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Matsuo Shrine

This fifteenth-century structure is the main sanctuary of Matsuo Shrine, an ancient Shinto shrine with deep connections to the nearby village of Inubushi. It was registered an Important Cultural Property of Japan in 1978 and underwent an extensive rethatching from 2017 to 2019.

Historical sources suggest the shrine was founded in 807 to honor the deity Nunakawa-hime, who is associated with ramie (a plant central to the local weaving tradition). The current sanctuary dates to 1497 and is one of the oldest thatched-roof wooden structures in Niigata Prefecture.

Note the steep roof and the large number of support columns. These features have helped the building withstand heavy snowfalls without collapsing. The structure's longevity is also thanks to care from Inubushi residents, who have repaired and maintained the shrine over the last 500 years by hauling the necessary tools and materials up the mountain path.

This shrine is the main location for Nanatsu Mairi, a coming-of-age event held on May 8 each year. Boys in the Matsudai area who turned seven in the previous year make the journey to the shrine. They are helped in the difficult climb by the entire community. After prayers and a ceremony are held, everyone descends the mountain and the boys' extended families hold celebrations in their honor.

Two important artifacts belonging to the shrine are a short sword and a signaling fan (*gunbai*). The fan is said to have been offered to the enshrined deity by Uesugi Kenshin (1530–1578), a powerful daimyo who governed this area in the sixteenth century. The sword and fan are not housed in the shrine itself, but replicas are on display at the Matsudai History Museum.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松芋神社

この建物は松芋神社の本殿であり、近隣の犬伏集落と深い関わりを持つ古社である。1978年に国の重要文化財に登録され、2017年から2019年にかけて2年にわたる大規模な修復が行われた。

歴史的資料によると、この神社は807年に創建され、芋麻（この地方の織物の伝統の中心的な植物）に関連する神である奴奈川姫を祀ったとされている。現在の建物は1497年に建てられたもので、新潟県最古の茅葺き屋根の木造建築である。

屋根の急勾配と多数の支柱に注目してほしい。この2つの建築的特徴のおかげで、建物は倒壊することなく冬の豪雪に耐えてきた。このような長い歴史があるのも、地元の人々が500年もの間、必要な道具や材料を担いで山道を登り、神社を修理し、維持してきたおかげである。

この神社は、毎年5月8日に行われる成長祝いの「セツ詣り」のメイン会場でもある。前年に7歳になったまつだいえリアの少年たちがこの神社を参詣する。険しい山道を地域住民総出で登る。祈祷と儀式が執り行われた後、全員が下山し、少年たちの家族が彼らの栄誉を称える祝宴を開く。

この神社には、16世紀にこの地を治めていた有力大名、上杉謙信（1530-1578）が祭神に捧げたとされる短刀と扇の2つの重要な遺物がある。神社には納められていないが、まつだいえ郷土資料館にレプリカが展示されている。

003-009

Jinguji: A Temple in the Snow

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 神宮寺観音堂・山門

【想定媒体】 Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Jinguji: A Temple in the Snow

Jinguji, a historic Zen temple about 3 kilometers north of Tokamachi, is thought to have been founded in 807. Standing in a tranquil cedar forest, the temple and its formidable Sanmon Gate are unusual among Buddhist temple structures for being roofed with thatch.

Over the centuries, Jinguji abbots have risen with the sun to ready the path to the temple's central Kannondo hall. They sweep debris from the mossy stones in summer and tamp down a path through the snow in winter so worshippers can reach the hall and pray to Kannon, the Buddhist bodhisattva of compassion. The temple's statue of Kannon—a version of the deity called “Thousand-Armed Kannon”—is a Designated Cultural Property of Niigata and is only on display for three days each July.

The 15-meter-high Sanmon Gate and the Kannondo hall date to the 1760s and 1780s, respectively. They were built by master carpenters from Izumozaki, a coastal town to the north. The Kannondo hall has a hip-and-gable roof with a large gabled dormer above the main entrance. The roof is also unusually steep; its shape is not only elegant but also helps to keep snow from accumulating and crushing the roof with its weight.

The longevity of the temple's structures demonstrates the devotion and care of the community. Snow-damaged sections of thatch are replaced each year, and visitors in the autumn months will see bundles of thatch hanging to dry in preparation for the springtime repairs.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

神宮寺：雪の中の寺

町の北約3キロの杉林の中に、807年に創建されたとされる由緒ある禅寺、神宮寺がある。茅葺き屋根が特徴的なこの寺院と、その威厳ある山門は、仏教寺院の建造物の中でも際立っている。

何世紀にもわたり、住職たちは太陽とともに起床し、観音堂への道を整えてきた。夏には苔むした石畳のゴミを掃き、冬には雪を踏み固め、参拝者が観音堂にたどり着き、慈悲の菩薩である観音様に祈りを捧げられるようにするのだ。この寺の本尊の観音像は「千手観音」と呼ばれ、新潟県指定文化財で、7月に3日間だけ公開される。

現在の観音堂は1780年代、高さ15メートルの山門は1760年代のものだ。北に位置する海岸沿いの町、出雲崎から集められた名工たちによって建てられた。特に観音堂は、屋根の勾配が非常に急で、入母屋造の正面千鳥破風附が特徴的である。この形状は優美であるだけでなく、雪が積もり、その重みで屋根が押しつぶされるのを防ぐのに役立っている。

寺院の構造が長持ちするのは、地域社会の絶え間ない尽力と手入れがあるからで、雪で傷んだ茅は毎年葺き替えられている。秋になると、参拝者は春の修理に備え、茅の束が干されているのを目にすることだろう。

003-010

Muro'oka Farmhouse: A Tour of the Past

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 旧室岡家住宅

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Muro'oka Farmhouse: A Tour of the Past

The Matsudai History Museum is housed in a historic building called the Muro'oka Farmhouse. The house is named after its original owners, an influential Tokamachi family of the late 1800s. The building's zelkova-wood frame is older than the rest of the house and dates to the nineteenth century, and the family reused it when building their farmhouse in 1935. Today, both the exterior and interior are preserved so visitors can glimpse life in a snow-country farming household.

The two-story building was moved to its present location in 2009. It has many of the features distinctive of snow-country architecture, including a steep roof supported by massive, 10-meter-tall zelkova beams, large loft spaces for storing cloth- and straw-weaving materials, and high ceilings to draw up smoke from heating and cooking fires.

The floorplan follows a multi-room layout called *chumon-zukuri* that was common in snow country. Just inside the entrance is an expansive earthen-floored vestibule for shedding damp winter outerwear, and beside it is an indoor livestock pen to keep the farm animals from freezing. The vestibule leads directly to a raised tatami-floored room called the *niwa*, the heart of the house in *chumon-zukuri*. The room's main feature is an *irori* hearth: a charcoal firepit set into the floor for warmth and cooking. Domestic life centered around the *irori*, and thus the house's most-frequented rooms, such as the kitchen, bath, and living room, are conveniently arrayed around the *niwa*.

Inside are thousands of traditional tools, items of furniture, housewares, and art donated by local residents. The rooms are filled with implements of daily life from the

late nineteenth and early twentieth centuries. The second floor has extensive exhibits on the history and significance of nearby Matsuo Shrine and a video with archival footage of its Nanatsu Mairi festival.

Volunteer guides are happy to give Japanese-speaking visitors an even more immersive experience, teaching them words in the local dialect, playing traditional games used to pass the time on long winter nights, and telling stories through a collection of black-and-white photos depicting life in snow country.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

室岡家住宅：歴史をたどる

まつだい郷土資料館は、室岡家住宅と呼ばれる歴史的建造物の中にある。この建物の名称は、1800年代後半に十日町市の有力者であった当時の所有者にちなんで付けられた。建物のケヤキ材の骨組みは家の他の部分よりも古く、19世紀に建てられたもので、1935年に一家が家を建てる際に再利用した。現在では、外観も内部もそのまま保存されており、訪れた人々は雪国の農家の生活を垣間見ることができる。

2階建ての建物は、2009年に現在の場所に移築・再建された。高さ10メートルはあろうかという巨大なケヤキの梁に支えられた急勾配の屋根、布や藁を織るための材料を収納するための大きなロフトスペース、暖房や調理の火から出る煙を吸い上げるための高い天井など、雪国建築の特徴を数多く備えている。

雪国で一般的だった「中門造り」と呼ばれる複数の部屋がある間取りになっている。玄関を入っすぐのところには、冬の湿った上着を脱ぐための広々とした土間の玄関があり、その横には家畜が凍えないようにするための屋内畜舎がある。玄関は直接、中門造りの家の中心である「ニワ」と呼ばれる畳敷きの一段高くなった部屋に通じている。最大の特徴は囲炉裏であり、暖をとったり調理をしたりするために床に設置された炭火台である。囲炉裏を中心に生活が営まれたため、台所、風呂、居間など、家の中で最も使用頻度の高い部屋は、ニワを囲むように配置されている。

その中には、地域住民から寄贈された何千点もの伝統的な道具、家具、家庭用品、美術品がある。部屋は19世紀後半から20世紀初頭の日常生活の道具であふれている。2階には、近くにある重要文化財の松茸神社の歴史と重要性を紹介する展示や、松茸神社に関連する「セツ詣り」の記録映像がある。

ボランティアガイドが、地元の方言で言葉を教えてくれたり、冬の長い夜に時間をつぶすために使われた遊びを披露してくれたり、雪国の生活を描いたモノクロ写真のコレクションを用いて体験談を語ってくれたりする。

003-011

Muro'oka Farmhouse

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 旧室岡家住宅

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Muro'oka Farmhouse

This two-story structure was built in 1935 as a farmhouse. Today, it houses the Matsudai History Museum, a unique facility that offers exhibits on Matsudai history and the daily life of a farming household in the early 1900s.

The farmhouse belonged to an influential local family named Muro'oka. The original structure was a wood-frame, wood-shingled farmhouse of the sort typical in Tokamachi, built using large beams of zelkova wood connected by joinery rather than metal fixtures or nails. The wattle-and-daub walls provide natural insulation, while the steep roof sloughs off snow. In 2009, the house was relocated and given modern features, such as metal sheet roofing and electrical wiring.

Inside, the structure retains the typical layout of a snow-country farmhouse, centered around a sunken hearth (*irori*) used for heating and cooking. The rooms are filled with authentic tools, furniture, housewares, and art donated by local residents, evoking a clear image of domestic life and demonstrating how communities survived and thrived during Tokamachi's long, snowy winters.

The second floor has extensive exhibits on the history and significance of nearby Matsuo Shrine, an Important Cultural Property, and a video with archival footage of its Nanatsu Mairi festival, in which seven-year-old boys make a journey to the mountain shrine.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

室岡家住宅

ここは1935年に建てられた2階建ての農家である。現在は「まつだい郷土資料館」となっており、松

代の歴史や1900年代前半の農家の日常生活を展示するユニークな施設となっている。

この家は、地元の有力者であった室岡家が所有していた。元の建物は、十日町でよく見られる木羽葺きの木組みの農家で、大きなケヤキの梁を釘を使わずにしっかりと接合して建てられている。小舞に土を塗った土壁は天然の断熱材であり、厚く急勾配の茅葺き屋根は雪どけにも役立つ。2009年、邸宅は移築され、金属板屋根や電気配線といった近代的な設備を追加した。

内部は、暖房と調理に使われる囲炉裏を中心とした、雪国の農家の典型的な間取りを残している。室内には、地元住民から寄贈された伝統的な道具、家具、家庭用品、美術品などが展示され、雪深い十日町の長い冬の間、地域住民たちがどのように生き抜き、繁栄してきたかがうかがえる。

2階には、重要文化財である松茸神社の歴史や重要性についての展示や、7歳の少年たちが松茸神社に参詣する「七ツ詣り」の記録映像もある。

003-012

Chinkoro and the Winter Market

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 節季市・チンコロ / チンコロづくり体験

<https://www.tokamachishikankou.jp/blog/31942/>

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

***Chinkoro* and the Winter Market**

Every January, the Suwacho neighborhood comes alive with activity. Four days of the month are dedicated to a sprawling winter street market that attracts residents and visitors with local food specialties, handicrafts, and unique good-luck charms called *chinkoro*.

The midwinter Sekki-ichi Market has been held in Tokamachi since the Edo period (1603–1867). The name, which translates to “year-end market,” refers to the traditional lunar calendar, under which the month now called “January” was the last in the calendar year. Residents from nearby villages brought items they had produced over the previous months, such as woven baskets or bamboo tools. Everyone spread their wares out on the snow, and residents bartered and haggled for whatever they needed.

For more than 140 years, little colored rice-flour figurines called *chinkoro* have been sold at the market. Although their name originally meant “dog” or “puppy,” the figurines typically depict flowers or auspicious figures, like animals of the zodiac, and are thus popular souvenirs and good-luck charms. Over time, the rice flour dries out and the figurines develop cracks, but residents say that the more cracks a *chinkoro* has, the better one’s fortune will be in the new year.

Nowadays, the market is more of a celebratory event than an essential swap for winter survival, but purchasing *chinkoro* remains a key part of the experience, and shoppers line up in the morning to ensure they get just the right one.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

チンコロと冬の市

諏訪町は毎年1月に賑わいをみせる。月のうち4日間、冬の露店市が開かれ、食べ物や工芸品、「チンコロ」と呼ばれるユニークな縁起物を求める市民や観光客が集まる。

真冬の節季市は、江戸時代（1603-1867）から十日町で開催されている。旧暦の12月が一年の終わりであったことから、この名がついた。近隣の村の住民は、冬の間生産した編み籠など藁や竹で作った道具などの品々を持ち寄った。皆が雪の上に品物を広げ、住民は足りないものを買うことができた。

少なくとも140年以上前から、チンコロと呼ばれる小さな米粉を使った色とりどりの人形が市場に並ぶようになった。本来は「犬」や「子犬」を意味する名称だが、一般的には、花や干支のような縁起の良いものが描かれているため、お土産や縁起物として人気がある。時間が経つにつれて米粉が乾燥し、人形にひびが入るが、住民の間では、ひびがたくさん入るほど新年の運勢が良くなると言われている。

現在では、冬を乗り切るために欠かせないものというよりは、イベントとしての意味合いが強くなっているが、チンコロを買うことは今でも重要な体験のひとつで、買い物客は朝から列をなして、お気に入りのチンコロを買い求める。

003-013

Chinkoro

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 節季市・チンコロ

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Chinkoro

Chinkoro are one of the most popular items for sale at the Sekki-ichi Market. These colored rice-flour figures of animals, flowers, or other auspicious or wintery motifs have long been treasured as New Year's good-luck charms.

The name *chinkoro*, which loosely translates to “dog” or “puppy,” is thought to derive from the Japanese Chin dog breed. Indeed, dogs are one of the most commonly depicted animals.

The precise origin of *chinkoro* is lost to history, but they have been sold at Suwacho's midwinter markets for more than 140 years as one of the many handcrafted items that local villagers once made for extra income during the snowy months. *Chinkoro* became popular good-luck charms to display at home during the New Year's holidays. As the steamed rice flour dries out, the *chinkoro* develop cracks, and supposedly the more cracks there are, the better one's luck will be in the coming year.

In the past, *chinkoro* were roasted over the charcoal hearth and eaten like mochi, although this practice is no longer common. Some modern versions made from durable resin clay are designed to be used as accessories.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

チンコロ

「節季市」の名物といえば、「チンコロ」だ。動物や花など、縁起の良いものや冬にちなんだものを色とりどりの米粉でかたどったもので、雪国では古くから新年の縁起物として大切にされてきた。

「チンコロ」という名前は、おおまかに訳すと「犬」または「子犬」という意味であり、日本の犬種「チン」に由来すると考えられている。実際、犬は最もよく描かれる動物のひとつである。

チンコロの正確な起源は歴史から失われてしまったが、地元の村人たちが雪の降る時期に臨時収入を得るために売買していた数多くの手工芸品のひとつとして、少なくとも140年以上前から諏訪町の真冬の市で売られていた。チンコロは、お正月に家に飾る縁起物として人気があった。蒸した米粉が乾くと、チンコロにひび割れが生じるが、ひび割れが多いほどその年の運勢が良くなると言い伝えられている。

かつては、炭火で焼いて餅のように食べていたが、現在は一般的ではない。最近では、より丈夫な樹脂粘土で作られたものは長持ちし、携帯ストラップやアクセサリーとして使えるものもある。

003-014

The Warmth of Winter Festivals

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 十日町雪まつり

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

The Warmth of Winter Festivals

In Tokamachi, the winter season is marked by many traditional festivals and events. The region's heavy snowfalls impact nearly every facet of its culture, from local agriculture to diet and handicrafts. Tokamachi's winter festivals celebrate this life-giving aspect of snow. They are also important opportunities to draw communities together, reinforcing the bonds of friendship and cooperation that make survival in snow country possible.

Here are just a few of Tokamachi's winter events:

Tokamachi Snow Festival

This popular event is held in mid-February at venues throughout Tokamachi. It features large snow sculptures, as well as art installations, performances, and a fireworks display. A modern addition to the winter calendar, the Tokamachi Snow Festival began in 1950 after Emperor Hirohito (1901–1989) suggested a festival to help residents enjoy the winter and celebrate the beauty of snow.

Muko-nage (Groom Tossing) and Sumi-nuri (Soot Smearing)

These unique events are part of New Year's celebrations in the hot spring town of Matsunoyama. On January 15, men who married during the previous calendar year are literally thrown from a hill-top shrine into a snowdrift some five meters below. The custom originated as a kind of ceremonial revenge against grooms from outside the village who were "stealing away" a daughter of Matsunoyama. Today, any local groom can receive the heave-ho. Afterward, the past year's good-luck charms are

burned on a straw pyre. Participants in this event grab soot from the bonfire, mix it with snow, and scramble to rub the mixture on each other's faces. The soot is considered good luck, so the more one receives, the better—and the messy melee provides a singular bonding experience.

Oshirakura Baito Huts

For around 300 years, the villagers of Oshirakura have gathered each January 14 to build a conical hut called a *baito*. The structure is made of zelkova wood and straw, measuring roughly 10 meters high and 8 meters in diameter. In the evening, residents gather inside the hut to eat, drink, and sing traditional songs, celebrating community ties and praying for good health and a bountiful harvest in the coming year. Around 9 p.m., the empty structure is set on fire, creating a bonfire some 30 meters high. The shape of the flames is said to foretell crop yields for the year.

Torioi and Honyarado Snow Huts

A winter event called *torioi* (“bird chasing”) is held on the night of January 14 in many towns in snow country. As with a lot of winter festivals, this custom is related to agriculture. Children parade through town, clapping wooden blocks together and singing a song to scare away pest birds that might eat crops in the coming year. Adults reward the children with mochi rice cakes and other sweets. The children then eat the snacks and play deep into the night in a specially constructed snow hut called a *honyarado*.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

冬の祭りのぬくもり

十日町には、冬に行われる伝統的な祭りや行事がたくさんある。豪雪地帯である十日町は、農業から食生活、工芸品に至るまで、その文化のほとんどすべての面で雪に支えられている。十日町の冬祭りは、雪が生命を育むことを祝い、地域が一体となる重要な機会となっている。雪国での暮らしを支える友情と協力の絆を強めるのだ。

十日町の冬のイベントをいくつかご紹介しよう：

十日町雪まつり

2月中旬に十日町市内の会場で開催される人気イベントだ。市民が作る大雪像のほか、アート作品やパフォーマンス、花火大会などが行われる。現代的な冬の風物詩である「十日町雪まつり」は、昭和天皇（1901～1989）が「冬を楽しみ、雪の美しさに親しむ祭りを作ろう」と提唱し、1950年に始まったものだ。

婿投げとスミ塗り

これらのユニークな行事は、松之山温泉街の正月行事の一部である。1月15日、前年に結婚した男性たちが、丘の上の神社から5メートルほど下の雪だまりに文字通り投げ落とされる。もともとは、松之山の娘を“奪い取った”仕返しに、住民が村外の花婿を放り投げる儀式だった。現在では、地元の花婿なら誰でも受けることができる。その後、1年分のお守りを薪の上で燃やす行事が行われる。参加者は焚き火の煤を手に取り、雪と混ぜてお互いの顔にこすりつける。煤は縁起物とされており、多ければ多いほど良いとされ、その乱戦は一風変わった絆を深める体験となる。

大白倉バイトウ

約300年前から、大白倉の農村では1月14日に集まって「バイトウ」と呼ばれる円錐形の小屋を建ててきた。高さ10メートル、直径8メートルほどで、ケヤキとワラで作られている。夕方になると、住民たちは小屋の中に集まり、食べたり、飲んだり、伝統的な歌を歌ったりして、地域の絆を祝い、その年の健康と豊作を祈る。午後9時頃になると、全員が外に出て小屋に火をつけ、高さ約30メートルものたき火を起こす。その炎の形は、その年の農作物の収穫を占うと言われている。

「鳥追い」と「ホンヤラドウ」

雪国の多くの町では、1月14日の夜に「鳥追い」という冬の行事が行われる。多くの冬祭りと同様、この風習も農業に関係している。子供たちが町を練り歩き、大きな声で積み木を打ち鳴らし、歌を歌って、その年の農作物を食い荒らす悪い鳥を追い払う。大人はその子供たちに餅やお菓子を与える。子供たちはそのお菓子を食べながら、「ホンヤラドウ」と呼ばれる特設の雪小屋で夜遅くまで遊ぶ。

003-015

Tokamachi Snow Festival

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 十日町雪まつり

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Tokamachi Snow Festival

In 1950, Emperor Hirohito (1901–1989) suggested the creation of a new winter festival to help snow country residents enjoy the season and appreciate the beauty of snow. Since then, the people of Tokamachi have devised myriad entertainments to reflect their friendly relationship with snow.

The Snow Festival features art installations, live performances, and a fireworks display. The main attractions, however, are the large snow sculptures. Teams are formed by local schools, residents' associations, volunteer groups, businesses, clubs, and other organizations. Guided by the year's chosen theme, each team collaborates on the design and construction of a snow sculpture. Prizes are awarded for technique, artistry, concept, and effort.

Tokamachi has a long history of winter festivals and events. Many are held in February, as the first full moon of the new year occurs around that time under the old lunar calendar. This full-moon period is called *koshogatsu*, or the “little new year,” and is the time when agricultural communities traditionally pray for an abundant harvest in the coming year. In Tokamachi, where heavy snowfalls support agriculture along with so much else, *koshogatsu* events celebrate the life-giving aspect of snow. They also create opportunities for people to come together, reinforcing the bonds of friendship and cooperation that make survival in snow country possible.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

十日町雪まつり

1950年、昭和天皇（1901-1989）が、雪国の人々が季節を楽しみ、雪の美しさに感謝する

ために、新しい冬の行事を作ることを提案した。それ以来、十日町の人々は雪との友好的な関係を反映するために、さまざまな催しを考案してきた。

雪まつりでは、アートインスタレーション、ライブパフォーマンス、花火大会などが行われる。しかし、一番の見どころは、住民の手によって作られる巨大な雪像である。地元の学校、自治会、ボランティアグループ、企業、クラブなど、さまざまな団体によってチームが結成される。その年に決められたテーマに沿って、各チームが協力して雪像のデザインと製作を行う。技術、芸術性、コンセプト、努力などが評価され、賞が授与される。

十日町市には、冬のお祭りやイベントの長い歴史がある。その多くは2月に行われる。旧暦では、新年最初の満月がこの時期にあたるからだ。この満月の時期は「小正月」と呼ばれ、農村が翌年の豊作を祈る伝統的な時期である。豪雪地帯である十日町では、小正月の行事は、豊作と同時に雪の生命力を祝う行事でもある。また、雪国での生活を可能にする友情や協力の絆を強め、人々が集う機会も生まれる。

003-016

Kiyotsu Gorge: Beauty Shaped by Earth and Snow

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 清津峡

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Kiyotsu Gorge: Beauty Shaped by Earth and Snow

The clear snowmelt waters of the Kiyotsu River flow down from the heights of Mt. Kaminoai and Mt. Shirasuna to join the Shinano River in the heart of Tokamachi. Along the way, the waters have formed one of the largest, most visually striking canyons in Japan: Kiyotsu Gorge. It was designated a National Natural Monument and a Place of Scenic Beauty in 1941 and is a symbol of the natural splendor of snow country.

The gorge stretches 12.5 kilometers through the mountains, with steep, V-shaped porphyrite cliffs as high as 300 meters bracketing the river. The repeating, linear pattern of the cliff walls is the result of columnar jointing, a type of rock formation sometimes created when magma cools. The outer magma cools and contracts faster than the interior, forming cracks that extend perpendicularly from the cooling area. The cracks deepen as the cooling and contraction spread, eventually creating what look like endless rows of neatly arrayed hexagonal columns. At Kiyotsu, violent tectonic movements about 2.6 million years ago twisted and broke the formations as they were pushed to the surface.

Reaching these unusual formations was once possible only via a dangerous cliffside path. In 1988, it was closed to visitors after a rockfall raised safety concerns. However, in 1996 a 750-meter-long pedestrian tunnel was completed, offering views of the gorge from four lookout points. In 2018, the tunnel was renovated as part of the Echigo-Tsumari Art Triennale festival, becoming a popular attraction known as “Tunnel of Light.” The tunnel’s newly added art installations include subtly changing colored lights and a bubble-like restroom coated with special foil that provides users

with privacy while giving a clear view of the surroundings. The most impressive installation is the final lookout, where burnished steel walls and a shallow reflecting pool allow visitors to step into the dramatically mirrored scenery of Kiyotsu Gorge.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

清津峡：大地と雪が織りなす美

清津川の清らかな雪解け水は、上ノ間山と白砂山の山頂から流れ落ち、十日町の中心部で信濃川に合流する。その途中、清津川は日本有数の規模と景観を誇る峡谷、清津峡を形成している。1941年に国の名勝・天然記念物に指定され、雪国の自然美のシンボルとなっている。

渓谷は山を貫くように12.5キロメートルにわたって延びており、高さ300メートルにもなるV字型の険しいひん岩の断崖が川を囲んでいる。崖の壁の繰り返される直線的な模様は、マグマが冷えたときにできる岩石の形状である柱状節理の結果である。外側は内側よりも速く冷却収縮し、冷却した部分から垂直に伸びる亀裂を形成する。冷却と収縮が広がるにつれて亀裂は深くなり、最終的には六角柱が整然と無限に並んでいるように見える。清津峡では、約260万年前の激しい地殻変動によって、地層が地表に押し出される際にねじれたり割れたりした。

この珍しい地層に到達するには、かつては危険な崖沿いのハイキング道を通るしかなかった。1988年、落石事故により安全上の懸念が生じたため、この道は観光客の立ち入りが禁止された。しかし1996年、長さ750メートルの歩行者用トンネルが完成し、4つの展望台から峡谷を眺めることができるようになった。2018年には越後妻有アートトリエンナーレ芸術祭の一環としてリニューアルされ、「光のトンネル」として知られる人気スポットとなった。新たに追加されたアート・インスタレーションには、巧妙に変化するカラーライトや、特殊なフィルムでコーティングされた気泡のようなトイレなどがあり、利用者は外からの視線を遮りつつ、周囲をはっきりと見渡すことができる。最も印象的なインスタレーションは最後の展望台で、磨き上げられたスチールの壁と浅いリフレクティング・プールで、清津峡のドラマチックな水鏡の風景に足を踏み入れることができる。

003-017

Seven Cauldrons of Tashiro

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 田代の七ツ釜

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Seven Cauldrons of Tashiro

The dynamic landscape of snow country has many unusual geological formations. One of them is Tashiro no Nanatsugama, or the “Seven Cauldrons of Tashiro”—seven cascades spilling into a series of “cauldrons” (waterfall basins) in the Kama River Valley.

The falls are located on a roughly 1-kilometer stretch of the Kama River, a tributary of the larger Kiyotsu River, which flows through the center of Tokamachi. The river runs between steep, stone walls that resemble thousands upon thousands of angular columns laid together like thatch.

Suzuki Bokushi, a native of Niigata and famed nineteenth-century chronicler of life in snow country, described the rocks in his seminal work *Snow Country Tales: Life in the Other Japan*. He called them wonderfully strange in their straightness, marveling that nature could produce the same regularity as a stonemason. Today, we understand that these peculiar formations are examples of “columnar jointing,” groups of roughly hexagonal pillars of igneous rock formed by cooling magma.

Perhaps due to the uncanny atmosphere created by the strange rock formations, the falls feature heavily in local folklore. In one well-known story associated with the uppermost falls, a huntsman from a nearby village came to fish in the basin only to find it protected by a large serpent. The man promised the serpent he would cast his net only once, but he was so excited by the large catch that he cast a second time. For breaking his promise, the man was cursed and tormented by the serpent until he lost

everything.

Hiking trails run along the river for those who want to see the falls up close. Sharp eyes may spot the mythological serpent in the neighboring Nanatsugama Park, but it poses no threat—this version is an art installation called *Snake Path* by Australian artist Anne Graham.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

田代の七ツ釜

雪国のダイナミックな景観には、自然好きを魅了するユニークな地形が数多くある。そのひとつが「田代の七ツ釜」である。釜川の渓谷に、7つの滝が釜のように連なっている。

滝は、十日町の中心部を流れる雄大な清津川の支流、釜川の約1キロの区間にある。川は、何千、何万もの角柱が茅のように組み合わせられたような、急勾配の石垣の間を流れている。

新潟出身で、19世紀の雪国生活の有名な記録家である鈴木牧之は、彼の代表的な著作『北越雪譜』の中でこの岩を描写している。彼は、そのまっすぐさが素晴らしく奇妙だと言い、自然が石工と同じ規則性を生み出すことができることに驚嘆した。今日では、これらの奇妙な地層は「柱状節理」の一例であり、マグマの冷却によって形成された火成岩のほぼ六角形の柱の集まりであると理解されている。

奇岩が醸し出す異様な雰囲気のためか、この滝は地元の民話によく登場する。滝の最上部にまつわる有名な話では、近くの村の鉄砲うちの豪傑が滝つぼに釣りに来た。しかし、滝つぼは大きな蛇に守られていた。猟師は大蛇に一度だけ網を打つと約束したが、大漁に興奮して二度目を打ってしまった。約束を破ったため、漁師は大蛇に呪われ、すべてを失うまで苦しめられた。

滝を間近で見たい人のために、川に沿ってハイキングコースが整備されている。目を凝らすと、隣接する七ツ釜公園で神話に登場する大蛇を見つけることができるかもしれないが、これはオーストラリア人アーティスト、アン・グラハムによるアート・インスタレーションであり、決して危険なものではない。

003-018

Seven Cauldrons of Tashiro

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 田代の七ツ釜

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Seven Cauldrons of Tashiro

At this site, the waters of the Kama River are broken by a series of seven waterfalls as they wind down to join the Shinano River. Together, the seven falls and their basins are referred to as Tashiro no Nanatsugama, or the “Seven Cauldrons of Tashiro.” The falls stretch roughly 1 kilometer along the river.

The high rock walls that bracket the falls are marked by the remarkably straight lines of columnar jointing, a rare rock formation created by cooling magma. The area has long fascinated the inhabitants, appearing in numerous local folktales and in Suzuki Bokushi’s *Snow Country Tales: Life in the Other Japan*, a nineteenth-century chronical of life in rural Niigata.

In 1937, the falls became a National Natural Monument and Place of Scenic Beauty in recognition of their natural splendor and geological significance. In 1995, a mudslide destroyed the uppermost fall, known as Benten. To avoid negatively impacting the falls downstream, an erosion dam was installed to restore Benten’s original shape and flow and to prevent further mudslides. Although erosion dams are usually made of unadorned concrete, in this case builders used a pseudo-rock material to mimic the appearance of Tashiro no Nanatsugama’s columnar jointing and blend the dam into the natural scenery.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

田代の七ツ釜

ここでは、釜川の水が7つの滝に分かれ、信濃川へ流れ込む地点である。7つの滝とその滝つぼを合わせて「田代の七ツ釜」と呼ばれ、川に沿って約1キロにわたって続いている。

滝を囲む高い岩壁には、マグマが冷えてできた珍しい岩石である柱状節理が不気味なほどまっすぐに並んでいる。この地域は古くから住民を魅了し、数多くの民話や、新潟の田舎の生活を描いた19世紀の代表的な書籍『北越雪譜』にも登場する。

1937年、滝はその景観の美しさと地質学的重要性が認められ、国の名勝天然記念物のひとつとなった。1995年、弁天と呼ばれる滝全体が土砂崩れで崩壊した。下流の滝への悪影響を避けるため、弁天の元の形と流れを復元し、さらなる土砂崩れを防ぐための砂防ダムが設置された。通常、砂防ダムは飾り気のないコンクリートで作られるが、このケースでは、田代の七ツ釜の柱状節理の外観を模倣し、自然の景観に溶け込むように擬岩が使用された。

003-019

Hoshitoge Rice Terraces

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 棚田 / 儀明の棚田、留守原の棚田

【想定媒体】 Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Hoshitoge Rice Terraces

While the conditions of snow country have shaped human culture in the region, humans have also shaped snow country. This relationship is exemplified by the scenic Hoshitoge rice terraces, one of the largest mountainside rice farms in Tokamachi. Residents have grown rice on Mt. Matsuno for hundreds of years, cutting some 200 interconnected paddies into its slopes to create patchwork areas of level ground.

Wet-field rice varieties, the dominant type grown in Japan, require standing water to grow. They are cultivated in flooded fields called paddies. When paddies are built on flat land, their water usually comes from a diverted river. Terraced paddies, on the other hand, require a water source located uphill so that gravity can carry the water downward. At Hoshitoge and other rice terraces in Tokamachi, that life-giving water is provided by sources other than river water, such as rain, groundwater, and snowmelt.

Beech groves at the top of Mt. Matsuno act as a huge, natural sponge. Their thick, deep root systems and the loamy layers of soil created by their fallen leaves collect and retain snowmelt and rainwater. Farmers have made use of this natural water retention by digging reservoirs at the top of the slope to gather the stored water and divert it as needed into the paddies below.

While changing the shape of the land and its watershed has allowed people to grow rice in this region, it has also created an important ecosystem. Meadowhawk dragonflies (*akatonbo*), for instance, spend the hot summer months in the mountains and lay eggs in the rice paddies during the fall. The Hoshitoge rice terraces provide

both environments in close proximity, supporting large populations of these insects. The grown dragonflies, in turn, are a source of food for frogs, who flourish in the water-filled paddies. The frogs then become the prey of snakes and predatory birds. All of these animals are able to survive in the region due to this convergence of human, geological, and climatic factors.

Rice-terrace farming is highly labor intensive. The sloping ground and irregular shapes of the paddies make the use of machines difficult and require nearly all the work to be done by hand. As the country's population shrinks and ages, many terraces have fallen out of use or been abandoned. Those in Tokamachi, including Hoshitoge, are maintained with the help of a shared ownership system. Members across the country pay an annual fee to support the continued cultivation of the paddies, and they receive rice as a dividend. They can also participate in the planting or harvest, learning from the farmers about snow country's traditional way of life while helping to preserve it for the future.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

星峠の棚田

雪国の環境が人間の文化を形成してきた一方で、人間もまた雪国を形成してきた。この関係は、十日町で最大級の山間部の棚田である、風光明媚な星峠の棚田が例証している。住民は何百年以上にわたって松之山で稲作を営み、200もの水田を斜面に切り開き、パッチワークのような平地を作り出してきた。

日本の主要品種である湿田稲は、生育に常時水を必要とする。水田が平地に作られる場合、通常、灌漑は川を迂回して行われる。一方、棚田では、重力によって水が下に流れるように、水源を山の上に設置する必要がある。星峠をはじめとする十日町の棚田では、その命の源となる水は、雨水、地下水、雪解け水など、河川水以外の水源から供給される。

松之山の山頂のブナ林は、天然の巨大なスポンジの役割になっている。その厚く深い木の根と、落ち葉でできたローム質の土壌層が、雪解け水や雨水を吸収、保持するのだ。農家はこの自然の保水力を利用し、斜面の頂上に貯水池を掘って貯めた水を集め、下層の水田に流してきた。

土地とその流域の形状を変えることで、人々はこの地域で米を栽培できるようになったが、同時に重要な生態系も作り出した。例えば、アカトンボは、夏の暑い時期を山で過ごし、秋になると田んぼ

に産卵する。星峠の棚田は、この両方の環境を密接に提供し、これらの昆虫の大規模な個体群を支えている。成長したトンボはカエルは水を張った水田で繁殖するカエルの餌となる。そしてカエルはヘビや捕食鳥の餌食となる。これらすべての動物がこの地域で生き延びることができるのは、このように人為的、地質的、気候的要因が融合しているからである。

棚田での農業は非常に労力がかかる。傾斜地や不規則な形状の水田では機械の使用が難しく、ほぼすべての作業を手作業で行わなければならない。人口減少や高齢化に伴い、多くの棚田が使われなくなったり、放棄されたりしている。星峠を含む十日町の棚田は、共同オーナー制度によって維持されている。全国の会員が田んぼの継続的な耕作を支援するために年会費を支払い、配当として米を受け取る。田植えや収穫に参加し、農家から雪国の伝統的な生活様式を学びながら、それを未来に残す手助けをすることもできる。

003-020

Snow Country's Grove of Beauties: Bijinbayashi

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 美人林 / 越後松之山「森の学校」キョロロ

【想定媒体】 Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Snow Country's Grove of Beauties: Bijinbayashi

Just a few minutes' walk from the Echigo-Matsunoyama Museum of Natural Science “Kyororo” is a grove of some 3,000 slender beech trees stretching toward the sky. This ethereal landscape is called Bijinbayashi, “the wood of beautiful women,” and it has brought photographers and nature lovers to the area for nearly half a century.

Japanese beech trees (*Fagus crenata*) are an alpine species that grows in cooler climates. In central Honshu, they typically are found at elevations around 1,000 meters. Every five to seven years they produce a huge number of seeds (beech nuts), but most of those that sprout are doomed to wither beneath the canopy of older trees, which block the light. How, then, did this mountainside—which is only about 300 meters in elevation—produce such a dense wood of beech trees, so alike in size and shape? As with many things in Tokamachi, the answer relates to snow. The beeches in Bijinbayashi can grow at this low elevation because the long winters and heavy snowfall in Tokamachi create an alpine-like environment. In addition, snow limits the growth of competing species, but keeps the beech trees' autumn seedfall moist and protected from hungry rodents until spring.

The beeches' unusually straight, slender trunks and similar size are the product of local history. The area used to be a natural beech forest with trees of varied sizes and ages. In the 1910s, the landowner needed money to finance his move to Tokyo. He decided to cut down all the mature trees and sell them for making charcoal. The following spring, the saplings that remained had no competition for sunlight. Without taller competitors to edge around, the young trees had little need for sideways growth or branches. They grew straight up, stretching toward the sun in willowy unison.

Residents were so charmed by the grove that they have preserved the area as a scenic attraction.

Some of the trees in Bijinbayashi grow out from the soil at an angle before straightening toward the sky. This phenomenon, common in snow country, is called *nemagari*, or “root curving.” Each winter, heavy snow presses down on the still-pliable saplings, bending them under the weight. Once the snow melts, the trees grow upward again, but over the years, this cycle produces a J-shaped curve that becomes a permanent part of the trunk. Traditionally, local woodworkers used *nemagari* timber to craft roofing beams and snow tools that benefit from the strength of the trees’ natural curve.

A shady trail loops through the forest’s 3 hectares, making Bijinbayashi a pleasant place to visit in the warmer months. In winter, limited ground cover and the snow-covered scenery make it a popular destination for snowshoeing.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雪国の美しい森：美人林

里山科学館 越後松之山キョロロから数分歩くと、約3000本のブナが空に向かって細長く伸びている林がある。この幽玄な風景は「美人林」と呼ばれ、半世紀弱にわたって写真家や自然愛好家たちを魅了してきた。

日本のブナは、涼しい気候の中で育つ高山植物である。本州中央部では、標高約1,000メートル付近から生育する樹木である。5～7年ごとに大量の種子（ブナの実）を実らせるが、発芽した種子のほとんどは、光を遮る老木の樹冠の下で枯れてしまう運命にある。では、標高わずか300メートルほどの山肌に、なぜこれほど大きさも形も同じブナの木が密集しているのだろうか？十日町の多くのことと同様、答えは雪に関係している。美人林のブナがこの標高の低さで育つことができるのは、十日町の長い冬と豪雪が高山に似た環境を作り出しているからだ。加えて、雪は競合樹種の生育を制限するが、ブナの秋の種子を春まで湿らせ、空腹のネズミから守る。

ブナの幹が異常にまっすぐで細いことと、同じような大きさであることは、この地域の歴史の産物である。かつてこの地域は、大きさも樹齢もさまざまなブナの自然林だった。1910年代、この土地の所有者は東京に引っ越す資金が必要だった。彼は成木をすべて伐採し、炭にして売ることにした。翌年の春、残った苗木は日光を得るための競争相手がなくなった。ブナは向光性で、光合成に必

要な光に向かって成長する。周りに背の高い競争相手がいないため、若木は横に伸びたり枝を伸ばしたりする必要がほとんどなかった。彼らはまっすぐに伸び、柳のように一体となって太陽に向かって伸びた。住民たちはこの林に魅了され、風光明媚な場所として保存してきた。

美人林の中には、土から斜めに伸びた後、空に向かってまっすぐに伸びる木もある。雪国でよく見られるこの現象は、「根曲り」と呼ばれる。毎年冬になると、まだしなやかな苗木に重い雪が押し掛かり、その重みで曲がってしまう。雪が解けると、木は再び上に向かって成長するが、このサイクルが何年も続くと、J字型のカーブが幹の一部となって定着する。伝統的に、地元の木工職人たちはこのネマガリ材を使って、自然のカーブの強さを生かした屋根梁や雪道具を製作してきた。

ほどよく整備された木陰の遊歩道が、3ヘクタールの森の中をぐるりと回っており、美人林は暖かい季節に訪れるには快適な場所だ。冬は、地面の露出が限られ、雪に覆われた景色が広がるため、スノーシューの人気スポットとなる。

003-021

Bijinbayashi Beech Grove

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】美人林 / 越後松之山「森の学校」キョロロ

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Bijinbayashi Beech Grove

In this grove, around 3,000 slender Japanese beech trees (*Fagus crenata*) grow in an open, orderly array. Nearly identical in shape and age, they owe this rare state to the combined forces of climate and human activity.

The Japanese beech is predominantly an alpine species, growing at elevations of at least 1,000 meters in central Honshu. The trees here, however, can live at Tokamachi's 300-meter elevation due to the region's heavy winter snowfalls, which mimic the cooler climate of higher locations. The snow also limits the growth of competing species, while keeping the beeches' autumn seedfall moist and concealed from foragers until spring.

The unusual arrangement and uniformity of the trees reflects the history of the area. An older beech forest once existed where Bijinbayashi now stands, but in the 1910s, the forest's landowner cut down all the larger trees to sell for charcoal making. With the land cleared, an entire generation of saplings flourished without competition, growing straight and branchless toward the sun. Residents found the young forest of pale, slender trunks charming and dubbed it *bijinbayashi*, or "the wood of beautiful women."

Many trees in the forest exhibit a snow-country peculiarity called *nemagari* (root curving). This J-shaped bend at the base of the trunk is caused by the weight of snow pressing on the tree trunks while they are still thin and supple. The naturally curved timber that *nemagari* trees produce was traditionally used for making roofing beams and certain wooden tools.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

美人林

この林には、約3,000本の細長いブナの木が整然と生い茂っている。形も樹齢もほとんど同じブナが、このような稀有な状態を保っているのは、気候風土と人為的な働きを組み合わせによるものだ。

本州中央部では、標高1,000メートル以上の高山に生育する樹木である。十日町の木が標高300メートルで生息できるのは、この地域の冬の豪雪が、高地の冷涼な気候を模倣しているからである。雪はまた、競合する樹種の成長を制限し、ブナの秋の種子を春まで湿った状態に保ち、採食者から隠す。

ブナ林の異常な配置と均一性は、人間の関与によるものである。かつて美人林のある場所にはもっと古いブナ林があったが、1910年代に地主が木炭用に大きな木をすべて伐採した。伐採された土地では、苗木のすべての世代が競争することなく繁茂し、太陽に向かってまっすぐに枝を伸ばした。住民は、淡くほっそりとした幹の若い森を魅力的だと感じ、「美人林」と呼んだ。

この森には、雪国特有の「根曲り」と呼ばれる特徴を持つ木も多い。幹の根元がJ字型に曲がっているのは、木がまだ細くしなやかなうちに雪の重みで押しつぶされたためだ。天然の曲木である根曲がりの木は、伝統的に屋根の梁や木製の道具の材料として使われてきた。

003-022

Echoes of the Past: Archaeology in Tokamachi

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 遺跡出土品 / 十日町市博物館

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Echoes of the Past: Archaeology in Tokamachi

The Shinano River Basin, an area that includes modern-day Tokamachi, was settled around 10,000 years ago. Archaeological digs have uncovered earthenware and stoneware pottery from Japan's Jomon period (14,000–400 BCE), attesting to the presence of settlements and providing clues to the life and culture of snow country's earliest inhabitants.

The Jomon period is defined by the invention of pottery, often simple clay forms shaped by hand and fired over an open flame. The name *jomon* (“rope pattern”) refers to the designs made by pressing twine into the sides of these early vessels. Along with the bow and arrow, the invention of pottery drastically changed the human diet, allowing the Jomon people to prepare a wider variety of foods. Fire-safe bowls, for example, enabled them to boil wild plants that were poisonous or unpleasant when eaten raw.

What is known about the Jomon peoples' diet is largely based on the pottery they left behind. In Japan's acidic soil, biological remains such as bone have long since dissolved. However, the carbonized remnants of long-ago meals still cling to cooking vessels, providing concrete evidence of what was once prepared in them.

As their diet improved, the Jomon population grew. During the middle period, some 5,500 to 4,500 years ago, the population of the Shinano River Basin area reached as many as 200,000. This was also the time when “flame-style” pottery (*kaengata doki*) is believed to have appeared.

Flame-style pottery is unique to Niigata Prefecture, and the vessels are thought to have had a religious or ceremonial use. Although some flame-style pieces exhibit burnt food residue like simple, everyday cooking vessels, the flame-style design would have made them fragile and unwieldy for regular meal preparation. Many have impractically high sides and widely flared mouths with projecting ornamentations. Their designs vary widely, but several motifs (such as swirling vortexes or S-shaped patterns) appear frequently. One image even resembles a chicken, though the birds had not yet arrived in Japan. While the vessels' use and the meaning of their designs remain a mystery, the wealth of items pulled from Tokamachi's soil are evidence of a flourishing and complex ancient culture.

Nearly a thousand artifacts excavated from the area are in the Tokamachi City Museum's collection, including clay figurines, stone tools, jewelry, and the earliest examples of flame-style pottery discovered to date. Fifty-seven of these striking pieces have been collectively declared a National Treasure.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

古代の記憶：十日町の考古学

信濃川流域は、現在の十日町市を含む地域で、約1万年前に定住化が始まった。発掘調査の結果、日本の縄文時代（紀元前14,000年～400年）の土器や石器が発見され、人間の居住地があったことを証明するとともに、雪国最古の住民の生活と文化を知る手がかりとなっている。

縄文時代は土器の発明によって定義され、多くの場合、手作業で形を整え、直火で焼いた単純な土器である。実際、縄文という名称は、これらの初期の土器の側面に刻まれた麻ひも模様のことを指している。弓矢とともに、土器の発明は人間の食生活を劇的に変化させ、縄文人はより多様な食べ物を調理できるようになった。例えば、火に安全な器は、生で食べると毒があったり、美味しくなかったりする山菜を茹でることを可能にした。

古代人の食生活についてわかっていることは、彼らが残した土器によるものがほとんどだ。日本の酸性土壌では、骨などの生物学的遺物はとくに溶けてしまっている。しかし、炭化した昔の食事の残骸が調理容器に付着しているため、かつて鍋で何を煮炊きしていたかを示す具体的な証拠となっている。

食生活が改善されるにつれて、縄文人の人口は急増した。約5,500年前から約4,500年前の中期には、信濃川流域の人口は20万人にも達した。火焰型土器（かえんがたどき）が出現したとされるのもこの時期である。

火焰型土器は新潟県特有の土器で、宗教的・儀礼的な用途があったと考えられている。いくつかの火焰式土器には、日常的なシンプルな調理器具のような焦げが見られるが、火焰型土器はそのデザインから壊れやすく、通常の調理には扱いにくかったと思われる。多くは、実用的でない高い側面と、突出した装飾を持つ大きく広がった口を持っている。そのデザインは多種多様だが、いくつかのモチーフ（渦巻きやS字模様など）が頻繁に登場する。ニワトリはまだ日本に渡来していなかったが、鳥をかたどったものもある。土器の用途や文様の意味は謎のままだが、十日町の土壌から引き出された豊富な品々は、繁栄した複雑な古代文化の証拠である。

十日町市博物館には、土偶、石器、宝飾品、最古の火焰型土器など、この地域から発掘された1000点近い遺物が収蔵されている。そのうちの57点の出土品は国宝に指定されている。

003-023

Weaving in Snow Country

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 織物文化 / 十日町市博物館

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Weaving in Snow Country

Tokamachi has a long-established and diverse weaving culture that includes both plant-fiber and silk fabrics. It is particularly known for Echigo *chijimi* crepe, a lightweight fabric made from an herbaceous plant called ramie that grows abundantly in the Shinano River Basin.

The availability of ramie is one reason that weaving first flourished in Tokamachi. The earliest evidence of ramie textiles in Japan comes from the early Jomon period, approximately 7,200 to 5,400 years ago. The thick, knitted ramie textile produced in Tokamachi came to be called Echigo *angin* and is still produced today, along with its more finely woven descendant, Echigo *jofu*.

Climatic conditions in the sheltered Shinano River Basin supported the development of a local weaving culture. Ramie grows well in regions with an abundance of water; humid regions are also ideal for weaving. Arid air makes threads brittle and causes them to snap when they are pulled and twisted during the weaving process. Humidity, on the other hand, makes them more pliable and resilient.

Weaving was traditionally a winter activity in Tokamachi. Women in nearly every farming household used ramie and other plant fibers to produce homespun cloth that was sold to supplement the family income. Working in winter also allowed weavers to cure the finished product on top of the snow in a process called *yukizarashi*, which removes yellowing, making whites brighter and dyes more vivid.

Echigo *chijimi* and Echigo *jofu* fabrics produced by Tokamachi's cottage industry were highly regarded across the country. Wholesalers exported them from the mountains of Niigata to Kyoto, Osaka, and Edo (present-day Tokyo), where they fetched high prices. Echigo *chijimi* was even used to make the robes of shogunate officials.

The demand for ramie cloth was in decline by the nineteenth century as prevailing tastes shifted to silk. Local weavers decided to take up silk weaving as well, although the more complex production process required full-time artisans. This shifted much of the weaving from individual households to centralized workshops. However, unlike other silk production centers where individual artisans specialize in a particular step, many weavers in Tokamachi still learn the entire process.

Tokamachi's skilled weavers also developed new fabrics such as Akashi *chijimi*, a thin summer silk with tightly twisted weft threads that give the fabric its distinctive crepe wrinkling. This prevents it from sticking to damp skin and allows for better air circulation, keeping the wearer cool.

Tokamachi weavers continue to craft elegant kimonos based on traditional techniques and patterns handed down from generation to generation. However, they are also committed to finding innovative applications for their fabrics that appeal to modern consumers, so that their craft may survive for generations to come.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雪国の織物

十日町には、植物繊維や生糸の織物など、古くから多様な織物文化がある。特に、信濃川流域に多く生育する苧麻（ちよま）という草本植物から作られる軽やかな織物「越後ちぢみ」は有名だ。

十日町で織物が最初に盛んになった理由のひとつは、苧麻が採れることである。この地域で最も古い苧麻織物の記録は、およそ7,200～5,400年前の縄文時代前期から残されている。この荒く編まれた苧麻織物は越後アンギンと呼ばれるようになり、現在でも、より細かく編まれた越後上布とともに生産されている。

信濃川流域の気候条件は、この地域の織物文化の発展を支えた。苧麻は水が豊富な地域でよく育つ。湿度の高い地域も織物にとっては理想的だ。乾燥した空気は糸をもちくするため、製織中に糸を引っ張ったりねじったりすると切れてしまう。一方、湿度は糸をしなやかで弾力性のあるものにする。

十日町では伝統的に、織布は冬に生産されていた。ほとんどすべての農家の女性が、苧麻やその他の植物繊維を使って自家製の布を作り、それを売って家計の足しにしていた。また、冬に作業することで、織り手は出来上がった布を雪ざらしと呼ばれる雪の上で養生し、黄ばみを落として白を鮮やかにし、染料をより鮮やかにすることができた。

十日町の家内工業で生産された越後縮や越後上布は、全国的に高く評価された。問屋は新潟の山間部から京都や大阪、江戸（現在の東京）に輸出し、高値で取引された。越後ちぢみは幕府役人の衣服にも使われた。

苧麻織物の需要は、19世紀には嗜好が絹織物へと移り、衰退していった。地元の織物業者は絹織物にも参入することを決めたが、絹織物は生産工程が複雑なため、専任の工房が必要だった。このため、製織の多くが個人の家から中央の工房へと移行した。また、他の絹織物産地では、職人が特定の工程に特化しているのに対し、十日町では多くの職人が全工程を習得している。

十日町の熟練した織り手たちは、明石ちぢみのような薄手で緯糸がしっかりと撚られた夏用の絹織物も開発した。この生地は、湿った肌に密着するのを防ぎ、風通しをよくして涼しく着ることができる。

十日町の織元は、代々受け継がれてきた伝統的な技法や柄をもとに、エレガントな着物を作り続けている。そして、現代の消費者にアピールできるような革新的な用途を模索し、彼らの技術が何世代にもわたって存続できるよう努力している。

003-024

Tokamachi's Weaving Culture

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 織物文化 / 十日町市博物館

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Tokamachi's Weaving Culture

Tokamachi has a long-established and diverse weaving culture that includes both plant- and animal-fiber fabrics. Over the centuries, the region has produced textiles that are sought-after nationwide.

The earliest textiles in the area date to the early Jomon period, around 7,200 to 5,400 years ago. They were made from ramie, an herbaceous plant that grows abundantly in the Shinano River Basin. Now called Echigo *angin*, versions of this thick knit are still made today, along with its more finely woven descendant, Echigo *jofu*. A lightweight crepe version called Echigo *chijimi*, developed in the 1670s, became one of the region's most famous products. Shogunate officials and other upper-class samurai coveted it for their summer robes.

Echigo *chijimi* and Echigo *jofu* were made by the women of Tokamachi households during the long winter months spent indoors. They sold the fabric to wholesalers to supplement the family income.

By the nineteenth century, the demand for ramie cloth was in decline as prevailing tastes swung toward silk. In response, Tokamachi also adopted silk weaving, but the material's more complex production process required dedicated artisans, not part-time side labor. This shifted much of the weaving from individual households to centralized workshops with specialized workers. Even so, weavers in Tokamachi were—and continue to be—trained in every step of the production process.

From the new silk-weaving workshops came innovative fabrics such as the thin summer silk known as Akashi *chijimi*, which is still prized today. Its tightly twisted weft threads give it a distinctive crepe wrinkling that prevents it from sticking to damp skin and allows for better air circulation to keep the wearer cool.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

十日町の織物文化

十日町には、古くから植物繊維や動物繊維など多様な織物文化が根付いている。何世紀にもわたって、この地域は全国的に人気の高い織物を生産してきた。

この地域で最も古い織物は、およそ7,200～5,400年前の縄文時代前期のものである。信濃川流域の湿原に多く生育する草本植物、苧麻（ちよま）を原料としていた。現在では「越後アンギン」と呼ばれるこの厚手の織物は、より細かく織られた「越後上布」とともに現在でも作られている。1670年代に開発された「越後縮」と呼ばれる薄手の縮緬は、この地方を代表する名産品となった。幕府の役人や上流階級の武士たちは、夏の衣服として越後縮を欲しがった。

越後縮や越後上布は、室内で過ごす長い冬の間、十日町の家々の女性たちによって作られた。彼女たちは家計の足しにするため、生地を問屋に売った。

19世紀になると、人々の嗜好が絹に移り、苧麻織物の需要は減少していった。これに対応するため、十日町も絹織物を採用したが、絹織物は製造工程が複雑なため、副業的な労働力ではなく、専属の職人が必要だった。そのため、機織りの多くは個人の家から、専門的な労働力を持つ機屋へと移行していった。十日町の機織り職人たちは、生産工程のすべての段階において、昔も今も訓練を受け続けている。

新たな絹織物会社からは、今日でも高く評価されている明石ちぢみのような革新的な織物が生まれた。緯糸にしっかりと撚りかけることで、独特の縮緬（ちりめん）状のシワができ、湿った肌にくっつきにくく、風通しがよいため涼しいのだ。

003-025

The Weaving Process, from the Beginning

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 織物工程 / 十日町市博物館

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

The Weaving Process, from the Beginning

Weaving exists across the world in countless variations of material, pattern, and complexity, but all its iterations share a common approach: warp and weft threads. This involves overlapping vertical (warp) and horizontal (weft) threads in an alternating sequence.

In Japan, weaving began in the early Jomon period (7,200–5,400 years ago) with a simple cloth of woven ramie fibers. The kind produced in Tokamachi was called Echigo *angin*. The earliest weavers used a horizontal proto-loom that consisted of comb-like notches carved into a wooden beam. These notches helped hold in place the vertical warp threads, which were also weighed down at the ends with wooden cylinders. The weaver passed a horizontal thread through the warp threads and then used the cylinders to flip the warp over the weft, creating the weave.

Angin's more finely woven descendant, called Echigo *jofu*, appeared once weaving technology grew more advanced. The thread itself became finer as weavers discovered that twisting plant fibers on a spindle created a thinner, stronger thread. Additionally, the arrival of true looms around the second century BCE made the weaving itself faster and more efficient. The key difference was the use of heddles, rods inserted across the weft to lift a whole series of warp threads simultaneously and allow a thread-bearing shuttle to pass through.

From these humble beginnings, weaving in Tokamachi has evolved and expanded to include mechanized looms, fine-spun silks, and complex weaves that rely not only on

the pattern of warp and weft but also on threads tightly twisted to produce an evenly rippled crepe.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

織物の工程、その起源から

織物は世界中に存在し、その素材、模様、複雑さには数え切れないほどのバリエーションがあるが、そのすべての過程に共通するアプローチは、経緯に糸を重ねることである。つまり、縦糸と横糸を交互に重ねるのである。

日本では、7,200～5,400年前の縄文時代前期に越後アンギンと呼ばれる苧麻（ちよま）の繊維で織られた素朴な布が織物文化の起源とされている。初期の織り手は、台の上に切り欠きのある木の梁を置き、両端を石で縛った荒い植物繊維の糸をぶら下げた原始的な織機を使っていた。この錘のついた経糸はたくさんの溝によって固定され、織り手はその間に一本の緯糸を置く。交互に並んだ縦糸の石が持ち上げられ、その糸が横糸の上を反転しながら動き、織りが生まれる。

機織り技術が高度になると、アンギンのより繊細な織物の子孫である越後上布が登場した。植物の繊維を紡錘車（ぼうすい）で撚（よ）ることで、より細く丈夫な糸ができることを発見したのだ。さらに、紀元前2世紀ごろには本格的な織機が登場し、機織りそのものがより速く効率的になった。その決定的な違いは、綜紵（そうこう）という緯糸（よこいと）を横切るように挿入された棒を使うことで、一連の経糸（たていと）を同時に持ち上げ、糸を通した杼（ひ）を通すことができるようになったことだ。

このようなささやかな始まりから、十日町の織物は進化し、機械化された織機、細番手の絹織物、経糸と緯糸の模様だけでなく、均一に波打つ縮緬を作るために強く撚られた糸を使った複雑な織物へと拡大してきた。

003-026

The Weaving Process

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 織物工程

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

The Weaving Process

Weaving is the overlapping of vertical (warp) and horizontal (weft) threads in an alternating sequence so that they hold together. This contrasts with knitting, which creates a fabric of interlocking loops made from a single thread.

Weaving in Tokamachi began approximately 7,200 to 5,400 years ago with a simple cloth called Echigo *angin*. It used thread made of rough plant fibers, usually ramie, a type of nettle that grows abundantly in the Shinano River Basin. The earliest weavers used a horizontal proto-loom that consisted of comb-like notches carved into a wooden beam. The warp threads were held in place by the notches and the weaver passed a single weft thread through them before flipping the warp threads over it to form the weave.

Advances in spinning and weaving technology later made it possible to create a finer, more tightly woven cloth, known as Echigo *jofu*. By twisting ramie fibers on a spindle, weavers could produce a stronger, thinner thread. Also, around the second century BCE, looms with heddles were introduced. Heddles are rods inserted across the weft to lift a whole series of warp threads simultaneously and allow a shuttle bearing the weft thread to pass through. This made weaving faster and more efficient.

The finished fabrics were placed on pure, white snow to strengthen and bleach them with reflected ultraviolet rays. This process is called *yukizarashi*—an unusual approach that continues to define Echigo *jofu* today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

織物工程

織物とは、経糸と緯糸を交互に重ね合わせることで織られたものである。一本の糸をループ状に絡ませる編み物とは対照的である。

十日町で編み物が始まったのは、今から約7,200～5,400年前のことで、越後アンギンと呼ばれる素朴な布から始まった。荒い植物繊維の糸を使ったもので、たいていは信濃川流域に多く生育するイラクサ科の植物、苧麻（ちよま）であった。初期の織り手は原始的な織機を使っていた。木製の台に切り欠きのある木の梁があり、等間隔に重りのついた縦糸が張られていた。糸はたくさんの溝によって固定され、織り手は一本の緯糸を横に引き、その上に交互に経糸を翻して織りを形成した。

その後、紡績と織りの技術が進歩し、越後上布として知られるより細く、よりしっかりと織られた布を作ることができるようになった。苧麻（ちよま）の繊維を紡錘（ぼうすい）で撚（よ）ることで、より強く、より細い糸が織れるようになったのだ。また、紀元前2世紀ごろには、綜紉（そうこう）を備えた織機が登場した。綜紉（そうこう）とは緯糸（よこいと）を横切るように挿入された棒のことで、一連の経糸を同時に持ち上げ、緯糸を支えた杼（ひ）を通すことができる。これにより、織物はより速く、より効率的になった。

出来上がった織物は白い雪の上に置かれ、反射した紫外線で強化され、漂白された。この工程は「雪ざらし」と呼ばれ、今日も越後上布の特徴となっている。

003-027

Local Color: Tokamachi Textile Dyeing

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 染物工程 / 吉澤織物、翠山、青柳

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Local Color: Tokamachi Textile Dyeing

To complement its rich weaving tradition, Tokamachi has developed textile dyeing. Thanks to the heavy winter snowfalls, the area has an abundance of soft water, which is ideal for dyeing. As snowmelt is absorbed into the ground, mineral content that might interfere with color fixing is filtered out, leaving behind the pure water needed for steaming and rinsing dyed fabric.

For plant-based textiles like Echigo *jofu*, the threads are generally dyed *before* they are woven. One approach closely associated with Tokamachi is a resist-dyeing technique called *kasuri* (blurred patterns). Dyers knot separate cotton threads around the main thread according to a pattern. The cotton threads prevent the dye from penetrating, keeping sections of the main thread white. On the loom, the white sections line up to create an image or pattern. Naturally, this challenging technique requires precise calculations of length, a thorough understanding of the strength and flexibility of the material, and knowledge of the dimensions of the loom.

With silks, dyeing is usually done *after* the weaving in a resist-dyeing technique called *yuzen*. Pieces of white silk many meters long are hung like hammocks across a workshop and stretched taut with flexible, needle-tipped bamboo sticks. Onto this smooth surface, dyers first apply a resist paste to areas they do not want to dye and then use brushes to apply dye to the areas they do. It requires years of training to get an even coat and prevent unwanted variations in color saturation over the length of the cloth. Designs can be done freehand, but workshops more commonly use stencils of a fixed size, similar to screen printing. Generally, each stencil corresponds to one color layer, and properly lining up successive stencils to ensure dye is applied only to the

appropriate place is another skill that requires careful practice. After the dye is applied, the cloth is steamed to fix the color and then rinsed to remove the resist paste and residual dye. The process may be repeated several times depending on the pattern. Typically, the cloth's background color is applied last.

Another dyeing technique used on silks is called *shibori*, a kind of tie-dyeing. Tiny bits of cloth in neat rows are knotted up or stitched with individual threads; then the fabric is soaked in a vat of dye. The dye only partially penetrates the tied areas, creating *shibori*'s characteristic spotted pattern and gradations of color.

Local dyeing culture continues to evolve, and silk dyers in Tokamachi have recently begun combining *yuzen* and *shibori* to produce highly innovative patterns for kimonos.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

地元の色：十日町染織

豊かな織物の伝統を受け継ぐ十日町には、染色に最適な軟水がある。これは冬の豪雪のおかげだ。雪解け水が地中に吸収される際に、色の定着の妨げとなるミネラル分がろ過され、染めた布を蒸したりすすいだりするのに必要な純水が残るのだ。

越後上布のような植物性の織物の場合、糸は一般的に織られる前に染められる。十日町に特に関連する手法のひとつに、*緋*（かすり）と呼ばれる防染の技法がある。染め職人は、模様にしたがって主糸の周りに別々の木綿糸を結ぶ。木綿の糸が染料の浸透を防ぎ、本糸の一部を白く保つ。織機では、この白い部分が並んで絵柄が描かれる。当然ながら、この難しい技法には、長さの正確な計算、素材の強度と柔軟性の十分な理解、使用する織機の寸法の予測が必要となる。

絹の場合、染色は通常、織物の後に友禅と呼ばれる防染技法で行われる。何メートルもある白い絹をハンモックのように作業場に吊るし、針の先がついたしなやかな竹の棒でピンと張る。この滑らかな表面に、染め手はまず染めたくない部分に糊を塗り、染めたい部分に刷毛で染料を塗っていく。均一に染め上げ、布の長さによる色のばらつきを防ぐには、長年の訓練が必要だ。デザインはフリーハンドでも可能だが、工房ではスクリーンプリントのように決まったサイズの型紙を使うことが多い。一般的に、それぞれの型紙は1つのカラーレイヤーに対応しており、染料が適切な場所のみ塗られるように、連続した型紙を正しく並べることも、入念な練習が必要な技術だ。染料を塗布した後、布は色を定着させるために蒸され、その後糊と残留染料を取り除くためにすすがれる。柄によっては、この工程を何度か繰り返すこともある。通常、生地の色は最後に塗られる。

絹に使われるもうひとつの染色技法は、絞り染めの一種である「絞り」と呼ばれるものだ。一列に並んだ小さな布を結び、あるいは一本一本の糸で縫い、染料の入ったバケツに布を浸す。染料は結んだ部分に部分的にしか浸透せず、絞りの特徴である斑点模様と色のグラデーションが生まれる。

地元の染色文化は進化を続けており、十日町の絹染め職人たちは近年、友禅と絞りを組み合わせて、非常にユニークな柄の着物を作り始めている。

【タイトル】 染物工程

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Dyeing Methods in Tokamachi

Because of its heavy snowfalls, this region of Niigata has abundant soft water, which is ideal for dyeing. As snowmelt permeates the ground, mineral content that might interfere with color fixing is filtered out, leaving chemically inert water perfect for steaming and rinsing fabrics. Whether they make plant-fiber fabrics or silk, textile workshops in Tokamachi generally do their own dyeing.

For plant-based textiles like Echigo *jofu*, the threads are usually dyed *before* they are woven. Weavers then create patterns by crosshatching threads of different colors on the loom in a manner similar to the way plaids are created. Another approach particularly associated with Tokamachi is a resist-dyeing technique called *kasuri* (blurred patterns). Dyers knot separate cotton strings around the main thread in accordance with a pattern. The cotton threads prevent the dye from penetrating, keeping sections of the main thread white. On the loom, the white sections line up to create an image or pattern.

With silks, image creation is usually done *after* the weaving with a resist-dyeing technique called *yuzen*. First, a resist paste is applied to white silk in places where the artisan does not want dye to sink in. Dye is then brushed on, either freehand or with the use of a sequence of stencils, similar to screen printing. In the final stage, the completed image is covered in paste to protect it as the background is dyed.

A tie-dyeing technique called *shibori* is also used on silk. Before the fabric is soaked in dye, small areas are knotted up or stitched with thread, preventing the dye from completely penetrating and creating spotted, wavy gradations of color. In recent years, some local workshops have begun combining *yuzen* and *shibori* to make highly innovative patterns.

十日町の染色方法

新潟県十日町市は豪雪地帯であるため、染色に適した軟水が豊富である。雪解け水が地中に浸透することで、色の定着の妨げとなるミネラル分がろ過され、蒸しやすすぎに最適な化学的に不活性な水になる。十日町の織物工房では、植物繊維の織物であろうと絹織物であろうと、自分たちで染めるのが一般的だ。

越後上布のような植物繊維の織物の場合、通常は織る前に糸を染める。その後、織機で異なる色の糸を交差させ、格子柄を作るのと同じような方法で柄を作る。十日町に特に関連するもうひとつの方法は、拵（かすれ）と呼ばれる防染の技法である。染め職人は、模様にしたがって主糸のまわりに別々の綿糸を結びつけます。木綿の糸が染料の浸透を防ぎ、本糸の一部を白く保つ。織機では、この白い部分が並んでイメージやパターンを作り出す。

絹織物の場合、絵柄の作成は通常、織り上げた後に友禪と呼ばれる防染の技法で行われる。まず、職人が白絹の染料が沁み込まないような場所に糊を塗る。その後、染料を刷毛で、フリーハンド、あるいはスクリーンプリントの工程と同じように型紙を使って刷り込んでいく。最終段階では、背景を染める際に絵柄を保護するために糊で覆われる。

絞りと呼ばれる絞り染めの技法も絹に使われる。生地が染料に浸される前に、染料が完全に浸透するのを防ぐため、小さな部分が結び目で止められたり、糸で縫われたりして、斑点状の波状のグラデーションを作り出す。近年では、友禪と絞りを組み合わせた斬新な柄を作る地元の工房もある。

003-029

Echigo-Tsumari Art Triennale

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 大地の芸術祭（現代アート） / 越後妻有里山現代美術館MonET、まつだい雪国農耕文化村センター「農舞台」、光の館、清津峡溪谷トンネル

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Echigo-Tsumari Art Triennale

The Echigo-Tsumari Art Triennale is an outdoor art festival held every three years in and around Tokamachi and Tsunan—an area totaling 760 square kilometers. Since its launch in 2000, it has become one of the world’s largest outdoor art festivals and has made Niigata’s snow country a dynamic center for contemporary art.

The festival was originally conceived as a revitalization effort. Since the 1950s, countrywide urbanization has led to the shrinking and aging of populations in rural areas like Tokamachi. The Triennale was created to forge a new regional identity by exploring the intersection of art, ecology, and community; it was also an effort to bring art outside of the museum and into public spaces. The festival was intended to remind residents and visitors alike of the charm and dignity of life in *yamazato*, traditional villages that co-exist with the natural world.

In keeping with a theme of harmony with nature, site-specific art installations are created to be part of the landscape itself. They appear in rice fields and alleyways, outside homes and vacant buildings, and winding through parks and gardens to become a seamless part of the local tapestry. Some of the works are functional, serving as benches, playgrounds, or storage sheds. Others highlight nature, agriculture, or cultural traditions.

Contemporary art and traditional village lifestyles may seem at odds, but both benefit from a spirit of collaboration. This is exemplified by one of the festival’s first works:

The Rice Field (2000) by Russian artists Ilya and Emilia Kabakov. Thin figures shaped like traditional paper cutouts stand in terraced rice fields, engaged in the difficult work of rice cultivation: tilling, seeding, planting, mowing, and harvesting. The elderly owner of the land was initially hesitant to lend it to the project, seeing the long and laboriously cultivated paddies as a symbol of his ancestors' perseverance. However, in discussion with the artists, he realized the ongoing cultivation of the paddies was part of the concept. The land would continue to be farmed with the assistance of festival volunteers, even after his retirement. In addition, the art installation communicates how central shared labor has been to human survival in snow country. Today, residents often greet visitors to the site with tea and rice balls, and the work continues to foster communication and mutual understanding between residents and visitors.

Since its inception, some 1,000 preeminent artists and architects from around the world have taken part in the Triennale, including noted names such as Christian Boltanski, Marina Abramović, Cai Guo-Qiang, James Turrell, and many others. More than 200 permanent installations now dot the countryside, attracting visitors year-round. During the festival, additional temporary works are installed, and half a million visitors make their way to the mountains of Niigata to see them.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレは、十日町、津南町の760平方キロメートルを舞台に、3年に一度開催される野外アートフェスティバルである。2000年に始まって以来、世界最大級の野外アートフェスティバルとなり、新潟の雪国を現代アートのダイナミックな中心地にしてきた。

このフェスティバルはもともと地方活性化のために企画された。1950年代以降、全国的に都市化が進み、十日町のような地方では人口の減少と高齢化が進んだ。トリエンナーレは、アート、エコロジー、コミュニティーの接点を探ることで、新しい地域のアイデンティティを形成することを目的としており、アートを美術館の外に持ち出し、公共空間に持ち込む試みでもあった。このフェスティバルは、自然界と共存する伝統的な集落である山里の生活の魅力と品格を、住民や観光客に再認識させるものであった。

自然との調和をテーマに、サイトスペシフィック・アート・インスタレーションは、風景の一部となるように作られている。田んぼや路地、民家や空き家の外、公園や庭の中を曲がりくねって出現し、地域の

タペストリーの一部として溶け込んでいる。作品の中には機能的で、ベンチや遊び場、物置の役割を果たしているものもある。また、自然や農業、文化的伝統を強調するものもある。

現代アートと伝統的な村の暮らしは、一見相容れないもののように思えるかもしれないが、両者の根底にはコラボレーションの精神がある。このことは、このフェスティバルの最初の作品のひとつに示されている。ロシア人アーティスト、イリヤ・カバコフとエミリア・カバコフによる「田んぼ」だ。伝統的な切り絵のような形をした細い人物が棚田に立ち、耕し、種をまき、田植えをし、草刈りをし、稲刈りをするという稲作の困難な作業にあっている。この土地の高齢の所有者は当初、長く苦勞して耕作された水田を先祖の忍耐の象徴と見て、このプロジェクトに貸すことをためらっていた。しかし、アーティストたちとの話し合いの中で、彼は水田を耕し続けることがコンセプトの一部であることに気づいた。アート作品の一部として、この土地は彼の引退後も、フェスティバルのボランティアの助けによって耕作され続けるのだ。さらに、このアートインスタレーションは、雪国に住む人々の生存において、共有労働がいかに中心的であったかを伝えている。現在も、この地を訪れる人々を住民がお茶とおにぎりで出迎え、住民と訪問者のコミュニケーションと相互理解を育んでいる。

トリエンナーレが始まって以来、クリスチャン・ボルタンスキー、マリーナ・アブラモヴィッチ、蔡國強、ジェームズ・タレルなど、世界中から約1000人以上の著名なアーティストや建築家が参加している。現在、200を超える常設インスタレーションが田園地帯に点在し、年間を通して来場者を魅了している。映画祭期間中には、さらに仮設作品が設置され、50万人の観客がそれを見るために新潟の山々を訪れる。

003-030

Honyarado Snow Huts

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】ほんやらどう / いろりとほたるの宿せとぐち

【想定媒体】Webページ

できあがった英語解説文

***Honyarado* Snow Huts**

Honyarado are igloo-like snow huts built in Tokamachi as part of a winter event called *torioi*, or “bird chasing.” *Torioi* is traditionally held on the night of January 14. During the event, children parade through town, loudly clapping wooden blocks together and singing the *torioi* song to scare away crop-devouring birds. Residents reward their efforts with mochi rice cakes and other sweets. The children then gather inside a *honyarado*, where they can roast the mochi over a charcoal brazier and share the fruits of their labor late into the night. While the origins of the event are agricultural, today the event is another way to enjoy the snow and build community.

There are two different types of *honyarado*. The first, referred to as “castle type,” consists of three snow walls topped with a roof of bamboo poles. The second, called “hollowed-out type,” is as the name suggests: a mound of snow that has been hollowed out to create a small room inside.

Snow huts similar to *honyarado* are found in other snowy areas of Japan, where they are usually called *kamakura*. The Tokamachi name likely comes from the *torioi* song, which includes shouts of the onomatopoeic word *honyara!* to drive off the birds. Loosely, one might translate *honyarado* as “shoo-shoo huts.”

Experiencing the surprising warmth of squeezing into a *honyarado* to sing and clap with Tokamachi residents is a rare treat awaiting winter visitors.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ホンヤラドウ

ホンヤラドウは、鳥追いという冬の行事の一環として十日町に建てられたイグルーのような雪小屋である。鳥追いは伝統的に1月14日の夜に行われる。この行事では、子供たちが集落を練り歩き、大きな声で拍子木を叩き、鳥追唄を歌って農作物を食いあらず鳥を追い払う。住民たちは、餅やその他のお菓子で彼らの努力に報いる。その後、子供たちはホンヤラドウの中に集まり、炭火コンロで餅を焼き、自分たちの努力の成果を夜遅くまで分かち合う。この行事の起源は農耕であるが、今日ではコミュニティー形成と雪を楽しむことを目的としている。

ホンヤラドウには2つの種類がある。1つは「城壁型」と呼ばれるもので、3つの雪の壁の上に竹竿で屋根を作る。もうひとつは「割り抜き型」と呼ばれるもので、その名の通り、雪山をくりぬいて小さな部屋を作ったものだ。

割り抜き型のほんやら堂に似た雪小屋は、北日本の他の豪雪地帯にもあり、通常「かまくら」と呼ばれている。十日町の名は、鳥追唄の中で鳥を追い払うために繰り返される擬音語「ほんやら」に由来していると考えられる。ざっくりと訳すと「ホーイホーイ小屋」となる。

十日町の人たちと一緒に歌い、手を叩いて、ホンヤラドウの中に入り、驚くほどの暖かさを体験することは、冬の観光客を待っている貴重な体験である。

003-031

Honyarado Snow Huts

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】ほんやらどう

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Honyarado Snow Huts

This structure is called a *honyarado* in the local dialect. Traditionally, these snow huts were constructed for a winter event called *torioi*, or “bird chasing.”

Torioi has long been a significant tradition for Tokamachi’s agricultural communities. Traditionally held on January 14, the custom is a ceremonial expulsion of birds that might eat the crops. Children parade through town, singing the *torioi* song and clapping wooden blocks together. Residents reward them with mochi rice cakes and other sweets. The children play late into the night inside a *honyarado*, where a small charcoal stove provides warmth.

Similar snow huts are known as *kamakura* in other snowy areas of Japan. The local name likely comes from the *torioi* song, which expresses shooing off birds in a rice field with the onomatopoeic word *honyara!* Loosely, one might translate the name *honyarado* as “shoo-shoo huts.”

While no longer so tightly tied to agricultural life, *torioi* and *honyarado* remain a beloved part of the winter calendar in Tokamachi—one of the many ways residents turn the region’s heavy snowfalls into a source of fun and community building.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ホンヤラドウ

この構造物は、地元の方言でホンヤラドウと呼ばれている。伝統的に、この雪小屋は「鳥追い」と呼ばれる冬の行事のために建てられた。

鳥追いは、十日町の農村にとって重要な伝統行事である。伝統的に1月14日に行われるこの風習は、農作物を食べるおそれのある鳥を追い払う儀式である。子供たちは特別な唄を歌いなが

ら町を練り歩き、拍子木を打ち鳴らす。住民は彼らに餅やその他のお菓子をご褒美として与える。子供たちは、小さな炭ストーブで暖をとるホンヤラドウの中で、夜遅くまでその遊びを楽しむ。

同じような雪小屋は、北日本の他の雪深い地域でも「かまくら」として知られている。このローカルネームの由来は、田んぼで鳥を追い払うときに「ほんやら」という擬音語を繰り返す鳥追い唄にあるようだ。ざっくりと訳せば、「シッシツ小屋」ということになる。

今では農作業と密接な関係はなくなってしまったが、鳥追いとホンヤラドウは、十日町の冬の風物詩として愛され続けており、豪雪を楽しみやコミュニティーづくりの源とする住民の姿のひとつである。

003-032

Fluvial Terraces: The Foundation of Snow Country

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 河岸段丘 / ラフティング (ミオンなかさと)

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Fluvial Terraces: The Foundation of Snow Country

Tokamachi sits on geological structures called fluvial terraces, which are “steps” of flat land that rise up on either side of a river. Nine broad terraces rise from the Shinano River basin, each step clearly shown by bands of dark green forest on the slopes and the checkerboard pattern of rice paddies on the flats. This geography made snow country suitable for human habitation, as level ground makes it easier to build shelters and grow crops.

The fluvial terraces in Tokamachi were formed when land pushed up by tectonic movement was subsequently eroded by a river cutting through it. The terraces in Tokamachi began to form some 400,000 years ago, following an eruption of nearby Mt. Naeba. The Shinano River and its tributaries flowed through the area, eroding the volcanic ash and stone and creating an alluvial plain at the foot of the mountains. Because the plain lies along a major fault line, the movement of tectonic plates pushing against each other periodically caused the land to crumple, transforming the plain into elevated terraces. The river, always seeking to flow to low ground, shifted its course, eroding a new bed over time. The process repeated several times over the millennia, creating the shape of today’s terraces.

When people first came to this area more than 10,000 years ago, the terraces provided flat land to live on. Around 300 BCE, the inhabitants began to raise crops. The terraces’ soil proved quite fertile, with a base of volcanic ash enriched by minerals carried down from the mountains by river water and snowmelt. Despite the difficulties of Tokamachi’s snowy winters, this rich landscape provided a firm foundation for people to survive and flourish.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

河岸段丘：雪国の礎

十日町市は河岸段丘と呼ばれる、平坦な土地に階段状に張り巡らされた地質構造の上に位置している。信濃川流域には9つの段丘があり、それぞれの斜面には濃い緑色の森林の帯が広がるのに対し、平地には市松模様のような水田が規則正しく並んでいる。このような地形が、平らな土地に住居を建てやすく、作物を育てやすい、人間の暮らしに適した雪国を作ったのだ。

十日町の河岸段丘は、地殻変動によって押し上げられた土地が、川によって浸食されて形成されたものだ。十日町の段丘が形成され始めたのは、約40万年前、近くの苗場山の噴火の後である。信濃川とその支流が噴火地域を流れ、火山灰や石を浸食し、山麓に沖積平野を形成した。しかし、この地域は大きな断層に沿って位置しており、2つの地殻プレートが周期的に押し合う動きによって、土地が崩れ、段丘面の標高が高くなった。川は常に低地を流れようとし、流れを変え、時間をかけて新しい川床を浸食した。このプロセスが数千年の間に何度も繰り返されることによって、今日の段丘が形成された。

1万年以上前に人類が初めてこの地域にやってきたとき、段丘はここに住むことができる平地を提供した。紀元前300年頃に農業が始まったとき、火山灰をベースとした土壌は、川の水や雪解け水によって山から運ばれてきたミネラルによって豊かになり、非常に肥沃であることが証明された。十日町の雪深い冬は厳しいものであったが、この豊かな地形は人類が生き延び、繁栄するための強固な土台となった。

003-033

The “Great Curative Springs” of Matsunoyama Onsen 十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 温泉 / 松之山温泉

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

The “Great Curative Springs” of Matsunoyama Onsen

Matsunoyama Onsen is a historic hot spring tucked away in the mountains of Tokamachi. It is considered one of Japan’s “Three Great Curative Springs,” and has reportedly been known for its healing properties since the fourteenth century.

What makes these waters special? Under Japanese law, spring water must have a sufficient concentration of at least 1 out of 19 therapeutic minerals to qualify as a hot spring. Matsunoyama Onsen meets the thresholds for eight, including the highest levels of antifungal and antibacterial boric acid found in Japan. It also contains minerals such as lithium, strontium, bromine, iodine, fluoride, metaboric acid, and metasilicic acid, which are reported to have beneficial properties, especially for skin ailments.

Moreover, the high concentration of these minerals has also been connected to their efficacy. The spring waters of Matsunoyama contain a higher concentration of dissolved minerals than can be found in human cells (a condition called hypertonicity), which aids the absorption of minerals through the natural process of osmosis.

Finally, Matsunoyama Onsen’s springs are very hot, emerging from the ground at up to 98 °C before they are mixed with cold water for bathing. The baths also have high salt content, since they are fed from a reservoir of saltwater that was trapped between two oceanic plates around 12 million years ago. For bathers at Matsunoyama Onsen, the heat and buoyancy of the water make soaking particularly relaxing, which has contributed to the spring’s reputation for healing.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松之山温泉の"名湯"

松之山温泉は十日町の山あいにはっきりと佇む歴史のある温泉である。松之山温泉は「日本三大薬湯」のひとつに数えられ、14世紀からその湯の効能が知られていたと伝えられている。

この湯の何が特別なのか？日本の法律では、19種類の治療的なミネラルのうち、1種類でも十分な濃度があれば温泉として認められる。松之山温泉の泉質は、8種類の基準値をクリアしており、そのうちのホウ酸の含有量と抗菌作用は日本一である。また、リチウム、ストロンチウム、臭素、ヨウ素、フッ素、メタホウ酸、メタケイ酸といったミネラルも含まれている。これらはすべて、特に皮膚の病気に効果があると報告されている。

これらのミネラルの濃度が高いことが、その効能にもつながっている。松之山温泉の泉質は、人間の細胞内よりも高濃度のミネラルが含まれているため（高張性という状態）、浸透圧の自然なプロセスによって、体内にミネラルが吸収されやすくなるのである。

そして、松之山温泉の泉質は非常に熱く、入浴用に冷水と混合される前の最高温度は摂氏98度である。また、約1200万年前に2つの海底プレートの間閉じ込められた塩水の貯水層からの供給であるため、塩分濃度が高い。松之山温泉の入浴客にとって、お湯の熱さと浮力は特にリラックスさせてくれ、それがこの温泉の癒しの評判に大きく影響していることは間違いない。

003-034

Matsunoyama Onsen's Curative Properties

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 温泉

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Matsunoyama Onsen's Curative Properties

Matsunoyama Onsen's baths are fed by one of Japan's "Three Great Curative Springs" and have reportedly been known for their healing properties since the fourteenth century. Their effectiveness is attributed to the high concentrations of diverse minerals found in the water.

Under Japanese law, spring water must have a sufficient concentration of at least 1 out of 19 therapeutic minerals to qualify as a hot spring. Matsunoyama Onsen's springs meet the thresholds for eight, including the highest levels of antifungal and antibacterial boric acid of any spring in Japan. They also contain minerals such as lithium, strontium, bromine, iodine, fluoride, metaboric acid, and metasilicic acid that are reported to be beneficial for treating skin ailments.

The springs are also hypertonic, meaning that the concentration of dissolved minerals is higher in the water than it is in the body. The natural process of osmosis therefore helps absorb the beneficial minerals through the skin. It can also cause dehydration, however, so bathers are encouraged to drink plenty of water.

Unlike most Japanese hot springs, which are fed by geothermally heated groundwater, Matsunoyama Onsen's reservoir is filled with seawater that was trapped underground by tectonic activity approximately 12 million years ago. Today, the water's high salinity creates a buoyant feeling in the baths and is reported to help the body retain heat afterward—an added benefit in Tokamachi's cold winters.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松之山温泉の効能

松之山温泉の湯は日本三大薬湯と呼ばれ、14世紀からその効能が伝えられてきた。その効能は、水に含まれる高濃度の多様なミネラルに起因する。

日本の法律では、19種類のミネラルのうち1種類を十分に含んでいれば温泉として認められる。松之山温泉の泉質は、8つの基準値をクリアしており、そのうち抗真菌・抗菌作用のあるホウ酸の含有量は日本一である。また、リチウム、ストロンチウム、臭素、ヨウ素、フッ素、メタホウ酸、メタケイ酸といったミネラルも含まれており、特に皮膚病に効くと言われている。

また、この温泉は高張性であり、溶存ミネラルの濃度は身体内よりも高い。そのため、浸透圧の自然なプロセスによって、有益なミネラルが皮膚を通して体内に吸収されやすくなる。ただし、脱水作用もあるため、入浴者は水をたくさん飲むように勧められる。

地熱で温められた地下水を利用している日本の多くの温泉とは異なり、松之山温泉の源泉は約1200万年前、地殻変動によって地下に閉じ込められた海水で満たされている。現在では、塩分濃度が高いため、温泉のお湯に浸かると浮遊感があり、湯上り後の保温効果も高いと言われており、十日町の寒い冬にうれしい効能がある。

003-035

Ryo'unkaku Ryokan

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 凌雲閣

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Ryo'unkaku Ryokan

Ryo'unkaku is a historic *ryokan* inn in the Matsunoyama Onsen hot springs area. The three-story wooden structure of the main building, constructed in 1938, was registered as a Tangible Cultural Property in 2005. The inn is an excellently preserved example of snow-country architecture for the period. Its longevity is particularly impressive considering it has survived three major earthquakes and the punishing weight of heavy snowfalls year after year.

Still in operation today, the inn has many unique architectural features. When it was constructed, the owner commissioned a group of skilled carpenters for the interiors, giving each of them free rein over one of the 14 guestrooms. They competed to demonstrate their skills, resulting in elaborately carved transoms, sliding doors with the delicate interlocking woodworking known as *kumiko*, and idiosyncratic flourishes like Go and shogi boards affixed to the ceiling. In the main lobby, auspicious shapes are worked into the dark wood floors. These cleverly carved inserts, called *fushikakushi*, disguise flaws, such as spots where knots were removed from the timber.

The retro charm of early twentieth-century architecture and unusual flourishes of craftsmanship make Ryo'unkaku a unique snow-country experience.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旅館 凌雲閣

凌雲閣は松之山温泉郷にある歴史的な旅館である。1938年に建てられた木造3階建ての本館は、2005年に有形文化財として登録された。この旅館は、当時の雪国建築を見事に保存している。3度の大地震を乗り越え、毎年豪雪の重圧に耐えてきたことを考えると、その長寿は特に印象的だ。

現在も営業しているこの宿には、多くのユニークな建築的特徴がある。建設当時、オーナーは熟練の大工たちに内装を依頼し、各自が14の客室のうちの1つを自由に任された。彼らが腕を競い合った結果、精巧な彫刻が施された欄間、組み木と呼ばれる繊細な木工細工が施された引き戸、天井に貼られた碁盤や将棋盤のような独特の装飾が生み出された。メインロビーでは、暗い色の木の床に縁起の良い形がはめ込まれている。「ふしかくし」と呼ばれるこの巧みな彫刻は、節を取った跡など板の欠点を目立たなくしている。

20世紀初頭の建築のレトロな魅力と、職人技の珍しい華やかさが、「凌雲閣」をユニークな雪国体験にしている。

003-036

Blessings of the Sky and Land: Making Sake in Snow Country

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 酒造りの工程 / 松乃井酒造所

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Blessings of the Sky and Land: Making Sake in Snow Country

Niigata Prefecture has been a center of sake production for centuries. Today, it has more sake breweries than any other prefecture and is known for crisp, dry sakes with a smooth finish—a popular flavor profile called *tanrei karakuchi*. Niigata’s snow country provides ideal conditions to produce sake: soft water, plentiful rice, and long, cold winters for brewing.

Water comprises about 80 percent of sake’s volume, meaning the quality of water used in brewing has a huge impact on the final product. Niigata’s abundant snowfall fills its rivers, wells, and springs with soft water, which is low in dissolved minerals like iron, calcium, and magnesium that could impart unwanted flavors. In addition, while such minerals give a nutritious boost to the yeast used for fermentation, rapidly fermenting yeast can produce brash flavors. Soft water, on the other hand, slows fermentation and gives the sake softer, rounder flavors.

Rice, of course, is another essential ingredient in sake making. Rice accounts for about 60 percent of Niigata’s agriculture, and the prefecture produces more rice than any other in Japan. The reason for this abundance is the climate. The region’s heavy snowfalls provide lots of water, which is needed for growing rice in flooded paddies. In addition, as the snow at higher elevations melts and flows downhill to the paddies, it brings nutrients with it. The summer climate, too, provides ideal conditions for rice growing: long hours of sunlight, an average temperature of around 24.5 °C, and wide temperature swings between day and night. In autumn, those prime conditions yield heavy stalks that droop and sway with golden-yellow rice grains ready for the brewing

tank.

Traditionally, winter is the season for sake brewing. Before the advent of refrigeration, the fairly consistent temperatures of the Niigata winter provided stable brewing conditions, helping brewers to more effectively control the activity of the yeast and koji mold used in fermentation. Additionally, there was ample labor available in winter. Farmers cannot work their land during the winter months, so there is a long tradition of farmers assisting in sake breweries as migrant seasonal labor. Modern refrigeration technology has made year-round sake brewing possible, but winter is still the busiest season for sake brewers—particularly smaller craft operations that use traditional brewing methods, such as snow-aging sake in snow houses called *yukimuro*.

Tokamachi brewers are part of the long history of sake making in snow country, deftly combining modern machinery with generational know-how to ensure this time-honored craft endures.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

空と大地の恵み：雪国の酒造り

新潟県は何世紀にもわたって酒造りの中心地であった。現在、新潟県は他のどの県よりも酒蔵の数が多く、淡麗辛口と呼ばれる、キレのある辛口でなめらかな後味の酒が人気である。新潟の雪国は、軟水、豊富な米、寒くて長い冬という酒造りに重要な3つの要素を備えているため、酒造りに理想的な環境を提供している。

日本酒の体積の約80%は水であり、酒造りに使われる水の質は完成品に大きな影響を与える。新潟の豊富な降雪量は、河川、井戸、湧水を軟水で満たし、好ましくない風味を与える可能性のある鉄分、カルシウム、マグネシウムなどの溶存ミネラルを少なくする。また、このようなミネラルは発酵に使用される酵母に栄養を与えるが、急速に発酵する酵母は粗野な風味を生み出す可能性がある。一方、軟水は発酵を緩やかにし、日本酒に軟らかくて丸みのある風味を与える。

もちろん、米も酒造りに欠かせない原料だ。新潟県の農業の約60%は米であり、米の生産量は日本一である。その理由は気候にある。水田での稲作には大量の水が必要だが、この水は新潟の豪雪地帯から供給される。また、標高の高い雪が解けて田んぼに移動する際に、雪は養分を運んでくる。夏の気候も、日照時間が長く、平均気温が24.5度前後で、昼夜の寒暖差が大きいという稲作に理想的な条件を備えている。秋になると、このような絶好の条件が揃い、重い茎が垂れ下がり、

バターのような黄色い米粒が揺れ、食卓や醸造タンクへと供される。

伝統的に、酒造りの季節は冬である。冷蔵設備が登場する以前は、新潟県の冬の気温はかなり一定していたため、酒造りの環境が安定し、蔵人たちは発酵に使用する酵母や麹菌（カビの種類）の活動をより効果的にコントロールすることができた。さらに、冬には労働力が十分にあった。農民は冬の間は土地を耕すことができないため、季節労働者として出稼ぎで酒蔵を手伝うという長い伝統がある。近代的な冷蔵技術によって通年の酒造りが可能になったが、酒造業者、特に伝統的な醸造方法を追求する小規模のクラフト・メーカーにとっては、冬は依然として最も忙しい季節である。

十日町の蔵元は、雪国における酒造りの長い歴史の一部であり、近代的な機械と雪室熟成のような世代を超えたノウハウを巧みに組み合わせ、この伝統的な技術を確実に存続させている。

003-037

Making Sake in Snow Country

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 酒造りの工程 / 松乃井酒造所

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Making Sake in Snow Country

Sake is an alcoholic beverage brewed from water, rice, yeast, and a special mold called koji. In Japanese, the drink is usually called *nihonshu* (Japanese alcohol), as “sake” is a more general term that refers to all alcohol.

Sake making is a labor-intensive process that takes about two months. First, the rice is prepared. The grains are polished to remove a desired percentage of the outer layers, which contain fats, minerals, and proteins that would impart strong flavors. The inner kernels that remain are then washed, soaked, and steamed.

The next step is koji making. Koji breaks down rice starch into sugars that can be fermented. Koji spores are sprinkled on steamed rice and allowed to propagate under carefully controlled temperature and humidity.

Fermentation comes next. First, a mother culture is prepared by mixing the koji, rice, yeast, and water. This mixture, called the *shubo*, will be the starter for the main fermentation, which generally takes several weeks. It begins by combining a portion of *shubo* with a mix of steamed rice, koji, and water. Additional quantities of the rice mix are added twice more. This gradual mixing helps to balance the sugar content and alcohol over the duration, sustaining fermentation without allowing contamination.

Finally, the mash is filtered to separate the remaining solids and the liquid, which is then considered sake. A range of post-filtration processes are also common, such as pasteurization and maturation.

With its abundant soft water and rice, Tokamachi has a long history of sake production. Traditionally, sake making was carried out during the cold winter months, when the area’s stable temperatures provided reliable brewing conditions and local farmers were available to provide additional labor during their off season.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雪国での酒造り

日本酒は、水、米、酵母、そして麹菌という特別なカビから醸造されるアルコール飲料である。日本語では通常、この飲み物は日本酒と呼ばれ、「酒」はアルコール全般を指すより一般的な用語である。

日本酒造りは手間のかかる工程で、約2ヶ月かかる。まず、米が加工される。米粒を磨くことにより、強い風味を与える脂肪、ミネラル、タンパク質を含む外側の層が望ましい割合で取り除かれる。その後、残った内側の穀粒が洗われ、水に浸され、蒸される。

次の工程は麹造りである。麹は米のデンプンを発酵させる糖分に分解する。蒸した米に麹菌の胞子が振りかけられ、温度と湿度を注意深く管理しながら繁殖させる。

次に発酵が始まる。まず、麹、米、酵母、水を混ぜることにより母培養液ができる。この混合物は酒母（しゅぼ）と呼ばれ、通常数週間かかる主発酵のスターターとなる。発酵は酒母、蒸した米、麹、水を混ぜたものを3回に分けて混ぜ合わせることから始まる。このように徐々に混ぜ合わせることで、糖分とアルコールのバランスを取りながら発酵させることができる。

最後に、もろみをろ過して残った固形物と液体に分離し、これが日本酒となる。低温殺菌や熟成など、ろ過後のさまざまな工程も一般的だ。

豊富な軟水と米の産地である十日町の酒造りの歴史は古い。伝統的に、酒造りはこの地域の安定した気温が確実な醸造条件を提供し、地元の農家が農閑期に追加の労働力を提供できる冬の寒い時期に行われた。

003-038

What is *Yukiguni*?

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 雪国とは

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

What is *Yukiguni*?

Visitors to Tokamachi often hear the term *yukiguni* in discussions of the local culture and lifestyles. The word translates to “snow country” and refers to regions with heavy snowfall, but it is used with complex and poetic nuances.

Yukiguni extends from Japan’s northernmost island of Hokkaido down through the Tohoku region of northern Honshu. Along the Sea of Japan coast, it stretches as far as Shimane Prefecture. Tokamachi, despite being on the same latitude as the balmy Mediterranean, is one of the snowiest regions of all. The city’s heavy snowfall is due to its position between the Sea of Japan and the Mikuni Mountain Range, part of a chain that runs down the center of Honshu. In winter, cold winds blow down from Siberia and across the Sea of Japan, where they collide with warm, moist air carried north on the Tsushima Current. The air fills with cooling water vapor as it continues toward Japan, forming cumulonimbus clouds when it eventually hits the barrier of Niigata’s inland mountains. Relentlessly pushed by ascending air currents, the clouds drop the heavy moisture they contain in the form of snow.

In addition to its literal meaning, the term *yukiguni* also has many poetic connotations. It has appeared in art from ancient *tanka* poems to modern J-Pop, though likely no instance is as famous as Kawabata Yasunari’s (1899–1972) classic novel *Snow Country*, which tells the story of a doomed love affair between a Tokyo businessman and a geisha at an unnamed hot spring resort. The novel is cited as one of the reasons Kawabata was awarded the Nobel Prize. The novel opens:

The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky.

Through use in literature and popular culture, the term *yukiguni* has come to shape the image of northern Japan in the public consciousness. In a single phrase, it evokes expanses of unbroken snow, lonely landscapes of denuded trees, and craggy mountains girdled in frozen white. It often implies a reverence for the unique and forbidding natural world created by heavy snows and respect for the perseverance and fortitude of people who choose to carve out a life in that environment.

In Tokamachi, this romantic spirit of “snow country” still exists, as it has for thousands of years.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雪国とは？

十日町を訪れる人は、地域の文化や生活を語る際に「雪国」という言葉をよく耳にする。この言葉は「雪の国」と訳され、豪雪地帯を指すが、もっと複雑で詩的なニュアンスがある。

雪国は、日本最北の北海道から東北地方まで分布している。日本海側では島根県まで広がっている。十日町市は、温暖な地中海と同じ緯度にあるにもかかわらず、最も雪の多い「雪国」のひとつである。十日町の豪雪は、日本海と太平洋の中央を走る三国山脈に挟まれた立地によるものだ。冬になると、シベリアから吹き降ろす冷たい風が日本海を渡り、対馬海流に乗って北上する暖かく湿った空気とぶつかる。空気は日本に向かって進むにつれて冷却された水蒸気で満たされ、やがて新潟の内陸山地にぶつかると積乱雲が形成される。そして上昇気流に容赦なく押されながら、積乱雲はその中に含まれる重い水分を雪として落とす。

文字通りの意味だけでなく、雪国という言葉には多くの詩的な意味合いもある。古くから短歌から現代のJ-POPまで、さまざまな芸術作品に登場するが、川端康成（1899-1972）の古典小説『雪国』ほど有名な例はないだろう。この小説は、東京のサラリーマンと芸者との、名も知らぬ雪国の温泉での悲運の恋を描いている。この小説は、川端康成がノーベル賞を受賞した理由のひとつに挙げられている。冒頭はこうだ：

「汽車は長いトンネルを抜けて雪国に入った。夜空の下には白い大地が広がっていた。」

文学や大衆文化における「雪国」という言葉の使い方を通じて、雪国は人々の意識の中で北日本のイメージを形成するようになった。雪国と一言で言っても、雪が降り積もった広大な土地、樹木が立ち枯れた寂しい風景、白く凍った岩山などが連想される。この言葉には、豪雪が作り出す独特で禁断的な自然界に対する畏敬の念と、そのような環境の中で生活を切り開くことを選んだ人々の忍耐と不屈の精神に対する尊敬の念が込められていることが多い。

十日町には、この「雪国」の詩的な精神が、何千年もの間、変わらず存在している。

003-039

Snow Country Architecture

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 雪国の建築

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Snow Country Architecture

Tokamachi is one of the snowiest places in Japan. In an average winter, it reaches heights of 2 meters, and more than 50 centimeters of snow may fall overnight. The winters are also long, with snow lingering on the ground from November to April. The challenges of living with so much snow have shaped the architecture of snow country, giving rise to many unusual features.

The most obvious difference is in Tokamachi's roofs. Many homes have steep roofs with eaves that project farther than normal. This causes snow to slide off and pile up well away from the walls. Snow accumulation (both on the roof and against the walls) is quite dangerous, as the weight can cause buildings to collapse. In some cases, gable roofs have a thin, sharp projection down the central ridge. This innovation breaks the cohesion between the snow on each side, encouraging it to slide off. In other cases, roofs have a single slope rather than two, which directs all the snow to one side. Nowadays, the roof may even have heating elements that ensure snow never accumulates, removing any need for manual clearing.

Many of the homes in snow country are raised-floor houses (*takayukashiki jutaku*), which feature an entrance on the second floor. This provides an access point to and from the living area even when snow is piled several meters high. In such houses, the first floor often has a built-in garage to keep vehicles out of the elements.

Traditional structures like farmhouses were built of wood by necessity, but many of the modern buildings in Tokamachi still use wooden planks, particularly for siding.

While some may choose wood for aesthetic reasons, it also performs well in snow country. Commonly available Japanese cedar, for example, is water resistant, provides good thermal insulation, and resists shrinking or swelling with shifts in temperature, making it an eco-friendly and cost-effective option.

Other adaptations may be less obvious but no less necessary to surviving the snowy winters. For example, traffic lights in Japan usually have the red, yellow, and green lights arranged horizontally, but in Tokamachi, they run vertically. This creates less horizontal surface area on which snow can build up and obscure the lights from view. As another example, in areas where buildings are clustered together and there is not much room to pile up cleared snow, there are often hatches installed alongside the road. Called *ryusetsuko* (snow-removal gutters), the hatches conceal a stream of running water that melts and whisks away deposited snow.

The architecture of Tokamachi benefits from many adaptations for winter survival, drawing on the inherited knowledge of generations past and incorporating modern innovations to thrive in snow country.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雪国の建築

十日町市は日本有数の積雪量（例年平均2メートル以上）を誇り、11月から4月にかけて雪がずっと地面に積もっている。一晩で50センチ以上の雪が降ることも珍しくない。この積雪量とともに生活することで、雪国の建築様式が形成され、冬に適応した生活を送るための珍しい特徴が生まれてきた。

最も顕著な違いは、十日町の屋根である。多くの家の屋根は急勾配で、庇（ひさし）が通常よりも大きく出ている。これにより、雪が滑り落ちやすくなり、壁から離れて積もるようになる。雪が（屋根にも壁にも）積もると、その重みで建物が倒壊する恐れがあり、非常に危険だ。切妻屋根の場合、中央の棟に細く鋭い突起があることがある。この工夫は、屋根の結合を切断し、雪を横に落ち滑らせる。また、屋根の勾配を2つではなく1つにすることにより滑る雪はすべて1つのエリアに誘導される場合もある。最近では、雪が積もらないように屋根にヒーターが設置され、手作業による雪下ろしの必要がない場合もある。

雪国の家は、2階に玄関がある高床式住宅が多い。これは、雪が数メートル積もっても出入りできるようにするためだ。このような住宅では、1階は車を風雪から守るためのビルトインガレージになっていることが多い。

農家のような伝統的な建築物は、必然的に木造で建てられてきたが、十日町の近代的な建築物では、いまだに木製の板が、特に外壁に多く使われていることに、訪れる人は驚くかもしれない。審美的な理由で木材を選ぶ人もいるかもしれないが、雪国では木材の性能も高い。例えば、一般的に流通しているスギは耐水性、断熱性に優れ、気温の変化による収縮や膨張にも強いいため、環境にやさしく費用対効果も高い。

その他にも、あまり目立たないが、雪の多い冬を乗り切るために必要な人工的な工夫がある。例えば、日本の信号機は通常、赤、黄、緑の3色が横に並んでいるが、十日町市では縦に並んでいる。これにより、雪が積もってランプが見えなくならないようにするために水平面が少なくなる。また、別の例として、建物が密集し、除雪した雪を積み上げるスペースがあまりない地域では、道路沿いにハッチが設置されていることが多い。「流雪溝（りゅうせつこう）」と呼ばれるこの溝は、雪を溶かして流す水を隠している。

十日町の建築は、雪国で生き残るために、何世代にもわたって受け継がれてきた知識を生かしながら、現代的な工夫を取り入れた、冬を乗り切るための工夫に満ちている。

003-040

Snow Tools

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】モデルコース1：積雪期用具・へぎそば・保存食文化・
神宮寺・節季市（チンコロ） / 十日町市博物館
【想定媒体】その他（SNS）

できあがった英語解説文

Snow Tools

This fierce-looking saw is a big part of Tokamachi's cultural heritage. Any idea what it's for? It's not for felling trees or slicing giant tuna. It's a snow saw!

Tokamachi gets a lot of damp snow, with an average depth of 2 meters each year. Sometimes storms will even drop 50 centimeters or more in a single night. Wet snow is quite heavy and, when compressed by its own weight, a cubic meter can weigh up to 500 kilograms!

At that weight, snow can easily collapse a building or crush someone if it falls at a bad time, so removing it from roofs and other high places is crucial. The looser snow on top can be pushed off with a shovel, but the compacted snow underneath gets hard as ice. This is where snow saws come in. Residents use them to slice off manageable chunks of the hardened snow for removal.

Snow saws have been used by people in Tokamachi for centuries. They're part of the local wisdom that has been passed down by previous generations and still a big part of living in snow country.

Hegi Soba

Have you heard of *hegi* soba? It's a variation of the cold buckwheat noodles that fans of Japanese food may already know. In Tokamachi and the surrounding areas, it's the

local specialty!

In other parts of Japan, cooks make soba noodles by mixing wheat flour with buckwheat flour. Wheat gluten acts as a binder that holds the noodles together. Tokamachi doesn't grow much wheat, so a creative chef in the early 1800s tried something else: *funori* seaweed.

Funori is used in traditional weaving to smooth and strengthen the threads. Before there were mechanized looms, nearly every household in Tokamachi did their own weaving, so *funori* was readily available. *Hegi* soba's name and the way it is served are weaving-related, too: the noodles are arranged like looped skeins of thread and served in a weaver's box called a *hegi*.

How to eat it:

1. Pick up a full skein of noodles.
2. Try it in the dipping sauce before adding any condiments.
3. Next, put the onions in the sauce and apply spicy *karashi* mustard directly to the next skein of noodles.
4. Eat until full!

Tsukena and Niina

Wintertime visitors to Tokamachi have a chance to try some of snow country's most unique homestyle cooking! *Tsukena* is a typical dish that shows how people preserved autumn foods all winter long.

Many households in Tokamachi grow *nozawana*, a leafy green in the turnip family. *Tsukena* is made by salt-pickling *nozawana*, which pulls out moisture and delays the growth of bacteria that cause spoilage. During the winter months, these salty leaf-pickles are served as a side dish with meals or as a snack. As spring approaches, the *tsukena* begins to ferment and produce lactic acid, but this isn't spoilage. The *nozawana* is transforming into a new incarnation called *niina*! Salt is rinsed from the *niina* and it's added to simmered dishes—keeping greens on the table until the fresh

ones arrive.

Nowadays, people associate salty foods with health problems like high blood pressure. Even so, studies suggest that pickled vegetables may have helped people survive in snow country. In winter, salt helps to raise the body temperature, and the sugars and lactic acid in *niina* have been shown to boost the immune system.

Be sure to try some *tsukena* or *niina* on your next visit. It's simple, homey fare that satisfies after a day of playing in the snow!

Matsuo Shrine

On May 8 each year, Matsuo Shrine hosts a coming-of-age ceremony for young boys. It's called the "Nanatsu Mairi" and has been celebrated in Tokamachi for hundreds of years.

Local boys who turned seven the previous year trek from the village of Inubushi, at the foot of Mt. Matsuo, up to the shrine on its summit. That's a challenging climb of 360 meters over some 3 kilometers, much of which may still be covered in snow. Fortunately, the entire community comes out to help them. After prayers and a ceremony at the shrine, everyone climbs down the mountain again, and the boys' extended families hold celebrations in their honor.

Nanatsu Mairi is a great chance to witness snow-country culture, but even on other days, it's worth the hike up the mountain. Matsuo Shrine is one of the oldest thatched-roofed wooden structures in Niigata Prefecture and a national Important Cultural Property.

Chinkoro

How cute are these good-luck charms? Known as *chinkoro*, these rice-flour figurines are traditionally sold at Suwacho's midwinter Sekki-ichi Market. They're crafted in

the image of zodiac animals, flowers, and other lucky or wintery things.

The exact origin of *chinkoro* is lost to history, but they've been part of the midwinter market for at least 140 years. They're one of many handcrafted items residents sold for extra income during the snowy months and became particularly popular as children's souvenirs. As the rice flour dries out, the *chinkoro* develop cracks. The more cracks you have, the better your luck is supposed to be in the coming year!

Residents begin queuing in the morning to buy their favorite *chinkoro*, so visitors should start their shopping early!

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雪の道具

十日町の文化遺産ともいえるこの頑丈そうなノコギリ。何に使うのだろう？木を伐採するためでも、巨大なマグロを解体するためでもない。雪用のこぎりだ！

十日町は湿った雪が多く、毎年の積雪量は平均2メートルである。一晩で50センチ以上積もることもある。その湿った雪の重さは相当なものだ。自重で圧縮すると、1立方メートルの重さは500キロにもなるのである！

その重さの雪は、落ちるタイミングが悪ければ建物を倒壊させたり、人を押しつぶしたりすることもあるので、屋根やその他の高い場所から雪を取り除くことは非常に重要である。上部の緩い雪はスコップで押しのけることができるが、下部の圧縮された雪は固まって一緒に凍ってしまう。そこで登場するのが雪用ノコギリだ。住民がこれを使って、固まった雪の塊を切り落とし、除去するのだ。

雪用ノコギリは、十日町の人々が何世紀も、もしかしたら100年もの間使ってきたものかもしれない。先祖代々受け継がれてきた地域の知恵のひとつであり、雪国での暮らしに欠かせないものなのだ。

へぎそば

へぎそばをご存知だろうか？十日町市とその周辺の名物料理で、日本食ファンならすでにご存知の冷たい蕎麦の一種である。

日本の他の地域では、職人が小麦粉とそば粉を混ぜてそばを作る。小麦のグルテンがつかなぎとなり、

麺がまとまるのだ。十日町では小麦があまり栽培されていないため、19世紀初頭にある独創的な職人が別の方法として、フノリという海藻をつなぎとして使った。

ふのりは伝統的な織物に使われ、糸を滑らかにし、丈夫にする。機械化された織機ができる前は、十日町のほとんどの家庭で織物を織っていたので、ふのりは手元にあった。へぎそばの名前と盛り付け方も、織物と関係があるのはへぎと呼ばれる機織り用の箱の中で、麺を糸の総（かせ）のように撚るからだ。

食べ方：

1. 総（かせ）一杯を手にする。
2. 薬味を加える前に、つけ汁につけて食べる。
3. 次に、つゆにねぎを入れ、からしを次の麺に直接つける。
4. 満腹になるまで食べる！

ツケナとニーナ

冬に十日町を訪れる人は、雪国ならではの家庭料理を味わうチャンスがある！秋の食材を冬中保存していたことを示す代表的な料理が「ツケナ」だ。

十日町では多くの家庭でカブに似た葉物野菜である野沢菜が栽培されている。ツケナは野沢菜を塩漬けにすることで水分を抜き、腐敗の原因となる雑菌の繁殖を遅らせる。冬の間、この塩漬けの葉は、食事のおかずやおつまみとして出される。春が近づくと、ツケナは発酵を始め、乳酸を生成するが、これは腐敗ではない。野沢菜はニーナという新しい姿に生まれ変わるのだ！ニーナの塩を洗い流し、煮物に加えれば、新鮮な菜っ葉が手に入るまで食卓の菜っ葉をキープすることができる。

現在では、塩辛い食べ物は高血圧などの健康問題を連想させる。それでも、漬物は雪国で人々が生き延びるのに役立ってきたかもしれないという研究結果がある。冬には塩分が体温を上げるのに役立ち、ニーナに含まれる糖分と乳酸が免疫系を高めることが示されている。

次の訪問時には、ぜひツケナやニーナを食べてみてほしい。雪遊びで疲れたお腹を満たしてくれる、素朴で家庭的な食べ物だ！

松茸神社

松茸神社では毎年5月8日に男の子の成長を祝う儀式が行われる。これは「七ツ参り」と呼ばれ、十日町で何百年も前から祝われてきた。

前年に7歳になった地元の少年たちは、松茸山麓の犬伏集落から山頂の神社まで山道を歩く。それは標高360メートル、約3キロの道のりで、まだ雪が残っているところもあるので大変な登山だ。幸いなことに、地域全体が彼らを助けるために集まってくれる。神社での祈りと儀式の後、全員が再び

山を下り、少年たちの家族が彼らの栄誉を称えるお祝いをする。

この儀式を見ることは、雪国の文化を目の当たりにする絶好の機会だが、それ以外の日であっても、山登りをする価値はある。神社は新潟県最古級の茅葺き屋根の木造建築で、国の重要文化財である。

チンコロ

これはなんてかわいいものだろう。これは「チンコロ」と呼ばれる米粉の人形で、縁起物として諏訪町の真冬の「節季市」で伝統的に売られている。干支や花など、縁起の良いものや冬らしいものに似せて作られている。

チンコロの正確な起源は不明だが、少なくとも140年以上前から真冬の市の一部となっている。雪の降る時期に、地元の人々が臨時収入を得るために売る手工芸品のひとつであり、特に子供のお土産として人気があった。米粉が乾燥すると、チンコロにひび割れが生じ、ひび割れが多いほどその年の運勢が良いとされる！

住民は朝から行列を作り、お気に入りのチンコロを買い求めるので、観光客は早めの買い物をお勧めする！

003-041

Hoshitoge Rice Terraces

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 モデルコース 2 : 棚田・美人林・遺跡出土品・織物文化・きもの製作工程 / 十日町市博物館

【想定媒体】 その他 (SNS)

できあがった英語解説文

Hoshitoge Rice Terraces

The Hoshitoge Rice Terraces are a favorite spot for photographers! In early summer, the 200-odd paddies are flooded, creating pools of water that capture reflections of the sky. In autumn, the lush green rice stalks bend and sway under the weight of golden-yellow grains. The scenery is striking even in winter, as the first snows line the paddies in white.

It's a landscape that Tokamachi residents have been enjoying for hundreds of years. In this mountainous region, paddies were cut into the slopes to increase the amount of flat land for farming. Snowmelt, springs, and other runoff supply the irrigation water, which flows into reservoirs dug at the tops of the slopes. The beech groves along the top of the ridge also help with the water supply. They hold snowmelt and rainwater in their thick root systems and loamy layers of fallen leaves, keeping the water from rushing downhill and instead supplying it to the reservoirs.

The rice terraces are an example of how people have adapted to the demanding conditions of snow country. Residents are working hard to preserve them so we can all enjoy this incredible scenery for years to come!

Bijinbayashi, a Grove of Beauties

See how straight these beech trees are, clustered together like bristles on a brush? It's a beautiful scene—but if you know anything about beeches, it may strike you as odd.

Beeches are usually solitary giants, with large canopies that block even their own seeds from sprouting nearby. Their trunks and branches spread and twist, competing to reach as much sunlight as they can. So how did so many beeches end up here, all growing upward in parallel, straight and slim?

This area was once a natural beech forest, with trees of many sizes and ages. In the 1910s, the landowner was moving to Tokyo and needed money. He decided to cut down all the mature trees and sell them. The following spring, the small saplings that remained had no competition for sunlight and grew up quickly, straight towards the sky. People in the area were so charmed by the grove that they decided to preserve it as a scenic attraction—naming it Bijinbayashi, or “the wood of beautiful women.”

Bijinbayashi is just a short walk from the Echigo-Matsunoyama Museum of Natural Science “Kyororo,” where visitors can find out more about Tokamachi’s fascinating ecology.

Archaeological Excavations

Ever wondered what secrets might lie in the ground beneath your feet? Archaeological digs have told us that people have lived in the Shinano River Basin—an area that includes modern-day Tokamachi—for more than 10,000 years. We know this because excavations have unearthed fragments of pottery and other evidence of long-ago settlements.

The pottery pieces are particularly important not only for dating but because they give us clues about the lives of these early inhabitants. Organic remains like bone have long since dissolved in Japan’s acidic soil, but the carbonized remnants of ancient meals cling to earthenware cooking vessels, telling us about the diets of early settlers. The shape of the vessels tells us something, too. Earlier pieces have simple, functional shapes, while later examples like Niigata’s unique “flame-style” pottery are highly ornate, suggesting a religious or ceremonial use.

The Tokamachi City Museum has over 1,000 artifacts from local excavations in its collection, including many National Treasures, and extensive bilingual displays cover everything we know about the earliest inhabitants of snow country.

Weaving Culture

Tokamachi is famous for its heavy snowfalls. Before the advent of modern conveniences like snowplows and electric heating, this meant much of the winter was spent indoors by the fire. This time wasn't spent idly, though. For at least 5,000 years, residents have been weaving cloth from ramie, a plant that grows abundantly in the nearby countryside. During winter, when farms lay fallow, people spun thread and wove it into cloth.

Over the years, Tokamachi weavers have produced many different types of cloth and even added silk dyeing to their repertoires. But the region is perhaps best known for *chijimi*, a lightweight silk crepe fabric that was in demand for summertime samurai robes in the eighteenth century. It is still made in Tokamachi, dyed and handwoven following traditional methods, but these days local weavers use it for more than just kimonos. There are silk bags, neckties, table runners, and more!

Kimono Making

Tokamachi has a long-established and diverse weaving culture that includes both silks and plant-fiber fabrics. Unsurprisingly, that culture has made it a center for kimono production. Maybe you're familiar with this iconic Japanese garment, but do you know how it's made?

With plant-fiber fabrics, the threads are generally dyed before weaving, and patterns are created by combining different colors in the weave. Silk fabrics, on the other hand, are usually dyed after weaving, so the designs can be much more complex. In Tokamachi, the main method used is *yuzen*, a resist-dyeing technique.

A kimono is usually made from a single roll of cloth around 13 to 16 meters long, with

nothing wasted. The craftsperson determines which areas of the fabric will be the sleeves and body panels, then dyes the roll with an eye to the finished product. It requires great skill to align the pieces so the pattern appears unbroken across the seams.

From design conception to finished product, an ornate kimono can take a year or more to make. Even simpler ones generally take several months, as so much of the process is still done by hand in Tokamachi. But all that time and know-how is necessary to produce elegant garments like these.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

星峠の棚田

星峠の棚田は写真家のお気に入りのスポットだ！初夏には、200枚あまりの田んぼに水が張られ、できた水たまりに空が映し出される。秋には、青々とした稲の茎が、バター色の黄色い稲穂の重みに耐えながらたわみ、揺れる。冬でも、初雪が田んぼに白い冠を並べる風景は印象的だ。

十日町市民が何百年も前から楽しんできた風景だ。この山間部では、平地を増やすために斜面を切り開いて水田が作られた。雪が灌漑用水を供給し、斜面の頂上に特別に掘られた貯水池から流れ落ちる。尾根の頂上に沿ったブナ林も水の供給に役立っている。雪解け水や雨水を分厚い根と落ち葉のローム層で保水し、流れ出す水を貯水池に引き入れているのだ。

棚田は、人間が雪国の厳しい環境にいかに適応してきたかを示す一例である。住民たちは、私たちがこの素晴らしい景観を末永く楽しむことができるよう、棚田の保全に努めている！

美人林

ブナの木がブラシの毛のようにまっすぐ並んでいるのが見えるだろうか？美しい光景だが、ブナについて知っている人なら奇妙に思うかもしれない。

通常、ブナは孤高の巨木で、大きな樹冠を持ち、自分の種さえも近くで芽吹くことを阻む。幹や枝は広がり、ねじれながら、できるだけ多くの日光を浴びようと競い合っている。では、なぜこれほど多くのブナが、まっすぐスリムに、平行に上に向かって生えているのだろうか？

かつてこのあたりは、大小さまざまな樹齢のブナが生い茂る自然林だった。1910年代、土地の所有者が東京に引っ越すことにあたってお金が必要だった。彼は成木をすべて伐採し、炭にして売ることにした。翌年の春、残された小さな苗木は、日光を浴びる競争相手もなく、空に向かってまっすぐに

伸びた。その珍しい光景に魅了された地域の人々は、この木立を名勝として保存することを決め、「美人林」と名付けた。

この木立は、十日町の魅力的な生態系について学ぶことができる科学館「森の学校キョロロ」から歩いてすぐのところにある。

考古学的発掘

足元の地中にはどんな秘密が隠されているだろうと思ったことはある？ 考古学的な発掘調査によると、信濃川流域（現在の十日町市を含む）では、約1万年以上前から人々が生活していたのだ。それは、この地域で発掘調査が行われ、土器の破片など、はるか昔に人が住んでいた痕跡が発掘されたからである。

土器の破片は、年代測定だけでなく、謎に包まれた古代の住民の生活についての手がかりを与えてくれるため、特に重要である。骨のような有機遺物は日本の酸性土壌ですでに溶けてしまっているが、炭化した古代の食事の残骸は土器に付着しており、古代の居住者の食生活を物語っている。土器の形もまた、何かを物語っている。初期の土器はシンプルで機能的な形をしているが、新潟独特の「火焰型土器」のような中期の土器は非常に装飾的で、宗教的または儀式的な用途を示唆している。

十日町市博物館には、国宝を含む1000点以上の出土品が所蔵されており、雪国における初期の入植者についてわかっていることすべては二ヶ国語で幅広く展示されている。

織物文化

十日町は冬の豪雪地帯として有名である。除雪車や電気暖房のような近代的な便利さが出現する以前は、冬の大部分はいろいろのそばに屋内で過ごすことが多かった。しかし、それは無為な時間を意味するものではなかった。少なくとも5,000年以上前から、地元住民は信濃川流域の山野に豊富に生育する植物、苧麻（ちよま）で布を織ってきた。農作業が休みになる冬の間、人々は糸を紡ぎ、布を織った。

十日町の織物職人たちは、長い年月をかけてさまざまな種類の布を作り出し、絹染めもそのレパートリーに加えてきた。しかし、この地方で最もよく知られているのは十日町明石ちぢみなどの絹織物だろう。軽い縮緬織物で、18世紀には夏の武士の衣服として需要があった。十日町では今でも伝統的な手法で手染め・手織りで作られているが、最近では着物以外にも幅広く使われている。絹織物のバッグやネクタイ、テーブルランナーなど、お気に入りの一品が見つかるかもしれない。

着物作り

十日町には、絹織物や植物繊維の織物など、古くから多様な織物文化がある。当然のことながら、十日町は着物生産の中心地でもある。日本の象徴的な衣服である着物をご存知の方は多いと

思うが、実際にどのように作られるのかご存知だろうか？

植物繊維の生地は、一般的に織る前に糸を染め、織りの中で異なる色を組み合わせる模様を作る。一方、絹織物は織ってから染めるのが一般的で、デザインはより複雑になる。十日町の場合、主な方法は友禅と呼ばれる防染技法である。

着物は通常、長さ13～16メートルほどの一反から無駄なく作られる。職人は、袖や胴の部分になる布を把握し、仕上がりを見据えて一反を染めていく。縫い目から柄が途切れることなく見えるようにピースを揃えるには熟練の技が必要だ。

デザインの構想から完成まで、華やかな着物なら1年以上かかることもある。十日町では今でも多くの工程を手作業で行っているため、シンプルなものでも数ヶ月かかるのが一般的だ。しかし、そのすべての時間とノウハウの結晶が、このようなエレガントな衣服なのだ。

003-042

Echigo-Tsumari Art Triennale

十日町市文化観光推進協議会

【タイトル】 モデルコース 3 : 大地の芸術祭・ほんやらどう・河岸段丘・温泉・酒造りの工程 / 十日町市博物館

【想定媒体】 その他 (SNS)

できあがった英語解説文

Echigo-Tsumari Art Triennale

Have you ever wanted to be completely immersed in art but unconstrained by a museum? If so, we invite you to visit the Echigo-Tsumari Art Triennale. It's an outdoor contemporary art festival held every three years in and around Tokamachi and Tsunan. That's a total area of 760 square kilometers!

The festival explores the intersection of art, ecology, and community by bringing art into the natural world and public spaces. The site-specific installations are created to be part of the landscape itself, in harmony with nature and local communities. You'll find works of art in rice fields and alleyways, outside homes and vacant buildings, scattered through parks and gardens, and in museums like the Matsudai NOHBUTAI Field Museum and the Echigo-Tsumari Satoyama Museum of Contemporary Art (MonET).

Since the Echigo-Tsumari Art Triennale's inception in 2000, many permanent pieces have been installed and can be viewed year-round. During the festival, additional temporary installations are added, transforming Tokamachi into an immersive wonderland of contemporary art.

Honyarado

This igloo-like snow hut is called a *honyarado*. They are constructed as part of a winter event in Tokamachi called *torioi* (bird chasing).

Traditionally held on the night of January 14, *torioi* is one of Tokamachi's agricultural traditions. Children parade through town, loudly clapping wood blocks and singing a *torioi* song to scare away crop-devouring birds. Residents reward their efforts with mochi rice cakes and other sweets. The children then gather inside a *honyarado*, where they can roast the mochi over a charcoal stove and share the fruits of their labor late into the night, enjoying the snow and time spent with friends.

If you've ever visited northern Japan in wintertime, you may have seen similar structures referred to as *kamakura*. The Tokamachi name for them likely comes from the *torioi* song, which expresses the act of shooing away birds with the onomatopoeic shout *honyara!*

Fluvial Terraces

Have you seen how land on both sides of the Shinano River rises like stair steps? You might think these flat stretches are man-made, but they are actually a natural geological feature called "fluvial terraces." They're part of the reason people were attracted to this area more than 10,000 years ago.

Tokamachi lies along a major fault line. Two tectonic plates pushed against each other, causing the land to crumple up like a piece of paper. The fluvial terraces began to form some 400,000 years ago, when a channel was cut into the raised land by a river running through it. More tectonic movement continued to raise the river basin, and because water always flows to lower ground, the river shifted its course. This eroded a new riverbed over time, leaving the flat bed of the old one behind. The process repeated several times over the millennia, creating today's terraces.

Because of them, people found the flat land they needed to settle and farm here. Even today, the flat stretches of land are filled with rice paddies and homes, while the slopes are still covered in dense forest. This is one of the best-preserved examples of fluvial terraces left in Japan.

Hot Springs in Matsunoyama

Japan is a country of hot springs, full of volcanic activity and fault lines where thermal waters bubble to the surface. Each hot spring is unique, but some are more unusual than others—like the waters of Matsunoyama Onsen, a historic resort town in the mountains of Tokamachi.

The town's hot springs have been called one of Japan's "Three Great Curative Springs," and bathers have come to Matsunoyama since the fourteenth century for healing and relaxation. The waters are known for their diverse mineral content. Japanese law says that spring water needs a sufficient concentration of at least 1 out of 19 therapeutic minerals to qualify as a hot spring. Matsunoyama Onsen's springs meet the threshold for eight of these minerals, including the highest levels of antifungal and antibacterial boric acid found in Japan.

The minerals in the water are a lot more concentrated than they are in human cells. Because of this, simple osmosis helps the body absorb them. There's a saying in Japan that hot springs can heal any ill but a broken heart, so we invite you to put it to the test in Matsunoyama!

Sake Making

Did you know that Niigata has more sake breweries than any other prefecture? That's because it has three important ingredients for sake making: soft water from snowmelt, plentiful rice, and long, cold winters for brewing.

Water is important because it makes up about 80 percent of the volume of sake and is used in nearly every step of the production process. Sake can be made with any clean water, but soft water—water that is low in dissolved minerals—is said to impart soft, rounded flavors. Rice is another key ingredient. Summer conditions in Niigata are ideal for growing rice, with long hours of sunlight, an average temperature around 24.5 °C, and wide temperature swings between day and night. In addition, the steady, cold temperatures of the snowy winters provide stable brewing conditions and an ample labor pool of off-season farmers.

Tokamachi is home to two historic breweries: Matsunoi Shuzo and Uonuma Shuzo, founded in 1896 and 1873 respectively. We invite you to begin or continue your

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ

美術館に縛られず、アートにすっかり浸ってみたいと思ったことはないだろうか？それなら、ぜひ越後妻有アートトリエンナーレを訪れてみてはいかがだろうか。十日町、津南町の周辺で3年ごとに開催される野外現代アートの祭典だ。その総面積は760平方キロメートルにも及ぶ！

この祭典では、自然界や公共空間にアートを持ち込むことで、アート、エコロジー、コミュニティの交わりを探求する。サイトスペシフィックなインスタレーションは、自然や地域社会と調和し、風景の一部となるように制作されている。田んぼや路地、家や空き家の外、公園や庭、そしてまつだい農舞台や越後妻有里山現代美術館（MonET）のような世界的な美術館でも作品を鑑賞することができる。

2000年に大地の芸術祭が開催されて以来、約200の常設作品が設置され、年間を通して鑑賞することができる。芸術祭期間中はさらに仮設作品が追加され、十日町は没入型芸術のワンダーランドと化す。

ホンヤラドウ

このイグルーのような雪の小屋は「ホンヤラドウ」と呼ばれる。十日町の冬のイベント「鳥追い」の一環として建てられる。

伝統的に1月14日の夜に行われる鳥追いは、十日町の農業の伝統の一部である。子供たちが集落を練り歩き、大きな声で拍子木を叩き、鳥追唄を歌って農作物を食い荒らす鳥を追い払う。住民たちはその労をねぎらい、餅やお菓子を与える。その後、子供たちはホンヤラドウに集まり、炭火コンロで餅を焼き、収穫した食べ物を夜遅くまで分け合いながら、雪景色と友人たちとの時間を楽しむ。

冬の北日本を訪れたことがあるなら、「かまくら」と呼ばれるホンヤラドウに似ているような建造物を見たことがあるかもしれない。十日町の「かまくら」の名は、鳥追唄に由来しているようだ。鳥追唄は、鳥を追い払うかけ声を「ほんやら」という擬音語で表現したものである。

河岸段丘

ここは信濃川流域である。川から離れるにつれて土地の標高は上がっていくが、階段状に盛り上がっているのも見えるだろうか。この平坦な地形は人工的なものだと思われるかもしれないが、実は「河

岸段丘」と呼ばれる自然の地形なのだ。約1万年以上前に人々がこの地に魅了された理由のひとつだ。

十日町は大きな断層に沿って位置している。二つの地殻プレートが周期的に押し合い、土地が紙のように押しつぶされた。河岸段丘が形成され始めたのは、約40万年前、隆起した土地に川が流れ込んで水路ができたときである。さらに地殻変動は河川流域を隆起させ続け、水は常に低地に流れるため、河川は流路を変えた。その結果、古い棚を残して新しい川底が侵食された。このプロセスが数千年の間に何度も繰り返され、今日の段丘が形成されたのである。

そして、そのおかげで人類がこの地に定住し農業を営むのに必要な平坦な土地ができたのだ。今日でも、平坦な土地には水田や住宅が広がり、高い斜面には鬱蒼とした森林が残っている。これは、日本に残る河岸段丘の最も保存状態の良い例のひとつである。

松之山の温泉

日本は温泉大国で、断層や火山がたくさんあり、温泉が湧き出している。泉質はそれぞれ異なるが、十日町の山あいにある歴史のあるリゾート地、松之山温泉のように珍しいものもある。

松之山温泉は「日本三大薬湯」のひとつに数えられ、14世紀から湯治客が癒しとくろぎを求めて訪れていた。松之山の温泉は多様なミネラルを含んでいることで知られている。日本の法律では、19種類のミネラルのうち1種類でも含有量が多ければ温泉として認められる。松之山温泉の泉質は、これらのミネラルのうち8つの基準値を満たしており、その中には日本で最も高いレベルの抗真菌・抗菌作用のあるホウ酸も含まれている。

水中のミネラルは、人間の細胞内よりもはるかに濃縮されている。そのため、単純浸透圧が体内への吸収を助けるのだ。日本には「温泉はどんな病気も癒すが、傷ついた心は癒さない」という言い回しがあるのだが、松之山でそれを試してみたいはかがだろうか！

酒造り

新潟には他のどの県よりも多くの酒蔵があることをご存知だろうか。それは、雪解け水の軟水、豊富な米、そして酒造りに適した寒くて長い冬という、酒造りに重要な3つの要素が揃っているからだ。

水が重要なのは、日本酒の体積の約80%を占め、製造工程のほぼすべての工程で使用されるからだ。日本酒はどんなきれいな水でも造ることができるが、軟水（溶存ミネラルの少ない水）は柔らかく丸みのある風味を与えられるとされている。米も重要な原料だ。日照時間が長く、平均気温が24.5度前後で、昼夜の寒暖差が大きい新潟の夏は、米作りに理想的な環境だ。加えて、雪の多い冬の安定した寒さは、安定した醸造条件を提供し、農閑期の労働力を補う。

十日町には2つの歴史ある酒蔵、1896年創業の松乃井酒造と1873年創業の魚沼酒造がある。

新潟の日本酒探訪を、そこで始めてみてはいかがだろうか！

地域番号	004	協議会名	佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
004-001	史跡 佐渡金山		501～750	ウェブ
004-002	史跡 佐渡金山		501～750	ウェブ
004-003	史跡 佐渡金山		501～750	ウェブ
004-004	国指定重要文化財 妙宣寺		251～500	ウェブ
004-005	大膳神社		251～500	ウェブ
004-006	清水寺		～250	ウェブ
004-007	旧相川拘置支所		～250	ウェブ
004-008	京町通りエリア		～250	ウェブ
004-009	史跡佐渡奉行所跡		251～500	ウェブ
004-010	史跡佐渡奉行所跡 (勝場)		251～500	ウェブ
004-011	大野亀		～250	ウェブ
004-012	ドンデン高原		～250	ウェブ
004-013	白雲台展望台		～250	ウェブ

004-001

1. Sōdayū Mining Tunnel

佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】 史跡 佐渡金山

【想定媒体】 ウェブ

できあがった英語解説文

1. Sōdayū Mining Tunnel

The Sado Island Gold Mine was once the largest gold mine in Japan. Over a span of nearly 400 years, the mine produced 78 metric tons of gold, an amount worth billions of US dollars today. By the time operations were halted in 1989, it had 400 kilometers of mine tunnels—enough to stretch from Sado to Tokyo.

The Sōdayū Mining Tunnel is one of the oldest parts of the mine. A 2-kilometer-long gold vein was discovered in Aikawa in 1596, triggering a gold rush that drew tens of thousands of miners and other workers to the island. Today, the mine tunnel has dioramas showing how the miners worked and lived.

2. Flood Prevention with Archimedean Screw Pumps

Keeping water out of the mine was a constant struggle. Workers extracted groundwater from the tunnels using screw pumps (also called “Archimedes screws”). The Greek philosopher Archimedes is credited with the invention of these pumps, and this crucial technology is thought to have been imported from Europe. The pumps were used at Sado Island Gold Mine starting in the mid-seventeenth century.

Screw pump operators were well paid, and many were recruited at a young age from surrounding farms. Although the large pumps improved the process of draining the tunnels, they could not be used in all parts of the mine. The mechanism behind the Archimedes screw did not function at extreme vertical angles, so in tight tunnels, flood fighters had to make do with buckets and pulleys.

3. Timberers: Holding Up the Mountain

Timberers performed a vital role. In addition to making supports to shore up the tunnels, they built wooden platforms, assembled water troughs, and created stepped inclines. They also built the simple wooden stepladders that were used to climb in and out of the mines. These ladders were made by cutting wedge-shaped steps into single logs.

The job of timbering was called *yamadome*, meaning “holding up the mountain.”

Timberers had to be highly skilled to create sturdy supports that fit the rocky, uneven walls of the mine. Notice the helmets made from tightly twisted paper. This protective headgear was given to technical specialists such as timberers, but other workers had to go bareheaded.

4. Mine Management

Tasks such as carrying ore and tools, assisting senior miners, and filling oil lamps were carried out by apprentices. Still others worked under blacksmiths or assisted in shoring up the mine. Boys could become mine apprentices starting at age 15, and a special foreman was assigned to manage them. Other foremen were stationed at the mine entrances to monitor workers as they came and went. Their watchful eyes kept anyone from walking off with tools or gold, and their records served as the basis for calculating wages.

5. Ventilation and Lighting

Until the adoption of electric lighting, miners worked by the light of lamps, candles, or torches. The smoke and soot in the air often mixed with stone dust, making it difficult to breathe. To counteract this, a ventilation tunnel was added to circulate fresh air. Some tunnels were even fitted with hand-cranked extraction fans modeled after the rotary blades in rice-threshing machines.

A range of different fuels were used over the mine’s centuries of history, including pine resin, vegetable oil, and fish oil. The fuel was burned in iron-handled lamps that could be carried or hung from hooks on the walls. In other cases, miners carried torches wrapped in thinly shaved cypress bark and soaked in oil.

6. Mining Specialists: Work and Play

The gold ore was excavated by skilled specialists called *kanahori-daiku*. They worked short, four-hour shifts in groups of two or three and took meal breaks in the tunnels. These important workers were paid especially well, and they were known as big spenders who wore the latest fashions and hair styles from the faraway capital of Edo.

It is said that the *kanahori-daiku* contributed to the origin of a local folk dance called *ondeko*, or “deity drumming.” Nineteenth-century records of the Aikawa festival recount that the miners donned masks and beat their *taiko* drums as if they were striking their chisels with hammers. A version of this performance is held each year in mid-October.

7. Drainage Workers

By the mid-eighteenth century, the mine tunnels stretched deep into the earth. The scale of the operation made screw pumps prohibitively expensive, so groundwater had to be removed using buckets. Beginning around 1778, the government in Edo began rounding up refugees and vagrants in urban areas and sending them to perform this drainage work. They were provided with wages as well as food, clothing, and lodging, and after a set period, they were allowed to return home or settle permanently on the island.

In total, some 1,900 people were sent to Sado to work draining the mine tunnels. Of these, 28 were killed in 1853, when a fire broke out in the mine. A memorial service for them is held each April.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

1. 宗太夫坑

佐渡金山はかつて日本最大の金山だった。約400年の間に、この鉱山は、現在の数十億米ドル以上の価値に相当する、78トンの金を産出した。1989年に操業を休止するまでに、坑道は佐渡から東京までの距離に等しい400キロにも及んだ。

宗太夫坑は、鉱山の最も古い部分のひとつである。長さ2キロの金脈が1596年に相川で発見され、ゴールドラッシュの引き金となり、何万人もの鉱夫や労働者がこの島に集まった。今日、坑道に

は鉱夫たちがどのように働き、生活していたかを見ることができるジオラマがある。

2. アルキメデスポンプによる洪水対策

鉱山から水を排除することは、絶え間ない闘いだった。作業員たちはスクリーポンプ（またはアルキメデスポンプ）を使って坑道から地下水を汲み上げていた。この重要な技術は、ギリシャの哲学者アルキメデスが発明したとされ、ヨーロッパから輸入されたと考えられている。ポンプは17世紀半ばから佐渡金山で使われていた。

スクリーポンプのオペレーターは高給取りで、その多くは周辺の農家の若者から採用された。しかし、スクリーポンプはトンネルの排水作業を向上させたが、鉱山のすべての場所で使用できるわけではなかった。アルキメデスのスクリーは設計上、極端な垂直角度では機能しなかったため、狭い坑道ではバケツと滑車で何とかしなければならなかった。

3. 大工：山の固定

大工は鉱山に欠かせない労働者だった。坑道を支える木材を作るほか、木製の足場を作り、水桶を組み立て、四ツ棚をつけた。彼らはまた、坑道を出入りするのに使われた簡単な木製の梯子も作った。この梯子は、一本の丸太にくさび形の切り込みを入れて作られた。

製材の仕事は「山を固定する」という意味で、「山留め」と呼ばれた。大工たちは、岩だらけの坑道の凹凸のある壁に合った、頑丈で安全な土台を作るために、高度な技術を必要とした。紙を固く擦ったヘルメットに注目してほしい。大工のような技術専門家にはこの防護帽が与えられたが、それ以外の労働者は何も頭につけずに働かなければならなかった。

4. 鉱山における役割分担

鉱石や道具を運んだり、先輩鉱夫の手伝いをしたり、ランプに油を入れたりといった仕事は、見習い坑夫が担っていた。また、鍛冶屋の下で働いたり、坑道の補強を手伝ったりする者もいた。少年は15歳から坑内見習いになることができ、彼らを管理するために、特別な監督官が任命された。また、鉱山の入り口にも監督官が配置され、労働者の出入りを監視した。彼らがいることで、工具や金塊を持ち逃げする者を防ぐことができ、彼らの記録は賃金計算の参考となった。

5. 換気と照明

電気照明が普及するまでは、鉱夫たちはランプやろうそく、たいまつを頼りに働いていた。ランプから出る煙やすすは、しばしば空気中の石の粉塵と混ざり合い、呼吸を困難にした。そのため、坑道全体に換気用の坑道を設け、坑道内に新鮮な空気を循環させた。一部の坑道には、脱穀機の回転翼を模した手回しの換気扇が取り付けられた。

松脂、植物油、魚油など、数世紀にわたる鉱山の歴史の中で、さまざまな燃料が使われた。こうした燃料は、鉄の柄のついたランプで燃やされ、持ち運んだり、壁のフックにかけたりした。また、薄く削

ったヒノキの樹皮に油を染み込ませたトーチを携帯していた鉱山労働者もいた。

6. 鉱山のスペシャリスト 仕事と娯楽

金鉱石は、金堀大工と呼ばれる熟練した職人によって採掘された。彼らは2、3人のグループで4時間の短い交代制で働き、食事休憩は坑道内でとった。これらの重要な労働者は特に高給取りで、遠く離れた江戸の最新の服装や髪型をした大金持ちとして知られていた。

金堀大工は、地元の民俗舞踊の起源である "鬼太鼓 " (オンデコ) に貢献したと言われている。19世紀の相川祭りの記録には、鉱夫たちが仮面をかぶり、ノミとタガネで叩くように太鼓を叩いたと記されている。現在でも毎年10月中旬にこのパフォーマンスが行われている。

7. 排水作業員

18世紀半ばには、鉱山の坑道は地下深くまで伸びていた。規模の大きさゆえにスクリーンプンプはコストがかかりすぎるため、バケツを使って地下水を除去する必要があった。1778年頃から、江戸幕府は都市から避難民や放浪者を集め、この排水作業に従事させるようになった。彼らには衣食住が与えられ、労働の対価として賃金が支払われ、一定期間が過ぎると永住するか、島外に引越すか選択することができた。

合計約1,900人が佐渡に送られ、坑道の排水作業に従事した。そのうちの28人が1853年に起きた坑内火災により、命を落とした。毎年4月には、彼らの慰霊祭が行われる。

004-002

8. Hard Labor: Chiseling the Mountain

佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】 史跡 佐渡金山

【想定媒体】 ウェブ

できあがった英語解説文

8. Hard Labor: Chiseling the Mountain

The gold in the Sodayū Mining Tunnels was excavated from hard, quartz-rich rock. Miners excavated the ore using hammers and chisels, which was very slow work. A pair of miners digging for 8 hours made only around 10 centimeters of progress, and their chisels had to be replaced two days.

The tools were resharpened by blacksmiths stationed outside the mine. These specialists also made and repaired other tools, such as the pliers that miners used to hold their chisels steady. Making new tools and maintaining old ones was never-ending work, and large quantities of iron was regularly imported from the mainland to supply the blacksmiths' workshops.

9. Surveying and Planning

Officials from the Sado magistrate's office did the work of surveying and planning the tunnel excavation. Prospectors called *yamashi* located veins of gold, and highly trained engineers designed the mine tunnels. A well-planned mine had tunnels for ore extraction, ventilation, and drainage.

Many of the tools and calculation methods used at the Sado Island Gold Mine would be familiar to mine surveyors today. Surveyors working on Sado used the latest European methods, which had been introduced by Dutch merchants. In the 1690s, the renowned surveyor Shizuno Yoemon is said to have used techniques learned from the Dutch when he planned the Minamizawa Drainage Tunnel. The kilometer-long tunnel

was dug in three sections simultaneously, and Shizuno's plans were so precise that the sections, when joined, lined up almost perfectly.

10. Yawaragi: Softening the Mountain

When prospectors discovered a promising vein of gold, a ritual called a *yawaragi* was held before mining began. The miners offered prayers to the god of the mountain to soften the rock and to keep the workers safe. A *yawaragi* ritual is still performed at Ōyamazumi Jinja Shrine each July on the first day of the annual Mine Festival.

Notice the centipedes that adorn the straw-colored costume worn by the central figure on the platform. Centipedes were thought of as messengers from the mountain god, and miners saw them as good omens, possibly because their legs resemble veins of gold and silver. Centipedes are also symbols of wealth due to an association between their many legs (*ashi*) and a slang word for money (*ashi*).

11. Exhibit Room 1

Most of the gold from Sado Island Gold Mine was turned into coinage. The dioramas in this room show how the metal was mined, dressed, smelted, refined, and minted into oval-shaped coins called *koban*. The finished coins were transported to what is now Tokyo, a journey by sea and land that took 11 days. From there, they were circulated throughout the country.

12. Exhibit Room 2

The museum's second exhibit room contains a model of the mine's gold and silver ore veins and reproductions of several types of coins. Depending on the time at which it was made, a typical *koban* coin contained anywhere from 10 to 15 grams of gold and required 2 to 3 metric tons of gold ore. According to records from the mid-1700s, the value of a single *koban* was roughly equal to the combined daily wages of 23 skilled woodworkers. Today, just one of these coins would be worth as much as 1,000 US dollars.

Coins were minted on Sado Island from 1622 to 1819. At the rear of the exhibit room is an original *koban* marked with the first of the two kanji characters for "Sado."

1. Modern Mining: Dōyū Tunnel

The Dōyū Mining Tunnel was first excavated in 1899. Unlike the much older Sōdayū Mining Tunnel, which was dug by hand, this tunnel was excavated by blasting. One clue to the mine's age is the presence of cylindrical holes here and there along the walls. These were drilled for sticks of dynamite.

In 1896, the government sold Sado Island Gold Mine to Mitsubishi Gōshi Kaisha (now the Mitsubishi Corporation), and the Dōyū Tunnel was completed three years later. Unlike the older tunnels, which slope and wind through the mountain, barely wide enough for a single person, the newer Dōyū Tunnel is wide and level to accommodate modern, rail-mounted minecarts for transporting large amounts of ore.

2. Sake Cellar

The temperature in the tunnels is a chilly 10 degrees Celsius throughout the year, a perfect environment for storing sake. Even today, producers of sake and *shōchū* spirits on Sado Island use the tunnel as a place to age their products for several years. When the mine was still active, miners supposedly stored watermelons in the mine as a cool, sweet snack to eat between shifts.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

8. 重労働：山を削る

宗太夫坑の金は、石英を多く含む硬い岩から採掘された。鉱夫たちはハンマーとノミを使って鉱石を掘り出したが、これは非常に時間のかかる作業だった。二人一組で8時間掘っても約10センチしか進まず、ノミは2日間で交換しなければならなかった。

道具は、鉱山の外に配置された鍛冶屋によって研ぎ直された。彼らは、ノミを固定するためのベンチなど、他の道具の製作や修理も行った。新しい道具を作り、古い道具をメンテナンスするのは終わりのない仕事であり、鍛冶屋の作業場に供給するために本土から大量の鉄が輸入された。

9. 測量と計画

佐渡奉行所の役人たちは、測量とトンネル掘削の計画を行った。山師（ヤマシ）と呼ばれる探鉱者が金鉱脈を探し出し、高度な訓練を受けた技術者が坑道の設計を行った。良く計画された坑

道には、採鉱、換気、排水のための坑道が含まれる。

佐渡の鉱山で使われていた道具や計算技術の多くは、今日の鉱山測量技師にとっても馴染み深いものだろう。佐渡で働く測量技師たちは、オランダ商人によって導入されたヨーロッパの最新の方法を使用していた。1690年代、高名な測量家であった静野与右衛門は、南沢排水坑道を建設する際、オランダから学んだ技術を用いたと言われている。全長1キロメートルに及ぶトンネルは、3つのセクションに分かれて同時に掘られたが、彼の計画は非常に精密で、セクションを繋ぎ合わせるとほぼ完璧に並んだ。

10. やわらぎ：山をやわらかくする

採鉱者たちは有望な金脈を見つけると、採掘を始める前にやわらぎと呼ばれる儀式を行った。山の神に岩をやわらかくするように、また鉱山労働者の安全を守るように祈りを捧げた。大山祇神社では、毎年7月の例大祭の初日に「やわらぎ」の神事が行われる。

壇上の中央の人物が着ている黄土色の衣装を飾るムカデに注目してほしい。ムカデは山の神の使いとされ、鉱夫たちには吉兆と思われていた。ムカデの形が金や銀の鉱脈に似ているからかもしれない。ムカデは、その多くの足（アシ）と俗語のお金（アシ）との関連から、財運をもたらす象徴的存在でもあった。

11. 展示室1

佐渡金山で採掘された金のほとんどは貨幣になった。この部屋のジオラマは、金がどのように採掘され、選鉱され、製錬・精錬、製造され、小判と呼ばれる楕円形の貨幣に製造されたかを示している。完成した貨幣は現在の東京まで、海と陸を11日間かけて運ばれた。そこから全国に流通した。

12. 第2展示室

博物館の第2展示室には、金銀鉱脈の模型と数種類の貨幣の複製が展示されている。作られた年代によっても異なるが、小判には10グラムから15グラムの金が含まれており、2トンから3トンの金鉱石が必要だった。1700年代半ばの記録によれば、小判1枚で木工職人23人を1日雇うことができたという。今日、この小判は1枚で約1,000米ドルの価値もある。

佐渡では1622年から1819年まで貨幣が製造されていた。展示室の後方には、「佐渡」の2つの漢字のうちの最初の漢字が記されたオリジナルの小判がある。

1.近代の採掘：道遊坑

道遊坑は、1899年に開削された。手作業で掘られた古い宗太夫坑とは異なり、この坑道は発破によって掘られた。鉱山の年代を知る手がかりのひとつは、壁のあちこちにある円筒形の穴である。これは、ダイナマイトを入れるために開けられたものだ。

1896年に三菱合資会社（現在の三菱商事）が政府から佐渡金山を払い下げられ、その3年後に最初の道遊坑が完成した。人が一人通れるか通れないかの幅で、傾斜をつけながら山の中を縫うように走る古いトンネルとは著しく異なり、新しい道遊トンネルは広くて平らであるため、大量の鉱石を一度に運搬する、近代的な、レールに乗った鉱車が通ることができる。

2.酒蔵

坑道内の気温は年間を通して10度と肌寒く、酒を貯蔵するには最適の環境だ。今日でも、佐渡の日本酒や焼酎の生産者の中には、ここで数年間熟成させて出荷している。坑道がまだ現役だった頃、坑夫たちは勤務の合間に食べる冷たくて甘いおやつとして、坑内にスイカを貯蔵していたと言われている。

004-003

3. Minecarts

佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】 史跡 佐渡金山

【想定媒体】 ウェブ

できあがった英語解説文

3. Minecarts

Before the age of modern mining equipment, workers carried ore out of the tunnels in large bags made from straw. That changed with the introduction of rail-mounted minecarts in the late nineteenth century. The minecarts ran on tracks that led to the aboveground processing plant, where the ore was crushed.

The first minecarts were pulled by men or horses. Small, gasoline-powered locomotives came into use in 1932, followed by electric locomotives in 1939. Some sections of the tunnels were only wide enough for one set of tracks. To prevent collisions between carts traveling in opposite directions, the operators signaled each other with a system of red and green lights. The lights were operated by lever switches installed at the points where the tracks narrowed.

4. Looking Up at Dōyū Open Site

The gold rush at Sado Island Gold Mine began in 1596, after three prospectors discovered a rich vein of gold in Aikawa. Within a few decades, miners using nothing more than chisels and hammers had removed enough rock to create a large, V-shaped gouge in the mountain. This unique feature is called the Dōyū no Warito, or “Dōyū Open Site.” It has become a symbol of Sado Island Gold Mine and the monumental scale of the mining work that went on there. At 30 meters across and more than 70 meters deep, it is one of the largest such sites in the world.

The arrival of new technologies greatly improved the mining process. One such technology was dynamite, which was introduced from England. Miners used dynamite

to blast rock from the mountainside. The blasted rock (or “muck”) fell down through the open gap into the tunnels, where it was loaded onto minecarts.

5. Takatō Jinja Shrine

Takatō Jinja Shrine honors the spirit of Ōshima Takatō (1826–1901), known as the father of modern Japanese mining. Ōshima served as director of the Sado Mining Bureau in the 1880s and significantly expanded and modernized the mine. It was Ōshima who reopened excavation of the Dōyū Open Site using dynamite and ushered in a new wave of activity. New facilities built under his leadership include the Takatō Shaft, an ore processing plant, and shipping infrastructure at Ōma Port.

Takatō Jinja Shrine is a subsidiary of Ōyamazumi Jinja Shrine, which was founded in 1605 by the first magistrate of Sado. That original shrine was built to bring prosperity to the mines, and Ōshima himself worked hard to achieve the same goal. A Shinto ritual is held at Takatō Shrine every July to pray for safety at the mine.

6. Takatō Shaft

This 659-meter shaft is the longest vertical access tunnel at Sado Island Gold Mine. It opened in 1887 and is named for Ōshima Takatō, the pioneering mine director who oversaw its construction. Vertical shafts like these were used to efficiently access the horizontal mining tunnels far beneath the earth.

The Takatō Shaft was equipped with a powerful 180-horsepower hoist that took workers and supplies down into mine tunnels and lifted ore up to the surface. At its deepest point, the Takatō Shaft stretched 659 meters below ground, more than twice the height of the Eiffel Tower. A huge steel winch tower, or “headframe,” once stood over the entrance, but it was replaced with a smaller one in 1952.

7. Minecart Depot and Repair Shop

The minecarts that hauled ore and miners through the tunnels were powered by electric locomotives. At the end of each day, the fleet of battery-powered locomotives was hauled to the surface for recharging in this building. The structure also served as a repair shop for carts, pneumatic drills, headlamps, and other mining equipment. The

machinery displayed there dates mostly from between 1935 and 1944, and much of it remained in use until the mine ceased operation in 1989.

8. Takatō Park

This park provides a panoramic view of Dōyū Open Site, the distinctive cleft in the mountain above Sado Island Gold Mine. The gap is where the mine's richest seams of gold once lay. In the mid-1700s, the magistrate of Sado chose eight official "sights of Sado Island." Paintings of these vistas included an image of the harvest moon rising above the Dōyū Open Site. Ore-processing facilities were built in the area that is now Takatō Park beginning in the late nineteenth century, and the ruins of an ore-crushing plant can still be seen on the cliff in front of the Dōyū Open Site.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

3. 鉱車

近代的な採掘装置が導入される以前は、労働者は鉱石をわらで作った大きな袋に入れて坑道から運んでいた。それが、19世紀後半に導入されたレールを使用した鉱車にとってかわった。坑夫は線路の上を走り、地上の処理場まで行き、そこで鉱石を破碎した。

最初の鉱山車は、人や馬に引かれていた。1932年に小型のガソリン機関車が使われるようになり、1939年には電気機関車が登場した。坑道の中には、線路1本分の幅しかない区間もあった。反対方向に走るカート同士の衝突を防ぐため、運転士は赤と緑のライトで合図し合った。ライトは、線路が狭くなる地点に設置されたレバースイッチで操作された。

4. 道遊の割戸を見上げる

佐渡金山のゴールドラッシュは、1596年に3人の探鉱者が相川で豊富な金脈を発見したことから始まった。数十年のうちに、鉱夫たちはノミとハンマーだけで十分な量の岩を取り除くとき、山に大きなV字型の溝ができた。このユニークな地形は「道遊の割戸」と呼ばれている。それは佐渡金山のシンボルであり、ここで行われた採掘作業の記念碑的な存在となっている。幅30メートル、深さ70メートル以上あるこのような場所は、世界最大級である。

新しい技術の到来が採掘プロセスを大きく向上させた。そのひとつが、イギリスから導入されたダイナマイトである。鉱夫たちはダイナマイトを使って山の斜面から岩を爆破した。爆破された岩石は、開いた隙間から坑道へと落下し、そこで鉱車に積み込まれた。

5.高任神社

高任神社は、日本の近代鉱山の父として知られる大島高任（1826-1901）の霊を祀っている。大島は1880年代に佐渡鉱山局事務長を務め、鉱山を大幅に拡張し近代化した。ダイナマイトを使って道遊の割戸の掘削を再開し、新たな活気の波をもたらしたのも大島だった。彼の指揮の下、高任立坑、選鉱場、大間港などの新しい施設が建設された。

高任神社は、1605年に初代佐渡奉行によって創建された大山祇神社の分社である。大山祇神社は鉱山繁栄を祈願したものであり、高任も鉱山繁栄をもたらすように務めた。高任神社では毎年7月、鉱山の安全を祈願する神事が執り行われる。

6.高任竪坑

この659メートルの坑道は、佐渡金山で最も長い垂直坑道である。1887年に開通し、その建設に携わった先駆的な鉱山所長、大島高任にちなんで名づけられた。このような竪坑は、はるか地下の水平採掘坑道に効率よくアクセスするために使用された。

高任竪坑には180馬力の強力な巻上機が装備され、作業員や物資を地下の坑道まで運び、採掘された鉱石を地上に吊り上げた。最深部では地下659メートルに達し、エッフェル塔の2倍以上の高さがあった。かつては入り口の上に巨大な鋼鉄製のウインチタワー（ヘッドフレーム）が立っていたが、1952年に小型のものに取り替えられた。

7.鉱山車庫と機械工場

鉱石と鉱夫を坑道まで運ぶ鉱車は、電気機関車によって動かされた。一日の終わりには、この建物で充電するために、バッテリー式の機関車の車隊が地上に運ばれた。この建物はまた、荷車、空気式ドリル、ヘッドランプ、その他の採掘機器の修理工場としても使われた。展示されている機械は、ほとんどが1935年から1944年にかけてのもので、その多くは、1989年に操業を休止するまで使用された。

8.高任公園

この公園からは、佐渡金山の上にある特徴的な山の裂け目、道遊の割戸を一望できる。この裂け目は、かつて佐渡金山で最も幅が厚い金鉱脈があった場所である。1700年代半ば、佐渡奉行は8つの公式な「相川八景」を選んだ。これらの景色を描いた絵画は、道遊の割戸から昇る中秋の名月も含まれていた。現在の高任公園一帯には、19世紀後半から選鉱場が建設された。道遊の割戸の前の崖には、今でも鉱石粉碎工場の跡が残っている。

004-004

Myōsenji Temple

佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】国指定重要文化財 妙宣寺

【想定媒体】ウェブ

できあがった英語解説文

Myōsenji Temple

This thirteenth-century Buddhist temple embodies Sado's history as a place of exile. Japan's military rulers, the shoguns, often dealt with political rivals or dissenters by banishing them to remote islands such as Sado. Myōsenji Temple belongs to the Nichiren school of Buddhism, whose founder, Nichiren (1222–1282), was banished to Sado from 1271 to 1274 for his criticism of the shogunate. During that period, Myōsenji's first abbot, Abutsubō Nittoku (d. 1279), became a follower of Nichiren together with his wife, Sennichi-ama, a Buddhist nun. The temple's treasures include the oldest-known wooden statue of Nichiren, carved in 1274, and an original letter from Nichiren to Nittoku.

The abbot Nittoku first arrived on the island as part of a military escort for Emperor Juntoku (1197–1242), who spent the last two decades of his life exiled to Sado. In 1221, Juntoku had been implicated in an attempt to overthrow the Kamakura shogunate (1185–1333) and restore direct imperial rule. The emperor was forcibly moved to Sado as punishment. Nittoku came to the island as a samurai, but he later renounced the world and became a monk.

A century later, a revolt by another emperor, Godaigo (1288–1339), produced a fresh wave of exiles to Sado. One of Godaigo's supporters, the courtier Hino Suketomo (1290–1332), spent a total of seven years on Sado before he was executed for his loyalty to Godaigo. His grave is located at the temple.

Myōsenji's five-storied pagoda is unique within Niigata Prefecture. The pagoda was

constructed over a 30-year period, under two generations of master builders, and was completed in 1825. According to temple lore, although the pagoda has five stories, the magistrate's office had only granted permission to the abbot Nittai (1764–1831) for three stories. To make matters worse, Nittai was later accused of conducting prayers that did not align with the teachings of Nichiren Buddhism. For this offense, the abbot was removed from Myōsenji Temple and sent to a much smaller branch temple elsewhere on the island. In this way, he became another of Sado's many exiles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

妙宣寺

この13世紀の仏教寺院は、かつて流刑地であった佐渡の歴史を体現している。日本の軍事的支配者である将軍は、しばしば政治的ライバルや反対者を佐渡や他の島に追放することで対処した。妙宣寺は日蓮宗の寺院で、宗祖の日蓮（1222-1282）は幕府を批判したため、1271年から1274年まで佐渡に追放された。妙宣寺の初代住職、阿佛房日得上人（アブツボウ・ニツク）（1279没）は、この時期に日蓮に帰依し、妻の千日尼（センニチニ）も日蓮に帰依した。妙宣寺の所蔵品の中には、1274年に彫られた最古の木造日蓮像や、日蓮が日得に宛てた手紙の原本などがある。

日得は、晩年の20年間、この島に流されていた順徳天皇（1197-1242）を護送中にこの島に到着した。1221年、順徳天皇は、鎌倉幕府（1185-1333）を倒して天皇の直接統治を復活させる企てに関与していた。天皇は懲罰として強制的に佐渡に送られた。日得は武士としてこの島にやってきたが、後に世を捨て僧侶となった。

その100年後、後醍醐天皇（1288-1339）による反乱が起こり、佐渡に新たな流人が押し寄せた。後醍醐の支持者の一人、朝臣の日野資朝（ヒノ・スケトモ）（1290-1332）は、後醍醐への忠誠のために処刑されるまで、合計7年間を佐渡で過ごした。彼の墓は寺にある。

妙宣寺の五重塔は新潟県で唯一のものである。この五重塔は、二代にわたる棟梁のもと、30年の歳月をかけて建てられ、1825年に完成した。寺の言い伝えによると、五重塔だが、住職は住職の日泰（1764-1831）に三階建てしか許可を得ていなかった。その上、日泰は後に日蓮宗の教えにそぐわない祈祷を行ったとして告発された。この違反により、彼は妙宣寺を追われ、島の別の場所にあるもっと小さな末寺に送られ、佐渡の多くの流浪人の一人となった。

004-005

Daizen Jinja Shrine and Noh Stage

佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】大膳神社

【想定媒体】ウェブ

できあがった英語解説文

Daizen Jinja Shrine and Noh Stage

This thatched roof structure tucked behind a rustic Shinto shrine on the south side of the city is the oldest extant Noh stage on Sado Island. The stage was built in 1846, but Noh plays have been performed at this site since 1823 and are still performed here every year. Traditional torchlit performances called “Takigi Noh” are held at the shrine in early June. The rear of the stage is decorated with an image of a pine tree, a standard motif in Noh, but the addition of a red disc representing the sun is unique to Daizen Jinja Shrine.

Daizen Jinja’s Noh stage has been adapted to fit the space available at the site and is slightly smaller than the standard 5.5 meters square. As a result, the stage’s layout has been made more compact: actors access the stage by crossing a long bridgeway from the dressing room. The bridge is both part of the stage and separate from it, and each actor’s exit or entrance is a crucial part of the performance. Normally, this bridgeway is long and straight, but here it doubles back on itself, putting the dressing room directly behind the stage. During performances, the two parallel sections are separated by a hanging curtain.

Daizen Jinja honors Miketsu no Ōkami, a deity of food and bountiful harvests. A subsidiary shrine in a secondary building is dedicated to the spirit of the mountain mystic Daizenbō, who was executed in the 1330s for his part in a violent political intrigue. Daizenbō is said to have helped a Kyoto courtier escape from Sado after he tried to murder the island’s magistrate. A descendant of the magistrate ordered the shrine built to placate Daizenbō’s angry spirit.

An Island of Noh Actors

Noh has deep roots on Sado. Zeami Motokiyo (c. 1363–1443), one of the art form’s founding playwrights, was exiled to the island in 1434 after a falling-out with the shogun. But Zeami returned without spreading his art, and it wasn’t until the early 1600s that Noh’s local popularity exploded. In 1604, a magistrate with a background in theater was sent to the island to oversee the local gold-mining operations. He had a stage built and sent for a troupe of actors and musicians from the mainland to perform for him. In just a few short years, Noh became the local pastime. Even tiny communities of just a dozen households were recorded as having their own stages and amateur troupes. At its peak, Noh was performed at over 200 stages on Sado, most of them attached to Shinto shrines. Thirty-four of those stages survive today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大膳神社と能舞台

市街地の南側、風情ある神社の裏手にひっそりと佇む茅葺き屋根の建物は、佐渡で現存する最も古い能舞台である。舞台は1846年に建てられたが、能は1823年からこの場所で上演されており、現在も毎年上演されている。6月初旬には薪能（たきぎのう）と呼ばれる伝統的な能が、神社で行われる。舞台の後方には松の木が描かれているのが定番だが、太陽を表す赤い円盤が加えられているのが大膳神社の特徴だ。

大膳神社の舞台は、敷地の大きさに合わせて改造されており、一般的な舞台よりやや小さく、5.5メートル四方である。その結果、舞台のレイアウトもコンパクトで、一般的な劇場では、役者の出入りは、舞台と独立した楽屋を結ぶ長い橋掛かりによって行われる。橋は舞台の一部であると同時に舞台から切り離されており、それぞれの俳優の出入りは演技の重要な部分となる。通常、この橋は長くまっすぐなのだが、ここでは二重になっており、楽屋は舞台の真後ろにある。

大膳神社は食べ物と豊作の神である御食津大神（みけつのおおかみ）を祀っている。副社殿には、1330年代に激しい政治的陰謀に加担した罪で処刑された山伏大膳坊の霊が祀られている。大膳坊は、京都の朝臣が佐渡の島守を殺害しようとして逃亡するのを助けたと言われている。大膳坊の怒った霊をなだめるために、家督の子孫が神社を建てるよう命じた。

能楽師の島

佐渡には能が深く根付いている。能楽の創始者の一人である世阿弥元清（1363-1443年頃）は、1434年に将軍と換気を受けてこの島に流された。しかし、世阿弥は芸を広めることなく島を去

り、能が地元において爆発的に人気になったのは1600年代初頭のことだった。1604年、演劇の素養のある奉行が、金銀の採掘を監督するために島に派遣された。彼は舞台を建て、本土から役者や音楽家の一座を連れてきて上演させた。わずか数年で、能は地域の娯楽となった。わずか十数世帯の小さな集落でさえ、独自の舞台や素人による座もあったと記録されている。最盛期には、佐渡の200以上の劇場で能が上演され、能舞台のほとんどは神社に付属していた。そのうちの34の場所が現在も残っている。

004-006

Seisuiji Temple

佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】 清水寺

【想定媒体】 ウェブ

できあがった英語解説文

Seisuiji Temple

The approach to this ninth-century Buddhist temple leads up a path of stone steps lined with 500-year-old cedar trees. Its impressive but dilapidated main sanctuary looks out over the 15 buildings of the temple complex and a pair of 24-meter ginkgo trees.

According to an old Sado legend, in 805 Emperor Kanmu (735–806) sent a Buddhist monk to establish a new temple on Sado. As the monk traveled through the wilderness, he spotted something shining in a nearby river. He followed the water to its source, and there he spent a night at the foot of a pine tree. When he awoke the next day, a heavenly child stood before him. The child told him to build a temple where he lay, and that became the origin of Seisuiji. The temple was completed in 808.

The name “Seisuiji” is written with Chinese kanji characters that mean “pure water.” Seemingly by coincidence, it shares these characters with Kiyomizudera Temple in Kyoto. (Although Kiyomizudera is better known by far, Seisuiji was founded first.) The two temples share other connections as well: Seisuiji’s current main hall dates to 1730 and is the oldest building at the temple. It is perched on a hillside overlooking the grounds, and a wooden platform extends from the front of the hall, supported by tall pillars. This design closely resembles the famous stage at Kiyomizudera. The hall’s primary image is a statue of the thousand-armed manifestation of the bodhisattva Kannon, a deity of compassion. This statue is said to be a replica of the statue at Kiyomizudera.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

清水寺

この9世紀の仏教寺院への参道は、樹齢500年の杉並木の石段を登る。色あせながらも印象的な本堂からは、15棟の伽藍と高さ24メートルの銀杏の木が見渡せる。

佐渡の古い伝説によると、805年、桓武天皇（735-806）から佐渡に派遣された僧侶が、佐渡に新たに寺を建てるよう指示された。荒野を旅していた僧は、近くの川に光るものを見つけた。水源まで辿り着き、松の木の麓で一夜を明かした。翌日、目を覚ますと、目の前に天の童子が立っていた。その童子に寝ている場所に寺を建てるように告げられたのが、清水寺の始まりである。808年に開山された。

清水寺という名前は漢字で "清らかな水" と書く。一見偶然のように見えるが、この漢字は京都の清水寺と同じである。（清水寺の方がよく知られているが、創建は清水寺（せいすいじ）の方が先である。）この2つの寺院には、他にもつながりがあり、現在の本堂は1730年に建てられたもので、清水寺で最も古い建物である。境内を見下ろす丘の中腹に建ち、堂の正面からは高い柱に支えられた木製の舞台が伸びている。このデザインは、清水寺の有名な見晴らし台に似ている。本堂の本尊は千手観音菩薩像である。京都の清水寺の千手観音像を模したものと伝えられている。

004-007

Former Aikawa Detention Center 佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】 旧相川拘置支所

【想定媒体】 ウェブ

できあがった英語解説文

Former Aikawa Detention Center

Ivy-covered concrete walls and a rusting gate enclose an old jailhouse at the top of Aikawa's historic hillside Kyōmachi neighborhood. Aikawa Detention Center shut down in 1972, having served as a local branch of the Niigata prison system since 1954. Today, it stands empty and silent. Visitors are free to unlatch the bolts at the top and bottom of the door and go inside. The interior is clean and bright, lit by skylights and large windows, yet it feels eerily frozen in time. The concrete hallways and weed-ridden yard are quiet and peaceful. No guards stand outside the security doors, and no inmates pace the tatami-floored cells whose doors lie open and inviting.

The jail's main detention wing comprises six cells, one of which was reserved for women, in addition to a bath, a kitchen, and a library. Offices and a visitation area are found in the smaller entrance wing. The jail could hold 18 detainees at a time. Most were suspects awaiting the results of their trials, but the kitchen was staffed by convicts. A police station and a courthouse were located nearby.

Few jailhouses of this age and type remain in Japan, and Aikawa Detention Center has been nationally registered as a Tangible Cultural Property. Visitors can linger in the jailhouse as long as they like, provided they lock the front door again when they leave.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧相川拘置支所

蔦に覆われた石垣と錆びついた門が相川の歴史的な町並みの中、京町地区の頂上にある古い拘留所を囲んでいる。旧相川拘留支所は1954年以来、新潟刑務所の支所として機能していたが、1972年に閉鎖された。見学者はドアの上下にある錠を外し、中に入ることができる。内部は天窓と大きな窓に照らされ、清潔で明るいと同時に、不気味に時が止まっている。コンクリートの廊下と雑草が生い茂る中庭は静かで平和だ。警備員の姿はなく、畳敷きの独房扉は開け放たれ、歩き回る収容者の姿もない。

拘留所のメイン棟には6つの独房があり、うち1つは女性用で、その他に風呂、炊事場、書庫がある。事務室と面会室は入り口の小さな棟にある。拘留所は一度に18人の未拘禁者を収容することができた。ほとんどは裁判の結果を待つ被告人だったが、厨房には受刑者もいた。近くには警察署と裁判所もあった。

このような古いタイプの牢屋は日本にはほとんど残っておらず、旧相川拘留所は国の登録有形文化財に登録されている。見学者は、出るときに玄関の鍵を閉めさえすれば、好きなだけ拘留所の中にいることができる。

004-008

Historic Kyōmachi Street

佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】京町通りエリア

【想定媒体】ウェブ

できあがった英語解説文

Historic Kyōmachi Street

The discovery of gold near Aikawa in 1596 transformed what had been a small seaside village into a boomtown of 50,000 residents. At the height of the town's prosperity, this avenue had a thriving nightlife to rival even the pleasure districts of Kyoto.

Kyōmachi Street runs through the heart of old Aikawa, connecting the magistrate's office in the west to the mine entrance in the east. The wooden houses that line the street today were mostly built in the early twentieth century, after the mine was sold to Mitsubishi Gōshi Kaisha (now the Mitsubishi Corporation). The well-preserved row houses that line the main road were formerly company housing for mine workers, but today they are mostly private residences.

The gold rush attracted people from all walks of life, and many of the old neighborhoods are still named for the occupations of their former inhabitants, such as “salt-maker district” (*shioya-chō*), “miso-maker district” (*misoya-chō*), or “grocer district” (*yaoya-chō*). Even the name “Kyōmachi” (literally, “district of the capital”) was coined when a clothier began selling fabric from Kyoto's famous Nishijin textiles district.

A walk down Kyōmachi Street can feel like a journey back to an era when gold flowed from the hills and Aikawa was a company mining town. Summer evenings are especially atmospheric. During the Yoi no Mai festival in early June, residents in traditional garb parade through the lantern-lit street, dancing to Aikawa Ondo folk music. An antique bell tower, built in 1712 and restored in 1860, still rings to mark the start and end of each day.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

歴史ある京町通り

1596年に相川付近で金が発見され、それまで小さな海辺の村だった相川は、人口5万人の新興都市へと変貌を遂げた。町の繁栄の絶頂期には、この大通りは京都の歓楽街にも匹敵するほどの繁華街となった。

京町通りは旧相川の中心部にあり、西の奉行所から東の金山の坑口を結んでいる。現在この通りに立ち並ぶ木造家屋のほとんどは、鉱山が三菱合資会社（現在の三菱商事）に払い下げられた後の20世紀初頭に建てられたものだ。大通りに並ぶ保存状態の良い長屋は鉱山労働者の社宅で、現在はほとんどが個人の邸宅になっている。

ゴールドラッシュにはさまざまな職業の人々が集まったため、古い町並みの多くには、「塩屋町」「味噌屋町」「八百屋町」など、かつての住人の職業にちなんだ名前が残っている。京町(文字通り「首都の地区」)という名前も、京都の有名な西陣織の織物を売り始めた織物屋が由来である。

京町通りを歩けば、まるで鉱山から金が湧き出し、相川が鉱山町だった時代にタイムスリップしたような気分になる。とりわけ夏の夜は風情がある。6月初旬に行われる宵の舞では、伝統的な衣装に身を包んだ住民が提灯に照らされた通りを練り歩き、相川音頭に合わせて踊る。1712年に建てられ、1860年に改築された古い鐘楼は、今でも1日の始まりと終わりを告げる鐘を鳴らしている。

004-009

Sado Magistrate's Office

佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】 史跡佐渡奉行所跡

【想定媒体】 ウェブ

できあがった英語解説文

Sado Magistrate's Office

Sado's mineral resources were a great source of power for the Tokugawa family, the dynasty of shoguns who ruled Japan during the Edo period (1603–1868). The Tokugawa family took control of Sado in 1600, just as the Aikawa gold rush was getting underway. When the Tokugawa shogunate was formally established in 1603, the shogun wasted no time in establishing formal administration of Sado and the island's gold mines. The island was put under the management of a magistrate named Ōkubo Nagayasu (1545–1613). The following year, a spacious residential compound was built for Ōkubo and the magistrates who would succeed him.

From this large compound, the magistrate governed Sado and oversaw the mining and minting operations. The compound burned down several times during the centuries since its construction, and in 2000, Aikawa gathered a team of specialists to recreate several of the wooden structures as they had existed in 1859. The designs were based on old drawings and written records, along with archeological evidence. The rebuilt area includes the compound's main gatehouse, certain administrative and judicial facilities, storage buildings, and an ore-dressing workshop.

A notable feature of the central building complex is a pair of enclosed courtyards where the magistrate and his deputies presided over local court cases. Petitioners and criminal suspects knelt in the yards below while the officials who pronounced judgment sat above, looking down from raised tatami-mat rooms.

Visitors can try lifting a 41-kilogram slab of lead, one of 172 rough oblong slabs that

were excavated from the southern side of the complex. Lead was (and still is) used to extract gold and silver through a process called cupellation, and the slabs were kept on hand for this reason. Local records suggest that two stockpiles of lead had been buried for safekeeping in the late 1600s, but when workers at the complex went to dig them up in 1718, some of the lead went undiscovered. The slabs were finally discovered over two centuries later, in 1995.

Ōkubo Nagayasu and Sado Noh

Ōkubo was appointed the first administrator of Sado, but unlike many appointed officials of the time, he did not come from a samurai family. His father and grandfather were performers of *sarugaku*, a comic predecessor to Noh theater. But Ōkubo had managerial talents that brought him to the attention of powerful patrons, including Tokugawa Ieyasu (1543–1616), the first of the Tokugawa shoguns. Ieyasu put him in charge of developing several gold and silver mines around Japan.

Despite his magisterial duties, Ōkubo stayed connected to his theatrical roots. In 1605, he had a Noh stage built on the island and invited a troupe of actors and musicians from the mainland to perform. Noh's popularity spread from there: at its peak, there were some 200 stages on Sado, most of them attached to Shinto shrines. Of these, 34 stages remain today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

奉行所

佐渡の鉱物資源は、江戸時代（1603-1868）に日本を支配した将軍家、徳川家にとって大きな力の源だった。徳川家が佐渡を支配したのは1600年のことで、ちょうど相川のゴールドラッシュが始まった頃だった。1603年に徳川幕府が正式に成立すると、将軍は時間をかけずに佐渡と島の金鉱の正式な管理を確立した。島は大久保長安（1545-1613）という奉行の管理下に置かれた。同年、大久保とその後任の奉行たちの拠点となる、広い屋敷が建てられた。

奉行は、この広大な屋敷で佐渡を統治するとともに、採掘と貨幣鑄造を監督した。2000年、相川の専門チームが図面、記録文書、考古学的証拠を用いて1859年当時の木造建築を再現した。再建されたエリアには、屋敷の正門、管理施設、司法施設、鉱山管理施設、選鉱場が含まれる。

中央の建物群の特筆すべき場所は、奉行や役人が佐渡の地健を取り仕切った一対の囲われた中庭である。申立人や被疑者は中庭の砂利の上にひざまずき、判決を下す役人はその上に座り、室内の一段高くなった畳の部屋から見下ろした。

見学者は、建物群の南側からに発掘された172枚の楕円形の鉛板のうちの1枚、41キログラムの鉛板を持ち上げてみる事ができる。鉛の板は、キュペレーションと（灰吹法）呼ばれる工程で金銀を製錬するために使われたもので（現在も使われている）、この鉛はその目的で手元に保管されていた。地元の記録によれば、鉛は1600年代後半に2か所に埋められたが、1718年に作業員が掘り起こしに行ったときには一部が見つからなかった。その後、鉛は2世紀後の1995年によく発見された。

大久保長安と佐渡能

大久保は、最初に佐渡に派遣された代官であるが、当時の多くの奉行とは異なり、武士の家柄ではなかった。大久保の父と祖父は、能楽の前身である猿楽の演者であった。しかし、大久保には経営者としての才能があり、徳川の初代将軍である徳川家康（1543-1616）をはじめとする有力な権力者の目に留まるようになった。家康は、彼に日本各地の金銀鉱山の開発を任した。

それにもかかわらず、大久保は自身の演劇のルーツとのつながりを持ち続けた。1605年、佐渡に能舞台を作り、本土から役者や囃子方の一座を招いて公演させた。能の人気はそこから広がっていき、最盛期には佐渡に約200の舞台があり、そのほとんどが神社に付属していた。そのうち34の舞台が現在も残っている。

004-010

Ore Dressing Workshop (*Seriba*) 佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】 史跡佐渡奉行所跡（勝場）

【想定媒体】 ウェブ

できあがった英語解説文

Ore Dressing Workshop (*Seriba*)

Most of the gold extracted from the Sado mines was turned into oval-shaped coins called *koban*, which were an important form of coinage in Tokugawa-era Japan (1603–1868). *Koban* were produced on Sado from 1622 until 1819, when the government reorganized its minting operations and began sending gold from Sado to be minted in Edo (now Tokyo).

The dressing, refining, and minting all took place inside the well-guarded magistrate’s compound. In the reconstructed building, illustrations and period equipment show the processes used to reduce mounds of mined ore to flecks of usable gold and, finally, to stamped coinage.

The Ore Dressing (Beneficiation) Process

Pure gold made up a tiny fraction of the ore taken from the mine. Making a single *koban* coin required as much as 3 tons of gold ore, and the process for extracting that gold had several steps.

Crushing: Workers used hammers to break apart the gold ore.

Sieving: Crushed ore was sifted over wooden buckets to separate finer particles.

Water Separation: Sifted ore was added to water and “panned” using a specialized

wooden basin called a *yuri-ita*. Shaking the basin brought the lighter rocks to the surface, where they could be gradually rinsed away, leaving the gold behind.

Grinding: The separated but still impure gold was ground under a heavy stone mill to reduce it to fine powder.

Sluicing: The pulverized rock and gold was run through a sluice to separate and trap tiny particles of gold. This was achieved by laying lengths of cloth along the sluice that acted like nets to catch the heavier gold.

Minting the Koban

After all the crushing, grinding, and sluicing, the extracted gold was taken away for further processing. Although it had been separated from the ore, the gold itself still contained impurities, including a certain amount of silver. The majority of these impurities had to be removed before the gold could be minted into *koban* coins.

First, the impure gold was smelted with lead, a process that removed some impurities from the metal. The resulting alloy of lead, gold, and silver was then remelted to separate out the lead. This was mixed with salt and heated again to turn the silver into silver chloride, which could be removed, leaving the mostly pure gold. Secondary processes were used to adjust the purity until it met the standard range for a *koban* coin. Metalworkers then pounded the gold into long, oval-shaped blanks, which were cut into uniform portions, minted, and stamped with the first kanji character of the name “Sado.”

The workshop also contains panels on the development of Aikawa and the magistrate’s headquarters. The accompanying illustrations show how the discovery of gold transformed the settlement from a small seaside village into a boomtown of 50,000 residents.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

勝場

佐渡金山から採掘された金のほとんどは、徳川時代（1603-1868）の日本の重要な貨幣であった「小判」と呼ばれる楕円形の貨幣に加工された。小判は1622年から1819年まで佐渡で生産されたが、政府が製造業務を再編成し、佐渡の金を江戸に送って製造させるようになった。

製錬・鋳造と小判製造はともに、厳重に警備された奉行所内で行われた。復元された建物内には、採掘された鉱石の山を、使用可能な金の塊に還元するために使用された工程を示す図解や鉱石を選鉱するための当時の設備が展示されている。

鉱石選鉱の解説

純金は、鉱山から採掘された金鉱石のごく一部に過ぎない。小判1枚を作るには3トン以上の金鉱石が必要で、その金を取り出すにはいくつかの工程がある。

破碎：金鉱石をハンマーで砕く。

ふるい分け：砕いた鉱石を木製のバケツでふるいにかけて、より細かい粒子に分ける。

水による選別：ふるい分けられた鉱石に水を加え、「ゆり板」と呼ばれる専用の木製の受け皿を使って水の中でゆすられる。ゆり板を揺することで、軽い岩石は表面に出てきて、金が回収された。

粉碎：分離されたもののまだ不純物の多い金は、大きい石臼で粉碎され、より細かい粉末になる。

ねこ流し：細かな鉱石を木製の樋にながし、細かい金の粒を回収する。

小判の製造

破碎、粉碎、比重選鉱された金は、高度に精錬された鉱石はさらに加工するために持ち出される。鉱石から切り離された金には、銀を含む不純物が含まれている。この不純物の大部分を取り除かなければ、金を製造することはできない。

まず、不純な金を鉛を使って製錬し、金属から不純物を除去した。その後、鉛と金、銀の合金を再溶解して鉛を分離した。これを塩と混ぜて再び加熱すると、銀は塩化銀に変わり、これを取り除くと、ほぼ純度の高い金が残った。二次加工で純度を調整し、小判の規格範囲に収まるようにした。その後、貨幣製造職人は、金を叩いて楕円形の貨幣にし、「佐渡」の最初の漢字を刻印した。

勝場には、相川の発展と奉行所に関するパネルも展示されている。付属の図版は、金の発見によって、小さな海辺の村だった集落が、人口5万人のブームタウンへと変貌を遂げた様子を示している。

004-011

Ōnogame

佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】 大野亀

【想定媒体】 ウェブ

できあがった英語解説文

Ōnogame

Ōnogame, “the great turtle,” is an enormous rock that juts out of the sea near the northern tip of Sado Island. The headland monolith is a single massive slab of dolerite that rises 167 meters from the water. It is the largest geological feature of its kind on Sado. Visitors can admire its profile from the adjacent park or hike the dirt path to the top (a climb of about 30 minutes) for an unmatched view of the coastline and surrounding waters. Less arduous walking paths start at Ōnogame’s base and lead along the nearby cliffs.

Ōnogame was created around 20 million years ago. Deep below the ground, a pocket of magma formed, cooled, and was gradually pushed to the surface by tectonic activity. The igneous rock was then slowly exposed by erosion, leaving a monolith that has been an object of veneration for millennia. The name “Ōnogame” contains the word for “turtle” (*kame*), but it may originally derive from the Ainu word for “god” (*kamui*). Some experts believe Sado’s prehistoric inhabitants traded beads and other goods with indigenous Ainu people from the mainland, and the rock’s name is thought to support that theory.

The area around Ōnogame is known for the dense fields of yellow-orange Amur daylilies (*Hemerocallis middendorffii* var.) that bloom on its slopes from late May until early June. The Sado Kanzō Festival, held nearby on the second Sunday of June each year, features folksongs and *ondeko* drumming by dancing, demon-masked performers.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大野亀

大野亀は、佐渡島の北端近くの海に突き出た巨大な岩石である。この岬の一枚岩は、海面から167メートルも隆起した巨大なドレライト（粗粒玄武岩）である。この種の地形としては佐渡最大のものである。観光客は隣接する公園からその側面を眺めたり、頂上まで未舗装の道をハイキングして（約30分の道のり）海岸線と周囲の海を一望したりすることができる。大野亀の麓からは、近くの崖に沿って、比較的難易度の低い遊歩道が整備されている。

大野亀は約2,000万年前に誕生した。地下に形成されたマグマのポケットが冷えて、地殻変動によって徐々に地表に押し上げられた。その後、火成岩は浸食によって徐々に露出し、何千年もの間、信仰の対象となってきた一枚岩を残した。大野亀という名前には「亀」という言葉が含まれているが、もともとは日本語の「神」またはアイヌ語の「カムイ」に由来しているのではないのかと考えられている。専門家の中には、佐渡の先史時代の住民は、本土の先住民族であるアイヌの人々とビーズなどの交易をしていたと考える人もおり、この岩の名前はその説を裏付けている。

大野亀の周辺は、5月下旬から6月上旬にかけて、斜面に黄橙色のカンゾウ（*Hemerocallis middendorffii* var.）が咲き乱れることで知られている。毎年6月の第2日曜日に開催される佐渡カンゾウ祭りでは、民謡や鬼の面をかぶった芸人たちによる鬼太鼓や踊りが披露される。

004-012

Donden Highland

佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】 ドンデン高原

【想定媒体】 ウェブ

できあがった英語解説文

Donden Highland

These rolling highlands, located about 900 meters above sea level, are favored by hikers and wildflower-lovers. A huge variety of flowering plants, many of which grow only at much higher elevations on the mainland, bloom here from March through October. Visitors can take in views of the surrounding valleys and the Sea of Japan, or hike the highland's accessible network of trails, with routes ranging from two-and-a-half hours to seven hours long. Accommodation is available at the Donden Highland Lodge.

The tallest peak of the highland is Mt. Tadaramine (934 m), popularly called "Mt. Donden." The strong winter winds at the peak stunt the growth of trees, leaving the area grassy and open. The harsh winters may also be responsible for the so-called "summit effect" of the highlands, where it is possible to find alpine plants that normally grow at elevations of 1,500 meters or more.

Sado's official mountain wildflower calendar lists more than two dozen species among the highlands, including purple-white Japanese hepatica (late March through April), dogtooth violets (April and May), and yellow-spotted *Euphrasia insignis* (mid-September to late October). Visitors are asked to help protect the environment by limiting flower-hunting to photography. (No picking, please.)

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ドンデン高原

標高約900メートルのなだらかな高原は、ハイカーや野草愛好家に好まれている。3月から10月にかけては、本土では標高の高い場所にしか生育していない多種多様な草花が咲き乱れる。周辺の溪谷や日本海の景色を眺めたり、あるいは、高地にあるアクセスしやすいトレイルルートを2時間半から7時間かけてハイキングしたりすることもできる[HYPERLINK]。宿泊施設はドンデン高原ロッジを利用できる。

この高原で最も標高が高いのはタダラ峰（934m）で、「ドンデン山」と呼ばれ親しまれている。山頂では冬の強風のために樹木の成長が妨げられ、草原が広がる。通常なら標高1,500メートル以上の高地に生育する高山植物を見つけることができる、いわゆる「山頂効果」も、この厳しい冬がもたらすものだろう。

佐渡の公式山野草カレンダーには、紫白色の雪割草（3月下旬から4月）、カタクリ（4月と5月）、黄色い斑点のあるミヤマコゴメグサ（9月中旬から10月下旬）など、高地に生育する20数種類が掲載されている。花の観賞は写真撮影のみにとどめ、環境保護にご協力ください。（花は摘み取らないでください）

004-013

Hakuundai Lookout

佐渡市観光・文化施設多言語解説整備推進協議会

【タイトル】 白雲台展望台

【想定媒体】 ウェブ

できあがった英語解説文

Hakuundai Lookout

This small visitor center is the ideal vantage point from which to take in the full expanse of Sado Island. It also offers access to the hiking trails of the Ōsado mountain range. The facility, situated about 850 meters above sea level, consists of an observation deck and a building where visitors can buy souvenirs and snacks. Vehicle access via the Ōsado Skyline Road is open only during the warmer months, when the roads are clear.

Few spots on Sado are better than the Hakuundai Lookout for taking in the island's distinctive geography. Sado's two parallel mountain ranges, Ōsado and Kosado, emerged from the sea as neighboring islands some three million years ago before being slowly connected by sediment that accumulated between them. From Hakuundai, visitors can see the whole Kuninaka Plain, including Ryotsu Port and Lake Kamo, as well as the mountains of the Kosado range beyond them and the Ogi Peninsula to the far southwest.

Hakuundai anchors one of Sado's most popular trekking trails, the 13.6-kilometer Donden Highland to Hakuundai Traverse Route. The roughly seven-hour route alternates between woodlands and open ridges, passing under Sado's highest peak, Mt. Kinpoku (1,172 m), which is also visible from the lookout.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

白雲台

この小さなビジターセンターは、佐渡島の全景を眺めるのに最適の場所であり、大佐渡連峰のハイキングコースへのアクセスも可能だ。海拔約850メートルに位置する施設は、展望台とお土産や軽食を購入できる建物で構成されている。大佐渡スカイラインへの車でのアクセスは、暖かい季節の間と、道が見通しの良い時のみ可能です。

白雲台の展望台に勝る、佐渡の特徴的な地形を眺めるのに適したスポットはほとんどない。佐渡の2つの平行した山脈、大佐渡と小佐渡は、約300万年前に隣り合う島として海から現れ、その後、堆積物によってゆっくりとつながった。白雲台からは、両津港や加茂湖を含む国中平野が一望でき、その向こうには小佐渡山地の山々、さらにはるか南西には小木半島が見える。

白雲台は、佐渡で最も人気のあるトレッキングコースのひとつ、13.6kmのドンデン高原 [HYPERLINK]～白雲台縦走コースの拠点となっている。約7時間のルートは、森林地帯と開けた尾根を交互に行き来し、展望台からも見える佐渡の最高峰、金峰山（1,172m）のふもとを通る。

地域番号	005	協議会名	白川村多言語解説協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
005-001	開園経緯		501～750ワード	Webページ
005-002	茅葺屋根について		501～750ワード	Webページ
005-003	養蚕・煙硝生産について		251～500ワード	Webページ
005-004	間取りと部屋の用途		251～500ワード	Webページ
005-005	合掌造り住宅の変遷		251～500ワード	Webページ
005-006	栃の実		250ワード以内	Webページ
005-007	自然素材の持続可能な利用		251～500ワード	Webページ
005-008	木材搬出技術		251～500ワード	Webページ
005-009	藁細工		250ワード以内	Webページ
005-010	人々の暮らしと家族構成		251～500ワード	Webページ
005-011	結（ゆい）について		250ワード以内	Webページ
005-012	合掌造りのみどころ		250ワード以内	Webページ
005-013	防火：当時と現在		250ワード以内	Webページ
005-014	合掌造りの建築		251～500ワード	Webページ
005-015	叉首構造の切妻造		251～500ワード	Webページ
005-016	平屋建て		251～500ワード	Webページ

005-001

Welcome to the Gasshozukuri Minkaen Open-Air Museum 白川村多言語解説協議会

【タイトル】 開園経緯

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Welcome to the Gasshozukuri Minkaen Open-Air Museum

The villages of Shirakawa-gō are located in a remote, mountainous region that was mostly isolated for centuries. This seclusion, plus the area’s snowy climate and rugged terrain, led the inhabitants to adopt a unique way of life—one symbolized by houses with characteristically steep, thatched roofs in a design known as “*gasshō-style*” (*gasshō-zukuri*).

At the Gasshozukuri Minkaen Open-Air Museum, visitors can tour real, historical houses typical of Shirakawa-gō. While most houses in other parts of Shirakawa-gō are private residences—closed to the public and viewable only from the outside—the museum’s homes and other traditional structures are open to exploration from within. Guests can wander the buildings’ interiors, learning how *gasshō-style* structures were built and used. From multi-level attics to carefully shaped thatched eaves, the houses reveal features unique to this iconic architectural style. Inside, displays of traditional tools, furniture, and other artifacts offer a vivid picture of the inhabitants’ way of life. Visitors can see how the villagers of Shirakawa-gō produced saltpeter and silk, and how they survived the snowy winter months by making skillful use of the surrounding landscape.

The museum was established to preserve *gasshō-style* homes shortly after a hydroelectric dam was built on the Shō River, causing it to flood and wash away many historic structures. The museum’s creation was also a response to the rapid depopulation of villages such as Kazura (north of modern Shirakawa) in the 1960s, which left many traditional homes empty. As the years went on, the museum continued to acquire additional *gasshō-style* homes, as well as storehouses, barns, a

shrine, a temple, and a watermill.

Nine structures at the museum are currently listed as Important Cultural Properties of Gifu Prefecture. They include the Former Yamashita Harurō House, which was built in the mid-1750s and is the museum's oldest example of the *gasshō* style; the Former Higashi Shina House, a prototypical *gasshō*-style house thought to have been built in the late 1800s; the Former Nakano Yoshimori House, built in 1909 and noted for its large central support beam; and the Former Nakano Chōjirō House, another late-1800s home distinguished by the reddish-purple walls in its tatami-mat rooms, which are painted with a traditional pigment called *bengara*.

The museum's structures have been closely grouped for convenient access, but their arrangement was designed to feel like a traditional village. The grounds are planted with many of the shrubs and trees used historically in Shirakawa-gō, such as Japanese witch hazel and horse chestnut. Other wild plants include bamboo lily and Japanese hyacinth.

The museum also has a soba restaurant and a rest area that sells snacks—such as mochi (glutinous rice cakes) made with mugwort, Japanese horse chestnut, or millet—as well as souvenirs crafted by town residents. There are also opportunities to join hands-on workshops on making soba noodles or weaving the straw sandals (*ashinaka*) that were traditionally worn in Shirakawa-gō.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

野外博物館 合掌造り民家園へようこそ

白川郷の集落は、何世紀にもわたり他地域からほとんど孤立した、人里離れた山岳地帯に位置している。こうした孤立した環境に加え、雪深い気候と険しい地形が、合掌造りと呼ばれる急勾配の藁葺きの屋根が象徴する独自の生活様式を生み出した。

野外博物館 合掌造り民家園では、白川郷の典型的な本物の歴史的な家屋を見学することができる。白川郷の家屋のほとんどは個人所有で一般公開されておらず、外からしか見ることができないが、この博物館では合掌造りの家屋を内部まで見学することができる。見学者は内部を探索し、家屋がどのように建てられ、どのように使われていたかを学ぶことができる。何階層もの屋根裏部屋や、丁

寧に形作られた茅葺きの軒など、この建築様式ならではのあらゆる特徴が見て取れる。内部には、伝統的な道具や家具、その他の工芸品も展示され、住人の生活様式を生き生きと伝えている。村人たちがどのように煙硝や絹を生産していたのか、周囲の環境を巧みに利用することで雪の多い冬をどのように乗り切っていたのか、などを知ることができる。

この博物館は、庄川に水力発電用のダムが建設されたことで多くの歴史的建造物が水没したことを機に合掌造りの家屋を保存するために設立された。また、1960年代には加須良（白川村の北部）などの過疎化が急速に進み、伝統的な家屋の多くが空き家になったことへの対応でもあった。その後、博物館には、神社、寺院、水車、蔵、納屋などの建物が追加され、さらに合掌造りの家屋も増えた。

現在、博物館にある9棟が岐阜県の重要文化財に指定されている。その中には、1750年代半ばに建てられた当館最古の合掌造り家屋である山下陽朗家住宅、1800年代後半に建てられたとされる合掌造りの典型的な家屋である東しな家住宅、さらに1909年に建てられた中央の大きな梁が特徴的な旧中野義盛家、同じく1800年代後半の家屋である、「ベンガラ」と呼ばれる伝統的な染料で塗られた畳の部屋の壁の赤紫色が特徴的な中野長治郎家などがある。

アクセスしやすいように各建造物は近くに配置されているが、博物館は伝統的な集落をイメージして設計されている。敷地内には、マンサクやトチノキなど、白川郷で古くから使われてきた低木や樹木が数多く植えられている。その他、ササユリ、リュウキンカなどの野生植物も植えられている。

館内にはそば処や休憩所もあり、よもぎ、栃の実、栗などを使った餅などのお菓子や、町民手作りのお土産も販売している。また、そば打ちや白川郷の伝統的なわら草履「あしなか」を編むワークショップにも参加することができる。

005-002

Gasshō-Style Thatched Roofs

白川村多言語解説協議会

【タイトル】 茅葺屋根について

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

***Gasshō*-Style Thatched Roofs**

The most distinctive feature of *gasshō*-style houses is their steep, triangular roofs, and the construction and maintenance of these roofs is a fundamental part of Shirakawa-gō's history and culture.

While most of a house's ground floor was built by professional carpenters, the roof was a collaborative effort by the villagers themselves. This was, in part, an effort to reduce construction costs in a region without many financial resources. In addition, building their own roofs allowed the villagers to customize their houses to suit the local climate. The considerable snowfall in this region necessitated roofs with a sharper angle than that of typical Japanese farmhouses. This helped snow to slide off more easily, rather than accumulating and causing structural damage. The steeper angle also allowed the roofs to absorb more of the sun's heat in winter, when it hangs low in the sky, and less in the summer, when it is directly overhead—thereby mitigating seasonal temperature extremes. Additionally, the thick bundles of miscanthus grass used to thatch the roofs gave the attics excellent insulation against both cold and heat. Finally, the steep roofs created attic spaces ideal for sericulture (silkworm cultivation), which required large workspaces.

The process of creating a thatched roof begins with thin crossbeams called *usubari*, which are placed at equal intervals along the house's support posts and fixed with small stoppers to prevent them from shifting. Next, trusses are created by lashing together two long logs using twisted witch hazel branches (*neso*). Sharpened at both ends, the tied logs are lifted onto the *usubari* crossbeams and slotted into holes at each end. Together, the *usubari* and two logs form a strong triangle, and horizontal dowels

are placed at the end of each hole to keep the truss in place. A series of these trusses span the width of the house to support the weight of the finished roof.

Next, the trusses are prepped for thatching. Diagonal braces are roped to the inside of the trusses for structural support. Horizontal roof supports (purlins, known as *yanaka*) are then laid perpendicular to the trusses and affixed with rope, creating a grid-like base frame. The topmost, central beam of the roof is called the *karasu odori* (“where the crows dance”). The final step before thatching is to bind the rafters (*kudari*) to the base frame with more *neso*.

Before thatching begins, the base frame is covered with reed mats to act as a foundation to support the bundles of thatch. Next, one of two types of miscanthus grass is used as thatch: *kariyasu* or *susuki*. The former is preferable, because its thinner, hollow stems allow roofs to dry more quickly after rain or snow. Roofs thatched with *kariyasu* therefore last longer than those thatched with *susuki*. However, *kariyasu* fields are difficult to maintain and grow more slowly than *susuki*. As a result, roofs are now rethatched with *susuki*, and rethatching takes place every 20 to 30 years. The miscanthus for repairs was once grown in Shirakawa-gō, but the fields are no longer maintained, and the grass for rethatching is brought in from outside.

A distinctive visual feature of Shirakawa-gō houses is their neatly trimmed thatch on the gable ends. The four corners of the roof are the most difficult to rethatch, and the work is usually left to those in the village with the most experience. The first thatching to be placed on the roof is carefully trimmed and bound together at an angle before being tied diagonally onto the vertical poles of the base frame. The work then moves upward along the roof, with bundles added diagonally to further shape the gable end. In a process that resembles sewing, a worker inside the attic uses a giant wooden needle (*nuibari*) to pass rope upward through the roof, where a worker outside ties it over the thatch and sends the *nuibari* back through, stitching the bundles to the base frame. As more bundles are added, their ends are pounded into a uniform shape with a wooden paddle.

Moving from the gables toward the center of the roof, the angle of the thatch bundles slowly changes from diagonal to vertical. As the work proceeds, more bundles are

added to increase the roof's thickness. They, too, are "sewn" onto the base frame using the *nuibari* and rope. Throughout this process, both the bundles and the ropes are repeatedly tugged and pounded with mallets to ensure they are tight. More bundles are added and sewn onto the roof until they reach the top; then the process is repeated on the other side of the roof.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

合掌造りの茅葺き屋根

合掌造りの家屋の最大の特徴は、急勾配の三角屋根であり、この屋根の建設と維持管理は、白川郷の歴史と文化の重要な部分である。

1階の大部分はプロの大工によって建てられたが、屋根は村人たちが協力して建てたものである。これは、特に裕福とはいえないこの地域でお金を節約するためでもあった。また、村人たちは、自分たちで屋根を作ることで、土地の気候に合わせて家をカスタマイズすることもできた。降雪量の多いこの地域では、日本の一般的な農家よりも鋭角な屋根が必要だった。これにより、雪は堆積して建造物にダメージを与えるのではなく、滑り落ちやすくなった。また、屋根の角度が急なため、太陽が低い位置にある冬はより多くの熱を吸収し、真上にある夏はより少ない熱しか吸収しない。これにより、季節ごとの気温の極端な変化を緩和することができた。さらに、屋根の葺き替えに使われたカヤの太い束は、屋根裏に寒さと暑さの両方に対する優れた断熱効果をもたらした。そして、急勾配の屋根は、広い作業スペースを必要とする養蚕（蚕の飼育）に最適な空間を作り出した。

茅葺き屋根を作る工程は、まず、ウスバリと呼ばれる細長い梁を家の支柱に沿って等間隔に並べ、小さな留め具でずれないように固定することから始まる。次に、2本の長い丸太をネソ（マンサクの枝）を使ってつなぎ合わせて、トラスを組み立てる。両端を研いで縛った丸太を、横木として機能するウスバリの上に持ち上げ、両端の穴にはめ込む。ウスバリと2本の丸太は組み合わせることで、強固な三角形が形成され、各穴の端にはトラスを固定するためのダボが置かれる。完成した屋根の重量を支えるため、このトラスが何本も家の幅にまたがっている。

次に、トラスを葺くための下準備をする。斜めの筋交いは、構造的な支えとしてトラスの内側に縄で固定する。そして、ヤナカと呼ばれる水平の屋根の支えをトラスに垂直に置き、縄で留める。屋根の一番上の中央の梁は「からす踊り」と呼ばれる。葺く前の最後の工程は、ヤナカの支柱をさらにネソで下地（クダリ）に縛ることである。

葺き始める前にベースの骨組みをヨシで覆い、茅の束を支える土台とする。次に、カヤはカリヤスとスキの2種類からいずれか一種類を使用する。カリヤスは茎が細く中が空洞になっているため、雨や

雪が降ってもすぐに乾く。そのため、カリヤスで葺いた屋根は、ススキで葺いた屋根よりも長持ちする。しかし、カリヤスの畑は手入れが大変で、ススキは成長が早い。そのため、現在では20～30年ごとにススキで葺き替えられている。補強用のカヤは、かつては白川郷で栽培されていたが、田畑は現在手入れがされていないため、葺き替え用のカヤは外部から取り寄せている。

白川郷の家屋の特徴的な外観は、端正に刈り込まれた切妻造りにある。屋根の四隅は葺き替えが最も難しく、村の中でも経験のある人に任されることが多い。最初に葺かれるカヤは、慎重に刈り込まれ、斜めに束ねられた後、垂直な下地（クダリ）に斜めに縛られる。その後、屋根に沿って上方に移動し、束を斜めに追加して、さらに妻側の形を整える。屋根裏の中の作業員が巨大な木の針（ぬいばり）を使って屋根の上から縄を通し、外の作業員が茅の上で縄を結んでヌイバリを戻し、束を下地（クダリ）結びつける。束が増えるにつれて、その端は木の櫓で叩かれて均一な形になる。

妻側から屋根の中心に向かって茅を追加していくにつれ、束の角度は斜めから垂直へと徐々に変化していく。作業が進むにつれて、屋根の厚みを増すために束が追加される。そしてその束もまた、ぬいばりと縄を使って下地（クダリ）に縫い付けられる。この工程では、束も縄も何度も引っ張られ、木槌で叩かれ、しっかりと固定される。さらに束は追加され、根のてっぺんまで縫い付けられ、その後、屋根の反対側も同じ作業が始まる。

005-003

Sericulture

白川村多言語解説協議会

【タイトル】 養蚕・煙硝生産について

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Sericulture

One of Shirakawa-gō's primary industries was sericulture: the raising of silkworms to produce silk fiber. Silkworms eat the leaves of the mulberry tree, which grows abundantly in the area, and sericulture was adopted by local residents in part because, unlike rice cultivation, it does not require flat, arable land.

Sericulture took place in the attics of *gasshō*-style houses, directly above the villagers' sleeping and living areas. It had a significant influence on the way *gasshō*-style roofs were designed and built. The steep angle of the roof, for example, provided more space for sericulture, as multiple levels could be added. Meanwhile, the lightweight *shoji* (paper windows) in the gables at each end could be opened to allow ample light and ventilation for the silkworms. The roof's thick thatch provided excellent insulation, allowing cultivation even in the summer heat.

The production of silk also created valuable by-products. Perhaps the most significant of these was saltpeter (potassium nitrate), which was used to make gunpowder. To create saltpeter, silkworm excrement was combined with ingredients that included straw, soil, and mugwort, and the mixture was left to ferment for three to four years. It was then refined, and saltpeter crystals were extracted. Saltpeter dissolves in water, so villagers made it in holes near their home's sunken hearth (*irori*), where it would not be exposed to rain.

Sericulture is attested in Shirakawa-gō as early as the 1700s. In the final decades of the Edo period (1603–1867), Japan ended its policy of national isolation and began trading

with Western countries, during which time silk became a particularly valuable export. Sericulture continued in the village until the 1970s.

The Wada House, located in the Ogimachi area, is the largest *gasshō*-style house in Shirakawa-gō. It belonged to the Wada family, who made their fortune through the production and trade of saltpeter and silk fiber.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

養蚕

白川郷の主要産業のひとつは、蚕を飼って絹糸を生産する養蚕だった。養蚕は、稲作などと違って平坦な耕地を必要としないため、地元の住民の間に定着した。また、この地域には蚕の餌となる桑が豊富に自生している。

養蚕は合掌造りの家屋の屋根裏、つまり村人が生活する場所の真上で行われていた。このことは、合掌造りの屋根の設計や構造にも大きな影響を与えた。例えば、屋根の角度が急な形状は、何段にも重ねることができるため、養蚕のためのスペースを確保するために用いられた。一方、屋根の両端（切妻）にある軽量の障子窓は開けやすく、蚕のために十分な採光と換気を可能にした。屋根の厚い茅は断熱性に優れ、暑い夏でも栽培が可能であった。

絹織物の生産は貴重な副産物も生み出した。おそらく最も重要な副産物は、火薬の原料となる煙硝（硝酸カリウム）であろう。煙硝の主成分のひとつは蚕の排泄物で、藁、土、ヨモギなどと混ぜて3～4年発酵させる。こうしてできた混合物を精製し、煙硝の結晶を取り出した。煙硝は水に溶けやすいので、村人は囲炉裏の近くの雨の当たらない穴で製造した。

白川郷では1700年代には養蚕が行われていたことが確認されている。江戸時代（1603-1867）の最後の数十年間、日本は鎖国政策をやめ、西洋諸国との貿易を始めたが、その時期に絹は特に貴重な輸出品となった。村では1970年代まで養蚕が続けられた。

荻町集落にある和田家住宅は、白川郷最大の合掌造り家屋である。煙硝と絹糸の生産と貿易で財を成した和田家のものであった。

005-004

House Layout and Room Use

白川村多言語解説協議会

【タイトル】 間取りと部屋の用途

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

House Layout and Room Use

Though *gasshō*-style homes are best known for their iconic triangular attics, the architecture of their ground floors provides valuable insight into how villagers lived and worked. There was little distinction between home and workplace, as most of the extended families living in Shirakawa-gō made their livelihoods through activities conducted inside their own homes.

Despite their height, *gasshō*-style houses are considered single-story buildings. The spacious, often multi-level space above the ground floor is regarded as an attic, or *ama*, as it is called locally. These attics were reserved for sericulture, while residents used the ground level as living space.

Although each home has a different layout, several features are common to a *gasshō*-style interior. The *oe* is a spacious central room with one or two sunken hearths (*irori*). In modern terms, this space could be thought of as a combined kitchen, dining, and living room. This is where the daily communal activities of the family took place. Another common feature is the *maya*, an earthen-floored room adjoining the entrance that was used for keeping the family's cows and horses. Livestock had immense value in the region, and animals were kept inside the home rather than in a detached barn.

A typical *gasshō*-style home also had a bedroom for the head of the household, sleeping rooms shared by family members of the same gender, and rooms for storing firewood and working. There were usually two toilets: a urinal for men and a larger room used by both men and women. These were typically located adjacent to the *maya*,

and the urinal was often connected to a jar buried under the floor, where waste from the home's inhabitants and livestock was collected. The main toilet consisted of a large bucket buried in the ground with a plank placed over it. Household members walked onto the plank, then squatted. Both solid and liquid waste were used as fertilizer, and urine was also sometimes used in making saltpeter. A communal bathtub was located in another earthen-floored room called a *minja* at the rear of the home. Bathwater was heated by lighting a fire beneath the tub.

One feature shared by many *gasshō*-style homes is a purpose-built tatami-mat room that housed a large and impressive Buddhist family altar (*butsudan*). Adorned with sumptuous gold and lacquer work, these altars reflected the fervency of local belief in Jōdo Shinshū, or True Pure Land Buddhism. The room and *butsudan* were used in an annual Buddhist festival called Hō'onkō, in which the village priest visited homes to conduct religious ceremonies.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

家屋の間取りと部屋の用途

合掌造りの家屋は、その象徴的な三角形の屋根裏がよく知られているが、1階部分にも、村人たちの暮らしぶりや仕事ぶりをうかがい知ることができる魅力的な造りがたくさんある。家と職場の区別はほとんどなく、白川郷に住む大家族の大半は、家の中で生計を立てていた。

合掌造りの家屋は、その高さにもかかわらず、平屋建てと考えられている。広々とし、しばしば何層にもなっている1階より上はすべて屋根裏と考えられており、地域によっては「アマ」と呼ばれている。屋根裏部分は養蚕のために確保され、住人は、地上階を生活のスペースとして使っていた。

それぞれ間取りは異なるが、合掌造りの家の内部にはいくつかの特徴がある。オエは、囲炉裏が1つまたは2つある広々とした中央の部屋である。現代風と言えば、台所、食堂、居間が一体化したような空間である。ここで家族の日常的な営みが行われた。もうひとつの共通点は、玄関に隣接する土間、マヤである。ここは一家の牛や馬を飼うために使用されていた。牛馬はこの地域では非常に貴重なため、独立した小屋ではなく家の中で飼われていた。

一般的な合掌造りの家には、家長の寝室、同性の家族が共有する寝室、薪をくべたり仕事をしたりする部屋がある。トイレは通常2つあり、男性が使う小さいものと男女兼用の大きいものがあった。どちらもマヤに隣接して設置されており、多くの場合、床下に埋められた壺につながっており、家の住人や家畜の排泄物を回収していた。主なトイレは、地面に埋められた大きな桶の上に置かれた板

で構成されていた。家人は、板の上を歩き、しゃがんでトイレを使用した。糞も尿も肥料として使われ、尿は煙硝の原料のひとつとしても使われることがあった。一方、浴槽は通常、家の裏のミンジャと呼ばれる土間にあった。浴槽の下に火を焚いて湯を沸かしていた。

多くの合掌造りの家屋に共通する特徴のひとつは、大きく立派な仏壇を置くための和室がことである。豪華な金や漆の装飾が施された仏壇は、浄土真宗への信仰の厚さを表している。この部屋と仏壇は、年に一度、村の住職が家々を訪ねて儀式を執り行う「報恩講」と呼ばれる仏教の祭りで使われた。

005-005

Changes to *Gasshō*-Style Houses over Time

白川村多言語解説協議会

【タイトル】合掌造り住宅の変遷

【想定媒体】Webページ

できあがった英語解説文

Changes to *Gasshō*-Style Houses over Time

Gasshō-style houses were built in Shirakawa-gō and Gokayama for about 250 years, from at least the early eighteenth century until the 1950s. The houses have always had their characteristic triangular roofs, but over time they have changed significantly in other ways.

One example is the evolution of their interior layout. A major difference between the oldest house in the museum (the Former Yamashita Harurō House, built in the mid-1700s) and later houses is the addition of a guest room with a tokonoma alcove. Such rooms were not adopted in Shirakawa-gō until the late 1800s. They frequently had their own entrances and were used to house important guests. An example can be seen in the Wada House, where the family often received high-ranking visitors and even samurai as part of their governmental duties.

Furthermore, while earlier homes were centered around a large, central room called an *oe*, where the family cooked, ate, and performed many daily activities, later homes are divided into an increased number of smaller rooms. Many also have *engawa* verandas.

After Japan opened its ports to the West in 1854, the houses evolved further in response to the growing silk trade. Shirakawa-gō residents needed more temperature-controlled workspaces to expand their sericulture industry, and that necessitated larger attics. Later *gasshō*-style houses, therefore, employed *teppōbari* (thick roof beams with gentle curves at their ends). *Teppōbari* could support larger attics, and they also raised the height of the eaves, which is advantageous during heavy snowfall.

Although the body frames of *gasshō*-style houses were built by professional carpenters from outside the village, the use of *teppōbari* is thought to have been devised locally by the villagers and carpenters working together.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

合掌造り住宅の変遷

合掌造りの家は、少なくとも18世紀初頭から1950年代までの約250年間、白川郷や五箇山に建設された。屋根は一貫して象徴的な三角形の形を保っていたが、家屋は時代とともにさまざまな面で著しく変化をしていった。

その一例が間取りの変遷である。当館に現存する最古の家屋である1700年代半ばに建てられた旧山下陽郎邸住宅と、それ以降の家屋の大きな違いは、床の間を含む客間が付いていることである。このような部屋が白川で採用されたのは、1800年代後半のことである。部屋には専用の入り口があり、重要な客人を迎えるのに使われた。その例は和田家住宅に見られ、和田家ではしばしば高位の来客や、官職にある武士を迎えていた。

さらに、初期の家屋は「オエ」と呼ばれる中央の大きな部屋を中心に、そこで家族が料理や食事、日常生活の大半を過ごしていたのに対し、その後の家屋はより多くの小さな個室に分けられている。また、縁側がある家も多い。

1854年の開港後、拡大する絹貿易に対応するため、家屋はさらに変化した。白川郷の住民は、養蚕業を拡大するために温度調節のできる作業場が必要であり、そのためには屋根裏部屋を広くする必要があった。そのため、後世の合掌造りの家屋には鉄砲梁（両端が緩やかなカーブを描く太い梁）が用いられた。鉄砲梁は大きな屋根裏部屋を支えることができ、また軒の高さを高くすることができるため、豪雪地帯では有利であった。

合掌造りの家屋の骨組みは村外から来た専門の大工が作ったが、鉄砲梁の使用は村人と大工が一緒になって地元で考案したものと考えられている。

005-006

Horse Chestnuts

白川村多言語解説協議会

【タイトル】 枳の実

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Horse Chestnuts

In the isolated mountains of Shirakawa-gō, getting enough nutrition over the long, harsh winters was often difficult. Because the cold climate and limited flat land made rice hard to grow, villagers survived by using whatever natural resources were available to them. Local Japanese horse chestnuts, for example, were processed and added to mochi (glutinous rice cakes), to increase their nutritional value. The result, called *tochimochi*, would keep through the winter.

Japanese horse chestnuts contain saponins, toxins with a bitter flavor that discourages mice and other forest animals from eating them. Saponins also cause sickness when ingested in large quantities, but villagers learned how to remove most of them by soaking the chestnuts in water mixed with the oak ash left from their hearth fires.

Because horse chestnuts were vital to winter survival, cutting down horse chestnut trees was banned. Foraging was conducted village-wide, and all the families who participated received a proportionate number of chestnuts. This is one of many ways in which villagers worked together to ensure their mutual survival.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

枳の実

冬が長く厳しい孤立した山間部の白川郷では、十分な栄養をとることがしばしば困難だった。寒冷な気候と平坦な土地が限られていたため、米の栽培は難しく、村人たちは利用可能な自然資源は

何でも利用して生き延びた。例えば、地元産の栃の実は、栄養価を高めるために餅に使われた。栃餅と呼ばれるこの餅は、冬でも日持ちがした。

栃の実にはサポニンという苦味のある毒素が含まれており、ネズミなどの森の動物が栃の実を食べないようにする効果がある。また、サポニンは大量に摂取すると病気を引き起こすが、村人たちは、囲炉裏を焚いた後に残った櫨の灰を混ぜた水に栃の実を浸すことで、そのほとんどを取り除く方法を学んだ。

栃の実は冬に生存するために欠かせないため、栃の木の伐採が禁止された。採収は村全体で行われ、参加したすべての家族が均等に栃の実が配られた。これは、村が生き残りをかけて共同作業を行った多くの例のひとつである。

【タイトル】 自然素材の持続可能な利用

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Sustainable Use of Mountain Resources

Survival in this remote, mountainous region required villagers to be resourceful with the natural materials they found and to use them in renewable, sustainable ways.

As rice was difficult to cultivate in the area, plants that could be used in place of rice straw for crafts and construction were especially important. One such plant was Japanese witch hazel, a shrub native to mountainous areas of Japan. Young branches were cut from the main shrub and twisted into a flexible binding material called *neso*. *Neso* was used to lash together many of the beams that form *gasshō*-style roofs, reducing the need for the straw rope that was used in other parts of the country.

Another essential plant was miscanthus grass, which was used to thatch the roofs. Two species were used: *susuki* (*Miscanthus sinensis*) and *kariyasu* (*Miscanthus tinctorius*). The latter was favored for its thinner, hollow stems, which could be bundled more tightly. The resulting thatch absorbed less water and dried more quickly after rain or snow, making the roof last longer. As *kariyasu* fields have now largely been overtaken by the faster-growing *susuki*, roofs must be rethatched more frequently than they once were.

Traditionally, *kariyasu* fields were located along the Shō River, on the hillsides of the river valley, and each family tended its own field. The harvest lasted from late October to the end of November, before the start of the snowy season. Local records show that a single family of four reaped about 30 bundles of miscanthus in a week (a “bundle” being the number of reeds that could be bound with a 3.6-meter rope), and that the

family's roof required some 260 bundles to rethatch. The yearly harvest was therefore a race to collect enough thatch before the snow began to fall.

When it came to heating homes in the winter, oak wood was the favored fuel because its flames burned hot but were easy to manage. This was important in *gasshō*-style homes, which are extremely flammable due to their wood-and-thatch construction. Oak trees also regrow relatively quickly, ensuring a steady fuel supply.

Renewability was a key feature of these natural materials. In a practice called coppicing, trees harvested for firewood were left with a sizeable stump that soon sprouted new shoots. Witch hazel branches (*neso*) were also cut so that they would regrow quickly. *Kariyasu* fields were carefully managed to produce a healthy harvest each year and to ensure they would not be overtaken by *susuki*. By using resources from nature sustainably, villagers in Shirakawa-gō were able to maintain their way of life in this rugged, isolated environment for centuries.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

自然素材の持続可能な利用

この山あいの奥地で生き延びるには、村人たちは身近な自然素材を資源として活用し、再生可能かつ持続可能な方法で利用する必要があった。

この地域では米の栽培が難しかったため、不足していた稲わらの代わりに工芸や建築に使える植物が特に村人に重宝されていた。日本の山岳地帯に自生する低木であるマンサクがその一つである。若枝を切り取って捻じり、ネソと呼ばれる柔軟な結束材を作った。ネソは、合掌造りの屋根を形成するための多くの梁を束ねるのに使われ、他の地域で使われていた藁縄の使用を減らした。

もうひとつの重要な植物はカヤと呼ばれるススキで、屋根の葺き替えに使用された。カヤにはススキとカリヤスの2種類があります。後者は、茎が細く空洞であるため、茅をしっかりと束ねることができるので好まれた。茅葺き屋根の吸水量が少なく、雨や雪が降った後でもすぐに乾くため屋根が長持ちするからである。現在、カリヤス畑は成長の早いススキにほとんど取って代わられているため、屋根の葺き替えは以前よりも頻繁に行われるようになった。

伝統的に、カリヤス畑は庄川沿いの谷間の丘陵地にあり、各家が自分の畑を手入れしていた。収穫は雪が降る前の10月下旬から11月末まで続いた。地元の記録によれば、4人家族で1週間に約

30束のカヤを刈り取り（1束とは、3.6メートルのロープで束ねることができる葦の数）、一家の屋根を葺き替えるのには約260束が必要だった。したがって、毎年の収穫は、雪が降り始めるまでに十分なカヤを集められるかどうかの戦いだった。

冬の暖房には、炎が熱くて燃えやすく、扱いやすいナラが好まれた。これは、薪と藁葺きの構造で非常に燃えやすい合掌造りの家屋に重要だった。また、ナラの木は比較的早く再生するため、安定した燃料供給が可能だった。

これらの天然素材は、再生可能性が重要な特徴であった。コピシングと呼ばれる方法で、薪にするために伐採された木は切り株を残し、すぐに新しい芽を出した。マンサクの枝（ネソ）もすぐに再生するように切られた。カリヤスの畑は、毎年健全に収穫ができるよう、また、ススキに浸食されないように注意深く管理されていた。白川郷の村人たちは、自然から得られる資源を持続的に利用することで、この荒涼とした隔絶された環境での生活様式を何世紀にもわたって維持することができたのである。

005-008

Tools and Techniques for Dealing with Snow

白川村多言語解説協議会

【タイトル】 木材搬出技術

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Tools and Techniques for Dealing with Snow

Shirakawa-gō receives heavy snowfall that may reach a depth of 2 to 3 meters between December and March. Villagers in Shirakawa-gō were skilled when it came to using the available natural resources and taking advantage of the region’s harsh winter climate.

To move the heavy lumber cut deep in the mountains, residents used what is called a “splash dam.” They built a wooden dam on the river, upstream of the village, to temporarily block the flow and collect water in a large pool. After placing lumber in the river, they opened the dam, allowing the sudden rush of water to send the lumber downstream.

Over the course of winter, snow continually melted and refroze, becoming harder each time. In the local dialect, this hard-packed snow is called *katteko*. Taking advantage of it, villagers used sleds to bring firewood down from the mountains—a task that was difficult in other seasons because of the lack of mountain roads and the sheer weight of the wood. Large bundles of miscanthus grass, used for rethatching roofs, were transported in the same way.

During the warmer months, heavy loads were transported in woven backpacks with the help of a wooden tool called a *tōninbō*. This was a walking stick that could be propped beneath the bottom of a backpack while standing, forming a kind of tripod with the wearer’s legs. Used in this way, the *tōninbō* allowed the wearer to rest without setting the heavy pack on the ground.

The heavy snowfall worked to the villagers' advantage in other ways as well. Months of deep snow kept the mulberry trees from growing tall, ensuring the leaves could be easily picked by hand. (Mulberry leaves fed the silkworms that were vital to Shirakawa-gō's sericulture industry.)

The intense cold of winter could also be used to preserve food in the days before mechanical refrigeration. Cold, dry air helped villagers to pickle various foods, such as red turnips.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雪対策の道具と技術

白川郷は、12月から3月にかけて2メートルから3メートルもの大雪が降る。白川郷の村人たちは、自然資源を活用し、この地域の厳しい冬の気候を利用することに長けていた。

山奥から切り出した重い木材を運ぶために、村人たちは鉄砲堰と呼ばれるものを使った。村の上流にある川に木製のダムを建設し、一時的に水の流れをせき止め、広い淵に水を溜める。材木を川に置いた後、ダムを開放すると、急激な水の奔流によって木材が下流へと流されるのである。

冬の間、雪は融けては凍りを繰り返す、その度に固くなっていった。この硬く積もった雪は、地元の方言で「カッテコ」と呼ばれる。カッテコを利用して、村人達はそりを使って山から薪を運んだが、他の季節は山道がなく薪の重量が重いため、この作業は困難であった。屋根の葺き替えに必要なススキ（カヤ）の大きな束も同じように運ばれた。

暖かい季節には、重い荷物は「とうにんぼう」と呼ばれる木製の道具を用いて、編んだリュックで運ばれた。これはステッキのようなもので、立ったままリュックの底を支え、背負った人の足と三脚のようなものを作ることができた。このように使うことで、重い荷物を地面に置かずに休むことができた。

村人にとって、豪雪は別の面でも有利に働いた深い雪が何か月も降り続いたため、桑の枝が伸びず、手で簡単に葉を摘むことができた。（桑の葉は、白川郷の養蚕業に欠かせない蚕の餌だった。）

冬の厳しい寒さは、機械式冷蔵設備がなかった時代、食品を保存するために利用することもできた。冷たく乾燥した空気は、村人たちがアカカブなどさまざまな食品を漬けるのに役立った。

005-009

Rice-Straw Handicrafts

白川村多言語解説協議会

【タイトル】 藁細工

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Rice-Straw Handicrafts

Many of the objects used in daily life, such as sandals and mats, were handmade with rice straw (*wara*). One example is the straw sandals known as *ashinaka*. Their name, which literally means “half foot,” reflects their typical length—the sandals covered only the toes and upper foot, leaving the heel exposed. The reduced size allowed villagers to conserve rice straw, which was precious in this mountainous region because of the difficulty of cultivating rice.

Rice straw was also used to make rope, mats, backpacks, boots, and gaiters. Crafting such everyday items was typically considered the work of men, who performed it during the snowy winter months when working outdoors was difficult. A villager would go through some 40 pairs of *ashinaka* per year, and replacing them required many hours of labor by the light of evening fires.

Visitors to the Gasshozukuri Minkaen Open-Air Museum can try weaving their own *ashinaka*. A workshop is held inside a *gasshō*-style house and takes about two hours. Sessions can be booked at the museum’s information desk. During the workshop, participants create a single *ashinaka* with a decorative loop that can be used to display the sandal as a memento.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

藁細工

草履や敷物など、白川郷の日常生活で使われるものの多くは、稲わら（ワラ）を使って手作りされたものである。その一例が、あしなかと呼ばれるわら草履である。これは文字通り「半分の足」を意味し、一般的に足の半分の長さであり、つま先と足の甲だけを覆い、かかとが露出していることからその名がついた。小型化したことで、稲作の難しかった山間部では貴重な稲わらが節約された。

ワラは縄、敷物、背負子、長靴、脚絆を作るためにも使用された。これらの日用品を作るのは、一般的に男性の仕事と考えられ、屋外であまり仕事をするできない雪の多い冬の時期に行われた。村人1人が1年間に使うアシナカは40足ほどで、1年分を作るには、冬の夜、焚き火の明かりの下で何時間も労働する必要があった。

野外博物館 合掌造り民家園では、自分だけのあしなか作りを体験することができる。ワークショップは合掌造りの家屋の中で行われ、所要時間は約2時間。予約は同館のインフォメーションで受け付けている。ワークショップでは、記念品として飾れる飾り輪のついた、1つのあしなかを作ることができる。

005-010

Family Structure and Daily Life

白川村多言語解説協議会

【タイトル】 人々の暮らしと家族構成

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Family Structure and Daily Life

In the northern and southern areas of Shirakawa-gō, *gasshō*-style homes typically housed extended families. In the Tōyama House, for example, about 45 people lived there in the early 1900s. Unlike elsewhere in Japan, daughters and sons without inheritance rights continued to live in their family homes even after getting married, and they visited their spouse in the spouse's family home. Women who married men with inheritance rights were an exception, as they would move into their husband's home. Children were raised by the head of the house in which they were born.

There were practical reasons for such a living arrangement. The scarcity of farmland meant that it made more sense for extended families to live together and cultivate the same fields. Additionally, once sericulture (silkworm cultivation) became the primary industry of Shirakawa-gō, it was advantageous to have many family members in one household because the work was labor-intensive.

The Tōyama family practiced a system called *shingai*, in which some freedom was given to nuclear families within the household. Within this system, nuclear families had days off to spend together, pick wild plants and berries, or tend their own crops, which were then "sold" to the head of the household. This provided the nuclear family with its own income and allowed its members a measure of autonomy.

Such familial arrangements were quite rare in Japan and began to attract attention from anthropologists in the late nineteenth century. The first serious study of the system was published in 1911 by economic historian Honjō Eijirō (1888–1973).

There was a common seating arrangement when families gathered on straw mats around their open-air hearths (*irori*). A guest of the household sat closest to the entrance, and beside him sat the household's patriarch. Opposite the guest sat the matriarch, closest to the water supply. There was no strict rule for who sat opposite the patriarch, but it was often a child or children charged with replenishing firewood for the hearth.

The smoke from these hearths blackened the home's exposed wooden beams with a layer of soot. Both the smoke and the soot worked as natural repellents, protecting against insects, mice, and bats; they also helped protect the wood and thatch from moisture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

家族構成と暮らし

白川郷の南部や北部の地域では、大きな合掌造りの家には、通常、大家族が住んでいた。その一例が遠山家住宅で、1900年代初頭には約45人が暮らしていた。日本の他の地域とは異なり、相続権のない娘や息子は結婚しても実家に住み続け、配偶者の実家へ訪問した。相続権のある男性と結婚した女性だけが、夫の家に移り住んだ。生まれた子供は、生まれた家の当主に育てられた。

このような生活形態には現実的な理由があった。農地が乏しかったため、大家族が同居して同じ田畑を耕す方が合理的だった。さらに、養蚕が白川郷の主要産業となると、労働集約的な作業となるため、大家族が有利となった。

遠山家ではシンガイと呼ばれる制度があり、家庭内の核家族にある程度の自由が与えられていた。この制度では、核家族は休みの日に一緒に過ごしたり、山菜や木の実を採ったり、自分たちで作物を育てたりし、それを世帯主に「売る」ことで核家族だけの収入を得て、一定の自律性を与えられていたのである。

このような家族構成は日本では非常に珍しく、19世紀後半に人類学者から注目され始めた。この制度に関する最初の本格的な研究は、経済史学者の本庄栄治郎（1888-1973）によって1911年に発表された。

囲炉裏を囲むときの席順は決まっていた。家長は入口から一番遠いところに座り、背中を後ろの壁に向ける。その右側か左側に女家長が座り、水場の近くにいた。客人は女家長の向かい側に座った。入り口に最も近い家長の向かいに誰が座るかは厳密な決まりはなかったが、囲炉裏の薪を補充する役目を担う子供が座ることが多かった。

囲炉裏から出る煙は、家のむき出しの木の梁に煤の層をつくり、黒く変色させた。この煙と煤は、昆虫、ネズミ、コウモリから家を守る天然の忌避剤であり、木材や茅を湿気から守るのにも役立った。

005-011

Yui

白川村多言語解説協議会

【タイトル】 結（ゆい）について

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Yui

Part of what made life possible in Shirakawa-gō's harsh climate was a concept called *yui*. Written with the Chinese character for “binding” or “joining” (結), *yui* refers to an agreement among the villagers to offer mutual aid and assistance.

One clear example of *yui* is the way in which a large group of villagers came together to rethatch a *gasshō*-style roof over the course of a single day. With larger homes, 100 to 200 people might be working on the roof at the same time. Others would assist from the ground, hauling bundles of miscanthus grass, preparing food, or helping with other tasks.

Yui was also important in other communal activities, such as gathering horse chestnuts and other natural materials and organizing events like weddings and funerals. The concept of *yui* included a strict standard of reciprocity and fairness. For this reason, contributions by families or groups, such as those during a rethatching, were recorded in a book called a *yui-chō*. The oldest surviving *yui-chō* in Shirakawa-gō dates to 1792.

These days, the concept of *yui* still exists in the Ogimachi neighborhood. Local residents performed a rethatching in 2023—the first in five years, owing to the COVID-19 pandemic. The rethatching of the roofs in the Gasshozukuri Minkaen Open-Air Museum, however, is performed by professional thatchers.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

結（ゆい）

白川郷の厳しい気候風土での生活を可能にした重要な概念が「結（ゆい）」である。ゆいは漢字で「結」と書き、村人同士が互いに助け合い、助け合う絆を意味する。

結の最も身近な例は、大勢の村人が集まって、一日に合掌造りの屋根を葺き替える作業である。大きな家では、100人から200人が同時に屋根の上で作業することになる。その間、他の人たちは地面でカヤ（ススキ）の束を運んだり、食べ物の準備をしたり、他の仕事を手伝うなどして働いた。

結はまた、栃の実やその他の天然素材を集めるような共同作業や、冠婚葬祭などの行事を行うなど他の共同活動の際にも重要であった。結制度の特徴のひとつは、厳格な互惠性と公平性である。そのため、例えば葺き替えの際には、家族や組合などからの寄付は、「結帳」と呼ばれる帳簿に記録された。現存する最古の結帳は1792年のものである。

最近でも荻町界限には「結」の概念が残っている。2023年には、COVID-19の大流行により、5年ぶりに地元住民が葺き替えを行った。しかし、合掌造り民家園の屋根の葺き替えはプロの茅葺き職人が行っている。

005-012

Gasshō-zukuri: An Overview

白川村多言語解説協議会

【タイトル】合掌造りのみどころ

【想定媒体】Webページ

できあがった英語解説文

Gasshō-zukuri: An Overview

Shirakawa-gō is best known for large houses with steep, thatched roofs built in a style called *gasshō-zukuri*. *Zukuri* means “construction” or “building,” while *gasshō* refers to the triangular shape made by hands pressed together in prayer.

The villagers of Shirakawa-gō constructed homes in this style because steep roofs shed snow more easily. The style also allowed for large attics that could be used for the village’s primary industry, silkworm cultivation. These attics could be divided into multiple levels to maximize space for cultivation. Large windows in the gable ends let in light and air, creating an ideal environment for the silkworms.

Although the ground floor was built from wood by professional carpenters, the roof was built and thatched by the villagers themselves. The thatching, made with thousands of bundles of grass or reeds gathered from the mountains, was replaced every few decades in a massive, one-day communal effort involving up to 200 villagers. This tradition continues today, albeit in modified form, with the help of local companies.

Today, *gasshō*-style houses dating back as far as the 1700s can be seen in both Shirakawa-gō and Gokayama in nearby Toyama Prefecture. Visitors to Shirakawa-gō’s Gasshozukuri Minkaen Open-Air Museum can enter several well-preserved houses to experience them firsthand.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

合掌造りの見どころ

白川郷は、合掌造りと呼ばれる急勾配の茅葺き屋根の大きな家屋でよく知られている。造りは「建築」、合掌は両手を合わせて祈るときにできる三角形の形を意味している。

このような住宅様式が白川郷の村人によって採用されたのは、急勾配の屋根が雪を落としやすいためである。さらに、大きな屋根裏は村の主要産業である養蚕の作業場として使われた。屋根裏は何層にも仕切ることができ、可能な限り広く養蚕のためのスペースを確保することができた。また、妻側の大きな窓からは光と風を通しやすく、蚕にとって理想的な環境を作り出した。

家の地上階はプロの大工によって木造で建てられたが、屋根は村人たち自身によって建てられた。山で栽培された葦を何千本も束ねて葺いた屋根は、数十年ごとに200人もの村人が1日ばかりで葺き替えを行った。この伝統は、地元企業の協力を得て、形を変えながらも現在も続いている。

現在、白川郷や富山県の五箇山には、1700年代までさかのぼる合掌造りの家屋が残っている。白川郷の野外博物館 合掌造り民家園には、保存状態の良い合掌造りの民家が数軒保存されており、見学することができる。

005-013

Fire Prevention: Then and Now

白川村多言語解説協議会

【タイトル】 防火：当時と現在

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Fire Prevention: Then and Now

Although *gasshō*-style houses were ideal for the residents of Shirakawa-gō in many respects, their wooden construction and grass-thatched roofs were (and are) very susceptible to fire. Open-air hearths within the homes were traditionally used for cooking and heating, and stray embers could easily spark flames in the attic or other parts of the house.

Historically, the focus was as much on containing fires as on preventing them. For example, houses were built with adequate space between them so that fires did not jump from one house to the next. Considerable space was also maintained between the houses and their associated storehouses.

Today, Shirakawa-gō and the Gasshozukuri Minkaen Open-Air Museum have adopted strict fire-prevention measures. Smoking is prohibited except in designated areas, and smoke detectors are installed in all structures. In addition, there are patrols up to three times a day to check for fire hazards, and fire drills are conducted on a regular basis.

One of the more remarkable modern-day measures is a system of water cannons that can spray high-powered jets of water far into the air. These jets can be aimed at roofs or adjusted to form a wall of water between structures. The museum is unable to demonstrate the cannons' operation for visitors; however, during biannual drills, dozens of the water cannons are fired together in a striking scene that is pictured in posters around town.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

防火：当時と現在

合掌造りの家屋は、白川郷の住民にとってさまざまな点で理想的であったが、木造で萱葺き屋根であるため、火災には弱かった（今もそうである）。さらに、家の中では伝統的に囲炉裏が調理や暖房に使われていたため、その燃えかすが屋根裏や家の他の場所に燃え移る危険もあった。

歴史的な防火対策は、火災を防ぐことよりも、火災を食い止めることに重点が置かれていた。例えば、家屋と家屋の間に十分な空間を確保し、火災が家屋から家屋へと飛び火しないようにすることであった。また、家とそれに付随する倉庫との間にも十分な空間を確保していた。

現在、白川郷や合掌造り民家園野外博物館では、防火対策を徹底している。指定された場所以外での喫煙は禁止され、すべての建造物に煙探知機が設置されている。また、火災の危険がないか1日3回までパトロールを行い、定期的に消防訓練を実施している。

現代的な対策として目を引くのは、高出力の噴流水を空高く噴射する放水銃である。この噴流は屋根に向けたり、構造物の間に水の壁を形成するように調整したりすることができる。通常、この装置は見学することはできない。しかし、年に2回行われる訓練では、何十台もの放水銃が次々と噴射し、その印象的な光景は街中のポスターにも描かれている。

005-014

Construction of the Ground Floor

白川村多言語解説協議会

【タイトル】 合掌造りの建築

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Construction of the Ground Floor

Traditional thatched houses can be found throughout Japan, but the walls of *gasshō*-style houses were unusual in being constructed from wood rather than mud-plaster. This was made possible thanks to Shirakawa-gō's relationship with professional carpenters from Noto Province (in present-day Ishikawa Prefecture) to the north of Shirakawa-gō, and Takayama in Hida Province (part of Gifu Prefecture) to the southeast. Shirakawa-gō did not have enough year-round work to support full-time local carpenters, so carpenters were called in from these regions when a new house was to be constructed.

The first step in *gasshō*-style construction was to lay the foundation stones on which the house's vertical posts would rest. The stones were placed in the appropriate positions to support the posts, then dozens of people hauled on ropes to raise a thick rammer suspended vertically from a wooden tower. Chanting to keep time, the villagers released the ropes; the heavy log fell and pounded the stone into the ground. Before the stone for the house's primary post was struck, it was blessed with sake; after the foundation was complete, a small ceremony was held to pray for the well-being of the future home.

Next, the professional carpenters built the framework of the house on these foundation stones. In an age before modern measuring tools, carpenters used implements such as plumb and string lines to make sure the frame was aligned properly. They also carved the bottom of the wooden posts to conform to the contours of the foundation stones, accounting for any unevenness in the rock. Next, they tested them and made adjustments until the posts stood perfectly straight.

The posts and beams that make up the frame were not connected with nails, but with joinery techniques. Pegs, tenons, or laps on one piece of wood slotted into equivalent holes or grooves on another, locking the pieces together with pegs or wedges. Assembling pieces in the correct order was essential to make sure the joints fit and stayed in place. The carpenters constructed one room at a time, starting with the room featuring the primary post (*daikoku-bashira*) and working outward.

The backbone of the house is the large beam called the “cow beam” (*ushinoki*). The interior could be expanded by using curved beams called *chōnabari*, which straddled the *ushinoki* at a 90-degree angle. The curves at the ends of the *chōnabari* were natural—the result of wind and snow slowly bending the trees during their growth. Carpenters sought out such trees for *chōnabari*, as their arches provided the house’s frame with increased structural strength, much like that of a stone archway.

Once the ground floor was complete, the top was lined with thin beams called *usubari*, on which the roof trusses would sit. From here, villagers took over the work from the carpenters, assembling and thatching the roof themselves. Small stoppers were used to prevent the roof from shifting on the *usubari*, but they and the roof were not affixed to one another.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

地上階の建築

茅葺き屋根の家屋は日本各地にあるが、合掌造りの家屋は、土壁ではなく木造であることが特徴である。これは、白川郷の北に位置する能登（現在の石川県）や、南東に位置する飛騨国（現在の岐阜県）の高山から、専門の大工を呼び寄せることができたからである。地元では大工の仕事が一年中あるわけではないので、家を新築するときには他地域から大工を呼ばなければならなかった。

合掌造りの最初の工程は、家の柱となる礎石を積むことだった。支柱を支える適切な位置に石を置き、何十人もの人がロープを引き、檣に吊るした太い木槌を持ち上げた。タイミングを合わせて、村人たちが縄を放すと、重い丸太が降りて、石を地面に叩きつけた。家の柱となる石が打たれる前に酒で祝福され、土台が完成すると、未来の家の幸福を祈る小さな儀式が行われた。

次に、専門の大工がこの礎石を土台にして家の骨組みを作った。近代的な測量器具がなかった時代、大工たちは鉛直線や縄などを使って、骨組みが正しく配置されていることを確認した。また、木の柱の底を礎石と正確に一致するように彫り、岩の凹凸を考慮した。その後、柱が完全に水平に立つまで何度も調整した。

骨組みを構成する柱や梁は釘で固定されるのではなく、接合技術でつながれていた。一方の木材に設けられたペグが、もう一方の木材に設けられた同等の穴や溝にはめ込まれ、固定される。正しい順序で組み立てることが、継ぎ目をしっかりと固定するために不可欠だった。大工は、大黒柱のある部屋から一部屋ずつ組み立てていった。

家の骨格となるのはウシノキと呼ばれる大きな梁だ。アゼに見立てて名付けられた「チョウナ梁」と呼ばれる曲線の梁を使い、ウシノキを90度の角度でまたぐことで、内部を拡張することができた。梁のカーブは、山の急斜面に木が生えるときに自然に生じるもので、天然のアーチを作り出し、骨組みの強度を高めている。

一階部分が完成すると、上部にはウスバリと呼ばれる細い梁が並べられ、その上に屋根のトラスが設置される。ここからは村人たちが大工から仕事を引き継ぎ、屋根を組み立て、葺く作業に入る。ウスバリの上で屋根がずれないように小さな留め具が使われたが、留め具と屋根は連結されていない。

005-015

Roof Architecture

白川村多言語解説協議会

【タイトル】 叉首構造の切妻造

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Roof Architecture

The roofs of *gasshō*-style homes are notable for their gable structure supported by a framework of triangular trusses. The base of each truss is a roof beam (*usubari*) that straddles the width of the house. Above it, two logs are positioned so that their upper tips come together at slightly less than a 60-degree angle. The ends of the logs are lashed together with *neso*, a binding made from Japanese witch hazel branches. The lower ends of the logs, sharpened to rough points, are fitted into holes on the ends of the *usubari* roof beams. The result is strong, steep triangular supports that give *gasshō*-style homes their distinctive roof shape.

The trusses are lashed to the roof's base frame with straw rope and *neso* cords in several places. However, they are not joined to the main body of the house—the roof and walls are completely separate structures. The two gables on either end of the attic area are set with traditional shoji windows consisting of a frame covered by a heavy, translucent sheet of washi paper. When open, these windows provide good ventilation and let in plenty of light, which made them ideal for the attics' primary purpose: silkworm cultivation, the main industry of Shirakawa-gō for many decades. The large, steep shape of the roofs also allowed attics to be divided into two or three vertical levels, giving residents more room to raise silkworms and process the cocoons.

Visitors to the museum can ascend a two-layer attic in the Former Nakano Yoshimori House, which is open to the public. The different attic levels feature tools used in sericulture, such as the racks on which silkworms were raised and hand-cranked machines for unwinding cocoons.

The traditional gable frame of these roofs is weak to lateral forces. To compensate, large diagonal braces called *suji-kai* were added between the trusses inside the attic, and smaller diagonal braces were fastened to the trusses outside. This is an architectural feature unique to the *gasshō* style.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

屋根の構造

合掌造りの家屋の屋根は、三角形のトラスの骨組みに支えられた切妻構造になっているのが特徴だ。各トラスの土台は、家の幅をまたぐ屋根梁（うすばり）である。そのうえに2本の丸太を先端付近で60度以下の角度で交差するように置かれる。丸太がネソ（マンサクの枝で作った縄の一種）を用いてつなぎ合わされる。丸太の反対側の端は粗く研がれ、ウスバリの端にある穴にはめ込む。これにより、合掌造りの家の特徴である、急勾配で強固な三角形の支えができあがる。

トラスは屋根の下地（クダリ）に藁縄やネソで数カ所括り付けられているが、屋根と胴体の連結はその程度で、それ以外は完全に独立した構造である。屋根の両端にある2つの妻部分には、伝統的な障子窓が取り付けられている。この窓は通風と採光に優れているので、これは、屋根裏部屋の主な機能であり、何十年の間白川郷の主要産業であった養蚕に理想的であった。大きく急勾配のトラスは、屋根裏を2階層または3階層に分割することを可能にし、養蚕のためのより広い空間をもたらす。

一般公開されている中野義盛家住宅では、2層からなる屋根裏を見学することができる。屋根裏の各層には、蚕を飼育するための棚や繭をほどくための手回し機など、養蚕に使われた道具が展示されている。

伝統的な切妻造りの屋根の骨組みは、横からの力に弱い。それを補うために、屋根裏の内側のトラスとトラスの間には筋交いと呼ばれる大きな斜めの添え木が取り付けられ、外側には小さな斜めの添え木が固定された。これは合掌造りならではの建築的な特徴である。

005-016

Gasshō-zukuri 平屋建: Single-Story Houses with Multiple Levels 白川村多言語解説協議会

【タイトル】 平屋建て

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

***Gasshō-zukuri*: Single-Story Houses with Multiple Levels**

Gasshō-style houses in Shirakawa-gō are made up of two sections that are almost entirely distinct, both in their construction and in their use. The ground floor was built by professional carpenters from carefully hewn lumber. The attic and roof, however, were built and thatched by the villagers themselves using comparatively simple materials harvested from the surrounding mountains. The ground floor was where daily living—including cooking, eating, and sleeping—took place. The attic, on the other hand, was reserved for raising silkworms, which was Shirakawa-gō's primary industry. Although the attics were essential for the family's livelihood and often high enough to contain multiple floors, *gasshō*-style homes are still considered single-story houses.

Open-air hearths called *irori* occupied the central room of the ground floor. When these were used to cook meals or heat the home, soot would cover the wooden posts and beams, blackening them and serving as a natural insect repellent. The fire in the hearth also kept the attic dry, which was beneficial for silkworm cultivation. Many of the museum's houses have solid wooden floors in the attics, but these were added later so that visitors can walk through them more easily. In their original state, the attic floors had loosely spaced slats that allowed the hearth smoke to pass up from below. The slatted floors also improved air circulation.

Traditionally, the houses were all oriented in the same direction. In Shirakawa-gō, strong seasonal winds blow along the river that flows from north to south, so the roofs were built with their ridgelines parallel to the river. This minimized wind load on the house and also regulated the amount of sunlight shining on the roofs. Because the two

sides of the roof faced east and west, they facilitated the melting of accumulated snow. In the morning, the eastern side was exposed to the full rays of the morning sun, and the west side received equal sunlight in the afternoon. This clever method used natural energy to protect the roofs from the crushing weight of built-up snow.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

合掌造り：多層構造の平屋建て家屋

白川郷の合掌造りの家屋は、構造も用途もまるで異なる2つの部分から構成されている。1階部分は、プロの大工が丁寧に切り出した材木を使って建てた。屋根の組み立てや葺き替えは村人たちが自分たちの手で、周囲の山から伐採した素材を使って建てた。1階は、料理、食事、睡眠などの日常生活の場であった。屋根裏は、白川郷の主要産業であった蚕を飼うために使われた。屋根裏は一家の生計に欠かせないものであり、多層階になるほどの高さがあることも多かったが、合掌造りの家は今でも平屋と考えられている

一階の中央の部屋には、囲炉裏があった。囲炉裏で食事を作ったり暖をとったりすることで、煤が木の柱や梁を覆って黒くなり、天然の虫除けにもなった。また、屋根裏を乾燥させる効果もあり、養蚕には最適だった。博物館の多くの家屋の屋根裏には、しっかりとした木の床があるが、これは、見学者がより快適に歩けるように、後から付け足されたものである。当初の屋根裏の床は、床板の間隔が広く、囲炉裏の煙を下から上に通すようになっていた。すのこ床は、全体の空気循環も良くしていた。

伝統的に、家々はすべて同じ方向を向いていた。白川郷では、北から南に流れる川に沿って季節風が強く吹くため、屋根の稜線は川と平行に建てられていた。これによって風の抵抗を最小限に抑え、屋根に当たる日射量も調整した。屋根は東西に面しているため、午前中は東側、午後は西側に日光を当てることで、積もった雪を効率よく溶かすことができた。この優れた方法は、自然のエネルギーを利用して、積もった雪の重圧から屋根を守るものだった。

地域番号	006	協議会名	公益社団法人長浜観光協会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
006-001	長浜城歴史博物館		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-002	長浜鉄道スクエア		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-003	慶雲館（長浜盆梅展）		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-004	ヤンマーミュージアム		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-005	海洋堂フィギュアミュージアム黒壁		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-006	長浜曳山博物館		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-007	今重屋敷能舞館		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-008	長浜別院大通寺		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-009	国友鉄砲ミュージアム		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-010	浅井歴史民俗資料館		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-011	五先賢の館		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-012	小谷城戦国歴史資料館		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-013	高月観音の里歴史民俗資料館		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-014	北淡海・丸子船の館		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-015	長浜おでかけパスポート		251～500 ワード	パンフレット Webページ
006-016	長浜地域の歴史背景		250ワード 以内	パンフレット Webページ
006-017	曳山祭り		250ワード 以内	パンフレット Webページ

006-018	盆梅展	250ワード 以内	Webページ
---------	-----	--------------	--------

006-001

Nagahama Castle History Museum

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】長浜城歴史博物館

【想定媒体】パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Nagahama Castle History Museum

This castle's history and the history of Nagahama are both tied to Toyotomi Hideyoshi (1537–1598), the samurai lord who founded the city and gave it its name. Hideyoshi built his first castle on the site in 1576, and the museum building is built to resemble a castle of that period. The museum's five floors include exhibits on the history of Nagahama and the warlords who ruled its surrounding area.

The objects inside the museum highlight aspects of Nagahama's medieval history. These include armor, maps, and folding screens that depict famous battles, such as the 1583 Battle of Shizugatake, fought only 15 kilometers north of the museum. Audio guides are available in English, Korean, and Simplified and Traditional Chinese, and visitors can use tablet computers to browse the museum's collection of over 50 items.

There is also a tea room where visitors can take in the view as they sip tea prepared by a master of tea ceremony. (Use of the tea room may require a reservation.) The adjacent park is home to some 600 cherry trees and is a popular spot for admiring the spring blooms in late March and early April.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

長浜城歴史博物館

この城の歴史と「長浜」の歴史は、どちらも都市を設立してその名を付けた武将である豊臣秀吉（1537–1598）と結びついています。秀吉は1576年にこの地に最初の城を築きました。この博物

館の建物は、当時の城を模して建てられています。博物館は 5 階建てで、長浜の歴史やこの地を治めた武将に関する展示があります。

館内の展示物は、長浜の中世史が見所で、甲冑や地図の他、博物館の北わずか 15km で戦った 1583 年の賤ヶ岳の戦いなど、有名な戦いを描いたスクリーンがあります。音声ガイドは英語、中国語（繁体字・簡体字）、台湾語、韓国語に対応しており、来訪者はタブレット端末で 50 点以上のコレクションを閲覧できます。

茶室もあり、茶道の師が淹れたお茶を飲みながら、景色を楽しむことができます。（茶室の利用は、季節により予約が必要な場合があります。）隣接する公園には約 600 本の桜が植えられており、3 月下旬から 4 月上旬にかけてはお花見スポットとして人気です。

006-002

Nagahama Railway Museum

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】 長浜鉄道スクエア

【想定媒体】 パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Nagahama Railway Museum

The Nagahama Railway Museum has both Japan's oldest extant station building and a pair of decommissioned locomotives that visitors can climb aboard and explore. Its exhibits tell the story of early Japanese train travel and Nagahama's role as a nexus for transport and commerce.

The museum's entrance is a brick-accented station building that was completed in 1882. From 1884 to 1899, it served as the southern terminal for a line that connected Lake Biwa to the Sea of Japan. The late nineteenth-century structure still retains its period charm with antique furnishings, a replica ticket booth, and life-sized figures depicting station staff and travelers in contemporary clothing. Modern trains still rumble past on the adjacent JR Hokuriku Main Line, contributing to the ambience.

Two additional buildings behind the old station complete the Nagahama Railway Museum. The first is a large exhibit hall with dioramas and illustrations showing the development of rail travel in Nagahama, including a miniature train loop modeled on the present-day city. A multilingual audio guide is available for those who wish to further explore the historical and technological roots of Japan's railways.

The museum's final building houses two locomotives: a black D51 steam engine built in 1942 and a red ED70 electric locomotive from 1957. Visitors can climb inside the conductors' cabins to examine the controls or peek into the coal firebox. They can also go up to the second-floor observation deck for a bird's-eye view of the locomotives.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

長浜鉄道スクエア

長浜鉄道スクエアには、日本最古で現存している駅舎と、訪問者が実際に乗りこんで見学できる廃車となった機関車があります。その展示は、初期の日本の鉄道旅行や、輸送と商業が結びついた長浜の役割を物語っています。

博物館の入り口は、1882年に完成したレンガのアクセントを施した駅舎です。1884年から1899年まで、琵琶湖と日本海を結ぶ路線の南の終着駅として機能しました。19世紀後半の建物には、年代物の調度品、レプリカの切符売り場、当時の服を着た駅員と旅行者を模した等身大の人形があり、当時の魅力を今に伝えています隣接する JR 北陸本線を走る現代の電車が、よい雰囲気を与えます。

旧駅舎の後ろある 2 つの建物も、長浜鉄道スクエアを構成しています。一つ目は、現在の都市をモチーフにしたミニチュアの鉄道模型をはじめ、長浜の鉄道の旅の発展を示すジオラマやイラストが展示された大きな展示ホールです。日本の鉄道の歴史的、技術的ルーツをより深く探求したい方は多言語の音声ガイドを利用できます。

博物館の最後の建物には、1942年に製造された黒い D51 蒸気機関車と、1957年に製造された赤い ED70 電気機関車の 2 台が収容されています。車掌室に登って制御装置を観察したり、石炭火室を覗いたりできます。また、2 階のデッキへ上り、機関車を眺めることもできます。

006-003

Keiunkan Historic Guesthouse & Garden

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】慶雲館（長浜盆梅展）

【想定媒体】パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Keiunkan Historic Guesthouse & Garden

Keiunkan, located about five minutes' walk south of Nagahama Station, is a guesthouse with a Japanese garden designed by one of Japan's preeminent landscape architects. The guesthouse was built to host Emperor Meiji (1852–1912) and his wife, Empress Shōken (1849–1914), who stopped briefly in Nagahama in 1887. A pair of armchairs upholstered in white cloth, on which the emperor and empress sat during their visit, is preserved in an upper room.

Keiunkan was constructed in just under four months and is said to have been completed on the morning of the emperor's arrival. Construction of the guesthouse was personally funded by Asami Matazō (1839–1900), a prominent Nagahama industrialist involved in textiles, transport, and banking.

The garden's features include a dry pond, a teahouse, and a collection of distinctive stones and stone lanterns. The garden was created in 1912 by Ogawa Jihei VII (1860–1933), a landscape architect known for his work on several notable gardens, including the grounds at Heian Jingū Shrine in Kyoto.

Since 1952, Keiunkan has hosted an annual plum bonsai exhibition between early January and early March. Trees as old as 400 years feature in this exhibition, which attracts tens of thousands of visitors each year.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

慶雲館

長浜駅から南へ徒歩 5 分ほどのところにある慶雲館は、日本を代表する造園家が設計した日本庭園のある御休所です。この迎賓館は、明治天皇(1852-1912)とその妻である昭憲皇太后(1849-1914)を迎えるために建てられ、1887 年に長浜に立ち寄られました。天皇皇后両陛下は滞在中、肘掛け椅子に座られ、白い布で布張りされたその肘掛け椅子は、上の部屋に保存されています。

慶雲館は 4 か月弱で建設され、天皇が来られる日の朝に完成したと言われています。繊維業、輸送業、銀行業に携わっていた長浜の著名な実業家である浅見又蔵(1839-1900)が私費を投じて建設しました。

庭園の特徴には、枯池、茶室、特徴的な巨石や石灯籠のコレクションがあります。庭園は、京都の平安神宮などを設計したことで知られる造園家の七代目小川治兵衛(1860-1933)によって、1912 年に造られました。

1952 年より、慶雲館では、毎年 1 月上旬から 3 月上旬にかけて盆梅展[※No.18 長浜盆梅展へのハイパーリンクを挿入]を開催してきました。樹齢 400 年の木々が展示されるなど、毎年数万人の来場者を集めている人気の展示会です。

006-004

Yanmar Museum

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】 ヤンマーミュージアム

【想定媒体】 パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Yanmar Museum

The Yanmar Museum’s high-tech, game-based exhibits are a hit with children and parents. Each of the arcade-like challenges, which range from operating a backhoe to using body movement to power the pistons of an engine, is based around the benefits of ecology, innovation, and modern technology. Each visitor is issued a personal “Yanmar card” that tracks their progress as they earn points by completing the challenges, and each player’s point total is displayed on a huge video screen alongside those of the top scorers.

The Yanmar Museum was created by Yanmar, a machinery company founded in 1912 by an inventor and engineer named Yamaoka Magokichi (1888–1962). Yamaoka was born in Minami Tominaga, a village that is now part of Nagahama. Yamaoka developed the world’s first compact diesel engine, a technology that Yanmar has implemented in construction and agricultural machinery, ships, and electrical generators. The Yanmar Museum’s interactive exhibits (which include virtual farming, wake-surfing, a digital fishery, and a “sustainable energy” climbing wall) reflect the company’s three core themes of “land,” “sea,” and “city.”

The museum’s attached restaurant, Premium Marche Biwako, offers a menu of dishes made with sustainably farmed rice. The second floor has more traditional museum exhibits that introduce the history of the company.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ヤンマーミュージアム

ヤンマーミュージアムのハイテクでゲームベースの展示は、親子で人気があります。バックホウの操作や、体を動かしてエンジンのピストンを動かすなど、ゲームのようなそれぞれの課題は、エコロジー、イノベーション、および最新テクノロジーの恩恵に基づいています。訪問者には、個人的な「ヤンマーカード」が発行され、チャレンジを完了することで獲得するポイントにより、達成状況を把握できます。各プレイヤーの合計ポイントは、トップの得点者と共に、巨大なビデオ画面に表示されます。

ヤンマーミュージアムは、発明家兼エンジニアの山岡孫吉(1888-1962)によって設立された機械の会社であるヤンマーによって創設されました。山岡は、現在長浜市の一部である南富永村で生まれました。山岡は、世界初の小型ディーゼルエンジンを開発し、ヤンマーはその技術を、建設機械や農業機械、船舶、発電機などに応用しました。ヤンマーミュージアムのインタラクティブな展示(バーチャル農業、ウェイクサーフィン、デジタル漁業、「持続可能なエネルギー」クライミングウォールなど)は、「大地」、「海」、「都市」という同社の3つのコアテーマを反映しています。

博物館の建物の併設レストラン、プレミアムマルシェびわ湖では、持続可能な方法で栽培された米を中心とした料理を提供しています。2階には、会社の歴史を紹介する従来の博物館の展示があります。

006-005

Kaiyodo Figure Museum

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】 海洋堂フィギュアミュージアム黒壁

【想定媒体】 パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Kaiyodo Figure Museum

Godzilla, Ultraman, and other superstars of Japanese pop culture await at the Kaiyodo Figure Museum, a treasure house of collectible figurines and action figures from Kaiyodo, one of the industry's leading manufacturers.

Thousands of figures, ranging in size from the tiny to the towering, fill this two-story exhibition space. Many of the shelves and cases display popular anime and manga characters, but Kaiyodo's artisans can replicate just about anything in molded plastic, from animals and airplanes to dinosaurs or Buddhist deities. The museum's five permanent exhibition rooms are supplemented by additional spaces for temporary exhibits, such as the diorama gallery, where museum staff exhibit handmade dioramas recreating famous scenes from popular movies, video games, and TV shows.

Kaiyodo began in 1964 as a one-room plastic model shop in Osaka. The company's most devoted fans know the sculptors who design its figures by name, and the museum has sections showcasing each creator's top hits.

On weekends and holidays, visitors can create and paint small dioramas of their own. For those who prefer more ready-made souvenirs, there are also rows of capsule-toy vending machines and a gift shop.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

海洋堂フィギュアミュージアム

ゴジラ、ウルトラマンなど、日本のポップカルチャーのスーパースターたちが、海洋堂フィギュアミュージアムで待ち構えています。ここでは、業界を牽引するメーカーである海洋堂の、収集可能なフィギュアやアクションフィギュアの宝庫です。

小さなものからそびえたつものまで、何千ものフィギュアがこの 2 階建ての展示スペースを埋め尽くしています。棚やケースにはアニメやマンガの人気キャラクターが飾られているものが多いですが、海洋堂の職人は、動物から飛行機、恐竜、仏教の神々まで、成形プラスチックでほぼすべてのものを再現できます。博物館の 5 つの常設展示室に加え、博物館のスタッフが人気のある映画、ビデオゲーム、テレビ番組の有名なシーンを再現した手作りのジオラマを展示するジオラマギャラリーなど、一時的な企画展スペースがあります。

海洋堂は、1964 年に大阪のワンルームのプラモデルショップとしてスタートしました。同社の最も熱心なファンは、フィギュアをデザインした作家の名前を知っており、博物館には各作家のトップヒットを紹介するセクションがあります。

週末や休日には、訪問者は自分で小さなジオラマを作成したり色を付けたりできます。カプセルトイの自動販売機や、既製のお土産を好む人のためのギフトショップも並んでいます。

006-006

Nagahama Hikiyama Museum

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】長浜曳山博物館

【想定媒体】パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Nagahama Hikiyama Museum

The Nagahama Hikiyama Festival takes place each April, but the festival's elaborately decorated floats are displayed year-round at this centrally located museum.

Hikiyama are mobile stages, each between 6 and 9 meters tall and weighing between 5 and 6 metric tons. During the festival, teams of around 40 people pull the *hikiyama* to different locations throughout the city. At each stop, child actors who ride inside the *hikiyama* emerge to perform Kabuki plays accompanied by musicians hidden behind the stage.

Two or more *hikiyama* are always on display at the museum. The stages have been nicknamed "mobile art museums" for their ornate decorations, which include crimson lacquer, gold leaf, intricate carvings, and detailed metalwork. Guests accompanied by a certified regional interpreter guide have the rare chance to step into the glass-walled bay for an up-close inspection.

The museum also has displays that introduce the history of the festival, which has been held in its current form since the eighteenth century. Near the entrance is a replica of a *hikiyama* stage, atop which visitors can imagine themselves as performers. Video recordings of past Kabuki performances are screened on the second floor, where there are also pictures of the priceless embroidered curtains that hang on the back of each *hikiyama*.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

長浜曳山博物館

長浜曳山まつり[※No.17 長浜曳山祭りへのハイパーリンクを挿入]は毎年 4 月に開催されますが、中心部に位置するこの博物館では、一年中精巧に装飾された曳山が展示されています。

曳山は移動式ステージで、それぞれ高さ約 6～9 メートル、重さ 5～6 トンです。祭りの期間中、約 40 人の人々が曳山を引き、街中を巡ります。各停車地で、曳山の中にいる子役が舞台に現れ、舞台後方に隠れている演奏家と共に、歌舞伎を演じます。

博物館には 2 つ、もしくはそれ以上のひき山が常に展示されています。舞台は、朱の漆や金箔、複雑な彫刻やきめ細かい金属細工といった華やかな装飾から、「移動美術館」という愛称が付けられています。公認の地域通訳ガイドが同行するゲストは、ガラス壁で区切られた(展示室の)中に足を踏み入れて間近で念入りに見るといった貴重な機会を得られます。

博物館には、18 世紀から現在の形で開催されているまつりの歴史を紹介する展示もあります。入り口近くには曳山の舞台のレプリカがあり、舞台上で自身が役者になった姿を想像することができます。過去の歌舞伎公演の映像を 2 階で上映しており、2 階にはまた、それぞれの曳山の後ろにかけられている、刺繍の施された貴重な幕のパネルもあります。

006-007

Imajū Noh Museum

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】今重屋敷能舞館

【想定媒体】パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Imajū Noh Museum

The creators of the Imajū Noh Museum have turned a former sake warehouse into a celebration of classical Japanese dance-drama and its connections to Nagahama. Noh masks, costumes, and musical instruments are on display inside this artfully renovated structure.

The museum's collection of masks includes centuries-old originals as well as reproductions of masks from famous Noh plays. The central room of the first floor is occupied by a half-scale Noh stage that is used for musical performances and workshops on chanting, dancing, and movement. As part of the museum's mission to make Noh feel accessible to everyone, visitors are encouraged to join in the workshops or even just try standing onstage. The second floor displays examples of props, instruments, and costumes (*shōzoku*) used in Noh theater.

Both Noh and its predecessor, *sarugaku*, have deep roots in Ōmi Province (now Shiga Prefecture), which served as the base for one of Japan's most prominent *sarugaku* troupes. The sake warehouse is part of a traditional manor complex belonging to the Imamura family, prominent merchants and sake brewers who have lived in Nagahama since its founding in the late sixteenth century.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

今重屋敷能舞館

今重屋敷能舞館の考案者は、かつての酒蔵を日本の古典舞踊と長浜とのつながりを祝うものに変えました。能面、衣装、楽器などが、巧妙に改装されたこの建物に展示されています。

博物館のマスクのコレクションには、何世紀も前の実物と、有名な能楽のマスクの複製が含まれています。1階の中央の部屋には、音楽のパフォーマンスや、詠唱、踊り、動きのワークショップに使用される1/2スケールの能舞台があります。能を誰にとっても身近に感じてもらうというのが、この博物館の目的でもあるので、これらのワークショップに参加するか、ステージに立ってみることをお勧めします。2階には、能楽堂で使用される小道具、楽器、衣装(装束)の例が展示されています。

能とその前身の猿楽は、近江国(現在の滋賀県)に深く根ざしており、日本有数の猿楽劇団の拠点となりました。この酒蔵は、16世紀後半の長浜創設以来、長浜に住んだ著名な商家であり酒造家である今村家が所有する伝統的な邸宅の一部です。

006-008

Daitsūji Temple

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】 長浜別院大通寺

【想定媒体】 パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Daitsūji Temple

Daitsūji is a 450-year-old Buddhist temple and repository of traditional art and architecture. Its impressive two-story gate and peaceful inner courtyard offer a quiet respite from the bustling shops along Ōtemon-dōri. But the highlight of the site is the art collection in the temple's annex.

Daitsūji was founded in 1602 as a branch of Higashi Honganji Temple in Kyoto, and its main buildings date to the mid-seventeenth century. The main sanctuary was formerly a part of the palatial residence of the lord of Fushimi Castle, in what is now Kyoto. The section was relocated to the temple between 1652 and 1654 along with its expansive annex (*ōhiroma*), in which the castle lord had lived. The relocation was sponsored by Ii Naotaka (1590–1659), the daimyo of Hikone Castle and a close advisor to the shogun Tokugawa Hidetada (1579–1632). The Ii family maintained close ties to Daitsūji for centuries afterward.

Walking through the annex is like touring a private museum. The annex's gilded sliding partitions bear paintings by celebrated seventeenth- and eighteenth-century artists. These include works by Kanō Sanraku (1559–1635) and Kanō Sansetsu (1589–1651), both of the famed Kanō school of painters, which later became the official school of the shogunate. One small room displays a standing screen with a stunning illustration of a tiger; another contains a palanquin used by Princess Sachiyo, a daughter of the last lord of the Ii family, Ii Naosuke (1815–1860).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大通寺

大通寺は 400 年の歴史を持つ仏教寺院であり、伝統的な芸術と建築の宝庫です。印象的な 2 階建ての門と落ち着いた中庭は、大手門通り沿いのにぎやかなお店から離れた静かなひとときを提供します。しかし、この施設のハイライトは、別館にある美術品です。

大通寺は 1602 年に京都の東本願寺の別院として創建され、その主な建物は 17 世紀半ばにまでさかのぼります。主な聖域は、以前は現在の京都にある、伏見城主の一部でした。1652 年から 1654 年にかけて、城主が住んでいた広大な別館(大広間)とともに寺院に移されました。移転は、彦根城の大名であり、将軍徳川秀忠(1579-1632)の親密な顧問である井伊直孝(1590-1659)によって後援されました。井伊家はその後何世紀にもわたって大通寺と密接な関係を維持しました。

別館を歩くことは、私立博物館を見学するようなものです。別館の金色のスライドパーティションには、有名な 17 世紀と 18 世紀の芸術家による絵画が飾られています。これらには、後に幕府の公式学派となった有名な狩野派の画家の狩野山楽(1559-1635)、狩野三雪(1589-1651)の作品が含まれます。ある小さな部屋には見事な虎のイラストが描かれたスタンディングスクリーンがあり、別の部屋には、最後の井伊藩主、井伊直弼(1815-1860)の娘である砂千代姫が使用した駕籠があります。

006-009

Kunitomo Gun Museum

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】 国友鉄砲ミュージアム

【想定媒体】 パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Kunitomo Gun Museum

The Kunitomo Gun Museum is a place to explore Nagahama's history as one of Japan's earliest centers of firearms production. About 50 antique weapons are on display, most of which date to the late Edo period (1603–1867). The weapons in its collection range from practical battlefield muskets to ornately engraved showpieces.

Firearms were introduced to Japan from Europe in the mid-sixteenth century, and they soon played a pivotal role in warfare. Kunitomo, part of what is now the city of Nagahama, quickly established a reputation for its gunsmiths. By the seventeenth century, some 500 firearms manufacturers lived and worked in Kunitomo, and the area continued to supply government armories for the next 200 years.

A section of the museum is dedicated to the life and work of Kunitomo Ikkansai (1778–1840), a gunsmith and inventor who is sometimes called “the Da Vinci of the Edo period.” Ikkansai's work extended beyond firearms to include projection mirrors and the first Japanese-made reflective telescope, which he used to observe the surfaces of the sun and moon. Some of Ikkansai's astronomical drawings and inventions are on display at the museum.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

国友鉄砲ミュージアム

国友鉄砲ミュージアムは、日本で最も初期の銃器製造中心地のひとつであった長浜の歴史を深く知ることができる場所です。約 50 点の古い銃が展示されており、そのほとんどは江戸時代後期(1603-1867)のもので、同コレクションの武器は、実用的な戦場で使われるマスケット銃から華やかに刻まれた芸術作品にまで多岐にわたります。

銃器は 16 世紀半ばにヨーロッパから日本に導入され、すぐに戦争において極めて重要な役割を果たしました。現在の長浜市の一部である国友は、すぐに鉄砲鍛冶としての評判を確立しました。17 世紀までに、約 500 の銃器製造業者が国友に住み、働き、この地域は次の 200 年にわたって政府へ武器を供給し続けました。

博物館の一部は、「江戸時代のダヴィンチ」と呼ばれることもある鍛冶師であり発明家である国友一貫斎(1778-1840)の生涯と作品に捧げられています。一貫斎の仕事は、銃器だけでなく、投影鏡や日本初の反射式望遠鏡にまで及び、太陽と月の表面観測に使用しました。一貫斎の天体の絵や発明のいくつかは博物館に展示されています。

006-010

Azai History and Folklore Museum

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】 浅井歴史民俗資料館

【想定媒体】 パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Azai History and Folklore Museum

This folk museum in eastern Nagahama comprises a cluster of buildings centered on a garden and koi pond. Each structure has dioramas, models, and hands-on activities that introduce aspects of life during the Edo period (1603–1867).

A pair of traditional *minka* farmhouses add to the museum’s pastoral atmosphere. The older of the two farmhouses was originally constructed in 1804 and relocated to the museum in 1993. Its well-maintained interior includes period furnishings, tatami mat rooms, and an earthen-floored entrance and kitchen. Visitors who reserve in advance through a certified regional interpreter can try a range of traditional and agrarian activities, such as wearing a kimono or using an antique threshing machine.

The second traditional-style farmhouse on the grounds, built in 1993, showcases a household silk-making operation. The Azai district of Nagahama was known for its high-quality silk, and the displays in this farmhouse illustrate the sericulture process, from raising silkworms to spinning the cocoons into delicate thread. A mockup forge next door shows how Nagahama blacksmiths produced tools such as shovels and hoes for everyday use.

A larger, modern museum building next to the farmhouses features exhibits on the history of the ruling Azai family, who governed the area in the sixteenth century. Illustrated panels, personal effects, and life-sized dioramas tell of the family’s rise and fall. Special attention is paid to the three daughters of the last Azai lord, who survived the 1573 destruction of their family stronghold at Odani Castle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

浅井歴史民俗資料館

長浜市東部にあるこの民俗博物館は、庭園と鯉の池を中心とした建物群で構成されています。各建物は、ジオラマ、模型、体験コーナーがあり、江戸時代(1603-1867)の暮らしぶりを紹介しています。

2棟の伝統的な民家が、博物館の牧歌的な雰囲気を醸し出しています。2つの農家のうち古いものはもともと1804年に建設され、1993年に博物館に移築されました。年代物の家具や畳の部屋、土敷の玄関やキッチンなど、手入れの行き届いた内装です。資格を有する地域の通訳を通じて事前に予約した訪問者は、着物の着用や年代物の脱穀機の使用など、さまざまな伝統的な農業体験を試すことができます。

敷地内にある2番目の伝統的なスタイルの農家は、1993年に建てられ、家庭で行われていた絹作りの作業を紹介しています。長浜の浅井地区は上質な絹で知られ、蚕の飼育から繭を繊細な糸に紡ぐまでの養蚕の過程を展示品で解説しています。隣の実物大模型の鍛冶場は、長浜の鍛冶屋がシャベルやくわなど、日常使用する道具をどのように製造したかを示しています。

農家の隣にある大きくて近代的な博物館の建物には、16世紀にこの地域を統治した浅井家の歴史に関する展示があります。イラスト入りのパネル、身の回り品、等身大のジオラマは、家族の興亡を示しています。1573年の小谷城落城を生き延びた、最後の浅井領主の3人の娘に特別な注意が払われています。

006-011

Gosenken Museum

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】 五先賢の館

【想定媒体】 パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Gosenken Museum

This museum celebrates the accomplishments of the “five sages” (*gosenken*) who were born in Nagahama. The sages (a monk, a painter, a samurai, a tea master, and a poet) lived in different eras and were active in different fields, but they all made notable contributions to Japanese history and culture.

The museum’s displays include personal effects, such as a statue of the Buddhist deity Kannon owned by the samurai Katagiri Katsumoto, and other items, such as a set of white pilgrim’s garb (*shiroshōzoku*) worn by monks engaging in ascetic training. The accompanying panels are in Japanese, and travelers from overseas will most enjoy their visit if accompanied by a certified regional interpreter.

The five sages of Nagahama are:

- Sōō Kashō (831–918). A Buddhist monk known for his ascetic practices, including *kaihōgyō*, a grueling 1,000-day walking pilgrimage of Mt. Hiei.
- Kaihō Yūshō (1533–1615). A painter of the Kanō school who later established his own unique style. His work ranged from austere ink sketches to lavishly gilded landscapes.
- Katagiri Katsumoto (1556–1615). A samurai retainer of the daimyo Toyotomi

Hideyoshi (1537–1598) and a celebrated warrior who distinguished himself at the Battle of Shizugatake in 1583.

• Kobori Enshū (1579–1647). A renowned tea master and designer of gardens who taught *chadō* (the “way of tea”) to shogun Tokugawa Iemitsu (1604–1651).

• Ono Kozan (1814–1910). A poet known for his works of classical Chinese verse who was personally recognized by Emperor Meiji (1852–1912).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

五先賢の館

この博物館は、長浜で生まれた「五賢人」の業績を祝います。賢者(僧侶、画家、武士、茶人、詩人)はさまざまな時代に生き、さまざまな分野で活躍しましたが、彼らは皆、日本の歴史と文化に顕著な貢献をしました。

武士・片桐且元が所有していた仏神観音像などの身の回り品や、修行をする僧侶が身につけている白い巡礼者の衣装(白装束)などの品が展示されています。付随するパネルは日本語で書かれており、海外からの旅行者は、資格を有する地域通訳士を同伴すると、最も訪問を楽しむことができます。

長浜の五賢は、

・相応和尚(831–918)。比叡山の過酷な 1,000 日間のウォーキング巡礼である回峰行を含む苦行で知られていた僧侶。

・海北友松(1533–1615)。狩野派の画家であり、後に独自の画風を開きました。簡素な水墨画から金箔で飾られた豪華な風景まで、その作品は多岐にわたりました。

・片桐且元(1556–1615)。大名豊臣秀吉(1537–1598)の家臣であり、1583 年の賤ヶ岳の戦いで頭角を現した名将。

・小堀遠州(1579–1647)。徳川家光将軍(1604–1651)に茶道を教えた有名な茶の達人であり庭師。

・小野湖山(1814–1910)。明治天皇(1852–1912)によって個人的に認められた中国の古典詩の作品で知られる詩人。

006-012

Odani Castle Sengoku Historical Museum

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】 小谷城戦国歴史資料館

【想定媒体】 パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Odani Castle Sengoku Historical Museum

Today, all that remains of Odani Castle is a series of hilltop earthworks that command sweeping views of Nagahama and Lake Biwa. Before hiking to the top, visitors can tour the museum at the base of the hill, which introduces the history of the fortress and the daimyo who fought to control it.

Odani Castle was the bastion of the Azai family, the samurai lords who governed this part of Ōmi Province in the sixteenth century. In 1570, the Azai were defeated in battle by a powerful rival, Oda Nobunaga (1534–1582), and they retreated to Odani Castle. The two sides clashed for three years, until Nobunaga's vassal Toyotomi Hideyoshi (1537–1598) finally stormed the fortress and captured it.

The castle museum displays maps, diagrams, and dioramas, as well as descriptions (in Japanese) of members of the Azai family, who governed for three generations. The Azai had complicated ties to their enemies: Azai Nagamasa (1545–1573), the last Azai lord, was the brother-in-law of Nobunaga, his nemesis, and Nagamasa's own daughter later married Hideyoshi.

The castle's fortifications lay along two parallel mountain ridges that meet at a 495-meter peak. Hiking the full 5-kilometer circuit takes about two and a half hours.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

小谷城戦国歴史資料館

小谷城跡は、丘の上にある土塁が残っており、そこからは長浜と琵琶湖を一望できます。頂上までトレッキングする前に、訪問者は丘のふもとにある博物館を見学できます。ここでは、要塞の歴史とそれを支配するために戦った大名を紹介しています。

小谷城は、16世紀に近江国のこの地域を統治した武士浅井家の本拠地でした。1570年、浅井家は強力なライバルである織田信長(1534-1582)に戦いで敗れ、小谷城に籠城しました。信長の家臣豊臣秀吉(1537-1598)が要塞を襲撃し、占拠するまで、両者は3年間戦いました。

城の博物館には、地図、図表、ジオラマのほか、3世代にわたって統治した浅井家の記述(日本語)が展示されています。浅井家は敵と複雑な関係にあり、最後の浅井藩主である浅井長政(1545-1573)は宿敵信長の義理の兄弟であり、娘は後に秀吉と結婚しました。

城の要塞は、495メートルのピークで出会う2つの平行な山の尾根に沿ってありました。5キロメートルの外周をハイキングするには、約2時間半かかります。

006-013

Takatsuki Kannon-no-Sato History and Folklore Museum 公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】 高月観音の里歴史民俗資料館

【想定媒体】 パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Takatsuki Kannon-no-Sato History and Folklore Museum

The Kohoku region north of Lake Biwa is known for its many statues of the Buddhist deity Kannon, the Bodhisattva of Compassion. This museum displays about 30 statues of Kannon, some of which are more than 1,000 years old. The statues have survived the centuries thanks to the efforts of local Buddhists, who hid or protected them from destruction during wars and natural disasters.

Kannon is a bodhisattva, a divine being who has achieved the penultimate level of Buddhahood, and she is believed to manifest in various forms. The many statues of Kannon in Kohoku came to be there as a result of the region's location: Kohoku was at a confluence of different Buddhist sects that flowed in from the imperial capitals of Nara and Kyoto, from the Tendai monastery complex on Mt. Hiei, and from the Hokuriku region on the Sea of Japan. Each of these groups brought their own Buddhist statuary. Worship of Kannon became especially widespread beginning in the eighth century, and dozens of Kannon statues can still be found in the area.

Kannon worship in Kohoku began to decline in the fourteenth century, and many statues were relocated or simply shut inside abandoned temples. Later, in the sixteenth century, Kohoku was ravaged by repeated battles between warring samurai factions. During these tumultuous times, townspeople protected the statues from pillaging and destruction by hiding them in caves or burying them in fields and riverbeds. Many of the statues still bear visible signs of damage from this chapter of their history.

Several statues of Kannon remain enshrined in temples in and around Kohoku today,

and visitors can obtain a map of their locations from the museum. The closest, Dōganji Temple, is just a few minutes away, and its statue of the eleven-headed manifestation of Kannon has been designated a National Treasure.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高月観音の里歴史民俗資料館

琵琶湖の北にある湖北地方は、仏神である観音像（慈悲の菩薩）が多いことで知られています。この博物館には、観音像約 30 体が展示されており、中には 1,000 年以上前のもものあります。戦争や災害による破壊から隠したり、保護したりした地元の仏教徒の努力のおかげで、何世紀にもわたって生き延びてきました。

観音は菩薩、つまり悟りの境地の最後から二番目のレベルを達成した神の存在であり、さまざまな形で現れると信じられています。湖北は、奈良や京都の帝都、比叡山の天台寺院、日本海に面した北陸地方から流入するさまざまな仏教宗派の合流点に位置していたことから、多くの観音像が安置されました。これらのグループは、独自の仏教彫像をもたらしました。観音様への信仰は 8 世紀以降に特に盛んになり、この地域には未だに多数の観音像が見られます。

湖北の観音崇拜は 14 世紀に衰退し始め、多くの仏像が移動されたり、単に放棄された寺院の中に閉じこめられました。その後 16 世紀に、湖北は武士間の繰り返しの戦いによって荒廃しました。これらの大変な時期に、町の人々は彫像を洞窟に隠したり、野原や川床に埋めたりして、仏像を略奪や破壊から保護しました。仏像の多くは、この歴史の中で生じた損傷の明らかな痕が残っています。

現在も湖北とその周辺の寺院には、観音像が祀られており、博物館でその場所の地図を入手することができます。最寄りの渡岸寺は博物館からたった数分です。そこの十一面観世音菩薩像は、国宝に指定されています。

006-014

Lake Biwa Maruko-Bune Boat Museum

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】北淡海・丸子船の館

【想定媒体】パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Lake Biwa Maruko-Bune Boat Museum

A 17-meter traditional wooden cargo ship is the central attraction of the Lake Biwa Maruko-bune Boat Museum, which pays tribute to the shipwrights and sailors who made Lake Biwa a vital commercial artery in the days before railways and automobiles.

Marukobune were long, shallow-draft ships with distinctive hulls that incorporated the two halves of a split cedar trunk. Over 1,000 *marukobune* sailed Lake Biwa during the Edo period (1603–1867), carrying goods such as clothing, tobacco, and medicine from Kyoto, as well as firewood, rice, and salt from the Sea of Japan. The museum's carefully restored vessel, one of only two surviving *marukobune*, was part of this trade. Life-sized figures in period costume representing the family that might have owned and crewed the boat show what life was like on board during the Lake Biwa crossing.

The museum also features maps, models, and a detailed diorama of Edo-period Ōura Harbor, which was the home port for many *marukobune*. The Ōura Furusato Museum, located in the same building, is filled with a range of folk artifacts, from agricultural and nautical tools to an antique phonograph.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

琵琶湖 丸小舟の館

代々伝わってきた 17 メートル木造貨物船は、北淡海・丸子船の館の一番の見所です。それは、鉄道や自動車が発達する以前の時代に、琵琶湖を重要な商業動脈にした船大工や船員に敬意を表するものです。

丸子舟は長くて浅い喫水の船で、二つ割にした杉の幹を組み込んだ独特の船体を備えています。江戸時代(1603-1867)には千を超える丸子舟が琵琶湖を航海しており、京都から衣類、タバコ、薬などを運び、また日本海からは薪、米、塩を運んでいました。博物館にある、慎重に復元された丸子船は、現存する 2 隻の船のうちの 1 隻であり、この貿易の一翼を担っていました。時代衣装を着た等身大の人形は、船を所有して乗船した可能性のある家族を表しており、琵琶湖横断中の船上での生活を示しています。

博物館には、多くの丸子舟の母港であった江戸時代の大浦港の地図、模型、詳細なジオラマもあります。隣接する大浦ふるさと資料館には、農機具や船舶工具から、アンティーク蓄音機まで、さまざまな郷土工芸品があります。

006-015

Nagahama Passport

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】長浜おでかけパスポート

【想定媒体】パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Nagahama Passport

The Nagahama Passport grants entry to over 10 different attractions around the city for a one-time cost of 1,500 yen. Passport holders also receive discounts and other perks at local restaurants, hot springs, and hotels.

Nagahama's location at the north end of Lake Biwa made it a crossroads for commerce, culture, and warring samurai armies, and its museums reflect a history that spans many periods and themes. Visitors can use the passport to craft an itinerary that matches their interests, from the battles of Japan's war-torn sixteenth century to anime and manga figurines.

Passport Details:

- Valid for two days from first use
- Admission is limited to one person per site
- Some sites subject to sudden closure (no refunds)
- Additional charges may apply for temporary or special exhibitions
- Customers who book through travel agencies or pay by credit card may not be eligible for discounts or other perks at certain participating businesses

Sample Itineraries

Kids and Parents

(Yanmar Museum, Nagahama Railway Museum, Kaiyodo Figure Museum)

Families arriving at Nagahama Station and traveling on foot can easily reach these three child-friendly attractions. Start the day at the Yanmar Museum, with its game-like interactive exhibits, then climb aboard the locomotives at the Nagahama Railway Museum before mingling with Godzilla and other pop culture icons at the Kaiyodo Figure Museum. A Nagahama Passport saves a total of 700 yen in adult admission fees at these three stops. (Please note: For children ages 15 and under, it is cheaper to pay admission at the gate than to purchase a Nagahama Passport.)

City Center: Ōtemon-Dōri Shopping Street

(Kaiyodo Figure Museum, Nagahama Hikiyama Museum, Daitsūji Temple)

A walkable route in and around the city center. Begin at the Kaiyodo Figure Museum, then head to the Nagahama Hikiyama Museum to see the towering floats of the Nagahama Hikiyama Festival. Finish at Daitsūji Temple with a tour of its many decorative screens and other artworks. Passport holders save a total of 600 yen.

Sengoku Samurai

(Nagahama Castle Museum, Kunitomo Gun Museum, Odani Castle Sengoku Historical Museum)

An itinerary designed for visitors interested in samurai battles, castles, and warfare. This route includes the Nagahama Castle Museum, the Kunitomo Gun Museum, and the Odani Castle Sengoku Historical Museum, located at the base of the Odani Castle ruins. Visitors will need to travel by bus, train, or taxi to complete everything in one day. (Hiking to Odani Castle's 495-meter hilltop peak is an option for outdoor enthusiasts.) To save on admission fees, users should combine this course with other stops on the second day.

Flower-Viewing **Limited to Second and Third Weeks of March**

(Daitsūji Temple, Nagahama Castle Museum, Keiunkan)

This springtime course begins at Daitōji Temple and its display of Japanese andromeda, then continues to the Nagahama Castle Museum, whose adjoining park (Hōkō Park) is home to some 150 plum trees. The day finishes at Keiunkan, a traditional guesthouse that hosts Japan's premier plum bonsai exhibition. To see flowers in bloom at all three sites, users will need to time their visit to coincide with the second and third weeks of March. To save on admission fees, users should combine this course with other stops on the second day.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

長浜パスポート

「長浜パスポート」は、市内 10 以上のアトラクションを 1,500 円という一律価格で入場できる商品です。パスポート所持者は、地元のレストラン、温泉、ホテルで割引やその他の特典も受けられます。

長浜は琵琶湖の北端に位置し、商業、文化が栄え、武士の戦場となり、博物館にはさまざまな時代やテーマの歴史が反映されています。訪問者はパスポートを使用して、戦争で荒廃した 16 世紀の日本の戦いや、アニメやマンガのフィギュアなど、自分の興味に合った旅程を作成できます。

パスポートの詳細:

初回使用から 2 日間有効

入場はそれぞれの施設で一度のみに限られています

場所は予告なく閉館される場合があります(払い戻しなし)

一部の特別展または特別展では、追加料金が必要な場合があります

旅行代理店を通じて予約したお客様やクレジットカードでお支払いいただいたお客様に、割引や特典を提供することはできない場合があります

サンプル旅程

親子

(ヤンマーミュージアム、長浜鉄道スクエア、海洋堂フィギュアミュージアム)

長浜駅に到着し、徒歩で移動する家族は、これら 3 つの子ども向けの施設に簡単に行くことができます。ゲームのような体験型展示があるヤンマーミュージアムで一日をスタートし、長浜鉄道スクエアで機関車に乗り、海洋堂フィギュアミュージアムでゴジラやその他のポップカルチャーの象徴である製品と楽しみましょう。長浜パスポートは、これら 3 つの施設で合計 700 円、大人の入場料を節約

できます(注意：15 歳以下の子どもはパスを購入するよりも、子ども価格の入場料を施設の入り口で支払う方が安価です)。

市内中心部:大手門通商店街

(海洋堂フィギュアミュージアム、長浜曳山博物館、大通寺)

市内中心部とその周辺の歩きやすいコース。海洋堂フィギュアミュージアムから始まり、長浜曳山博物館に向かい、長浜曳山まつりのそびえ立つ曳山をご覧ください。装飾された襖や美術品が多くある大通寺で終わります。パスポートをお持ちの方は合計 600 円お得です。

戦国侍

(長浜城歴史博物館、国友鉄砲ミュージアム、小谷城戦国歴史博物館)

侍、戦い、城に興味のある訪問者のために設計されたコースです。このコースには、長浜城歴史博物館、国友鉄砲ミュージアム、小谷城要塞跡のふもとにある小谷城戦国歴史博物館が含まれます。訪問者は、1 日で全てを完了するためにバス、電車、またはタクシーで移動する必要があります(小谷城の 495 メートルの丘の頂上へのハイキングは、アウトドア愛好家のためのオプションです)。入場料を節約するために、ユーザーは 2 日目にこのコースを他の施設と組み合わせる必要があります。

お花見 **3 月最初の 2～3 週目間限定**

(大通寺、長浜城歴史博物館、慶雲館)

この春のコースは、大通寺とその馬酔木展から始まり、隣接する公園(豊公園)に 150 本の梅林がある長浜城歴史博物館へと続きます。一日は、日本最高の梅盆展を開催する伝統的迎賓館である慶雲館で終わります。開花している 3 つの花の開花を全て楽しむには、ユーザーは 3 月中旬に訪問の時期を合わせる必要があります。入場料を節約するために、ユーザーは 2 日目にこのコースを他の施設と組み合わせる必要があります。

006-016

Nagahama's History

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】長浜地域の歴史背景

【想定媒体】パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Nagahama's History

Nagahama occupies an important crossroads at the northern end of Lake Biwa, Japan's largest lake, and its history has been shaped by the movement of people, ideas, goods, and armies. The city was founded in the sixteenth century, a time when samurai lords battled to control the strategic junction between the eastern and western halves of Honshu. Later, Nagahama prospered as a hub for commerce and transport during the more peaceful Edo period (1603–1867), serving as a stop on the Hokkoku Kaidō highway and as the center of a thriving shipping trade. Boats based in the ports of Ōura and Nagahama carried goods from the cities of Kyoto and Osaka in the southwest to Shiotsu in the north, from which they ferried cargo delivered by land from the Sea of Japan.

Nagahama also has a rich industrial history. The village of Kunitomo became an important center for gun manufacturing in the sixteenth century, and entrepreneurs from the area were pioneers in the development of railways, mass-produced textiles, and diesel engines. The wealth they generated supported cultural activities such as the Hikiyama Festival, which remains a symbol of Nagahama today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

長浜の歴史

長浜は日本最大の湖である琵琶湖の北端という重要な交差点に位置し、その歴史は人、知識、物資、軍の動きによって形作られてきました。

この都市は、武将が本州の東半分と西半分の間の戦略的な交差点を支配するために戦った 16 世紀に設立されました。その後、長浜は平和な江戸時代(1603-1867)には、北国街道の宿場町、また海運業の中心地となり、商業・交通の要衝として栄えました。大浦港や長浜港を拠点とする船は、南西の京都や大阪から北に位置する塩津へと物資を運び、日本海から陸路で運ばれてきた貨物をそこから運んでいました。

長浜には豊かな産業の歴史もあります。国友村は 16 世紀に銃製造の重要な中心地となり、この地域の起業家たちは、鉄道、大量生産の繊維、ディーゼルエンジン発展のパイオニアとなりました。彼らが生み出した富は、今日でも長浜の象徴である曳山祭などの文化活動を支えました。

006-017

Nagahama Hikiyama Festival

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】 曳山祭り

【想定媒体】 パンフレット／Webページ

できあがった英語解説文

Nagahama Hikiyama Festival

Child Kabuki actors perform on extravagantly decorated mobile stages in this lively spring festival, which has been held every year since the eighteenth century. During the festival, ornately decorated floats are pulled in a procession through the city's central shopping district to Nagahama Hachimangū Shrine, stopping along the way for public Kabuki performances.

The wheeled stages, called *hikiyama*, are decorated with gold leaf and intricate wood carvings, and their curved roofs resemble those of Shinto shrines. The actors are amateurs between the ages of 6 and 12, but the costumes, music, and production levels are professional grade. The youthful intensity and raw emotion of the young actors is considered a highlight of their performances. Four stages appear in the festival each year, out of a rotating stable of 12, along with a three-wheeled lead stage festooned with banners and ornamental swords.

Pulling the *hikiyama* through the narrow streets of the city center is a feat in itself: each of the floats is between 6 and 9 meters tall and weighs between 5 and 6 metric tons. Groups of young men (and more recently, women) in festive traditional clothing take on the demanding physical task. The festival runs from April 9 to 17, with Kabuki performances on the evening of the thirteenth, the morning of the fourteenth, and throughout the fifteenth and sixteenth.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

長浜曳山祭り

歌舞伎の子役が贅沢に装飾された移動式ステージで演じる、18 世紀から毎年開催されている活気ある春の祭りです。祭りの期間、華やかに装飾された曳山の行列は、歌舞伎を演じるために途中でとまりながら、市内の中央商店街を通過して長浜八幡宮まで引かれています。

曳山と呼ばれる車輪付きのステージは、金箔や複雑な木彫り、神社のそれに似せた曲がった屋根で装飾されています。役者は 6 歳から 12 歳までのアマチュアですが、衣装、音楽、制作レベルはプロ級です。若い役者の、若々しい激しさと生の感情は、彼らのパフォーマンスのハイライトと考えられています。毎年、12 のうち 4 つの曳山ステージがローテーションで登場し、バナーと装飾用の剣で飾られた三輪の曳山とともに登場します。

市内中心部の狭い通りを通過して曳山を引っ張ることはそれ自体が偉業です：曳山はそれぞれ 6 ～9 メートルの高さで、重さは 5 ～ 6 トンにもなります。お祝いの伝統的な服を着た若い男性(そして最近では女性)のグループが肉体的に厳しいその仕事を引き受けます。祭りは 4 月 9 日から 17 日まで行われ、歌舞伎公演は 13 日の夜、14 日の朝、15 日から 16 日にかけて行われます。

006-018

Nagahama Plum Bonsai Exhibition

公益社団法人長浜観光協会

【タイトル】 盆梅展

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Nagahama Plum Bonsai Exhibition

Potted plum trees bursting with white and pink blossoms fill Nagahama's Keiunkan guesthouse every winter from early January to early March. The event is considered Japan's premier exhibit of *ume* (Japanese plum) bonsai and has been held annually since 1952. Its yearly lineup often includes bonsai trees that are believed to be 400 years old.

Plum bonsai are smaller than free-growing trees, but they are quite large for bonsai; the biggest are almost 3 meters tall. Around 90 of the painstakingly cultivated trees are on display at any given time during the exhibit. They are selected from a collection of about 2,000 plum bonsai, including some 400 different varieties, and presented at peak bloom.

Keiunkan, a guesthouse built in 1887, and its adjacent Japanese garden are open year-round, except during mid-March and on the day immediately before the bonsai exhibition. On snowy evenings, the garden's bamboo lanterns make for an especially memorable sight.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

長浜盆梅展

白やピンクの花が咲き誇る鉢植えの梅の木が、毎年 1 月上旬から 3 月上旬にかけて長浜の慶雲館を埋め尽くします。この展示会は日本最高級の盆梅展と考えられており、1952 年より毎年開催されています。毎年のラインナップには、樹齢 4 百年とされる盆梅がしばしば含まれています。

盆梅は自生する木よりも小さいですが、盆栽としてはかなり大きいです。最大のものは高さ 3 メートル近くあります。丹念に育てた約 90 本の盆梅が、展示期間中いつでも展示されています。約 400 品種を含む約 2,000 の盆梅コレクションから選ばれ、開花のピーク時に展示されます。

1887 年に建てられた御休所である慶雲館と、その日本庭園は、盆梅展の前日と三月中旬を除いて年中無休です。雪の降る夜には、竹灯籠が特に思い出に残る光景になります。

地域番号	007	協議会名	大原野保勝会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
007-001	大歳神社		250	Webページ
007-002	大原野神社		750	Webページ
007-003	金蔵寺		500	Webページ
007-004	三鈷寺		250	Webページ
007-005	十輪寺		750	Webページ
007-006	勝持寺		750	Webページ
007-007	正法寺		750	Webページ
007-008	勝龍寺		250	Webページ
007-009	善峯寺		750	Webページ
007-010	光明寺		500	Webページ
007-011	長岡天満宮		500	Webページ
007-012	柳谷観音楊谷寺		750	Webページ
007-013	乙訓寺		500	Webページ
007-014	宝積寺		500	Webページ
007-015	離宮八幡宮		250	Webページ
007-016	地藏院		500	Webページ
007-017	浄住寺		250	Webページ
007-018	松尾大社		750	Webページ
007-019	聴竹居		750	Webページ
007-020	洛西竹林公園		500	Webページ
007-021	京たけのこ		750	Webページ
007-022	華嚴寺（鈴虫寺）		250	Webページ
007-023	竹の径		250	Webページ
007-024	長峰八幡宮（八幡宮社）		250	Webページ
007-025	フジバカマ畑		250	Webページ
007-026	ヒマワリ畑		250	Webページ
007-027	勝竜寺城公園		500	Webページ
007-028	恵解山古墳		500	Webページ

007-001

Otoshi Jinja Shrine

大原野保勝会

【タイトル】 大歳神社

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Otoshi Jinja Shrine

Otoshi Jinja Shrine is said to have been founded in 718, while the current Honden (Main Sanctuary) dates to 1690. The shrine is dedicated to the deities Otoshi no Okami, Ishitsukuri no Okami, and Toyotamahime no Mikoto. Otoshi no Okami is the deity associated with the passage of time, as well as agriculture and abundant harvests. He is also believed to protect people from misfortune. Ishitsukuri no Okami is the ancestral deity of an influential clan that for generations made stone coffins. It is said that in the first century, when the wife of Emperor Suinin, the 11th emperor of Japan, passed away, the clan presented a coffin for her and received the highly prestigious government rank and hereditary title of Ishitsukuri Omuraji (“master stoneworkers”) from the emperor. Toyotamahime no Mikoto, the daughter of a sea deity, is believed to be the paternal grandmother of Emperor Jinmu, the first emperor of Japan.

Autumn Festival and Shrine Grounds

The shrine’s autumn festival takes place on the third Sunday of October and includes prayer services and various types of offerings from the parishioners. Since the middle of the Edo period (1603–1867), the head of the Kongo school of Noh has dedicated the ancient sacred performance *Okina* as a prayer for peace and prosperity. In recent years, it is followed by another Noh chant titled *Kaya no Mori* (Forest of Kaya Trees). The shrine precincts have long been called *Kaya no Mori* because of the many coniferous *kaya* (Japanese nutmeg-yew) trees that once covered the grounds. In the past, oil extracted from their seeds was used as fuel for lamps and lanterns. Several *kaya* trees still grow on the premises, and more saplings have been planted to restore the shrine’s former appearance.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大歳神社

大歳神社は718年の創建と言われ、現在の本殿は1690年に建立されました。ご祭神は大歳大神、石作大神、豊玉姫命です。大歳大神は時の流れを司り、農耕と五穀豊穡の神とされています。また、厄除けの神としても信仰を集めています。石造大神は代々石棺などを製作してきた豪族の祖神です。1世紀、日本の第11代天皇である垂仁天皇の妻である皇后が崩御した際、この一族は石棺を献上し、天皇から「石作大連」という非常に名誉ある官位を意味する姓を賜ったと言われています。海の神の娘である豊玉姫命は、日本の初代天皇である神武天皇の父方の祖母であると信じられています。

秋祭りと境内

神社の秋祭は10月の第3日曜日に行われ、氏子によって、祈祷やさまざまなご進物が奉納されます。江戸時代（1603年～1867年）中期以降、平和と繁栄の祈りを込めて能楽の金剛流宗家による、古くから伝わる神聖な演目「翁」を奉納してきました。最近では、それに続き「栢の森」というもう一つの謡も披露されるようになりました。境内にはかつて針葉樹の栢が多く生い茂っていたことから、古くから「栢の森」と呼ばれています。その昔、境内の栢の実から絞った油は燈明の燃料として使用されていました。今でも境内にいくつかの栢の木が見られ、神社のかつての姿を取り戻すために苗木が植えられています。

007-002

Oharano Jinja Shrine

大原野保勝会

【タイトル】 大原野神社

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Oharano Jinja Shrine

Oharano Jinja Shrine is also called the “Kasuga Shrine of Kyoto” due to its historical connection to the famous Kasuga Taisha Shrine in Nara. The deity worshipped at Kasuga shrines is Kasuga Daimyojin, who is traditionally depicted riding a white deer. Oharano Shrine is known for its deer-themed items, including statuary, amulets, and votive tablets. The grounds are a popular spot for viewing cherry blossoms, irises, water lilies, and maple leaves. Two teahouses, one along the entrance path and one near the parking lot outside the first torii gate, offer traditional mugwort sweets to enjoy as a light snack after the shrine visit or to take home.

History

There are many Kasuga shrines across the country. Among them, Oharano Shrine is considered the first to have been established by ritually welcoming the deity Kasuga Daimyojin from Kasuga Taisha, the head shrine. In 784, the capital of Japan was moved from Heijokyo (present-day Nara) to Nagaokakyo. Oharano Shrine was built by the noble Fujiwara family for Kasuga Daimyojin, their guardian deity, at a site chosen for its proximity to the new seat of government. The Fujiwara family was extremely influential at court for centuries: many of the men held high-ranking positions, and many of the women became empresses or imperial consorts. Much like at Kasuga Taisha Shrine, prayers were offered at Oharano Shrine for the country’s peace and prosperity. The shrine continued to fulfill this role even after the capital was moved to Heiankyo (present-day Kyoto) in 794.

Kasuga Daimyojin and the Fujiwara Family

Kasuga Daimyojin represents four divinities: the deity of thunder Takemikazuchi no

Mikoto, the warrior deity Iwainushi no Mikoto, the Fujiwara family ancestral deity Ame no Koyane no Mikoto, and his wife Hime Okami. The son of Ame no Koyane no Mikoto, Ame no Oshikumone no Mikoto, is often worshipped alongside them. All these deities are believed to have played important roles in the creation of Japan. They are said to answer prayers related to political affairs, protection, wisdom, and auspicious marriages for women.

Throughout history, Oharano Shrine benefited from Fujiwara family support and imperial patronage. Emperor Montoku (827–858), whose grandfather was the head of the Fujiwara family, ordered the construction of several grand worship halls in 850. It became a tradition for the Fujiwara to pray for newborn daughters at Oharano Shrine, hoping that they would be chosen as empresses or imperial consorts. If the prayer was answered, an elaborate procession would visit the shrine to express gratitude to the deities. Such processions are mentioned in historical records, poems, and novels, including *Genji monogatari* (*The Tale of Genji*), written by the lady-in-waiting Murasaki Shikibu (973?–1014?), a Fujiwara branch family member. When the prominent poet Ariwara no Narihira (825–880) accompanied a Fujiwara lady on her pilgrimage, he wrote the following poem:

The deities of Oharano Shrine at the base of Mt. Oshio
Must recall the age of the gods themselves
Seeing our grand procession on this day

Shrine Grounds

The path through the torii gates and into the shrine grounds goes past the Koisawa Pond and its striking vermilion bridge. On the far bank is Wakamiya Shrine, dedicated to the deity Ame no Oshikumone no Mikoto. The fenced-off weeping cherry tree nearby is called Senganzakura (“thousand-eye cherry tree”) for the many large flowers that bloom in round clusters on its branches. The tree has another nickname, “fleeting-dream cherry tree,” inspired by the fact that its peak bloom period only lasts three days. It is said that a thousand wishes will come true for those lucky enough to see Senganzakura in full bloom.

Farther along the approach is a water basin for ritual purification, where the water pours from the mouth of a bronze deer. The sumo ring on the left-hand side of the path is used for Kamizumo, a ritual wrestling competition for both adults and children that takes place during the Mitakarisai Festival in September. The celebration is held to thank the deities for the good harvest and has continued uninterrupted since 1717.

Main Sanctuary

Beyond the third torii gate on the shrine's primary path is the main sanctuary, which dates to 1822. It is built in the *kasuga-zukuri* style, with a central altar for offerings and prayers flanked by two shrine halls on either side, each housing one of the four divinities of Kasuga Daimyojin. Tall cypress trees behind the complex create a natural contrast with the classic white and vermilion structures. Several subsidiary shrines on the left are dedicated to deities offering protection from diseases and misfortune. They are also believed to grant abundant harvests and commercial success, good health, longevity, and conception.

Sacred Deer Messengers

According to legend, Kasuga Daimyojin appeared to an ancestor of the Fujiwara family riding a white deer, so these animals came to be regarded as sacred messengers of the deity. For this reason, stone statues of a male and a female deer guard the main sanctuary of Oharano Shrine instead of the usual mythical *komainu* figures. Deer themes can also be seen in the shrine's *omamori* amulets, *goshuincho* seal books, *ema* votive tablets, and *omikuji* fortunes.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大原野神社

大原野神社は、奈良の有名な春日大社との歴史的な繋がりから「京春日」とも呼ばれています。春日神社のご祭神は春日大明神で、この神様は伝統的に白鹿に乗った姿で描かれています。大原野神社は鹿をモチーフにした彫像やお守り、絵馬などで知られています。境内は桜やカキツバタ、睡蓮、そしてモミジの名所として人気です。参道沿いと、鳥居の外の駐車場近くにある2店舗の茶屋では、伝統的なよもぎ団子を持ち帰ったり、または参拝後の軽食として楽しむことができます。

歴史

現在、全国にはたくさんの春日神社があります。その中でも大原野神社は総本社である春日大社から春日大明神が遷座された最初の神社と考えられています。784年、日本の都は平城京（現在の奈良）から長岡京に遷都されました。大原野神社は、貴族である藤原氏の守護神である春日大明神を祀るために新しい中央政府に近い場所で建てられました。藤原氏一族は、何世紀にも渡って朝廷で強い影響力を持ち、多くの男性は高位に属し、多くの女性は皇后や中宮になりました。春日大社と同様に、大原野神社は国家の平和と繁栄を祈願する役割を担いました。都が794年に平安京（現在の京都）に再び遷都された後も大原野神社はその役目を果たし続けました。

春日大明神と藤原氏

春日大明神は、雷の神・建御賀豆智命（たけみかづちのみこと）、軍神・伊波比主命（いわいぬしのみこと）、藤原氏の祖神・天之子八根命（あめのこやねのみこと）とその妻の比賣大神（ひめおおかみ）という四柱の神様を表しています。天之子八根命（あめのこやねのみこと）の息子、天押雲根命（あめのおしくもねのみこと）はしばしば一緒に祀られています。これらの神様はいずれも日本の建国に重要な役割を果たしたと考えられています。この神々は政治や守護、知恵、そして女性の良縁に関する祈りにご利益があると言われてしています。

大原野神社は歴史を通じて、藤原氏の支援と皇室の庇護を受けてきました。祖父が藤原氏の当主であった文徳天皇（827年～858年）は、850年に壮麗な社殿を造営しました。藤原氏では娘が生まれると、皇后または中宮に選ばれることを願って大原野神社で祈ることが伝統となりました。願いが叶うと、神々に感謝を伝えるため、立派な行列を伴い参拝するようになりました。このような行列については、藤原分家の女官、紫式部（973年?～1014年?）が書いた『源氏物語』を含む歴史的な記録や詩、小説にも登場しています。著名な歌人、在原業平（825年～880年）は、藤原家の婦人の参拝に同行したとき、次のような歌を詠みました。

（訳文の直訳）

小塩の山のふもとにある大原野神社の神々
我々の今日の大行列を見て
きっと神々の時代のことを思い出すことでしょう

（ご参考用：原文）

大原や
小塩の山も
けふこそは
神代のことも
おもひいづらめ

境内

鳥居をくぐって神社の境内に入る参道には、鯉沢の池やそこにかかる風情のある朱色の橋があります。対岸には天押雲根命を祀る若宮神社があります。近くにある柵で囲まれたしだれ桜は、枝に丸い大きな花房がたくさん咲くことから「千眼桜」（英訳：千の目がある木）と呼ばれています。見頃の期間が3日間しかないことから「幻の桜」とも呼ばれています。満開の千眼桜を見られる人は、千の願いが叶うと言われています。

参道のさらに先には、水が銅製の鹿の口から流れる手水舎があります。そして左側に相撲場もあり、この相撲場は、9月の御田刈祭で行われる大人も子どもも参加する「神相撲」の神事で使用されます。この祭は豊作を神に感謝するために開催され、1717年以来途切れることなく続いています。

本殿

参道にある三番目の鳥居の先には、1822年に建てられた本殿があります。本殿は春日造りの様式で建てられており、中央には奉納と祈祷のための台があり、そしてその両側には二棟ずつ、合計四棟の社殿が設けられています。そして、社殿のそれぞれに春日大明神の一柱が祀られています。本殿の建物の背後にある背の高いヒノキの木は、古典的な建築物の色合いである白色・朱色と自然なコントラストを作り出しています。左側にいくつかの末社があり、病氣平癒や厄除け、五穀豊穰、商売繁盛、健康、延命長寿、そして子授けの神様が祀られています。

鹿の使い

春日大明神は、藤原氏の祖先の元に白鹿に乗った姿で現れたという伝説があり、鹿が神の使いとされるようになりました。一般的に見られる神話上の獣である狛犬の代わりに雄鹿と雌鹿の石像が大原野神社の本殿を守っているのはこのためです。神社のお守りや御朱印帳、絵馬、そしておみくじも鹿をモチーフとしたものとなっています。

007-003

Konzoji Temple

大原野保勝会

【タイトル】金蔵寺

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Konzoji Temple

Konzoji Temple is located halfway up Mt. Oshio, providing an opportunity to explore the precincts while enjoying the natural scenery of the Oharano area. The temple is especially popular in autumn when the maple trees on the grounds turn brilliant red and orange, as the high elevation causes the leaves to change color earlier than in many other locations. Konzoji was founded in 718, but was lost to fire during the Onin War (1467–1477). Like many other temples in the area, it was rebuilt in 1691 with financing provided by Keishoin (1627–1705), mother of the fifth Tokugawa shogun, Tsunayoshi.

Temple Grounds

A visit to Konzoji begins by passing through the Niomon Gate and ascending a stone stairway to the temple office, bell tower, pond, and the Gomado Hall. The temple's Hondo (Main Hall) is located at the top of another flight of stone steps. It enshrines the principal object of worship: a statue of Kannon, the bodhisattva of compassion, depicted in an eleven-faced, thousand-armed form. The Hondo is generally closed to the public, so people pray to the bodhisattva from outside the hall.

To the west of the Hondo is the route to Hayama Jinja Shrine and Keishoin Mausoleum, where a lock of Keishoin's hair is said to be enshrined. To the east of the Hondo is a vermilion torii gate and a path that leads to the Atago Daigongen Hall, which houses a statue of the bodhisattva Shogun Jizo. It was originally worshipped on Mt. Atago and is believed to guard against fire and help achieve victory in battle. The sculpture is available for public viewing only on April 23rd. A replica is enshrined in the Gomado Hall.

A short walk farther east from the Hondo leads to a stairway to the Kaisando (Founder's Hall) and to Shimonogawa Benzaiten, a shrine in an octagonal stone enclosure. An observation deck at the end of the path offers a panorama of the Kyoto basin and the surrounding mountains. Near the lookout point is an old tea house with several simple decorations, such as *maneki neko* (beckoning cat) and plump tanuki (raccoon dog) figurines. Many more ceramic tanuki statuettes can be spotted throughout the temple grounds.

Enjoying the Natural Scenery

The mountainside location of Konzoji makes it well suited for enjoying nature and the changing seasons. In spring, a cherry tree next to the pond, said to have been planted by Keishoin, and wild cherries on the mountain slopes add touches of soft pink and white to the scenery. The numerous maple trees growing on the grounds and lining the stone stairways are emerald green in spring and summer and turn vivid orange, red, and yellow in autumn, creating a rich palette of color.

Please note that the mountain paths can be slippery in the rain with a possibility of mudslides, so visiting the temple should be avoided in poor weather.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

金蔵寺

小塩山の中腹に位置する金蔵寺では、大原野地域の自然を楽しみながら境内を散策することができます。標高が高く、他の場所よりも早く紅葉するため、境内のもみじが赤やオレンジに色づく秋は特に人気があります。金蔵寺は718年に創建されましたが、応仁の乱（1467年～1477年）で焼失してしまいました。この地域の他の多くの寺院同様、この寺も第5代徳川将軍であった綱吉の母である桂昌院（1627年～1705年）の資金援助を受けて1691年に再建されました。

境内

金蔵寺の参拝は、仁王門をくぐり、石段を上がり、寺務所や鐘楼、池、そして護摩堂へ進むところから始まります。本堂はさらに石段を登った先にあります。その中には、本尊である十一面千手観音菩薩像（慈悲の菩薩）が安置されています。本堂は通常非公開ですので、人々はお堂の外から菩薩に祈りを捧げます。

本堂の西側には葉山神社と、桂昌院の髪の毛が祀られていると言われている桂昌院御廟への道があります。本堂の東側には朱色の鳥居があり、勝軍地藏菩薩像が安置されている愛宕大権現本殿へ向かう小道が続いています。もともと愛宕山で信仰され、火除けと戦勝のご利益があると信じられています。勝軍地藏菩薩像は4月23日のみ一般公開されます。護摩堂には模刻が安置されています。

本堂から東へ少し歩くと、開山堂への階段と、八角形の石造りの囲いの中に下の川弁財天があります。道の突き当たりに展望台があり、京都盆地と周囲の山々を一望することができます。展望台の近くには、招き猫やぼっちゃりとしたタヌキの置物などの素朴な装飾が特徴の古い茶屋があります。寺院の境内では、他にも多くの陶器製のタヌキの置物を見ることができます。

自然景観を楽しむ

山腹に位置する金蔵寺は、自然や四季の移ろいを楽しむ場所として最適です。春には、池の傍にある桂昌院によって植えられたと言われている桜の木と山の斜面にある野生の桜が、風景に柔らかなピンクと白の色合いを添えます。境内や石段沿いに植えられた多数のもみじの木は、春から夏はエメラルドグリーン、そして秋にはオレンジ、赤、黄色と鮮やかに色づきます。

注意事項：雨の日の山道は滑りやすく土砂崩れの可能性もあるので、悪天候時の参拝は避けてください。

007-004

Sankoji Temple

大原野保勝会

【タイトル】 三鈷寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Sankoji Temple

Sankoji Temple on the slope of Mt. Kamose is best known for the scenic view it commands of the Kyoto basin. The vista encompasses Mt. Hiei and the eastern Higashiyama mountains, the Kitayama mountains in the north, Kyoto itself, and the cities of Uji and Kizugawa. The temple is quite popular to visit in autumn when maple trees in the area turn red and orange. In addition, Sankoji is located next to Yoshiminedera Temple, so they can be easily enjoyed in one trip.

A Place of Many Buddhist Teachings

The temple's origin dates to 1074, when the Tendai school monk Gensan (983–1099) built a hermitage that he named Kitao Ojoin. In 1213, Shoku (Seizan Kokushi, 1177–1247), the founder of the three Seizan schools of Buddhism, revived the hermitage as a training hall to practice *nenbutsu*, the continuous recitation of the name of Amida Buddha. Shoku named the temple Sankoji, as the mountains behind the temple seemed to resemble the three-pronged ritual vajra (*sankosho*). In 1951, Sankoji separated from the Tendai school and became the head temple of an independent Seizan school, embracing and teaching doctrines of the Tendai, Shingon, Risshu, and Jodo schools.

Hondo (Main Hall) and Its Treasures

It is difficult to enshrine the temple's principal object of worship, the Buddha's Eye Mandala, in the current Hondo, so a golden statue of Fudo Myo-o (the Immovable Wisdom King) presently serves as the principal image. The sculpture used to stand in front of the Buddha's Eye Mandala before the Hondo was reconstructed in its current location. Other statues portray Amida Buddha on a pedestal with *sankosho* motifs, Prince Shotoku (574–622), Gensan, and Kukai (Kobo Daishi, 774–835), the founder of

Shingon Buddhism. Ketaibyō Mausoleum in the right wing enshrines a statue of Shōku placed on a high pedestal that conceals memorial stone pagodas for Shōku and the poet Renshō (1178–1259), his disciple.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

三鈷寺

鴨瀬山の中腹にある三鈷寺は、京都盆地を一望できることでよく知られています。この寺は左側には比叡山と北山、前方には東山連峰、そして右側には南部の宇治市や木津川市までを見晴らせる景色を有しており、周囲のもみじの木々が赤やオレンジ色に染まる秋は特に人気があります。また、三鈷寺は善峯寺の隣に位置しているので、一度の旅行でこの2カ所の寺を気軽に楽しむことができます。

多くの仏教の教えが伝わる場所

この寺の起源は、1074年に天台僧の源算上人（983年～1099年）が庵を建立し、北尾往生院と名付けたことから始まります。1213年、西山三派の流祖證空（西山国師、1177年～1247年）が念仏（阿弥陀如来の名をお唱えする）道場として再興しました。證空は、寺院の背後にある山が三叉の仏具である三鈷杵に似ていることから、三鈷寺と改名しました。1951年に天台宗から西山宗の本山として独立し、天台・真言・律・浄土の四宗の教えを説いています。

本堂とその宝物

本来の御本尊である仏眼曼荼羅は、現在の本堂に安置するのが難しいですので、現在、金色不動明王像を御本尊としてお祀りしています。この仏像は今の場所に本堂が移築する前に仏眼曼荼羅の御前立ちとしてお祀りされていました。他の仏像としては、三鈷杵をモチーフにした台座上の阿弥陀如来、聖徳太子（574年～622年）、源算、そして真言宗の開祖である空海（弘法大師、774年～835年）が安置されています。本堂の東側に華台廟があり、證空と彼の弟子である歌人の蓮生（1178年～1259年）の五輪塔が納められている高い台座の上に、證空の像が安置されています。

007-005

Jurinji Temple

大原野保勝会

【タイトル】 十輪寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Jurinji Temple

Jurinji Temple in the foothills of the Nishiyama mountain range along Kyoto's western border is known as a place to pray for conception and safe childbirth. It once served as the retirement temple of Ariwara no Narihira (825–880), a prominent ninth-century poet. In addition to its famous early blooming cherry tree, other attractions in the quiet, secluded temple include two gardens, painted sliding panels in one of the halls depicting scenes from *Ise monogatari* (*The Tales of Ise*), a small memorial pagoda dedicated to Narihira, and a traditional salt kiln.

Brief History

The temple was founded in 850 by Emperor Montoku (827–858), who enshrined a wooden statue of Enmei Jizo Bodhisattva (“Jizo of long life”) to pray for the safe birth of his child with his consort Fujiwara no Akirakeiko (829–900). The emperor's prayers were answered, and their son later ascended the throne. The Jizo statue is said to have been carved by Saicho (Dengyo Daishi, 767–822), the founder of Tendai Buddhism in Japan.

Jurinji burned down during the Onin War (1467–1477), a conflict over shogunate succession that damaged most of Kyoto. The temple lay in ruins until the Kanbun era (1661–1673), when it was rebuilt by the noble Kasanoin family. Jurinji became their family memorial temple (*bodaiji*), tasked with holding burial rituals, caring for family graves, and praying for their souls after death.

Retirement Temple of Ariwara no Narihira

Narihira was born a prince, the grandson of two emperors. When his father was implicated in an attempted coup, the infant Narihira was stripped of his rank and given a commoner name. Despite this, he served in various positions at court and was considered a competent official, capable warrior, skilled horseman, and talented *waka* poet. He was also known for his good looks, and his many rumored affairs, including romances with an emperor's consort and a high priestess of Ise Jingu Grand Shrine, are thought to have inspired *The Tales of Ise*, a classic collection of poems and related narratives in prose.

According to temple legend, Narihira spent his later years in seclusion at Jurinji. His last poem was among many of his works chosen for the tenth-century anthology *Kokin Wakashu* (Collection of Poems Ancient and Modern), in which he was also named one of the Six Immortal Poets.

Long ago I heard
That this is the road we must all
Travel in the end,
But I never thought it might
Be yesterday or today.
(Translated by Donald Keene)

Temple Grounds

The Hondo (Main Hall), built in 1750, is a designated Tangible Cultural Property of Kyoto Prefecture. It has a rare "palanquin-style" roof, shaped like the curved roofs of litters once used to transport high-ranking members of court. The Enmei Jizo statue is hidden from view in a miniature altar flanked by several other sculptures and is only accessible for public viewing once a year, on August 23rd. There are two more Buddhist statues on either side of the main altar, and many *oshie* ("padded cloth picture") offerings are displayed throughout the hall.

A roofed walkway connects the Hondo to the Kuri (monks' quarters and kitchen). Two tatami-mat rooms are used to exhibit temple treasures and art, such as copies of *The Tales of Ise* and the late-eighteenth-century guidebook *Miyako meishozue* (Famous

Sights of the Capital). The sliding screen panels in the rooms are decorated with large paintings of scenes from *The Tales of Ise* depicting nobles in rich robes, musicians, and servants.

Between the Hondo and the Kuri is the Sanpo Fukan (“three-way view”) Garden, thought to have been created by Kasanoin Tsunemasa (1700–1771), the 27th head of the Kasanoin family. The courtyard garden is designed to appear slightly different depending on whether the viewer is standing, sitting, or lying down. It contains the famous Narihira-zakura, a 200-year-old weeping cherry tree that flowers in early spring, draping its branches over the tiled roofs. A tea room built in the style favored by Tsunemasa, with various objects of art displayed inside, also looks out onto the garden.

A path leading up the hill behind the temple halls offers a view of the unusual roof of the Hondo and Narihira-zakura cherry tree from above. A small stone pagoda located midway up the slope is said to mark Narihira’s gravesite. At the top of the hill is a *shiogama*, a stone salt-making kiln built in the center of a large earthen pit. It is a replica of the kiln that Narihira is said to have used when living at Jurinji. Aristocrats of the Heian period (794–1185) would boil seawater until only salt remained, enjoying the scent and the imagery of the sea, sometimes adding pigments to the roasting salt to color the smoke. Visitors can observe this elegant pastime, called *shioyaki*, during the Shiogama Kiyomesai purification ceremony held at Jurinji on November 23rd.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

十輪寺

西山の麓に位置する十輪寺は、懐妊・安産祈願の寺として知られています。かつては、9世紀の有名な歌人、在原業平（825年～880年）の隠居寺として使われていました。早咲きの桜の名所であるほか、人里離れた静かなこの寺院には、2カ所の庭園や伊勢物語の場面を描いた襖、そして業平の供養塔や伝統的な塩窯などの見どころがあります。

略歴

この寺院は、850年に文徳天皇（826年～858年）によって、妃・藤原明景子（ふじわらのあきらけいこ、829年～900年）との子の安産を祈願し、木造延命地藏菩薩(英語：Jizo of long

life)を祀り、創建されました。天皇の祈りは聞き届けられ、後にその息子が天皇の座に就きました。この地蔵尊は、天台宗の開祖である最澄（伝教大師、767年～822年）の作と伝えられています。

十輪寺は、京都の大部分に被害をもたらした将軍の継承を巡る争いである応仁の乱（1467年～1477年）で焼失しました。寛文時代（1661年～1673年）に貴族の花山院家によって再建されるまで廃墟と化していました。十輪寺は花山院家の菩提寺となり、埋葬儀式を執り行い、墓を管理し、死後の冥福を祈る役割を果たしました。

在原業平の隠居寺

業平は二人の天皇の孫であり、皇子として生まれました。彼の父親が政変未遂に連座したことで幼い業平は臣籍降下となり、平民としての姓を与えられました。それにも関わらず、業平は宮廷で様々な役職を歴任し、優れた朝廷の役人、有能な戦士、熟練の騎手、そして才能あふれる歌人として知られていました。彼はハンサムな男性として知られており、天皇の妃や伊勢神宮の斎宮とのロマンスなどの多くの恋の噂は、古典的な詩集であり関連する散文物語でもある『伊勢物語』に影響を与えたと考えられています。

寺伝によれば、業平は晩年を十輪寺で隠遁したとされています。10世紀の歌集『古今和歌集』には彼の最後の和歌を含む多くの作品が選ばれ、その歌集における六歌仙の1人にも彼は指名されています。

つひに行く

道とはかねて

聞きしかど

昨日今日とは

思はざりしを

（ドナルド・キーン訳）

境内

本堂は1750年に建てられた、京都府の指定有形文化財です。珍しい鳳輦形の屋根は、かつて宮廷の要人を運ぶために使われていた輿の湾曲した屋根のような形をしています。延命地蔵尊は、他のいくつかの仏像に囲まれた小さな祭壇の中に祀られており、年に1回、8月23日に一般公開されます。主祭壇の両側にはさらに2体の仏像があり、堂内には多数の奉納された押絵が展示されています。

本堂と庫裏（僧房と台所）は屋根付きの通路で繋がっています。2部屋の畳の部屋には、伊勢物語や18世紀後半のガイドブック「都名所図会」などの寺宝や美術品が展示されています。襖は、

雅な衣をまとった貴族や音楽家、使用人などを描いた『伊勢物語』の場面の大きな絵で彩られています。

本堂と庫裏の間には、第27代当主・花山院常雅（1700年～1771年）の作庭とされる「三方普感の庭」があります。この中庭は見る人が立ったり、座ったり、寝ころんだりすることで、少しずつ違った表情を見せてくれます。春先に花を咲かせ瓦屋根に枝を垂らす、樹齢200年の有名な業平桜があります。庭園の横には、室内に様々な美術品が展示されている常雅好みの茶室もあります。

寺院のお堂裏の坂道から、珍しい本堂の屋根と業平桜を眺めることができます。坂道の途中に、業平の墓所を示すとされる小さな石塔があります。丘の上の大きな土坑の中央に造られた石製の塩釜は、業平が十輪寺に住んでいた頃に使われたとされる塩釜を再現したものです。平安時代（794年～1185年）の貴族は、海水を塩だけが残るまで沸騰させ、海の香りとイメージを楽しみ、時には煙に色を付けるために焼き塩に顔料を加えました。来訪者は11月23日の塩釜清め祭にて、塩焼きと呼ばれるこの優雅な遊びを見ることができます。

007-006

Shojiji Temple

大原野保勝会

【タイトル】 勝持寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Shojiji Temple

The location of Shojiji Temple near the base of Mt. Oshio makes it a popular destination to enjoy the natural scenery and changing seasons. In spring, the 100 cherry trees on the grounds bloom white and light pink. One of them is especially famous as the third-generation descendant of a tree planted by the renowned poet-monk Saigyo Hoshi (1118–1190). This cherry tree is known as Saigyo-zakura and is the reason why Shojiji is often referred to as the “temple of flowers.” The many maples in the precincts and on the surrounding mountain slopes create a verdant landscape in summer and fill the area with brilliant colors in autumn. Winter’s subdued palette makes for a contemplative scene, and at times, snow blankets the grounds in pure white. Shojiji also houses a diverse collection of well-preserved Buddhist statuary. Please note that the temple is closed in February.

Brief History

According to temple legend, Shojiji was originally founded in 679 by the ascetic En no Gyoja (634–701?) and rebuilt on a larger scale in 791 by Saicho (Dengyo Daishi, 767–822), the founder of Tendai Buddhism in Japan. In 838, the temple grounds encompassed 49 halls, pagodas, and other buildings. However, like much of Kyoto, Shojiji was almost completely destroyed during the Onin War (1467–1477), a shogunate succession conflict. The only structure that survived is the ninth-century Niomon Gate, which stands about 500 meters to the southeast, marking the beginning of the main approach to the temple. Most of the current buildings date to the late sixteenth century.

Rurikoden Hall

Nineteen statues of different styles, sizes, and historical periods are enshrined in the Rurikoden Hall. The temple's principal object of worship is a sculpture of Yakushi Buddha, the deity of healing, portrayed with the right hand reaching for the medicine jar held in the left palm. In front of the pedestal is a much smaller figure of the same Buddha encased in glass, said to have been discovered inside the larger statue.

On both sides of the main object of worship are sculptures of the Twelve Divine Generals, each with one of the twelve animals of the Chinese zodiac on the head. Flanking the Yakushi Buddha images are statues of Gakko and Nikko, the bodhisattvas of moonlight and sunlight, respectively. Gakko Bodhisattva holds a white disc that symbolizes the moon, and Nikko Bodhisattva holds a red disc representing the sun. Together, they serve as attendants to Yakushi Buddha.

In the far corners of the hall are two 3-meter-tall sculptures of Nio guardians, which were originally located in the Niomon Gate, protecting the entrance to the temple. To the front at the left side of the hall is a seated statue of Saigyo Hoshi, a warrior and poet who became a monk at Shojiji. The Nio statues and both Yakushi Buddha statues are nationally designated Important Cultural Properties.

A wooden plaque commissioned by Emperor Daigo (885–930) in 927 is displayed at ground level. It is carved with the temple's name based on characters written by the eminent calligrapher Ono no Michikaze (894–966). A frog figurine next to the plaque is a reference to the tale in which Michikaze rediscovered the importance of perseverance by watching a frog repeatedly try to climb a willow branch. To the right of the plaque is a letter of authentication by Konoe Iehiro (1667–1736), a high-ranking court noble, calligrapher, tea master, and scholar.

Amidado and Fudodo Halls

The Amidado Hall next to the Rurikoden is devoted to the worship of Amida, the Buddha of Infinite Light and Life. At the top of a stone stairway is the Fudodo Hall dedicated to Fudo Myo-o, the Immovable Wisdom King, a fierce-looking deity believed to protect and guide the faithful with stern love. At Shojiji, Fudo Myo-o is

also associated with healing, especially eye-related ailments. At the back of the hall is a stone sculpture of Fudo Myo-o enshrined in a small niche in the retaining wall.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

勝持寺

勝持寺は小塩山の麓に位置し、自然景観や四季の移ろいを楽しめる人気の観光スポットです。春には境内に100本の桜が白と淡いピンク色に咲き誇ります。そのうちの1本は、高名な歌人で僧侶の西行法師（1118年～1190年）が植えた木の3世として特に有名です。西行桜として知られ、それにちなんで勝持寺はしばしば「花の寺」と呼ばれるようになりました。境内や周囲の山々の斜面にはたくさんのもみじの木が植えられ、夏には緑豊かな景観をつくり出し、秋には鮮やかな色彩で辺りを埋め尽くします。冬は落ち着いた風景の中で静かに物思いにふけることができ、時には積雪で境内が真っ白に染まることもあります。また勝持寺には、保存状態の良い多様な仏像が所蔵されています。なお、2月は寺院が閉まっているのでご注意ください。

略史

寺伝によれば、この寺院はもともと679年に修行僧である役行者（634年～701年?）によって創建され、791年に天台宗の開祖である最澄（伝教大師、767年～822年）によって規模を拡大して再建されました。838年当時、その敷地内には49のお堂や塔、そして他にも建物がありました。しかし、京都の大半の地域同様、勝持寺も将軍の継承争いである応仁の乱（1467年～1477年）でほとんどが破壊されました。唯一残った建造物は、南東約500メートルに建つ9世紀に建てられた仁王門で、寺院の主要な参道の始まりの場所を示しています。現在のほとんどの建物は16世紀後半に建てられたものです。

瑠璃光殿

瑠璃光殿には、様式、大きさ、時代が異なる19体の仏像が安置されています。この寺の本尊は、治癒の神である薬師如来像で、左手に持った薬瓶に右手を伸ばす姿が表現されています。台座の前には、その薬師如来像を小さくした仏像がガラスに収められており、これは大きな仏像の内部で発見されたと言われています。

本尊の両側には十二神将の仏像があり、それぞれの頭には十二支のモチーフが置かれています。薬師如来像の両側には、月光と日光（それぞれ、月光と太陽光の菩薩）の仏像が安置されています。月光菩薩は月を表す白い円盤を持ち、日光菩薩は太陽を表す赤い円盤を持っています。彼らは共に薬師如来の脇侍として安置されています。

お堂の奥の隅には、高さ3メートルの仁王像が2体建っています。これらは、もともと寺院の入り口を守るために仁王門にあったものです。お堂の左手正面には、勝持寺で僧侶となった武士であり歌人でもある西行法師の坐像が安置されています。仁王像と薬師如来像は、どちらも国の重要文化財に指定されています。

927年に大御所天皇（885年～930年）の勅により納められた木造扁額が床上に展示されています。著名な書家である小野道風（894年～966年）の揮毫により寺号が刻まれました。扁額の横にあるカエルの置物は、柳の枝に何度も登ろうとするカエルを見て忍耐の大切さを小野道風が再認識したという物語にちなんでいます。扁額の右側には、高位の公家で書道家、そして茶人や学者でもあった近衛家熙（1667年～1736年）の扁額に対する認証状があります。

阿弥陀堂と不動堂

瑠璃光殿の隣にある阿弥陀堂は、無限の光と命をもつ仏陀である阿弥陀如来を祀っています。石段を登ったところに不動堂があり、不動明王が祀られています。この不動明王は信者を守り、厳しさある愛情で導くと信じられている精悍な姿をした神です。勝持寺の不動明王は、特に目の病気の治癒にも関係が深いとされています。お堂の裏側に回ると、奥の擁壁に掘られた小さなくぼみに不動明王の石像が祀られています。

007-007

Shoboji Temple

大原野保勝会

【タイトル】 正法寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Shoboji Temple

There are many Buddhist statues enshrined at Shoboji Temple, and the most unusual is a sculpture of Kannon, the bodhisattva of compassion, with three faces. The temple is also well known for a dry landscape garden with rocks that represent animals, and for a series of painted screens depicting the Nishiyama mountains on the western side of Kyoto. Shoboji is located near Oharano Jinja Shrine and belongs to the Toji branch of the Shingon school of Buddhism.

Hoshoen Garden and Hoshoden Hall

The Hoshoen is a combination of a dry landscape garden and a pond-viewing garden. The view extends beyond the outer wall to encompass the Kyoto cityscape and Higashiyama mountains, incorporating them as “borrowed scenery” (*shakkei*). The shapes of the stones placed in the carefully raked white sand and around the pond resemble birds and animals, giving the garden its other name, “rock garden of birds and beasts.” A total of 16 stones represent 16 different animals from around the world, including a lion, a frog, and even a penguin. A picture guide in the Hoshoden Hall helps visitors find and identify them all. The ever-changing garden invites quiet contemplation with its weeping cherry tree that blooms pink in spring, lush green moss and water lilies in summer, brightly colored maple leaves in autumn, and white snow in winter.

The Hoshoden Hall facing the garden contains a statue of Aizen Myo-o, a Wisdom King depicted with six arms and three eyes, who is believed to grant strong relationships and marital harmony. A relatively rare sculpture of a running Daikokuten,

one of the Seven Gods of Fortune, portrays the deity in mid-stride, as if hurrying to bring happiness to people.

Hondo (Main Hall)

The largest statue on the altar is the principal object of worship, Sanmen Senju Kannon. This image of a thousand-armed Kannon has three faces to represent the bodhisattva's ability to watch over the present, the past, and the future. The gold-plated wooden sculpture is 1.8 meters tall and dates to the early Kamakura period (1185–1333). It is a nationally designated Important Cultural Property.

To the right is a statue of Kannon in a human form. It is called Sho Kannon and is the oldest sculpture in Shoboji. The Shingon school founder Kukai (Kobo Daishi, 774–835) is said to have carved it when he was 42, hoping to protect himself from misfortune at an age traditionally considered inauspicious in a man's life. Further right is a Muromachi-period (1336–1573) sculpture of Dainichi, the cosmic Buddha. To the left of Sanmen Senju Kannon are two statues of Amida, the Buddha of Infinite Light and Life, also carved in the Muromachi period. Visitors can press a button near the prayer area to hear explanations in Japanese, or read the English leaflet posted in the hall.

Sliding Screen Paintings

The Oharano-born artist Nishii Sayoko (1947–2000) was commissioned to paint 41 sliding screens for the temple's *shoin* reception rooms with scenes of the Nishiyama landscape. She managed to finish 17 pieces while fighting a terminal illness, and the rest were completed based on her sketches. The *Ode to Nishiyama* painted screens are a manifestation of Nishii's love for her hometown, depicting seasonal flowers, plants, and mountains covered with spring greenery.

Fudodo Hall and Temple Grounds

At the top of a flight of stairs flanked by two Nio guardian statues is the Fudodo Hall. It enshrines Kasuga Fudo Myo-o, the Immovable Wisdom King, who is believed to grant safety and prosperity, recovery from illness, and protection from evil. The hall provides a good vantage point to take in the surroundings, including the vermilion Henjoto Pagoda. Behind the Fudodo is Kasuga Inari Shrine, where people pray for

commercial success and prosperity. An arched red bridge past the shrine leads to a small waterfall.

Another dry landscape garden lies between the temple's main gate and the Hondo. On the hillside beyond the gate is an *ume* plum orchard with more than 100 trees. They bloom white and pink from February to mid-March with the Higashiyama mountain range in the distance and attract many birds, including Japanese white-eyes (*mejiro*).

Brief History

In the eighth century, the Chinese monk Chii Daitoku came to Japan to help propagate Buddhism. He built a hermitage called Kasuga Zenbo in Oharano in 754 to pursue his ascetic practices. Around the year 800, Saicho (Dengyo Daishi, 767–822), the founder of Japan's Tendai school of Buddhism, made Kasuga Zenbo a subtemple of a larger temple that he established for protection of the Nagaokakyo area. Like most structures in Kyoto, the temple burned down during the Onin War (1467–1477), but was restored in 1615 and renamed Shoboji. Later, it was expanded with substantial contributions from Keishoin (1627–1705), mother of the fifth Tokugawa shogun, Tsunayoshi.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

正法寺

正法寺には多くの仏像が安置されており、その中で最も珍しいのは、慈悲の菩薩である三面の観音像です。またこの寺院は、岩で動物を表現した枯山水庭園や、西山連峰を描いた屏風絵でも有名です。正法寺は大原野神社の近くにある真言宗東寺派のお寺です。

宝生苑と宝生殿

宝生苑は枯山水庭園と池泉回遊式庭園を組み合わせた庭園です。景色が外壁の向こうに広がり、京都の街並みと東山連峰を「借景」として取り込んでいます。丁寧に仕上げられた白砂と池の周囲には鳥や動物の形に似た石が置かれ、別名「鳥獣の石庭」とも呼ばれています。合計16の石は、獅子、カエル、ペンギンなど、世界中の16種類の動物を表現しています。宝生殿にある絵図を参照することで、それらの全種を識別することができます。春のピンク色に咲き誇るしだれ桜、夏の緑豊かな苔や睡蓮、秋の色鮮やかな紅葉、そして冬の白い雪など、四季折々に見た目が変わる庭園では静かに思いを巡らすことができます。

庭園に面した宝生殿には六臂三眼の愛染明王像が安置されており、縁結びや夫婦円満のご利益があるとされています。七福神の一つである大黒天の疾走する姿を表現した比較的珍しい彫像は、人々に幸福をもたらすために急いでいるかのようにも見えます。

本堂

須弥壇上にある最大の仏像は、ご本尊の三面千手観音菩薩像です。この千手観音像の3つの顔は、現在・過去・未来を見守る力を表しています。金鍍金されたこの木像は高さ1.8メートルで、鎌倉時代（1185年～1333年）初期のもので、国から重要文化財に指定されています。

右側には聖観音と呼ばれる人間の姿をした観音菩薩像があります。それは正法寺で最も古い仏像です。真言宗の開祖 空海（弘法大師、774年～835年）は42歳という伝統的に男性の人生において不幸と考えられている年齢時に、厄災から身を守ることを願いこの仏像を彫ったと言われています。さらに右には、室町時代（1336年～1573年）の大日如来像があります。三面千手観音菩薩像の左側には、同じく室町時代に彫られた2体の阿弥陀如来像が安置されています。お参り場所近くにあるボタンを押すと日本語での説明が聞けるほか、お堂内には英語のリーフレットも準備されています。

襖絵

大原野生まれの画家 西井佐代子氏（1947年～2000年）は、寺院の書院のために西山の風景を描いた41面の襖絵を依頼されました。末期の病と闘いながらなんとか17面を仕上げましたが、残りは西井氏のスケッチに基づいて完成となりました。「西山賛歌」の襖絵は西井氏の故郷への愛が表れており、四季折々の草花や春の緑に覆われた山々が描かれています。

不動堂と境内

2体の仁王像が並んでいる階段の上には不動堂があります。春日不動明王を祀っており、安全と繁栄や病気平癒、厄除けのご利益があるとされています。お堂からは朱色の遍照塔など周囲の景色を眺めることができます。不動堂の裏手には参拝者が商売繁盛や繁栄を祈願する春日稻荷神社があります。神社の先にある赤い太鼓橋を渡ると小さな滝があります。

山門と本堂の間にはもう一つの枯山水庭園があります。山門を抜けた先の山腹には、100本以上の梅が植えられた梅園があります。2月から3月にかけて遠方にある東山連峰を背景に白やピンクの花が咲き、メジロなどの鳥を引き寄せます。

略歴

中国の僧 智威大徳は、8世紀に仏教を広めるために来日しました。754年に大原野に春日禅房という庵を建て修行を行いました。800年頃、天台宗の開祖 最澄（伝教大師、767年～822年）が長岡京を守護するために大寺院を建立し、その庵を塔頭の一つとしました。京都の大部分同様、応仁の乱（1467年～1477年）で焼失しましたが、1615年に修復され正法寺と改名さ

れました。その後、5代徳川将軍、徳川綱吉の母である桂昌院（1627年～1705年）の多大な寄付により増築されました。

007-008

Shoryuji Temple

大原野保勝会

【タイトル】 勝龍寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Shoryuji Temple

According to temple legend, the monk Kukai (Kobo Daishi, 774–835), the founder of the Shingon school of Buddhism, established Shoryuji in 806. He named it after a temple in China where he had studied, with kanji characters for “blue dragon.” It is said that during a severe drought in 962, the emperor ordered the chief abbot Senkan (918–984) to spend a week praying for rain. After the long-awaited rain fell, the characters for the temple name were changed to mean “victory over the dragon,” reflecting how the power of prayer overcame the will of the divine creature ruling over water.

Hondo (Main Hall) and Temple Grounds

Hanging over the Hondo entryway is a sacred rope shaped like an undulating dragon flying west toward the Nishiyama mountains. At the beginning of each year, community members make a new sacred rope by hand. Historically, the quality of the resulting rope was used to predict how bountiful the year’s harvest would be. The principal object of worship at Shoryuji is a statue of the Eleven-Headed Kannon, the bodhisattva of compassion. It dates to the Kamakura period (1185–1333) and is a nationally designated Important Cultural Property kept at the Kyoto National Museum outside of special ritual periods. Please note that the Hondo is generally closed to the public.

The temple grounds contain statues of Kukai as a traveling monk, Bokefuji Kannon believed to protect against dementia, Hotei (one of the Seven Gods of Fortune), and the arhat Binzuru Sonja reputed to have healing powers. A small Kasuga Jinja Shrine is dedicated to Shinto deities that guard the area around Shoryuji.

Art and Community Engagement

Shoryuji is known for *kirie*, the art of intricate paper cutting, offering items such as *kirie* temple seals (*goshuin*), *omamori* amulets, and art prints. Temple staff hold *kirie* workshops (reservation required), as well as yoga classes. On the second Sunday of each month except January and August, Shoryuji hosts the Hotei Market where people from the neighborhood sell homemade food, crafts, and eco-friendly goods, and musicians give small performances.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

勝龍寺

寺伝によると、真言宗の開祖である空海（弘法大師、774年～835年）が、仏教を学んでいた中国の寺院にちなんで「青龍」の文字を入れ、806年に青龍寺しょうりゅうを建立しました。962年にひどい干ばつに見舞われたとき、天皇は住職の千観（918年～984年）に1週間雨乞いをするよう命じたと言われています。待ちに待った雨が降った後、水を司る靈獣の意志を祈りの力で打破したという意味から、寺号を「龍に勝つ」という文字に変えました。

本堂と境内

入口にかかっている龍の形をしたしめ縄は、龍が西方にある西山へ向かって飛んでいく様子を表しています。しめ縄は、地域の人々が新年を迎える度に手作りで仕上げられています。従来は、その出来栄によって農作物の豊凶を占っていたとされています。勝龍寺のご本尊は十一面観音菩薩（慈悲の菩薩）の立像です。鎌倉時代（1185年～1333年）に作られたもので、国の重要文化財に指定されており、特別な開帳期間以外は京都国立博物館で保管されています。本堂は通常非公開となっておりますのでご注意ください。

境内には旅の僧、空海（修行大師）や認知症を予防するぼけ封じ観世音、七福神の一人である布袋、そして治癒力があると評判の賓頭盧尊者などの像が安置されています。また、小さな春日神社には勝龍寺地区の氏神が祀られています。

アートとコミュニティとの関わり

勝龍寺は、複雑に紙を切るアートである「切り絵」で知られており、切り絵のお寺の印（御朱印）、お守り、切り絵のアート・プリントなどを提供しています。寺院のスタッフは（予約制で）切り絵のワークショップやヨガのクラスを開催しています。勝龍寺では1月と8月を除く毎月第2日曜日に「ほてい市」が開催され、近隣の人々が手作りの食品、工芸品、環境に優しい商品を販売し、ミュージシャンがミニライブを行っています。

007-009

Yoshiminedera Temple

大原野保勝会

【タイトル】 善峯寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Yoshiminedera Temple

Yoshiminedera is a Tendai school Buddhist temple located in the forested mountains of Oharano in southwestern Kyoto. It is one of the 33 temples on the Saigoku Kannon Pilgrimage, a route connecting a series of temples in the Kansai area dedicated to Kannon, the bodhisattva of compassion. Numerous cherry trees, hydrangeas, and maples cover the extensive grounds of Yoshiminedera, adding color to the scenery throughout the year. Due to the high elevation, several spots throughout the temple offer scenic views of the city of Kyoto.

History

Yoshiminedera was founded in 1029 by Gensan (983–1099), a monk from Enryakuji Temple on Mt. Hiei, who came to the mountains southwest of Kyoto looking for a sacred place to build a retreat. According to legend, when Gensan stopped to rest, a deity appeared and asked him to found a temple at that location. Construction on rocky ground proved difficult, but Gensan received a vision in a dream that help would soon arrive. The next night, a group of wild boars crushed the rocks with their tusks and leveled the site. Gensan carved a statue of the Thousand-Armed Kannon and built a small temple that he named Hokkein to enshrine it. The name was changed to Yoshiminedera in 1034, when Emperor Go-Ichijo (1008–1036) decreed that prayers for the protection of the country should be held there. With the patronage of the court, Yoshiminedera became a sprawling temple complex that included over 50 subtemples.

Many temple structures burned down during the Onin War (1467–1477), a shogunate succession dispute that damaged much of Kyoto. Later, Keishoin (1627–1705), the Kyoto-born mother of the fifth Tokugawa shogun, Tsunayoshi, greatly contributed to

the revival of Yoshiminedera by financing the construction of various halls and donating valuable furnishings. Many of the current buildings date to that reconstruction period.

Temple Grounds

The grounds of Yoshiminedera cover nearly 10 hectares. The main route leads through the large Niomon Gate to the Kannondo Hall, and from there branching paths continue to other structures on the mountainside, such as the Sutra Repository, the Founder's Hall, the Shakado Hall, and the Yakushido Hall.

The Kannondo Hall houses the temple's principal object of worship, an eleventh-century statue of Kannon in the thousand-armed form. It symbolizes the bodhisattva reaching out to help people in need with whatever tool they might require to find relief from suffering. Praying at the Shakado Hall that enshrines a statue of the historical Buddha Shakyamuni is said to alleviate lower back pain or neuralgia, which is considered unusual for blessings typically bestowed by this deity. The Yakushido Hall, standing at one of the highest points in the precincts, is dedicated to Yakushi Buddha, the deity of medicine. It is said that Keishoin's parents prayed to Yakushi Buddha on this mountain for the birth of a daughter. At Yoshiminedera, the deity is worshipped as Shusse Yakushi ("Yakushi of success"), reflecting Keishoin's rise from the daughter of a commoner to the mother of a shogun.

One of the many other interesting sights is a five-needle white pine tree called Yuryu no Matsu ("playful dragon pine"), which is thought to be over 600 years old. It is carefully cultivated to grow horizontally on wooden supports, passing over a set of stone steps. The pine tree is approximately 37 meters long and is a nationally designated Natural Monument.

Seasonal Beauty

Yoshiminedera is well known as a place of beautiful seasonal landscapes, with everchanging views of the Kyoto basin from the Nishiyama mountains and a wide variety of plants blooming on the grounds for most of the year. In springtime, cherry blossoms are the most popular, and about a hundred weeping cherry, mountain cherry, *botan* cherry, and *higan* cherry trees grow in the Hakusan Sakura and Hydrangea

Garden and beside the temple halls. The oldest weeping cherry tree is said to have been planted by the temple's benefactor, Keishoin, in the late seventeenth century. Pink *ume* plums flower before the cherry blossom season, and later the temple grounds become dotted with vibrant azaleas and large peonies.

In early summer, thousands of hydrangeas in the garden and throughout the temple precincts burst into bloom, filling the mountain slopes of Yoshiminedera with blue, purple, and pink. The large, round flowerheads can be observed from above on the viewing platform where the statue of Shiawase Jizo, a bodhisattva said to bless worshippers with happiness, is located, or up close while wandering the garden's curving paths. Once the heat of the summer fades and the chill turns the foliage of the maple trees, visitors head to Yoshiminedera to look at bright autumn leaves covering the mountainside.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

善峰寺

善峰寺は京都の南西部、大原野の緑豊かな山中に位置する天台宗の寺院です。このお寺は慈悲の菩薩、観音菩薩を本尊とする関西の寺院を結ぶ西国三十三所霊場の一つです。善峰寺の広大な境内は数多くの桜やあじさい、モミジが植えられ、一年を通して鮮やかに彩られます。標高が高いため、京都市街の美しい景色を眺めることができるスポットがいくつかあります。

歴史

善峰寺は、幽居にふさわしい地を求めて京都の南西部の山に立ち寄った、比叡山延暦寺の僧侶源算（983年～1099年）によって1029年に創建されました。伝説によると、彼が休息のために立ち止まった際、神（仏）が現れ、その場所に寺院を創建するようお告げがありました。岩だらけの地に寺院を建設するのは非常に困難でしたが、助けが来るという霊夢を源算が見た翌日の夜、イノシシの群れが牙で岩を砕き、土地を平らにならすということが起きました。源算は千手観音像を彫り、法華院と名付けた小さなお堂を建てて安置しました。1034年に後一条天皇（1008年～1036年）は鎮護国家の祈祷を法華院にて行うことを勅令し、その際に「善峰寺」と改名されました。宮廷の庇護のもと、善峰寺は50以上の坊を擁する広大な寺院となりました。

善峯寺は、将軍の後継者争いが原因で京都の大部分に被害をもたらした応仁の乱（1467年～1477年）により多くの堂塔が焼失しました。その後、京都生まれの徳川5代将軍、綱吉の母で

ある桂昌院（1627年～1705年）がさまざまなお堂の建設に資金を提供し、貴重な調度品を寄贈することで善峰寺の復興に貢献しました。現存する寺院の建物の多くは再建当時のものです。

境内

善峰寺の境内は10ヘクタール近くあります。大きな楼門をくぐると本堂の観音堂があり、そこから枝道を経て経蔵、開山堂、釈迦堂、薬師堂など山腹の建造物へとつながっています。

観音堂に安置されている寺院の本尊である11世紀作の千手観音菩薩像は、苦悩を抱える人々を苦しみから解放するため、ありとあらゆる必要な道具を使って手を差し伸べる象徴です。歴史的な釈迦牟尼仏を安置する釈迦堂で祈禱すると、腰痛や神経痛などが緩和されると言われていますが、仏様のご利益としては珍しいとされています。境内の最も高い場所のひとつに建つ薬師堂には、医学の仏様である薬師如来が祀られています。桂昌院の両親はこの山の薬師如来に、娘の誕生を祈願したと言われています。善峰寺では、桂昌院が平民の娘の出から將軍の母にまで上り詰めたことから、この仏を「出世薬師」として祀っています。

他にも数多くある見どころのひとつは、「遊龍の松」と呼ばれる樹齢600年以上の五葉松です。この松は、石段の上にある木製の支柱に沿って水平に育つよう手入れをされています。「遊龍の松」は長さ約37メートルで、国の天然記念物に指定されています。

季節ごとの美しさ

善峰寺は、四季折々の美しい景観を楽しめる場所として知られ、西山連峰から刻々と変わる京都盆地を眺めることができ、ほぼ一年中、さまざまな花々が咲き誇ります。春は桜が最も人気で、白山桜あじさい苑やお堂周辺では枝垂桜、山桜、ボタン桜、ヒガン桜など約百本が咲き誇ります。一番古い枝垂桜は、17世紀後半に善峯寺の後援者である桂昌院によって植えられたと言われています。桜の季節の前にピンク色の梅が開花し、その後は鮮やかなツツジや大きな牡丹が境内を点在します。

初夏には、庭園や境内に数千株のあじさいが咲き誇り、善峰寺の山腹を青、紫、ピンクで彩ります。その大きくて丸い花は、参拝者に幸せをもたらすとされる幸福地藏の展望台に立って上から眺めたり、庭園内の曲がりくねった小道を散策しながら間近に観察することができます。夏の暑さが去って涼しくなり、モミジの葉が色づく、山腹一面に広がる鮮やかな紅葉を楽しむために、参拝者たちは善峰寺へ向かいます。

007-010

Komyoji Temple

大原野保勝会

【タイトル】 光明寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Komyoji Temple

Komyoji is the head temple of the Seizan Jodo school of Buddhism. The vast temple complex at the base of the Nishiyama mountains has a strong historical connection with Honen (1133–1212), the founder of the Jodo (Pure Land) school. Komyoji is also a popular place to view maple foliage. Highlights include the stone stairway leading to the Miedo Hall and the 200-meter “maple path” to the left from the main gate. The tunnel of leaves formed by some 250 trees is bright green from spring through summer and turns fiery red and orange in autumn.

Brief History

The origin of Komyoji dates to 1198, when the monk Rensei (Kumagai Naozane, 1141–1208), a disciple of Honen, built Nenbutsu Zanmaiin Temple. Honen’s teachings centered on practicing *nenbutsu*, the ritual recitation of the name of Amida, the Buddha of Infinite Light and Life. According to temple legend, in 1228, on the 17th anniversary of Honen’s death, his stone coffin emitted rays of light that shone toward Nenbutsu Zanmaiin. Honen’s remains were brought to the temple, cremated, and enshrined on the grounds. Shortly after, the temple name was changed to Komyoji, which is written with kanji characters for “radiant light,” a phrase that carries spiritual connotations in Buddhism.

Miedo, Amidado, and Shakado Halls

The Miedo Hall was built in 1754 and is the main hall of Komyoji. The principal object of worship is a papier-mâché figure of Honen. It is believed that he made it himself using letters from his mother. At the top of a steep stairway behind the Miedo is the mausoleum enshrining Honen’s bones (closed to the public). His stone coffin

and cremation site are located near the Amidado Hall and the Shakado Hall, respectively.

The Amidado enshrines a 2-meter statue of Amida Buddha flanked by smaller sculptures of Seishi, the bodhisattva of wisdom, and Kannon, the bodhisattva of compassion. Amida's hands form a mudra welcoming the souls of the devotees to the Pure Land. The hall dates to 1799 and is said to reflect the traditional Jodo style characteristic of the Heian period (794–1185).

The Shakado was constructed in 1736 and enshrines a statue of Shakyamuni, the historical Buddha. In front of the hall is a dry landscape garden with several carefully placed rocks. The three largest stones represent Amida Buddha, Seishi Bodhisattva, and Kannon Bodhisattva, while the other 18 symbolize Amida's 18th vow (out of 48), which is considered to be the cornerstone of Jodo school teachings. It is an oath that all sentient beings who sincerely call upon the name of Amida will be reborn in a paradise-like realm known as the Pure Land. On the opposite side of the garden is the Chokushimon Gate, which was solely used by messengers from the emperor's court.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

光明寺

光明寺は西山浄土宗の総本山です。西山の麓にある広大な寺院は、直訳でピュアランドを意味する浄土宗の開祖 法然（1133年～1212年）と歴史的に深いつながりがあります。光明寺は紅葉の名所としても人気です。見どころは、御影堂へ続く石段と山門から左手に続く約200メートルの「もみじの道」です。およそ250本の木々がトンネルとなり、春と夏は鮮やかな緑、秋は燃えるように色づきます。

略歴

光明寺の起源は1198年、法然の弟子、蓮生僧（熊谷直実、1141年～1207年？）が念仏三昧院を建立したことに遡ります。法然の教えは、無限の光と命の仏である阿弥陀の名号を儀式的に唱える念仏の実践を中心としていました。

寺伝によると、1228年、法然上人の17回忌の際、法然の石棺から光線が発せられ、その光が念仏三昧院に届いたとされています。寺に運ばれた法然上人の遺骸は火葬され、境内に安置されま

した。その後すぐに、寺名は仏教において精神的な意味合いをもつ「輝かしい光」という漢字を用いて光明寺と改められました。

御影堂・阿弥陀堂・釈迦堂

御影堂は1754年に建てられた、光明寺の本堂です。本尊は法然上人の張り子像で、母からの手紙の用紙をもとに法然上人自らが制作したとされます。御影堂の裏手にある急な階段を上ったところに法然上人の遺骨が祀られた霊廟があります（非公開）。法然の石棺と火葬場は、それぞれ阿弥陀堂と釈迦堂の近くにあります。

阿弥陀堂には、高さ2メートルの阿弥陀如来像が安置され、その両側に勢至菩薩と観音菩薩の小さな仏像が祀られています。阿弥陀様の手指は、浄土への信者の魂を迎える印相（ムードラ）を形づくっています。このお堂は1799年に建造され、平安時代（794年～1185年）の伝統的な浄土様式の特徴を表していると言われています。

1736年に建立された釈迦堂には、釈迦如来が安置されています。お堂の正面には、数々の石が丁寧に配置された枯山水庭園があります。中でも最も大きな3石は阿弥陀如来、勢至菩薩、観音菩薩を表し、他の18石は浄土宗の教えの基礎である阿弥陀仏の四十八の誓願のうちの第十八願を表しています。それは、極楽に生まれたいと願って阿弥陀如来の名号を唱える衆生を救い、極楽浄土に往生させるという願です。庭園の反対側にある勅使門は主に朝廷からの使いである勅使が使用した門です。

007-011

Nagaoka Tenmangu Shrine

大原野保勝会

【タイトル】長岡天満宮

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Nagaoka Tenmangu Shrine

Nagaoka Tenmangu Shrine in the city of Nagaokakyo is dedicated to Sugawara no Michizane, a man now worshipped as a deity of scholarship called Tenjin. As a Tenjin shrine, it is particularly popular with students who come to pray for success before tests or university entrance exams. One of the best-known features of Nagaoka Tenmangu is the tall rows of bright red azaleas that bloom along the path across the shrine's large pond in late April.

The Legend of Tenjin and Nagaoka Tenmangu

Sugawara no Michizane (845–903) was an accomplished scholar, poet, and high-ranking statesman. He was a favorite in the court of Emperor Uda (867–931), but after the emperor abdicated, Sugawara became vulnerable to the political schemes of his rivals at court and was exiled to a remote posting in Kyushu. On the way, he is said to have stopped by the Nagaokakyo area, where he had often spent time in leisure with friends, mournfully declaring, “May my soul remain here forever!”

After Sugawara passed away in exile, a series of natural disasters and other misfortunes that occurred in Kyoto led to the belief that the disgraced statesman became a vengeful spirit. When many attempts to pacify the raging spirit failed, the emperor's court deified Sugawara as the god of scholarship Tenjin. Since then, numerous shrines dedicated to Tenjin have been founded throughout the country.

Hachijogaike Pond and Kirishima Azaleas

The path from the first torii gate to the main sanctuary crosses over the large

Hachijogaike Pond, which was originally created for irrigation purposes in 1638. On one side of the pond, elegant dining rooms that belong to a neighboring *kaiseki ryori* (traditional Japanese cuisine) restaurant stand on pillars over the water. Cherry trees, irises, and azaleas bloom on the shrine grounds throughout spring, but the most popular seasonal flower is the vibrant red Kirishima azalea. The tall azaleas lining the path across the pond can exceed 2.5 meters in height and are thought to be around 170 years old.

Main Sanctuary and Plums

Further into the shrine grounds, up a flight of steps and past a small garden recently designed for the enjoyment of autumn foliage, is the Honden (Main Sanctuary). The vermilion building was transferred from Heian Jingu Shrine in 1941 and is a Tangible Cultural Property of Kyoto Prefecture. It is flanked by four *ume* plum trees, a species that was favored by Sugawara no Michizane. A stone statue of an ox, the divine messenger of Tenjin, is placed beside the Honden, and several other sculptures of oxen can be found nearby.

A path to the left of the main sanctuary leads to Nagaoka Inari Daimyoin, a subsidiary shrine dedicated to a deity of agriculture. Beyond it is the plum grove with approximately 300 trees, including double-flowered *yae-ume*, weeping *shidare-ume*, fragrant *bungo-ume*, fruit-bearing *nanko-ume*, pink- and white-flowering *omoi no mama*, cherry blossom-like *sakurabai*, vibrant *beni-ume*, and several other varieties. The flowers bloom around early March, and benches placed along the outer edge of the grove allow visitors to take in the sight at their own pace. Entrance to the shrine and the plum grove is free of charge.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

長岡天満宮

長岡京市にある長岡天満宮では、現代において学問の神として崇められ、天神と呼ばれている菅原道真を祀っています。天神の社らしく、テスト前や受験前の合格祈願のために参拝に訪れる学生には特に人気です。長岡天満宮の最も有名な特徴のひとつは、4月下旬に、神社の大きな池を渡る参道に沿って咲き誇る樹高の高い真っ赤なツツジの群生です。

天神の伝説と長岡天満宮

菅原道真（845年～903年）は、優れた学者で詩人、そして高位の政治家でした。菅原は宇多天皇（867年～931年）の朝廷において臣下として重用されていましたが、天皇の退位後、政敵からの政治的な陰謀に巻き込まれ、九州の遠方に流刑となりました。途中、菅原は友人らと余暇を過ごしていた長岡京に立ち寄り、「我が魂長くこの地にとどまるべし」と悲しげに名残惜しんだと言われています。

菅原が流刑先で亡くなった後、相次いで京都で自然災害や不幸な出来事が起こったことから、屈辱を受けた官吏が怨霊になったと信じられるようになりました。菅原の怒りを鎮める試みが何度も失敗した後、朝廷は菅原を学問の神・天神として神格化しました。以来、天神を祀る神社が数千社、全国に設立されました。

八条ヶ池とキリシマツツジ

最初の鳥居から本殿に至る参道は、1638年に灌漑用の溜め池として作られた大きな八条ヶ池を越えて続きます。池の片側には、近隣の懐石料理を提供する料亭のお座敷が水上の支柱に建っています。春の境内には桜や菖蒲、ツツジが咲きますが、季節の花として最も有名なものは鮮やかな赤いキリシマツツジです。池を渡る参道に沿って並ぶ背の高い茂みは2.5メートルを超える所もあり、樹齢170年を超えると考えられています。

本殿と梅

境内をさらに進み、階段を上がり、紅葉を楽しむために最近作られた小さな庭園のそばを通り過ぎると、本殿があります。この朱塗の建物は、1941年に平安神宮から移築された京都府の有形文化財です。両側には菅原道真が好んだ4本の梅の木があります。近くには天神の遣いである牛の石像があり、周辺にも他の牛の像がいくつか見られます。

本殿から左手に小道を進むと、農業の神を祀る長岡稲荷大明神という末社があります。その向こうには、約300本の梅林があり、八重の花を咲かせる八重梅やしだれ梅、香り豊かな豊後梅、果実を実らせる南高梅、ピンクと白の花を咲かせる品種「思いのまま」、花が桜に似ている桜梅、鮮やかな紅梅、そしてその他にも数品種の梅があります。開花時期は3月上旬頃で、梅林の外周にベンチが設置されているので、ゆっくりと花を鑑賞することができます。長岡天満宮と梅林の入場は無料です。

007-012

Yanagidani Kannon (Yokokuji Temple)

大原野保勝会

【タイトル】 柳谷観音楊谷寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Yanagidani Kannon (Yokokuji Temple)

Worshippers have been coming to Yokokuji Temple, commonly called Yanagidani (“willow valley”) Kannon, to pray for recovery from eye ailments since its founding. Both the principal object of worship (a statue of Kannon, the bodhisattva of compassion) and the water flowing on the grounds are regarded as having divine powers. The temple complex has many halls, some of which are connected by covered corridors. Its vast precincts are known for seasonal beauty, especially cherry blossoms in spring, hydrangeas in summer, and colorful maple foliage in autumn. In recent years, the temple’s practice of creating *hanachozu* (artistic, flower-filled water basins) has led to an increase in the number of visitors. Yokokuji is located in the Nishiyama mountains in the city of Nagaokakyo and belongs to the Seizan Jodo school of Buddhism.

Origins

Yokokuji was founded in 806 by the monk Enchin, also the founder of Kyoto’s famous Kiyomizudera Temple. It is said that Enchin saw a prophetic dream about meeting the bodhisattva Kannon that compelled him to travel to the Nishiyama mountains west of Kyoto. There, he saw a manifestation of Kannon with eleven heads, a thousand arms, and a thousand eyes sitting on a rock in a valley of willow trees. This form of Kannon is believed to possess the power to cure eye diseases. Elated, Enchin built a hall to worship the bodhisattva at the location and named it Yokokuji.

Legend of the Eye-Healing Water

In 811, the monk Kukai (Kobo Daishi, 774–835), the founder of the Shingon school of Buddhism, made a pilgrimage to Yokokuji from Otokunidera Temple. According to

legend, Kukai encountered a monkey washing the eyes of its blind child in a pool near the temple hall, and after he prayed for 17 days, the baby monkey's eyesight returned. Kukai continued his chanting for 17 more days and then used a Buddhist ritual tool called a vajra to deepen the pool, which turned into sacred water that could heal eye ailments. The water, called *okozui* ("vajra water"), was used by several historical figures and is still sought by believers for the prevention of eye illnesses.

Temple Grounds

The route begins from the Chokushimon, a gate once reserved solely for messengers from the imperial court. It is flanked by statues of Fujin and Raijin, the deities of wind and thunder. The early-seventeenth-century Hondo (Main Hall) contains the principal object of worship, a statue of Kannon with eleven heads, a thousand hands, and a thousand eyes. The sculpture is available for public viewing only on the 17th and 18th of each month. It is a designated Tangible Cultural Property of Kyoto Prefecture.

The Shoin is a guest hall connected to the Hondo by a covered corridor. Inside, visitors can take part in ritual practices such as sutra copying (*shakyo*) or drawing a Buddhist divinity as an offering (*shabutsu*). Artwork displayed in the hall is changed to match the seasons or traditional holidays. The Jodoen ("garden of the Pure Land") next to the Shoin was created in the mid-Edo period (1603–1867) and is designated a Place of Scenic Beauty by Kyoto Prefecture. The garden is designed for viewing from three different elevations and angles: from the Shoin, from the stairs, and from the Kami-Shoin (Upper Guest Hall). Please note that the Kami-Shoin is only open in the morning of the 17th of each month and during special viewing periods in spring, summer, and autumn.

A long, covered stairway leads to the Okunoin (Inner Sanctuary). It contains a statue of Kannon given to the temple by Emperor Nakamikado (1702–1737) and 28 sculptures of the bodhisattva's guardian deities. Descending from the Okunoin, visitors may walk past several other small halls and altars. The Aizendo Hall is dedicated to Aizen Myo-o, a Wisdom King associated with relationships and marital harmony. The Yodo Bentendo Hall displays a large doll of Lady Yodo (1569–1615), a consort of the warlord Toyotomi Hideyoshi (1536–1598). Two shrines are dedicated to Ganriki Inari, a guardian deity of the temple believed to bless worshippers with insights that will guide them through difficult situations in their lives.

Flower-Filled Water Basins

Almost all shrines and temples have water basins for ritual purification near the entrance. In recent years, it has become popular to fill these basins with artistic arrangements of seasonal flowers, attracting repeat visitors throughout the year and generating interest on social media. Yanagidani Kannon was at the forefront of this new practice, and every month, different flower compositions decorate the five water basins on the grounds. There is a large rectangular metal basin in front of the Hondo that is fed from the mouth of a dragon sculpture, three round basins in the Jodoen Garden, and another small basin near the temple treasury. The artfully displayed seasonal flowers and accompanying decorations serve as bright visual elements that add even more charm to the historic temple.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

柳谷観音（楊谷寺）

柳谷観音とも呼ばれる楊谷寺には、創建以来、眼病平癒を祈願する参拝者が訪れています。本尊（観世音菩薩）と境内に流れる水にはそのような神聖な力があるとされています。境内は多くのお堂を構え、一部は屋根付の回廊で結ばれています。お寺の広大な敷地は春の桜や夏の紫陽花、秋の色とりどりの紅葉などの四季折々の美しさで知られています。近年、花で満たされた芸術的な水盤「花手水」の制作が行われ、参拝客が増加しています。楊谷寺は長岡京市の西山の山中にあり、宗派は西山浄土宗です。

起源

楊谷寺は、京都の有名な清水寺の開基でもある延鎮僧侶によって806年に創建されました。延鎮は観音菩薩に会うという予知夢を見て、京都市の西にある西山山中に赴いたと言われています。そこで彼は、柳の谷の岩の上で、十一の頭と千の腕、そして千の目を持った観音様の姿を見ました。この観音様には目の病気を治す力があると信じられています。歓喜した延鎮は、その地に菩薩を祀るお堂を建立し、これを陽谷寺と名付けました。

目の治癒水の伝説

811年、真言宗の開祖である空海（弘法大師 774年～835年）が乙訓寺から楊谷寺へ参詣しました。伝説によると、空海は寺院のお堂近くの池で盲目の子猿の目を洗っている親猿に出会い、17日間祈った結果、子猿の視力が回復したと言われています。空海はさらに17日間唱え続け、その後金剛杵と呼ばれる仏具を使って池を深くし、目の病気を治す神聖な水に変えました。この水は

「独鈷水（鈷杵の水）」と呼ばれ、何人かの歴史上の人物によって使用され、今でも目の病気予防のために信者に求められています。

境内

参詣は、かつて宮廷からの使者である「勅使」だけに許可されていた勅使門から始まります。門の両側に風と雷の神である風神雷神像が立っています。17世紀初頭に建てられた本堂には、本尊である十一頭千手千眼観音像が安置されており、毎月17日と18日のみ一般公開されています。観音像は京都府指定の有形文化財です。

書院は本堂と屋根付の回廊でつながっているお客様を迎える建物です。院内では、お供えとしてお経を写す「写経」や仏様のお姿を写す「写仏」に参加することができます。書院に展示される作品は、季節や祝日に合わせて変えられています。書院の隣にある浄土苑は、江戸時代（1603年～1867年）中期に造営され、京都府によって名勝庭園に指定されています。庭園は、書院、階段、上書院の3か所の異なる高さと角度から鑑賞できるように設計されています。上書院は毎月17日の午前中と春・夏・秋の特別拝観期間のみ公開されています。

屋根付きの長い階段を登ると奥の院につながります。そこには中御門天皇（1702年～1737年）より賜った観音像と28体の守護菩薩像が安置されています。奥の院から下りると、いくつかの小堂や祭壇を通り過ぎます。愛染堂は、縁結びや夫婦円満を司る明王である愛染明王を祀っています。淀弁天堂には、武将・豊臣秀吉（1536年～1598年）の妃である、淀殿（1569年～1615年）の大きな人形が安置されています。2つの神社には、寺院の守護神である眼力稻荷が祀られており、参拝者に人生の困難な状況を乗り越えるための洞察力を授けてくれると信じられています。

花いっぱい水盤（手水舎）

ほとんどの神社やお寺には、入り口付近に手水舎が設置されています。ここ数年、この水盤を季節の花々で彩る芸術的なアレンジメントが人気となり、年間を通してリピーターが訪れ、SNSでも話題となっています。柳谷観音はこの新しい習慣の最先端となっており、毎月異なる花が境内の五か所の花手水を飾っています。本堂前の龍の彫刻の口から水を汲む大きな長方形の金属製の水盤、浄土園の三つの円形の水盤、そして寺宝庫の近くにもう一つの小さな水盤があります。芸術的な季節の花々と装飾は、歴史的な寺院にさらに魅力を加える明るい視覚的要素となっています。

007-013

Otokunidera Temple

大原野保勝会

【タイトル】 乙訓寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Otokunidera Temple

Otokunidera Temple in the city of Nagaokakyo is best known for its colorful peonies. It enshrines several noteworthy statues, including an unusual principal object of worship and a guardian deity Bishamonten portrayed with an uncharacteristic expression. Otokunidera has a long history and was connected to several important events that took place before and after the founding of Kyoto. The temple belongs to the Shingon school of Buddhism.

The Peony Temple

About a thousand large, fragrant peonies grow on the grounds of Otokunidera. The first flowers were donated in 1940 by the head Shingon temple, Hasedera in Nara Prefecture, to help revitalize Otokunidera after a typhoon. Now, the path from the front gate is lined with peonies, and more flowerbeds are laid out throughout the grounds and in front of the Hondo (Main Hall). The peonies bloom in shades of pink, purple, yellow, and white and are at their peak in April.

Early History

The origins of Otokunidera are traced to a temple reportedly founded in the area by Prince Shotoku (574–622), who promoted the spread of Buddhism in Japan. In 784, the capital was moved from Heijokyo (present-day Nara) to Nagaokakyo, and Emperor Kanmu (737–806) substantially expanded the temple.

The following year, Fujiwara no Tanetsugu (737–785), a courtier in charge of building the new capital, was assassinated. An investigation implicated Prince Sawara (750?–

785), the emperor's younger brother, who had close ties to factions that opposed the move to Nagaokakyo. The prince was kept under arrest in Otokunidera and was later sentenced to exile, but mysteriously died on the way. After that, draught, famine, deaths in the imperial family, and other disasters wreaked havoc on Nagaokakyo. The misfortunes were attributed to the vengeful spirit of Prince Sawara. In 794, a mere decade after Nagaokakyo became the seat of power, the capital was moved to Heiankyo (now Kyoto).

Kukai and Saicho, Two Great Buddhist Teachers

The influential monk Kukai (Kobo Daishi, 774–835), the founder of the Shingon school, was appointed head of Otokunidera in 811. According to temple legend, when Kukai was carving a wooden statue of the great bodhisattva Hachiman, the deity appeared to him as an elderly man and they completed the sculpture together. Hachiman carved the body, modeling it on Kukai, while Kukai carved the head, modeling it on Hachiman. The unusual statue, called Hachiman Kobo Gattai Daishi, is now the temple's principal object of worship and is only shown to the public once every 33 years. In 812, Otokunidera served as the meeting place for Kukai and Saicho (Dengyo Daishi, 767–822), the founder of Tendai Buddhism in Japan. During this exchange, Kukai bestowed certain secret teachings and initiations on Saicho, whose goal was to achieve an even deeper understanding of esoteric Buddhism.

Temple Grounds

The main approach leads to the hall dedicated to Higiri Jizo, a bodhisattva believed to grant wishes to worshippers who set a period of time and dutifully visit each day to pray. Along the way is a stone stupa with rows of small Jizo statues dedicated by parishioners. A memorial pagoda for Prince Sawara and a 13-story stone pagoda can be found nearby. The Hondo enshrining the Hachiman Kobo Gattai Daishi statue is located toward the back of the precincts, and a sculpture of Fudo Myo-o, the Immovable Wisdom King, stands guard outside. The Bishamondo Hall houses the statue of "Melancholic Bishamonten," a rare portrayal of the typically fierce deity with a somber expression. Chinju Hachiman Shrine in the southwest corner of the grounds is dedicated to Hachiman, the protector of the temple.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

乙訓寺

長岡京市にある乙訓寺は、色とりどりの牡丹で有名です。珍しい本尊や、特徴的な表情の守護神毘沙門天など、興味深い仏像が数多く安置されています。乙訓寺の歴史は古く、京都遷都の前後に起こったいくつかの重要な出来事と関係があります。このお寺は真言宗に属しています。

牡丹寺

乙訓寺の境内には香り豊かな大輪の牡丹が約1000株咲きます。最初の花は1940年に、台風後の乙訓寺の復興を目的として、奈良県にある真言宗総本山長谷寺から寄贈されました。現在は、正門から参道の両側に多くの牡丹が植えられ、境内や本堂前にも花壇が設けられています。4月には、ピンクや紫、黄色、白の色合いに咲く牡丹が満開になります。

初期の歴史

伝承によると、乙訓寺の起源は、日本での仏教を広めた聖徳太子（574年～622年）がこの地域に建立したとされています。784年には都が平城京（現在の奈良）から長岡京に移され、桓武天皇（737年～806年）は乙訓寺を大幅に拡張しました。

翌年、遷都を担当した廷臣 藤原種継（737年～785年）が暗殺されました。捜査の結果、天皇の弟である早良親王（750年？～785年）の関与が疑われました。ある説によると、親王は長岡京への遷都に反対する勢力と近い関係にありました。親王は乙訓寺に幽閉され、後に追放を宣告されましたが、道中で謎の死を遂げます。その後、干ばつや飢饉、そして皇族の死などの災難が長岡京を襲いました。それらは早良親王の怨霊によるとされました。その結果、長岡京に首都が移ってからわずか10年後の794年に、平安京（現在の京都）へと都が移されることになりました。

空海と最澄、二人の偉大な仏教の師

真言宗の開祖であり強い影響力を持つ僧 空海（弘法大師 774年～835年）は、811年に乙訓寺の住職に任命されました。寺伝によると、空海が八幡大菩薩の仏像を木から彫っていると、その神は老人として空海の前に現れ、二人は木像を一緒に完成させました。八幡が空海をモデルに胴体を彫り、空海が八幡をモデルに頭を彫り、二人で仏像を作り上げました。この珍しい像は「八幡弘法合体大師」と呼ばれ、現在では寺院の本尊となっており、33年に一度だけ一般公開されます。812年、乙訓寺は空海と日本の天台宗の開祖 最澄（伝教大師 767年～822年）の出会いの場となりました。最澄は密教をさらに深く理解することを目標としていたため、この交流の中で、空海は最澄にある秘法と灌頂を受けました。

境内

参道は、誓った日数だけ参拝すると願いが叶うとされる日限地蔵尊を祀るお堂に通じています。近

くには、信者によって奉納された小さな地藏尊が並ぶ石塔が立っています。周辺には早良親王供養塔や十三重の石塔があります。境内の奥には合体大師像を安置する本堂があり、その外には不動明王像が鎮座しています。毘沙門堂には、一般的に荒々しい表情を浮かべていることが多い神を、陰鬱な表情を表した珍しい仏像「深い憂いをたたえた毘沙門天」が安置されています。境内の南西隅にある鎮守八幡神社には寺院の守護神である八幡が祀られています。

007-0014

Hoshakuji Temple

大原野保勝会

【タイトル】 宝積寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Hoshakuji Temple

Hoshakuji, often called the “treasure temple,” owns many valuable examples of Buddhist statuary and ritual tools. The most notable are five statues that portray King Enma, the Judge of hell, and his four attendants. It is the oldest known set depicting this group of divinities. The temple treasures also include a lucky hammer and wand that have been used to bestow good fortune on worshippers for centuries. A ritual called Oni Kusube, held in April, uses peach wood bows, mugwort arrows, cypress leaves, and *kagami mochi* rice cakes to exorcise demons. The tradition is thought to reflect the earliest style of ceremonies to ward off evil.

History and Legends

Following a decree by Emperor Shomu (701–756), the monk Gyoki (668–749) founded Hoshakuji in 724. According to legend, the temple was built to enshrine the wish-granting *kozuchi* hammer and *uchide* wand that the emperor received from a divine dragon in a dream. In another tale, an imperial procession in 784 was stalled by floods that washed away a bridge until an old man appeared and walked upon the water, miraculously restoring the bridge before vanishing in a ray of light that shone toward Hoshakuji. Upon inspection, the feet of the temple’s statue of Kannon, the bodhisattva of compassion, turned out to be wet, and it became known as the “bridge-building Kannon.”

Throughout history, Hoshakuji was occasionally embroiled in fighting that occurred around Mt. Tennozsan. During the Battle of Yamazaki in 1582, the powerful warlord Toyotomi Hideyoshi (1537–1598) used the temple as the base for his troops. In 1864, there was an attempted rebellion against the Tokugawa shogunate at the Kinmon Gate

to Kyoto Imperial Palace. After the incident, the remaining anti-shogunate forces set up camp at Hoshakuji before making their last stand on Mt. Tennozan.

Enmado Hall

The temple's most famous statues depict King Enma, the overseer of Hell, and his four administrators. Enma, who judges the spirits of the deceased, is portrayed wearing a large crown and holding a ceremonial baton. Around him are Shiroku, Shimyo, Kushojin, and Ankoku-doji, deities that write down misdeeds, read out crimes, announce judgments, and record verdicts. The statues date to the Kamakura period (1185–1333) and are nationally designated Important Cultural Properties. Worshippers pray to Enma for the forgiveness of their sins, and a special post box set up in the hall can be used to “send” him letters of repentance.

Temple Grounds and Halls

The Hondo enshrines the temple's principal object of worship, a Kamakura-period statue of the Eleven-Headed Kannon, a nationally designated Important Cultural Property. The Kozuchinomiya Hall contains countless wooden figures of Daikokuten, one of the Seven Gods of Fortune, a *takarabune* (“treasure ship”) carving that depicts all the seven gods, and a *kozuchi* hammer and *uchide* wand used in rituals to bestow good luck and grant wishes. In the past, a worshipper's hand would be tapped with these sacred tools three times as a blessing to be carried home in a closed fist, but now the blessings are ritually placed in a small, bright-colored pouch. The pouches also serve as votive tablets (*ema*) on which to write wishes and hang outside the hall.

Several reminders of Toyotomi Hideyoshi's presence remain on the temple grounds. A three-story pagoda, called the “one-night tower,” is said to have been built by his forces in a single night. The “success stone” near the Hondo is where Hideyoshi reportedly sat, contemplating his goal to unify Japan. It is said that visitors who sit on the stone may be similarly blessed with success in life. (Please ask a monk or temple staff for permission before taking a seat.)

上記解説文の仮訳（日本語訳）

宝積寺

「宝寺」とも呼ばれる宝積寺には、貴重な仏像や仏具が数多く所蔵されています。最も注目すべきは、地獄の王である閻魔大王と4人の従者の像です。これらの5体を表現した一式の像としては最古の彫像として知られています。寺宝は、何世紀にもわたって参拝者に幸運を授けるために使用されてきた打出と小槌です。4月に行われる「鬼くすべ」と呼ばれる儀式は、桃の木で作られたの弓とよもぎの矢、檜の葉、そして鏡餅を使って悪魔を追い払うものです。この伝統は、最も初期の厄除け行事の様式を反映していると考えられています。

歴史と伝説

聖武天皇（701年～756年）の勅命を受けて、僧である行基（668年～749年）が724年に宝積寺を建立しました。伝説によると、この寺院は聖武天皇が夢の中で竜神から受け取った願いを叶える小槌と打出を祀るために建てられました。別の物語として、784年に天皇の行列が洪水により橋が流されて行き詰まっていた際、老人が現れて水の上を歩き奇跡的に橋を修復し、その後宝積寺に向けて輝く一筋の光の中に消えた、ということがあります。この寺の観音菩薩像の足を確認してみると、足が濡れていたことから「架橋観音」と呼ばれるようになりました。

歴史上、宝積寺は天王山周辺の戦いに巻き込まれることもありました。1582年の山崎の合戦では、屈強な武将、豊臣秀吉（1537年～1598年）が、軍隊の拠点をお寺に置きました。1864年、京都御所の禁門で徳川幕府への反乱未遂に終わりました。この事件後、残された反幕府軍の兵たちは、宝積寺に陣を置き、天王山で最後の抵抗を行いました。

閻魔堂

この寺院で最も有名な彫像は、冥界の総司である閻魔大王とその4人の従者です。死者の霊を裁く閻魔大王は大きな冠をかぶり、儀礼用の笏を持った姿です。彼の周りには悪行を書き留め、犯罪を読み上げ、判決を發表し、評決を記録する役目を司る「司録」「司命」「俱生神」そして「閻黒童子」がいます。これらの彫像は鎌倉時代（1185年～1333年）に作られたもので、国の重要文化財に指定されています。参拝者は閻魔大王に罪の許しを乞い、堂内に設置された特別な投函箱を使って閻魔様に懺悔の手紙を“送る”ことができます。

寺院の境内と本堂

本堂には、寺院の本尊である国指定重要文化財の鎌倉時代の十一面観音立像が祀られています。小槌宮には、七福神の一柱である大黒天の無数の木像や、七福神の姿を彫った宝船、そして開運や心願成就のための神事に用いられる小槌や打出などが納められています。以前の祈祷では、参拝者の手を仏具で軽く3回叩き、参拝者はこぶしを握りそのご利益を家に持ち帰っていましたが、現在ではご利益は小さな明るい色の袋に入れています。また、別の巾着は願い事を書いて会場の外に吊るすための絵馬としても使用することができます。

寺院の境内には豊臣秀吉の存在を偲ばせるものがいくつか残っています。「一夜塔」と呼ばれる三重塔は、彼の軍によって一夜にして建てられたと言われています。本堂の近くにある「成功の石（出

世石)』は、秀吉が座り日本統一という目標を熟考したとされる場所です。石に座った参拝者は、秀吉同様に出世のご利益があると言われています（お座りになる前に、僧侶またはお寺のスタッフに許可をもらって下さい）。

007-015

Rikyu Hachimangu Shrine

大原野保勝会

【タイトル】 離宮八幡宮

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Rikyu Hachimangu Shrine

In the ninth century, a head priest of Rikyu Hachimangu Shrine invented a press for seed oil extraction, which became the origin of perilla seed oil production in Japan. At first, the oil served as fuel for lamps in the imperial court, shrines, and temples, but its use gradually spread to the general public. Rikyu Hachimangu prospered from making and selling this commodity for a very long time, becoming a monopoly due to privileges bestowed by the court. All perilla seed oil merchants were required to obtain special permission from the shrine.

Shrine Founding

Rikyu Hachimangu is also known for its origin story and sacred well. According to legend, the monk Gyokyo founded the shrine in 859 when he transferred the deity Hachiman from Kyushu to Kyoto by order of the emperor. After discovering a spring of pure water, Gyokyo chose it as the location for the shrine now known as Rikyu Hachimangu. The well, named Iwashimizu, can still be seen to the left of the main sanctuary enshrining Hachiman. Notably, Iwashimizu Hachimangu Shrine on Mt. Otokoyama in Kyoto Prefecture has a similar origin story.

Shrine Grounds

To the right of the torii gate is a statue of a priest presenting a vessel of perilla seed oil, a black and yellow sign developed for the shrine's 1,100th anniversary to be used by oil stores across Japan, and signboards with illustrations of oilseed presses. Rikyu Hachimangu sells bottled oil, votive tablets depicting the priest's statue and an oil seller, and *omamori* amulets that read *yudan taiteki* ("carelessness is one's greatest foe"). This idiom contains word play, as the term for carelessness (*yudan*) is written

with kanji characters that mean “to run out of oil.” Half-scale model presses donated to the shrine are displayed to the public during festivals.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

離宮八幡宮

9世紀に離宮八幡宮の宮司が種子から油を搾る搾油機を発明し、これが日本の荳胡麻油製造の始まりとなりました。当初、荳胡麻油は朝廷や神社仏閣の灯火の燃料として使われましたが、徐々に一般人にもその利用が広まりました。離宮八幡宮は荳胡麻油の製造と販売で長く栄え、朝廷によって独占的な特権を得るに至りました。荳胡麻油を販売する全ての商人に、この神社からの特別な許可を得ることが必要となりました。

由緒

離宮八幡宮は、その由緒と霊泉井戸でも知られています。伝説によると、859年に僧の行教が天皇の命により八幡神を九州から京都に遷座し、この神社を創建しました。行教は清水が湧き出る場所として、現在の「離宮八幡宮」の地を発見し、建立地として選びました。八幡を祀る本殿の左側には「石清水」という井戸が今も残っています。興味深いことに、京都府の男山にある石清水八幡宮にも似たような由緒があります。

境内

鳥居の右側には、荳胡麻油の容器を納める宮司の像や、神社創建1100年を記念してつくられた全国の油脂業者が使用するための黒と黄色の標識、そして搾油機のイラストが描かれた看板があります。離宮八幡宮では、瓶詰めした荳胡麻油や、宮司の像と油売りを描いた絵馬、そして「油断大敵」（直訳：「不注意は最大の敵である」）のお守りを販売しています。この熟語は不注意（ゆだん）の表現を「油がなくなる」という意味の漢字で書くという、言葉遊びのニュアンスが含まれています。神社に奉納された搾油機のサイズを半分にした模型は、祭りの際に公開されます。

007-016

Jizoin Temple

大原野保勝会

【タイトル】 地蔵院

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Jizoin Temple

The dense bamboo grove on the grounds of Jizoin Temple is the origin of its nickname, “temple of bamboo.” Jizoin was built in 1367 by Hosokawa Yoriyuki (1329–1392), a prominent official in the Ashikaga shogunate, who invited the Zen monk Hekitan Shuko (1291–1374) to serve as the founder. The temple was burned down in the Onin War (1467–1477) and abandoned until 1686, when it was rebuilt on a smaller scale. Apart from the bamboo, Jizoin is now best known for its moss-covered garden and bright autumn foliage. The temple belongs to the Rinzai school of Buddhism.

Temple Grounds

The path from the Somon Gate is lined with maple trees and the tall, thick-stalked *moso* variety of bamboo. The Hondo (Main Hall) is also called the Jizodo (Jizo Hall) and enshrines the principal object of worship: a statue of Jizo Bodhisattva, who is often associated with protecting travelers and children. The figure is said to have been carved in the Heian period (794–1185). To the left of the Hondo are graves of the temple founders and a statue of the poet-monk Ikkyu (1394–1481) with his mother. Ikkyu, believed to be an illegitimate son of the emperor, is said to have lived in hiding at Jizoin as a child.

Hojo (Abbot's Quarters) and Garden

The detached Hojo building contains a variety of artwork, which changes depending on the season. This includes sliding screens with paintings and calligraphy by the current head of the Hosokawa family, a folding screen depicting the sixteenth-century Christian noblewoman Hosokawa Gracia, screens with *Ten Ox-Herding Pictures* illustrating stages of progression towards enlightenment, and a wood carving of a

dragon preserved from the previous main hall. A small altar enshrines a statue of Bishamonten, the guardian deity of the north. One of the rooms has a heart-shaped *inome* (“boar’s eye”) window overlooking the bamboo, maples, and camellias behind the Hojo. The *inome* shape is believed to protect against fire because boars are the first animals to notice wildfires and flee.

In some Buddhist traditions, monks practice *zazen* (seated meditation) facing a wall or with eyes closed to prevent distraction, but the Rinzai school allows monks to sit on the veranda facing the garden when they meditate. The Garden of the Sixteen Arhats next to the Hojo is a dry landscape garden that became overgrown with moss when Jizoin lay in ruin. Arhats (*rakan* in Japanese) are saint-like figures who have achieved enlightenment and understand the truth of the Buddha’s teachings. In the garden, they are represented by large stones that are turned slightly to the left as if reverently looking toward Iwashimizu Hachimangu, an important mountaintop shrine south-south-east of the temple that was founded to protect Japan and the imperial family. Among the garden plants are a 500-year-old pine tree and a 350-year-old camellia.

A custom-built space behind sliding doors in the Hojo conceals a sleek black piano. On days when Jizoin holds special Temple Piano events, the chirping of birds and rustling of the wind in the garden provide a natural background to complement the sounds of music.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

地藏院

嵐山の地藏院の境内にある圧巻の竹林は、「竹の寺」という愛称の由来となっています。地藏院は、1367年に足利幕府の高官、細川頼之（1329年～1392年）が禅僧の碧潭周皎（へきたんしゅうこう、1291年～1374年）を開祖として招いて建立しました。この寺は応仁の乱（1467年～1477年）で焼失し、1686年まで放置され、その後規模を縮小し再建されました。現在、竹林以外にもこのお寺は苔に覆われた庭園と鮮やかな秋の紅葉でよく知られています。地藏院は臨済宗のお寺です。

境内

総門から続く参道には紅葉や、背の高くて茎が太い孟宗という竹の一種が植えられています。本堂は地蔵堂とも呼ばれ、本尊である地蔵（旅人や子供を守るとされています）立像が安置されています。平安時代（794年～1185年）に彫られたと言われています。本堂の左側には、寺院の創立者の墓と歌僧である一休（1394年～1481年）とその母親の彫像があります。一休は天皇の落胤とされ、幼少期に地蔵院にて人目を避けて隠遁生活を送っていたと伝えられています。

方丈と庭園

少し離れた方丈には様々な芸術品が展示されています。（季節によって、展示品が入れ替えわる可能性があります。）細川家現当主の襖絵や襖書、16世紀のキリシタン貴族細川ガラシャを描いた屏風、悟りへの歩みを描いた「牛十図」屏風、旧本堂より保管された龍の木彫りなどが展示されています。小さな祭壇には北方の守護神である毘沙門天の像が安置されています。部屋の1つにはハート型の猪目窓があり、方丈の背後にある竹、紅葉、椿を一望できます。イノシシは山火事に最初に気づいて逃げる動物であるため、猪目の形は火事から身を守ると信じられています。

一部の仏教の宗派では、僧侶は気を散らさないように壁に向かって座禅をするか、目を閉じて座禅をすることを求められますが、臨済宗では僧侶が縁側に座って庭に向かって座禅することを認めています。方丈の隣にある「十六羅漢の庭」は、枯山水の庭園ですが、地蔵院が荒廃した際に苔が生い茂りました。羅漢（arhat、日本語でrakan）とは、悟りを開き、仏陀の教えの真理を理解した聖人のような人物です。この庭園で羅漢は、わずかに左を向いた大きな石で表現されています。寺から南南東側の山頂にある、日本と皇室を守護するために創建された重要な石清水八幡宮を信心深く見つめているかのようです。また庭には、樹齢500年の松や樹齢350年の椿などの植物もあります。

方丈の引き戸の後ろを改築した専用スペースには、艶やかで黒いピアノが隠されています。「寺ピアノ」のイベントが開催される特別な日には、鳥のさえずりや、庭にそよぐ風の音が自然のバックミュージックとなってくれます。

007-017

Jojuji Temple

大原野保勝会

【タイトル】 浄住寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Jojuji Temple

Jojuji Temple is best known for its natural scenery and is particularly popular in autumn, when the maple trees lining the stone stairways turn vibrant colors. Square and tortoiseshell bamboo, two rare species of bamboo flourishing on the grounds, contribute to the peaceful atmosphere. As an Obaku Zen Buddhist temple, it retains characteristics of the Obaku architectural style and emphasizes *zazen* seated meditation practice.

Brief History

The temple is said to have been founded in 810 by the Tendai Buddhist monk Ennin (Jikaku Daishi, 794–864). The noble Hamuro family took over patronage of Jojuji, rebuilding it in the mid-thirteenth century and again in 1689 as an Obaku temple. As the Obaku school was only introduced from China in the seventeenth century, strong influences of Ming-dynasty (1368–1644) culture can be observed in the temple architecture, sutra-reading style, and monks' attire.

Hondo (Main Hall)

The Hondo also serves as a meditation hall. The principal object of worship is a statue of Shakyamuni, the historical Buddha, and several other sculptures are placed in separate alcoves on both sides. In typical Obaku architectural style, the Hondo, the Ihaido (Memorial Tablet Hall), the Kaisando (Founder's Hall), and the Juto Pagoda are connected to each other in a straight line.

Hojo (Abbot's Quarters)

The building was once part of a mansion belonging to a daimyo lord who inherited his position at age two and is constructed with hidden spaces for guards and an infant-sized hole for emergency escapes. The artworks on display include the *Cloud Dragon* screen by Kano Eigaku (1790–1867) and sliding panels depicting Chinese scenery. The veranda overlooks a pond garden with water lilies. The Hojo is open to the public for special viewing during Golden Week (end of April to early May) and in autumn.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

浄住寺

浄住寺は自然の景観の美しさで最も知られており、石段の両側に植えられた紅葉の木々が鮮やかな色に変わる秋の季節は、特に人気があります。境内に生い茂る2種類の希少な竹（四方竹と亀甲竹）が、落ち着いた雰囲気醸し出しています。黄檗宗の寺院ならではの建築様式の特徴が見られ、坐禅が重んじられています。

略歴

この寺院は、810年に天台宗の僧 円仁（慈覚大師、794年～864年）によって創建されたと伝えられています。浄住寺の援助を引き継いだ公家の葉室家が13世紀半ばに再建し、1689年には黄檗寺として再建されました。黄檗宗は17世紀に中国から伝わったため、寺院の建築や読経の様式、僧侶の法服には明王朝（1368年～1644年）文化の強い影響が見られます。

本堂

本堂は坐禅堂としても使われています。本尊は歴史的に実在した仏である釈迦如来像で、床の間の両側には他にも数体の仏像が安置されています。本堂の後方より位牌堂、開山堂、寿塔が直線的に並んでいる様子は、典型的な黄檗建築様式を特徴づけています。

方丈

方丈の建物はかつて大名が所有していた座敷の建物で、その大名は2歳でその地位を継承したため、警護人が隠れるスペースや幼児サイズの緊急脱出用の穴があります。狩野永岳（1790年～1867年）の雲龍図屏風や、中国の風景を描いた襖などの作品が展示されています。縁側からは睡蓮が咲く池を眺めることができます。方丈の特別公開はゴールデンウィーク（4月末～5月上旬）と秋の期間のみとなります。

007-018

Matsuno'ō Taisha Shrine

大原野保勝会

【タイトル】 松尾大社

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Matsuno'ō Taisha Shrine

Matsuno'ō Taisha Shrine, often referred to as “Matsuo-san,” is a Shinto shrine that has long been visited by sake and miso producers to pray for prosperous business and to draw water from the sacred well on the grounds. Matsuno'ō Taisha is said to have been founded in 701 by members of the influential Hata clan even before Kyoto became the capital of Japan in 794. Its main deities are Oyamagui no Kami, a god of mountains, and Ichikishimahime no Mikoto, a goddess of water travel; Tsukiyomi, a deity of the moon, is worshipped at an auxiliary shrine to the south. Matsuno'ō Taisha is well known for turtle statuary, bright yellow *yamabuki* flowers that bloom in spring, three artistic gardens, and amulets related to producing and drinking sake.

Main Sanctuary

The shrine's Honden (Main Sanctuary) is built in the distinctive *matsuo-zukuri* architectural style. It is characterized by a sweeping gabled roof that is equally long at the front and at the back of the structure, as opposed to the more common *nagare-zukuri* style, in which the roof is asymmetrical, longer in the front and shorter in the rear. Many ancient wooden buildings in Kyoto have been lost to fire over the centuries, but the Honden of Matsuno'ō Taisha, constructed in the Oei era (1394–1428) and substantially repaired in 1542, avoided this fate, making it one of the oldest in the city. The building is a nationally designated Important Cultural Property.

Turtles as Sacred Messengers

According to legend, Oyamagui no Kami, the primary deity of the shrine, once traveled along a nearby river, alternating between riding a turtle and a koi carp. The two creatures are now regarded as his sacred messengers, and turtle imagery is

particularly prominent throughout the shrine grounds. The prayer hall is flanked by small statues of a turtle and a koi, and other turtle sculptures are placed next to the water basin at the entrance and the Kame no I (“turtle well”) near the sacred waterfall. The most popular is the small black statue of a turtle on a rock, called “Nadekame-san,” which is believed to bring good luck to those who rub it.

Three Gardens by Shigemori Mirei

Matsuno’o Taisha has three distinct gardens designed by the renowned landscape architect Shigemori Mirei (1896–1975). They were completed in 1975, becoming the last of Shigemori’s many creations combining traditional garden aesthetics with contemporary elements. The Kyokusui (“winding stream”) Garden has a shallow stream meandering through an undulating, stone-paved “ground” decorated with rocks and artfully arranged *satsuki* azalea bushes. It is reminiscent of Heian-period (794–1185) gardens where nobles held lavish poetry banquets. Further along the path is the Joko (“ancient times”) Garden, which evokes the image of deities descending from heaven onto primeval mountaintops suggested by large, jagged rock formations. Just outside the shrine’s Romon Gate is the Horai (“Mt. Penglai”) Garden representing the Chinese paradise of eternal youth as a Kamakura (1185–1333) style pond garden, where large stones symbolize islands in a sea. The ticket to visit all three gardens includes entry to the Shinzokan Statuary Hall.

Shinzokan Statuary Hall

A small treasure hall between the Kyokusui Garden and the Joko Garden contains 21 sacred statues. The most notable are three large wooden sculptures believed to portray the shrine’s main deities: Oyama-gui no Kami, Ichikishimahime no Mikoto, and Tsukiyomi. It is very rare for Shinto deities to be depicted in physical form as statues, as opposed to Buddhist images, which serve as objects of worship. The sculptures of the three deities at Matsuno’o Taisha were carved in the Heian period (794–1185) and are among the oldest and best-preserved examples of Shinto statuary.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松尾大社

「松尾さん」と呼ばれる松尾大社は、古くから酒造りや味噌造りに携わる人々が商売繁盛を祈願し、境内にある神聖な井戸から水を汲むために参拝をしてきた神社です。松尾大社は、京都が日本の都になる794年より前の701年に、豪族の秦氏によって創建されたと言われています。主祭神は山の神である大山咋神と水運の女神である市杵島姫命です。南にある摂社には月の神である月読尊が祀られています。松尾大社は、亀の像や春に咲く鮮やかな黄色の山吹、芸術的な3カ所の庭園、そして酒造りや酒にまつわるお守りで有名です。

本殿

神社の本殿は、特徴的な「松尾造」の建築様式で建てられており、一般的な前側の屋根が長く、後ろ側の屋根が短い、非対称の「流造」とは対照的に、建物の前後が同じ長さで反りのついた切妻屋根が特徴です。何世紀にもわたる年月の中で、京都にある多くの古い建造物は火災によって失われてきましたが、応永（1394年～1428年）に建てられ、1542年に大規模な修復が行われた松尾大社の本殿はその運命を免れ、市内でも最古の建造物のひとつとなりました。建物は国の重要文化財に指定されています。

神の遣いである亀

伝説によれば、この神社の主祭神である大山咋神は、かつて近くの川を亀と鯉とを交互に乗り替えながら旅していたそうです。現在、この2匹の動物は神の遣いとされ、境内全域では特に亀の像が際立っています。神殿の両側には小さな亀と鯉の像があり、入口付近にある手水舎と神聖な滝の近くにある亀の井の隣にも亀の像が置かれています。最も人気があるのは「なでかめさん」と呼ばれる岩の上の小さな黒い亀の像で、撫でると幸運が訪れると信じられています。

重森三玲による3カ所の庭園

松尾大社には、有名な作庭家である重森三玲（1896年～1975年）が設計した名園が3カ所あります。これらの庭は1975年に完成しましたが、伝統的な美学と現代的な要素を組み合わせた庭を多く手がけた重森氏の遺作となりました。「曲水の庭」には、起伏をつけて石が敷き詰められた庭を蛇行して流れる小川や、飾りの岩と巧みに配置されたサツキの茂みがあります。ここは、貴族たちが雅な宴を催した平安時代（794年～1185年）の庭園を彷彿とさせます。さらに小道に沿って進むと、尖った巨岩が連なる原始の山頂に天から降臨する神々を連想させる「上古の庭」があります。神社の楼門のすぐ外には、鎌倉（1185年～1333年）様式の池泉式庭園として中国の不老の楽園を表す「蓬莱の庭」があり、大きな石で海に浮かぶ島々が表現されています。庭園3カ所を訪れるためのチケットでは、神像館も拝観できます。

神像館

「曲水の庭」と「上古の庭」の間にある小さな宝物館には、21体の神像が安置されています。最も注目に値するのは、神社の主神である大山咋神、市杵島姫命、月読命を表現したとされる3体の大きな木製の神像です。彫像が崇拜の対象である仏教とは対照的に、神道の神々が彫像として

物理的に表現されることは非常に稀です。平安時代（794年～1185年）に彫られた松尾大社の三神は、最も古く、最も保存状態の良い神像です。

007-019

Chochikukyo (Former Residence of Fujii Koji)

大原野保勝会

【タイトル】 聴竹居

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Chochikukyo (Former Residence of Fujii Koji)

Chochikukyo was designed by the architect Fujii Koji (1888–1938) to serve as a family residence and an example of how the traditional Japanese-style house could be improved by incorporating modern, Western, and environmentally friendly design. It was completed in 1928 and is considered a masterpiece of timber modernism.

Chochikukyo was Fujii’s fifth house, the last in a series of residential improvement projects aimed at perfecting his ideal of a home best suited to the Japanese climate and lifestyle. His innovative approach to enhancing the livability and comfort of a family dwelling using the surrounding natural environment continues to generate interest in the study of Japanese architecture. In 2017, Chochikukyo became a nationally designated Important Cultural Property.

Visits to Chochikukyo require reservations through the official Japanese website. Guided tours of the main house and the pavilion are held on Wednesdays and Sundays except the Obon (mid-August) and New Year (end of December to early January) holiday seasons. The price is 1,500 yen for adults and 1,000 yen for students. Tours that also include the detached tea house take place on Saturdays once a month; a fee of 2,500 yen is charged for adults and 2,000 yen for students. Reservations must be made at least three days in advance. Tours are conducted only in Japanese.

The Chochikukyo Residence and Grounds

Chochikukyo (literally “the home where you can hear the rustling of the bamboo”) is located on Mt. Tennozan in Oyamazaki, Kyoto Prefecture. The poetic name was inspired by the bamboo grove that once surrounded the property; Fujii also used it as part of his nom de plume for the art world. In the past, the grounds of the Fujii family

residence covered about 40,000 square meters and contained two smaller houses, a house for Fujii's mother, a garage, a kiln, a carpentry workshop, a tennis court, and a swimming pool. Chochikukyo itself consisted of three buildings: the main family residence, a pavilion for private contemplation, and a tea house for entertaining guests.

The main residence is a creative blend of traditional Japanese and Western architecture with art deco influences. The living room has wooden flooring and a tatami-mat section, the latter raised so that those sitting in the room, be it in chairs or on the tatami, are at the same eye level. In a corner location, separated by arched partition walls, is the dining room, which was designed for the entire family to sit together. Food was passed directly from the kitchen through serving hatches disguised by cabinet doors.

The chairs in the drawing room were specially designed by Fujii for comfort while wearing kimono. A large tokonoma alcove incorporates a two-way light fixture that illuminates both the room and the tokonoma display. The study has desks, shelves, and cabinets for Fujii and his children; the walls are covered with traditional *washi* paper. The large veranda is notable for its many design features, including the elimination of select pillars for a better view. The top and bottom parts of the windows are made of frosted glass to obscure the sight of the eaves and create a "frame" for the garden landscape and the scenery beyond.

Fujii applied his expertise in environmental engineering to the design of the entire house, especially in regard to temperature control in the hot summer months. The lengths of the eaves were calculated to protect the rooms from the heat of the sun, vents were built into the roof for ventilation, and an underground air pipe opening into a valley at a lower altitude brought cooled fresh air from the outside directly into the living room. The residence was outfitted with the newest technology and appliances available at the time, including outlets, room heaters, and electric refrigerators from Switzerland.

The Architect Fujii Koji

Fujii was born in Fukuyama, Hiroshima Prefecture, the second son of a wealthy family of sake brewers. He graduated from Tokyo Imperial University (present-day University of Tokyo) in 1913 with a degree in architecture and was employed as a

designer by Takenaka Corporation, now one of the largest general contracting firms in Japan. One of the projects led by Fujii was designing the old Osaka Head Office of the Asahi Shimbun newspaper that was constructed in 1916 (no longer extant).

After leaving the corporation in 1919, Fujii spent nine months traveling in Europe and the United States to study Western architecture. The following year, the founder of the Faculty of Architecture at Kyoto Imperial University (now Kyoto University) offered him a position to hold lectures on architectural drawings. Around that time, Fujii acquired a large plot of land in Oyamazaki and began building experimental houses to further his research on residential architecture.

During his time at Kyoto Imperial University, Fujii earned a doctorate in engineering and became a professor. He also studied traditional Japanese arts such as ikebana flower arranging, ceramics, and tea (*chanoyu*). Fujii died of cancer at the age of 49, and his grave, which he designed himself, is located at Nison-in Temple in Sagano.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

聴竹居（旧藤井厚二自邸）

聴竹居は、家族ための住居として建築家の藤井厚二（1888～1938年）によって設計され、近代的かつ西洋的、そして環境に優しいデザインを取り入れることによって、伝統的な日本家屋がどのように改善できるかを示す一例となっています。1928年に完成し、木造モダニズムの傑作とみなされています。聴竹居は、日本の気候と生活習慣に最も適した家という理想を完成させることを目的とした一連の住宅改良プロジェクトの最後となる、藤井にとって5番目に造った家でした。自然環境を利用することで家族の住みやすさや快適性を向上させるという彼の革新的なアプローチは、日本の建築研究において現在も引き続き関心を集めています。聴竹居は2017年に国指定の重要文化財となっています。

聴竹居への訪問には、公式ウェブサイトからの予約が必要です。お盆（8月中旬）と年末年始を除く毎週水曜と日曜に本屋と閑室のガイドツアーが開催されています。料金は大人1,500円、学生1,000円です。離れの茶室を含む特別見学は月1回土曜日に開催されており、料金は大人2,500円、学生2,000円です。3日前までの予約が必要で、ツアーは日本語のみで行われます。

聴竹居と敷地

聴竹居「意味訳：竹の葉擦れの音が聴こえる住まい」は京都府大山崎町の天王山にあります。この詩的な名前は、かつて敷地を囲んでいた竹林にインスピレーションを得たものでしたが、藤井が芸術の場においても雅号として使用しました。藤井家の邸宅として使われていた当時の敷地は約4万平方メートルで、聴竹居より小住宅が2棟、お母様の家とガレージ、窯、大工仕事場、テニスコート、そしてプールなどがありました。聴竹居は、本屋と静かに熟考する部屋としての閑室、そして客人をもてなす茶室の3軒の建物から構成されていました。

本屋は、伝統的な日本建築とアールデコの影響を受けた西洋建築が創造的に融合されています。リビングルームにはフローリングと畳の部分があり、椅子に座っている人と同じ目線になるように畳のエリアは高さが工夫されています。アーチ型の仕切り壁で分けられた角の場所には、家族全員が一緒に座れるよう設計されたダイニングルームがあります。食事は、キャビネットのドアで隠された配膳カウンターを通じてキッチンから直接渡されます。

客室の椅子は、着物を着て快適に座れるよう藤井が特別にデザインしたものです。広い床の間には、部屋と床の間の両方を照らす2方向の照明器具が取り付けられています。読書室には、藤井と子供たちのための机や棚、そして戸棚があります。壁は伝統的な和紙で覆われています。特に大きな縁側は、柱をなくして眺望を良くするなど、デザイン上の工夫が多く見られます。窓の上下に採用したすりガラスが軒を隠し、庭の風景や向こうの景色の“額縁”の役割を果たしています。

藤井は環境工学の専門知識を住宅全体の設計や、特に夏の暑い時期の温度管理のために応用しました。太陽の熱から部屋を守るように軒の長さが計算され、換気のために屋根に設けられた通気口と低地の谷に通じる地下の導気筒が、外部の冷えた空気を直接居室空間へ運びます。この邸宅には、コンセント、ストーブ、スイス製の電気冷蔵庫など、当時利用可能な最新の技術や設備が装備されていました。

建築家藤井厚二

藤井厚二は広島県福山市の裕福な造り酒屋の次男として生まれました。彼は1913年に東京帝国大学（現東京大学）の建築学科を卒業し、現在は日本のゼネコン業界において最大手のひとつである竹中工務店に設計者として採用されました。藤井が主導したプロジェクトのひとつが、1916年に建てられた旧朝日新聞大阪本社（現存しない）の設計でした。

1919年に会社を辞めた後、藤井は西洋建築を学ぶために9ヶ月間ヨーロッパとアメリカを旅しました。翌年、京都帝国大学（現京都大学）建築学科の創設者から、建築図面に関する講義の依頼がありました。その頃、藤井は大山崎に広大な土地を取得し、住宅建築研究を進めるため実験住宅を建て始めました。

藤井は京都帝国大学での期間中に、工学博士の学位を取得し教授となりました。また、生け花や陶芸、そして茶の湯などの日本の伝統芸術についても学びました。49歳に癌で亡くなり、自ら設計した墓は嵯峨野の二尊院にあります。

007-020

Kyoto Bamboo Park

大原野保勝会

【タイトル】 洛西竹林公園

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Kyoto Bamboo Park

In 1981, Kyoto Bamboo Park was established as part of an effort to preserve the city's bamboo groves that had diminished because of land development. The park's purpose is to educate visitors about bamboo, its diversity, ecology, and the history of bamboo cultivation in the area. The vast complex contains a museum, a shop with bamboo products and souvenirs, a traditional tea room, a spacious strolling garden with around 110 native and non-native species of bamboo, and a recreation area.

Bamboo Museum

Text panels, photos, and display items cover botanical data, cultivation and harvesting techniques, and the use of bamboo in traditional architecture and crafts. A noteworthy exhibit is a recreation of the bamboo filament lightbulb that the US inventor Thomas Alva Edison (1847–1931) developed and manufactured using bamboo from Kyoto. Many of the panels include English translations.

One wall displays examples of high-quality bamboo produced in Kyoto for construction and decorative purposes. The natural state of each variety can be compared with stalks specially treated to achieve certain coloration or markings, as well as with square-shaped stalks grown by attaching a wooden frame to the young shoot. *Kyo-meichiku* (“Kyoto bamboo”) is designated one of the Traditional Industries of Kyoto. On the opposite side of the hall are examples of bamboo from other countries.

Across from the reception counter is a small shop with a wide assortment of bamboo items, such as chopsticks, coasters, tea whisks, baskets, toys, artwork, and other souvenirs.

Ecological Garden

The spacious garden with many walking trails contains about 110 varieties of bamboo. Signs provide each species' common name (in Japanese and romanized script), scientific name, and a brief description in Japanese. Each type of bamboo, whether endemic or imported, is planted in a location that takes topography, sunlight, and other environmental factors into consideration.

The quiet pathways are shaded by towering bamboo, creating a feeling of being one with nature. The appearance of the dense groves changes depending on the bamboo variety, and scenic views open up from various spots on the hillside. The garden is more remote than some other bamboo forests in Kyoto, making it an attractive location for photography. The curving paths conceal what lies beyond each bend, seeming to continue indefinitely through the bamboo.

In the middle of a grass lawn on the northeast side is a weeping cherry tree that blooms light pink in spring. The view of cherry blossoms swaying against verdant bamboo is often regarded as the epitome of springtime in Kyoto. Benches are set up on the lawn for visitors to sit and enjoy the atmosphere of the garden.

Historical Relics

One of the walkways leads to the Dodobashi Bridge, spanning a water-lily pond. Its predecessor was a wooden bridge that stood in the present-day Kamigyo ward of Kyoto. The wooden Dodobashi Bridge is said to have been the site of a fierce battle during the Onin War (1467–1477), which ravaged much of the city. The bridge was remade in stone and later moved to its current location in the park.

Many stone Buddhist statues and other objects are arranged in lines and groups in the garden's southeast corner. Some of them were originally grave markers, memorial pagodas, foundation stones, and lanterns. However, in 1569 they were used as construction material for the walls of the former Nijo Castle, built for the last

Ashikaga shogun, Yoshiaki (1537–1597). Some of the statues and pagodas look mostly intact, while others are significantly damaged or eroded.

Children's Square

To the southeast of the garden is Children's Square, a recreation area surrounded by a bamboo grove. It includes spacious lawns, a hillside playground with a slide, and a wading pool. Ramps, multipurpose restrooms, and ample seating make the square a fitting place to spend time with family.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

京都市洛西竹林公園

京都洛西竹林公園は1981年に、土地開発により減少した市内の竹林を保護する取り組みの一環として設立されました。公園の目標は、訪問者に竹の多様性や生態、そして地域の竹栽培の歴史について教育することです。広大な複合施設として、資料館や竹製品や土産物を扱うショップ、伝統的な茶室、約110種類の在来種および外来種の竹が植わる広々とした散策型庭園、そしてレクリエーションエリアを有しています。

竹の資料館

テキストパネルや写真の他に展示物として、竹の植物学的な情報や竹の栽培と収穫技術、建築や工芸における竹の素材や使われ方の紹介などがあります。注目の展示品は、米国の発明家トーマス・アルバ・エジソン（1847年～1931年）が京都の竹を使って開発・生産した竹フィラメント電球の復元です。パネルの多くには英訳が付いています。

壁の一面には、建築用や装飾用に京都で生産された高品質の竹が展示されています。各品種の自然な竹の状態や特定の色・模様を出すために特別処理が施された竹、そして木枠を取り付けて四角形に成長させた竹など、それぞれを比較することができます。京銘竹は京都の伝統産業に指定されています。また、その反対側には外国の竹が展示されています。

受付の向かいには小さなショップがあり、お箸やコースター、茶筌、かご、おもちゃ、美術品、そして竹製のお土産品などを幅広く取り揃えています。

生態園

多くの散策路が設けられた広大な庭園には、約110種類の竹が植えられています。標識には、各品種の一般的な名称（日本語とローマ字）や学名、そして日本語での簡単な説明が記載されて

います。固有種か輸入かに関わらず、それぞれの種類の竹は地形や日当たり、そしてその他の環境要因を考慮して植えられています。

背の高い竹の木陰に囲まれた静かな小道は、自然との一体感を感じさせます。竹の種類によって竹林の密集度合いが変わり、山腹の随所から美しい景色が広がります。この庭園は京都の他の竹林に比べて人里離れた場所にあるため、写真撮影の場所として魅力的です。曲がりくねった小道は、その先にあるものが隠すので、周りの竹が無限に続いているかのような印象を与えます。

北東側の芝生の真ん中には、春に淡いピンク色の花を咲かせる枝垂桜があります。青々とした竹に對し桜の花が揺れる様は、京都の春の代表的な風物詩といわれています。芝生にはベンチが設置されており、座って公園の雰囲気を楽しむことができます。

歴史的な遺物

歩道の1つは睡蓮の池にかかる百々橋に繋がっています。もともとは、現在の上京区にあった木製の橋で、京都の大部分を荒廃させた応仁の乱（1467年～1477年）の激戦地となった場所と言われています。橋は石で造り直され、その後公園内の現在地に移築されました。

庭園の南東の隅には石仏等が多数並んでいます。中には、もともと墓標、供養塔、礎石、灯籠だったものもあります。しかし、1569年に室町幕府最後となる足利将軍、足利義昭（1537年～1597年）のために築城された旧二条城の城壁の建材として使われました。一部の石仏・石塔はほとんど無傷に見えるものもあれば、著しく損傷したり侵食されたりしているものもあります。

子どもの広場

庭園の南東には、竹林に囲まれたレクリエーションエリアである子どもの広場があります。広々とした芝生や丘にある滑り台などの遊び場、そして浅い池などがあります。スロープや多目的トイレ、そして座れる場所も十分にあり、家族で過ごすのに最適な場所です。

007-021

Kyo-Takenoko Bamboo Shoots from Nishiyama

大原野保勝会

【タイトル】京たけのこ

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Kyo-Takenoko Bamboo Shoots from Nishiyama

Oharano and the entire mountainous Nishiyama area in the west of Kyoto are famous for *takenoko*: the spring delicacy of short, young bamboo shoots. Bamboo shoots develop underground and are harvested around the time they break through the soil in spring, before they can grow into tall stalks. After the rough exterior layers of the shoot are removed, the ivory-colored inner flesh can be boiled, grilled, fried, pickled, or cooked as any vegetable. Bamboo shoots from Nishiyama are reliably high in quality and are called *Kyo-takenoko* (“Kyoto bamboo shoots”), a certified Kyoto brand product.

Perfect Natural Conditions

Takenoko grow well in the hillside groves of Nishiyama, partly due to the region’s clay soil. The nutrient-rich calcium carbonate substrate helps bamboo shoots grow sweet and tender. The soil in this part of the city has good drainage, ensuring that the shoots get just enough water. The western location is another positive factor, as the rays of the rising sun provide the necessary light and warmth for the vegetation on the east-facing mountainside.

Cultivation

From long ago, people in the area lived near wild bamboo groves and harvested *takenoko* as food, but Buddhist monks were the first to start intentionally cultivating bamboo. They initially grew it for aesthetic purposes, such as for gardens or for landscaping a temple path. Once the monks learned how to effectively tend bamboo groves, they were able to collect plenty of bamboo shoots to use in vegetarian Buddhist cuisine (*shojin ryori*). Their endeavors were further encouraged by Meiji-

period (1868–1912) government efforts to promote agriculture. The knowledge and techniques of cultivating bamboo and harvesting delicious bamboo shoots have been passed down through generations and are still actively utilized by farmers today.

Bamboo grows in many regions throughout Japan, but farmers in the Nishiyama area employ a very particular cultivation process for *Kyo-takenoko*. In spring, they prune the tops of selected bamboo stalks, preventing further growth so that more nutrients can be channeled into producing robust new shoots. Weeding takes place in summer, and in autumn farmers cover the ground with straw in preparation for the relatively frigid Kyoto winter. The straw helps retain heat and moisture, protects the bamboo shoots from harsh weather, and serves as an organic fertilizer. Additional clay soil is placed over the straw during winter to make sure that the substrate remains soft and nutritious. In spring, farmers dig up the *takenoko* with special hoes (*horikuwa*) that work as levers to carefully unearth the new bamboo shoots. As exposure to sunlight makes *takenoko* bitter, selecting those that are mostly or fully underground ensures milder and better taste.

Very light-colored bamboo shoots, called *shiroko*, are especially rare. The name, literally “white shoots,” describes their cream to beige exterior, as opposed to the typical *takenoko* that are brown on the outside. The light color indicates that the shoots had little to no sun exposure. *Shiroko* comprise only about one percent of the harvest and are highly prized for their crisp texture and sweet taste.

Enjoying Kyo-Takenoko

Some long-established restaurants in Oharano and the Nishiyama area specialize in bamboo shoot cuisine. Various cooking methods and seasonal ingredients are used to create dishes that highlight the flavor and texture of *Kyo-takenoko*. In spring, even restaurants that focus on other types of cuisine offer seasonal dishes that incorporate bamboo shoots.

Kyo-takenoko from Nishiyama can be purchased at grocery stores and local markets. Some farmers set up unmanned stalls on the roadside with bamboo shoots and other produce. The prices are shown on signs or stickers, and payment should be put into a collection box. For those interested in a hands-on experience of digging up bamboo

shoots, there are excursions to bamboo groves where participants can learn to find young shoots and use a *horikuwa* hoe.

A Symbol of the Region

Bamboo and bamboo shoot imagery is abundant throughout Oharano and the Nishiyama area, appearing as mascot characters, on manhole covers, and in souvenir designs. The official character of Kyoto's Nishikyo Ward (which includes Oharano) is Takenyon, an anthropomorphic bamboo stalk with a smiling face and cheerful disposition. Takenyon is usually accompanied by a small bamboo shoot, his little sister Nokotan. The many bamboo-related motifs reflect the fact that *takenoko* are more than a famous regional food product, having become part of the area's brand and sense of community.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西山の京たけのこ

大原野と西山一帯はたけのこで有名です。たけのこは春の珍味で、短く、芽生えただけの若い竹の新芽です。たけのこは、背の高い程に成長する前、土の中で発育して土から芽を出す春に収穫されます。たけのこの外側のザラザラした皮の部分を取り除くと現れる象牙色の内側部分は、野菜と同じように煮たり、焼いたり、揚げたり、漬けたりして調理することができます。西山のたけのこは非常に高品質で「京たけのこ」と呼ばれ、京都ブランド品に認定されています。

完璧な自然条件

たけのこは西山の山腹の竹林でよく育ちますが、これはこの地域の粘土質の土壌のおかげです。栄養価の高い炭酸カルシウムを豊富に含む土は、たけのこを甘く、柔らかく成長させます。西山の土壌は水はけが良く、たけのこに十分な水を与えます。また、山の西側に位置していることもプラスの要因となっており、朝日が適度な光と暖かさを東向きの山腹の植物にもたらしています。

栽培

古くからこの地域の人々は野生の竹林の近くに住み、たけのこを食料として収穫していましたが、意図的に竹の栽培に取り組んだのは僧侶たちが初めてでした。彼らは当初、庭園や寺院の参道を装飾するなど、美的な目的で栽培していました。竹の効果的な手入れ方法を学んだ僧侶たちは、寺のベジタリアン料理（精進料理）に使用するために、多くのたけのこを採るようになりました。彼らの活動は、明治時代（1868年～1912年）の農業促進のための政府の取り組みによってさらに促

進されました。竹を育て、美味しいたけのこを収穫するための知識と技術は代々受け継がれ、今も農家で利用されています。

竹は日本の多くの地域で生育していますが、西山地域の農家では京たけのこ専用の特別な栽培方法を採用しています。春には、選ばれた竹の茎の端を剪定し、それ以上の成長を防ぐことでより多くの栄養素がたけのこへ回り、美味しいたけのこの生産へと繋がります。夏には草むしりが行われ、秋には農家がわらで地面を覆い、寒くなる京都の冬に備えます。わらは土壌の熱と湿気を維持する以外に、厳しい天候から芽を保護し、有機肥料としても機能します。冬の間、わらの上に追加の粘土質の土壌を蒔き、土壌が柔らかく栄養価の高い状態を保つようにします。春になると、農家の人たちは専用の鍬（ほりくわ）を使い、新しく生えたたけのこを丁寧に掘り出します。たけのこは日光にさらされると苦くなるため、大部分または完全にまだ地中にあるものを選ぶと、まろやかで味が良いたけのこが採れます。

特に白子と呼ばれる、とても色の薄いたけのこは希少です。新芽の明色を表す「白子」という名前は、典型的な外側が茶色のたけのこは対照的に、クリーム色からベージュ色の外観を表しています。その明るい色は、たけのこ自体が日光にほとんど、または全くさらされていないことを意味しています。白子は収穫量のわずか1パーセントほどで、そのコリコリとした食感と甘みが高く評価されています。

京たけのこを楽しむ

大原野・西山エリアにはたけのこ料理の老舗料理店がいくつかあります。京たけのこの風味と食感を活かした料理を、さまざまな調理法と旬の食材で提供しています。春になると、他の料理を専門とするレストランでも、たけのこを使った季節の料理が登場します。

西山産の京たけのこは、食料品店や地元のスーパーで購入できます。中には道沿いにたけのこなどの無人販売店を出す農家もおられます。看板やステッカーに表記されている価格を見て、お金を集金箱に入れます。また、たけのこ掘りの体験に興味がある人のために、竹林ツアーがあり、参加者は若いたけのこを見つけて掘り鍬を使って掘り出す方法を学ぶことができます。

地域の象徴

大原野や西山地域には竹やたけのこのイメージが沢山存在しています。それはマスコットキャラクターやマンホールの蓋、お土産のデザインなどに見ることができます。西京区（大原野市を含む）の公式キャラクターは、笑顔と明るい性格の竹を擬人化した「たけによん」です。たけによんは、小さなたけのこで妹の「のこたん」を連れていることが多いです。これらの竹にまつわる多くのモチーフは、たけのこが有名な特産品であるだけでなく、地域のブランドの一部となり、地域の共同体意識に貢献していることを表しています。

007-022

Kegonji Temple (Suzumushidera)

大原野保勝会

【タイトル】華嚴寺（鈴虫寺）

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Kegonji Temple (Suzumushidera)

The unique tradition of keeping thousands of bell crickets (*suzumushi*) in terrariums in a temple hall gave Kegonji its other name, Suzumushidera (“bell cricket temple”). The practice was started in the mid-twentieth century by the eighth chief abbot Taigan, who achieved enlightenment while listening to crickets on an autumn night. Seeking to soothe the hearts of others, he spent 28 years on research to determine the exact temperature, humidity, and nutrients required to encourage the bell crickets to sing year-round.

A Brief History

Kegonji was founded in 1723 by the monk Hotan (1654–1738), who was tasked with reviving the Kegon school of Buddhism in Japan. The temple served the purpose for a time, but the lack of Kegon successors led to its eventual conversion to Rinzai Zen Buddhism. The principal object of worship is Dainichi Buddha, the cosmic deity that features prominently in Kegon school teachings.

Bell Cricket Sermons

In the Guest Hall monks give thirty-minute *suzumushi seppo* (“bell cricket sermons”) accompanied by the sounds of bell crickets. The content of the sermons varies, but usually addresses topics such as temple history, Zen concepts, or Buddhist parables. Attending the sermon is considered mandatory, but those who do not understand Japanese may choose to just view the temple grounds and the garden. Next to the temple gate is a statue of Kofuku Jizo, depicting the bodhisattva in straw sandals instead of the usual bare feet. The deity is said to travel directly to the worshipper’s

home to grant wishes and bring happiness if an address is provided as part of the prayer.

Please be advised that a large-scale reconstruction of Suzumushidera is planned in the near future. A new Guest Hall will open for visitors to listen to the sermons and the sounds of bell crickets.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

華嚴寺（鈴虫寺）

お堂で数千匹の鈴虫を透明容器のテラリウムで飼育するという独特の伝統から、華嚴寺は、別名「鈴虫寺」と呼ばれています。その飼育は、秋の夜に鈴虫の声を聞きながら悟りを開いた第8代住職の台巖によって、20世紀半ばに始められました。人々の心を癒そうと、彼は鈴虫が一年中鳴くために必要となる正確な温度、湿度、栄養面の研究に28年を費やしました。

略史

華嚴寺は、日本の華嚴宗の再興を使命とした僧侶、鳳潭（1654年～1738年）によって1723年に設立されました。一時はその役目を果たしましたが、後継者不足により最終的には、臨済宗に改宗しました。本尊は華嚴宗の教えを特徴づける宇宙そのものを表す仏とされる、大日如来です。

鈴虫説法

寺院の客殿では、鈴虫の鳴き声とともに僧侶たちが30分間の鈴虫説法を行っています。説法の内容はさまざまですが、通常、寺院の歴史や禅の概念、そして仏教における例え話などを聴くことができます。説法は基本的に参加必須ですが、日本語が理解できない方は境内や庭園の見学だけでも可能です。山門の隣には幸福地藏尊がおられますが、一般的に見られる地藏のように裸足ではなく草鞋を履いています。祈りの際に自分の住所を伝えると、このお地藏さんは参拝者の家に直接赴き願いを叶え、幸福をもたらすとされています。

なお、鈴虫寺は近い将来に大規模な再建が予定されています。説法や鈴虫の鳴き声を聴くことができる、新しい客殿がお披露目されます。

007-023

Take no Michi Bamboo Road

大原野保勝会

【タイトル】 竹の径

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Take no Michi Bamboo Road

Eight types of traditional bamboo fences line Take no Michi, which means “bamboo road.” The 1.8-kilometer path was created in 2000 to preserve and promote the natural scenery of Nishiyama, an area famous for bamboo groves. Signboards along the road provide photos and descriptions of the fences in English and Japanese, as well as maps indicating where each style can be found. The fences demonstrate both the versatility of bamboo as a construction material and the skills of the artisans who have passed down fence-making techniques for generations.

The latticed *kofungaki* fence is characterized by bold, rounded edges to match the shape of Terado Otsuka Tumulus, the ancient burial mound (*kofun*) behind it. The *kaguyagaki* fence made with neatly trimmed branches and thick, precisely cut bamboo stalks is meant to resemble the collar of the layered court attire worn by Princess Kaguya from *Takekuni monogatari* (*The Tale of the Bamboo Cutter*). The *mozumegaki* fence with tightly fitted horizontal and vertical bars of bamboo was inspired by the walls of Mozume Castle, the site of which can be found to the northeast. Tall bamboo grows robustly beyond the fences, creating a quiet, contemplative atmosphere around Take no Michi. In October, bamboo lanterns are placed along the road to illuminate the landscape in the evening.

Those who want to learn more about bamboo are encouraged to visit Kyoto Bamboo Park, located near the midpoint of the Take no Michi road. The vast complex includes a museum with educational displays, a garden with around 110 species of bamboo, and a shop that offers various bamboo products and souvenirs.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

竹の径

「竹の径」という小道には、8種類の伝統的な竹垣が並んでいます。この1.8キロメートルの道は、竹林で有名な西山の自然景観の保護と促進を目的に、2000年に整備されました。道路沿いの看板には竹垣の写真と日本語・英語での説明のほか、どの種類がどこで見られるのかを示す地図が掲載されています。竹垣には、建材としての竹の多用途性と、何世代にもわたって垣作りの技術を継承してきた職人の技術を見て取れます。

格子の古墳垣は、背後にある古代の墳墓である寺戸大塚古墳の形状に合わせた、大胆な丸みを帯びたフレームが特徴です。きれいに整えられた竹の枝と正確にカットされた太い竹で作られるかぐや垣は、竹取物語（*The Tale of the Bamboo Cutter*）のかぐや姫が着る重ねて着用する宮廷衣装の衿をイメージしています。横と縦で竹がしっかりと組み合わされた物集目垣は、北東に城跡が残る物集女城の城壁からインスピレーションを得たものです。竹垣の奥には背の高い竹がたくましく成長しており、竹の径には静かで瞑想的な雰囲気が漂います。10月には道路沿いに竹灯籠が設置され、夜の風景を照らします。

竹についてもっと知りたい方は、竹の径の中間地点あたりにある「京都市洛西竹林公園」へお越しください。広大な複合施設には、竹の啓蒙的な展示を行っている資料館や約110種の竹がある庭園、そしてさまざまな竹製品やお土産を販売するショップがあります。

007-024

Hachimangu Shrine

大原野保勝会

【タイトル】長峰八幡宮（八幡宮社）

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Hachimangu Shrine

The quiet Hachimangu Shrine in the Oharano Ishizukuri neighborhood is commonly referred to as Nagamine Hachimangu. The enshrined deities are Hachiman (deified Emperor Ojin, the 15th emperor of Japan), who is worshipped as a guardian of the country, and Amaterasu Omikami, the sun goddess considered the ancestral deity of the imperial family. The shrine's founding date is unknown, but it is theorized that it may have been the location of Ishitsukuri Jinja, a shrine mentioned in the tenth-century *Engishiki*, a compilation of customs and official procedures that includes a list of all 2,861 shrines in existence at that time.

Connection to Ishitsukuri Shrine and Its Deity

Ishitsukuri no Okami, the deity that was enshrined in Ishitsukuri Shrine until the Edo period (1603–1867), is now worshipped at Otoshi Jinja Shrine, located a short walk to the east of Nagamine Hachimangu. Ishitsukuri no Okami is the ancestral deity of the Ishitsukuri clan, who were in charge of carving stone coffins for the nobility. It is said that they made the coffin for Hibasuhime no Mikoto, the wife of Emperor Suinin, the 11th emperor of Japan, and were rewarded with the high rank of *omuraji* for their service.

Sanctuary and Shrine Grounds

The iconography of Nagamine Hachimangu today is typical for Hachiman shrines and includes paired wooden carvings and stone guardian statues of doves, the sacred messengers of the deity Hachiman. The sanctuary is built on top of a small *kofun* (burial mound) that likely dates to the late Kofun period (300–538). Part of the mound's interior can be seen through a hole in the right side of the shrine's stone

foundation. Three rare *kagonoki* (*Litsea coreana*) trees and a sacred 30-meter camphor tree believed to be 900 years old grow on the shrine grounds.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

八幡宮社

大原野石作地区にある静かな八幡宮社は、一般的に長峰八幡宮と呼ばれています。祭神は国の守護神として崇められる八幡（第15代天皇である応神天皇）と皇室の祖神とされる天照大神です。長峰八幡宮の創建年は不明ですが、10世紀の風俗や格式が説明されており、当時存在していた2861の神社が記載されている「延喜式」に書かれている石作神社の位置に建っているのではないかと推測されています。

石作神社とそのご祭神との関係

石作神は、江戸時代（1603年～1867年）まで石作神社に祀られていましたが、現在は長峰八幡宮から東に歩いてすぐの大歳神社に祀られています。石作神は貴族の石棺を彫った石作氏の祖神です。彼らは、日本の第11代天皇である垂仁天皇（紀元前69年～西暦70年）の後である日葉作姫の棺を作り、その功績により高い位である「大連」を授与されたと言われています。

境内

現在の長峰八幡宮の特徴は八幡神社の典型的なもので、八幡神の神聖な使者である一對の鳩の木彫りと鳩の石像があります。また、本殿は、古墳時代（300年～538年）後期のものと思われる小さな古墳の上に建てられています。神社の土台の右側にある穴から、古墳の内部の一部を見ることができます。境内には珍しい鹿子の木3本と高さ30メートルで樹齢900年とされる楠の御神木が生えています。

007-025

Fujibakama Flower Field

大原野保勝会

【タイトル】フジバカマ畑

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Fujibakama Flower Field

One of the most aromatic flowering herbs that bloom in autumn is *fujibakama* (*Eupatorium japonicum*), also known as thoroughwort or fragrant eupatorium. It is regarded as one of the seven flowers representing autumn and is often depicted in Japanese art and poetry. A thousand years ago, thoroughwort was a popular scent for perfumed sachets, scented baths, hair-cleansing products, and incense. Dried flowers were also used in herbal medicine to treat a number of common ailments.

Raising Critically Endangered Flowers

At present, thoroughwort is classified as critically endangered in Kyoto Prefecture and is rarely encountered in the wild due to loss of habitat. In Oharano, it is specially cultivated in a small field for the enjoyment of visitors from late September to early October. In addition to thoroughwort, the field is planted with bush clover (*hagi*), yellow patrinia (*ominaeshi*), blackberry lily, pink dianthus (*nadeshiko*), Korean mint, oval-leafed pondweed, and bellflower (*kikyo*).

Fujibakama and Chestnut Tiger Butterflies

When thoroughwort is in bloom, the flowers attract a large variety of insects. The chestnut tiger butterfly (*Parantica sita*), the only migratory butterfly found in Japan, is particularly fond of thoroughwort nectar. In autumn, the butterflies leave cooler places such as Hokkaido and travel 1,500 to 2,000 kilometers south, using flower fields and other sites as “rest stops” along the way. Many people aim to take photos of the chestnut tiger butterflies in a thoroughwort field, as the large, distinctly patterned butterflies stand out against the pale mauve hue of the *fujibakama* flowers.

Fujibakama Festival

On the weekend closest to Autumnal Equinox Day (September 22nd or 23rd), Oharano hosts the Fujibakama Festival, which features small stalls selling scented thoroughwort sachets, *yomogi* mugwort dumplings, and other local produce.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

フジバカマの花畑

初秋に咲く最も香りのよい花の咲くハーブの1つは、フジバカマ（*Eupatorium japonicum*）で、別名「サロワート」または「フレグラント・イウパトリウム」としても知られています。秋を代表する七草の一つとされ、日本の美術や詩などにも多く描かれています。1000年前、フジバカマは香り袋や香りのするお風呂や洗髪、お香として人気でした。ドライフラワーは、多くの一般的な病気を治療するための漢方薬としても使用されていました。

絶滅寸前種の花

現在、フジバカマは京都府では絶滅寸前種に指定されており、生息地の喪失によって野生で出会うことほとんどありません。大原野では、9月下旬から10月上旬に訪れる観光客に楽しんでもらうために、小さな畑で特別に栽培されています。その区画にはフジバカマに加えて、萩、オミナエシ、檜扇、ナデシコ、川緑、水葵、およびキキョウが植えられています。

フジバカマとアサギマダラ

フジバカマが咲くと、花にはさまざまな昆虫が集まります。日本に生息する唯一の渡り蝶であるアサギマダラ（*Parantica sita*）は、特にフジバカマの花の蜜を好みます。秋になると、蝶は北海道などの涼しい場所を出発し、途中、花畑などを「休憩場所」として1500～2000キロ南へ移動します。大きく色鮮やかな蝶であるアサギマダラがフジバカマの淡い藤色の花によく映えるため、多くの人が写真を撮りたいと考えています。

フジバカマ祭り

秋分の日（9月22日または23日）に近い週末、大原野ではフジバカマ祭りが開催されます。この祭りでは、フジバカマの香り袋、よもぎ団子、その他の地元の特産品などを販売する小さな屋台が並びます。

007-026

Oharano Sunflower Field

大原野保勝会

【タイトル】ヒマワリ畑

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Oharano Sunflower Field

Thousands of canary yellow, fiery orange, and dark red sunflowers fill the Oharano Sunflower Field around mid-September. As most sunflowers around Kyoto bloom in July and August, the field in Oharano provides one more opportunity to enjoy the large flowers before the autumn chill sets in. The ornamental colors of the sunflowers are used to create a new design for the field every year.

A Community Project

The Oharano Sunflower Field is a project led by Oharano farmers. In late July, farmers, students and teachers from the nearby Rakusai High School, and other volunteers gather to plant tens of thousands of seedlings, which are regularly tended over the following weeks. The entire field remains green until the flowers begin to bloom and fill the space with warm colors. Oharano residents and visitors wait with anticipation to discover what design will emerge.

Enjoying the Sunflowers

People come from near and far to stroll through the rows of sunflowers, take pictures, and enjoy the scenery with the mountains in the distance. During the viewing period, a three-meter-tall platform is erected in the field, making it possible to appreciate the year's design in its entirety. The ability to view the sunflowers up close and from afar makes the Oharano field a popular spot both for nature photography and for commemorative shots with friends and family.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大原野ひまわり畑

9月中旬頃、カナリーイエローや燃えるようなオレンジや濃い赤の数千本のひまわりが、大原野ひまわり畑を埋め尽くします。京都周辺のひまわりの多くは7～8月に咲くため、秋の涼しさが本格化する前に大原野に行くと、もう一度、大輪のひまわりの花を楽しむことができます。また、ひまわりのそれぞれの色を利用して、毎年新しいひまわり畑のデザインが生み出されています。

コミュニティプロジェクト

大原野ひまわり畑は、大原野の農家によるプロジェクトです。7月下旬、農家や近隣の洛西高校の学生や教師、そしてその他のボランティアが集まり、数万本の苗を植えます。その後数週間にわたって定期的に苗の手入れが行われます。花が咲き始め、その空間が暖かい色で満たされるまで、畑全体は緑のままです。大原野の住人や訪れる人は、どんなデザインが生まれるのかを楽しみにしています。

ひまわりを楽しむ

ひまわり畑の中を散策したり、写真を撮ったり、遠くの山々の景色を楽しんだり、近隣及び遠方からも沢山の人が訪れます。開花期間中は畑の中に高さ3メートルの見晴らし台が設置され、その年のデザイン全体を一望することができます。ひまわりに近づいて、または少し離れたところから鑑賞できる大原野の畑は、自然を撮影することはもちろん、友人や家族との記念撮影場所としても人気のスポットです。

007-027

Shoryuji Castle Park

大原野保勝会

【タイトル】 勝竜寺城公園

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Shoryuji Castle Park

The Shoryuji Castle Park in Nagaokakyo is built on the site of a castle that was linked to several historical figures and important events in sixteenth-century Japan. Shoryuji Castle was the newlywed home of the warlord Hosokawa Tadaoki (1563–1646) and Hosokawa Gracia (1563–1600). The story of Gracia’s romance, conversion to Christianity, and tragic death have made her a beloved figure that has been featured in novels, television dramas, movies, and video games. The city park at the former castle site is surrounded by a moat and castle walls with turrets. The grounds contain a strolling garden and a keep-like structure with an exhibition space where visitors can learn about Shoryuji Castle and its former inhabitants.

The Original Castle

It is said that Shoryuji Castle was built in the mid-sixteenth century to protect important river trade routes and Kyoto’s southwestern border. It was named for the nearby Shoryuji Temple. The castle was occupied by forces loyal to the Miyoshi family, and in 1568, it was conquered by the warlord Oda Nobunaga (1534–1582) and given to his retainer Hosokawa Fujitaka (1534–1610). In 1571, Shoryuji Castle was substantially upgraded using the most advanced architectural techniques of the time, including stone wall fortifications, clay tiling, and a main keep after which Nobunaga later designed his own grand Azuchi Castle.

Romance and Tragedy

In 1578, Hosokawa Fujitaka’s eldest son, Tadaoki, married Tama, the daughter of Akechi Mitsuhide (1528–1582), another retainer of Oda Nobunaga. The ceremony took place at Shoryuji Castle, and the newlyweds lived there for two years before

Tadaoki was appointed lord of Tango Province in the north of present-day Kyoto Prefecture. However, in 1582, Akechi Mitsuhide betrayed Nobunaga and attacked him at Honnoji Temple, which resulted in Nobunaga's death and made Tama the daughter of a traitor. About ten days later, Toyotomi Hideyoshi (1537–1598), the general who inherited Nobunaga's position, led his army against Mitsuhide's forces in the Battle of Yamazaki. Hideyoshi's troops overpowered Mitsuhide's soldiers and pursued them as they retreated to Shoryuji Castle. Mitsuhide had to flee from the north gate in the night, but was killed soon after.

Tadaoki kept his wife Tama hidden in a small village until Hideyoshi ordered his retainers to move their families close to his castle in Osaka, essentially turning them into political hostages to ensure continued loyalty. While in Osaka, Tama secretly converted to Christianity and took the name Gracia. In 1600, two years after Hideyoshi's death, one of his former generals attempted to seize the hostages, including Gracia, to prevent their family members from defecting to the army of a rival general Tokugawa. A samurai wife in that time period would be expected to commit honor suicide rather than let herself be used against her husband, but Gracia's Christian faith considered suicide to be a sin, which prevented her from taking action herself. Instead, her husband's retainer ended her life, set fire to the mansion, and followed her into death. Ever since then, Hosokawa Gracia has been regarded as a fascinating and tragic historical figure.

Castle Park

Fragments of the north gate's stone walls, earthworks, and some remains of the moat are all that is left of the sixteenth-century Shoryuji Castle. In 1992, the site was converted into a public park, and the administration building was designed to look like a castle keep. The new moat around the park is lined with azaleas that bloom bright red in spring. Enclosed within the walls are a koi pond, cherry and maple trees, a small bamboo grove, and statues of Tadaoki and Gracia, Shoryuji Castle's famous couple. On the second floor of the keep-like administrative building is an exhibition room showing diagrams of the original castle, an illustrated timeline of important events, some excavated items, and a video about Gracia's life with English subtitles. The lively Nagaokakyo Gracia Festival, held on the second Sunday of November, includes a recreation of her wedding procession to the Shoryuji Castle Park.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

勝竜寺城公園

長岡京市の勝竜寺城公園は、16世紀の日本の歴史上の人物や重要な出来事に関連する城の跡に建てられています。勝龍寺城は、大名の細川忠興（1563年～1646年）と細川ガラシャ（1563年～1600年）の結婚時の住まいでした。ガラシャは恋愛やキリスト教への改宗、そしてその悲劇的な死のストーリーにより、書籍やドラマで頻繁に取り上げられており、広く愛される人物となっています。かつて城があった場所にある市の公園は、櫓を備えた城壁と堀に囲まれています。中には回遊式庭園と天守閣風の建物があり、内部では勝龍寺城とゆかりの人物について学ぶことができる展示スペースがあります。

元の城

勝龍寺城は、重要な河川交易路と京都の西南の国境を守るために、16世紀の中頃に築城されたと言われています。近くにあった勝龍寺にちなんで名付けられました。この城は三好家の家臣によって占領され、1568年に武将である織田信長（1534年～1582年）によって征服後、家臣の細川藤孝（1534年～1610年）に与えられました。1571年、勝龍寺城は石垣や瓦、天守閣の建築デザインなど、当時の最先端の建築技術を用いて大幅に改修され、それらは後に信長が自らの壮大な安土城に活用しました。

ロマンスと悲劇

1578年、細川藤孝の長男 忠興は、同じく織田信長の家臣である明智光秀（1528年～1582年）の娘 玉と結婚しました。結婚式は勝龍寺城で行われ、忠興が丹後の国（現在の京都府北部）を任されるまでの2年間、夫婦はそこで暮らしました。しかし、光秀が信長を裏切り1582年に本能寺の変を起こした結果、信長が亡くなり、玉は裏切り者の娘となりました。約10日後に信長の地位を引き継いだ武将豊臣秀吉（1537年～1598年）の軍は山崎の戦いで光秀軍と戦いました。秀吉の軍は光秀軍を圧倒し、勝龍寺城まで追撃しました。光秀は夜中に北門から逃げましたが、そのあとすぐ殺害されました。

忠興は妻を小さな村に隠していましたが、秀吉は家臣の忠誠心を保つために忠興の家族を大坂城の近くに移すように命じ、妻は政治的な人質とされました。大坂にいる間、玉は密かにキリスト教に改宗しガラシャの名前を授かりました。秀吉亡き2年後、1600年に、秀吉の元家臣の1人は、家族が敵対する武将である徳川の軍に寝返るのを防ぐためにガラシャなどを人質として捕らえようとしました。当時の武士の妻は、夫に不利に利用されるよりも自害をすることを期待されていましたが、ガラシャのキリスト教の信仰は自殺を罪とみなし、自ら行動を起こすことができませんでした。代わりに、夫の家臣が彼女の命を絶ち、邸宅に火を放ち彼女を追って自殺しました。それ以来、細川ガラシャは歴史の中で魅惑的かつ悲劇的な人物とみなされてきました。

城公園

16世紀に築城された勝龍寺城は、北門の石垣部分や土塁、そして堀の一部しか城跡として残っていません。1992年にこの場所は公園となり、管理棟が城のような外観で建設されました。公園の周りの新しい堀の側には春に真っ赤に咲くツツジが並んでいます。城壁内には鯉が泳ぐ池や桜やモミジ、小さな竹林、そして勝龍寺城にかつて住んでいた有名な夫婦である忠興やガラシャの像があります。天守閣風の管理棟の2階には展示室があり、当時の城の図面や重要な出来事が記された図解年表、一部の出土品、そしてガラシャの人生に関する英語字幕付きのビデオを見ることができます。11月の第2日曜日開催のにぎやかな長岡京ガラシャ祭では、勝龍寺城公園への輿入れの行列が再現されます。

007-028

Igenoyama Tumulus

大原野保勝会

【タイトル】 恵解山古墳

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Igenoyama Tumulus

Igenoyama Tumulus is a burial mound (*kofun*) built in the first half of the fifth century. At the time, such structures served as tombs for emperors, members of the nobility, clan leaders, and other powerful figures. Igenoyama Tumulus is the largest keyhole-shaped *kofun* in the Otokuni region of Kyoto Prefecture and is therefore believed to be the burial place of an influential ruler. In 1980, several hundred iron weapons were discovered inside the mound, and it became a nationally designated Historic Site in 1981. An excavation survey began in 2003, and a plan to restore and maintain the *kofun* was developed and implemented. In 2014, a historical park was opened to preserve the site, provide information about the burial mound and its history, and serve as a recreation area for the community.

Features

The three-tier mound is about 128 meters long. The back circular part has a diameter of 78.6 meters and is 10.4 meters tall, while the front square part is 78.6 meters wide and 7.6 meters tall. The *kofun* was once surrounded by a moat, covered with stones, and lined with ceremonial clay objects called *haniwa*. A rectangular space adjacent to the west side of the mound was likely used for funerary rites and ceremonies. A stone burial chamber is believed to exist in the circular part of the *kofun*. However, this part has not been fully excavated because a cemetery is located on the top.

Grave Goods and Other Finds

During preparation to expand the cemetery in 1980, a long wooden crate filled with around 700 iron weapons was found in the square part of the *kofun*. The items included swords, spears, various arrowheads, and knives. It is the only case of such a discovery

in Kyoto Prefecture and is extremely rare even for the rest of the country. Numerous iron agricultural tools, such as axes, sickles, and hoes, were found nearby. Most of the many excavated *haniwa* were cylindrical, arranged like a fence to delineate the boundaries of the *kofun*. Others were shaped like items for the comfort of the deceased (houses, boats, parasols), weaponry for protection (shields, armor, quivers), and animals (waterfowl and chickens). The iron weapons and other excavated objects were designated Tangible Cultural Properties by Kyoto Prefecture in 1999.

Igenoyama Tumulus Park

A spacious park with abundant greenery now surrounds Igenoyama Tumulus, which was restored to its presumed original shape. Near the base of the square part is a model of the mound accompanied by explanations of its features, as well as a map that shows all the *kofun* in the Otokuni region. Numerous *haniwa* replicas line the tumulus and the ritual space on the west side, recreating how the site may have looked in the early fifth century. Stairways were added to the front and sides of the mound, and visitors can walk along each of the tiers and observe the wide view of the park and the surrounding cityscape. A full-scale historical photo of the excavated iron weapons at the top of the *kofun* shows the site of the important discovery.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

恵解山古墳

恵解山古墳は、5世紀前半に築造された墳墓（古墳）です。当時のこのような建造物は、天皇や貴族、氏族の指導者、またはその他の有力者の墓として造られました。恵解山古墳は京都府の乙訓地域最大の前方後円墳であり、有力者の墓所であると考えられています。1980年に古墳内から数百点の鉄製武器が発見され、1981年に恵解山古墳は国の史跡に指定されました。2003年から発掘調査が始まり、古墳の修復・維持計画が策定・実施されました。2014年、遺跡を保存し墳丘とその歴史に関する情報を提供し、さらにコミュニティのレクリエーションエリアとして機能する史跡公園として開設されました。

特徴

三階層の墳丘は長さ約128メートルです。後円部は直径78.6メートル、高さ10.4メートルで、前方部の幅は78.6メートル、高さは7.6メートルです。古墳はかつて堀で囲まれ、石で覆われ、埴輪と呼ばれる儀式用の土製品が並べられていました。古墳の西側にある長方形のエリアは、おそらく葬

儀や儀式に使用されたと考えられます。後円部には石室が存在すると考えられていますが、頂上には墓地があるため、この部分は全面的には発掘されていません。

副葬品およびその他の出土物

1980年、頂上にある墓地拡張の準備中に、約700個の鉄製武器で満たされた長い木箱が古墳の前方部分から発見されました。そのうち、剣や槍、さまざまな矢尻、そして刃物がありました。京都府内では唯一の発見例で、全国的にも極めて珍しいものです。近くでは斧や鎌、鍬などの鉄製の農具が多数発見されました。出土した複数の埴輪の多くは円筒形で、古墳の境界線に沿って柵のように並べられていました。その他には、埋葬された人の快適さを考慮した品物（家、船、きぬがさ）や防御のための武器（盾、鎧、矢筒）、そして動物（水鳥や鶏）のような形をしたものもありました。鉄製武器などの出土品は1999年に京都府の有形文化財に指定されました。

恵解山古墳公園

推定の原形に復元された恵解山古墳の周囲には、緑豊かで広々とした公園が整備されています。前方部分の基部近くには、墳丘の特徴を解説した模型と、乙訓地域にある古墳をすべて掲載した地図が設置されています。古墳と西側の祭祀場には多数の埴輪のレプリカが並び、遺跡の5世紀前半の様子を再現しています。墳丘の正面と側面には階段が設けられているので訪問者は各階層を登り、公園や周囲の街並みの広大な景色を眺めることができます。古墳の頂上には、出土した鉄製武器の実物大の写真があり、その地で重要な発見があったことを示しています。

地域番号	008	協議会名	高砂市観光施設多言語案内制作協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
008-001	高砂神社概要 / 全体		251~500	Webページ
008-002	高砂神社 / 常夜灯、本殿、能舞台、相生の松、工楽松右衛門像		251~500	Webページ
008-003	高砂市 / 結びのまち高砂の概要		250	Webページ
008-004	高砂町概要 / 高砂町歴史的景観形成地区		251~500	Webページ
008-005	高砂町 / ワークショップ（松右衛門帆の小物作成）		250	Webページ
008-006	高砂町 / ワークショップ（手びねり体験）		250	Webページ
008-007	高砂町 / ワークショップ（常夜灯づくり体験）		250	Webページ
008-008	高砂町 / 街歩き		250	Webページ
008-009	高砂町 / 食		250	Webページ
008-010	工楽松右衛門旧宅 / 旧宅内展示資料の案内、建物の歴史		251~500	Webページ
008-011	工楽松右衛門旧宅 / 工楽松右衛門紹介		251~500	Webページ
008-012	工楽松右衛門旧宅 / 松右衛門帆		250	Webページ
008-013	中島家旧宅（結びん） / 建物の歴史		250	Webページ
008-014	高砂町 / 百間蔵跡、川口御番所跡、高砂や、延命寺織部灯籠、川地蔵		751~	Webページ
008-015	高砂町 / 向島防波堤、湛保の祠		501~750	Webページ
008-016	高砂町 / 申義堂、三連蔵、花井家住宅、大崎家住宅		751~	Webページ
008-017	高砂町 / 国鉄高砂線跡、魚町倶楽部、旧朝日町浄水場配水塔、出汐館		751~	Webページ
008-018	高砂町 / 梅ヶ枝湯、旧高砂銀行本店（現高砂商工会議所）、旧高砂消防会館		751~	Webページ
008-019	十輪寺 / 寺全体の歴史		251~500	Webページ
008-020	日本史跡「石の宝殿及び竜山石砕石遺跡」 / 日本史跡		250	Webページ
008-021	生石神社 / 日本史跡		251~500	Webページ
008-022	石の宝殿 / 日本史跡		501~750	Webページ
008-023	竜山石 / 日本史跡		250	Webページ
008-024	曾根町概要 / 歴史		250	Webページ
008-025	旧入江家住宅 / 建物の構造、歴史		250	Webページ
008-026	曾根天満宮 / 歴史		250	Webページ
008-027	日笠山 / 自然		250	Webページ

008-028	鹿嶋神社 / 歴史	250	Webページ
008-029	市の池公園 / 自然	250	Webページ
008-030	経政神社 / 日本史跡	250	Webページ
008-031	宮本武蔵生誕 / 歴史	251~500	Webページ
008-032	イベント紹介 / イベント祭り	250	Webページ
008-033	高砂神社の秋祭り / 祭り概要	250	Webページ
008-034	荒井神社・小松原三社大神社秋祭り / 祭り概要	250	Webページ
008-035	米田天神社秋祭り / 祭り概要	250	Webページ
008-036	曾根天満宮秋祭り / 祭り概要	250	Webページ
008-037	生石神社秋祭り / 祭り概要	250	Webページ
008-038	たかさご万灯祭 / 祭り概要	250	Webページ
008-039	ナイトファンタジー・イリュージョン / 祭り概要	250	Webページ
008-040	高砂海浜公園 / 公園全体	250	Webページ
008-041	高御位山 / ハイキングアクティビティ	250	Webページ
008-042	高砂銀座商店街 / 商店街全体	250	Webページ
008-043	高砂町 / 日本遺産認定ストーリー	251~500	Webページ

008-001

Takasago Jinja Shrine Overview

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂神社概要 / 全体

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago Jinja Shrine Overview

Takasago Jinja Shrine is dedicated to Onamuchi no Mikoto, the deity of Takasago. The shrine is believed to be the original setting of the Noh play *Takasago* by Zeami Motokiyo (1363–1443), an actor, playwright, and composer of the traditional Japanese performing art of Noh, a UNESCO Intangible Cultural Heritage.

In the shrine grounds is a pine tree that is considered sacred; it is referred to in the play as “Aioi no Matsu” (twin pines) due to its two trunks merged at the roots. The spirits of the pines are said to be a legendary elderly couple named Jo and Uba; in the play, they represent marital happiness and longevity.

When the legend of Jo and Uba and the existence of the pines became widely known, Takasago became known as Musubi no Machi (“matrimony town”) due to the many legends related to the harmony of married couples in the area. Images of Jo and Uba are used in traditional wedding ceremonies; the seats for the bride and groom are called “Takasago.” With its theme of a long and happy marriage, the Noh play’s classical chant, “Yokyoku Takasago,” is famous nationwide as a wedding chant.

The main sanctuary (*honden*), offering hall (*heiden*), and worship hall (*haiden*) are in the center of the shrine grounds, with the Noh stage to the southeast of the main sanctuary. The shrine holds annual events, such as the Lantern Festival, when the shrine precinct is filled with 3,000 candles, and the Fall Festival, as well as a *kangetsu* (moon-viewing) Noh play.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂神社 概要

高砂神社は、高砂の神である大己貴命（おおなむちのみこと）を祀っています。この神社は、ユネスコ無形文化遺産である日本の伝統芸能である能の役者、劇作家、作曲家である世阿弥元清（1363～1443）の能『高砂』の元の舞台であると考えられています。

境内には神聖な松の木があります。2本の幹が根元で合流することから、劇中では「相生の松」と呼ばれています。これら幹の霊は、尉と姥という名前の伝説的な老夫婦であると言われています。劇中では、彼らは夫婦の幸福と長寿の象徴です。

尉と姥の伝説や松の存在が広まると、高砂は夫婦和合に関する伝説が数多く残ることから「結びの町」として知られるようになりました。尉と姥のイメージは伝統的な結婚式で使用されます。新郎新婦の席は「高砂」と呼ばれています。劇中の古典的な唄「謡曲高砂」は長く幸せな結婚をテーマとすることから、結婚式の曲として全国的に有名です。

境内の中央に本殿、幣殿、拝殿があり、本殿の南東側に能舞台があります。境内を約3,000灯のキャンドルで埋め尽くす灯籠祭りや秋祭りなどの年中行事や観月能が開催されます。

008-002

Takasago Shrine

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂神社 / 常夜灯、本殿、能舞台、相生の松、工楽
松右衛門像

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago Shrine

All-night Light

This stone lantern was made in 1799. It originally faced the shore of the Harima Sea, in the eastern part of the Seto Inland Sea, serving as a lighthouse for passing vessels. The town thus developed as a popular port, an important trading post, and a relay station for the region. The all-night light, later relocated, now stands within the grounds of Takasago Shrine, and people pray there for safe passage on their travels.

Main Shrine

The shrine, a symbol of Takasago, was first built near the shore about 1,700 years ago. It is thought that the sandy beaches and pine trees made the location attractive. Later, the shrine was relocated in order to allow a castle to be built to defend the city, and eventually was moved again to its current position. The fierce-faced tiles on the roof of the main building are believed to scare away bad spirits, protect people at sea, and even bring good luck to those in love.

Noh Stage

This Noh stage was built in 2013 as the location is thought to be the original setting of the Noh play *Takasago*. The play was written by actor and playwright Zeami Motokiyo (1363–1443), who is considered the foremost composer of the traditional Japanese performing art of Noh, a UNESCO Intangible Cultural Heritage. During the play, a singer chants: “From Takasago, sailing over the bay, sailing over the bay, the moon goes out with the tide, past the silhouette of Awaji Island, far over the sea to Naruo, arriving at Suminoe, arriving at Suminoe.” The chant, which refers to several places in present-day Hyogo and Osaka Prefectures, evokes images associated with

harmony between husband and wife.

The large Noh stage was built by local people to celebrate the play, as well as to highlight the town's connection to enduring conjugal harmony. The pine tree painted on the stage contains images of three hearts. It is said that if visitors find all three hearts, they will be blessed with a long and happy marriage.

Twin Pines

This venerable pine tree, known as “Aioi no Matsu” (twin pines), consists of two pines growing out of the same roots. The red pine is considered female, while the black pine is considered male. The tree is depicted in the play *Takasago* and symbolizes conjugal harmony. The Takasago chant from the play is often performed at traditional wedding ceremonies in Japan.

Statue of Kuraku Matsuemon

Takasago-born Kuraku Matsuemon (1743–1812) ran a shipping business and carried out civil engineering works. He had a huge impact on Japan's shipping industry through his invention of what became known as Matsuemon canvas. This strong and flexible material was used for ships' sails throughout the country.

Matsuemon's engineering work also helped improve harbor docking facilities, including in Takasago. Other ports that benefited include Tomonoura in Hiroshima and two ports in Hokkaido: Etorofu (Iturup) Island and Hakodate.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂神社

常夜灯

1799年に建てられた石でつくられた灯籠です。元々は瀬戸内海東部の播磨灘の海岸に面し、船舶の行き交う灯台の役割を果たしていました。こうして町は人気の港、重要な交易所、そして地域の中継地点として発展しました。後に移設された常夜灯は現在高砂神社境内に設置され、旅の安全を祈願しています。

本殿

高砂のシンボルであるこの神社は、約1,700年前に海岸近くに建てられました。砂浜と松の木がこの場所を魅力的にしていたと考えられています。その後、城を築くために神社を移転し、更に現在の位置へと移転しました。本殿の屋根には、猛々しい顔を模った瓦があり、悪霊を追い払い、海で人々を守り、恋愛に幸運をもたらすと信じられています。

能舞台

2013年に、能『高砂』の舞台とされる場所としてこの能舞台が建てられました。この劇は、ユネスコ無形文化遺産で日本の伝統芸能である「能」の第一人者とみなされている役者で、劇作家の世阿弥元清（1363～1443）によって書かれました。劇中、歌手は歌います：「高砂から湾を越え、湾を越え、潮とともに月が消え、淡路島の影を越え、海を越えて鳴尾まで、住吉（すみのえ）に着く、住吉（すみのえ）に着く」。夫婦和合を想起させるこの歌には、現在の兵庫県と大阪府のいくつかの場所が登場します。

大きな能舞台は、この劇を祝うため、そして永續する町と夫婦和合の繋がりを強調するために、地元の人々によって建てられました。舞台に描かれた松の木には3つのハートが描かれています。3つのハートをすべて見つけると幸せになれると言われています。

相生の松

「相生の松」として知られるこの由緒正しい松は、同じ根から生えた2本の松から成ります。赤松は雌、黒松は雄と考えられています。能曲『高砂』ではこの木が夫婦円満を象徴する赤い松と黒い松として描かれています。劇中の高砂の謡は、日本の伝統的な結婚式でよく披露されます。

工楽松右衛門像

高砂出身の工楽松右衛門(1743-1812)は廻船業を営み、土木工事を行いました。彼は、船に使用される、木綿で織った松右衛門帆を発明し、日本の海運業界に多大な影響を与えました。この丈夫でしなやかな素材は全国の船で帆に用いられました。

工楽の土木事業は、高砂を含む港の港湾施設の改善にも貢献しました。他に恩恵を受けた港には、広島の本郷の浦、北海道の択捉島と函館の2つの港が含まれます。

008-003

Takasago City

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂市 / 結びのまち高砂の概要

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago City

Takasago has long-been an important transport hub, with overland routes and waterways. In the Edo period (1603–1867), many small settlements were established where commodities such as salt and stone were produced. Ports and farms, as well as a distribution center for goods shipped on the Kakogawa River, were also set up. During this period the area was under the control of the Himeji domain.

The city of Takasago is believed to be the setting of the Noh play *Takasago*, written by Zeami Motokiyo (1363–1443), who is considered one of the foremost figures of the traditional Japanese performing art of Noh, a UNESCO Intangible Cultural Heritage. A song called *Takasago* is part of the play. It is often chanted at traditional wedding ceremonies in Japan to celebrate the long life and happiness of married couples and their union. On the grounds of Takasago Jinja Shrine are two pine trees merged at the roots, referred to in the play as “Aioi no Matsu” (twin pines). The spirits of the paired pines, an elderly couple named Jo and Uba, who represent marital happiness and longevity in the play, are enshrined at the Jo-Uba Shinto Shrine, next to the twin pines.

When the legend of Jo and Uba and the existence of the pines became widely known, Takasago became known as Musubi no Machi (“matrimony town”) due to its many legends related to the harmony of married couples in the area.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂市

高砂は古くから陸路と水路が整備され、交通の要衝として栄えてきました。江戸時代（1603～1867年）には、塩や石などの商品が生産される小さな集落が数多く設立されました。また、港や農場、加古川の物流拠点なども整備されました。この時代、この地は姫路藩の統治下にありました。

高砂市は、日本の伝統芸能でユネスコ無形文化遺産に登録されている能の第一人者とみなされている世阿弥元清（1363～1443）が書いた能「高砂」の舞台であるとされています。劇中に「高砂」という歌があり、この歌は、夫婦の長寿と幸福、そしてその和合を祝うために、日本の伝統的な結婚式でよく歌われます。高砂神社の境内には、劇中で「相生の松」として登場する、一つの根元から生える二本の松があります。一对の松の木の精霊である尉と姥という老夫婦は、劇中で夫婦の幸福と長寿を象徴しており、相生の松の横にある尉姥神社にも祀られています。

尉と姥の伝説や松の存在が広まり、高砂は夫婦和合に関する伝説が数多く残ることから「結びの町」として知られるようになりました。

008-004

City of Takasago Historic Overview

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂町概要 / 高砂町歴史的景観形成地区

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

City of Takasago Historic Overview

Takasago has seen dramatic changes in its more than 10,000 years of history, leaving a wealth of discoveries for visitors.

Early development

Since the Heian period (794–1185), Takasago was a popular retreat due to its coastal setting, harbor, and white-sand beach lined with pine trees. In the Muromachi period (1336–1573), a Noh play called *Takasago*, celebrating the joy of the long union of a married couple, was set in Takasago. The play became so popular nationwide that the word *takasago* became synonymous with conjugal harmony and happiness in Japan.

During the Edo period (1603–1867), Takasago was one of the most important cities of the Himeji domain in what is now part of Hyogo Prefecture. As the city prospered, many merchants became wealthy thanks to Takasago's location, its thriving fishing industry, and its rice production, as well as its role as a distribution center for commodities such as salt and rice that were transported via the Kakogawa River. The port's prosperous past is reflected in its buildings, which indicate the presence of affluent merchants in the area.

Later development

From the mid-nineteenth century to the early twentieth century, the development of railways in Japan led to the decline of Kakogawa River transportation, which had been the source of Takasago's prosperity. However, the city's location, abundant water resources, and the efforts of local residents helped attract new industries, which

opened businesses near the coast.

In the Showa era (1926–1989), Takasago developed as an industrial city. Some of the buildings constructed during that time are still standing, and Takasago has become known as a Showa retro town where visitors can experience what it would have been like to live in that era. Today, Takasago remains popular among visitors due to its storied history and rich variety of cultural assets.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂市の歴史概要

高砂は10000年以上の歴史の中で劇的な変化を遂げ、訪れる人々に多くの発見をもたらせてくれる町です。

初期の発展

高砂は、平安時代（794 ～ 1185 年）以来、海岸沿いの環境、港、松の木が立ち並ぶ白砂の海岸により人気の隠れ家でした。室町時代（1336 ～ 1573 年）には、夫婦の長い結びつきの喜びを祝う能『高砂』が書かれました。この劇は全国的に非常に人気があり、日本では高砂という言葉が夫婦和合やめでたいことの代名詞になりました。

江戸時代（1603 ～ 1867 年）、高砂は現在の兵庫県南部にある姫路藩の最も重要な都市の 1 つでした。高砂が都市として繁栄するにつれて、多くの商人が富みました。これには立地条件や、盛んな漁業や米の生産、加古川を通じた塩や米などの物資の集散地としての役割が貢献しました。港の繁栄した過去はその建造物に反映されており、この地域に裕福な商人が存在したことを示しています。

その後の発展

19 世紀半ばから 20 世紀初頭にかけて、日本の鉄道の発達により、高砂の繁栄の源であった加古川舟運は衰退しました。しかし、立地や豊富な水資源、そして地元住民の努力により、海岸近くには近代工場が誘致され、新たな産業が発展しました。

昭和時代（1926年～1989年）、高砂は工業都市として発展しました。高砂にはその時代の建物のいくつかは今も残り、当時の暮らしを体感できる昭和レトロな街として知られています。高砂は、その長い歴史と多種多様な文化財により、現在も観光客の間で人気を保っています。

008-005

Accessory-making Workshop

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂町 / ワークショップ（松右衛門帆の小物作成）

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Accessory-making Workshop

Visitors can make a business-card case using Matsuemon canvas. Takasago-born businessman and inventor Kuraku Matsuemon (1743–1812) is credited with making this tough cotton material using a loom of his own invention. The weaving method uses extra-thick cotton yarn to achieve the strength and durability that made the material popular nationwide during the Edo period (1603–1867). Today Matsuemon canvas, which has been adapted for the modern day, is used not only for sails, but also to make bags and other items, due to its durability and lightness.

This 30-minute workshop is held on the premises of weaving and sewing atelier Mikageya, which sells bags and accessories made of Matsuemon canvas. All Matsuemon canvas items on display have been handmade in the workshop at the back of the store by artisans who are among those who guide visitors in the workshop activity.

Although the instruction is in Japanese, it is easy to follow along. The canvas material is precut, so one simply has to hammer in rivets to hold the sides of the card case together. The workshop can accommodate up to six people at a time; children age three and above may participate if supervised by an adult. The fee is ¥500 per person, and participants are able to take home their card holder. Reservations are required. To join a workshop, send an email to work_shop@takasago-tavb.com, or apply through the Takasago City Tourism and Visitors Bureau website.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アクセサリー作りワークショップ

来訪者は松右衛門帆布を使った小物入れを作ることができます。地元出身の実業家で発明家の工楽松右衛門（1743 ～ 1812 年）は、自身が発明した織機を使用して丈夫な木綿製の船の帆を作りました。極太の綿糸を使用した織り方で強度と耐久性に優れ、江戸時代には日本全国に広まりました。現代に適応された松右衛門帆布は、その耐久性、軽さ、耐水性を生かして帆だけでなく鞆などにも使われています。

この30分間のワークショップは、松右衛門帆のバッグやアクセサリーを販売する織りと縫製の工房「御影や」の敷地内で開催されます。展示されている松右衛門帆布のアイテムはすべて、店の奥にある工房で、来場者に工房の案内をする職人の一人によって手作りされています。

説明は日本語ですが、簡単に理解できます。キャンバス素材はあらかじめカットされているので、リベットを打ち込むだけでカードケースの側面を固定できます。ワークショップには一度に最大 6 人が参加できます。大人の監督下であれば、3 歳以上のお子様も参加できます。料金は1人500円で、参加者はカードホルダーを持ち帰ることができます。予約が必要です。ワークショップへの参加は、work_shop@takasago-tavb.comまでメールを送信するか、高砂市観光交流ビューローホームページからお申し込みください。

008-006

Tebineri (Handmade Pottery) Experience

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂町 / ワークショップ（手びねり体験）

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

***Tebineri* (Handmade Pottery) Experience**

The tradition of forming pottery by hand (*tebineri*), rather than using a potter's wheel, continues to flourish in Takasago. In this two-hour workshop, participants can create a plate, coffee cup, mug, or other piece of pottery using the kilogram of clay provided. The clay comes in various colors, including white, black, light blue, green, and pink.

The workshop is run by a local potter who is a veteran of the craft. Participants can use string or a bamboo tool to decorate their creations. Once the item is finished, it is left to dry at the workshop. Later, artisans will glaze and fire the items and send them to participants within 30 days of the workshop (shipping to domestic addresses only).

The workshop is held at Musubin's event hall each Thursday starting at 10:00 a.m. The fee for participating, including materials and postage, is ¥3,000 per person. Reservations are required; send an email to work_shop@takasago-tavb.com, or apply through the Takasago City Tourism and Visitors Bureau website.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

手びねり体験

高砂では、ろくろを使わずに手びねりで陶器を成形する伝統が今も栄えています。この 2 時間のワークショップでは、参加者は 1 キログラムの粘土を使用して、皿、コーヒー カップ、マグカップ、その他の陶器を作成できます。粘土の色は白、黒、水色、緑、ピンクなどさまざまです。

工房は、地元の熟練した陶芸家によって運営されています。参加者は紐や竹の道具を使って、自

分の作品を飾りつけることができます。完成したらそこで乾燥させます。その後、職人が釉薬をかけて焼成し、ワークショップ終了後30日以内に参加者に発送します（発送は国内住所に限ります）。

ワークショップは毎週木曜日午前10時から結びんイベントホールで開催されており、参加費は材料費・送料込みで1人3,000円。予約が必要です; work_shop@takasago-tavb.comまでメールを送信するか、高砂市観光観光局（変更➡高砂市観光交流ビューロー）ホームページからお申し込みください。

008-007

Night Light Workshop

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂町 / ワークショップ (常夜灯づくり体験)

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Night Light Workshop

This two-hour workshop gives attendees a chance to make a miniature traditional night-light holder from thin wood panels. The holder can be taken home as a souvenir of Takasago. Participants are offered a choice of materials with which to decorate the holder, including *mizuhiki* decorative cords (often used to tie up a wrapped gift), decorative handmade *washi* paper, locally sourced Tatsuyama stone, and Matsuemon canvas. The activity mostly involves using glue, which is provided.

The night-light holder is open in the middle, so that participants can, if they wish, attach a LED light inside the holder to make it a working electric lamp. The LED light unit is included in the cost of the workshop.

The workshop is held at the former residence of the descendants of Kuraku Matsuemon (1743–1812). Matsuemon was a local businessman and inventor best known for developing the process for making the Matsuemon canvas that became popular nationwide for use as ships' sails.

The workshop is suitable for families with young children; the cost is ¥500 per person. Reservations are required. For inquiries and reservations, please email work_shop@takasago-tavb.com or apply through the Takasago City Tourism and Visitors Bureau website.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

常夜灯ワークショップ

この 2 時間のワークショップでは、薄い木製パネルからミニチュアの伝統的な常夜灯ホルダーを作ることができます。ホルダーは高砂のお土産として持ち帰ることができます。参加者は、ホルダーを飾るための材料を選ぶことができます。これには、水引飾り紐（包装されたギフトを結ぶのによく使用されます）、装飾用の手漉き和紙、地元産の竜山石、松右衛門帆などが含まれます。アクティビティでは主に、付属の接着剤を使用します。

常夜灯ホルダーは中央が開いており、参加者が希望する場合は、ホルダー内に LED ライトを取り付けて電球として使用できます。LEDライトはワークショップ料金に含まれています。

ワークショップは、工楽松右衛門（1743～1812）の子孫の旧宅で開催されます。工楽は地元の実業家であり発明家で、船の帆として全国的に普及した松右衛門帆の製造方法を開発したことで最もよく知られています。

ワークショップは小さなお子様連れのご家族に適しています。料金はお一人様500円です。予約が必要です。お問い合わせ・ご予約はwork_shop@takasago-tavb.comまでメールいただくか、高砂市観光交流ビューローホームページよりお申し込みください。

008-008

Takasago City Strolling Tour

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂町 / 街歩き

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago City Strolling Tour

The layout of Takasago has remained unchanged since the early Edo period (1603–1867). Participants can enjoy a tour of the town in the form of a leisurely stroll guided by local volunteers. The tour costs ¥500, lasts 1.5–2 hours, and can incorporate a local workshop if desired.

The tour, which starts at Takasago Station, takes in the city’s major cultural points of interest and buildings. Many, such as the former residence of the descendants of local businessman and inventor Kuraku Matsuemon (1743–1812), date from the late Edo period. Others were built in the early Showa era (1926–1989), such as the former Takasago City Fire Department Building.

Tours are conducted at a pace to suit the participants, who are welcome to ask the guide questions and take photos as they move around. Those with a smartphone and Wi-Fi can also choose to access the Takasago walking app, which provides information on each historical place in the city.

Workshops can also be added to the tour. Options include making a business-card holder from Matsuemon canvas, or making a piece of hand-formed (*tebineri*) pottery. A fee is required for each workshop.

Reservations for tours and workshops are required. To make inquiries and reservations please email guide@takasago-tavb.com or apply through the Takasago City Tourism

and Visitors Bureau website.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂街歩きツアー

高砂の町並みは江戸時代初期（1603～1867年）に整備された町割りから変わっていません。参加者は、地元ボランティアの案内でのんびりと町を散策するツアーを楽しむことができます。ツアーの費用は500円で、通常1時間半から2時間、希望に応じて地元のワークショップを組み込むこともできます。

ツアーは高砂駅からスタートし、市内の主要な文化的名所や建造物を巡ります。地元の実業家であり発明家でもあった工楽松右衛門（1743-1812）の子孫の旧邸宅など、その多くは江戸時代後期のものです。旧高砂消防会館など昭和初期（1926-1989）のものもあります。

ツアーは参加者のペースに合わせて行われ、ガイドに質問したり、写真を撮ったりしながら移動することができます。スマートフォンとWi-Fiがあれば、高砂市内の各歴史的名所の情報を提供する高砂散策アプリをご利用いただくことも可能です。

ツアーにワークショップを追加することもできます。松右衛門帆で名刺入れを作ったり、手びねりで焼き物を作ったりできます。各ワークショップは有料です。

見学・ワークショップは予約が必要です。お問い合わせ・ご予約は、Eメール（guide@takasago-tavb.com）または高砂市観光交流ビューローのウェブサイトからお申し込みください。

【タイトル】 高砂町 / 食

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago Cuisine

Takasago is the birthplace of *nikuten*, a dish similar to *okonomiyaki*: a savory pancake fried with vegetables and meat and/or seafood, then topped with various condiments. However, unlike *okonomiyaki*, *nikuten* includes seasoned potatoes, beef tendon, crunchy bits of deep-fried tempura batter, and *konnyaku* (a jelly-like food made from konjac). The way *nikuten* is cooked is also different from *okonomiyaki*: the *nikuten* batter is cooked on a griddle before other ingredients are added on top. It is then folded in half, and more batter and ingredients are added to make it like a sandwich. It is a very filling dish.

Nikuten is believed to have originally been made at the request of a customer at a local restaurant; over the years, it developed into its current form. While the exact origin of the name is not known, it probably derives from the beef tendon (*sujiniku*) and crunchy tempura bits (*tenkasu*) in the dish, creating the portmanteau *nikuten*.

Another of Takasago's delicacies is grilled conger eel, readily available from the nearby Harima Sea, the eastern part of the Seto Inland Sea. The city's coastal location has long offered access to rich fishing grounds. Though conger eel is no longer fished in the area, local restaurants still serve it, cooked in the traditional way. Takasago's grilled conger eel has a fragrant aroma; rich flavor; and tender texture, making it a popular dish.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂の名物

高砂は、お好み焼き(野菜と肉や魚介類を具材とする、様々な薬味をトッピングした食事用のパンケーキ)に似た料理である「にくてん」の発祥の地と考えられています。ただし、お好み焼きとは異なり、にくてんには味付けしたジャガイモ、牛すじ、サクサクに揚げた天ぷら生地、こんにゃく（蒟蒻芋から作るゼリーのような食品）などが入っています。にくてんの焼き方もお好み焼きとは異なり、生地をフライパンで焼いてから他の具材を乗せます。そして半分に折りたたみ、さらに生地と具材を加えてサンドイッチのようにします。とても食べ応えのある料理です。

にくてんは、もともとは地元のレストランで客に頼まれて作ったのが始まりとされています。正確な名前の由来は不明ですが、おそらく牛すじ肉（すじにく）とサクサクの天かすが入っていることから、「にくてん」と呼ばれるようになったと考えられます。

瀬戸内海の東部、播磨灘に面した高砂町のもう一つの名物は焼き穴子です。市内の海岸沿いの立地は、穴子が豊富に採れる豊かな漁場へのアクセスを長年にわたって提供してきました。この地域では穴子はもう漁獲されませんが、地元のレストランでは今でも伝統的な方法で調理した穴子を提供しています。高砂の焼き穴子は香ばしい香りが漂い、豊かな風味で、柔らかな食感が人気の一品です。

008-010

Former Residence of Kuraku Matsuemon

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 工楽松右衛門旧宅 / 旧宅内展示資料の案内、建物の歴史

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Former Residence of Kuraku Matsuemon

This structure is typical of merchant houses built in the Takasago area during the late part of the Edo period (1603–1867). This was the home of generations of descendants of Takasago-born businessman and inventor Kuraku Matsuemon (1743–1812).

Matsuemon pioneered several items chiefly related to shipping, harbor improvement, and nautical navigation. His best-known invention is Matsuemon canvas, a strong yet flexible woven-cotton sailcloth. Sails made with Matsuemon canvas were much more durable than the sails used previously, vastly improving the shipping of goods in Japanese waters during the Edo period.

The house, which is almost 200 years old, was built by Matsuemon's descendants as a family home, as well as a shop and warehouse for the family business. It is believed that three or four generations of the family lived here before they relocated to another area.

The building was restored to its original appearance in 2018, an undertaking of more than 16 months. Looking up from inside the high-ceilinged hallway in the house, one can see the impressive framework of the roof. The walls are painted with the white plaster that would have been used originally, while the roof has a skylight to allow light into the building and to let out smoke from fires for cooking.

The first floor has rooms for daily use, business, and entertaining guests. The hallway leads to a kitchen, which has a *kamado* (wood-fired cooking stove). The house contains several pieces of period furniture, as well as signs and documents related to

the family business, spread across its two floors.

The staircase to the upper floor is steep, so caution is advised. The second floor includes a Western-style drawing room and a children's study. In the rooms are a number of maps and sketches, many of which date back to the Edo period, together with a few model boats. These are replicas of vessels that Matsuemon designed and built to help ship locally quarried stone to Hokkaido. There is also a palanquin that is thought to have been used by the family.

The walled garden at the rear of the property has a well and a food preparation area, as was common at the time. The wood for the external wall of the house is recycled from old boats.

Today a number of events are held at the house and garden, such as an exhibit of photographs and paintings of the town by local photographers and artists. The garden often hosts a market that draws together local artisans and producers who sell their wares there. After the family donated the property to the city, it was designated a Prefectural Cultural Property.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

工楽松右衛門旧宅

江戸時代後期（1603-1867）に高砂地区に建てられた商家の典型的な建物。高砂生まれの実業家で発明家の工楽松右衛門（1743-1812）の何世代にも渡る子孫が住んでいました。工楽松右衛門は、主に海運、港湾改良、航海術に関するいくつかの発明を行いました。最も有名な発明は松右衛門帆で、丈夫でしなやかな綿織物の帆布です。松右衛門帆布で作られた帆は、それまで使われていた船の帆よりもはるかに丈夫で耐久性に富み、江戸時代の日本海域における物資の輸送を大幅に改善しました。

築200年近くのこの家は、時代によって修築を重ねています。工楽家の先祖子孫が実家として、また家業を営むための店舗兼倉庫として建てたものです。工楽の一族は別の土地に移り住むまで、3世代か4世代がここで暮らしたと考えられています。

この建物は2018年、16カ月以上かけて当時の姿に復元されました。家の中の天井の高い廊下の

内側から見上げると、屋根を支える印象的な骨組みが見えます。当時使われていたであろう白い漆喰が塗られ、屋根には天窓があり、建物内に光を取り込み、調理用の火から出る煙を逃がすようになっています。

1階には、日常生活やビジネス、客人をもてなすための部屋があります。廊下は台所に通じており、かまどがあります。この家には、当時の家具がいくつかと、家業にまつわる看板や書類が2階にわたって展示されています。

2階への階段は急なので、注意が必要です。2階には、洋風の応接間と子供用の部屋があります。部屋には、江戸時代の地図やスケッチがたくさんあり、船の模型もいくつかあります。これらは、地元で切り出された石材を北海道に運ぶために工楽が設計・建造した船のレプリカです。一族が使っていたと思われる駕籠もあります。

敷地奥の堀に囲まれた庭には、当時一般的だった井戸と炊事場があります。家の外壁に使われている木材は、古い船から再利用されたものです。

現在、この家と庭では、地元の写真家やアーティストによる町の写真や絵画の展示など、さまざまなイベントが開催されています。庭では、地元の職人や生産者が集まって商品を販売するマーケットがしばしば開催されます。一家がこの土地を市に寄贈した後、兵庫県指定文化財になりました。

008-011

Kuraku Matsuemon Introduction

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 工楽松右衛門旧宅 / 工楽松右衛門紹介

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Kuraku Matsuemon Introduction

Kuraku Matsuemon (1743–1812) was the son of a fishing family by the name of Miyamoto. In 1758, he moved to the port of Hyogo-tsu (present-day Kobe) and became an apprentice of shipping merchant Mikageya Heibei.

At around the age of 40, Matsuemon started his own business and adopted the Mikageya surname. He shipped commodities such as rice, lumber, cotton, and seafood on a route that included Matsumae domain in Ezo (present-day Hokkaido), the Sea of Japan coast, the Seto Inland Sea, and Edo (present-day Tokyo).

He was very good at finding solutions to problems that ships encountered on their voyages or when docking at harbors to unload their cargos, so he came to be recognized for his engineering talent. Soon he was asked to help in the construction of the harbor on Etorofu (Iturup) Island, north of Hokkaido, and the renovation of the harbors at Takasago, Tomonoura in Hiroshima Prefecture, and Hakodate, Hokkaido.

During the Edo period (1603–1867), Matsuemon developed a tough but flexible canvas using a loom he had devised. The canvas was woven from thick cotton yarn made by twisting together several single strands of thread. The new material, which later came to bear his name, was ideal for making sails, and was far more durable than the other materials used at the time.

The stronger, more efficient sails made of this Matsuemon canvas allowed ships to

travel faster and to sail even in the lightest breeze. As a result, transport capacity increased and Japan's maritime trade grew exponentially. Agronomist Okura Nagatsune (1766–1860) noted in his 1822 book on farming tools that Matsuemon canvas was used on every boat and ship in Japan.

With the growing demand for the canvas came increased demand for the cotton needed to make the yarn. The Banshu region (present-day southwestern Hyogo Prefecture) was a major producer of the cotton that was needed to make Matsuemon canvas.

Due to the success of these projects, the Edo shogunate bestowed on Matsuemon the surname Kuraku (meaning “enjoys ingenuity”).

Matsuemon's work was carried on by his son and grandson, who worked on harbor renovations and the development of new farmland until the late nineteenth century.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

工楽松右衛門紹介

工楽松右衛門（1743-1812）は、宮本という名の漁師の息子です。1758年、兵庫津（現在の神戸）に移り住み、廻船問屋・御影屋平兵衛に弟子入りしました。

40歳前後で独立し、御影屋姓を名乗りました。蝦夷の松前藩（現在の北海道）、日本海側、瀬戸内海、江戸などに、米、材木、木綿、海産物などを出荷しました。

航海中や荷揚げのために港に停泊する際に船が遭遇する問題の解決策を見つけるのが得意で、技術者としての才能を認められるようになりました。やがて彼は、港湾建設の手伝いを頼まれるようになりました。北海道の北にある択捉島の港や、広島県の鞆の浦港、北海道の函館港、地元高砂の港の改修工事などです。

江戸時代（1603～1867年）、松右衛門は自ら考案した織機を使って、丈夫でしなやかな帆布を開発しました。この帆布は、一本の糸を何本も撚り合わせて作った太い木綿糸で織られていました。後に彼の名を冠することになるこの新素材は帆に最適で、当時使われていた他の素材よりもはるかに耐久性に優れていました。

この松右衛門帆布で作られた丈夫で効率的な帆は、船をより速く走らせ、微風でも航行できました。その結果、輸送力が増大し、日本の海上貿易は飛躍的に発展しました。農学者・大蔵永常（1766-1860）は、1822年に出版した農具に関する著書の中で、松右衛門帆布が日本中のあらゆる海船や川舟に使用されていたことを記しています。

帆布の需要が高まるにつれて、糸を作るのに必要な綿の需要も高まりました。播州地方（現在の兵庫県南西部）は、松右衛門帆布を作るために必要とした木綿の一大産地でした。

これらの事業の成功により、江戸幕府は彼に「工夫を楽しむ」という意味の「工楽」という姓を与えました。

工楽松右衛門の仕事は息子と孫に引き継がれ、19世紀後半までに港の改修や新しい農地が開発されました。

008-012

Matsuemon Canvas

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 工楽松右衛門旧宅 / 松右衛門帆

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Matsuemon Canvas

Before the Edo period (1603–1867) in Japan, sailing was unpredictable. Sails were of poor quality, made of woven reeds or thin cotton, and were prone to fraying and ripping in heavy rain or strong winds.

Takasago-born businessman and inventor Kuraku Matsuemon (1743–1812) developed a tough but flexible canvas made from cotton yarn. He first made thick cotton yarn from strands of thread that he twisted together, and then wove the yarn into cloth using a loom of his own design.

Although Matsuemon canvas was more expensive than other materials, it soon became popular. Agronomist Okura Nagatsune (1768–1856) noted in his 1822 book, *Nogu benri ron* (Convenient Farm Tools), that the canvas was used on every boat and ship in Japan at the time.

It is thought that the boom in Japan's maritime trade was largely due to the use of Matsuemon canvas, which allowed ships to sail more regularly. They could sail with even the slightest breeze and could better withstand rough storms, making travel safer. Since ships could travel faster, the time required to transport goods around Japan was greatly reduced.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松右衛門帆

江戸時代（1603-1867）以前の日本では、航海は予測不可能なものでした。帆の質は悪く、葦を編んだものや薄手の木綿布で作られており、大雨や強風でほつれたり破れやすかったのです。

高砂生まれの実業家で発明家の工楽松右衛門（1743-1812）は、木綿糸から作られた丈夫で柔軟な帆布を開発しました。松右衛門は、糸を撚り合わせて太い綿糸を作り、自ら考案した織機で織りました。

松右衛門帆は他の素材より高価でしたが、すぐに普及しました。農学者・大蔵永常（1768-1856）は、1822年に出版した『農具便利論』という農具に関する著書の中で、当時の日本のあらゆる海船や川舟に松右衛門帆布が使われていたと記しています。

日本の海上貿易の隆盛は、松右衛門帆布の使用によるところが大きいと考えられています。松右衛門帆布を使うことで、船はより規則正しく航行できるようになり、わずかな風でも航行できるようになり、荒天にも耐えられるようになったことでより安全になりました。船はより速く移動できるようになり、日本中の物資を運ぶのに必要な時間は大幅に短縮されました。

008-013

Local Tourist Office Musubin

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 中島家旧宅（結びん） / 建物の歴史

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Local Tourist Office Musubin

Musubin is primarily Takasago's tourist information center, but it also houses interesting exhibits related to the city's history. Displays introduce Takasago's fame as a Musubi no Machi ("matrimony town") that long has attracted couples and those seeking blessings for a good marriage, as well as the place where Matsuemon canvas for sails was created in 1785. Exhibits show how the invention of Matsuemon canvas, made of woven cotton, contributed to the development of Japan's modern fishing industry and to the success of coastal shipping.

The building housing Musubin was erected in the 1700s. It was the office and residence of the Nakajima family who, at the time, operated a wholesale shipping business from the pier opposite the building. In the modern period, the structure was used as a post office. Many items remain from that time, including an old safe and a public telephone booth that is no longer operational. Efforts have been made to preserve the historic characteristics of the building.

A large range of local products are on display in the shop for purchase as souvenirs. The space also hosts events and workshops showcasing local crafts and products. Outside the office are bamboo benches made by local company Bamboo Fam, making a comfortable spot to take a break before exploring the city.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

まちの観光会館 結びん

結びんは、主に高砂市の観光案内所ですが、高砂市の歴史に関する興味深い展示物もあります。高砂が古くから縁結びの町として知られ、夫婦や良縁のご利益を求める人々を惹きつけてきたことや、1785年に帆用の松右衛門帆布が誕生したことなどを紹介しています。木綿を織った松右衛門帆布の発明が、日本の近代漁業の発展や内航海運の成功にどのように貢献したかが展示されています。

結びんの建物は1700年代に建てられました。当時、向かいの棧橋で廻船問屋を営んでいた中島家の事務所兼住居でした。近世には郵便局として使われていました。古い金庫や現在は使われていない公衆電話ボックスなど、当時のものが数多く残されています。建物の歴史的特徴を保存する努力がなされています。

ショップには地元の特産品が数多く展示され、お土産として購入することができます。また、地元の工芸品や製品を紹介するイベントやワークショップも開催されています。オフィスの外には、地元企業のバンブー・ファム社が製作した竹製のベンチがあり、街を散策する前の休憩スポットとして快適です。

008-014

Takasago History Tour 1

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂町 / 百間蔵跡、川口御番所跡、高砂や、延命寺
織部灯籠、川地蔵

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago History Tour 1

Takasago's scenic coastal setting has been a popular attraction since before the Heian period (794–1185).

In 1600, daimyo Ikeda Terumasa (1565–1613) was granted rule over the Himeji domain within Harima province (part of present-day Hyogo Prefecture). The domain was considered wealthy since it was producing 520,000 *koku* (78 million kilograms) of rice, an important commodity and currency of the time, every year. Ikeda ordered the construction of Himeji Castle and other parts of the growing town of Himeji. He played a leading role in Takasago's development, including building the port and the Horikawa canal, which drew the Kakogawa River into Takasago.

During the Edo period (1603–1867), Takasago was one of the most important cities of the domain. This was due to its location, thriving fishing industry, and rice production, all of which made it prosper as a distribution center for commodities transported via the Kakogawa River.

Hyakkengura Warehouses

In 1605, two warehouses (*kura*) were built in Takasago. Their total length of about *hyaku* (100) *ken* (a historic unit of length equivalent to 182 meters) resulted in their name: *hyakkengura*. All the goods that went down the Kakogawa River were brought to Takasago, and the warehouses became the site where goods belonging to the Himeji domain and the annual tax of rice collected from the northern and eastern parts of the Harima province were stored. At first, the warehouses could hold nearly five million

kilograms of rice, but by the end of the Edo period, they had been expanded to hold approximately six million kilograms.

Today, a stone monument inscribed with this information stands at the site of the former warehouses.

Site of the Kawaguchi Guardhouse

Around 1605, Ikeda ordered the Kawaguchi Guardhouse built at the entrance of Takasago Port. The guardhouse was under the direct control of the Himeji domain, with officials stationed there to observe cargo ships entering Takasago and to monitor marine traffic. Two clan officials and five regular guards worked in shifts day and night.

A tile with the Ikeda family crest marks the site.

Takasagoya

Ikeda encouraged the production of handicrafts. Working in these supportive conditions, local craftsman Ozaki Shobei invented a double-stencil technique for use in dyeing silk kimono. The method was used to make patterns depicting the “Aioi no Matsu” (twin pines) of Takasago Jinja Shrine and the legend of the old couple, Jo and Uba, who are the spirits of the two pines and who represent marital happiness and longevity. The dyeing technique became known as Takasago-zome (Takasago dyeing); it was highly esteemed during the Edo period. Items made using this dyeing technique were presented as gifts to the shogun.

In the Meiji era (1868–1912), cotton came to be more commonly used than silk. Then, around the Taisho era (1912–1926), dyeing methods that reduced costs and labor were introduced; these both resulted in the decline of Takasago-zome. By the beginning of the Showa era (1926–1989), the craft had been nearly abandoned.

In the twenty-first century, workshops and other activities to revive Takasago-zome were initiated, and the craft began to be celebrated once again. A sign in front of the Ozaki family residence (Takasagoya) in Kajiya-cho marks the site as the birthplace of

Takasago-zome.

Enmeiji Oribe Lantern

Oribe lanterns were designed by Furuta Oribe (1544–1615), a daimyo and tea master. They were made of granite, with the upper part made to look like a cross and the bottom part with legs that are wide apart. Oribe lanterns were placed in tea gardens during the Edo period.

These lanterns may have been used for votive reasons, for lighting, or for viewing. Perhaps because of the cross motif, it is believed that Oribe lanterns may have been secretly used for worship by Edo-period Christians, as Christianity was strictly prohibited at that time. Oribe lanterns are therefore also known as *kirishitan* (Christian) lanterns.

Kawajizo

The statue of the seated *kawajizo* (guardian) represents Takuhi Daigongen, the deity of safe navigation. The *kawajizo* is said to be a figure of the Oki Islands in Shimane Prefecture, and was installed to ensure the safety of shipowners at sea.

In 2015, the *kawajizo* was registered as a Takasago City Hometown Cultural Asset, and in 2020, a hall was built to house it in its current location. Local residents continue to make offerings and pray there.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂歴史ツアー1

風光明媚な高砂の海岸は、平安時代（794-1185）以前から都の人びとに知られる人気のスポットでした。

1600年、大名の池田輝政（1565-1613）が播磨国姫路藩（現在の兵庫県南西部）の領地を与えられました。池田は、姫路藩の藩主となり、当時の重要品目であり通貨であった米を毎年52万石（7,800万キログラム）生産していたことから、この藩は裕福であると考えられていました。池田は姫路城をはじめ、発展する姫路の町の建設を命じました。彼は、高砂では港や加古川を

町の中に引き入れる堀川運河の建設など、高砂の発展に主導的な役割を果たしました。

江戸時代（1603-1867）、高砂は姫路藩の最も重要な都市のひとつでした。それは、その立地条件、盛んな漁業、米の生産など、加古川を通じて運ばれる物資の流通拠点として栄えたからです。

百間蔵

1605年（慶長10年）、高砂に2棟の蔵が建てられ、全長約100間（182メートルに相当する歴史的な長さの単位）があることから、「百間蔵」と呼ばれるようになりました。加古川を下る物資はすべて高砂に運ばれ、蔵は姫路藩の物資や播磨地方の北部と東部から徴収した年貢米を保管する場所となりました。当初は500万キロ近くの米を貯蔵できましたが、江戸時代末期には約600万キロまで拡張されました。

現在、蔵の跡地にはそのことが刻まれた石碑が建っています。

川口御番所跡

1605年頃、輝政は高砂港の入口に川口御番所を建てるよう命じました。この番所は姫路藩の直轄で、高砂に入港する貨物船の監視や海上交通の監視のために役人が配置されました。2人の役人と5人の警備員が昼夜交代で勤務しました。

池田家の家紋入りの瓦が目印です。

高砂や

池田輝政は工芸品の生産を奨励しました。このような環境の中で、地元の職人であった尾崎庄兵衛は、絹の着物を装飾するための二型染め技法を考案しました。この技法は、高砂神社の「相生の松」や、夫婦円満と長寿を象徴する2本の松の幹の精霊である老夫婦の伝説「尉と姥」を文様化するのに用いられました。江戸時代、この染色技法は「高砂染」と呼ばれ、珍重されました。江戸時代には、この染め物を将軍への献上品としました。

明治時代（1868～1912年）になると、絹よりも木綿が使われるようになりました。その後、大正時代（1912～1926年）頃になると、コストや手間を削減できる染色方法が導入され、高砂染は衰退しました。昭和に入り高砂染はほぼ廃れてしまいました。

21世紀に入ると、高砂染を復活させるためのワークショップなどが始まり、再び高砂染が注目されるようになりました。鍛冶屋町の尾崎家住宅（高砂や）前には、高砂染発祥の地であることを示す看板が立っています。

延命寺織部灯籠

大名で茶人でもあった古田織部（1544～1615）が考案した織部灯籠。花崗岩で作られ、上部は十字に、下部は脚が大きく離れています。江戸時代、織部灯籠は茶室の庭に置かれました。

灯籠は奉納用、照明用、観賞用など、用途はさまざまであったと考えられます。十字架をモチーフにしていることからか、当時はキリスト教が厳禁されていたため、江戸時代のキリシタンが密かに礼拝に使っていたのではないかと考えられ、そのところからキリシタン灯籠とも呼ばれています。

川地蔵

川地蔵坐像は、航海安全の神である焼火大権現を表しています。島根県の隠岐諸島に伝わるもので、船主の海上安全を祈願して設置されたといわれています。

2015年には高砂市ふるさと文化財に登録され、2020年には現在の場所に移動し地蔵を納めるための建物が建てられました。現在も地元住民が供養や祈りを捧げています。

008-015

Takasago History Tour 2

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂町 / 向島防波堤、湛保の祠

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago History Tour 2

Kuraku Matsuemon (1743–1812), a Takasago-born businessman and inventor, made significant contributions to Japan’s shipping industry through his invention of what became known as Matsuemon canvas and to the development of Takasago as a port city, including the Mukojima Breakwater. He has been honored for his work with a statue at Takasago Shinto Shrine.

Mukojima and Kuraku Matsuemon

Takasago faces Harima Bay on the Seto Inland Sea. Most of the city is located on the alluvial plain on the west side of the Kakogawa River mouth, while the coastline is largely reclaimed land.

Takasago played an important role in the development of shipping routes and trade with cities on the Sea of Japan coast during the Edo period (1603–1867).

However, in the late Edo period, the port of Takasago was facing difficulties due to the accumulation of sediment flowing from Kako River, which made the waters shallow and a danger to navigation, hampering the local industries and communities that depended on the harbor’s infrastructure.

Matsuemon was born to a fishing family by the name of Miyamoto. In 1758, he moved to the port of Hyogo-tsu (present-day Kobe) and became an apprentice with the shipping merchant Mikageya Heibei. Matsuemon started his own business around the

age of 40, and adopted the name Mikageya. He shipped commodities such as rice, lumber, cotton, and seafood on a route that included Matsumae in Ezo (present-day Hokkaido), the Sea of Japan coast, the Seto Inland Sea, and Edo (present-day Tokyo).

As Matsuemon was very good at finding solutions to problems that ships encountered during their voyages or when docking at harbors to unload their cargos, he came to be recognized for his talent in engineering. In 1808 he was commissioned by the people of Takasago to fix the sediment problem at Takasago Port. His solution involved dredging the river and building a new wharf offshore for large ships, a project that took three years to complete. Matsuemon also invented a sediment-dumping ship and a stone-pulling ship to accomplish the task of dredging sediment in the port and constructing the Mukojima Breakwater. In addition, he helped in the construction of a harbor on Etorofu (Iturup), an island north of Hokkaido, as well as the renovation of the harbor in Hakodate, Hokkaido.

Matsuemon is perhaps best known for developing Matsuemon canvas, a cotton material that was more durable, flexible, and long-lasting than any other used for sails at the time. He made cotton yarn by twisting together several strands of thread, which he then wove into cloth using a loom he devised for the purpose. The stronger sails made of this canvas enabled ships to travel faster and better withstand storms, making it safer to travel. As a result, transport capacity increased and Japan's maritime trade grew exponentially. Agronomist Okura Nagatsune (1766–1860) noted in his 1822 book on farming tools that Matsuemon canvas was used on every ship and boat in Japan.

Such were his achievements that the Edo shogunate bestowed on Matsuemon the surname Kuraku (meaning “enjoys ingenuity”).

Renovations of Takasago Harbor continued until the late nineteenth century. Matsuemon's descendants led projects to repair the quays and open up new farmland to the west of the harbor. This land was called Miyamoto (or Kuraku) Shinden (“new fields”). Today, it is part of the Takasago plant of the Kaneka Corporation, a chemical manufacturing company.

Tanpo Jinja Shrine

This shrine was established in 1864 in Minami-Zaimoku-cho, a part of Takasago, and was relocated to its current site in the early 1960s. Names are inscribed on the base of the shrine, along with notes on each individual's respective achievements. There is a 1929 addition commemorating the port's renovation.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂歴史ツアー2

実業家であり発明家でもあった工楽松右衛門（1743-1812）は、松右衛門帆を発明し、向島防波堤など港町としての高砂の発展に大きく貢献しました。その功績を称えられ、高砂神社に銅像が建てられています。

向島と工楽松右衛門

高砂市は瀬戸内海の播磨灘に面しています。市の大部分は加古川河口西側の沖積平野に位置し、海岸線の大部分は埋立地です。

高砂は、江戸時代（1603 ～ 1867 年）、航路の発展と日本海側の都市との交易において重要な役割を果たしました。

しかし、江戸時代後期、高砂港は加古川から流れてくる土砂の堆積によって水深が浅くなり、航行が危ぶまれ、港のインフラに依存する地場産業や地域社会に支障をきたすという困難に直面しました。

工楽松右衛門は宮本という名の漁師の家に生まれました。宝暦8年（1758年）、兵庫津（現在の神戸市）に移り住み、海運商の御影屋平兵衛に弟子入りしました。40歳頃に独立し、御影屋を名乗りました。蝦夷の松前、日本海側、瀬戸内海、江戸などを航路に、米、材木、木綿、海産物などを運びました。

航海中や荷揚げのために港に停泊する際、船が直面する問題の解決策を見つけるのが得意だった松右衛門は、技術者としての才能を認められるようになります。1808年、彼は高砂の町の人々に高砂港の土砂問題の解決を依頼されました。彼の解決策は、川を浚渫し、大型船のために沖合に新しい埠頭を建設することでした。松右衛門はまた、港内の土砂を浚渫し、向島防波堤を建設するという仕事を成し遂げるために、土砂投棄船と石抜き船を発明しました。さらに、北海道の北に浮かぶ択捉島の港湾建設や北海道函館市の港湾改修にも携わりました。

また、松右衛門の発明として最もよく知られているのは、当時帆に使われていたどの素材よりも丈夫で柔軟性があり、長持ちする木綿素材、松右衛門帆を開発したことでした。彼は何本もの糸を撚り合わせて綿糸を作り、その糸を織機を使って布に織り上げました。この帆布で作られたより丈夫な帆は、船をより速く走らせ、より安全に航行できるようにしました。その結果、輸送能力が高まり、日本の海上貿易は飛躍的に成長しました。農学者・大蔵永常（1766-1860）は、1822年に出版した農具に関する著書の中で、松右衛門帆が日本中のあらゆる海船や川舟に使用されていたことを記しています。

こうした功績から、江戸幕府は松右衛門に「工楽」の姓を与えました。

高砂港の改修は19世紀後半まで続きました。工楽の子孫たちは、港を修復し、港の西側に新しい農地を開拓するプロジェクトを指揮しました。この土地は宮本（または工楽）新田と呼ばれました。現在は、化学メーカーの株式会社カネカの高砂工業所の一部となっています。

湛保の祠

1864年に高砂市南材木町に建造され、1960年代初頭に現在地に遷座されました。社殿の台座には、関わった人々の名前が刻まれ、それぞれの功績が記されています。港の改修を記念して1929年に追加されたものがあります。

008-016

Takasago History Tour 3

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂町 / 申義堂、三連蔵、花井家住宅、大崎家住宅
【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago History Tour 3

Takasago was an important fishing center and distribution point for goods, such as salt and rice, and many local merchants built their wealth from this trade. Business depended on transportation via the Kakogawa River. The prosperity of the town over the centuries still can be seen in its buildings today.

Shingido

This educational institution was established in the early nineteenth century. It was created on the recommendation of Kawai Sunno, a chief retainer of the Himeji domain, with the aim of providing education for commoners. *Shingi* is translated as “righteousness,” one of the Confucian ideals the school sought to cultivate; *do* means “hall.” Townspeople who had acquired a high level of Confucian education while running a business were selected as teachers. A number of scholars and literary figures visited Takasago, raising local interest in and motivation for higher learning and culture.

It is not known how old students were when they enrolled in Shingido, but they were likely in their early or mid-teens. Most were children of Takasago residents. Students were required to have completed their studies at a *terakoya* (temple school) before enrolling. A desire to learn was necessary, as well as the financial means and time to join the classes. Instruction was held daily from early morning until noon, except on holidays and special occasions.

The school was closed in 1871 when the Tokugawa period system of domains was

abolished and prefectures set up in their place; education of children was taken over by Takasago Primary School. The Shingido was rebuilt in 2012 according to its original design. Funding for the restoration was provided by local benefactors.

The building is a single-story wooden structure, consisting of a large tatami-floored room, three inner rooms, and a veranda at the front. It is a cultural property of the city, and is open to the public on weekends and public holidays from 10 a.m. to 4 p.m.

Sanrengura Warehouse

This site consists of three wooden storehouses built early in the Meiji era (1868–1912) to store items such as tableware and dishes used for celebrations. The storehouses are lined up close to each other and feature a masonry base and exterior walls clad with charred cedar planks. (Charring the wall surfaces slightly made them waterproof and more durable.) The buildings also feature high-quality white plastering, copper window shutters, and traditional tile roofing. Sanrengura Warehouse remains privately owned and has been designated as Important Landscape Architecture of Hyogo Prefecture.

Hanai Family Residence

The Hanai family used their easy access to boat transportation on the Kakogawa River to operate a fertilizer business from the Edo period (1603–1867) to the early Showa era (1926–1989). Their property comprises a main residence, a two-story building constructed late in the Meiji era, and a storehouse.

Since 2011, the residence has been used as a base for the Takasago District Community Development Council. It consists of a community hall and shop, both of which are decorated with historical artifacts from the early 1900s such as movie posters, old record covers, and photos of local festivals. The residence is opened on the weekends as a café and on Wednesdays for a dyeing workshop (reservations required for the workshop). The residence is designated a National Registered Tangible Cultural Property.

Osaki Family Residence

This property was built between 1898 and 1912 as a retirement residence for the Osaki

family, who used the Kakogawa River transportation system to run their wholesale lumber business, Osaki Shoten. The two-story structure is typical of period townhouses in Takasago. It features a lattice window on the front facade and a gabled roof supported by exposed rafters, with ornamental brackets (*udatsu*) on both sides. It is a National Tangible Cultural Property.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂歴史ツアー 3

高砂は重要な漁業の中心地であり、塩や米などの物資の集散地であり、多くの地元の商人がこの貿易で富を築きました。商売は多く加古川舟運に頼っていました。何世紀にもわたる町の繁栄は、今日でもその建物に見ることができます。

申義堂

19世紀初頭に設立された教育機関です。姫路藩家老・河合寸翁の勧めにより、庶民の教育を目的として創設されました。申義は「正義」と（英語では）訳され、この学校が育もうとした儒教の理想の一つです。堂は「ホール」を意味します。教師には、商売をしながら高度な儒教の教育を受けた町民が選ばれました。多くの学者や文学者が高砂を訪れ、高等教育や文化に対する地域の関心と意欲が高まりました。

生徒たちが申義堂に入学したときの年齢は不明ですが、おそらく10代前半か半ばだったと思われます。ほとんどが高砂住民の子どもたちで、入学前に寺子屋での学習を完了する必要がありました。学びたいという意欲だけでなく、参加するための経済的手段と時間も必要でした。指導は休日や特別な日を除き、毎日早朝から正午まで行われました。

この学校は、徳川時代の藩制が廃止され、それに代わって県が設置された 1871 年に閉校になりました。児童教育は高砂小学校に引き継がれました。申義堂は2012年に元の姿に基づいて再建されました。修復資金は地元の篤志家らから提供されました。

建物は木造平屋建てで、畳敷きの大部屋と奥の3部屋、正面の縁側から構成されています。市の文化財で、土・日・祝日の午前 10時から午後 4時まで一般公開されています。

三連蔵

これは明治初期（1868～1912年）に、祝い事に使われる食器などを保管するために建てられた3棟の木造倉庫で構成されています。蔵は隣り合って並び、基礎は石積みで、外壁は焼杉板で覆われています（壁面をわずかに焦がすことで防水性と耐久性が向上しました）。高品質の白

漆喰、窓の銅製のよろい戸、伝統的な瓦屋根もこの建物の特徴です。三連蔵は個人所有のまま、兵庫県の重要景観建造物に指定されています。

花井家住宅

花井家は、江戸時代から昭和初期にかけて（1945年～1989年）、加古川舟運の利便性を生かして肥料商を営んでいました。敷地は主邸、明治後期に建てられた2階建ての建物、土蔵からなります。

2011年からは高砂地区まちづくり協議会の拠点として活用されています。この拠点はコミュニティホールとショップで構成されており、どちらも映画のポスター、古いレコードのジャケット、地元の祭りの写真など、1900年代初頭の歴史的工芸品で飾られています。週末はカフェとして、水曜日は染色ワークショップ（ワークショップは要予約）としてオープンしています。この邸宅は国の登録有形文化財に指定されています。

大崎家住宅

この物件は、加古川舟運を利用して木材卸売業「大崎商店」を営んでいた大崎家の隠居邸として、1898年から1912年にかけて建てられました。高砂の町家によく見られる2階建ての建物です。正面に格子窓があり、垂木をむき出しにして両側にうだつを付けた切妻屋根が特徴です。国の登録有形文化財です。

008-017

Takasago History Tour 4

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂町 / 国鉄高砂線跡、魚町倶楽部、旧朝日町浄水場配水塔、出汐館

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago History Tour 4

The development of Japan's railway network led to the decline of Kakogawa River transportation, which had been a source of Takasago's prosperity. However, Takasago's location and abundant water resources, along with the efforts of local residents, helped attract new industries.

Site of the JNR Takasago Line

The area's railway history began in 1888 with the opening of the Sanyo Railway (now the JR Kobe Line) in Kakogawa. In 1889, the township of Takasago was established, and in 1901, operations began at the newly constructed factory of the Kobe Paper Mill Company (now Mitsubishi Paper Mills Limited). More than 500 houses were built in the town for workers. In 1906, the Kanegafuchi Spinning Co., Ltd., which already had 17 factories nationwide, established a branch in Takasago.

As railway operations increased, the Banshu Railway went into service between Kakogawa and Kunikane (now Yakujin) Stations in April 1913. The Banshu Railway opened fully in September 1914. This attracted major companies to Takasago, including those in the paper, food, and other manufacturing industries.

The Japan National Railways (JNR) Takasago Line, built in 1914, ran from Kakogawa to Takasago, with dedicated lines to the factories of JNR, Kikkoman, and Mitsubishi Paper Mills. The Takasago Line served as an essential means of transportation in the area for both passengers and freight. But when the number of passengers declined with the rise of the automobile, the line was closed in 1984, bringing its 70-year history to

an end.

Uomachi Club

This two-story wooden Western-style pavilion was built in 1904 as company housing for an engineer named M. J. Shay, who was employed at the Takasago factory of Mitsubishi Paper Mills.

The factory's predecessor was the Kobe Paper Mill Company, run by American brothers Thomas and John G. Walsh. Their father died suddenly, making it impossible for them to continue the business, so in 1898, Iwasaki Hisaya, a friend of the brothers and an investor in the business, took over the company. However, a shortage of water and rising rents led Shay to recommend that the factory be moved from Kobe to Takasago. This residence was built for him to live in after the move.

The residence and its gardens are a blend of Japanese and Western styles. The site, which covers some 110 square meters, was worth ¥2,706 when built: equivalent to around ¥54 million (US\$365,000) today. In 1905, after Shay's retirement, it was moved to its present location in Uomachi, near Inari Jinja Shrine. It now serves as a recreation center for employees.

Ideshio-kan

This building was erected in 1936 as a club for the management of the Kanegafuchi Spinning Co., Ltd. It features an arc-shaped protruding staircase, stained glass, and second-floor bay windows; it is currently in use as a recreation center by international chemical manufacturing company Kaneka Corporation.

Former Asahi-machi Water Purification Tower

This tower was the first of its kind built to supply water to Takasago in 1923, when the arrival of two major mills—Mitsubishi Paper Mills and Kanegafuchi Spinning—made it necessary to have a secure water-supply system. The iron-framed tower is 26 meters high and symbolizes the modern history of Takasago's water supply.

In 1966, the water source for the plant was changed, and the tower ceased operations.

In 2003, it was designated a National Tangible Cultural Property.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂歴史ツアー 4

日本の鉄道網の発達により、高砂の繁栄の源であった加古川舟運は衰退しました。しかし、高砂の立地と豊富な水資源、そして地元住民の努力により、新たな産業が誘致されました。

国鉄高砂線跡地

この地域の鉄道の歴史は、1888年に加古川で山陽鉄道（現在の JR 神戸線）が開通したことに始まりました。1889年（明治22年）に高砂町が成立し、1901年（明治34年）には神戸製紙株式会社（現三菱製紙株式会社）の工場が操業を開始しました。町には工場に勤める者のために500戸以上の家が建てられました。1906年、すでに全国に17工場を構えていた鐘淵紡績株式会社が高砂に工場を開設しました。

鉄道の運行が増加するにつれ、1913年4月に播州鉄道が加古川駅と国包駅（現・厄神駅）間で開業し、1914年9月に播州鉄道が全線開通しました。これにより、高砂には製紙、食品やその他製造業などの大手企業が誘致されました。

1914年に建設された日本国有鉄道（国鉄）高砂線は、加古川から高砂までを、国鉄、キッコーマン、三菱製紙の工場への専用線と共に走りました。高砂線は旅客、貨物ともに地域の重要な交通手段として活躍しました。しかし、自動車の普及で乗客が減少し、1984年に廃止され、70年の歴史に幕を下ろしました。

魚町倶楽部

この木造2階建ての洋館は、三菱製紙高砂工場に勤務していた技師M・J・シエイの社宅として1904年に建てられました。

この工場の前身は、アメリカ人のトーマスとジョン G. ウォルシュ兄弟が経営していた神戸製紙会社でした。父親が急死し、事業の継続が不可能になったため、1898年に兄弟の友人で事業の投資家でもあった岩崎久弥が会社を引き継ぎました。しかし、水不足と家賃の高騰を受けて、シエイは工場を神戸から高砂に移転することを勧めました。この住居は彼が転居後に住むために建てられたものです。

邸宅とその庭園は日本と西洋のスタイルが混在しています。約110平方メートルのこの敷地は、建設当時の価値が2,706円で、今日の約5,400万円（36万5,000米ドル）に相当します。シエイの引退後の1905年、稲荷神社に近い現在の魚町の場所に移転しました。現在は従業員の

レクリエーションセンターとして利用されています。

出汐館

この建物は、1936年に鐘淵紡績高砂工場の管理するクラブとして建設されました。円弧状に突き出た階段、ステンドグラス、2階の出窓が特徴です。現在は株式会社カネカの保養所として使用されています。

旧朝日町浄水塔

この塔は 1923 年、当時三菱製紙と鐘淵紡績の 2 つの大手工場の進出により、安全な給水システムが必要になった高砂に水を供給するため、この類のものとしては初めて建てられたものです。鉄骨造りの塔の高さは26メートルです。これは高砂の水道の近代史を象徴しています。

1966 年に工場の水源が変更され、塔は運転を停止しました。2003年には国の登録有形文化財に指定されました。

008-018

Takasago History Tour 5

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂町 / 梅ヶ枝湯、旧高砂銀行本店（現高砂商工会議所）、旧高砂消防会館

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago History Tour 5

Since before the Heian period (794–1185), Takasago has been a popular destination for relaxation due to its scenic coastal setting, including a sandy beach and a pine forest.

Takasago is also known in Japan as Musubi no Machi (“matrimony town”). It has long attracted both couples and those seeking love who want blessings for a good marriage.

Over the past 400 years, the city’s layout has remained largely unchanged, and many buildings from the late Edo period (1603–1867) to the Showa era (1926–1989) are still standing. These include the former residence of the descendants of local businessman and inventor Kuraku Matsuemon (1743–1812); the former Takasago City Fire Department building; and cultural buildings such as Sone Tenman Jinja Shrine and Jurinji Temple.

Umegae-yu

Private baths in residential homes were uncommon in Takasago until the 1950s. In the past, the city had as many as seven public bathhouses, but the only one still in operation is Umegae-yu. The exterior and interior designs of the building retain a Showa-era ambience. The entrance is a mortar structure, while the brick additions at the back are a popular photo spot. Wood is still burned to heat the bathwater.

The building was constructed late in the Taisho era (1912–1926) or early in the Showa

era; it was bought by its current owner in 1943. The bathhouse is open daily (3:30 p.m. until 11:00 p.m.) except on Thursdays.

Former Takasago Bank Head Office (current Chamber of Commerce and Industry)

Japan's victory in the First Sino-Japanese War (1894-1895) sparked an economic boom; the Takasago Savings Bank was established in 1896. In 1907, its name was changed to Takasago Bank. The current building was constructed in 1932 as Takasago Bank's head office. It is a rare example of classical architecture of the period. In 1980, the building became the property of the Takasago Chamber of Commerce and Industry. In 2017, it was designated a National Tangible Cultural Property and an Important Building for Landscape Formation in Hyogo Prefecture.

Former Takasago City Fire Department Building

This two-story reinforced concrete building was erected in 1935 in the style of a government office. The first floor is the fire truck garages, while the second floor has offices and a steel-framed fire watchtower on the roof. A one-story police box with a decorative gabled roof is attached to the south end of the building.

The fire building was used by the branch station of the Takasago City Fire Department until 2015. It has since been reinforced against earthquakes and is used to store equipment, such as sandbags, in case of flooding.

The building's second floor is open to the public on holidays to promote the history of firefighting in Takasago. It is designated a National Tangible Cultural Property and an Important Prefectural Landscape Architecture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂歴史ツアー 5

高砂は、平安時代（794 ~ 1185 年）より前から、きれいな砂浜に青々と生える松林という風光明媚な海岸環境により、リラクゼーションの目的地場所として人気がありました。

高砂は日本では「結びの町」としても知られています。それは長い間、カップルや、良縁を求めて愛

を探る人々の両方を魅了してきました。

過去 400 年にわたり、街並みはほとんど変わっておらず、江戸時代後期 (1603 ~ 1867 年) から昭和時代 (1926 ~ 1989 年) までの建物が数多く残っています。これらには、地元の実業家で発明家の工楽松右衛門 (1743 ~ 1812 年) の子孫の旧邸宅が含まれます。そのほかに旧高砂市消防署庁舎や、曾根天満神社や十輪寺などの文化的建造物もあります。

梅ヶ枝湯

1950年代まで高砂では住宅に備え付けの風呂は珍しいものでした。当時市内には7軒もの銭湯がありましたが、現在も営業しているのは梅ヶ枝湯のみです。建物の外観・内装は昭和の雰囲気を残しています。入口はモルタル造りで、奥のレンガが増築された建物は人気の写真スポットです。お風呂のお湯を沸かすために今でも薪が燃やされています。

この建物は、大正時代後期から昭和初期に建てられたもので、現在の所有者が 1943 年に購入したものです。浴場は木曜を除き、毎日営業しています (午後 3 時 30 分から午後 11 時まで)。

旧高砂銀行本店 (現商工会議所)

日清戦争 (1894 ~ 1895 年) での日本の勝利は経済成長を引き起こしました。高砂貯蓄銀行は1896年に設立され、1907年に高砂銀行に改名しました。現在の建物は1932年に高砂銀行本店として建設されました。この時代の古典建築の珍しい例です。1980年に建物は高砂商工会議所の所有となりました。2017年には国の登録有形文化財および兵庫県景観形成重要建造物に指定されました。

旧高砂市消防署庁舎

1935年に建てられた官公庁風の鉄筋コンクリート2階建ての建物。1階は消防車の車庫、2階は事務所と屋上に鉄骨の火の見櫓が設置されています。建物の南端には化粧切妻屋根の平屋交番が併設されています。

消防署は2015年まで高砂市消防署分署として使用されていました。その後は耐震補強が施され、浸水に備えて土のうなどの資材を保管するために使われています。

高砂の消防の歴史を伝えるため、休日には建物の2階が一般公開されています。国の登録有形文化財および県の重要景観建造物に指定されています。

008-019

Jurinji Temple

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】十輪寺 / 寺全体の歴史

【想定媒体】Webページ

できあがった英語解説文

Jurinji Temple

In 815, when Buddhist monk, calligrapher, and poet Kobo Daishi traveled from Japan to China, he prayed to the bodhisattva Jizo for maritime safety, and during his voyage, received spiritual inspiration. After returning home, along with seven other temples, he founded Junrinji Temple as a place of prayer for the protection of the nation and the safety of navigation on the sea, in accordance with an imperial decree at that time.

The Niomon (gate of the guardian kings) at the main entrance to Junrinji Temple is built in the style of the Edo period (1603–1867). The two Nio guardian statues, often found flanking temple gates in Japan, are said to protect the property from threats both spiritual and material.

The *hondo* (main hall) is the largest wooden building in Takasago. It contains two Buddhist paintings: one, on silk, is an Important Cultural Property called *Kenpon Chakushoku Gobutsusozonzo*. The other, a designated Prefectural Cultural Property called *Amida Raigozu*, portrays the Buddha Amida, a celestial Buddha of light and life said to welcome souls to paradise.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

十輪寺

815年、僧侶の弘法大師が日本から中国へ旅行した際、航海の安全を地蔵菩薩に祈願し、靈感を得ました。帰国後時の勅令により国家鎮護と海上航行安全の祈願所として十輪寺ほか七

寺を建立しました。

十輪寺の正門にある仁王門は、江戸時代(1603年～1867年)の様式で建てられています。2体の仁王像は、日本の山門の両側によく見られ、霊的および物質的な脅威から財産を守ると言われています。

本堂は高砂最大の木造建築物です。仏画は2点収録されており、1点は絹本に描かれた「絹本着色御仏尊像」と呼ばれる重要文化財です。もう1つは、県指定文化財「阿弥陀来迎図」で、魂を極楽に迎えると言われている光と生命の天仏である阿弥陀如来を描いたものです。

008-020

Tatsuyama Stone Quarries

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 日本史跡「石の宝殿及び竜山石碎石遺跡」 /
日本史跡
【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Tatsuyama Stone Quarries

Tatsuyama stone was formed about 9,000 years ago. It is hyaloclastite, an aggregate of fine, glassy debris formed by the sudden contact of magma and cold water, a rare material that has long been desirable for construction purposes due to its relative softness. The stone is thought to have been extracted at the Tatsuyama quarries since the Kofun period (ca. 250–552). The location of the quarries (near the mouth of the Kakogawa River, which flows into the Seto Inland Sea) is ideal for transporting the excavated stone.

Tatsuyama stone was first used for stone coffins. Between 740 and 744, it was chosen as the foundation stone for the palace of the emperor at Kuni, then the capital of Japan in present-day Kyoto Prefecture.

In the medieval and early modern periods (1185–1867), the stone was used for structures such as pagodas, monuments, and Buddhist statues. In modern times, it has been used as the foundation stone for wooden buildings and as a material for grave markers, signposts, and torii gates at Shinto shrines. The most famous extraction from the Tatsuyama quarries is the Ishi no Hoden (Stone Treasure Hall), a megalith at Takasago's Oushiko Jinja Shrine believed to have mystical power.

Quarrying methods have been adapted over the centuries, reflecting the changing use of the stone. This has made the quarries an important site for understanding of the evolution of Japan's quarrying technology. Today, two Tatsuyama quarries remain in operation.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

竜山石採石場

竜山石は約9,000年前に形成されました。それは、マグマと冷水の突然の接触によって形成された微細なガラス状の破片の集合体であるハイアロクラスタイトであり、比較的柔らかいため、建設用途に長い間望まれてきた希少な材料です。この石は古墳時代（約250～552年）以降に竜山の採石場で採掘されたと考えられています。採石場は瀬戸内海に注ぐ加古川の河口近くにあり、出土した石材の輸送に最適な立地にあります。

この多用途の石は、最初は石棺に利用されました。740年から744年にかけて、この石は当時の日本の首都、恭仁京（現在の京都府）にある皇居、恭仁京の礎石として選ばれました。

中世および近世（1185～1867年）には、この石は塔、記念碑、仏像などの建造物に使用されました。現代では木造建築物の礎石や神社の墓標、道標、鳥居の材料として使用されています。竜山採石場から出土した最も有名なものは、神秘的な力を持つと信じられていた高砂の生石神社の巨石、石の宝殿です。

採石方法は、石の用途の変化を反映して、何世紀にもわたって適応されてきました。このため、この採石場は日本の採石技術の進化を理解する上で重要な場所となっています。現在は3つの竜山石採石場が稼働しています。

008-021

Oushiko Jinja Shrine

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 生石神社 / 日本史跡

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Oushiko Jinja Shrine

This shrine dates back to around 97 CE, when a plague was sweeping across Japan. It is said that two gods appeared to the then-emperor Keiko (25–130 CE) in a dream, telling him to build a sanctuary dedicated to the Ishi no Hoden (Stone Treasure Hall), which is an enormous rock that is 5.7 meters high, 6.4 meters wide, 7.2 meters thick, and weighs about 453,000 kilograms.

The monolith rises out of a cavity in the bedrock on three sides and one of the sides has a triangular prism protrusion. It has a pond at its base and sits on a pillar that is out of sight, so that the rock appears to be floating. Traditionally, it was thought to be divine due to its distinctive appearance and unusual position, and was also called Uki-ishi (Celestial Floating Stone). It is the shrine's principal object of worship (*shintai*).

The main shrine is a wooden building with a *nagare-zukuri*-style (asymmetrical gabled) roof. It was erected in 1844. After the building burned down in 1807, its cypress-bark roof was rebuilt; in 1979, the cypress bark was replaced with copper shingles.

The *maiden* (dance hall) or *maeden* (front hall) is a wooden structure with an *irimoya*-style (hip-and-gable) roof. It is thought to have been built in the mid-nineteenth century. It also burned down in 1807 and was later rebuilt. Today it is used as the shrine's office.

The *ema-den* (shrine building where votive tablets are hung) houses many *sangaku* (votive tablets depicting mathematical puzzles). These are said to date from the Edo period, when arithmetic enthusiasts dedicated their solutions to such puzzles, and placed them at shrines and temples around the country.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

生石神社

この神社の歴史は、日本中に疫病が蔓延していた西暦 97 年頃まで遡ります。先の景行天皇（西暦25年～130年）の夢に二人の神が現れ、高さ5.7メートル、幅 6.4 メートル、厚さ 7.2 メートル、重さは約 453,000 キログラムの巨石である石の宝殿を祀る神殿を建てるよう告げたとされています。

その一枚岩は岩盤の空洞から 3 面で立ち上がり、そのうちの 1 面には円錐形の突起があります。基部には池があり、見えないところにある柱の上にあるため、岩が浮いているように見えます。古くからその特徴的な姿と特異な位置から神聖なものと考えられ、「浮石」とも呼ばれていました。神社のご本尊（ご神体）です。

本社は天保13年（1844年）に建立された木造建築で、流れ造（非対称の入母屋）の屋根が特徴です。1807年に建物が焼失した後、檜皮葺の屋根が再建されました。1979年にヒノキの樹皮から銅板葺きに置き換えられました。

舞殿、または前殿は、入母屋造りの木造建築です。19世紀半ば頃に建てられたと考えられています。こちらも拝殿と同じく1807年に焼失し、その後再建されました。現在は神社の受付として使われています。

詰所前の絵馬殿には算額が多数安置されています。これらは、江戸時代に算学愛好家はその解答を奉納し、全国の神社仏閣に安置したのが起源と言われています。

008-022

Ishi no Hoden (Stone Treasure Hall)

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 石の宝殿 / 日本史跡

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Ishi no Hoden (Stone Treasure Hall)

This megalithic monument is enshrined as the main object of worship (*shintai*) at Oushiko Jinja Shrine. The enormous stone is hyaloclastite, an aggregate of fine, glassy debris formed by the sudden contact of magma and cold water, and stands 5.7 meters high, 6.4 meters wide, and 7.2 meters thick. It is estimated to weigh some 453,000 kilograms. The megalith rises out of a cavity in the bedrock on three sides and one of the sides has a triangular prism protrusion. The space between the monument and the bedrock is wide enough for one person to pass, and visitors can go around the whole megalith for a small fee.

Ishi no Hoden stands above a pool of water, and is situated on a pillar that is not readily visible, so the rock appears to be floating over the water. Traditionally, it was thought to be divine due to its distinctive appearance and unusual position and is also called Uki-ishi (Celestial Floating Stone) by local people.

Tatsuyama Tomb No. 1 is nearby. This is believed to be the burial place of a person connected with Ishi no Hoden.

Origin Story

The huge stone is recorded as having stood here about 1,300 years ago, but neither the reason why nor the stone's significance are known. Many mysteries surround it. According to legend, in ancient times two gods named Onamuchi and Sukunahikona were sent as peacemakers from Izumo (present-day Shimane Prefecture) to this area, then called Harima (present-day Hyogo Prefecture), a province where there was unrest.

They were granted one day to build a stone palace that would foster harmony, but their efforts were hindered by a rebellion of the gods of Harima who overran the area.

By the time the rebellion was suppressed, dawn had broken and the structure remained unfinished. Still, the two gods proclaimed that their spirits would reside within one of the massive remaining rocks and pacify the land for eternity. Today, this rock is known as Ishi no Hoden.

National Significance

Ishi no Hoden is mentioned in the *Harima kokudo fudoki*, an almanac presented to the emperor covering the years 713–717 for the region that is present-day Hyogo Prefecture. The document says the megalith was created by Mononobe no Moriya, a high-ranking clan head of the sixth century, on the orders of Prince Shotoku, but no reason is given.

Records from the Edo period (1603–1867) show that Oushiko Jinja Shrine was visited by many influential people, including German physician and botanist Philipp Franz von Siebold (1796–1866), who included three detailed sketches of the rock in one of his books on Japan. Since the twentieth century, the megalith has been considered a site flowing with spiritual energy, and is one of the three wonders of Japan.

In 2017, Ishi no Hoden and the nearby Tatsuyama Stone Quarries, which date from the Kofun period (ca. 250–552), were together designated a National Historic Site. The designated area covers approximately 11 hectares and comprises 49 cultural assets, making it a valuable heritage site.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

石の宝殿

この巨石碑は生石神社のご神体として祀られています。巨大な石はハイアロクラストイトで、マグマと冷水の突然の接触によって形成された細かいガラス質の破片の集合体です。高さ5.7メートル、幅6.4メートル、厚さ7.2メートルあります。重さは約45万3000キログラムと推定されます。この巨石は、岩盤の三面の空洞から立ち上がり、そのうちの1面には三角錐型の突起があります。碑と

岩盤の間は人一人が通れるほどの幅があり、少額の料金を支払えば巨石全体を一周することができます。

石の宝殿は水たまりの上で見えにくい柱の上にあるため、石が水の上に浮かんでいるように見えます。。古くからその特徴的な姿と特異な位置から神聖なものと考えられ、地元では「浮石」とも呼ばれています。

近くに竜山1号墳があります。これは石の宝殿に関係する人物の墓と考えられています。

起源の物語

この巨石は約1,300年前の記録にこの場所にあったとされていますが、その理由や石の重要性は不明です。多くの謎がそれを取り巻いています。伝説によると、古代、オオナムチとスクナヒコナという名前の二人の神が、平和をもたらすために出雲（現在の島根県）から、不穏な状況にあった後の播磨（現在の兵庫県）に派遣されました。ある日、彼らは調和を促進する石造りの宮殿を建てる許可を与えられましたが、その地域を蹂躪した播磨の神々の反乱によってその努力は妨げられました。

反乱が鎮圧されるまでに夜が明け、建物は未完成のままです。それでも、二人の神は、自分たちの魂はその残された巨大な岩の一つに宿り、永遠に土地を平定すると宣言しました。現在、この岩は石の宝殿として知られています。

国家的重要性

石の宝殿は、713年から717年にわたって天皇に提出された、現在の兵庫県に当たる地域の年刊の書籍である、播磨国風土記に記載されています。風土記によると、この巨石は6世紀の高位氏族の当主、物部守屋が聖徳太子の命を受けて造ったとされていますが、その理由は明らかにされていません。

江戸時代（1603～1867年）の記録によると、生石神社には多くの影響力のある人々が訪れ、その中にはドイツ人医師で植物学者のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796～1866年）も含まれており、シーボルトは彼の日本についての著書の1つに、この岩の3つの詳細なスケッチを掲載しています。20世紀以来、この巨石は霊的なエネルギーが湧き出る場所として考えられており、「日本三奇」の一つに数えられています。

2017年、石の宝殿とその近くにある古墳時代（約250～552年）の竜山石採石場が合わせて国の史跡に指定されました。指定区域は約11ヘクタールで、49件の文化財からなる貴重な遺産です。

008-023

Tatsuyama Stone

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 竜山石 / 日本史跡

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Tatsuyama Stone

Tatsuyama stone has long been a desirable construction material due to its light color and useful physical characteristics, including its soft texture. The hyaloclastite, an aggregate of fine, glassy debris formed by the sudden contact of magma and cold water, was formed about 100 million years ago. Its main colors are blue, yellow, and red.

Tatsuyama stone has been used throughout the region since ancient times, due to its physical characteristics and the proximity of the Tatsuyama quarries to the Seto Inland Sea via the Kakogawa River. It was first used for burial chambers (*kofun*), but only people of high status were allowed to be placed in coffins of Tatsuyama stone, resulting in its additional moniker “great king’s stone.”

In more recent times, the stone has been used for foundations, castle walls, pagodas, statues, torii gates at Shinto shrines, the balconies of Fukiage Garden at the Imperial Palace in Tokyo, and in other modern architecture.

Today, Tatsuyama stone is extracted from quarries still in operation for use across Japan and abroad in architecture, walls, foundations of homes, and for landscaping. Small items such as tableware, accessories, and coasters are also made using the material; these are often sold as souvenirs of Takasago.

Tatsuyama stone has been quarried from this single location for some 1,700 years. No

other stone in Japan is known to have been mined in the same location for such a long period of time.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

竜山石

竜山石は、その淡い色合いと、柔らかな質感などの有用な物理的特性により、古くから建築材料として好まれてきました。マグマと冷水の突然の接触によって形成された微細なガラス質の破片の集合体であるハイアロクラスタイトは、約1億年前に形成されました。その主な色は青、黄、赤です。

竜山石は、その特徴と、竜山の採石場が加古川を経て瀬戸内海に近いことから、古くからこの地域各地で利用されてきました。当初は墓室（古墳）に使われていましたが、竜山石の棺には身分の高い人しか納めることが許されなかったため、「大王の石」とも呼ばれるようになりました。

最近では、この石は神社の基礎、城の石垣、塔、彫像、鳥居、東京の皇居吹上御所のバルコニー、近代建築などに使用されています。

現在も操業中の採石場から竜山石が採掘され、国内外の建築、壁、住宅の基礎、造園などに利用されています。その素材を使って食器やアクセサリー、コースターなどの小物も作られています。高砂のお土産としてよく売られています。

竜山石は、約1700年前からこの場所から切り出され続けています。これほど長い期間、同じ場所で採掘された石は日本で他に知られていません。

008-024

Sone Overview

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 曾根町概要 / 歴史

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Sone Overview

The Sone district of Takasago is known for Tenmangu Shrine and its long history of salt harvesting.

Sugawara no Michizane (845–903) was a scholar, poet, and politician. Later his spirit was deified as Tenjin, the Shinto deity of learning. In 901, when Sugawara was on his way to Kyushu, his ship docked near Sone. Sugawara took the opportunity to climb Mount Hikasa, west of Tenmangu Shrine, where he planted a pine seed and prayed that he would prosper in Kyushu. The seed grew into a great pine tree, the trunk of which has been preserved at the shrine.

When Sugawara’s son, Atsushige, visited Sone some years later he built a shrine to honor his father. Although the shrine’s buildings have been damaged or destroyed during periods of unrest and in natural disasters through the ages, it remains in the same place today, and is known as Tenmangu Shrine. It is one of the main shrines dedicated to Tenjin as the deity of learning, and many people visit the shrine to pray for academic success.

Sone’s coastal location was well-suited to salt-harvesting. By the early Edo period (1603–1867), there were more than nine hectares of salt fields, which had expanded to some 49 hectares by the late 1690s, when the industry in the area peaked.

Several salt merchants built houses and stores to the northwest of Tenmangu Shrine,

forming a commercial area for salt trading. A number of the old buildings remain, including the residence of the then-prominent Irie family.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

曾根概要

高砂市曾根地区は、天満宮と塩づくりの長い歴史で知られています。

菅原道真（845 ～ 903 年）は学者、詩人、政治家でした。後に彼の霊は学問の神である天神様として神格化されました。901年、菅原氏が九州へ向かう途中、船が曾根の近くに停泊しました。菅原はこの機会に天満宮の西にある日笠山に登り、松の種を植えて九州の繁栄を祈りました。その種は立派な松の木に育ち、その幹は神社に保存されています。

数年後、菅原の息子、淳茂が曾根を訪れた際、父を祀る神社を建立しました。神社の建物は、時代の騒乱や自然災害によって損傷したり破壊されたりしましたが、現在も同じ場所に残り、天満宮として知られています。学問の神様として天神様を祀る神社の一つであり、学業成就を祈願するため多くの人が参拝します。

曾根の海岸沿いの場所は塩の製造に適していました。江戸時代初期（1603-1867）までに塩田は9ヘクタール以上あり、この地域の産業がピークに達した1690年代後半には約49ヘクタールに拡大しました。

天満宮の北西には数軒の塩商人が住宅や店舗を建て、塩取引の商業地を形成していました。当時の著名な入江家の邸宅など、古い建物が数多く残っています。

008-025

Former Residence of the Irie Family

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 旧入江家住宅 / 建物の構造、歴史

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Former Residence of the Irie Family

This house was built in 1785 as the home and commercial premises of the Irie family, who ran one of the many businesses that dealt in locally harvested salt, an important commodity during the Edo period (1603–1867). This venture gave the family a great deal of power and influence, which is reflected in the size and grand architecture of the residence.

The site covers 1,436 square meters; the house is built on a north-south orientation. The main living quarters have three rooms that could be opened up into one large room for events and other gatherings. The small room to the right would have served as a waiting room for guests. The high doorways were designed to allow flags and banners to be brought into the house. In 1828, an extension was added to the house that is believed to have been used by the master of the house following his retirement.

The residence's garden was designed as a *karesansui* dry landscape garden. Such gardens, which were popular at the time, arose from the Zen tradition, and created miniature landscapes from rocks and gravel.

Since the family donated the house to the city, the structure has been undergoing extensive repairs for its preservation. Work should be completed in 2027.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧入江家住宅

この家は、江戸時代（1603 ～ 1867 年）の重要な商品であった、地元で収穫された塩を扱う多くの事業者の一つであった入江家の住宅として 1785 年に建てられました。この事業は家族に多大な権力と影響力を与え、それは邸宅の規模と壮大な建築に反映されています。

敷地面積は1,436平方メートル。家は南北向きに建てられています。メインのリビングエリアには 3 つの部屋があり、催しやその他の集まりなどの場合は、大きな 1 つの部屋として使用できます。右側の小部屋は来客の待合室として機能したと考えられます。高い出入り口は、旗や横断幕を家の中に持ち込めるように設計されています。1828 年には増築が行われ、それはこの家の主人が隠居後に使用していたと考えられています。

邸宅の庭園は枯山水の石庭として設計されました。当時流行していたこのような庭園は禅の伝統から生まれ、岩や砂利を使ってミニチュアの風景を作り出したものです。

入江家の人々がこの家を市に寄贈して以来、保存のため大規模な修復が行われてきました。工事は2027年に完了する見込みです。

008-026

Sone Tenmangu Shrine

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 曾根天満宮 / 歴史

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Sone Tenmangu Shrine

Sugawara no Michizane (845–903) was a scholar, poet, and politician. Today, he is revered as Tenjin, the deity of learning. In 901, Sugawara's ship docked near Sone as he was on his way to Kyushu. He took the opportunity to climb Mount Hikasa, west of Tenmangu Shrine, where he planted a pine seed and prayed that he would prosper in Kyushu. The seed grew into a great pine tree that became famous.

His son, Atsushige, visited Sone some years later and built a shrine to honor his father. Although the shrine's buildings have been damaged or destroyed during periods of unrest and in natural disasters through the ages, it remains in the same place today, and is known as Tenmangu Shrine. It is one of the main shrines dedicated to Tenjin (the deified Sugawara).

In 1870 the main shrine was rebuilt, but some components from 1590 remain. The current worship hall was built in 1765. It is adorned with images of cattle due to their connection with Sugawara. He is said to have been fond of oxen, even making them his transportation of choice. The famous pine tree called Sone no Matsu, which is thought to have died in 1798, has been preserved to attract visitors, along with the pond and garden.

Many poets have visited the shrine and donated poems over the centuries. Today, people visit to pray for academic success and to attend the shrine's annual festival in autumn.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

曾根天満宮

菅原道真 (845 ~ 903 年) は学者、詩人、政治家でした。現在では学問の神様として天神様として崇められています。901年、九州へ向かう菅原の船が曾根の近くに停泊しました。彼はこの機会に天満宮の西にある日笠山に登り、そこで松の種を植え、九州の繁栄を祈りました。その種は成長して大きな松の木となり、有名になりました。

数年後、息子の淳茂が曾根を訪れ、父を祀る神社を建てました。神社の建物は、時代の騒乱や自然災害によって損傷したり破壊されたりしましたが、現在も同じ場所に残り、天満宮として知られています。天神（菅原道真公）を祀る主要な神社の一つです。

現在の本殿は、明治3年（1870）に再建されたものですが、天正18年（1590）の部材も残されています。現在の拝殿は明和2年（1765）に建てられたもので、境内には菅原ゆかりの牛の像が飾られています。彼は牛が好きで、移動手段として牛を選んだと言われています。1798年に枯れたと考えられている有名な松の木「曾根の松」は、池や庭園とともに観光客を魅了するために保存されています。

何世紀にもわたって、たくさんの詩人がこの神社を訪れ、詩を寄贈してきました。現在では、学業成就の祈願や秋の例大祭に参加するために人々が訪れています。

008-027

Mt. Hikasa

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 日笠山 / 自然

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Mt. Hikasa

The summit of Mt. Hikasa (62.1 meters) affords panoramas of Awaji Island, Iejima, and the coastal region off Himeji and Takasago. The route up the mountain is particularly scenic in spring and fall. During the cherry-blossom season, from mid-March to mid-April, the Yoshino cherries (*someiyoshino*) and Botan cherries (*botan-zakura*) are in full bloom. The mountain is one of the top cherry-blossom viewing spots in Hyogo Prefecture. It is also known for its scenery in November, when the foliage in the area changes to vibrant hues of red and orange.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日笠山

日笠山（標高 62.1m）の山頂からは、淡路島や家島、姫路沖や高砂沖の海岸地域を一望できます。山に登るルートは、春と秋が特に美しいです。3月中旬から4月中旬の桜の季節には、ソメイヨシノやボタンザクラが咲き誇ります。兵庫県下でも有数の桜の名所です。11月には辺り一帯の紅葉が赤やオレンジの鮮やかな色合いに変わる景色でも知られています。

008-028

Kashima Jinja Shrine

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 鹿嶋神社 / 歴史

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Kashima Jinja Shrine

This shrine, believed to grant once-in-a-lifetime wishes, attracts visitors from across Japan who want to pay homage and petition for their one wish. Many people visit during the New Year's holiday to make wishes for the coming year, or ahead of the annual period of university entrance examinations, in January, to wish for success.

In hopes of having their wish granted, visitors can perform *shinden mawari* (going around the *honden* or main sanctuary), whereby they walk around the *honden* as many times as their age. Sticks are available to keep track of the number of loops. Visitors are invited to pick up as many as their age; they put one back each time they complete a loop, so their hands are empty when they have completed the correct number of circuits. They can also touch the *nazuri* (wishing stone); the colorful origami crane chains hanging down the side of the building are still another way of making wishes.

The shrine was built about 700 years ago, but has been rebuilt and altered over the centuries. Extensive work has since been carried out to preserve the shrine's key characteristics. The giant torii gate is made of titanium, symbolizing the great hope the shrine holds for the future while maintaining its historic traditions. It is the fifth-largest torii in Japan.

Kashima Jinja Shrine is located near Kashima Ogidaira Natural Park, where more than 2,000 cherry trees bloom from late March to early April. Halfway up the north slope of the park is a rock where hawks have long built their nests. The rock, called Taka-no-Su (hawks' nest), is 23 meters high and 37 meters across. A panorama of Awaji and

Shodo islands and other islands nearby in the Seto Inland Sea can be viewed from the park.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鹿嶋神社

一生に一度きりの願いを叶えると信じられているこの神社には、参拝と成就を求めて全国から参拝者が集まります。年末年始や、大学受験の時期である1月には合格祈願をするために多くの人が訪れます。

願いが叶うように、年齢の数だけ本殿を巡る「神殿廻り」が行われます。ループ数を記録するための棒が神社で提供されます。訪問者は自分の年齢に応じて数を手に取ります。ループを完了するたびに1つ元に戻すため、正しい数のループを完了すると手が空になります。ナズリ（願いの石）にも触れることができます。建物の側面にぶら下がっている色とりどりの折り鶴の鎖も、願いごとをするもう一つの方法です。

この神社は約700年前に建てられましたが、何世紀にもわたって再建され、改築されてきました。神社の重要な特徴を保存するために大規模な工事が行われました。チタン製の大鳥居は、歴史的伝統を継承しながらも未来への大きな希望を象徴しています。日本で5番目に大きい鳥居です。

鹿嶋神社は鹿嶋扇平自然公園近くにあり、3月下旬から4月上旬にかけて2,000本以上の桜が咲きます。公園の北側斜面の中腹には、古くから鷹が巣を作ってきた岩があります。鷹の巣と呼ばれるこの岩は、高さ23メートル、直径37メートルです。公園からは淡路島や小豆島など瀬戸内海の島々を一望できます。

008-029

Ichi-no-ike Park

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 市の池公園 / 自然

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Ichi-no-ike Park

This park has open spaces, gardens, playgrounds, and facilities for day or overnight camping. The flowers and natural scenery can be enjoyed all year round. There are gardens specifically for roses, tulips, camellias, and herbs; a hothouse with a large variety of native and non-native plants; and several observation decks offering panoramas of the Inland Sea. Paths crisscross the grounds, continuing across part of the lake via a boardwalk. The walking routes are suitable for people with a range of abilities.

The park is family-friendly, with plenty of facilities for children to play, including open spaces, a sand pit, and an adventure play park next to the cherry trees. Showers and campsites for tents, as well as barbecue pits, a recreation area, and toilets, are available for those wishing to stay in the park. The park's convenient location at the foot of Mt. Takamikura gives visitors a choice of easy or more challenging hiking routes.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

市ノ池公園

この公園にはオープン スペース、庭園、遊び場、日帰りまたは一晩キャンプできる施設があります。一年を通して花々や自然の風景が楽しめます。バラ、チューリップ、椿、ハーブ専用の庭園や、多種多様な在来植物と外来植物を備えた温室、瀬戸内海のパンoramを楽しめるいくつかの展望台もあります。敷地内を小道が交差し、遊歩道を介して湖の一部を横切って続いています。ウォーキング ルートは、さまざまな体カレベルの人々に適しています。

広場や砂場、桜並木のアドベンチャー遊具広場など、子どもが遊べる施設が充実した家族向けの公園です。公園内での滞在を希望する場合は、シャワー、テント用のキャンプ場、バーベキュー場、レクリエーション エリア、トイレが利用できます。高御位山のふもとにあるこの公園は便利な場所にあるため、訪問者は簡単なハイキング ルートか、またはより挑戦的なハイキング ルートを選ぶことができます。

008-030

Tsunemasa Jinja Shrine

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 経政神社 / 日本史跡

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Tsunemasa Jinja Shrine

This secluded shrine, located at the foot of Mount Takamikura, is associated with the Taira (also known as Heike) family, one of the four powerful clans that dominated Japan during the Heian, Kamakura, and Muromachi periods (794–1573).

One figure of note related to the shrine is Taira no Kiyomori (1118–1181), a warrior-class leader who set up the country's first samurai-dominated administrative government.

Kiyomori's nephew, Taira no Norimasa (dates unknown), a court noble during the middle of the Heian period (754–1185), was a famous player of the *biwa* (Japanese lute). It is believed that he fled to the area after being defeated in battle and is enshrined at Tsunemasa Shrine.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

経政神社

高御位山のふもとにあるこの人里離れた神社は、平安、鎌倉、室町時代（794 ～ 1573 年）に日本を支配した 4 つの強力な氏族の 1 つである平家に関連しています。

この神社に関連する注目すべき人物の 1 人は、日本初の武家主導の行政政府を樹立した武家階級の指導者、平清盛（1118 ～ 1181 年）です。

清盛の甥である平経政（生年不詳）は、平安時代中期（754～1185年）の公家で、有名な琵琶奏者でした。いさに敗れてこの地に逃れ、この神社に祀られたと伝わっています。

008-031

Miyamoto Musashi

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 宮本武蔵生誕 / 歴史

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Miyamoto Musashi

Miyamoto Musashi (also known as Shinmen Takezo, Miyamoto Bennosuke, or by his Buddhist name, Niten Doraku) (c. 1584–1645) was a renowned swordsman, philosopher, strategist, and painter. Though little is known about his early life, he is believed to have been born in Yoneda, which is part of Takasago.

Musashi is known today for his skill with a sword, and for founding the Niten Ichiryu (two-sword) style of swordsmanship. He used this style to win more than 60 duels in his lifetime, making him the greatest undefeated swordsman of the day. The nearest contender, Ito Ittosai (1560–1653), is said to have fought in only 33 duels. Musashi was therefore bequeathed the title of *kensei* (sword saint), which was given to warriors with legendary skill in swordsmanship.

In his later life, Musashi wrote *Go Rin no Sho* (The Book of Five Rings), a text on strategy and martial arts, and *Dokkodo* (The Path of Aloneness), about his philosophy of life. In these books he states he was born in Harima Province (part of present-day Hyogo Prefecture). This claim was reinforced when his nephew (and later adopted son) Miyamoto Iori (1612–1678) left an inscription in his honor stating that Musashi was a warrior associated with Harima Province. Other documents of the time suggest that both Musashi and Iori were born in Yoneda.

Iori dedicated *munefuda* (a tag affixed inside a building as a record of renovation and giving details of the donors) at both Yoneda Tenjin Jinja Shrine in Takasago and Tomari Jinja Shrine in Kakogawa when the buildings were restored. The tags describe

how Iori's ancestors, including Musashi, came to live in Yoneda. This is further evidence supporting the theory that Musashi was born in Takasago.

In 1990, a large stone monument made of locally sourced Tatsuyama stone was erected in Yoneda to honor its famous son, Musashi. A building near the monument houses a number of artifacts relating to his life.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

宮本武蔵

宮本武蔵（新免竹蔵、宮本辨助、法名二天道楽としても知られる）（1584年頃 - 1645年）は、有名な剣豪、哲学者、戦略家、画家でした。彼の幼少期についてはほとんど知られていませんが、高砂の一部である米田で生まれたと考えられています。

武蔵は剣の腕前を磨き、二天一流の剣術を確立したことで知られています。彼はこのスタイルを用いて生涯で 60 回以上の決闘に勝利し、当時最高の不敗の剣士となりました。最も近い候補者である伊東一刀斎（1560 ~ 1653 年）であっても、わずか 33 回の戦いに参加したと言われていいます。そのため武蔵は、伝説的な剣術の腕を持つ戦士に与えられる「剣聖」の称号を遺贈されました。

武蔵は晩年、戦略と武道の書である『五輪書』と、人生哲学を記した『独行道』を著しました。これらの本の中で彼は播磨国（現在の兵庫県の一部）で生まれたと述べています。この主張は、武蔵の甥（後に養子）である宮本伊織（1612年～1678年）が武蔵を讃えて播磨国ゆかりの戦士であったとする碑文を残したことでさらに強化されました。当時の他の文書は、武蔵と伊織が米田で生まれたことを示唆しています。

伊織は建物の修復に際し、高砂市の米田天神社と加古川市の泊神社に棟札を奉納しました。札には武蔵をはじめとする伊織の先祖がどのようにして米田に住むようになったのかが記されています。これは武蔵が高砂で生まれたという説を裏付けるさらなる証拠です。

1990年、有名な者である武蔵を讃えて、地元産の竜山石で作られた大きな石碑が米田に建てられました。記念碑の近くの建物には、彼の人生に関する数多くの遺物が収蔵されています。

008-032

Event Introduction

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 イベント紹介 / イベント祭り

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Event Introduction

Harima, part of present-day Hyogo Prefecture, was once called Harima no Kuni (Harima country) or Banshu (planting state). Since ancient times, this region (which includes present-day Takasago) has been known for its fall festivals, in which floats (*yatai*) are central to the celebrations.

While the floats are made in various shapes and sizes, depending on the area, they tend to be heavy, sometimes weighing more than 2,000 kilograms. Several hundred people carry the *yatai* around the areas they visit, calling at important places such as local shrines.

Townpeople take enormous pride in their *yatai*, and many people spend more time at the fall festival than they do at festivals marking Obon (the annual Buddhist event for commemorating one's ancestors) or the New Year. The enthusiasm with which local people take part makes Takasago's fall festivals popular with visitors, too.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

イベント紹介

現在の兵庫県の一部である播磨は、古くは播磨国（はりまのくに）、播州（ばんしゅう）と呼ばれていました。古くからこの地域（現在の高砂市を含む）では秋祭りが盛んで、屋台が祭りの中心となっています。

屋台は地域によってさまざまな形や大きさを作られますが、重いものが多く、2000キロを超えるものもあります。数百人が担いで各地を巡り、地元の神社など重要な場所に寄ります。

町民は自分たちの屋台に大きな誇りを持っており、お盆やお正月よりも秋祭りの方が長居する人も少なくありません。高砂の秋祭りは、地元の人々の熱意によって、観光客にも人気があります。

008-033

Takasago Jinja Shrine Fall Festival

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂神社の秋祭り / 祭り概要

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago Jinja Shrine Fall Festival

This two-day festival, held annually over October 10–11, revolves around the lively musical procession of eight floats (*yatai*). On the first day, a portable shrine (*mikoshi*) is carried from Takasago Jinja Shrine along each street in Takasago.

Shrine parishioners (*ujiko*) from each area form a procession behind the *mikoshi* with *yatai*, festival floats (*danjiri*), and stringed instruments (*hikimono*). At a certain point, the *mikoshi* is taken to a place where the gods (*kami*) can take a rest during the ritual procession (*otabisho*), where rites are observed, including prayers for the townspeople's happiness and good health.

Another procession is called Funatogyo (honorable river crossing), which involves placing the *mikoshi* on a boat and floating it down the Kako River. The boat aspect takes place every three years, and preserves awareness of the history of Takasago, which had developed and formerly prospered as a key marine transportation center.

On the second day of the festival, *yatai* from each town take part in various events in the spirit of collaboration and competition. The highlight of the second day is the contest in which participants push the *yatai* against each other in a bid to demonstrate their relative strength to the deities (*kami*) believed to be watching.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂神社秋祭り

毎年10月10日・11日に開催される2日間のお祭りで、8台の屋台を中心に賑やかなお囃子行列が練り広げられます。初日は高砂神社から神輿が高砂の各通りを練り歩きます。

各地区の氏子が屋台やだんじり、曳き物を持って神輿の後ろを練り歩きます。お旅所では、町民の幸福や無病息災を祈るなどの儀式が執り行われます。

また、神輿を船に乗せ、加古川に流す神幸行列「船渡御」もあります。船渡御は3年に一度行われ、海上交通の要所として発展・繁栄した高砂の歴史を後世に伝えています。

祭りの2日目には、各町内の屋台が様々なイベントに参加し、協調と競争の精神で競い合います。2日目のハイライトは、担ぎ手が屋台を練りあいそれを見ていると信じられている神々に相対的な強さを誇示する競技です。

008-034

Fall Festivals at Arai Jinja Shrine and Komatsubara Sanja Shrine

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 荒井神社・小松原三社大神社秋祭り / 祭り概要

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Fall Festivals at Arai Jinja Shrine and Komatsubara Sanja Shrine

According to ancient manuscripts, Arai Jinja Shrine was built in 629 and set in its present location around the middle of the Kamakura period (1185–1333). Among the deities enshrined are two gods of wealth known as Daikoku and Ebisu.

The main shrine structure now standing at Arai Shrine was built in 1943. One attraction in the garden is the *musubi-no-matsu* (literally, matrimony pine), a tree believed to confer special blessings for successful marriage; another is a monument engraved with a poem by popular novelist, playwright, poet, artist, and philosopher Mushanokoji Saneatsu (1885–1976).

Komatsubara Sanja Shrine, which was built in the seventeenth century, is situated on the site of Komatsubara Castle, which dates from the Medieval period (1185–1568).

During the annual fall festival held at each shrine in October, a portable shrine (*mikoshi*) is on display along with colorful festival floats (*danjiri*). The biggest annual attraction is the Niwaka drum (*taiko*) performance, which focuses on dancing and has been held since the Edo period (1603–1867).

Every year, two drummers parade through the town, each performing in a different style, while dancers perform skits to the accompaniment of shamisen. The festival is said to date back to the early to mid-Edo period, the earliest evidence being a taiko drum box on which is inscribed the year 1849. The Niwaka *taiko* drum performance is

designated a cultural property by Takasago City.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

荒井神社と小松原三社の秋祭り

古文書によると、荒井神社は629年に創建され、現在の地に鎮座したのは鎌倉時代（1185～1333）の中頃とされています。祭神は大黒天と恵比寿天の二柱です。

現在ある荒井神社の本殿は昭和18年（1943）に建てられました。庭園には、縁結びのご利益があるとされる「結びの松」や、人気小説家・劇作家・詩人・芸術家・哲学者である武者小路実篤（1885-1976）の詩が刻まれた歌碑があります。

小松原三社神社は17世紀に創建され、中世（1185～1568年）の小松原城跡にあります。

毎年10月に各神社で行われる秋祭りでは、色とりどりのだんじりとともに神輿が登場します。最大の見どころは、江戸時代から続く、踊りを中心とした仁輪加太鼓の公演です。

毎年、2人の太鼓打ちがそれぞれ異なるスタイルで町内を練り歩き、三味線に合わせて踊り手が寸劇を披露します。祭りの起源は江戸時代初期から中期にさかのぼるといわれ、最古の証拠は1849年と刻まれた太鼓箱です。仁輪加太鼓は高砂市の文化財に指定されています。

008-035

Yoneda Tenjin Fall Festival

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 米田天神社秋祭り / 祭り概要

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Yoneda Tenjin Fall Festival

This festival is held annually in October to celebrate the harvest and express thanks for good crops. During the festival, large, highly decorated *yatai* (floats) are carried in a procession around the city by adults and children. The excitement and lively atmosphere that characterize the event make it well worth a visit.

According to legend, hundreds of years ago, Yoneda Tenjin Jinja Shrine was rebuilt by the chief advisor of Kitakyushu Miyamoto Iori (1612–1678). Iori was the adopted son of philosopher and painter Miyamoto Musashi (1584–1645) the legendary swordsman and author of the *Book of Five Rings (Go rin no sho)*. Yoneda Shrine is thus known for its association with Musashi and Iori.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

米田天神社秋祭り

収穫を祝い、豊作に感謝する祭りで、毎年10月に行われます。祭りの期間中、装飾が施された大きな屋台が、大人や子どもによって市内を練り歩きます。このイベントの特徴である熱気と賑やかな雰囲気は、一見の価値があります。

伝説によると、数百年前、米田天神社は北九州の家老であった宮本伊織（1612-1678）によって再建されました。伊織は、伝説の剣豪で五輪書の著者である哲学者・画家の宮本武蔵（1584-1645）の養子でした。米田天神社は武蔵と伊織のゆかりの地として知られています。

008-036

Sone Tenmangu Shrine Fall Festival

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 曾根天満宮秋祭り / 祭り概要

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Sone Tenmangu Shrine Fall Festival

Each year over October 13–14, eleven colorful floats (*yatai*) weighing more than 2,000 kilograms pass through Sone Tenmangu Shrine and are paraded through the city's streets. After sunset, they are illuminated with lights.

Sone is regarded as the pioneer of its characteristic *futon yatai*, which feature a futon mattress on the roof of each float. This form of float is thought to date from the era of Bunka-Bunsei culture (1804–1830). A votive tablet (*ema*) from 1861 depicts a Sone-style float, but it was not until the turn of the twentieth century that the floats began to be decorated as flamboyantly as they are today.

The various festival rituals include *takewari*, in which men slam bamboo sticks adorned with streamers on the ground to indicate their position for viewers some distance away, and *hitotsumono*, which involves drawing characters on the foreheads of young children who are then dressed in hats and hunting costumes before entering the shrine on horseback. *Hitotsumono* is carried out because young children are believed to be more likely than adults to attract divine beings.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

曾根天満宮秋祭り

毎年10月13日14日、総重量2,000キロを超える色とりどりの屋台11台が曾根天満宮を通り、市内を練り歩きます。日没後はライトアップされます。

曾根天満宮は、屋台の屋根に布団を敷いた独特の布団屋台の草分け的存在です。この形式の屋台は文化文政年間（1804-1830）のものと考えられています。文久元年（1861年）の絵馬には曾根式の屋台が描かれていますが、現在のように派手な装飾が施されるようになったのは20世紀に入ってからです。

さまざまな祭りの儀式には、男たちが吹流しのついた竹の棒を地面に叩きつけて、遠くにいる観衆に自分の位置を示す「竹割（たけわり）」や、幼児の額に文字を描き、帽子や狩猟衣装を着せ馬に乗って神社に入る「一ツ物（ひとつもの）」などがあります。一ツ物は、大人よりも幼児のほうが神を引き寄せやすいとの考えから行われます。

008-037

Oushiko Jinja Shrine Fall Festival

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 生石神社秋祭り / 祭り概要

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Oushiko Jinja Shrine Fall Festival

This lively festival is held on the third Saturday and Sunday in October. The highlight is the parade of *mikoshi* (portable shrines). Young people carry the red one, in which Onamuchi no Mikoto, the deity of Takasago, is enshrined, while older people carry the yellow one, which carries the deity Sukunahikona.

During the parade, the *mikoshi* are bumped hard into each other, the energy of which is thought to please the *kami* (gods) being carried inside them. In one ritual, a man dressed as Sarutahiko, the guardian of deities, waves a stick at the young men shouting around him and chases them away. This symbolizes the strength of the deities.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

生石神社秋祭り

10月の第3土日に開催される賑やかなお祭りです。見どころは神輿の巡行。高砂の神である大穴牟遲命を祀る赤い神輿を若者が、少彦名命を祀る黄色い神輿を年配者が担ぎます。

行列では神輿同士が激しくぶつかり合い、そのエネルギーが神を喜ばせると考えられています。ある神事では、神々の守護神である猿田彦に扮した男が、周りで叫ぶ若者たちを棒を振りかざして追い払います。これは神々の強さを象徴しています。

008-038

Takasago Manto Festival

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 たかさご万灯祭 / 祭り概要

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago Manto Festival

This event, which is held in mid-September, was started in 2006, when Takasago Town in Takasago City was designated one of Hyogo Prefecture's historic landscape areas. Its aim is to showcase the layout of the town and the historic buildings, some of which have been there for 400 years.

Live jazz performances are held at several venues in the town, including the grounds of temples. The town is filled with lights and music during the festival.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

たかさご万灯祭

9月中旬に開催されるこのイベントは、高砂市の高砂町が兵庫県の歴史的景観形成地区に指定された2006年に始まりました。その目的は、中には400年前から存在しているものもある町割りと歴史的建造物を紹介することです。お寺の境内など、町のいくつかの会場でジャズのライブが行われます。期間中、高砂町は灯りと音楽に包まれます。

008-039

Night Fantasy Illusion

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 ナイトファンタジー・イリュージョン / 祭り概要

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Night Fantasy Illusion

One tradition in Takasago is the hosting of the “Night Fantasy Illusion” at Takasago Seaside Park. This colorful festival, which incorporates fireworks, lasers, and music, is held in autumn or winter, on a different day each year. Lasers shining on the water’s surface move in choreographed displays with music. The entire park is illuminated with LED lights, and those present are treated to colorful displays of fireworks.

Tickets go on sale in September each year through the official website:

<https://hanabi.tenkomori.tv/>. Information about the event can also be found on the website.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ナイト・ファンタジー・イリュージョン

高砂の風物詩といえば、高砂海浜公園で開催される「ナイトファンタジーイリュージョン」です。花火、レーザー、音楽が織りなすカラフルな祭典は、毎年秋か冬に開催されます。水面に輝くレーザーが、音楽に合わせて振り付けされた演出で動きます。公園全体がLEDでライトアップされ、色とりどりの花火が打ち上げられます。

チケットは毎年9月に公式ウェブサイト<https://hanabi.tenkomori.tv/>で販売されます。イベントに関する情報もウェブサイトを確認できます。

008-040

Takasago Seaside Park

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂海浜公園 / 公園全体

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago Seaside Park

Takasago Seaside Park is a recreational zone where visitors can enjoy water activities, fishing, walking, and views of islands and the sea. The white-sand beach is lined with pine trees, a setting that has been named one of Japan's top 100 stretches of sandy beaches and pine trees.

The park offers toilet facilities, showers, and a barbecue rental service. For the latter, guests can rent space and equipment for a barbecue while bringing their own food and drinks, or they can choose a package that includes food, much of which is locally sourced. There is an all-you-can-eat meal set and a regular meal set, both of which have separate prices for adults and children.

The standard barbecue site includes a basic tent shelter, table, and chairs for up to six people. The slightly more expensive luxury site offers greater privacy, as well as a comfortable sofa with seating for eight people in a wooden gazebo. Both the standard and luxury sites allow views of the beach and sea.

The meal options require a reservation, which can be made through the website at <https://outdoor.mukoujima-park.com/bbq-2/>.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂海浜公園

高砂海浜公園は、水遊びや釣り、ウォーキング、島々や海の景色を楽しむレクリエーションゾーン。白砂の浜辺には松並木が続き、「白砂青松100選」にも選ばれています。

園内には、トイレ、シャワー、バーベキューのレンタルサービスがあります。バーベキューについては、食材や飲み物を持ち込みながらバーベキュー用のスペースと道具をレンタルすることや、地元産の食材を多く使った食材付きのパッケージを選ぶこともできます。食べ放題の食事セットと通常の食事セットがあり、どちらも大人と子供で料金が分かれています。

スタンダードのBBQプランには、基本的なテント・シェルター、テーブル、椅子（6人まで）が含まれています。少し高めのラグジュアリープランでは、よりプライバシーが保たれ、木製のがぜボに8人掛けの快適なソファが用意されています。どちらを選んでもビーチと海を眺めることができます。

食事のオプションは予約が必要で、ウェブサイト（<https://outdoor.mukoujima-park.com/bbq-2/>）から予約できます。

008-041

Mt. Takamikura

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高御位山 / ハイキングアクティビティ

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Mt. Takamikura

Mt. Takamikura stands on the border between the cities of Kakogawa and Takasago in the Harima Alps. Since ancient times, this mountain has been considered sacred due to the exposed Tatsuyama stone, which is a precious local resource. At 304 meters above sea level, the summit provides climbers with excellent views of the surrounding area. In good weather it is possible to see as far as Awaji Island in the Seto Inland Sea, and even Shikoku.

The mountain, which can be climbed year-round, has a variety of trails for walkers of differing abilities. One of the most popular paths is the eight-kilometer Harima Alps Course, which starts at the parking lot of Kashima Jinja Shrine. This can be a challenging trail for beginners and offers little shade, so those climbing in mid-summer should take particular care.

Another popular option is the well-maintained Narui Course, which is the shortest way to the top of the mountain. This two-kilometer trail is suitable for beginners and families. It takes approximately one hour to reach Takamiyama Jinja Shrine on the summit.

Mt. Takamikura has attractions throughout the seasons. From mid-March to mid-April, cherry blossoms are in full bloom; then, in June and July, the rare *sasayuri* woodland lilies, native to Japan, are at their best. On New Year's Day, the Narui Course is illuminated for the convenience of the large number of climbers who wish to enjoy the first sunrise of the new year from the summit. The mountain has even been named the

top sunrise-viewing spot in the region.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高御位山

播磨アルプスの加古川市と高砂市の境にそびえる高御位山。古来、この山は貴重な地域資源である竜山石が露出していることから神聖視されてきました。標高304メートルの山頂からは、周囲を見渡すことができます。天気良ければ瀬戸内海の淡路島や四国まで見渡せます。

一年中登ることができるこの山には、様々な能力を持った登山客のために様々なコースが用意されています。最も人気のあるコースのひとつが、鹿島神宮の駐車場からスタートする全長約8キロの播磨アルプスコースです。初心者には難しいコースで、日陰も少ないので、真夏の登山は特に注意が必要です。

もうひとつの人気コースは、整備された成井コース。この2キロのコースは初心者や家族連れに適しています。山頂の高御位神社までは約1時間です。

高御位山は四季を通じて魅力があります。3月中旬から4月中旬にかけては桜が満開になり、6月から7月にかけては日本原産の珍しいササコリが見頃を迎えます。元旦には、山頂から初日の出を拝もうとする大勢の登山者のために、山頂まで成井コースの登山道がライトアップされます。この山は、この地域で一番の初日の出スポットにも選ばれています。

008-042

Takasago Ginza Shopping Arcade

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂銀座商店街 / 商店街全体

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago Ginza Shopping Arcade

The area occupied by the Takasago Ginza Shopping Arcade first began to develop as a hub for people in the Edo period (1603–1867) when a few blacksmiths opened small workshops there, giving the town its first name: Kajiya (blacksmith). As their number increased, the town became an attractive location for merchants to set up businesses, eventually including teahouses and brothels.

With the construction of Takasago Station in 1926, the area developed into a thriving shopping street called the Takasago Ginza Shopping Arcade. Stores sold a variety of goods and there was bustling foot traffic around the station. When the train station closed in 1984, trade in the area declined, and some of the stores were shuttered. But today, the arcade's retro charm has made it popular again, as visitors can feel the atmosphere of an older era of Japan. A market held on the third Saturday each month attracts both traders selling local products and visitors wanting a taste of the arcade's history.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂銀座商店街

高砂銀座商店街が位置するエリアは、江戸時代（1603～1867年）に数人の鍛冶屋が小さな工房を開き、町の名前を「鍛冶屋」と名付け、それから人々の拠点として発展し始めました。鍛冶屋が増えるにつれ、町は商人にとって魅力的な場所となり、やがて茶屋や遊郭もできました。

1926年に高砂駅が建設されると、この地域は高砂銀座商店街と呼ばれる繁華街へと発展しまし

た。さまざまな商品が売られ、駅周辺は賑わいを見せました。1984年に駅が閉鎖されると、商店街は衰退し、一部の店舗はシャッターを下ろしました。しかし現在、このアーケードはレトロな魅力にあふれ、日本の懐かしい時代の雰囲気を感じられる場所として再び人気を集めています。毎月第3土曜日に開催されるマーケットには、地元の特産品を販売する業者と、アーケードの歴史を味わいたい観光客の両方が集います。

008-043

Takasago-cho and the *Kitamaebune*

高砂市観光施設多言語案内制作協議会

【タイトル】 高砂町 / 日本遺産認定ストーリー

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Takasago-cho and the *Kitamaebune*

In the middle of the Edo period (1603–1867), cargo ships began sailing from Osaka to Hokkaido on a route starting from the Seto Inland Sea, then going through the Kanmon Strait separating Honshu and Kyushu and up along the Sea of Japan coast to avoid the strong currents of the Pacific Ocean.

In the Meiji era (1868–1912), the number of *kitamaebune* (northbound ships) plying this route increased quite rapidly. They carried goods on both their outbound and return legs, unlike the vessels that transported daily necessities from the Kansai region to Edo (present-day Tokyo) along the Pacific coast. While the Edo-bound ships had empty holds on their return trips, which limited profits, the *kitamaebune* made multiple calls along the Sea of Japan coast, to maximize their income. The merchant sailors sold anything that would turn a profit and bought anything considered a bargain, which they would sell at the next stop.

Takasago played an important role in the development of *kitamaebune* shipping, thus advancing the growth of regional trade. Takasago's coastal location, facing Harima Bay on the Seto Inland Sea, made it a useful port of call. Many shipowners and merchant sailors built homes there due to the town's easy access to Osaka, the start of the *kitamaebune* route.

The invention of Matsuemon canvas by Takasago-born businessman and inventor Kuraku Matsuemon (1741–1812) had an enormous impact on the shipping industry of the time. As it was far more durable and flexible than the woven or light cotton grass

sails in use up until then, Matsuemon canvas greatly improved the reliability and performance of sailing ships.

Due to the significant contributions Takasago has made to the development of Japan's domestic trade, many of its buildings are recognized as Japan Cultural Heritage Sites.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高砂町と北前船

江戸時代（1603～1867）の中頃、貨物船は瀬戸内海を起点に、本州と九州を隔てる関門海峡を通り、太平洋の強い潮流を避けて日本海沿岸を上る航路で大阪から北海道へ向かうようになりました。

明治時代（1868-1912）、この航路を通る北前船の数は急速に増加しました。北前船は、関西から太平洋沿岸の江戸へ生活必需品を運ぶ船とは異なり、往路も復路も物資を運びました。江戸行きの船は復路は何も積まないで帰ったのに対し、北前船は行く先々で積んだ荷物を売り、また現地の商品を買ひ、収入を最大化しました。商人船員たちは、利益が出るものは何でも売り、掘り出し物と思われるものは何でも買ひ、次の寄港地で売りました。

高砂は北前船の発展に重要な役割を果たし、地域貿易の発展を促しました。高砂は瀬戸内海の播磨灘に面していたため、寄港地として重宝されました。北前船航路の起点である大坂へのアクセスも良いことから、多くの船主や商船員が高砂に住居を構えました。

高砂出身の実業家・工楽松右衛門（1741～1812）が発明した松右衛門帆は、当時の海運業に大きな影響を与えました。松右衛門帆は耐久性があり、それまで使われていた葦や軽い木綿で作られた帆よりもはるかに丈夫で柔軟だったため、帆船の信頼性と性能を大きく向上させました。

高砂は、日本の国内貿易の発展に大きく貢献したことから、多くの建造物が日本文化遺産に認定されています。

地域番号	009	協議会名	十津川村インバウンド受入協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
009-001	十津川村 / 十津川村全体概要		～250	WEB
009-002	玉置神社		～250	看板
009-003	玉置神社、大峯奥駟道		251-500	WEB
009-004	瀬峡		～250	看板
009-005	瀬ホテル		～250	看板
009-006	瀬峡と瀬ホテル		～250	WEB
009-007	十津川大踊り / ユネスコ無形文化遺産		～250	WEB
009-008	十津川温泉郷 / 十津川温泉		～250	看板
009-009	十津川温泉郷 / 湯泉地温泉		～250	看板
009-010	十津川温泉郷 / 上湯温泉		～250	看板
009-011	十津川温泉の泉質管理		251-500	WEB
009-012	谷瀬の吊り橋		～250	看板
009-013	谷瀬 / 吊り橋、展望台		～250	WEB
009-014	十津川村の郷土食		～250	WEB

009-001

Totsukawa: An Introduction

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 十津川村 / 十津川村全体概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Totsukawa: An Introduction

Welcome to Totsukawa, a secluded enclave nestled in a remote mountainous area of Nara Prefecture. With an area of about 672 square kilometers, Totsukawa is only slightly smaller than Singapore and a little larger than the 23 wards of central Tokyo. Mountains make up some 96 percent of the terrain, a greater proportion than in Nepal or Switzerland. Fifty-five hamlets are scattered across the mountaintops and deep valleys, with populations ranging from single families to several hundred residents. There are no train lines here. Instead, the communities are connected by an intricate network of roads that seem to wind and bend every few meters, except when they are passing through one of the 43 tunnels that have been built in recent years to improve access. The bus that traverses Totsukawa from north to south three times a day, following a route that links most of the population, takes about two and a half hours, one way. In one mountainous area, a river that cuts through a rugged gorge was the only means of transport for years.

Totsukawa is categorized as a *mura*, or “village” in Japanese, though its dimensions are more like those of a region or district. While its historical roots date back to the earliest days of Japan, Totsukawa’s isolated location and limited transportation options kept it off the beaten track. It remains a virtual secret shared by those who come to bask in its rustic rural culture, follow in the footsteps of legendary samurai, soak in its hot springs, raft its rivers, pay homage at its mountaintop shrine, or walk on the revered paths of the Kumano Kodo pilgrimage route.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

十津川：紹介

奈良県の人里離れた山間部にある秘境、十津川へようこそ。十津川の面積は、シンガポールよりわずかに小さく、東京都心部の23区より少し大きい約672平方kmです。この地域に占める山の割合は、ネパールやスイスよりも高い約96%です。この地域の山や深い谷には55の集落が点在しており、各集落の人口規模は一世帯から数百人までと様々です。ここには鉄道路線はありません。その代わり、集落間は複雑に入り組んだ道路網で結ばれています；近年アクセスを改善するために掘られた合計43本、総延長14.6kmのトンネルを除いて、道路はまるで数メートルごとに曲がりくねったり折れたりしているように感じられます。1日3回、十津川を南北に縦断するバスは、人口の大半が住む地域を結ぶ片道約2時間半のルートをとります。長年にわたり、ある山間地域では険しい峡谷を流れる川が唯一の交通経路でした。

十津川は日本語では「mura（村；village）」に分類されますが、その規模は地域や地区に近いものです。十津川の歴史的なルーツは、日本の最初期にまでさかのぼるものの、人里離れた場所にあり、交通手段も限られていた十津川は、あまり多くの人を訪れる場所ではありませんでした。この村は今でも実質的に、素朴な田園文化に浸り、伝説の武士の足跡をたどり、温泉に浸かり、いかだで川下りをし、山頂の神社に参拝し、熊野古道という参詣道を歩くためにこの地を訪れる人々だけが知る秘密の場所です。

009-002

Tamaki Shrine

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 玉置神社

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Tamaki Shrine

This ancient shrine at the summit of Mt. Tamaki (1,076 m) is one of Japan's oldest sacred sites. It is believed to have been founded in 37 BCE during the reign of the legendary Emperor Sujin as an act of piety to protect his castle from fires and evil spirits. It has long been a revered spot for practitioners of Shugendo, an ascetic tradition that embraces elements of Shinto and Buddhism along with the ancient worship of natural phenomena. Beginning in the Heian period (794–1185), Mt. Tamaki flourished as a training center for this syncretic religion and was an important stop on the ascetic training course that became the Omine Okugakemichi pilgrimage route.

After the Japanese government imposed the separation of Shinto and Buddhism during the Meiji era (1868–1912), most Buddhist structures on shrine grounds were destroyed, but at Tamaki Shrine elements of its temple past were repurposed or retained. Today this sacred spot, which includes not only the shrine but also the mountain and forests around it, is visited by worshipers from all over Japan for purification and healing. In 2004, Tamaki Shrine was registered as a World Heritage Site as part of the “Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range.”

Note: The shrine is presently undergoing a long-term restoration of some of its buildings and artifacts. Some areas may be inaccessible.

[NOTE: The following is for use with numbers or symbols indicating their location on the adjacent map.]

Major Structures and Features

Main Hall: This 200-year-old building is constructed of *keyaki* (zelkova) wood. It houses the shrine's main deities, including Kunitokotachi no Mikoto (the first deity to appear when the Earth and the heavens were created), Izanagi no Mikoto, Izanami no Mikoto, and Amaterasu Omikami, the sun goddess.

Mihashira Shrine: The three deities housed in this auxiliary shrine are worshiped for protection from various ailments and for maritime safety.

Tamaishi Shrine: This subordinate shrine, located halfway between the Main Hall and the peak of Mt. Tamaki, has no built structure, reflecting the tradition of nature worship in ancient Japan. It consists of a partially buried black rock surrounded by white pebbles set in an enclosure among Japanese cedars. This is thought to be the origin of Tamaki Shrine, and is revered as a power spot.

Shrine Office and Kitchen: This structure was built in 1804 as the main hall and kitchen of a Buddhist temple within the shrine complex. The interior sliding doors are decorated with acclaimed late Edo-period paintings of flora and fauna. It is designated an Important Cultural Property.

Omikoshiden: A *mikoshi*, or portable shrine, is housed here except during the annual festival on October 24, when it is paraded through the shrine grounds.

Giant Cedar Trees: The shrine grounds have a number of ancient *sugi* (Japanese cedar) trees, thanks to a long prohibition on logging in this sacred area. These include the 3,000-year-old Jindai-sugi; the O-sugi, 50 meters high with a circumference of 11 meters; and the Meoto-sugi, two massive trees joined at the trunk (*meoto* means "wedded").

上記解説文の仮訳（日本語訳）

玉置神社

玉置山（1,076m）の山頂に鎮座するこの非常に古い神社は、日本最古の霊場のひとつです。

創建は紀元前37年と伝えられており、崇神天皇の時代に、天皇の城を火事と悪霊から守るために建てられたとされます。玉置神社は、昔から、神道と仏教、そして古代の自然崇拝の要素を取り入れた修行の伝統である修験道の行者に崇拜されてきた場所です。平安時代（794-1185）、玉置山はこの習合的な信仰の修行の拠点として栄え、後に「大峯奥駈道」となった修行の道の重要な中継地でした。

明治時代（1868-1912）に政府が神仏分離令を敷いた際、神社の境内に建てられていた仏教建築の多くが破壊されましたが、玉置神社ではその寺院の一部が転用・維持されました。現在、この霊場（神社だけでなく周辺の山や森を含む）には、お祓いや癒しを求めて全国から参拝者が訪れます。2004年、玉置神社は「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として世界遺産に登録されました。

注：現在、神社では一部の建物や文化財の長期間にわたる修復が行われています。一部立ち入りできない箇所があります。

[注：以下は、併設の地図上の位置を示す数字または記号に併せて使用するテキストです]

主な建造物と特徴

本社： 築200年のケヤキ造りの建物です。玉置神社の主祭神である、国常立尊（天地が創造された際に最初に出現した神）、伊弉諾尊、伊弉冉尊、そして太陽の女神である天照大神（あまてらすおおみかみ）が祀られています。

三柱神社： この摂社に祀られている三神は、無病息災や海上安全の神として崇拝されています。

玉石社： 本社と玉置山山頂の中間に位置するこの末社は、日本古来の自然崇拝の伝統を反映し、社殿を持ちません。杉に囲まれた敷地に、一部が埋まった黒い岩が敷き詰められた白い小石に囲まれています。パワースポットとして崇拝されているこの場所は、玉置神社の起源と考えられています。

社務所兼台所： この建物は、1804年に仏教寺院の本堂兼台所として境内に建てられたものです。内部の襖には、江戸時代後期に描かれた見事な動植物の絵画があしらわれています。社務所は国の重要文化財に指定されています。

御神輿殿： 神輿（portable shrine）は、10月24日の例大祭に境内を練り歩く時以外は、ここにおさめられています。

杉の巨樹群： 境内には、長い間伐採が禁じられていたおかげで、非常に古い杉の木が多数あります。その中には、樹齢3,000年の神代杉、高さ50m・幹周11mの大杉、2本の巨木の幹が結合している夫婦杉（meotoとは「婚姻を結んだ [wedded] という意味）などがあります。

009-003

Tamaki Shrine and the Omine Okugakemichi

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 玉置神社、大峯奥駈道

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Tamaki Shrine and the Omine Okugakemichi

This ancient shrine is one of Japan's oldest sacred sites. Sitting on the summit of Mt. Tamaki (1,076 m), it is believed to have been founded in 37 BCE during the reign of the legendary Emperor Sujin as a means of protecting his castle from fires and evil spirits. But myths about the spot go back even further to those concerning Jimmu (721–585 BCE), Japan's first emperor, who legends say was guided through the area by a mythical crow-god as he battled his way northward from his Kyushu domain.

In the early eighth century, the shrine had another important visitor. En no Gyoja (634–706) was the founder of Shugendo, the tradition of asceticism that embraces elements of Shinto and Buddhism along with the ancient worship of natural phenomena. He chose it as one of the sacred training sites along the mountainous trail between the religious centers of Yoshino and Kumano, now known as the Omine Okugakemichi pilgrimage route. Beginning in the Heian period (794–1185), the Tamaki religious complex flourished as a training center for Shugendo, and by the eighteenth century, some 200 monks resided at the temple there.

After the Japanese government ordered the separation of Shinto and Buddhism during the Meiji era (1868–1912), most Buddhist structures on shared shrine grounds throughout Japan were destroyed, but at Tamaki Shrine elements of its temple past were repurposed or retained. Today, this sacred spot, which includes not only the shrine but the forest and mountain where it sits, is visited by travelers on the rugged 100-kilometer pilgrimage route and other worshipers in search of purification and healing.

In 2004, the 30,000-square-meter Tamaki Shrine complex was registered as a World Heritage Site as part of the “Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range.”

[NOTE: If a map of the grounds is included on the website, the following could be added with symbols or numbers indicating the location.]

Major Structures and Features

Main Hall: This 200-year-old building is constructed of *keyaki* (zelkova) wood. It houses the shrine’s main deities, including Kunitokotachi no Mikoto (the first deity to appear when the Earth and the heavens were created), Izanagi no Mikoto, Izanami no Mikoto, and Amaterasu Omikami, the sun goddess.

Mihashira Shrine: The three deities housed in this auxiliary shrine are worshiped for protection from various ailments and for maritime safety.

Tamaishi Shrine: This subordinate shrine, located halfway between the Main Hall and the peak of Mt. Tamaki, has no built structure, reflecting the tradition of nature worship in ancient Japan. It consists of a partially buried black rock surrounded by white pebbles set in an enclosure among Japanese cedars. This is thought to be the origin of Tamaki Shrine, and is revered as a power spot.

Shrine Office and Kitchen: This structure was built in 1804 as the main hall and kitchen of a Buddhist temple within the shrine complex. The interior sliding doors are decorated with acclaimed late Edo-period paintings of flora and fauna. It is designated an Important Cultural Property.

Omikoshiden: A *mikoshi*, or portable shrine, is housed here except during the annual festival on October 24, when it is paraded through the shrine grounds.

Giant Cedar Trees: The grounds of the shrine are home to a number of ancient

Japanese cedar (*sugi*) trees, preserved thanks to a long prohibition on logging. These include the 3,000-year-old Jindai-sugi; the O-sugi, 50 meters high with a circumference of 11 meters; and the Meoto-sugi, two massive trees joined at the trunk (*meoto* means “wedded”).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

玉置神社と大峯奥駈道

この非常に古い神社は、日本最古の霊場のひとつです。玉置山（1,076m）の山頂に鎮座するこの神社は、紀元前37年、多くの伝説を残した崇神天皇の在位中、その城を火事と悪霊から守るために建てられたとされています。しかし、この場所まつわる神話にはそれよりさらに古いものがあり、伝えられるところによると、日本の初代天皇神武天皇（紀元前721年–紀元前585年）は、九州の所領から北へ向かって進軍する途中、神話に登場するカラスの神様に導かれてこの地域を通りました。

8世紀初頭、この神社に別の重要な人物が訪れました。役行者（634-706）は、神道と仏教、そして古代の自然崇拝の要素を取り入れた修行の道である「修験道」の開祖でした。役行者は、現在は大峯奥駈道と呼ばれている、吉野と熊野を結ぶ山道沿いに設けた神聖な修行場のひとつとしてこの神社を選びました。平安時代（794-1185）になると、宗教的複合施設となった玉置神社は、この習合的な信仰の修行の拠点として栄え、18世紀には境内の寺院に約200人の僧が居住するようになっていました。

明治時代（1868-1912）に政府が神仏分離令を敷いた際、神社の境内に建てられていた仏教建築の多くが破壊されましたが、玉置神社ではかつての寺院の一部が転用・維持されました。現在、この霊場（神社だけでなく周辺の山や森を含む）には、100kmにわたる険しい巡礼路を歩く旅人たちや、お祓いや癒しを求める参拝者たちが訪れます。

2004年、面積3万平方メートルにおよぶ玉置神社の境内は、「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として世界遺産に登録されました。

[注：ウェブサイト境内の地図を掲載する場合は、建物などの場所を示す記号や数字と一緒に以下を追加することも可能です。]

主な建造物と特徴

本社： 築200年のケヤキ造りの建物です。玉置神社の主祭神である、国常立尊（天地が創造された際に最初に出現した神）、伊弉諾尊、伊弉冉尊、そして太陽の女神である天照大神（あまてらすおおみかみ）が祀られています。

三柱神社： この摂社に祀られている三神は、無病息災や海上安全のために祀られています。

玉石社： 本社と玉置山山頂の中間に位置するこの末社は、日本古来の自然崇拝の伝統を反映し、社殿を持ちません。杉に囲まれた敷地に、一部が埋まった黒い岩が敷き詰められた白い小石に囲まれています。パワースポットとして崇拝されているこの場所は、玉置神社の起源と考えられています。

社務所兼台所： この建物は、1804年に仏教寺院の本堂兼台所として境内に建てられたものです。内部の襖には、江戸時代後期に描かれた見事な動植物の絵画があしらわれています。社務所は国の重要文化財に指定されています。

御神輿殿： 神輿 (portable shrine) は、10月24日の例大祭に境内を練り歩く時以外は、ここにおさめられています。

杉の巨樹群： 境内には、長い間伐採が禁じられていたおかげで、非常に古い杉の木が多数あります。その中には、樹齢3,000年の神代杉、高さ50m・幹周11mの大杉、2本の巨木の幹が結合している夫婦杉 (meotoとは「婚姻を結んだ [wedded]」という意味) などがあります。

009-004

Doro-kyo Gorge

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 瀨峡

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Doro-kyo Gorge

This section of the Kitayama River straddles the border of three prefectures (Nara, Mie, and Wakayama) and is part of the 31-kilometer-long Doro-kyo Gorge. The precipitous 50-meter cliffs were formed from layers of sedimentary rock thrust up from the sea about 70 million years ago. Magma later heated and solidified the rocks, making them resistant to erosion. Over many millennia, the hardness of the rock forced river waters to cut deep rather than wide, gradually carving out the canyon walls.

From Transport to Tourism

For over six centuries, the Kitayama River served as a vital transportation conduit through these rugged mountains, particularly for the log drivers who transported loads of timber downriver from the dense forests where they were harvested. (A part of “Raftsmen’s Path,” a route the men would use to walk back home after delivering their logs, is now maintained as a hiking trail.) Until just a few decades ago this area was roadless and isolated, accessible only by river transport. However, as news of the sheer cliffs, fantastic rock formations, and emerald waters of the gorge spread in the late nineteenth century, tourists began making their way here, and in 1936 the area was designated part of Yoshino-Kumano National Park. Today a variety of modes of river transport, from traditional rafts to motorboats, carry passengers through the gorge. The road was completed in 1965, further easing access.

Riding the River

Boat tours of this downriver section of the gorge can be arranged on the river shore at the bottom of the stairs. The calm waters are also ideal for stand-up paddleboarding,

kayaking, or just a quick dip.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

瀬峡

奈良、三重、和歌山の3県の県境にまたがるこの北山川流域は、全長31kmの瀬峡の一部です。高さ50mの断崖絶壁は、約7千万年前に海から隆起した堆積岩の層から形成されました。その後、岩盤は溶岩に熱されて硬化し、浸食されにくくなりました。非常に長い年月にわたって、この岩盤の硬さによって川の流れは両岸を広げるのではなく川底を深く削り、徐々に険しい峡谷が削り出されました。

輸送から観光へ

北山川は600年以上もの間、この険しい山々を通る重要な交通水路としての役割を果たしました；特に、鬱蒼と茂った森から伐採したたくさんの木材を、筏で川を下って運ぶ筏師（log drivers）には不可欠でした。（筏師たちが材木を運んだ後、家まで歩いて帰るのに使った「筏師の道」の一部は、現在ハイキングコースとして整備されています）。つい最近まで、この地域は道路もなく、孤立していて、川が唯一の交通経路でした。しかし、19世紀後半にこの峡谷の切り立った崖や奇岩の数々、エメラルド色の水の評判が広まると、観光客が訪れるようになり、瀬峡は1936年に吉野熊野国立公園の一部に指定されました。現在では、伝統的な筏からモーターボートまで、さまざまな河川交通手段で峡谷の往来を楽しむことができます。1965年には道路が完成し、アクセスがさらに容易になりました。

川下り

この下流域のボートツアーは、階段を下った河岸で手配できます。流れの緩やかなこの水辺は、スタンド・アップ・パドルングやカヤック、そしてちょっとした水遊びにもぴったりです。

009-005

Doro Hotel

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 瀬ホテル

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Doro Hotel

This traditional Japanese-style inn was constructed in 1917. It was named Azumaya and catered to log drivers, men who would transport timber harvested in the forests of nearby mountains to be processed into lumber downriver. At the time, the area was virtually inaccessible. But soon after the inn's opening, news of the surrounding scenic landscape began to spread, and passenger boats began plying the waters of Doro-kyo Gorge in 1920 to accommodate increasing numbers of tourists. At some point during the Showa era (1926–1989), the name of the inn was changed to the Doro Hotel, drawing on the name of the popular gorge. The opening of a road in 1965 further fanned the tourism boom, and a small hamlet grew up around the hotel to support the tourism industry. In 2004, the hotel closed after three generations of management by the same family.

A Historical Showcase

In 2013, the Doro Hotel was reopened by its fourth-generation owner as a café and rental space, offering simple meals, bird's-eye views of the gorge, and a nostalgic atmosphere recalling its century-old origins. The interior houses a number of displays and artifacts from the days when the river was the sole means of transportation in the area. The hotel is a designated Nara Prefectural Cultural Property.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

瀬ホテル

この旅館は、1917年に建てられました。「あづまや」と名付けられたこの旅館は、筏師と呼ばれる近

隣の山々の深い森で伐採された丸太を木材に加工するために川下へと輸送する男たちの宿でした。当時、この地域は実質的に隔絶されていました。しかし、旅館の開業後間もなく、周辺の風光明媚な風景が知られるようになり、1920年には観光客の増加に伴って瀬峡の溪流を往来する旅客船が就航しました。昭和（1926-1988）になると、旅館の名前は瀬峡の人気にちなんで「瀬ホテル」と改められました。1965年に道路が開通したことで、この地域の観光ブームはさらに加速し、宿周辺の小さな集落は、観光産業を支えて賑わいました。しかし、2004年、3世代続いた宿は廃業しました。

歴史のショーケース

2013年、瀬ホテルは4代目のオーナーによって、簡単な食事と峡谷を一望する景色、そして、百年前の創業当時を偲ばせるノスタルジックな雰囲気を楽しめるカフェとレンタルスペースとして再びオープンしました。建物内には、川が唯一の交通手段であった時代の品々が飾られています。瀬ホテルは奈良県の文化財に指定されています。

009-006

Doro-kyo Gorge and the Doro Hotel

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 瀬峡と瀬ホテル

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Doro-kyo Gorge and the Doro Hotel

Doro-kyo Gorge is a 31-kilometer-long section of the Kitayama River, which straddles the border of three prefectures (Nara, Mie, and Wakayama). The rocks of the gorge are layers of sedimentary rock pushed up from the sea about 70 million years ago. Magma later heated the rocks, hardening them and making them resistant to erosion. Over many millennia, the hard rock forced the Kitayama River to cut deep, forming a steep V-shaped canyon rather than a wide valley.

For over six centuries, the Kitayama River was used by log drivers to transport harvested timber downriver. (A part of “Raftsmen’s Path,” a route the men would use to walk back home after delivering the logs, is now maintained as a hiking trail.) Until just a few decades ago, this area was roadless and isolated, accessible only by river transport. However, as news of the sheer cliffs, fantastic rock formations, and emerald waters of the gorge spread in the late nineteenth century, tourists began making their way here, and in 1936 the area was designated part of Yoshino-Kumano National Park. Today, the gorge’s features can be enjoyed via a variety of modes of river transport, from traditional rafts to motorboats.

The Doro Hotel sits in a particularly scenic part of the gorge. It was built more than a century ago as an inn to house tired raftsmen, but soon found itself catering to a booming tourist trade. At one time, some five inns were operating in the area. In 2004, the hotel closed after three generations of management by the same family. It now operates as a café, offering simple meals, bird’s-eye views of the gorge, and a nostalgic atmosphere recalling its century-old origins. Displays and artifacts from the days when the river was the only available transportation for logs and local residents

decorate the interior. The hotel is a designated Nara Prefectural Cultural Property.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

瀬峡と瀬ホテル

奈良、三重、和歌山の3県の県境にまたがる瀬峡は、全長31kmにわたる北山川流域です。瀬峡の岩盤は、約7千万年前に海から隆起した堆積岩の層です。その後、岩盤は溶岩に熱されて硬化し、浸食されにくくなりました。非常に長い年月にわたって、この硬い岩盤は北上川に川底を深く削らせたため、幅広の谷ではなく険しいV字型の峡谷が形成されました。

600年以上もの間、北山川は筏師が伐採された材木を下流へと運ぶために利用されました。（筏師たちが材木を運んだ後、家まで歩いて帰るのに使った「筏師の道」の一部は、現在ハイキングコースとして整備されています。）つい2、30年ほど前まで、この地域は道もなく、孤立していて、川が唯一の交通経路でした。しかし、19世紀後半にこの峡谷の切り立った崖や奇岩の数々、エメラルド色の水の評判が広まると、観光客が訪れるようになり、瀬峡は1936年に吉野熊野国立公園の一部に指定されました。現在では、伝統的な筏からモーターボートまで、さまざまな河川交通手段で峡谷の景観を楽しむことができます。

瀬ホテルは、瀬峡でもとりわけ景色の良い場所にあります。百年以上前、疲れた筏師たちが泊まるための旅館として建てられましたが、やがて観光業が栄えると、観光客が宿泊するようになりました。一時期は、この地域に5つほどの宿が営業していました。三世代続いた瀬ホテルは2004年に廃業しました。現在は、簡単な食事と峡谷を一望する景色、そして百年前の創業当時を偲ばせるノスタルジックな雰囲気を楽しめるカフェとして営業しています。建物内には、川が材木の運搬と人々の移動のための唯一の交通経路であった時代の品々が飾られています。瀬ホテルは奈良県の文化財に指定されています。

009-007

Totsukawa O-odori: A UNESCO Intangible Cultural Heritage

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】十津川大踊り / ユネスコ無形文化遺産

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Totsukawa O-odori: A UNESCO Intangible Cultural Heritage

Totsukawa O-odori is a regional style of the Japanese folk dances collectively known as *furyu-odori*, which are recognized as an Intangible Cultural Heritage by UNESCO. *Furyu-odori* are community performances characterized by lively steps set to traditional songs and performed by local residents dressed in vivid *yukata* (summer kimono).

The *o-odori* dances performed in Totsukawa communities are believed to have been passed on by travelers on the popular pilgrimage routes to Kumano. They are part of the *bon-odori* tradition, a summer dance event that has several purposes: the spiritual aspect of welcoming ancestral spirits and dancing with them; the social aspect of finding potential romantic partners; and as entertainment, with participants competing for attention with their performance and appearance.

The dances take place in open plazas lit by colorful *chochin* paper lanterns. The songs are sung by both male and female singers, accompanied by the steady beat of hand-held *taiko* drums. Steps to the songs are passed down from older generations and practiced for weeks before the event. Food stalls selling shaved ice and cotton candy keep young children happy as the dancing goes on. Most hamlets once held dance events that began at sundown and sometimes lasted until dawn. Today, however, only four districts (Musashi, Ohara, Nishigawa, and Yunohara) carry on the *o-odori* tradition, and the dances usually wind down not long after midnight.

Over the years, each community developed a particular style of music and dance, and though some of the songs are shared, the tempo and steps may differ greatly. Dancers in Musashi and Ohara circle the small, colorful *yagura* stage to many up-tempo songs, for example, while the performers in Nishigawa form straight parallel lines of dancers and drummers, and move to slow and stately rhythms without any central stage. Each hamlet has its own props, including tasseled drumsticks and lanterns on bamboo poles. Some props, such as folding fans, appear everywhere. The hamlets have their own song lists as well (36 songs in Musashi's case), though not all are performed every year. While some songs once lasted up to an hour or more, they have been shortened to fit today's tastes.

Every summer, from August 13 to 15, dance events are held in the four districts and six other villages. Visitors are more than welcome to watch the festivities and to join in and try to imitate the steps of the various dances. On the next weekend, local dancers gather to perform short programs in the plaza next to the Hotel Subaru, followed by a fireworks display. These events are ideal opportunities to enjoy this long-cherished tradition and support its preservation.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

十津川大踊り：ユネスコ無形文化遺産

十津川大踊りは、UNESCO無形文化遺産に登録されている、「風流踊」と総称される民俗舞踊のこの地域の様式です。風流踊は、伝統的な歌に合わせた軽快なステップを特徴とする群舞で、鮮やかな浴衣（summer kimono）をまとった地域住民によって踊られます。

十津川の集落で踊られる大踊りは、人通りの多かった熊野の巡礼路を通过这个地域を旅していた人々によって伝えられたとされます。大踊りは盆踊りという夏の舞踊会の伝統の一部です：盆踊りには、先祖の霊を迎え共に踊るというスピリチュアルな側面、恋人と出会う機会となる社会的な側面、そして娯楽としての側面など、複数の機能があり、参加者は着飾った姿や踊りで注目を競います。

大踊りは色鮮やかな提灯に照らされた広場で開催されます。手で持った太鼓の拍子に合わせて、男女の歌い手が歌を歌います。振り付けは上の世代から受け継がれ、本番に向けて何週間も練習されます。踊りが続く中、かき氷や綿菓子を売る屋台が小さな子どもたちを喜ばせます。かつてはほとんどの集落で日没から夜明けまで続く踊りの行事が行われていました。しかし、現在大踊りの伝

統を継承しているのは武蔵、小原、西川、湯之原の4地区のみで、これらの地域の踊りも大抵深夜12時を過ぎると間もなく終わります。

長年の間に、各集落は独自の音楽と踊りのスタイルを確立し、歌の一部は共通しているものの、テンポや振り付けは大きく異なっている場合があります。例えば、武蔵や小原の踊り手は、数多くのアップテンポの曲に合わせて色鮮やかな小さなやぐらの周りを回るのに対し、西川の踊り手は、中央にやぐらを置かず、踊り手と太鼓の打ち手が直線の列をなして平行に並び、ゆったりとした重厚なリズムに合わせて動きます。房のついた太鼓台や竹竿の先に下げた提灯など、小道具は集落ごとに異なります。舞扇のようにどの集落でも使われる小道具もあります。各集落には独自の曲目リストがありますが（武蔵の場合は36曲）、毎年全曲が上演されるわけではありません。かつては1時間以上続いた曲もいくつかありましたが、それらは現代に合わせて短くされています。

毎夏、8月13日から15日には、これら4地区および他の6集落で踊りの行事が開催されます。観光客も、見学はもちろん、参加して様々な踊りを見様見真似で踊ってみるのも大歓迎です。その翌週末には、ホテル昴の横の広場で、地元の踊り手が集まって演目を踊る短時間のイベントが開催され、その後花火大会が行われます。これらの行事はいずれも、この古くから大切にされてきた伝統を楽しみつつ、その継承を応援する絶好の機会です。

009-008

Totsukawa Onsen

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 十津川温泉郷 / 十津川温泉

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Totsukawa Onsen

Welcome to Iorinoyu, the public bathing facility of the village of Totsukawa Onsen. The hot springs here are said to have been discovered by a charcoal maker some three centuries ago. This bath belongs to one of three hot spring communities in Totsukawa that promise a rare and relaxing bathing experience. We are committed to using only free-flowing hot spring waters, something unheard of at most hot spring baths in Japan. We refrain from processes such as circulation, reuse, reheating, chlorination, or dilution, so that bathers can soak in water that is 100 percent natural, straight from the hot spring source. The baths here at Iorinoyu are prized for saline, sodium bicarbonate, and chloride-rich waters that maintain a high temperature. These mineral-infused waters not only provide a soothing bath but are also suitable for drinking in small amounts.

Hours: 8:30 a.m. to 8:00 p.m. Closed on Tuesdays.

Fees: Adults ¥600; Children ¥300

Hot spring type: Sodium hydrogen carbonate and chloride spring

Number of spring sources: 2

Water temperature at source: 60.2°C (140°F)

Hot spring water concentration: 100 percent

Distance from spring source: 3.4 kilometers

Water flow per minute: 867 liters

pH scale reading: 7.5

上記解説文の仮訳（日本語訳）

十津川温泉

十津川温泉街の公衆浴場、庵の湯へようこそ。この場所の温泉は、300年ほど前に炭焼き職人が発見したと言われています。この浴場は、貴重でリラックスできる入浴体験を提供する十津川村の3つの温泉郷のひとつにあります。当施設は、日本のほとんどの温泉ではみられない「源泉かけ流し」にこだわっています。お湯の循環や再利用、再加熱、塩素消毒、希釈などを行わず、お客様に源泉から直接引かれた100%天然温泉に浸かっただけのようにしています。庵の湯は、炭酸水素ナトリウムと塩化物を豊富に含む、塩分濃度が高く高温を保つお湯で高く評価されています。ミネラルたっぷりのお湯は、心地良い入浴だけでなく、少量を飲むのにも適しています。

営業時間：午前8時30分～午後8時 火曜休業

料金：大人600円；小人300円

泉質：ナトリウム炭酸水素塩泉・塩化物泉

源泉数：2

源泉温度：60.2°C (140°F)

泉水濃度：100%

源泉からの距離：3.4km

湧出量（毎分）：867リットル

pH値：7.5

009-009

Tosenji Onsen

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 十津川温泉郷 / 湯泉地温泉

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Tosenji Onsen

Welcome to Izumiyu, the public bathing facility of the village of Tosenji Onsen. Tosenji has been a busy hot spring resort since the Muromachi period (1336–1573), when samurai warriors were said to recover from battle in these waters. This public bath belongs to one of three hot spring communities in Totsukawa that promise a rare and relaxing bathing experience. We are committed to using only free-flowing hot spring waters, something unheard of at most hot spring baths in Japan. We refrain from processes such as circulation, reuse, reheating, chlorination, or dilution, so that bathers can soak in water that is 100 percent natural, straight from the hot spring source. The baths here are prized for their alkaline sulfur waters and for offering relaxation in a historical setting.

Hours: 10:00 a.m. to 8:00 p.m. Closed on Tuesdays.

Fees: Adults ¥600; Children ¥300

Hot spring type: Alkaline sulfur spring

Number of spring sources: 2

Water temperature at source: 53.8°C (129°F)

Hot spring water concentration: 100 percent

Distance from spring source: 1.3 kilometers

Water flow per minute: 634 liters

pH scale reading: 8.9

上記解説文の仮訳（日本語訳）

湯泉地温泉

湯泉地温泉郷の公衆浴場、泉湯へようこそ。湯泉地は、武士たちが戦の傷を癒しに訪れたといわれる室町時代（1336-1573）から賑わう温泉リゾートです。この公衆浴場は、貴重でリラックスできる入浴体験を提供する十津川村の3つの温泉郷のひとつにあります。当施設は、日本のほとんどの温泉ではみられない「源泉かけ流し」にこだわっています。お湯の循環や再利用、再加熱、塩素消毒、希釈などを行わず、お客様に源泉から直接引かれた100%天然温泉に浸かっているようにしています。当施設は、アルカリ性硫黄泉のお湯と、歴史を感じながらくつろげる空間で高く評価されています。

営業時間：午前10時～午後8時 火曜休業

料金：大人600円；小人300円

泉質：アルカリ性硫黄泉

源泉数：2

源泉温度：53.8℃ (129°F)

泉水濃度：100%

源泉からの距離：1.3km

湧出量（毎分）：634リットル

pH値：8.9

009-010

Kamiyu Onsen

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 十津川温泉郷 / 上湯温泉

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Kamiyu Onsen

Welcome to the outdoor bathing facility of Kamiyu Onsen, privately maintained in this riverside location. The hot spring here is believed to have been discovered by a villager in the early eighteenth century. This public bath promises a rare and relaxing bathing experience. We are committed to using only free-flowing hot spring waters, something unheard of at most hot spring baths in Japan. We refrain from processes such as circulation, reuse, reheating, chlorination, or dilution, so that bathers can soak in water that is 100 percent natural, straight from the hot spring source. The baths here are prized for their sodium bicarbonate-rich waters and for offering relaxation in a secluded valley setting.

Hours: 9:00 a.m. to 5:00 p.m. Closed on Thursdays.

Fees: Adults ¥500; Children ¥300

Hot spring type: Sodium hydrogen carbonate spring

Number of spring sources: 1

Water temperature at source: 85°C (185°F)

Hot spring water concentration: 100 percent

Distance from spring source: 0.1 kilometers

Water flow per minute: 124 liters

pH scale reading: 8.0

上記解説文の仮訳（日本語訳）

上湯温泉

この川辺の場所で民間事業者によって管理されている上湯温泉の露天風呂へようこそ。この温泉は、18世紀初期に里人によって発見されたとされています。この公衆浴場は、貴重でリラックスできる入浴体験をお約束します。当温泉は、日本のほとんどの温泉ではみられない「源泉かけ流し」にこだわっています。お湯の循環や再利用、再加熱、塩素消毒、希釈などを行わず、お客様に源泉から直接引かれた100%天然温泉に浸かっていただけるようにしています。この温泉は、炭酸水素ナトリウム泉のお湯と、人里離れた溪谷の中でのくつろぎを楽しめることで高く評価されています。

営業時間：午前9時～午後5時、木曜休業

料金：大人500円；小人300円

泉質：ナトリウム炭酸水素塩泉

源泉数：1

源泉温度：85°C (185°F)

泉水濃度：100%

源泉からの距離：0.1km

湧出量（毎分）：124リットル

pH値：8.0

009-011

Totsukawa Onsen Cooperative

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 十津川温泉の泉質管理

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Totsukawa Onsen Cooperative

Totsukawa has long been known among hot spring enthusiasts for its excellent bathing facilities and the high quality of its bath waters. The history of hot springs in this area goes back centuries; one tale tells of a fifteenth-century samurai who recovered from battle wounds while using the baths as a hideout. Another of the springs was discovered next to a river by a charcoal maker looking for suitable wood some 300 years ago. The hot springs of Totsukawa are best known, however, for a more recent event: a dramatic new commitment.

Making a Promise

In 2004, representatives from three Totsukawa hot spring communities made a startling announcement: a declaration to rely entirely on free-flowing water at all of their facilities. It was a pledge not to circulate, reuse, reheat, chlorinate, or dilute the original spring water, a change virtually unheard of in Japan. This was no easy task. Most hot spring sources are located some distance from the bathing facilities, so hotels and other hot spring operators are usually forced to manipulate the waters in some way to maintain a steady temperature and quality, and they often reuse water for economic reasons. Thanks to the abundance of hot spring water in Totsukawa, however, and some clever methods of mixing water from different springs to maintain water temperature from the source to the baths, these hot spring communities have been able to keep their promise.

Keeping the Pledge

Tosenji Onsen is the oldest of Totsukawa's three hot spring communities, and is

believed to have begun operating in the Muromachi period (1336–1573). According to one legend, it was discovered years earlier by En no Gyoja (634–706), a revered figure said to have founded the ascetic practice of Shugendo. Today, the spring waters are distributed to a number of inns and guesthouses along the river valley, and the public bathhouses Izumiyu and Takinoyu accept day visitors to their indoor and outdoor facilities. The water consists mostly of sulfur spring water, a staple of hot springs throughout Japan.

Totsukawa Onsen is a large lakeside onsen community, with the spring water piped from 3.4 kilometers away to ten hotels and other facilities. Its baths are prized for salty sodium bicarbonate and chloride waters that maintain a high temperature and are also drinkable. Located in the village center is the public bathhouse Iorinoyu, which accepts day visitors to soak in the baths and enjoy an expansive view of the lake just outside.

Kamiyu Onsen, the smallest of the hot springs, is a privately operated, large *rotenburo* open-air bath that sits directly on the Kamiyunokawa River. It is said to have been discovered by a villager early in the eighteenth century. The stunning location, in a secluded valley surrounded by steep forest slopes, makes it well worth the drive to reach it. The spring waters are high in sodium bicarbonate.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

十津川温泉の泉質管理

古くから、十津川温泉は素晴らしい入浴施設の数々と良質の湯で温泉好きの人々に知られていました。この地域の温泉は何百年もの歴史を持ち、15世紀の武士がこの温泉を隠処として戦いの傷を癒したという逸話も残されています。また、約300年前、薪を探していた炭焼き職人によって、さらに別の温泉も川のそばで発見されました。しかし、十津川の温泉が最も有名になったのは、もっと最近の、十津川が新たに印象的な宣言を発表した際のことでした。

約束

2004年、3つの温泉郷の代表者は驚くべき発表をしました：すべての施設を完全に源泉かけ流しにするという宣言です。それは、源泉の循環、再利用、再加熱、塩素処理、希釈をしないことを誓うもので、日本では前代未聞でした。これは決して簡単なことではありませんでした。大抵の源泉は

入浴施設からある程度離れた場所にあるため、ホテルなどの温泉を運営する事業者は、お湯の温度や品質を一定に保つために何らかの処理をせざるを得ず、また、経済的な理由で水を再利用することも少なくありません。しかし、十津川の豊富な湯量と、源泉から浴場まで湯温を維持するために異なる源泉のお湯を混合する巧みな給湯法のおかげで、これらの温泉郷はこれまでこの約束を守り続けることができました。

誓いを守る

湯泉地温泉は十津川の3つの温泉郷の中で最も古く、室町時代（1336-1573）に開湯したとされています。しかし、修験道の開祖として尊敬される役行者（634-706）によってそれよりずっと前に発見されたとする説もあります。現在、これらの源泉の湯は、渓谷沿いにある数多くの旅館や民宿に配湯されており、泉湯と滝の湯という公衆浴場では、内湯と露天風呂の日帰り入浴が可能です。湯泉地の湯は主に、各地の温泉の定番である硫黄泉です。

十津川温泉は湖畔に広がる大規模な温泉郷で、3.4km離れた源泉からホテルなどの施設10軒にお湯が引かれています。この場所の温泉は、高温を保つ塩分濃度の高いナトリウム炭酸水素塩泉質の飲用も可能なお湯で高く評価されています。温泉郷の中心部にある公衆浴場「庵の湯」では、日帰りでお風呂、すぐ外に広がる湖の景色を楽しむことができます。

上湯温泉は、この地域では最も小さい温泉で、上湯川に直接面する私営の大きな露天風呂です。18世紀前半に里人によって発見されたと言われています。木々の茂る急斜面に囲まれる人里離れた渓谷という絶景のロケーションは、車を走らせてでも行く価値があります。この温泉はナトリウム炭酸水素塩泉です。

009-012

Tanize Suspension Bridge

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 谷瀬の吊り橋

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Tanize Suspension Bridge

The Tanize Suspension Bridge is Japan's longest steel suspension bridge used for local foot traffic. It is 297 meters long and stands 54 meters above the Totsukawa River, connecting Uenoji, where you are standing, to Tanize, the hamlet on the other side. For many years, villagers who lived on the far mountain had to cross the river on log bridges constructed at ground level. The bridges were useful but often washed away, as this area receives some of the heaviest rainfall in the country, particularly during typhoon season. The present bridge was built in 1954, after residents pooled their resources with government assets to fund construction. It was reinforced in 1972 to withstand strong winds and earthquakes, and has become one of the area's most popular landmarks.

Tanize, on the other side of the bridge, is a typical community of this area. Residents have produced a "Relaxed Walking Trail" map leading to hamlet highlights, among them an intimate café, private lodging facilities, a picturesque shrine, and an observation deck with a panoramic view of this bridge. The deck was built, residents say, at the spot where people from the hamlet would use hand signals to communicate with friends and family on the other side of the river in the days before the bridge was constructed.

- Cross the bridge at your own risk.
- Please do not run or intentionally shake the bridge.
- Please obey the security guards' instructions, issued when the bridge is crowded.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

谷瀬の吊り橋

谷瀬の吊り橋は、日本一長い鋼鉄製の吊り橋で、地元住民の生活用橋として利用されています。長さ297メートル、高さ54メートルのこの橋は、今あなたがいるここ上野地と対岸の谷瀬という集落を結んで十津川に架かっています。長年、向こう側の山に住む村人たちは、地上に架けられた丸太の橋で川を渡っていました。こうした橋は役に立ってはいたものの、この地域は国内でも有数の豪雨地帯で、特に台風の時期には流されることもよくありました。この吊り橋は住民が出し合ったお金を役所の予算に加えて調達した資金で1954年に建設されました。1972年には強風や地震に耐えられるよう補強され、今ではこの地域で最も人気のあるランドマークのひとつとなっています。

橋の反対側にある谷瀬は、この地域の典型的な集落です。住民たちが制作した集落の見どころを案内する「ゆっくり散歩道」というマップには、こじんまりとしたカフェや民宿、風情ある神社、この橋のパノラマの景色が望める展望台などが紹介されています。地元の人によると、この展望台は橋が架けられる前に、谷瀬集落の人たちが川のこちら側にいる友人や家族と手信号で連絡を取り合っていた場所に作られたそうです。

- 吊り橋は自己責任で渡ってください。
- 走ったり、わざと橋を揺らしたりしないでください。
- 混雑時は警備員の指示に従ってください。

009-013

Tanize

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 谷瀬 / 吊り橋、展望台

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Tanize

Tanize, a hamlet in the northern part of Totsukawa, is perched on a mountainside high above the Totsukawa River. For years it was an isolated community, as the river could only be crossed on log bridges that were frequently washed away by heavy rainfalls. The Tanize Suspension Bridge, a 297-meter-long, 54-meter-high span over the river, was completed in 1954, linking the hamlet to the opposite shore. It is the longest steel suspension footbridge in Japan that serves as a commuter route for local residents, and is one of the major tourist attractions of Totsukawa.

In many ways, Tanize is a typical hamlet of Totsukawa. The access road winds up a mountain until it reaches a few stretches of flat land created when steep slopes collapsed many years ago. The homes of the hamlet range from traditional Japanese architecture to more modern structures, and *yuzu* citrus trees seem to grow in every garden. The rice paddies here are noticeably large (for Totsukawa, at least), and a portion of the harvest ends up as highly valued sake.

Residents of Tanize are involved in several programs to attract newcomers and tourists to the hamlet. A map of a “Relaxed Walking Trail” was produced to show visitors the way to such local highlights as an intimate café, private lodging facilities in an old Japanese-style home, a picturesque old shrine that was built high on the mountain in 1838, and an observation deck that provides a panoramic view of the river and the suspension bridge far below. The deck was built, residents say, at the spot where people from the hamlet would use hand signals to communicate with friends and family on the other side of the river in the days before the bridge was constructed.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

谷瀬

十津川村北部に位置する谷瀬集落は、十津川を見下ろす高い斜面の上にあります。かつては川を渡る手段が大雨で流されることも多い丸太の橋しかなかったため、谷瀬は長年の間、孤立集落でした。谷瀬と対岸を結ぶ長さ297メートル、高さ54メートルの谷瀬の吊り橋は、1954年に完成しました。この橋は日本一長い鋼鉄製の歩道吊り橋で、住民の通勤路として利用されており、十津川村の観光名所のひとつにもなっています。

多くの点で、谷瀬は十津川村の典型的な集落です。山の中の曲がりくねった道路を登っていくと、昔急斜面が崩れてできたいくつかの平地にたどり着きます。集落の家々は伝統的な日本建築から近代的な建物まで様々で、どの庭にも柚子の木が植えられているようです。谷瀬の田んぼは（少なくとも十津川では）ひときわ大きく、ここで栽培された米の一部は高い評価を受けている日本酒の原料になっています。

谷瀬集落の住民たちは、移住者や観光客を誘致するためのさまざまな取り組みを行っています。「ゆっくり散歩道」というマップは、訪れた人々に、ごはんまりとしたカフェや古民家の民宿、1838年に山の高いところに建てられた風情ある神社、はるか下方に川と吊り橋のパノラマの景色を望む展望台といった集落の見どころを案内するために作られました。地元の人によると、展望台は橋が架けられる前に、谷瀬集落の人たちが川の反対側にいる友人や家族と手信号で連絡を取り合っていた場所に作られたそうです。

009-014

Local Foods of Totsukawa

十津川村インバウンド受入協議会

【タイトル】 十津川村の郷土食

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Local Foods of Totsukawa

The people of Totsukawa dealt with their isolation by developing their individual skills and knowledge in a wide range of fields, from swordsmanship to growing self-sustaining crops on their limited land, and finding ways to make the most of their limited harvest.

100-Flower Honey

Among the specialized food products that are prized among local residents is “100-Flower Honey.” The name comes from the way Japanese honeybees drink the nectar little by little from a variety of plants, whereas imported Western bees tend to only take nectar from one type of flower in a given season. The 100-Flower Honey produced naturally by local residents is highly prized for its nutritional value as well as its rich flavor.

Yubeshi

In most parts of Japan, the word *yubeshi* refers to a sweet confection that is often eaten along with Japanese tea. It is made with *yuzu*, an aromatic citrus fruit that is used to bring out accompanying flavors. In Totsukawa, however, *yubeshi* is a preserved food, though also made with *yuzu*. It was once eaten as an energy booster by laborers in the mountains, as well as an accompaniment to winter meals. Today, each family has its own *yubeshi* recipe that has been passed down over generations, and it is eaten as a snack, perhaps sliced with cheese, or as a mealtime accompaniment.

How to Make Yubeshi

Yubeshi is made by hollowing out a *yuzu* fruit, leaving only the peel, and filling it with a mixture of ingredients, of which the main one is miso bean paste. Although no two recipes are exactly alike, one Totsukawa family whose *yubeshi* is highly regarded fills the empty *yuzu* peel with a mix of miso, shiitake mushroom, sesame, seven spices, bonito shavings, sugar, peanuts, canned tuna, canned salmon, monosodium glutamate, and mirin cooking sake. It is steamed for two hours, then put out to dry for one to two months in the winter until cured.

Ikola: An Intimate Farmers Market and Communal Space

Ikola, which means “Let’s go!” in the local dialect, is a homey, one-room regional center where local residents take turns selling their products (including rice balls, fresh vegetables, jams, and preserved foods) to other residents, restaurateurs, and visitors. On a typical day, vendors will chat with their customers over coffee and tea as they finalize a sale. This is an excellent place to make friends, get a feel for local life, and pick up some unusual souvenirs.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

十津川の郷土食

十津川の人々は、他の地域から隔絶した環境を通じて、剣術や、狭い農地面積で自足できるだけの作物を栽培し、限りある収穫物を最大限に活用する方法を見つけるなど、幅広い分野で独自の技術や知識を発展させました。

百花蜜

地元で珍重されている特産品に「百花蜜」があります。この名称は、日本ミツバチが様々な植物の蜜を少しずつ集めることにちなんで付けられました：対して、西洋ミツバチはその時々には咲いている一種類の花の蜜を集める傾向があります。地元の人々によって自然な方法で生産された百花蜜は、高い栄養価と豊かな風味で珍重されています。

ゆうべし

日本のほとんどの地域では、「ゆべし」という言葉は日本茶と一緒に食べる甘いお菓子を指します。このお菓子は風味を出すために柚子という味香り高い柑橘類を使って作られます。しかし、同様に柚子を使いはするものの、十津川のゆうべしは保存食です。かつては山中で働く労働者のエネルギー

ー補給食や、冬のごはんのおともとして食べられていました。現在、各家庭が代々伝わるレシピを持つこのゆうべしは、軽食（薄く切ってチーズと合わせるなど）やごはんのおともとして食べられています。

ゆうべしの作り方

ゆうべしは、柚子をくりぬいて皮だけを残し、味噌を中心とした様々な具材を混ぜ合わせたものをその中に詰めて作ります。どのレシピも唯一無二のものですが、高い評価を集める十津川のある家庭のゆうべしレシピでは、中身をくり抜いた柚子の皮に、味噌、しいたけ、ごま、七味、かつお節、砂糖、ピーナッツ、ツナ缶、鮭缶、味の素、みりんを混ぜたものを詰めます。それを2時間蒸した後、1～2カ月間冬の外気にさらして熟成させます。

イコラ： アットホームなファーマーズ・マーケットとコミュニティスペース

地元の方言でLet's go!という意味の「いこら」は、アットホームな一室空間の地域センターで、地元の人々が交代で、自分たちの作った商品（おにぎりや新鮮な野菜、ジャム、保存食など）を、地域の人たちや飲食店関係者、観光客に販売しています。普段ここに行くと、販売者がコーヒーやお茶を飲みつつお客さんとおしゃべりをしながら品物を売っている姿が見られます。いこらは、友達を作ったり、地域の暮らしを身近に感じたり、珍しいお土産を買ったりするのに最適な場所です。

地域番号	010	協議会名	鉄の道文化圏推進協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
010-001	奥出雲たたらと刀剣館 / エントランス・ロビー 『奥出雲 たたらと刀剣間』+『鉄の道文圏・6 館の案内』+『古代出雲國を支えた製鉄』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-002	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『たたら製鉄 の変遷』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-003	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『奥出雲の 製鉄史と鉄師』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-004	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『奥出雲町 内の製鉄関連歴史』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-005	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『奥出雲の 近世企業たたらの特徴』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-006	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『近世企業た たらの作業工程』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-007	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『鉦場・四日 押』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-008	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『鉦場・三日 押』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-009	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『大鍛冶場』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-010	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『鍛冶場』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-011	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『砂鉄採取』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-012	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『たたら炭』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-013	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『企業たたら の衰退』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-014	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『今操業して いる日刀保たたら』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-015	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『一代で使 用される原料』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-016	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『精錬から玉 鋼の作りまで』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）
010-017	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『鋳』		250ワード以 内	その他（アプリQR コード）

010-018	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『一代でできる製品』	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-019	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『小林家の歴史』	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-020	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『小林三兄弟の略歴』	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-021	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『日本刀の科学』	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-022	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『日本刀（刀匠・刀剣史）』	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-023	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『日本刀（美術刀剣の解説）』	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-024	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『鉦の地下構造の断面』1階（地下は新規提案にて）	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-025	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『ふいごの種類と変遷』	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-026	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『鉦と天秤ふいご』大きいパネルではなく、体験モデルの説明	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-027	奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『日本刀の作刀工程・研磨工程』	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-028	菅谷たたら山内 / 菅谷たたら山内	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-029	菅谷たたら山内 / 鋼づくり	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-030	菅谷たたら山内 / 高殿	251～500ワード	その他（アプリQRコード）
010-031	菅谷たたら山内 / 元小屋	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-032	菅谷たたら山内 / 桂の木	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-033	菅谷たたら山内 / 三軒長屋	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-034	鉄の歴史博物館 / 博物館（概要文・紹介文）	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-035	和鋼博物館 / 倭国一の研究と貢献について	250ワード以内	看板
010-036	和鋼博物館 / 和鋼博物館へようこそ + 映像	250ワード以内	看板

010-037	和鋼博物館 / 日本遺産紹介コーナー	250ワード以内	看板
010-038	和鋼博物館 / 第1展示	250ワード以内	看板
010-039	和鋼博物館 / 今佐屋山遺跡 鉄滓	250ワード以内	看板
010-040	和鋼博物館 / 733年 出雲國風土記書写	250ワード以内	看板
010-041	和鋼博物館 / 鉄山必要記事	250ワード以内	看板
010-042	和鋼博物館 / 鉄穴流し	250ワード以内	看板
010-043	和鋼博物館 / たたら炭・森林資源	250ワード以内	看板
010-044	和鋼博物館 / 地下構造と築炉用道具	250ワード以内	看板
010-045	和鋼博物館 / 操業の工程	250ワード以内	看板
010-046	和鋼博物館 / 製錬道具・鋳の粉碎・玉鋼選別	250ワード以内	看板
010-047	和鋼博物館 / 金屋子神・金屋子神社	250ワード以内	看板
010-048	和鋼博物館 / 第3展示エリア	250ワード以内	看板
010-049	和鋼博物館 / 安来港（江戸時代）	250ワード以内	看板
010-050	和鋼博物館 / 鋼の流通	250ワード以内	看板
010-051	和鋼博物館 / 角炉（模型）	250ワード以内	看板
010-052	和鋼博物館 / 刃物産地（新潟三条）流通	250ワード以内	看板
010-053	和鋼博物館 / たたらから特殊鋼会社への系譜	250ワード以内	看板
010-054	和鋼博物館 / ハガネ技術革新（産業遺産）	250ワード以内	看板
010-055	和鋼博物館 / 刀鍛冶作刀風景模型	250ワード以内	看板
010-056	和鋼博物館 / 日本刀体験コーナー	250ワード以内	看板

010-057	和鋼博物館 / 4つの体験（顕微鏡・鉄穴流し・ふいご・玉鋼の虹）	250ワード以内	看板
010-058	和鋼博物館 / 第1展示室 中央たたら模型	250ワード以内	看板
010-059	奥出雲たたらと刀剣館 / 中央たたら断面模型 2階「たたら炉の平面図・たたら炉の断面図」	250ワード以内	その他（アプリQRコード）
010-060	奥出雲たたらと刀剣館 / 「大和大蛇」神話のモニュメント	250ワード以内	その他（アプリQRコード）

010-001

Okuizumo Tatara and Sword Museum

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / エントランス・ロビー 『奥出雲たたらと刀剣間』+『鉄の道文圏・6館の案内』+『古代出雲國を支えた製鉄』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Okuizumo Tatara and Sword Museum

The Okuizumo Tatara and Sword Museum presents the history of *tatara* ironmaking and the ongoing practice of traditional swordsmithing. Okuizumo is the only place where the *tatara* smelting method is still practiced, and this museum is one of several facilities dedicated to the region's ironmaking heritage.

The *tatara* method of ironmaking is unique to Japan and dates to the latter half of the sixth century. A charcoal-fed clay furnace is used to smelt iron sand over the course of several days, producing a multi-ton mass of iron, slag, and steel called a “bloom.” This method is the only way to produce *tamahagane* steel, which is prized by Japanese swordsmiths.

The exhibits in the first half of the museum introduce the rise and eventual decline of the *tatara* method. The museum's second half focuses on contemporary efforts to revive *tatara* smelting to create steel for modern swordsmiths. *Tatara* ironmaking was more than a production method; it was also an industry that shaped the cultures of Okuizumo and the broader San'in region (Shimane and Tottori Prefectures).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

奥出雲たたらと刀剣博物館

奥出雲たたら刀剣博物館は、たたら製鉄の歴史と刀の伝統工芸の保存をテーマにした博物館。

奥出雲は現在もたたら製鉄が行われている唯一の地域であり、この博物館は地域の製鉄遺産を伝えるための施設のひとつである。

たたら製鉄は6世紀後半に始まった日本独自の製鉄法である。土炉を使って砂鉄と木炭を数日間かけて錬り、数トンにもなる鉄、鋼、スラグの鋳を生成する。この方法は、日本の刀匠が求める貴重な玉鋼を製造する唯一の方法である

博物館の前半の展示では、たたら製鉄の隆盛と衰退を紹介している。博物館の後半では、日本刀用の鋼を作るために行われた現代の復活の取り組みに焦点を当てている。しかし、たたら製鉄は単なる生産方法ではなく、奥出雲や山陰地方（島根県、鳥取県）の文化を形成する産業でもあった。

010-002

Changes in Iron Manufacturing

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『たたら製鉄の変遷』
【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Changes in Iron Manufacturing

Iron-smelting technology originated in Anatolia (now Turkey). It reached Japan by the latter half of the sixth century, arriving via China and the Korean Peninsula.

Archaeological remains indicate that the earliest known smelting of iron in Japan was done using iron ore. However, accessible deposits of iron ore were scarce in this region, and the smelting process was soon adapted to take advantage of naturally abundant iron sand.

Ancient *Tatara*

Early *tatara* furnaces were built outdoors and powered by bellows made from animal skin. Iron production in western Japan was originally concentrated around the Seto Inland Sea, but the center of production shifted to the mountains of the San'in region (Shimane and Tottori Prefectures) sometime between the eleventh and thirteenth centuries.

Early Modern *Tatara*

Populations grew over the subsequent centuries, creating greater demand for iron with which to make farming implements, household goods, and weapons. Larger and larger *tatara* furnaces were created to meet this demand, and more powerful foot-operated bellows were introduced to feed them. These advances ultimately led to the peak of *tatara* ironmaking in the eighteenth and nineteenth centuries.

Modern *Tatara*

Western reverberatory furnaces were imported in the late nineteenth century, bringing

about a revolution in the smelting industry. Traditional ironworks struggled to compete, and their engineers sought to adapt the established methods for use with brick furnaces called *kakuro*. This shift marked the end for *tatara* iron production, and the last clay furnaces were retired by the early 1920s.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

製鉄の変遷

鉄の製錬技術は、アナトリア（現在のトルコ）を起源とし、中国、朝鮮半島を経て、6世紀後半には日本に伝わった。考古学的な遺跡から、日本における最古の製鉄は鉄鉱石を用いたものであったことが判明しているしかし、この地域には利用しやすい鉄鉱石の鉱床が乏しかったため、すぐに自然に豊富にある砂鉄を利用する製法に変更された。

古代のたたら

初期のたたら炉は屋外に作られ、動物の皮で作られたふいごで動力を得ていた。西日本における鉄の生産は、もともと瀬戸内海周辺に集中していたが、11世紀から13世紀のいずれかの時に山陰地方（島根県、鳥取県）の山間部に中心が移った。

近代のたたら

その後何世紀にもわたって全国で人口が増加し、農具、生活用具や武器を作るための鉄の需要が生まれた。この需要を満たすために、たたら炉はますます大きくなり、より強力な足踏み式ふいごが導入された。これらの進歩は、最終的に18世紀から19世紀にかけてのたたら製鉄の最盛期をもたらした。

現代のたたら

西洋の反射炉は19世紀後半に輸入され、製錬業界に革命をもたらせた。既存の伝統的な製鉄所は競争に苦戦し、技術者たちは、既存の製法を角炉と呼ばれるレンガ炉に適応させようとした。この転換により、たたら製鉄は終焉を迎えた。1920年代初頭までに、最後のたたら炉が引退した。

010-003

Tatara Ironmaking Families in Okuizumo

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『奥出雲の製鉄史と鉄師』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Tatara Ironmaking Families in Okuizumo

During the Edo period (1603–1867), Japan was divided into hundreds of domains governed by samurai lords called “daimyo.” To bolster his domain’s economy, each daimyo often granted individual families exclusive operating rights in a given industry. In exchange, the domain received a portion of the profits.

Beginning in the early 1700s, all the ironworks in Okuizumo and its surrounding area came to be managed by nine families. Although it had once been possible for any landowner to engage in iron production, in 1726 these families were officially licensed as the sole ironworks proprietors (*tesshi*) of the Matsue domain, which fell under the governance of daimyo Matsudaira Nobusumi (1698–1731).

Each family was responsible for overseeing all aspects of the *tatara* ironmaking process: gathering iron sand, managing forests to ensure a reliable supply of charcoal, recruiting skilled furnace operators, and arranging shipments of smelted metal. Three of the four wealthiest *tatara* families (the Sakurai, Itohara, and Bokura) lived within the boundaries of present-day Okuizumo, while the Tanabe family lived nearby, in what is now Unnan. Today, many of these families’ private estates and gardens are open to the public.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

奥出雲のたたら製鉄一族

江戸時代（1603-1867）、日本は数百の藩に分割され、それぞれの藩は大名によって統治されていた。藩の経済を強化するため、各大名はしばしば特定の産業における独占的な営業権を個々の家に与えた。この特権と引き換えに、藩は利益の一部を受け取った。

1700年代初頭から、奥出雲とその周辺の地域のすべての製鉄所は9つの家によって管理されるようになった。かつては地主であれば誰でも製鉄業を営むことができたが、1726年、大名・松平宣維（1698～1731）の統治下にあった松江藩から正式に製鉄所経営者（鉄師）の免許を受けたのである。

各家は、砂鉄の採取、木炭の安定供給のための森林管理、熟練した炉工の採用、製錬された金属の出荷手配など、すべての工程を監督する責任を負っていた。たたら製鉄で最も裕福だった4家のうち3家（櫻井家、絲原家、ト蔵家）は、現在の奥出雲町内に、田部家はその近くの現在の雲南市に住んでいた。彼らの私邸や庭園の多くは、現在一般公開されている。

010-004

Historic Ironmaking Sites in Okuizumo

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『奥出雲町内の製鉄
関連歴史』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Historic Ironmaking Sites in Okuizumo

This map shows many of the historic sites related to *tatara* ironmaking in Okuizumo. Each red circle marks the location of an ironworks, a site where iron sand was gathered, or a residence of one of the proprietor families. Looking at the map, it is easy to see the prevalence of ironmaking in the region.

Tatara furnaces were originally small operations that could be relocated as needed. But, beginning in the 1700s, the small-scale production centers were replaced by large, permanent facilities. Smelting operations took place in buildings with high, slanted ceilings to accommodate the roaring flames of large furnaces. Rather than simply being worksites, ironworks came to support entire villages called *sannai*.

Now that many of these buildings and *sannai* are gone, it can be difficult to visualize how wide-reaching the industry once was. However, it is possible to see the impact the industry had on the physical landscape: entire mountains were leveled in the process of gathering iron sand. Rather than letting this leveled land sit unused, farmers converted it to terraced agricultural fields. An example of this altered landscape can be seen from a viewing platform near Ōhara Shinden, marked on the southeast portion of this map, on land previously owned by the Itohara family.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

奥出雲の製鉄史跡

奥出雲のたたら製鉄に関する史跡を地図にした。赤丸は、製鉄所、砂鉄採取場、経営者一族の屋敷跡を示す。この地図を見ると、この地域で製鉄が盛んであったことが一目瞭然である。

たたら製鉄所はもともと必要に応じて移転できる小規模な操業であった。しかし、1700年代に入ると、小規模生産に代わって、より大規模で恒久的な施設が建設されるようになった。製錬作業は、大規模な炉の轟々と燃え盛る炎を入れるスペースを確保するために、高く斜めの天井を持つ建物で行われるようになった。各製鉄所は単に作業場というだけでなく、山内と呼ばれる集落に囲まれていることが多く、そこでは製鉄が労働者とその家族を支える生活様式となっていた。

多くの建物や山内が失われた今、かつての産業がどれほど広範囲に及んでいたかをイメージすることは難しいかもしれない。しかし、この産業が物理的な景観に与えた影響を見ることはできる：たたら製鉄に必要な砂鉄を大量に採取するために、山全体が平らにされ、農民たちはこの平らにされた土地を放置するのではなく、段々畑に変えた。この地図の南東にある大原新田付近の展望台は以前は絲原家が所有していた土地で、その一例を見ることができる。

010-005

Restructuring Ironmaking in the Eighteenth Century

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『奥出雲の近世企業
たたらの特徴』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Restructuring Ironmaking in the Eighteenth Century

The government of the Matsue domain set about reforming its ironmaking industry in 1726. In addition to appointing nine experienced families as proprietors, domain officials promoted greater cooperation between farmers and ironworking communities.

Prior to the reforms, farmers and ironworkers often quarreled over natural resources. A common method for gathering iron sand filled nearby irrigation canals with dirt and rocks, disrupting farming and angering the farmers. To address rising tensions between the two groups, the government banned the practice for a period in the seventeenth century.

The officials of the Matsue domain held specific families accountable for these disruptions and ordered them to create a more equitable system for managing natural resources. The resulting compromise allowed the ironworkers to continue gathering iron sand in the mountains, but only from late autumn to early spring.

Once the proprietors had secured a stable supply of iron sand and charcoal, they were able to focus on improving the quality and quantity of their output. As its reputation grew, more and more of their iron and steel was loaded onto boats or into saddlebags to be sent to blacksmiths around the country.

This success caused ironworks to grow in scale. For example, Itohara family records indicate that in 1875, around 1,200 workers were employed to handle the operations

and output of a single furnace. Counting family members, as many as 5,000 or 6,000 people lived or worked at the site.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

18世紀の製鉄改革

松江藩は1726年から製鉄業の改革に着手した。経験豊かな9家を藩主に任命したほか、藩役人は農家と鉄工所の協力体制を強化した。

改革以前は、農民と鉄工は天然資源をめぐるしばしば対立していた。一般的な砂鉄の採取方法では、近くの用水路を土石で埋め尽くし、農作業に支障をきたした。これが農民の怒りを買い、17世紀には一時期禁止された。

松江藩の役人たちは、耕作を中断させた特定の家族に責任を負わせ、天然資源を管理するためのより責任あるシステムを作るよう指示した。その結果、製鉄所は山間部の原料に直接アクセスできるようになったが、採掘は晩秋と早春に限られるようになった。

砂鉄と木炭の安定供給が確保されると、経営者たちは生産物の質と量の向上に注力できるようになった。製品の評判が高まるにつれて、彼らは船や馬に乗って全国の鍛冶屋に鉄や鋼を送るようになった。

この成功により、鉄工所は規模を拡大していった。たとえば、糸原家の記録によれば、1875年には、ひとつの炉の操業と生産高を処理するために約1,200人の労働者が働いていた。家族従業員も加えると、鉄工所関係者の総数は5,000人から6,000人にのぼると思われる。

010-006

Tatara Ironmaking as a Commercial Enterprise

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『近世企業たたら
の作業工程』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Tatara Ironmaking as a Commercial Enterprise

Beginning in the eighteenth century, *tatara* ironworks adopted a more highly integrated production process. Most of the smelted metal made in the furnace needed to be refined before it could be sold. To facilitate this, many ironworks opened forges where low-grade iron could be turned into sellable iron ingots.

The two main facilities in this new arrangement were the *takadono* workshop and the *ōkajiba* forge. At the large *takadono* workshop, crews led by a foreman (*murage*) smelted raw materials into iron and steel. When this process was finished, pig iron and other low-grade metals were separated for refinement at the *ōkajiba* forge.

The blacksmiths remelted and hammered the iron to reduce the carbon content, forging it into flat bars. In Japanese, these bars were referred to as *waritetsu* (“breakable iron”) or *hōchōtetsu* (“kitchen knife iron”). This refined iron was shipped throughout the country and made into a wide range of objects, including agricultural tools, cooking utensils, and matchlock firearms. The dual industries of both smelting and refining helped elevate the Okuizumo region to prominence in the iron trade.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

商業企業としてのたたら製鉄

18世紀に入ると、たたら製鉄所はより高度に統合された生産工程を採用した。製錬された金属のほとんどは、販売する前に、より高品質の製品に精錬される必要があった。これを容易にするため、

多くの製鉄所は低品位の鉄を販売可能な鉄塊に変える鍛冶場を開いた。

この新しい配置の2つの主要な施設は、高殿作業場と鍛冶場であった。大きな高殿作業場では、村下を中心とした作業員が炉を操作し、原料を製錬して鉄や鋼を作った。この工程が終わると、銑鉄やその他の低級金属をは鍛冶場で精錬するために分離された。

鍛冶屋は鉄を再溶解し、槌で叩いて炭素を減らし、鑄塊と呼ばれる平らな棒に鍛造した。この鑄塊を日本語では「割鉄」または「包丁鉄」と呼んだ。この精錬された鉄は全国に出荷され、農具、調理器具、マッチロック式火縄銃など、さまざまなものに使われた。製錬と精錬の両産業によって、奥出雲地方は鉄の交易で一躍脚光を浴びたのである。

010-007

Smelting: Four-Day Indirect Method

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『鉦場・四日押』
【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Smelting: Four-Day Indirect Method

There were two different methods of operating a *tatara* furnace: a three-day “direct” method (*mikka-oshi* or *ker-oshi*) and a four-day “indirect” method (*yokka-oshi* or *zuku-oshi*). In both cases, the inner walls of the furnace gradually melted during operation, and the furnace had to be rebuilt each time iron was smelted.

The four-day indirect method was the dominant method of iron production during the eighteenth and nineteenth centuries. It used a type of iron sand called *akome*, which is taken from rock that is rich in iron and magnesium with high levels of titanium and other impurities. As smelting progressed, molten pig iron oozed out through holes in the bottom of the furnace. Once cooled, the pig iron was collected and taken to the *ōkajiba* forge for refining.

An example of the indirect method can be found in the records of Ataidani Ironworks (Gōtsu, Shimane Prefecture). A single operation of the furnace in 1889 consumed 18 metric tons of *akome* iron sand and 18 metric tons of charcoal to produce 4.8 metric tons of pig iron. Of the iron sand used, only 27 percent was converted to usable products; the rest became slag. As evidenced by this record, the indirect method was not as efficient as the three-day direct method that later replaced it.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

製錬：四日間接法

たたら炉の操業方法には、四日間接法（四日押し、銑押し）と三日直接法（三日押し、鋳押し）の二種類があった。いずれも操業中に炉の内壁が徐々に溶けていくため、工程が始まるたびに新しい炉を築かなければならなかった。

四日間接法は18世紀から19世紀にかけて主流だった製鉄法である。鉄分とマグネシウムに富み、チタンやその他の不純物を多く含む岩から採取されるアコメと呼ばれる砂鉄を使用した。製錬が進むと、溶けた銑鉄が炉底の穴からにじみ出て回収される。冷却された間接法の銑鉄は回収され、鍛冶場（かじば）に運ばれて精錬された。

間接法の例は、谷炉製鉄所（島根県江津市）の記録に見られる。1889年（明治22年）、1回の操業で18トンのアコメと18トンの木炭を消費し、4.8トンの銑鉄を生産した。砂鉄の27%弱が使用可能な製品に変わり、残りはスラグとなった。この記録から明らかのように、間接法は後にとって代わった三日間直接法ほど効率的ではなかった。

010-008

Smelting: Three-Day Direct Method

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『鉦場・三日押』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Smelting: Three-Day Direct Method

The three-day direct method of smelting was only practiced in the Okuizumo region. Through years of trial and error, ironworkers were able to improve on the four-day method and develop a process that required only three days.

The direct smelting method used a superior iron sand called *masa* in combination with *akome* iron sand. *Masa* iron sand, which comes from acidic rock, has fewer impurities but melts at a much higher temperature. Unlike the indirect method, which produced molten pig iron that oozed out from the furnace, the main product of the direct method remained inside the furnace as a large, porous lump of iron and steel called a *ker*a. At the end of an operation, the furnace would be dismantled and the *ker*a smashed apart and sorted by grade. This was the only method capable of producing *tamahagane* steel, which is vital to the production of Japanese swords.

Records from the Kanna Ironworks (Okuizumo, Shimane Prefecture) show the materials consumed during a single instance of the three-day method in 1901: 13.5 metric tons of iron sand (*masa* and *akome*) and roughly 14 metric tons of charcoal were used to produce 2.1 metric tons of pig iron and a *ker*a weighing 2 metric tons, meaning that about 30 percent of the iron sand was converted to usable metal.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

製錬：三日直接法

三日直接製錬は奥出雲地方でしか行われていなかった。長年の試行錯誤の末、鉄工職人たちは4日法を改良し、3日で済む製法を開発した。

直接法では、マサと呼ばれる優れた砂鉄とアコメ砂鉄が併用された。マサは酸性の岩石から採れるため不純物が少ないが、溶ける温度ははるかに高い。溶けた銑鉄が炉の外ににじみ出る間接法とは異なり、直接法の製品は、ケラと呼ばれる多孔質の大きな鉄鋼塊が炉内に残る。操業が終わると、炉は解体され、ケラは粉々に砕かれ、さまざまな等級の金属に選別される。これが、刀鍛冶が珍重する玉鋼を製造できる唯一の方法だった。

鉄穴炉製鉄所（島根県奥出雲町）の記録には、1901年に直接法を適用したことが記されている。13.5トンの砂鉄（マサとアコメ）と約14トンの木炭を使い、2.1トンの銑鉄と2トンのケラを生産した。つまり、砂鉄の30パーセントが使用可能な製品に変換されたことになる。

010-009

Refining at the *Ōkajiba* Forge

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『大鍛冶場』
【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Refining at the *Ōkajiba* Forge

The *ōkajiba* forge was essential to *tatara* ironmaking. By refining low-grade iron, ironworkers were able to improve the quality of the metal and create ingots of iron that blacksmiths around the country could forge into tools and other everyday objects.

The first step in producing iron ingots was to melt down the pig iron, which was stiff and brittle. This was done in a small furnace fed by hand-operated bellows. The melting process reduced the carbon content of the iron from approximately 3 percent down to roughly 1 percent. This partially decarbonized pig iron was then melted for a second time, further reducing the carbon content to around 0.1 percent. Finally, the newly malleable iron was hammered on an anvil to remove any other impurities.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大鍛冶場での精錬

大鍛冶場は、たたら製鉄に欠かせない施設だった。低品位の鉄を精錬することで、鉄の質を向上させ、全国の鍛冶屋が道具や日用品に鍛えられる鉄の塊を作ることができた。

鉄の塊製造の最初のステップは、手で操作するふいごを備えた小さな炉で、硬くてもろい銑鉄を溶かすことだった。この工程で、炭素含有量は約3%から約1%まで減少した。次に、この部分的に脱炭酸された銑鉄を2回目に溶かし、炭素含有量をさらに0.1パーセント程度まで減少させた。最後に、他の不純物を取り除くため、金床の上でハンマーで叩いて溶解させた。

010-010

Blacksmith Shops

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『鍛冶場』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Blacksmith Shops

Blacksmiths were the crucial link in a countrywide production chain that turned iron sand and charcoal into metal tools and weapons. Although some of the earliest independent blacksmith workshops specialized in making swords, there were also workshops dedicated to matchlock firearms or everyday tools such as farming equipment, knives, and scissors.

Given the limited quantity and steep cost of high-grade steel, blacksmiths developed ways to use the scarce material more efficiently. One method was to take a small piece of steel and join it to the end of an iron tool. Once finished, the tool's edge had the sharpness and durability of steel at a fraction of the cost of full-steel construction. This method was frequently used to create farming implements, such as the blades for hoes and sickles (displayed below).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鍛冶屋

鍛冶屋は、砂鉄や木炭を金属製の道具や武器に変える全国的な生産チェーンの重要な役割を担っていた。初期の独立した鍛冶屋は刀剣を専門としていたが、マッチロック式火縄銃や農具、ナイフ、ハサミなどの日用工具を専門に扱う店もあった。

高級鋼の生産量には限りがあり、価格も高かったため、鍛冶屋は希少な材料を効率的に使う方法を開発した。そのひとつが、鋼鉄の小片を鉄の工具の先端に接合する方法だった。一度仕上げて研げば、工具の刃先は鋼の切れ味と耐久性を持ち、完全な鋼鉄製に比べればほんのわずかなコ

ストで済んだ。この技法は、鍬や鎌の刃(下のケース)のような農具を作るのに頻繁に使われていた。

010-011

Kanna-Nagashi: Gathering Iron Sand

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『砂鉄採取』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

***Kanna-Nagashi*: Gathering Iron Sand**

The iron sand used for smelting was originally gathered by sifting through riverbeds, where it accumulated naturally. As wind and rain gradually eroded an iron-bearing mountainside, the iron-rich sediment was carried downstream. However, this naturally occurring stock of iron sand was insufficient for large-scale iron production. In the sixteenth and seventeenth centuries, ironworking communities gradually developed a new technique called *kanna-nagashi* (roughly translated as “water flowing between pools”).

Instead of waiting for the natural erosion process to occur, workers chipped away bit by bit at an exposed cliff face, knocking the sediment into a purpose-built canal. This artificial river carried the dirt and iron sand down to the mountain’s base, where it could be separated using a series of four progressively lower pools. As water flowed through the pools, the lighter sediment was carried out through openings between them, while the heavier iron sand sank to the bottom. The iron sand was then collected, dried, and transported to the production site.

Roughly 200 metric tons of sediment had to be filtered for each metric ton of iron sand, and this artificial increase in sediment flowing downstream disrupted irrigation systems and damaged rice fields. As a result, *kanna-nagashi* was banned in the Matsue domain from 1610 to 1636. Even after the ban was lifted, ironworks were only allowed to gather iron sand between September and March to avoid the main agricultural season.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

かなな流し：砂鉄採り

製錬に使われる砂鉄は、当初は河川敷に自然に堆積したものをふるいにかけて集めていた。山の斜面が川や雨によって少しずつ削られ、鉄分を多く含む土砂が下流へと運ばれていったのである。しかし、大規模な製鉄を行うには、この自然発生的な砂鉄のストックでは不十分だった。16世紀から17世紀にかけて、製鉄業を営む地域は、「かなな流し」と呼ばれる新しい技術を開発した。

自然の浸食プロセスを待つ代わりに、作業員たちは露出した崖の表面を少しずつ削り、土砂を専用の運河に叩き込んだ。この人工的な川は、土砂を平地まで運び、徐々に低くなる4つのプールを使って分離することができた。水が流れるにつれて、軽い土砂はプールとプールの間の隙間から運び出され、重い砂鉄は底に沈んだ。その後、砂鉄は回収され、乾燥され、生産現場に運ばれた。

1トンの砂鉄を集めるには、およそ200トンの土砂をろ過しなければならず、下流に流れる土砂が人為的に増加し、灌漑設備が混乱し、水田が被害を受けた。そのため、松江藩では1610年から1636年まで、かなな流しが禁止された。禁止令が解かれた後も、鉄工所が砂鉄を採取できるのは、農繁期を避けた9月から3月の間だけだった。

010-012

Charcoal Production

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『たたら炭』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Charcoal Production

In the *tatara* ironmaking process, charcoal acts as both a fuel and a reducing agent. The burning of charcoal produces carbon monoxide, which reacts with and removes the oxygen from iron oxide (the largest component of iron sand) to create elemental iron.

Charcoal for *tatara* ironmaking was made from many different types of wood, including oak, pine, and chestnut. The wood was made into charcoal by heating it to hundreds of degrees Celsius in a low-oxygen environment that prevented it from catching fire. The charcoal used to fuel the furnace in the *takadono* workshop, like the larger pieces displayed below, and the charcoal used in *ōkajiba* forges (middle) and households (right) were made using different methods for different purposes. *Tatara* charcoal was heated longer at a lower temperature, leaving more volatile organic matter and a lower fixed carbon content, which caused it to burn faster and hotter.

Given the cost of transporting large quantities of timber for charcoal, ironworks were often located near forested mountains where wood could easily be gathered. The proprietor was responsible for managing the forest resources sustainably by harvesting wood in 30-year cycles. Operating a single *tatara* furnace for one year required around 110 hectares of forest, meaning that 3,300 hectares were chopped down and turned to charcoal over the course of a single cycle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

木炭の製造

たたら製鉄では、木炭は燃料と還元剤の両方の役割を果たす。木炭を燃やすと一酸化炭素が発生し、これが酸化鉄（砂鉄の最大成分）と反応して酸素を除去し、元素状鉄を生成する。

たたらの木炭は、ナラ、マツ、クリなどさまざまな木から作られた。

木は、火がつかないように低酸素の環境で数百度まで加熱して炭にした下の大きな木片のように高殿の炉の燃料として使われた木炭と、大鍛冶場(中)や家庭で使われた木炭(右)は、用途に応じて異なる方法で作られた。たたら炭は低温で長時間加熱されるため、揮発性有機物が多く残り、固定炭素の含有量が少なく、より早く、より熱く燃えた。

木炭用の木材を大量に輸送するにはコストがかかるため、製鉄所は森林に覆われた山の近くに立地することが多かった。30年周期で伐採される森林資源を持続的に管理することは、経営者の責任であった。たたら炉1基を1年間稼働させるのに必要な森林面積は約110ヘクタールで、1サイクルで3,300ヘクタールが伐採され、炭になったことになる。

010-013

The Decline of *Tatara* Ironmaking

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『企業たたら』の衰退』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

The Decline of *Tatara* Ironmaking

In the late 1800s, the Japanese government began actively importing Western technologies. This included Western architecture and rail transportation, both of which required large quantities of iron and steel. Reverberatory furnaces and the latest advancements in iron-ore-mining techniques were also imported to meet this demand.

Reverberatory furnaces are more efficient than traditional *tatara* furnaces, and they were widely adopted at sites such as Yawata Steelworks (Kitakyushu, Fukuoka Prefecture) and Kamaishi Ironworks (Kamaishi, Iwate Prefecture).

Data from 1921 shows the differences between the two technologies: to produce 1 metric ton of pig iron, a *tatara* furnace required 8 metric tons of iron sand, but a reverberatory furnace required only 2 metric tons of iron ore. Although a *tatara* furnace could produce prized *tamahagane* steel and the reverberatory furnaces could not, it was quantity, not quality, that mattered at that time.

Throughout the early years of the Taishō era (1912–1926), owners of *tatara* ironworks attempted to improve on the traditional methods by creating tall, square *kakuro* furnaces out of brick. Unlike clay furnaces, these *kakuro* furnaces did not need to be rebuilt after every operation and could be used continuously. The arrival of *kakuro* marked the end for the traditional clay furnaces that had been used for centuries, and the last *tatara* furnace in Okuizumo was closed in 1923.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

たたら製鉄の衰退

1800年代後半、日本政府は西洋の思想や技術を積極的に輸入するようになった。これには、大量の鉄と鋼を必要とする西洋建築や鉄道輸送の導入も含まれた。

この需要を満たすために、反射炉と最新の鉄鉱石採掘技術も輸入された反射炉は従来のたたら炉よりも効率がよく、八幡製鉄所（福岡県北九州市）や釜石製鉄所（岩手県釜石市）などで広く採用された。

1921年のデータは、この2つの技術の間のギャップを示している： 1トンの銑鉄を生産するために、たたら炉は8トンの砂鉄を必要としたが、反射炉は2トンの鉄鉱石しか必要としなかった。たたら炉は貴重な玉鋼を生産でき、反射炉はそうではなかったが、当時重要なのは質ではなく量であった。

大正の初期を通じて、たたら製鉄所の経営者たちは、レンガで背の高い四角い角炉を作り、伝統的な製法を改良しようとした。この角炉は粘土炉のように操業のたびに作り直す必要がなく、連続使用が可能であった。角炉の登場によって、何世紀もわたって使われてきた伝統的な粘土炉は終わりをつげ、奥出雲で最後のたたら炉は1923年に閉鎖された。

010-014

Present-Day Ironmaking at Nittōho Tatara

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『今操業している日刀保たたら』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Present-Day Ironmaking at Nittōho Tatara

In 1977, Nittōho Tatara rekindled the fires of *tatara* ironmaking that had been extinguished for three decades. Ever since, their efforts have kept modern swordsmiths supplied with vital *tamahagane* steel.

Tamahagane is high-grade steel that can be produced only through the direct method of *tatara* smelting. The strength and ductility of *tamahagane* have made it an irreplaceable material for swordsmithing since the Edo period (1603–1867). However, when faced with the competition of imported reverberatory furnaces and increased industrial demands for steel, *tatara* ironworks were unable to compete, and they closed down in the 1920s. A small-scale operation was launched in 1933 to continue *tamahagane* production for military sabers, but this endeavor was ceased following the end of World War II (1939–1945).

Japanese swords later came to be appreciated and collected throughout the world as works of art, but only 5 to 6 metric tons of *tamahagane* remained after the war. In order to provide high-quality steel for the country's swordsmiths, the Society for Preservation of Japanese Art Swords (NBTHK, or Nittōho) established a traditional clay *tatara* furnace in Okuizumo.

The secrets of *tatara* ironmaking had been closely guarded, so Nittōho went to great lengths to find people with firsthand experience. The vital role of *murage* (foreman) fell to Abe Yoshizō (1902–1995) and Kumura Kanji (1903–1979), two men who had worked at regional furnaces in their youth. They passed on their knowledge to Kihara

Akira (b. 1935) and Watanabe Katsuhiko (b. 1939), who in turn took on their own apprentices, ensuring the *tatara* tradition would continue for future generations.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日刀保たたらでの現在の製鉄

1977年、日刀保たたらは30年前に途絶えていたたたら製鉄の火を再び灯した。以来、日刀保たたらでは、現代の刀匠たちに欠かせない玉鋼の供給を続けている。

玉鋼（たまはがね）とは、たたら製錬という直接製錬でしか生産できない高級鋼のこと。玉鋼はその強度と延性の高さから、江戸時代(1603-1867)以来、刀鍛冶にとってかけがえのない材料であった。しかし、輸入された反射炉との競争や工業的な鉄鋼需要の増加に直面し、たたら製鉄所は競争に打ち勝つことができず、1920年代に閉鎖された。1933年に小規模な操業が開始され、軍用サーベル用の玉鋼の生産が続けられたが、第二次世界大戦(1939-1945)終結後、この試みは中断された。

その後、日本刀は美術品として広く評価され、収集することになったが、戦後、玉鋼は5～6トンしか残らなかった。そこで、日本美術刀剣保存協会（日刀保）が、奥出雲に伝統的な粘土製のたたら炉を設置した。

たたら製鉄の技術は秘伝であったため、日刀保は実体験を持つ人材を探し求めた。村下という重要な役割を担ったのは、若い頃に地方の製鉄炉で働いていた安部由蔵（1902～1995）と久村勸治（1903～1979）だった。彼らは木原明（1935年生）と渡部勝彦（1939年生）にその知識を伝え、彼らもまた弟子となり、たたら製鉄の伝統を後世に伝えていった。

010-015

Raw Material Usage at Nittōho Tatara

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『一代で使用される原料』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Raw Material Usage at Nittōho Tatara

Nittōho Tatara uses the three-day direct method of smelting, which produces a massive bloom (*kerā*) of iron and steel inside the furnace. Over the course of the 70-hour operation, the *murage* and the rest of the crew work day and night, shoveling loads of iron sand and charcoal into the fire roughly every 30 minutes. Three complete operations of the furnace are performed every winter. Each of them consumes roughly 10 metric tons of iron sand and 12 metric tons of charcoal.

Nearly 4 metric tons of clay are used to construct a new furnace at the start of each operation. As smelting progresses and the temperature climbs, the interior walls of the furnace begin to melt. The melted clay reacts with the molten iron, creating a solvent (called “slag”) that carries away impurities as it drains out. As a result, the type of clay used to build the furnace has a direct impact on the purity of the resulting metal: depending on the attributes of the clay, less slag is produced, and fewer impurities are removed.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日刀保たたら原料使用状況

日刀保たたらでは、炉の中に大量の鉄と鋼の塊（ケラ）を作る三日直接製錬法を採用している。70時間に及ぶ操業の間、村下をはじめとする作業員は昼夜を問わず、およそ30分ごとに砂鉄と木炭を火に投入する。毎年冬に3回行われる。1回につき10トンの砂鉄と12トンの木炭が必要である。

操業が始まると、新しい炉を建設するために4トン近い粘土が使われる。製錬が進むと、炉の内壁が高温で溶け始める。溶けた粘土は溶けた鉄と反応して溶媒（「スラグ」と呼ばれる）を生成し、不純物を運びながら排出される。その結果、炉の建設に使用される粘土の種類は、出来上がる金属の純度に直接影響する。粘土の属性によって、生成されるスラグの量は多くなったり少なくなったりし、不純物が取り除かれる量は少なくなる。

010-016

From Smelting to Sorting

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『精錬から玉鋼の作りまで』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

From Smelting to Sorting

Nittōho Tatara smelts steel three times each winter. The photographs on this panel depict each stage of the process.

First, piles of logs are burned, and the ashes are pounded with long rods. This creates a dense layer of carbon-rich matter that helps to keep moisture from entering the furnace (photos 1–2). Next, the clay furnace is constructed and fitted with bamboo pipes that connect the furnace to the bellows, then fired dry (photos 3–8).

Once the clay has dried, three days of smelting begin. Working nonstop, the *murage* (foreman) and his crew add iron sand and charcoal to the furnace roughly every 30 minutes (photos 9–11). As the furnace’s internal temperature rises, waste material (slag) drains out through channels at the base and is cleared away by workers (photos 12–13). Meanwhile, the *murage* regularly observes the progress inside the furnace through small holes near the air pipes and judges how much iron sand and charcoal to add next.

On the morning of the fourth day, the furnace is demolished, and the still-glowing lump of smelted metal (*kerā*) is dragged out to cool (photos 14–15). The *kerā* contains a mixture of different grades of iron and steel, so workers use drop hammers and other tools to break it into smaller pieces (photos 16–19). The final step is to separate and sort the metal into different grades, which requires special expertise (photo 20).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

精錬から選別まで

日刀保たたらでは、毎年冬に3回の製錬を行っている。その各工程を写真で紹介する。

まず、丸太の山を燃やし、灰を長い棒で叩く。こうして炭素を多く含む緻密な層を作り、炉の下から湿気を排除する（写真1-2）。次に、粘土の炉を作り、炉とふいごをつなぐ竹のパイプを取り付け、乾式で焼成する（写真3-8）。

粘土が乾くと、3日間の製錬が始まる。昼夜を問わず、村下とその他の従業員はおよそ30分おきに炉に砂鉄と木炭を投入する（写真9-11）。炉内の温度が上がると、炉底の路から廃物（スラグ）が排出され、作業員によって取り除かれる（写真12-13）。その間、村下は空気管付近の小さな穴から炉内の様子を定期的に観察し、次に砂鉄や木炭を入れる量を判断する。

4日目の朝、炉は解体され、まだ光っている製錬金属の塊（ケラ）は、冷やすために引きずり出される（写真14-15）。ケラにはさまざまな種類の鉄や鋼が混ざっているため、作業員はドロップハンマーなどの道具を使って細かく砕く（写真16-19）。最後の工程は、金属を等級別に分離・選別することで、これには特別な専門知識が必要である（写真20）。

010-017

Kera: A Mass of Iron and Steel

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『鋸』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

***Kera*: A Mass of Iron and Steel**

The direct method of *tatara* smelting produces a large, porous mass of iron and steel called a *ker*a. After three straight days of operation, the furnace is demolished and the *ker*a is dragged out from the ruins to cool. The portions of a *ker*a on display here were produced at Nittōho Tatara in 1992.

The average *ker*a smelted at Nittōho Tatara weighs 3.2 metric tons and measures 300 centimeters in length, 125 centimeters in width, and between 25 and 30 centimeters in height. Roughly 70 percent of the *ker*a is high-quality *tamahagane* steel, which is concentrated at its center. The remaining 30 percent is either lower-grade steel (*bugera*) or iron. When *tatara* furnaces were the primary means of producing iron and steel for various purposes, these lower-grade metals were refined before being sold. Today, they are simply stockpiled for future use.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ケラ：鉄と鋼の塊

たたら製錬の直接法では、ケラと呼ばれる多孔質の大きな鉄と鋼の塊ができる。3日間連続で操業した後、炉は解体され、ケラは冷やすために廃墟から引きずり出される。ここに展示されているケラの一部は、1992年に日刀保たたらで生産されたものである。

日刀保たたらで製錬される平均的なケラは、重さ3.2トン、長さ300センチ、幅125センチ、高さ25～30センチ。ケラのおよそ70パーセントは高品質の玉鋼で、中心部に集中している。残りの3割は低級鋼（ブゲラ）か鉄である。たたら炉が鉄や鋼を生産する主要な手段であった時代には、これら

の低級金属は精錬されてから販売されていた。現在では、使用される可能性があるため備蓄されているだけである。

010-018

Sorting and Grading the Steel

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『一代でできる製品』
【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Sorting and Grading the Steel

Smashing apart and sorting the *kerā* is an arduous process. Once cooled, the *kerā* is hauled to a separate workshop, where it is smashed apart with a drop hammer. In ironworks of the past, the drop hammer was lifted using a waterwheel-powered system, but the machine at Nittōho Tatarā is electric. This procedure is then repeated using a smaller drop hammer, producing chunks that can be handled by a single worker. At this stage, the chunks are sorted according to quality, which is determined largely by carbon content and physical structure.

Nittōho Tatarā's mission is to produce *tamahagane* steel, which is treasured by swordsmiths for its strength and ductility. *Tamahagane* is graded according to its carbon content and fracture surface (the appearance of a cross section of the metal). The difference in fracture surface can be seen by comparing the microscopic images on the panel. The rougher fracture surface of third-grade steel (third image from the left) is evident in the distinct white bands that are absent in second-grade steel (second image) and first-grade steel (first image).

Grades of *Tamahagane* Steel

Grade	Carbon content	Fracture surface
First-grade steel	Approx. 1.2%	Homogeneous
Second-grade steel	0.8–1.5%	Heterogeneous
Third-grade steel	0.2–1.0%	Rough

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鋼鉄の選別と等級分け

ケラの粉碎と選別は骨の折れる作業だ。冷えたケラは別の作業場に運ばれ、そこでドロップハンマーで叩き割られる。かつての製鉄所では、水車でハンマーを持ち上げていたが、日刀保たたらでは電動式だ。この工程をさらに小さなドロップハンマーで繰り返すことで、作業員一人でも扱える塊ができる。この段階で、塊は炭素含有量と物理的構造によって決まる品質別に選別される。

日刀保たたらの使命は、刀匠たちがその強度と延性で珍重する玉鋼を生産することである。玉鋼は炭素含有量と破断面（金属の断面の様子）によって等級が決まる。破断面の違いは、パネルの顕微鏡画像を見比べればわかる。3級鋼（左から3番目の画像）の破断面の粗さは、2級鋼（2番目の画像）や1級鋼（1番目の画像）にはない、はっきりとした白い帯で明らかである。

	炭素	破面
鋼一級品	約 1.2%	均質
鋼二級品	0.8-1.5%	不均
鋼三級品	0.2-1.0%	粗野

010-019

History of the Kobayashi Family

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『小林家の歴史』
【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

History of the Kobayashi Family

The Kobayashi family of swordsmiths in Okuizumo traces its lineage back to a blacksmith named Kobayashi Saibe'e (d. 1822) who worked in the *ōkajiba* forge at a *tatara* ironworks. When Japan began to import Western technology in the 1860s, it caused a surge in demand for iron, prompting his grandson Kobayashi Matsuzaeon (b. 1846) to establish an independent ironworks. However, *tatara* furnaces struggled to compete with new, imported reverberatory furnaces, and Matsuzaeon was soon forced to close the ironworks down.

Kobayashi Daishirō (1903–1976), Matsuzaeon's grandson, was the first member of the family to be trained as a swordsmith. After studying in Hiroshima Prefecture, Daishirō returned to Okuizumo in 1942 and opened a forge to produce military sabers. Unfortunately for the entrepreneurial Kobayashi family, sword production was banned following the end of World War II in 1945.

Eventually, the ban was amended to make it legal to produce swords as works of art. After receiving permission to craft swords in 1954, Daishirō trained under Gassan Sadakazu II (1907–1995), a craftsman in Kyoto who would later be designated a Living National Treasure. Daishirō became a renowned swordsmith, and in 1965, one of his swords was displayed in the first annual exhibition held by the Society for Preservation of Japanese Art Swords. Daishirō's three sons followed in his footsteps, and they went on to become some of Okuizumo's most celebrated swordsmiths.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

小林家の歴史

奥出雲の刀鍛冶・小林家は、たたら製鉄所の大鍛冶場で鍛冶をしていた小林才兵衛（1822年没）を祖とする。日本は1860年代から西洋の技術を輸入するようになり、鉄の需要が急増したため、孫の小林松左衛門（1846年生まれ）が独立して製鉄所を設立した。しかし、たたら製鉄は輸入された新しい反射炉との競争に苦戦し、松左衛門はすぐに廃業を余儀なくされた。

松左衛門の孫である小林大四郎（1903-1976）は、一族で初めて刀鍛冶の修行を積んだ。広島県で学んだ後、1942年に奥出雲に戻り、軍用サーベルを製造する鍛冶場を開いた。実業家の小林家にとって不運だったのは、1945年の第二次世界大戦終結後、刀剣の製造は禁止されたことだった。

やがて禁止令が改正され、美術品としての刀剣の製作が合法化された。大四郎は1954年に刀剣製作の許可を得て、京都の月山貞一（1907-1995）に師事した。月山貞一は後に人間国宝に指定される名工である。大四郎は名工になり、1965年には日本美術刀剣保存協会の第1回作品展に出品された。大四郎の3人の息子たちも後を継ぎ、奥出雲を代表する刀工となった。

010-020

The Kobayashi Brothers: Swordsmiths in Okuizumo

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『小林三兄弟の略歴』
【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

The Kobayashi Brothers: Swordsmiths in Okuizumo

The Kobayashi family has been active in ironmaking and swordsmithing in the Okuizumo region since the late eighteenth century. Starting in the 1980s, a trio of brothers named Kobayashi Hirotsugu (b. 1938), Kobayashi Sadatoshi (b. 1941), and Kobayashi Rikio (b. 1948) led local efforts to preserve traditional swordmaking techniques. They are also known by their respective artisan names: “Sadanaga,” “Sadanori,” and “Sadateru.”

The brothers learned swordsmithing from a young age under the guidance of their father, Kobayashi Daishirō (1903–1976), who worked using the name “Sadayoshi.” Sadatoshi and Hirotsugu became licensed by the Agency of Cultural Affairs in 1970, and Rikio earned his license in 1972. Their work garnered attention in 1982 and 1983 at exhibitions held by the Society for Preservation of Japanese Art Swords, at which all three brothers received awards for their entries.

The Kobayashi brothers also engaged in outreach activities: they held administrative roles in swordsmiths’ associations at the regional and national levels and offered periodic public demonstrations of the forging process in a workshop on the museum grounds.

In 1999, Shimane Prefecture recognized the skills of two of the brothers, Rikio and Sadatoshi, by designating them Intangible Cultural Properties.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

小林兄弟：奥出雲の刀鍛冶

小林家は18世紀後半から奥出雲地方で製鉄と刀鍛冶を営んできた。1980年代から、3人の兄弟が中心となって、伝統的な刀鍛冶の技術を守り続けている。小林力夫（1948年生まれ）、小林貞俊（1941年～）、小林弘嗣（1938年～）の3兄弟で、それぞれ職人名、"貞永"、"貞法"、"貞照"でも知られている。

兄弟は、父である小林大四郎（1903-1976）、通称「貞義」の指導の下、幼い頃から刀鍛冶を学んだ。貞俊と弘嗣は1970年に、力夫は1972年に文化庁の刀匠免許を取得した。1982年と1983年に開催された日本美術刀剣保存協会主催の刀剣展では、3兄弟とも出品作が入選し、注目を集めた。

小林兄弟は対外的な活動にも従事し、地域や全国の刀匠組合の事務局を務める一方、博物館の敷地内にある工房で鍛錬工程の公開実演を定期的に行っていた。

1999年、島根県は力夫と貞俊の兄弟を無形文化財に認定した。

010-021

The Science of Japanese Swords

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『日本刀の科学』
【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

The Science of Japanese Swords

Japanese swords are made from a composite of different types of steel. Softer low-carbon steel is used for the core of the blade (*shingane*), while harder high-carbon steel is used for the outer layer (*kawagane*). The material for each section is hand-chosen from pieces of *tamahagane*, which can only be produced via *tatara* smelting.

This combination of metals gives Japanese swords exceptional sharpness and pliability. The outer *kawagane* is hard enough to hold a razor edge, but the inner *shingane* is flexible enough to withstand the impact of a blow. A sword made entirely of high-carbon steel would be brittle and prone to breaking, and one made entirely of low-carbon steel would be blunt and easily bent.

As shown in the chart at the bottom left of the panel, the arrangement of low-carbon and high-carbon steels creates varying levels of hardness in different parts of the blade. The hardness (vertical axis) decreases as the distance from the edge of the blade (horizontal axis) increases, meaning that the hardest steel is found at the blade's cutting edge. In this particular test, the blade was roughly four times harder at its edge than at its core.

This difference can also be seen in the microscopic images displayed on the panel. The starkest contrast is between a cross section of the core (top left) and the surface of the blade near the edge (bottom right). The structure of the low-carbon ferrite core looks sparse compared to the dense, high-carbon martensite edge.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日本刀の科学

日本刀はさまざまな種類の鋼を組み合わせて作られる。刃の芯（心鉄）には柔らかい低炭素鋼が使われ、外層（皮金）には硬い高炭素鋼が使われる。各部の素材は、たたら製錬という直接製法でしか製造できない玉鋼から手作業で選ばれる。

この金属の組み合わせが、日本刀に卓越した切れ味と延性を与えている。外側の鋼はカミソリの刃を保つのに十分硬いが、内側の鋼は打撃の衝撃に耐えるのに十分しなやかである。高炭素鋼だけで作られた刀はもろくて折れやすく、低炭素鋼だけで作られた刀は鈍くて曲がりやすい。

パネル左下のグラフに示すように、低炭素鋼と高炭素鋼の配置により、ブレードの各部で硬さのレベルが異なります。硬度（縦軸）は、ブレードの刃先（横軸）からの距離が長くなるにつれて小さくなっており、ブレードの刃先に最も硬い鋼があることを意味している。今回のテストでは、刃先の硬度は刃芯の硬度のおよそ4倍であった。

この違いは、パネルに表示された顕微鏡画像でも見ることができる。最も対照的なのは、コアの断面（左上）とエッジ付近のブレード表面（右下）である。低炭素フェライトコアの構造は、高密度の高炭素マルテンサイトエッジに比べてまばらに見える。

010-022

A Brief History of Swordsmithing

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『日本刀（刀匠・刀剣史）』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

A Brief History of Swordsmithing

Straight swords had been in use for centuries by the end of the Heian period (794–1185), when swordsmiths first developed the slim, curved, single-edged blade for which Japanese swords are known. Curved blades were developed for fighting on horseback, and as the forging process became more refined, they were made longer and longer, reaching lengths of around 90 centimeters by the Nanbokuchō period (1336–1392). Over the next two centuries, foot soldiers played an increasingly larger role on the battlefield, and the long blades were replaced by shorter field swords (*uchigatana*).

During the long peace of the Edo period (1603–1867), swords symbolized the privileged social status of the samurai. Swordsmiths set up forges in the bustling cities of Osaka and Edo (now Tokyo) and made swords that were both weapons and garish works of art.

The swordsmithing trade was threatened by the Sword Abolishment Edict of 1876, which made it illegal for any civilian (including former samurai) to carry a sword. Disarming the populace was seen as an important step in shifting military power to the country's newly established army. By this point, swordsmithing was an art form in its own right, and in 1906 the Imperial Household appointed two swordsmiths, Gassan Sadakazu I (1836–1918) and Miyamoto Kanenori (1830–1926), to preserve the traditional methods of swordmaking.

After World War II (1939–1945), it became illegal to either own or produce swords.

To prevent swords with artistic value from being destroyed, a group of experts founded the Society for Preservation of Japanese Art Swords in 1948. Eventually, exceptions to the ban were issued for swords officially registered as artworks.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

刀鍛冶の歴史

平安時代（794-1185）末期まで直刀が何世紀にもわたり使用されてきたが、刀匠たちは、日本刀で知られる細身に湾曲した片刃の刃を始めて開発した。曲刀は馬上で戦うために開発されたもので、鍛造技術の向上により、長い刀身がどんどん開発され、南北朝時代（1336-1392）には長さ90センチほどに達したその後2世紀にわたり、戦場での歩兵の役割はますます大きくなり、長い刀は短い野戦刀(打刀)に取って代わられた。

江戸時代（1603-1867）は、長い平和な時代の幕開けとなった。刀剣は、武士の特権的な社会的地位を象徴していた。刀鍛冶たちは大坂や江戸に鍛冶場を構え、武器であると同時に派手な装飾を施した芸術品でもある刀を作った。

刀鍛冶業は、1876年に発令された廃刀令によって脅かされ、民間人（旧士族を含む）が刀剣を所持することは違法とされた。武装を解除することは、新しく設立された陸軍に軍事力を移行させるための重要なステップとみなされた。この時点で、刀鍛冶はそれ自体が芸術の域に達していた。伝統的な刀鍛冶の技術を守るため、1906年、皇室は初代月山貞一（1836-1918）と宮本包則（1830-1926）を公認職人に任命した。

第二次世界大戦(1939-1945)が終わると、刀剣の所有も製造も違法となった。芸術的価値のある刀剣が破壊されることを恐れた専門家グループは、1948年に日本美術刀剣保存協会を設立した。やがて、美術品として正式に登録された刀剣には、禁止の例外が認められるようになった。

010-023

Appreciating Japanese Swords

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『日本刀（美術刀剣の解説）』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Appreciating Japanese Swords

Japanese swords have been appreciated for their craftsmanship for as long as they have been weapons of war. Soldiers no longer carry swords into battle, but enthusiasts throughout the world continue to study the finer details of swordsmithing. When comparing different blades, three of the major elements to inspect are the grain pattern (*jihada*), the edge pattern (*hamon*), and the curvature (*sori*).

The *jihada* is formed during the forging process. The swordsmith repeatedly folds the steel, creating a dense piece of metal with around 33,000 layers. When the steel is flattened and polished, the layers are revealed in patterns that can be straight, wavy, or resemble different types of wood grain.

The *hamon* is a line down the edge of the blade that can be perfectly straight or follow a pattern, such as waves or zigzags, according to artistic taste. The degree of curvature and the width of the sword's point varied over time, depending on the contemporary style of warfare.

A blade's curvature and edge pattern are the result of a unique quenching process called *yaki-ire*. In this process, the nearly finished blade is coated with two different types of clay, which transfer heat at different rates. The blade is heated to around 800 degrees Celsius, then plunged into cold water. The layer of clay on the back of the sword causes it to contract more slowly, becoming a type of steel called "pearlite," while the edge cools quickly and hardens into martensite. This uneven contraction tensions the blade and gives it its signature curve. Polishing reveals the blade's *hamon*,

which is determined by the pattern in which the clay was applied.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日本刀の評価

日本刀が戦争の武器であった時代から、その職人技は高く評価されてきた。兵士が戦場に刀を携帯することはなくなったが、世界中の愛好家が刀鍛冶の細部を研究し続けている。異なる刀を比較する場合、「地肌」、「刃文」、「反り」の3つが重要な要素となる。

地肌は鍛造の過程で形成される。刀匠は鋼を繰り返し折り、約33,000層からなる緻密な金属片を作る。鋼を平らにして磨くと、模様は直線になったり、波打ったり、さまざまな木目のようになりする。

刃文とは刃先の線のことで、完全に直線的なものから、波やジグザグなど、芸術的な好みに応じてさまざまな模様をつけられる。湾曲の度合いや剣先の幅は、時代によって異なり、現代の戦いのスタイルによって異なる。

刃文と反りは、どちらも「焼き入れ」と呼ばれる独特の焼き入れ工程の結果である。この工程では、ほぼ完成した刀身に熱の伝わり方が異なる2種類の粘土を塗る。刀は約800度まで加熱された後、冷水に浸される。刀身の裏側の粘土層はゆっくりと収縮し、「パーライト」と呼ばれる鋼になり、刃先は急速に冷えてマルテンサイトに変化する。この不均一な収縮が刀身を緊張させ、特徴的なカーブを生み出す。磨きをかけると刃の刃文が見えるが、これは粘土が塗られたパターンによって決まる。

010-024

The Underground Structure of a *Tatara* Furnace

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『鉦の地下構造の断面』1階（地下は新規提案にて）

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

The Underground Structure of a *Tatara* Furnace

Moisture is one of the greatest enemies of *tatara* ironmaking. Excess moisture lowers the internal temperature of the furnace, making it more difficult to smelt iron and steel. The underground structure reproduced here was developed to prevent moisture from reaching the area beneath the furnace.

The underground structure consists of three stone-lined compartments. A deep trench in the center is flanked on the left and right by two smaller cavities. The trench is filled with charcoal and compacted ash, creating a layer of dry materials directly underneath the furnace, but the cavities on either side are left empty to help insulate the heat from the furnace and to allow moisture to dissipate.

To build these three compartments, workers excavated the middle of the *takadono* workshop. Depending on the size of the furnace, they dug anywhere from 3 to 5 meters into the ground. Once the *murage* (foreman) at the site verified that everything had been constructed properly, the underground structure was covered with earth to create a flat surface for the furnace and bellows.

This underground structure was semi-permanent and only required occasional maintenance, as opposed to the furnace itself, which was destroyed and rebuilt between each operation. A sign on the main floor of the museum describes the aboveground structure.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

たたら製鉄炉の地下構造

たたら製鉄の最大の敵は水分である。余分な水分は炉内の温度を下げ、鉄や鋼の製錬を困難にする。ここで再現した地下構造は、炉の下に水分が到達するのを防ぐために開発されたものである。

地下構造は、石を敷き詰めた3つの区画で構成されている。中央に深い溝があり、その左右に2つの小さな空洞がある。溝は木炭と圧縮された灰で埋められ、炉の真下に乾燥した物質の層を作るが、2つの空洞は炉からの熱を断熱し、湿気を発散させるために空けられている。

この3つの区画を作るために、作業員は高殿の作業場の真ん中を掘った。炉の大きさにもよるが、穴の深さは3メートルから5メートル。村下（現場監督）がすべての工事が適切に行われていることを確認すると、地下の構造物を埋めて炉とふいごのための平らな面を作った。

この地下構造は半永久的なもので、操業のたびに破壊と再建を繰り返した炉本体とは対照的に、時折メンテナンスを必要とするだけだった。博物館のメインフロアにある看板には、地上の構造について説明されている。

010-025

Types of Bellows

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『ふいごの種類と変遷』
【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Types of Bellows

Bellows are an essential component of the traditional ironmaking process. To maintain an internal temperature hot enough to melt iron, the furnace requires a steady supply of oxygen, which is provided by the bellows. Three broad categories of bellows can be seen throughout the world: bellows made from wooden planks, bellows made from animal skin, and bellows made from piston-like tubes. Though the materials and shapes of the bellows differ, their function is generally the same: air is forced out of a confined space through a nozzle or pipe.

The earliest bellows used in open-air *tatara* from the late sixth century were made from animal skin. Deerskin bellows are mentioned in an eighth-century historical text called the *Nihon shoki* (*The Chronicles of Japan*). However, plank bellows are believed to have been adopted more widely from the eighth century onward.

There were two common types of plank bellows used in *tatara* ironmaking: hand-operated box bellows and foot-operated bellows that resembled a seesaw. In the late 1600s, ironworkers enlarged and improved the latter type to create *tenbin* (scales) bellows, so named for their resemblance to a huge set of scales. *Tenbin* bellows were more powerful and required fewer workers to operate. As this technology spread, box bellows were relegated to the smaller furnaces in *ōkajiba* forges and blacksmiths' workshops.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ふいごの種類

ふいごは、伝統的な製鉄工程に欠かせない部品である。炉の内部温度を鉄を溶かすのに十分な高温に保つには、酸素を安定的に供給する必要がある、その供給源となるのがふいごである。ふいごには大きく分けて3つの種類がある；木製の板で作られたふいご、動物の皮で作られたふいご、ピストン状の筒で作られたふいごである。素材や形状は異なるが、ノズルやパイプを通して狭い空間から空気を送り出すという機能は概ね同じである。

6世紀後半から野だたらで使われるようになった最古のふいごは、動物の皮で作られていた。8世紀に書かれた『日本書紀』にも鹿革のふいごが登場する。しかし、8世紀以降は板鞆の方が広く使われるようになったと考えられている。

たたら製鉄で使われた板ふいごには、手で操作する箱ふいご、足で操作するシーソーのようなふいごの2種類があった。1600年代後半、鉄工職人たちは後者のふいごを大型化・改良し、巨大な秤に似ていることから天秤ふいごと名付けた。天秤ふいごは、より強力で、操作に必要な人員の数も少なかった。この技術が普及するにつれ、箱ふいごは鍛冶場や鍛冶場の小さな炉に追いやられた。

010-026

Tenbin Bellows

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『鉦と天秤ふいご』 大きいパネルではなく、体験モデルの説明
【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Tenbin Bellows

Tenbin (literally, “scales”) bellows are an improvement on the basic foot-operated plank bellows, which resemble a seesaw. This technology was first used in 1691, according to the *Tetsuzan kyūki* (Old chronicles of the Iron Mountains), a record of *tatara* history that is safeguarded by the Itohara family.

The laborious task of continuously pumping the bellows over three or four days of smelting fell to workers called *banko*. The *banko* took turns standing in the center of the bellows with each foot on a wooden pedal. Gripping a hanging rope for balance, they leaned their weight first on one foot and then the other, forcing air into the furnace with each step on the pedals. Clay walls were built between the furnace and the bellows to protect the *banko* from the roaring flames, which reached heights of 2 meters. Since the *banko* on one side of the furnace could not see the movements of the *banko* on the other, they often chanted songs to keep a steady pace (and to maintain morale) through the long smelting process.

You can experience what it was like to be a *banko* on the life-sized replica displayed here. Feel free to try working the *tenbin* bellows, but be sure to hold onto the hanging rope for safety.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

天秤ふいご

天秤ふいごは、シーソーのような基本的なふいごを発展させたものである。糸原家に伝わるたたら歴史の記録『鉄山旧記』によれば、この技術が初めて使われたのは1691年のことである。

製錬の3、4日間に渡ってふいごを汲み続ける骨の折れる仕事は、バンコと呼ばれる労働者に任された。バンコは交代でふいごの中央に立ち、両足を動く板の上に乗せた。吊り下げられたロープを握り、片足ずつ体重をかけ、木製のペダルを踏むたびに炉に空気を送り込んだ。炉とふいごの間には土壁が築かれ、高さ2メートルにも達する炎からバンコを守った。炉の片側にいる鞆からは相手の動きが見えないため、彼らはしばしば歌を謡い、長い製錬の間、ペース（と士気）を保った。

実物大のふいごのレプリカの展示があり、バンコの仕事がどのようなものであったかを体験することができる。天秤ふいごを自由に動かしますが、バランスを取るために必ずロープにおつかまりください。

010-027

Making a Japanese Sword

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 展示室『日本刀の作刀工程・研磨工程』

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Making a Japanese Sword

Every winter, Nittōho Tatara produces valuable *tamahagane* steel that swordsmiths turn into works of art. Each year around May, the *tamahagane* is sorted, graded, and then sold to swordsmiths throughout the country. Over the course of forging a sword, around 4 kilograms of *tamahagane* are reduced to a blade that weighs around 1 kilogram. The photographs on this panel show the main steps in the forging process.

First, the chunks of steel are heated, flattened, and broken into small pieces with a hammer (photos 1–2). Next, these pieces are stacked in layers, covered with muddy water and ash, and remelted into a single solid ingot (photos 3–5). The ingot is repeatedly heated and folded, which produces a dense steel that is free of impurities (photos 6–7). Ingots of different hardness are then forged together and elongated into the desired shape (photos 8–11).

Once the blade has taken shape, it is treated using the *yaki-ire* technique. The edge and the flat side of the sword are covered with clay, heated to around 800 degrees Celsius, and then quenched in cold water (photos 12–13). With the forging and hardening complete, the blade is handed over to a specialized craftsman for sharpening and polishing (photos 14–19). Finally, the swordsmith engraves their signature on the tang of the blade (photo 20).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日本刀の鍛錬と研磨

日刀保たたらでは毎年冬になると貴重な玉鋼が生産され、刀匠たちはそれを芸術品に仕上げている。毎年5月頃、玉鋼は選別、格付けされ、全国の刀匠に販売される。刀鍛冶は、約4キロの玉鋼を約1キロの刀身に仕上げる。このパネルの写真は、鍛造の主な工程を示している。

まず、鉄の塊を熱し、平らにし、ハンマーで細かく砕く（写真#1-2）。次に、これらの破片を何層にも積み重ね、泥水と灰で覆い、再溶解して1つの固いインゴットにする（写真#3-5）。このインゴットを繰り返し加熱して折り曲げることで、不純物のない緻密な鋼ができる（写真#6-7）。その後、硬度の異なるインゴットを鍛接し、伸長させて目的の形状にする（写真#8-11）。

刃の形が整ったら、焼き入れの技法で処理される。刃先と刀の平らな面を粘土で覆い、約800度まで加熱した後、冷水で急冷する（写真#12-13）。鍛錬と焼き入れが終わった刀身は、専門の職人に渡され、研ぎと研磨が行われる（写真#14-19）。最後に、刀匠は刃先にサインを彫る（写真#20）。

010-028

Sugaya Ironworks Village

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 菅谷たたら山内 / 菅谷たたら山内

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Sugaya Ironworks Village

Sugaya Ironworks Village (Sugaya Tataru Sannai) was once an ironmaking community where teams of workers used a traditional clay *tatara* furnace to smelt iron sand into high-quality steel. This arduous process took three to four days of continuous work and consumed many tons of charcoal as fuel. Ironmaking was practiced here for nearly 130 years between the eighteenth and twentieth centuries. Today, the village has Japan's only extant example of a *takadono*, the building in which teams of workers smelted iron and steel. The site manager and *murage* (foreman) lived near the all-important *takadono*, while most of the workers resided in rowhouses across the river to the east.

Ironworks like this one were often established in the mountains, where both iron sand and charcoal could be easily sourced. Sugaya Ironworks was founded by the Tanabe family in 1751. The site annually produced roughly 200 to 300 metric tons of iron and steel, and at the height of production, the furnace was used 50 to 60 times each year.

The *takadono* and several of the surviving buildings were designated Important Tangible Folk Cultural Properties in 1967. Although the mountain village is now peaceful and quiet, there was a time when the air was filled with the shouts of workers and the roar of the furnace.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菅谷たたら山内はかつて鉄職人の集落だった。ここでは、職人たちが伝統的な土のたたら炉を使っ

て砂鉄を錬り、3～4日かけて高品質の鉄を作り出した。製鉄は18世紀から20世紀にかけて、130年近くもこの地で行われていた。現在、この集落には現存する日本唯一の製鉄工場（高殿）があり、かつて職人たちが鉄や鋼を製錬していた。番頭と村下は重要な高殿の近くに住み、労働者の大半は川を挟んで東側にある長屋に住んでいた。

このような製鉄工場は、砂鉄や木炭が採れやすい山間部に設けられることが多かった。菅谷製鉄所は1751年に田部家によって創業された。最盛期の一つでもある1826年から1839年にかけては、年間80回から90回の操業で約200から300トンの鉄鋼を生産した。

高殿と現存するいくつかの建物は、1967年に重要有形民俗文化財に指定された。今はのどかで静かな山里だが、ハンマーの音と炉の轟音で空気が満たされていた時代を思い起こさせる。

010-029

Separating Iron and Steel

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 菅谷たたら山内 / 鋼づくり

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Separating Iron and Steel

The *tatara* ironmaking method used at Sugaya Ironworks resulted in a mass of iron, steel, and slag that formed within the clay furnace. At the end of the process, the furnace was dismantled to expose the still-glowing lump of metal and slag (called a “bloom”). Workers dragged the bloom out of the *takadono* smelting workshop and submerged it in a nearby pond to cool.

Although the arduous, multiday process of smelting ended when the bloom was removed, the roughly three-ton mass of metal was not a finished product ready for market. Only a small fraction of the bloom consisted of *tamahagane*, a valuable low-carbon steel that was ideal for making swords. Other portions consisted of irons with higher carbon content, such as pig iron, which required additional refining before they could be sold. In order for these different metals to be extracted and processed, the bloom needed to be broken apart and sorted.

Once cooled, the bloom was moved from the pond to the mill beside the katsura tree. There, a drop hammer weighing more than 1 metric ton was hoisted into the air using a waterwheel-powered tackle and dropped onto the bloom to break it into smaller chunks.

The pieces were then transported to this workroom attached to the manager’s residence, and the crushing process was repeated using a smaller drop hammer. While the mechanism for dropping the weight has since been removed, the channel for the waterwheel remains outside the building. Once the bloom was broken into workable

chunks, trained specialists performed the final separation using handheld hammers.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菅谷製鉄所のたたら製鉄は、粘土の炉の下に鉄と鋼の多孔質な塊を埋めたまま製鉄する方法であった。操業が終わるたびに炉を解体し、まだ光っている金属の塊とスラグ（「ブルーム」と呼ばれる）を取り出した。作業員はブルームを高殿から引きずり出し、近くの池に沈めて冷やした。

ブルームが取り出された時点で、困難な数日間にわたるプロセスは終了したが、約3トンの鉄、スラグ、鋼の塊は市場に出せるような完成品ではなかった。玉鋼と呼ばれる刀剣に理想的な貴重な低炭素鋼は、ブルームのごく一部にすぎなかった。銑鉄のような高炭素鉄合金は、販売する前にさらに精錬が必要だった。さまざまな等級の鉄と鋼の混合物であるブルームは、粉碎して選別する必要があった。

冷却されたブルームは、池から桂の木の横にある粉碎機に移された。ここでは、重さ1トン強の破碎機が水車を動力とする滑車装置で空中に吊り上げられ、ブルームに投下されて細かく砕かれた。

その破片を番頭の住居に併設されたこの作業所に運び、さらに小さな錘を使って同じ作業を繰り返した。錘を落とす仕組みはその後撤去されたが、水車の水路は建物の外に残されている。ブルームが加工可能な塊に砕かれると、ハンマーと熟練工の目を使って金属の最終分離が行われた。

010-030

Smelting Workshop (*Takadono*)

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 菅谷たたら山内 / 高殿

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Smelting Workshop (*Takadono*)

The *takadono* workshop now stands quiet and still, but it was once the bustling center of activity at Sugaya Ironworks Village. Until 1921, while the site was still active, the furnace was torn down at the end of each operation and newly rebuilt before starting again. Each round of smelting lasted three days and three nights, during which the workers barely slept. Under the watchful eyes of the *murage* (foreman), crews worked in rotation to tend to the furnace and pump the bellows.

Feeding the furnace was the critical task of the *murage* and his assistants, who alternated adding small quantities of iron sand or charcoal to the roaring flames. There was no manual that explained the precise amount and timing of these additions; successful operation of the furnace depended entirely on the *murage*'s expertise in judging the progress based on colors, sounds, and smells.

The bellows in the workshop date from 1906 and were powered by a waterwheel that drove the pistons and propelled air through underground pipes into the furnace. Prior to 1906, air was supplied by large, foot-operated bellows connected to either side of the furnace. The bellows were driven by a pair of workers who stood atop them, working the foot pedals in a steady rhythm.

With the added air from the bellows, the flames of the furnace reached more than a meter in height. The open sections of the workshop's roof prevented the building from catching fire, and they also allowed smoke to dissipate and be carried away by the mountain breeze.

Layout of the Takadono

The current *takadono* was rebuilt after it burned down in 1851, and the rectangular clay furnace in the middle of the workshop was constructed in 1967. The square, single-story building measures roughly 18 meters on each side. Its roof reaches a height of 9 meters and is supported by the four pillars that surround the furnace in the middle of the workshop.

The elevated platforms on the left and right (when facing the furnace from the building's entrance) were areas where the *murage* and the seniormost workers could rest during the multiday smelting process. The area directly behind the furnace was occupied by a stockpile of iron sand, while charcoal was stored in two large piles on either side.

Although it is not visible, an important feature of the workshop is the underground structure beneath the furnace. After the *takadono* had been built, workers dug a 3-meter hole where the furnace would eventually be added. Within that hole they constructed three stone-lined compartments: one large pit directly beneath the furnace, which was filled with charcoal, and two small chambers that were left empty. The purpose of these cavities was to reduce heat dissipation and remove moisture from the surrounding dirt. Excess moisture could lower the temperature inside the furnace or, even worse, evaporate and cause a steam explosion.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

今はひっそりと佇む高殿だが、かつては菅谷たたら山内の賑わいの中心だった。現役だった1921年まで、作業が終わるたびに炉を壊し、新しく作り直してから再稼働していた。1回の製錬は3日3晩続き、その間、作業員はほとんど休まなかった。村下の監視の下、作業員たちは交代で炉への投入とふいごを使って空気を送り込んだ。

炉への投入は村下と助手の重要な仕事であり、轟音を立てる炎に砂鉄と木炭を少量ずつ交互に繰り返し投入した。この投入の正確な量とタイミングを説明したマニュアルはなく、炉の運転がうまくいくかどうかは、色、音、匂いを判断する村下のノウハウにかかっていた。

工場のふいごは1906年に作られたもので、水車によってピストンを動かし、地下のパイプを通して炉

に空気を送り込む。1906年以前の菅谷製鉄所の歴史の大部分において、この役割は、炉の横に並んだ足踏み式の大きなふいごによって担われていた。ふいごを動かすのは、ふいごの上に立ち、一定のリズムでペダルを踏む二人組の作業員だった。

ふいごからの空気も加わり、炉の炎は1メートル以上の高さに達した。工場の屋根は開放されているため、火事になることはなく、煙は山風に流されて消えていった。

高殿の配置

現在の高殿は、1851年に焼失した後に再建され、工場の中央にある長方形の粘土炉は、1967年に建てられたものだ。正方形の平屋で、一辺が約18メートル。屋根の高さは9メートルで、工房の中央にある炉を囲む4本の柱によって支えられている。

（建物の入り口から炉に向かうと）左右にある高台は、何日もかけて行われる製錬の間、村下や年長の作業員が休む場所であった。炉の真後ろは砂鉄を貯蔵する場所で、木炭は左右二つの大きな山に貯蔵されていた。

目には見えないが、この工場の重要な特徴は、炉の下にある地下構造物である。建物自体が建てられた後、作業員たちは最終的に炉を設置する深さ4メートルの穴を掘った。炉の真下には木炭で満たされた大きな穴が1つ、そして空っぽの小部屋が2つある。これらの空洞の目的は、保温の他周囲の土から湿気を取り除くことだった。余分な水分は炉内の温度を下げたり、最悪の場合、蒸発して水蒸気爆発を引き起こす可能性があるからだ。

010-031

Manager's Office and Residence

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 菅谷たたら山内 / 元小屋
【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Manager's Office and Residence

This building served as an office and residence for the manager of Sugaya Ironworks. The manager was appointed by the Tanabe family, the owners of the site, and oversaw all business at the ironworks, such as the purchase of raw materials and arrangements for shipments of iron and steel.

The residence is attached to the room where specialists performed the final sorting and grading of the metal. Due to the high value of these products, the manager kept a close eye on this critical stage of production through the lattice wall facing the *takadono* workshop. Such a wall allowed the manager to comfortably observe the sorting process from inside the attached residence.

The current two-story structure was likely rebuilt shortly after a fire in 1833. In addition to the workroom, it comprises six rooms with tatami flooring, a kitchen, and a bath. When compared to the humbler rowhouse where the *murage* (foreman) and the assistant manager lived, the much larger and more finely appointed manager's residence reflects his privileged position in the village.

The manager took whatever steps he thought necessary to protect the ironworks' precious stocks of metal. As an example, the paper slips pasted on the wall near the kitchen are thought to be charms meant to ward off burglars. The only thing written on them is a single date: "twelfth day, twelfth month." According to popular legend, this is the day in 1594 when the infamous thief and outlaw Ishikawa Goemon was boiled alive for his crimes.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

この建物は、菅谷製鉄所の支配人の事務所兼住居であった。敷地所有者である田部家から任命された支配人は、原材料の購入や鉄鋼の出荷手配など、製鉄所の業務全般を監督した。

住居には作業室が併設され、専門家がさまざまな金属の最終的な選別や等級分けを行っていた。高価な製品であるため、支配人は高殿の作業場に面した格子の壁を通して、この重要な生産段階を監視していた。このような壁があるおかげで、マネージャーは付属の住居の中から選別工程を快適に観察することができた。

現在の2階建ての建物は、1833年の火災の直後に再建されたものと思われる。作業場以外に、畳敷きの6つの部屋、台所、風呂がある。村下や副支配人が住んでいた質素な長屋と比べると、支配人の住居は村での特権的な地位を示している。

支配人は製鉄所の貴重な金属資源を守るため、必要と思われるあらゆる手段を講じた。例えば、厨房の近くの壁に貼られた紙は、泥棒への警告であった。紙に書かれているのは「12月12日」という日付だけだ。俗説によれば、この日は1594年、悪名高い盗賊で無法者の石川五右衛門が釜茹での刑に処された日である。

010-032

Sugaya's Katsura Tree

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 菅谷たたら山内 / 桂の木

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Sugaya's Katsura Tree

Katsura trees have special significance in an ironworks village. They are considered sacred due to their association with Kanayago, the guardian deity of *tatara* ironmaking. For three to four days each spring, the trees' new buds appear to glow a brilliant red in the setting sun. For the residents of an ironworks village, this likely reminded them of the three to four days spent tending a blazing furnace.

Kanayago has been portrayed as both male and female, but the common image is of a woman in flowing robes with long, dark hair. Legend states that Kanayago descended from the realm of heavenly deities and arrived in Harima Province (now Hyogo Prefecture), where she taught people how to smelt iron. However, Kanayago could not find a suitable mountain on which to reside. Flying on a white heron, she scoured the region and eventually landed on a katsura tree in the mountains roughly 25 kilometers to the northeast of Sugaya Ironworks. A passing hunter happened to encounter her, and it is said that she ordered him to build a furnace and taught him the *tatara* smelting method.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

桂の木はたたら山内では特別な意味を持ち、たたら製鉄の守護神である金屋子にちなんで神聖視されている。毎年春になると、3～4日の短い間、桂の新芽が夕日に照らされて赤く輝いて見える。これは、たたら製鉄が3～4日かけて燃え盛る炉の手入れをする工程を彷彿とさせる。

金屋子は天上界から降臨し、播磨国(現在の兵庫県)にたどり着いたという伝説がある。そこで人々に鍋や釜の鍛造を教え始めた。しかし、住むにふさわしい山が見つからなかった。白鷺に乗って

各地を巡った金屋子は、やがて菅谷製鉄所の北東約25キロの山中にある桂の木に降り立った。
金谷子は遭遇した猟師に炉を作るように命じ、たたら製錬の方法を教えたと伝えられている。

010-033

Split Rowhouse

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 菅谷たたら山内 / 三軒長屋

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Split Rowhouse

This rowhouse contains separate living quarters for the *murage* (foreman) and staff of the ironworks. An entire family lived in each compact unit, and the occupants of the rowhouse all used two communal village baths. Private baths were available only to the *murage* on duty and to the assistant manager and his family.

The costs of housing the workers, including any significant maintenance, were covered by the Tanabe family, the owners of Sugaya Ironworks. They hoped that by providing these basic necessities, they could entice workers to remain in the village rather than seek employment at other ironworks in the region.

While the manager directed his staff to handle the business activities of the ironworks, the *murage* was responsible for all technical aspects associated with the production of iron and steel. The *murage* ensured that the underground structure of the *takadono* workshop had been built properly, constructed the clay furnace before each operation, and had the challenging task of determining when and how much iron sand and charcoal should be added to the furnace.

Much of this specialized knowledge was considered a trade secret and was shared only with select individuals. This was one reason why the Tanabe family took pains to secure and retain a skilled *murage* to lead their smelting crew.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

この長屋には、村下と事務員のための独立した居住区がある。小さな区画には家族全員が住み、長屋の住人は全員、2か所ある村の共同浴場を利用した。貸し切り風呂は、副支配人とその家族、および村下だけが利用できた。

住居と多額の維持費は、菅谷製鉄所の所有者である田部家が負担していた。こうした基本的な生活必需品を提供することで、労働者がこの地域の他の製鉄所で働くのではなく、村にとどまってくれることを期待していた。

番頭が部下を指揮して製鉄所の業務を処理する一方で、村下は鉄鋼生産に関連するすべての技術的側面に責任を負っていた。村下は、高殿の地下構造が適切に構築されていることを確認し、各作業の前に粘土炉を構築し、炉に砂鉄と木炭をどれだけの量、いつ加えるかを決定するという困難な仕事を担っていた。

こうした知識の多くが企業秘密とされ、選ばれた人にしか共有されなかった。田部家が製錬の指揮を執る熟練した村下を確保し、定着させることにこだわった理由のひとつがここにある。

010-034

Welcome to the Historical Museum of Iron

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】鉄の歴史博物館 / 博物館（概要文・紹介文）

【想定媒体】その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Welcome to the Historical Museum of Iron

This museum introduces the history and development of ironmaking in the region. Traditional iron smelting is done with a furnace called a *tatara*. A *tatara* can be defined as a clay furnace that burns charcoal to smelt iron sand into steel. Displays in the museum's three exhibit halls show the development of ironmaking using examples of raw materials, tools, models, and the finished items made from *tatara*-smelted iron and steel.

A visit to the museum begins in the theater on the far side of Exhibit Hall 1 (across from the entrance) with a 30-minute documentary on the history of *tatara* smelting. The documentary is available in Japanese or English, with subtitles in Korean or Simplified Chinese.

Exhibit Hall 1: Smelting

Display cases on the first floor contain items made with the last batch of steel produced at Sugaya Ironworks Village, as well as items used in the wholesale of metal ingots. The staircase nearby leads to displays on the second floor that introduce the tools and culture of ironmaking. One display has samples of iron slag (waste material) excavated from 45 sites in one district of Unnan, illustrating the prevalence of iron smelting in this region.

Exhibit Halls 2 & 3: Smithing and Shipping

The museum's other two exhibit halls are located across the back garden, on the other side of a small bridge. These exhibits and dioramas show how low-grade iron was

refined and shaped for shipment throughout Japan. The high-quality iron sand found in this region made it a vital production center for both iron and steel as early as the mid-fourteenth century.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鉄の歴史博物館へようこそ

この博物館は、製鉄の地域史と発展を紹介している。伝統的な製鉄は、「たたら」と呼ばれる炉を使って行われる。たたらとは、木炭を燃やして砂鉄を溶かし、鋼鉄にするための土製の炉のことだ。博物館の3つの展示室では、原料、道具、模型、たたら製鉄で作られた完成品などを通して、製鉄の発展をたどることができる。

博物館の見学は、展示ホール1の奥側（入り口の向かい側）にあるシアターで、たたら製鉄の歴史に関する30分のドキュメンタリーから始まる。ドキュメンタリーは日本語または英語で、簡体字または韓国語の字幕がついている。

展示ホール1：製錬

1階の展示ケースには、菅谷たたら山内で最後に生産された鉄を使った製品や、金属製品の卸売に使われたものが展示されている。すぐそばの階段を上ると、2階には製鉄の道具や文化が展示されている。また、ある展示では雲南市のある地区の45カ所から発掘された鉄くずのサンプルが展示されており、この地域で製鉄が盛んであったことを物語っている。

展示ホール2と3：鍛冶と海運

博物館の他の2つの展示室は、裏庭を挟んで小さな橋の向こう側にある。これらの展示とジオラマは、低品位の鉄がどのように精錬され、日本各地に出荷されるようになったのかを示している。この地域の良質な砂鉄は、14世紀半ばには鉄と鋼鉄の重要な生産拠点となっていた。

010-035

Tawara Kuniichi Memorial Exhibit

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 倭国一の研究と貢献について

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Tawara Kuniichi Memorial Exhibit

This exhibit highlights the life and work of Dr. Tawara Kuniichi (1872–1958), a professor of metallurgy at Tokyo Imperial University (now the University of Tokyo). Born in Hamada, Shimane Prefecture, Tawara was a pioneer in the study of both *tatara* ironmaking and Japanese swords.

Research on Tatara Furnaces

When imported Western furnaces became the dominant means of smelting metals in Japan, Tawara became worried that the techniques of *tatara* ironmaking would be lost. For two months in 1898, he conducted fieldwork at various *tatara* sites in Hiroshima, Tottori, and Shimane Prefectures. At each location, he recorded the different buildings, furnaces, and equipment and collected samples of iron sand and charcoal. Tawara published his findings in his magnum opus, *Korai no satetsu seiren-hō* (Ancient iron sand smelting methods), in 1933, after most *tatara* ironworks had permanently closed.

Scientific Analysis of Japanese Swords

Tawara also conducted the first in-depth analysis of Japanese swords. There had been little research on the metallurgical properties of Japanese blades, because such analysis involved breaking the blade into pieces, and many swordsmiths were reluctant to see a sword destroyed. Tawara showed that different parts of the blade, such as the edge and core, have differing chemical compositions and structures. This varied composition is what gives Japanese swords their distinctive sharpness and flexibility.

To aid his research, Tawara imported the first large-scale metallurgic microscope to Japan from Germany in 1905. The optical microscope on display is a more advanced model that he acquired in 1938.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

依国一記念室

この展示は、東京帝国大学（現東京大学）冶金学教授であった依国一博士（1872-1958）の生涯と業績に焦点を当てたものである。島根県浜田市に生まれた依は、たたら製鉄と日本刀研究の先駆者である。

たたら炉に関する研究

輸入された西洋炉が主要な製錬技術になるにつれ、依はたたら製鉄の技術が失われるのではないかと懸念した。1898年の2ヶ月間、彼は広島県、鳥取県、島根県のさまざまなたたら場でフィールドワークを行った。彼は各地にあるさまざまな建物、炉、設備の記録をとり、使用された砂鉄と木炭のサンプルを収集した。たたら製鉄所のほとんどが永久に閉鎖された後の1933年、依はその成果を大著『古来の砂鉄製錬法』として発表した。

日本刀の科学的分析

依はまた、初めて日本刀を科学的に分析した。ブレードを分析するには、ブレードを細かく砕く必要があるため、ブレードの冶金学的特性については、これまでほとんど研究が行われていなかった。ほとんどの刀鍛冶は、自分の刀をそのように扱うことを良く思わなかった。依の研究結果は、刃先や芯など刃物の異なる部分が、日本刀の独特の切れ味や柔軟性を生み出す化学組成や構造を持つことを明らかにした。

研究を支援するため、1905年、依はドイツから日本初の大型金属顕微鏡を輸入した。展示されている光学顕微鏡は、彼が1938年に入手した最新型である。

010-036

Welcome to Wakou Museum

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 和鋼博物館へようこそ + 映像

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Welcome to Wakou Museum

Wakou Museum is dedicated to the history and development of the *tatara* furnace, a tool for smelting iron and steel that was developed in Japan and used widely in this region.

Before exploring the exhibits, visitors are encouraged to first stop by the museum theater and view a 15-minute film explaining the *tatara* ironmaking process. This short documentary shows the smelting operation at Nittōho Tataru, the only ironworks in the world where steel is smelted using a clay *tatara* furnace. The film shows how simple materials, such as clay, iron sand, and charcoal, are used to produce a high-grade steel called *tamahagane*. English subtitles are available upon request.

The exhibit rooms on the first and second floors present the history of ironworking innovation in the region.

The technology for smelting iron ore arrived in Japan sometime in the late sixth century, and it was soon adapted for smelting iron sand, which was more readily available. Seeking to maximize both output and quality, ironworkers found large-scale sources of raw materials and designed more powerful bellows and furnaces. Later advancements in modern steelmaking in the twentieth century gave rise to the creation of Yasugi Specialty Steel, a new variety of steel renowned for its hardness and durability that is still produced locally. Yasugi Steel is thus the most recent chapter in this centuries-long history.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和鋼博物館へようこそ

和鋼博物館は、この地方で広く使用されていた日本独自の鉄鋼製錬用具である「たたら炉」の歴

史と発展を紹介する博物館である。

展示品を見学する前に、シアタールームに立ち寄り、たたら製鉄の工程を紹介する15分の映画を見ることをお勧めする。この短い紹介動画は、世界で唯一、たたら製鉄法で製鉄を行っている日刀保たたら製鉄所の製錬作業を捉えたものである。粘土、砂鉄、木炭といったシンプルな材料を使用し、玉鋼（たまはがね）と呼ばれる高級鋼が作られる過程を紹介している。希望に応じて英語字幕版も視聴可能である。

1階と2階の展示室では、この地域の鉄工技術革新の歴史を紹介している。鉄鉱石の製錬技術が日本に伝わったのは6世紀後半のことで、やがて、より豊富な砂鉄を製錬する方法が開発された。効率と品質の両方を最大化するために、鉄工職人たちは大規模な原料供給源を見つけ、より強力なふいごや炉を設計した。20世紀の近代製鉄の進歩により、硬度と耐久性で名高い新しい鋼種である安来特殊鋼が生み出された。安来特殊鋼は、硬くて丈夫なことで知られている新しい鋼種で、現在も地元で生産されている。安来鋼は、この数世紀にわたる歴史の中で、最も新しい章である。

010-037

Izumo's Ancient *Tatara* Ironmaking Heritage

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 日本遺産紹介コーナー

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Izumo's Ancient *Tatara* Ironmaking Heritage

Different forms of *tatara* ironmaking have been practiced here in the Chūgoku region for over 1,000 years. The region's natural abundance of iron sand and wood, two basic ingredients for ironmaking, is one major reason for this continual production. At one point, the ironmaking industry in this area accounted for nearly 80 percent of all iron produced in Japan.

The industry shaped local culture and society, and its presence had a marked impact on the region's natural environment. Iron was produced throughout the region year-round and on a massive scale, and resources like wood and iron sand had to be carefully managed to avoid depletion. In the case of wood, which was necessary for producing charcoal, plots of forest were systematically cut down and then allowed to regrow.

In some cases, the effects of this widespread industry permanently changed the landscape. The process of collecting iron sand leveled entire mountains, after which the flattened terrain was converted into fields for agriculture.

In 2016, historical centers of *tatara* ironmaking in the municipalities of Yasugi, Unnan, and Okuizumo were designated Japan Heritage Sites. In addition to Wakou Museum and Kanayago Jinja Shrine in Yasugi, the sites include Sugaya Ironworks Village in Unnan and Nittōho *Tatara* in Okuizumo. More information on these and other nearby *tatara* ironmaking heritage sites can be seen in this display.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

出雲の古代たたら製鉄遺産

ここ中国地方では、1000年以上も前からさまざまな形のたたら製鉄が行われてきた。製鉄の最も基本的な原料のひとつである砂鉄が地元で豊富に採れることも、この地域が鉄を作り続けてきた理由の一つである。。一時期、この地域の製鉄業は、国内で生産される鉄の80%近くを占めていた。

産業は地域の文化と社会を形成し、その存在は地域の自然環境に著しい影響を与えた。鉄は一年中、この地域一帯で大規模に生産され、砂鉄や木材などの資源は枯渇しないように注意深く管理されなければならなかった。木炭の生産に必要な木材の場合、計画的に森林を伐採しては再生させた。このような広範な産業の影響で、地形が永久的に変化したケースもある。砂鉄を採取する過程で山全体が平らになり、平らになった地形は農業用の畑に変えられた。

2016年には、安来市、雲南市、奥出雲町の3市町にまたがる遺跡が、たたら製鉄の文化拠点としてまとめて日本遺産に認定された。安来の和鋼博物館、金屋子神社のほか、雲南の菅谷高殿、奥出雲の日刀保たたらなどがある。このほか、近隣のたたら製鉄遺産に関する詳しい情報は、この展示で見ることができる。

010-038

Exhibit Room 1: What Is *Tatara* Ironmaking?

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 第1展示

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Exhibit Room 1: What Is *Tatara* Ironmaking?

Exhibit Room 1 provides an overview of the *tatara* ironmaking process. It includes explanations of the production cycle, tools that were used at ironworks in the region, samples of the iron and steel produced there, and a full-scale model of a late nineteenth-century furnace.

The *tatara* method is unique to Japan and differs from other contemporary smelting methods in its use of iron sand and wood charcoal instead of iron ore and coal (or other non-renewable fuel sources). Although the tools and equipment have changed, the fundamental principles of the *tatara* method have remained the same since the late sixth century.

The ironmaking industry thrived in the mountainous Chūgoku region (Hiroshima, Okayama, Shimane, Tottori, and Yamaguchi Prefectures), where high-quality iron sand was readily available. As craftsmen developed more efficient smelting techniques, small, temporary ironmaking operations were replaced by large, permanent operations run by entire villages. By the early 1900s, this accumulated expertise had allowed the region to become the largest producer of iron and steel in the country, laying the foundations for the region's modern-day steel industry.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

第1展示室：たたら製鉄とは？

第1展示室では、たたら製鉄の概要を紹介している。生産サイクルの説明、この地域の製鉄所で使われていた道具、そこで生産された鉄と鋼鉄のサンプル、19世紀後半の炉の実物大の模型などが展示されている。

たたら製鉄は日本独自の製法であり、鉄鉱石と石炭(または他の再生不可能な燃料源)ではなく砂鉄と木炭を使用する点で、現代の他の製鉄法と異なっている。道具や設備は変化したが、たたら製法の基本原理は6世紀後半から変化していない。

製鉄業は、良質な砂鉄が豊富に採れた山間部の中国地方（広島県、岡山県、島根県、鳥取県、山口県）で栄えた。職人たちがより効率的な製錬技術を開発するにつれて、小規模で一時的な製錬から、村全体で運営する大規模で恒久的な製錬へと変わっていった。こうして蓄積されたノウハウにより、1900年代初頭にはこの地域は国内最大の鉄鋼生産地となり、現代の鉄鋼業の基礎を築いた。

010-039

Early Furnaces: Slag from the Imasayayama Site

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 今佐屋山遺跡 鉄滓

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Early Furnaces: Slag from the Imasayayama Site

These chunks of slag (a byproduct of the smelting process) were excavated from the Imasayayama archaeological dig site in Ōnan, Shimane Prefecture. Dating from the late Kofun period (ca. 250–552), the slag is some of the oldest evidence of ironmaking in the region.

Early open-air *tatara* furnaces were stoked by bellows made of animal skin. Research suggests that some of the oldest smelting sites used iron ore as a base material, but the ore was scarce, and the technology was later adapted to use iron sand, which was more readily available.

Ironmaking diorama

The nearby diorama depicts what ironmaking may have looked like at the Imasayayama site. The primary product of the smelting was pig iron, which drained out from the furnace through holes at its base, while slag and smaller clumps of iron amassed inside. As molten slag accumulated inside the furnace, it created a mold of the furnace's interior dimensions. Today, solidified hunks of slag can be used to estimate the shapes and sizes of the furnaces that produced them.

Iron Sand from the Imasayayama Site

The iron sand in these bottles was excavated from the Imasayayama dig site. The comparatively rounded shape of the grains indicates that the sand was likely gathered from a riverbed. It is high-quality iron sand, containing roughly 60 percent iron, 5 percent titanium dioxide, and 0.2 percent vanadium.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

初期の炉：今佐屋山遺跡の鉍滓

この製錬の副産物である鉄滓の塊は、島根県邑南町の今佐屋山遺跡から発掘された。これらは古墳時代後期（約250～552年）のもので、この地域で製鉄が行われていたことを示す最古の証拠のひとつである。

初期のたたら炉は屋外に作られ、動物の皮で作られたふいごで、焚かれていた。調査によると、最古のいくつかの製錬所では鉄鉍石が使用されていたが、この材料は希少であったため、後に豊富な砂鉄を利用するように技術が改良された。

製鉄ジオラマ

近くにあるジオラマには、今佐屋山遺跡での製鉄の様子が表現されている。製鉄の主な生産物は銑鉄で、炉底の穴から排出され、炉内には鉄滓や小さな鉄の塊が溜まった。熔融鉍滓は炉の粘土壁によって拘束されていたため、固まった鉍滓の塊を利用して、それを生産した炉の形と大きさを推定することができる。

今佐屋山遺跡の砂鉄

このボトルの中にある砂鉄は、今佐屋山遺跡から出土したものである。粒の形が比較的丸いことから、この砂は川底から採取された可能性が高いと考えられる。これは高品質の砂鉄で、およそ60パーセントの鉄、5パーセントの二酸化チタン、0.2パーセントのバナジウムで構成される高品質の砂鉄である。

010-040

A Record of Ancient Izumo

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 733年 出雲國風土記書写
【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

A Record of Ancient Izumo

In the early eighth century, the imperial court commissioned a series of regional surveys (*fudoki*) to learn more about the lands under its control. The *Izumo no kuni fudoki* (Regional records of Izumo Province) describes the geography and culture of Izumo Province (now part of Shimane Prefecture). Compiled in 733, it is one of the earliest written records of Japan. It is also one of the few *fudoki* that have survived almost completely intact to the present day. A copy of the multivolume text is displayed nearby.

The text mentions the presence of iron in the ancient Nita District (in what is now Okuizumo), indicating the centuries-long history of ironmaking in the region. The relevant section of the survey reads:

The iron from the above-mentioned townships [Fuse, Mitokoro, Mizawa, and Yokota] is durable and well suited for forging into various objects.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

古代出雲の記録

8世紀初頭の朝廷は、支配下にある土地についてさらに詳しく知るため、一連の地方調査（風土記）を依頼した。「出雲國風土記」は、出雲国（現在の島根県の一部）の地理と文化を調査したものである。733年に編纂されたこの書物は、日本最古の文書記録のひとつである。また、現在までほぼ完全な形で残っている数少ない風土記の一つでもある。近くには、何巻もある本文の写しが展示されている。この文書には、古代の仁多郡（現在の奥出雲）に鉄があったことが記されており、この地域で何世紀にもわたって製鉄が行われてきたことがわかる。

調査の関連項目には「上記の郡（布施、三所、三沢、横田）から産出される鉄は、耐久性があり、さまざまなものを鍛造するのに適している。」とある。

010-041

An Early Modern Tataru Manual

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 和鋼博物館 / 鉄山必要記事

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

An Early Modern Tataru Manual

The eight-volume *Tetsuzan hisho* (Secret records of the Iron Mountain) was written in 1784 by Shimohara Shigenaka (1738–1821), the owner of an iron smelting operation. The multivolume work was designed to be an exhaustive manual on the operation of an ironworks.

The manual's fourth volume (displayed here) includes explanations and sketches showing how to build a *tataru* furnace and a *takadono* workshop to house it. By the time *Tetsuzan hisho* was written, *tataru* furnaces had been moved indoors. As furnaces grew larger and the smelting process was lengthened to several days, workshops were built to protect the furnaces from wind and rain.

The manual covers not only technical elements of the smelting process but also behavioral rules for each category of worker. For example, one passage in Volume 6 states that ironworks owners should set an example by refraining from drinking alcohol or gambling. It also advises them to prevent wandering entertainers from entering the village and distracting the workers. For the same reason, it cautions *murage* (foremen) not to let women linger in the *takadono* workshop.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

近世のたたらマニュアル

『鉄山秘書』（全8巻）は、製鉄所の経営者であった下原重仲（1738-1821）が1784年に著したものである。彼はこの本を、製鉄所の運営を成功させるための徹底的なマニュアルにするつもりだった。

例えば、第4巻（ここに展示）には、たたら炉の作り方や、それを収容していた高殿の解説やスケ

ッチが掲載されている。『鉄山秘書』が書かれた頃には、たたら炉は屋外に作られることはなくなっていた。炉が大型になり、製錬が数日に渡っておこなわれるようになると、風雨から炉を守るための作業場が作られた。

このマニュアルは、製錬工程の技術的な要素だけでなく、各カテゴリーの作業員の行動規則も網羅している。たとえば、第6巻の一節には、鉄工所の経営者は自らの責任を負い、飲酒や賭博を慎むべきだと書かれている。また、放浪芸人が村に入って労働者の気を散らさないようにするよう忠告している。同じ理由で、高殿の作業場に女性が長居をしないよう、村下（作業長）に注意を促している。

010-042

Gathering Iron Sand: *Kanna-Nagashi*

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 鉄穴流し

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Gathering Iron Sand: *Kanna-Nagashi*

The iron sand used in the smelting process was originally gathered by sifting riverbeds for sediment that had accumulated naturally. However, collecting iron sand in this manner was a time-consuming process. By the late seventeenth century, a more effective technique called *kanna-nagashi* had been adopted throughout the region.

Instead of waiting for erosion to occur naturally, workers dug into exposed cliffsides by hand. The crushed rock fell into manmade canals that were dug alongside the exposed cliffs and was carried downstream to a sorting station at the foot of the mountain.

The sorting station comprised a series of four terraced pools that separated the heavier iron sand from the rest of the sediment. Iron sand sank to the bottom of the pools, while everything else flowed out through openings between them.

These dioramas depict several scenes of *kanna-nagashi* on a snowy winter day. This method was not permitted during the growing season to prevent sediment from damaging rice fields downstream.

Types of Iron Sand

Two different types of iron sand were gathered using the *kanna-nagashi* method: large-grained iron sand (*masa*) and fine-grained iron sand (*akome*). The large-grained sand was abundant in the San'in region (Shimane and Tottori Prefectures) and, being low in impurities such as titanium dioxide, was necessary for making steel. *Akome* iron sand was primarily used to make pig iron.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

砂鉄採取：鉄穴流し

製鉄に使用される砂鉄は、もともとは山の浸食によって下流に流れ込んだ川底の堆積物をふるいにかけて集めていた。しかし、こうして砂鉄を蓄積するのは時間のかかる作業だった。17世紀後半には、「鉄穴流し」と呼ばれる、より効果的な技法が、この地域で広く採用されるようになった。

自然浸食が起こるのを待つ代わりに、職人が手作業で露出した崖を掘ったのだ。作業員が岩を削り、堆積物を運河に押し込み、山麓の選鉱場まで運んだ。

選鉱場は、徐々に低くなる4つのプールで構成され、重い砂鉄を他の堆積物から分離するために使用された。砂鉄は底に沈み、それ以外のはプールの間の隙間から流れ出た。

これらのジオラマは、雪の降る冬の日の鉄穴流しのいくつかのシーンを表現している。この方法は、土砂の流下によって下流の水田が被害を受ける可能性がある農繁期には許可されなかった。

砂鉄の種類

鉄穴流し製法で採取された砂鉄は、大粒の砂（マサ）と細粒の砂（アコメ）の2種類である。山陰地方（島根県、鳥取県）には粒の大きな砂が豊富にあり、二酸化チタンなどの不純物が少ないため、鉄鋼の原料として欠かせなかった。アコメ砂鉄は主に銑鉄の製造に使用されていた。

010-043

Charcoal and Forest Management

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 和鋼博物館 / たたら炭・森林資源

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Charcoal and Forest Management

Charcoal is vital to the *tatara* ironmaking process. It acts as both a fuel and a reducing agent: the burning of charcoal releases carbon dioxide that reacts with and removes oxygen atoms from the iron sand, leaving behind elemental iron.

Oak, pine, and beech wood was used to make charcoal for *tatara* furnaces. Wood was taken primarily from trees that were at least 30 years old; by that age, they had already produced new generations of saplings, and their growth had begun to slow.

Charcoal is made by heating wood past the kindling point in an oxygen-deprived environment to prevent it from catching fire. By heating the wood at different temperatures and changing the duration for which it is “cooked,” it is possible to change the characteristics of the charcoal. The charcoal for *tatara* furnaces still contains a certain amount of organic matter, which burns faster and at a higher temperature, creating the temperatures necessary to smelt iron and steel.

At the height of ironmaking in the region, the average *tatara* furnace operated 60 times per year, annually consuming roughly 810 metric tons of charcoal. This meant that each furnace needed nearly 60 hectares of forest to supply it with charcoal. The ironworks owner was responsible for managing the forest so that fuel did not run out.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

木炭と森林管理

木炭は、たたら製鉄のプロセスにおいて、燃料としても還元剤としても欠かせない。木炭を燃やすと二酸化炭素が発生し、それが砂鉄と反応して酸素原子を取り除き、元素の鉄が残る。

たたら炉の炭は、檜、松、ブナなどさまざまな木から作られた。樹齢30年以上の木が主に使われた。樹齢が30年を超えると、すでに苗木の世代が生まれ、成長が鈍化していた。

木炭は、火がつかないように酸素の少ない環境で、楢木を過ぎてから加熱して作られる。薪を加熱する温度や時間を変えることで、炭の性質を変えることができる。たたら炉用の木炭は、まだある程度の有機物を含んでおり、より早く、より高い温度で燃焼し、鉄や鋼の製錬に必要な温度を作り出す。

地域の製鉄活動最盛期には、たたら炉は、平均的で年間60回稼働し、年間およそ810トンの木炭を消費していた。これは、炭焼きに必要な木材を供給するためには、1つの製鉄所あたり60ヘクタール近くの森林が必要だったことを意味していた。製鉄所の所有者は、燃料が不足しないよう森林を管理する責任があった。

010-044

Underground Structure of a *Tatara* Furnace

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 地下構造と築炉用道具

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Underground Structure of a *Tatara* Furnace

These dioramas show the process of building the underground structure of a *tatara* furnace. As larger and larger furnaces were developed, it became more challenging to maintain the high temperatures needed to smelt iron and steel. The furnace's underground section was devised to insulate the hearth and prevent heat from escaping. The basic design emerged in the fifteenth century, but the advanced version shown here was adopted in the 1700s.

To create the underground structure, workers first dug a pit between 3 and 5 meters deep that spanned a large area inside the *takadono* workshop. They built a narrow, stone-lined tunnel along the bottom of the pit to allow drainage, then covered the bottom with layers of gravel, clay, and charcoal. These components helped prevent underground moisture from reaching the furnace.

Next, workers constructed three stone-lined compartments: a deep trench in the center (directly below where the hearth would be built) with one smaller compartment on either side. These compartments were packed with wood, which was then burned to dry out the surrounding earth.

Once the fires died out, the trench was filled with charcoal and compacted ash to create a moisture barrier. The two smaller compartments were left empty to trap some of the escaping heat. Finally, workers filled in the remaining parts of the pit with clay to create a flat surface for the hearth and bellows.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

たたら製鉄所の地下構造

これらのジオラマは、たたら炉の地下構造物が構築される過程を表現している。炉の大型化が進むにつれ、鉄や鋼の製錬に必要な高温を維持することが難しくなった。地下部分は、囲炉裏を断熱し、底部から熱が逃げるのを防ぐために考案された。基本的なデザインは15世紀に導入されたが、ここで示している高度な型は1700年代に採用された。

地下構造物を作るために、作業員たちはまず、高殿の作業場の広い範囲にわたって深さ3メートルから5メートルの穴を掘った。彼らは、坑底に石を敷き詰めた細いトンネルを掘って排水可能にし、坑全体を砂利、粘土、木炭の層で埋めた。これらの部品は、地下の湿気が炉に到達するのを防ぐのに役立った。

次に、作業員は3つの石を並べたコンパートメントを作った。中央に深い溝（囲炉裏を作る場所の真下）、左右に2つの小さな空洞である。この区画には薪が詰められ、それを燃やして周囲の大地を乾燥させた。

火が消えると、溝は木炭と圧縮された灰で埋められ、炉の下に防湿壁が作られた。2つの小さな空洞は、逃げる熱の一部を閉じ込めるために空いているままにされた。最後に、作業員たちは坑の残りの部分を粘土で埋め、炉とふいごのための平らな表面を作った。

010-045

Operating a *Tatara* Furnace

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 操業の工程

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Operating a *Tatara* Furnace

Tatara furnaces can be operated using two different methods: direct smelting and indirect smelting. The direct method creates a porous mass of iron and steel, called a *kerā*, which is formed at the bottom of the furnace. The indirect method creates lower-grade pig iron, which flows out through channels at the base of the furnace.

Direct smelting is employed at Nittōho *Tatara*, a local ironworks that revived the *tatara* method. Each operation is a continuous process that lasts three days and three nights. While a crew of workers maintains the supply of raw materials in the workshop, the *murage* (foreman) and his assistant add layers of iron sand and charcoal to the furnace every 30 minutes or so.

The exact amounts of iron sand and charcoal consumed in a single operation of the furnace differ each time. The *murage* must judge how much to add by listening to the sound of the furnace and observing the state of the *kerā* through small holes in the furnace near the air pipes. On average, Nittōho *Tatara* uses 10 metric tons of iron sand and 12 metric tons of charcoal to produce a *kerā* weighing 3 metric tons.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

たたら炉の操業

たたら炉は、直接製錬と間接製錬の2つの異なる方法で操業することができる。直接法では、炉の底にケラと呼ばれる多孔質の鉄と鋼の塊ができる。間接法では低品位の銑鉄が生産され、銑鉄は炉底の路を通して流出する。

たたら製鉄を復活させた地元の製鉄所、日刀保たたらでは、直接製錬法が採用されている。各工程は3日3晩の連続作業である。作業場の原材料の供給を維持する作業員がいる間、村下と

助手は約30分ごとに炉に砂鉄と炭を追加していく。

一回の操業で消費される砂鉄と木炭の正確な量は、毎回異なる。村下は、炉の音を聞きながら、空气管の近くにある炉の小さな穴（「羽口」と呼ばれる）からケラの状態を観察して、加える量を判断しなければならない。日刀保たたらでは、平均3トンのケラを作るのに、10トンの砂鉄と12トンの木炭を使う。

010-046

Ironmaking Tools

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 製錬道具・鋸の粉碎・玉鋼選別

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Ironmaking Tools

The tools displayed here were used to operate a *tatara* furnace. Most of them were made of wood, which is lighter than metal and thus less tiring to use during the exhausting multiday operation. Wooden tools also conduct less heat and are therefore safer. The tools here include a fire board for lighting the furnace, a flat shovel for adding iron sand, and a narrow hook for clearing away slag.

Breaking Apart the Kera

The *kera* produced in the direct smelting method is a porous mass of high- and low-grade iron and steel. When the smelting process is complete, the furnace is demolished before the flames are extinguished, and the still-glowing *kera* is dragged out to cool.

Once the heat has subsided, workers move the *kera* to a workshop, where it is smashed apart with a drop hammer. This process is repeated with smaller hammers until the chunks of *kera* are small enough to be handled and sorted by a single worker.

Sorting the Iron and Steel

The most valuable material of the *kera* is *tamahagane* steel, which can be sold without any additional processing. Less valuable metals, such as pig iron and impure steel, must be refined before they can be sold.

Tamahagane produced by Nittōho Tatara is typically graded into three levels, with an additional category for exceptionally high-grade steel. The highest-quality steel has a carbon content of between 1.0 and 1.5 percent, the ideal amount for making sharp, flexible swords.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

製錬道具

ここに展示されているのは、たたら炉を操作するための道具である。そのほとんどは木製で、金属製よりも軽く、何日間もかかる作業でも使いやすかった。木製の道具は熱伝導率も低いため、より安全に使用できる。ここにある道具は、炉に火をつけるための火皿、砂鉄を加えるための平たいシャベル、スラグを取り除くための細いフックなどである。

鋳の粉碎

直接製錬法で生産されるケラは、高品位と低品位の鉄と鋼の多孔質塊である。製錬が終わると、炎が消える前に炉は解体され、まだ光っているケラは引きずり出されて冷やされる。

熱が冷めると、作業員はケラを作業場に運び、そこでドロップハンマーで叩き割る。この工程は、ケラの塊が一人で扱えるほど小さくなるまで、より小さなハンマーで繰り返される。

鉄と玉鋼の選別

ケラで最も価値があるのは玉鋼鋼で、これは採取してそのまま売ることができる。銑鉄や不純物を含んだ鋼鉄など、価値の低い金属は、販売する前に精錬しなければならない。

日刀保たたらで生産される玉鋼は、主に炭素の含有量によって3段階に格付けされ、さらに特別に高級な鋼のカテゴリーがある。最高品質の鋼の炭素含有量は1.0～1.5%で、鋭くしなやかな剣を作るには理想的な量だ。

010-047

Faith in Kanayago, Kami of *Tatara* Ironmaking

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 金屋子神・金屋子神社

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Faith in Kanayago, Kami of *Tatara* Ironmaking

Kanayago Jinja Shrine is the foremost shrine dedicated to Kanayago, the guardian kami deity of *tatara* ironworking. By the late 1700s, faith in the deity had spread widely among ironworking communities in the Chūgoku region (now Hiroshima, Okayama, Shimane, Tottori, and Yamaguchi Prefectures). The documents displayed here are records of donations made in 1791, 1807, and 1819 for repairs to the shrine.

According to an eighteenth-century text called *Tetsuzan hisho* (Secret records of the Iron Mountains), Kanayago descended to Harima Province (now Hyogo Prefecture) from the heavenly realm of the kami. Riding on the back of a white heron, she searched the region for a suitable residence and alighted on a katsura tree in the mountains roughly 35 kilometers southwest of where Wakou Museum now stands. A man named Abe Masashige was hunting in the mountains, and he was startled to see Kanayago descend from the heavens. Kanayago ordered Abe to build a shrine, and when it was complete, she taught him how to make iron using the *tatara* method. The shrine now stands in the Hirose district of Yasugi.

Kanayago is frequently described as a particularly finicky deity who is unhappy with her own appearance and jealous of other women. In fact, women were often prohibited from approaching the furnace during the smelting operation to avoid angering Kanayago. She is sometimes depicted riding a fox.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

金屋子神・金屋子神社

金屋子神社は、たたら製鉄の守護神である金屋子を祀る総本宮である。1700年代後半にな

ると、中四国（現在の広島県、岡山県、島根県、鳥取県、山口県）の鉄工業者の中で、この神への信仰が広まった。ここに展示されているのは、1791年、1807年、1819年に神社を修理するために寄付された記録である。

18世紀の『鐵山秘書』によれば、金屋子は天神の国から播磨国（現兵庫県）に降臨した。白鷺の背に乗り、適当な住居を探し求め、現在の和光美術館の南西約35kmの山中にある桂の木に降り立った。その頃、安部正重という男が山で狩りをしていて、金屋子の登場に驚いた。彼女は安部に神社を建てるよう命じ、たたら製鉄を教えた。その神社は現在、安来の広瀬地区にある。

金屋子は、自分の容姿に不満があり、他の女性に嫉妬する、特に気難しい神としてよく描写される。実際、金屋子の機嫌を損ねないよう、女性は製錬中に炉に近づくことを禁じられていた。ま彼女はキツネに乗った姿で描かれることもある。

010-048

Exhibit Room 3: What Happened to *Tatara* Ironmaking?

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 第3展示エリア

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Exhibit Room 3: What Happened to *Tatara* Ironmaking?

Tatara ironmaking was a major industry in the Chūgoku region (Hiroshima, Okayama, Shimane, Tottori, and Yamaguchi Prefectures) from the 1700s to the late 1800s. At one point, the region produced 80 percent of all the iron and steel made in Japan.

In the late nineteenth century, the arrival of Western reverberatory and blast furnaces created stiff competition in the smelting industry. Compared to *tatara* furnaces, the newer Western furnaces produced iron and steel more quickly and in greater quantities.

Engineers at *tatara* ironworks designed more efficient furnaces and developed new types of steel that could be produced using traditional methods and materials, and the port town of Yasugi became an important hub for this research and development. However, traditional *tatara* ironworks were ultimately unable to compete, and most of them closed in the 1920s. Today, the legacy of smelting lives on in Yasugi's modern-day steel industry.

The exhibits in this section describe the function of local ironworks in the iron and steelmaking industry, both before and after the advent of new technologies from the West.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

第3展示室：たたら製鉄はどうなったか？

たたら製鉄は、18世紀から19世紀後半にかけて中国地方（広島県、岡山県、島根県、鳥取県、山口県）の主要産業であった。ある時期には、この地域の鉄生産量は国内の鉄鋼生産量の80%を占めていた。

19世紀後半に西洋の反射炉や角炉が登場すると、製錬業界は厳しい競争にさらされるようになった。たたら炉に比べ、これらの西洋的な炉は、より早く、より多くの鉄と鋼を生産した。

技術者たちはより効率的なたたら炉を設計し、砂鉄の特徴的な使い方を踏襲しながら、新しいタイプの鋼鉄を開発した。安来の港町は、この研究開発の重要な拠点となった。しかし、伝統的なたたら製鉄所は最終的に競争に打ち勝つことができず、1920年代にはほとんどが閉鎖されたが、製錬の遺産は現代の安来の鉄鋼業に受け継がれている。

このセクションの展示は、西洋からの新技術の出現の前後で、地元の製鉄所がどのように製鉄・製鋼業に機能していたかを説明している。

010-049

Yasugi Port

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 安来港（江戸時代）

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Yasugi Port

Starting in the early 1600s, a significant portion of the iron produced in the regions of Okuizumo and Hōki (western Tottori Prefecture) was shipped out through the port of Yasugi. Yasugi is situated on Lake Nakaumi, whose calm waters and easy access to the Sea of Japan made it a good location from which to transport metals produced in the neighboring mountains. Over time, the town grew into a thriving shipping center.

The map shows where different types of wholesalers set up warehouses in Yasugi. The many gray-colored areas represent brokers who specialized in iron and steel. Shops that dealt in rice and cotton were also common, as were restaurants and inns that catered to the crowds of merchants who passed through the town.

Yasugi had thrived as a port town, but once it was connected to the San'in Line railway in 1908, it became cheaper to transport goods by train than by boat. With the profits from water transport now lost to railway companies, local industry shifted its focus, and Yasugi became a production center for high-grade steel.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

安来港

1600年代初頭から、奥出雲や伯耆（鳥取県西部）で生産された鉄のかなりの部分は、安来港を通じて出荷された。安来は中海の湖畔に位置し、穏やかな水と日本海へのアクセスの良さから、近隣の山々で産出される金属を輸送するのに適した場所である。やがて、この町は海運の中心地として栄えるようになった。

この地図は、安来に倉庫を構える卸売業者の所在地を示したものである。多くのグレーのの区画は、鉄鋼専門のブローカーを表している。米や綿花を扱う店も多く、町を行き交う商人たちをもてな

すレストランや旅館もあった。

港町として栄えていた安来だが、1908年に山陰本線の鉄道が開通すると、船よりも汽車で運んだほうが安上がりになった。水運の利益が鉄道会社に奪われたことで、地場産業の中心は安来に移り、安来は高級鋼の産地となった。

010-050

Shipping Iron and Steel

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 鋼の流通

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Shipping Iron and Steel

During the Edo period (1603–1867), iron and steel were shipped in wooden boxes wrapped in thick straw rope. Loops braided into the rope were used to grab the boxes from any side. If a careless worker dropped one of these heavy packages overboard while the boat was being loaded, the box could quickly be retrieved by snagging the loops with a boathook.

Shipments leaving Yasugi originally headed southwest, along the Sea of Japan coast, before circling east through the Kanmon Strait and up across the Seto Inland Sea to Osaka. This shipping route was extended in the mid-eighteenth century, and merchant boats called *kitamaebune* began heading northeast from Yasugi, looping clockwise around Japan's northernmost islands and thereby creating a maritime network that linked Osaka and Hokkaido. As a result of the increased flow of goods and people, Yasugi became a thriving port town.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鋼の流通

江戸時代（1603年～1867年）、鉄や鋼は太いわら縄で巻いた木箱で出荷されていた。ロープに編み込まれた輪は、どの方向からでも箱をつかむために使われた。。不注意な作業員が船積み中に重い荷物を海に落としても、沈む前にボートフックでループを引っ掛ければすぐに回収できる。

安来を出港した船は当初、日本海沿岸を南西に向かい、その後関門海峡を東に回り、瀬戸内海を渡って大阪に向かった。しかし、この航路は18世紀半ばに拡張された。安来から北前船と呼ばれる商船が北東に向かい始め、日本最北端の島々を時計回りに周遊することで、大阪と北海道を結ぶ海上ネットワークが形成された。物資と人の流れが活発になった結果、安来は商業の中心地となった。

010-051

Kakuro Blast Furnace

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 角炉（模型）

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

***Kakuro* Blast Furnace**

This is a 1:10 scale model of a *kakuro* blast furnace that was used at Torikami Ironworks in Okuizumo. The actual furnace is 4.6 meters tall and was operated intermittently between 1918 and 1965. The original furnace still stands at the site of Torikami Ironworks, which is now the location of Nittōho Tataru.

Kakuro blast furnaces were developed to increase the efficiency of the *tataru* ironmaking method. Like their earlier versions, such furnaces were fed iron sand and charcoal, but the tall, square furnaces were built of brick, not clay. *Kakuro* furnaces could also be operated continuously, unlike the clay furnaces of prior centuries, which had to be demolished to retrieve the lumps of iron and steel that formed within them.

The machinery at the side of the furnace is a set of box bellows. Unlike the manpowered *tenbin* bellows of *tataru* furnaces from the early 1700s onward, these box bellows were powered by a waterwheel.

The design of the *kakuro* blast furnace eliminated the need for multiday shifts overseen by highly trained foremen. To operate the *kakuro* furnace, four workers on the upper level added iron sand and charcoal, while two workers on the lower level cleared away the pig iron and slag that flowed out. Each six-person crew worked a 12-hour shift.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

角炉

奥出雲の鳥上製鉄所で使用されていた角炉の10分の1模型である。実際の炉は高さ4.6メートルで、1918年から1965年まで断続的に稼働していた。現在は日刀保たたらがある鳥上製鉄所

跡に保存されている。

角炉は、たたら製鉄の効率を高めるためにいち早く開発された。砂鉄と木炭を使ったのは先代と同じだが、背の高い四角い炉は粘土ではなくレンガ造りだった。また、角炉は何世紀にもわたって使用されてきた粘土炉とは異なり、連続操業が可能だった。それまでの粘土炉は、その下に形成される鉄や鋼の塊を回収するために取り壊さなければならなかった。

炉の横にある機械は、箱ふいごのセットである。1700年代初めごろからたたら製鉄の要となっていた天秤ふいごとは異なり、人力の代わりに水車を動力としていた。角炉はまた、伝統的なタタラ法のように何日も交代で働く専門家を必要としない。角炉の操業は、上段で4人の作業員が砂鉄と木炭を加え、下段で2人の作業員が流れ出た銑鉄と鉋滓を取り除く。6人の従業員は、それぞれ12時間体制で働いた。

010-052

Blacksmiths and Merchants in Sanjō

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 刃物産地（新潟三条）流通

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Blacksmiths and Merchants in Sanjō

Iron and steel shipped from Yasugi birthed a secondary industry in the town of Sanjō, in what is now Niigata Prefecture. Beginning around 1650, blacksmiths in the Sanjō area received a rising demand for vast quantities of nails to rebuild homes, shops, and other buildings destroyed by fires and other natural disasters. Sanjō blacksmiths later began selling other equipment, such as sickles, scissors, and carpentry tools, and they gained a reputation for the quality of their products. For example, surviving order forms show how craftsmen adjusted the design of each sickle to fit the specific needs of their clients.

Products made in Sanjō were sold in Edo (now Tokyo) and throughout the country. This was possible partly because of the town's position at the intersection of the Shinano and Ikarashi Rivers, two major waterways that are linked to a broad network of smaller canals. This network delivered products made from Yasugi iron and steel to consumers in distant regions.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

三条の鍛冶屋と商人

安来から出荷された鉄鋼は、現在の新潟県にある三条市に第二次産業をもたらした。1650年頃から、三条地方の鍛冶屋は、火災やその他の自然災害の後、家屋や店舗、その他の建物を再建するために大量の釘の需要の高まりに対応した。三条の鍛冶屋はその後、鎌、はさみ、大工道具など他の道具の生産にも進出した。高品質な製品と顧客満足への献身で高い評価を得ている。例えば、現存する注文書には、職人がどのようにそれぞれの鎌のデザインを顧客の特定のニーズに合うように調整したかが記されている。

三条で作られた製品は、江戸(東京)を含む全国で販売された。それが可能になったのは、この町

が内陸水路に近く、海運に適していたからである。三条は、信濃川と五十嵐川という2つの大きな水路が交差する場所に位置し、小さな運河が幅広いネットワークでつながっている。このネットワークのおかげで、安来製鉄の製品は遠く離れた地域の消費者にも届くようになったのである。

010-053

Yasugi and the Founding of Unpaku Steel

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / たたらから特殊鋼会社への系譜

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Yasugi and the Founding of Unpaku Steel

The rapid industrialization of Japan during the Meiji era (1868–1912) required large amounts of iron and steel. As more and more of this demand was met using imported Western furnaces, owners of *tatara* ironworks feared they would be unable to compete. In 1899, in a collaborative effort to build on the long tradition of ironmaking in the region and improve *tatara* technology, a group of five entrepreneurs in Yasugi founded Unpaku Steel, Ltd. In addition to producing iron and steel, the company was an authorized broker for smaller ironworks in Okuizumo.

Steelworks with imported furnaces could produce steel in larger volumes, but they were less competitive in the production of high-grade metals. Engineers at Unpaku Steel developed more efficient and cost-effective methods for producing these high-grade metals, which became their market niche.

The developments at Unpaku Steel eventually led to the creation of Yasugi Specialty Steel (YSS), which is renowned for its hardness and durability. This steel is particularly suited for products that demand precision and uniformity, such as steel tools, razor blades, ball bearings, and electronic equipment. As the production center of this new material, Yasugi became known throughout the country as a “steel town.”

上記解説文の仮訳（日本語訳）

安来と雲伯鉄鋼の創業

明治時代（1868～1912年）の急速な工業化は、大量の鉄と鋼を必要とした。こうした需要の多くが輸入された西洋の炉でまかなわれるようになり、たたら製鉄所の経営者たちは競争に勝てなくなることを恐れた。1899年、たたら製鉄の技術を発展させ、この地域の製鉄の長い伝統を築き

上げるために、5人の企業家グループが共同で雲伯鋼鉄合資会社を設立した。同社は安来を拠点としていた。鉄鋼の生産だけでなく、奥出雲の小さな鉄工所の公認仲買人も務めていた。

輸入炉を使用する製鉄所は、より大量の鉄鋼を生産することができたが、高品位金属の生産においては競争力が低かった。雲伯鋼鉄の技術者たちは、より効率的で費用対効果の高い方法で高品位金属を生産する方法を開発し、それが市場での彼らの専門となった。

雲伯鋼鉄の努力は安来特殊鋼（YSS）はその硬度と耐久性で知られている。この鋼は、鋼製工具、剃刀、ボールベアリング、電子機器など、精度と均一性が要求される製品に特に求められている。この新素材の生産拠点として、安来は "鉄の町" として全国に知られるようになった。

010-054

Advancements in Steelmaking Technology

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / ハガネ技術革新（産業遺産）

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Advancements in Steelmaking Technology

In 1916, Unpaku Steel, Ltd. was renamed Yasugi Steel Manufacturing, Ltd. In the early 1900s, they sought new innovations in steelmaking, and their efforts produced two technological advancements for making high-grade steel: the adoption of electric arc furnaces and the use of iron sand to create sponge iron.

In 1928, following a year of intensive research, company president Kudō Haruto (1878–1963) developed a method for making sponge iron from iron sand. After being pulverized and sorted, the highest-grade iron sand was compacted into 3-centimeter balls. The balls and a reducing gas were then added to a rotary furnace and heated to around 900 degrees Celsius. In contrast to previous methods, the iron sand was directly reduced to sponge iron without first being melted.

The sponge iron was converted to steel using an electric arc furnace. Once the sponge iron had melted and the slag was drained out, the molten metal was immediately dumped into a pool of water. This process created small pellets of steel, known as “steel shot,” that were later processed into Yasugi Specialty Steel. The replica electric arc furnace on display is modeled after a furnace first used at the Kisuki Ironworks in 1930.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

製鉄技術の進歩

雲伯製鋼は製鋼の新機軸を模索し続け、1916年に株式会社安来製鋼と改称した。20世紀初頭、彼らは製鉄に新たな革新を求め、その努力は高級鋼を製造するための2つの技術的進歩をもたらせた。砂鉄を使って海綿鉄を作ることと、電気アーク炉を採用することである。

1928年、社長の工藤治人（1878-1963）は、1年にわたる徹底的な研究の末、砂鉄から海綿鉄を作る方法を開発した。粉碎・選別された最高級の砂鉄は、3センチ玉に圧縮された。その後、ボールと還元ガスを回転炉に加え、約900℃まで加熱した。これまでの方法とは対照的に、砂鉄を溶かすことなく直接スポンジ状の鉄に還元した。

海綿鉄は電気アーク炉を使って鋼鉄に変換された。海綿鉄が溶けてスラグが排出されると、溶けた金属はすぐに水のプールに捨てられた。この工程で、スチールショットと呼ばれる小さな鋼のペレットが作られ、後に安来特殊鋼に加工された。展示されている電気炉のレプリカは、1930年に木次製鉄所で初めて使用されていた炉をモデルにしている。

010-055

Forging a Japanese Sword

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 和鋼博物館 / 刀鍛冶作刀風景模型

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Forging a Japanese Sword

A major development in Japanese swordsmithing came in the mid-1500s, when new *tatara* ironmaking methods were developed to produce high-grade *tamahagane* steel. Japanese swords had been made with refined iron for centuries, but the amount of carbon in *tamahagane* steel is ideal for making blades that are both sharp and supple. Even today, it is the preferred material of Japanese swordsmiths.

When forging a sword, swordsmiths first heat and flatten the steel to a thickness of around 5 millimeters. The metal is then broken into pieces and sorted by hardness. To make the cutting edge of the sword, the hardest pieces are stacked and remelted into a single ingot. This ingot is then repeatedly folded, often as many as 15 times, producing a piece of steel with nearly 33,000 layers. These layers appear on the finished blade as a grain pattern that varies according to the forging technique.

Next, the ingot is wrapped around a core made from softer, more pliable steel, and they are hammered together. The swordsmith then hardens the blade through a quenching process called *yaki-ire*. The blade is first coated with uneven layers of clay, then heated to around 800 degrees Celsius and plunged into cold water. The layers of clay cause the metal to cool and contract unevenly, giving the blade the distinctive curve for which Japanese swords are known.

The style in which the clay is applied determines the appearance of the edge pattern (*hamon*) that runs down the blade. It can be straight, curvy, jagged, or any other shape the swordsmith desires. The swords in this display show how a swordsmith can produce different results and appearances using the same basic materials.

日本刀の鍛錬

日本の刀鍛冶が大きく発展したのは1500年代半ばのことで、新しいたたら製鉄法が開発され、高級な玉鋼が作られるようになった。日本刀は何世紀にもわたって製錬された鉄で作られてきたが、玉鋼に含まれる炭素の量は、切れ味としなやかさをあわせ持つ刃を作るのに理想的だった。今日でも日本の刀鍛冶が好んで使う材料である。

刀を鍛造する際、刀匠はまず鋼を熱し、5ミリほどの厚さに平らにする。その後、細かく砕かれ、硬さによって選別される。剣の切っ先を作るため、最も硬い破片を何層にも重ね、再溶解して1つのインゴットにする。このインゴットは繰り返し折り畳まれ、その回数は15回にも及び、約33,000層の鋼鉄を製造する。これらの層は鍛造技術によって異なる木目模様として、完成した刃に現れる。

次に、緻密なインゴットを、より柔らかくしなやかな鋼でできた芯に巻きつけ、両者を打ち合わせて刃を形成する。その後、刀匠は焼き入れと呼ばれる工程を経て刀身を焼き固める。刃はまず粘土で部分的にコーティングされ、約800℃に加熱された後、冷水に突っ込まれる。粘土の層によって金属が冷えて不均一に収縮し、日本刀の特徴である独特の曲線が生まれる。粘土の塗り方によって、刀身に走る刃文（はもん）の形が決まる。刃文は直線、曲線、ギザギザなど、刀匠が望む形にすることができる。この展示にある刀剣は、刀匠が同じ基本的な材料を使って、いかに異なる結果や外観を生み出すことができるかを示している。

010-056

Feel the Weight of a Japanese Sword

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 日本刀体験コーナー

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Feel the Weight of a Japanese Sword

Contemporary swords are produced as works of art rather than as deadly weapons. Although they will never be carried into battle, the swords are still made using the same methods as in the age of samurai, and they have the same physical properties as swords from centuries past.

Visitors can try holding the sword in this display case under the supervision of museum staff. To ask to hold the sword, please dial “11” on the nearby phone. The blade has been polished to reveal the edge pattern (*hamon*), but it is not sharp.

A staff member will provide gloves and instructions on how to hold the sword. Do not swing the sword, and be mindful not to touch the blade itself. Avoid letting sweat or saliva come into contact with the blade, since even small amounts of moisture can cause it to rust.

Visitors between the ages of 12 and 16 must hold the sword together with an adult. Visitors younger than 12 are not permitted to hold this sword, but museum staff can provide lightweight replicas that are suitable for kids.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日本刀の重みを感じる

現代の刀剣は、殺傷力のある武器としてではなく、芸術品として生産されている。戦場に持ち込まれることはないが、侍の時代と同じ製法で作られ、何世紀も前の刀剣と同じ物理的特性を持っている。

この展示ケースの中にある刀を、博物館のスタッフの指導のもと、実際に持ってみることができる。刀を持つことを希望される方は、お近くの電話の「11」をダイヤルしてください。刀身は磨かれて刃紋

(はもん) が見えるが、鋭利ではない。

スタッフが手袋を用意し、刀の持ち方を指導する。刀は振り回さず、刀身に触れないように注意する。汗や唾液などの水分が刀身につくと錆びることがある。

12歳から16歳までのご来場者様は、大人の方と一緒に剣を持つ必要がある。12歳未満のご来場者様はこの剣を持つことはできないが、博物館のスタッフが子供用の軽量レプリカを用意してくれる。

010-057

Is all iron sand the same?

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 和鋼博物館 / 4つの体験（顕微鏡・鉄穴流し・ふいご・玉鋼の虹）

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Is all iron sand the same?

Iron sand looks different depending on where it was collected—such as from a mountain, from a riverbed, or along the coast. You can use these microscopes to compare how the grains vary in size and shape.

How was iron sand collected?

Iron sand was gathered using a process called *kanna-nagashi*, which separated the heavier iron from silt and other particulates using their relative densities in water. Pools of different depths were used to collect the iron sand, which naturally sank to the bottom. Try lifting these four boxes to see how the percentage of iron sand changes the weight of the sediment. Be careful not to drop them!

How did the bellows work?

The most common type of bellows forced air out of an enclosed space using a wooden plank. You can test this yourself by pushing and pulling the handle of this box bellows. You can also try using the foot-operated *tenbin* bellows in the entrance lobby.

Why can I see colors on lumps of *tamahagane* steel?

The red, blue, and gold colors are created by light reflecting off an ultrathin oxide film that forms on parts of the steel during smelting. This phenomenon is similar to the rainbow patterns that appear on soap bubbles or on the surface of a CD.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

砂鉄はどれも同じなのか？

砂鉄は、山から採取されたか、河川敷から採取されたか、海岸沿いで採取されたかによって見え方が異なる。顕微鏡を使って、粒の大きさや形がどのように違うかを比較することができる。

砂鉄はどのようにして集められたのか？

砂鉄は、「かな流し」と呼ばれる方法で集められた。かな流しとは、水中の相対密度を利用して、重い砂鉄とシルトやその他の微粒子を分離する方法である。自然に底に沈む砂鉄を集めるために、深さの異なるプールが使われた。この4つの箱を持ち上げてみて、砂鉄の割合によって堆積物の重さがどう変わるかを見てみよう。落とさないように注意していただきたい！

ふいごの仕組みは？

最も一般的なタイプのふいごは、密閉された空間から空気を送り出すために木の板を使っていた。この箱ふいごのハンドルを押したり引いたりして、自分で試すことができる。また、エントランスロビーにある足踏み式のテンビンふいごを使ってみることもできる。

なぜ玉鋼の塊に色が見えるのか？

赤、青、金の色は、製錬中に鋼の一部に形成される極薄の酸化膜からの光の干渉によって生み出される。この現象は、シャボン玉やCDの表面に現れる虹の模様と似ている。

010-058

Tatara Furnace and Bellows

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】和鋼博物館 / 第1展示室 中央たたら模型
【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Tatara Furnace and Bellows

This full-scale replica of a *tatara* furnace from the late nineteenth century is accompanied by the actual bellows used at Wakasugi Ironworks (Shimane Prefecture) from 1891 to 1913.

Building a *tatara* furnace of this size required roughly 4 metric tons of clay. The walls were thicker at the base, forming a triangular trough where the molten iron and steel gathered. As smelting progressed, the clay walls began to melt. The sticky, liquified clay reacted with impurities in the iron and steel before flowing out of the furnace as a byproduct called “slag.” At the end of each operation, the hearth’s half-melted walls were torn down, and a new hearth was built.

The foot-operated bellows on either side of the furnace are called *tenbin*, or “balancing scale” bellows. This type of bellows, operated by a single person who stood atop the wooden pedals, came into use by the early eighteenth century. Throughout the multiday smelting operation, a crew would work the bellows in shifts, feeding air into the furnace in a consistent rhythm.

The clay faces molded into the tops of the bellows were meant to serve as protective charms. Although many different designs were used, the two faces here depict Gan Jiang and Mo Ye, a semi-mythological husband and wife associated with swordmaking in Chinese literature.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

たたら炉とふいご

19世紀後半のたたら炉の実物大レプリカで、1891年から1913年まで若杉鉄工所（島根県）

で使用されていた実物のふいごが付属している。

この規模のたたら炉を建設するには、約4トンの粘土が必要だった。壁は底部で厚くなり、溶けた鉄と鋼が集まる三角形の谷を形成した。製錬が進むにつれて、土壁が溶け始めた。粘着性の液体粘土は鉄や鋼中の不純物と反応し、その後スラグとして炉から流れ出た。各操作の終了時に、半分溶けた壁は取り壊され、新しい炉が建設された。

炉の両側にある足で操作するふいごは、「天秤」ふいごと呼ばれる。このタイプのふいごは、木製のペダルの上に立って一人が操作するもので、18世紀初頭までに使用されるようになった。数日間にわたる製錬作業の間、作業員はふいごを回転させながら一定のリズムで炉内に空気を送り込んだ。

ふいごの上部に成形された粘土の面は、保護のお守りとして機能することを意図していた。さまざまなデザインが使用されたが、この2つの顔は、中国文学の剣づくりに関連する半神話的な夫婦、干将と莫邪を描いている。

010-059

Tatara Furnace

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 中央たたら断面模型 2 階「たたら炉の平面図・たたら炉の断面図」

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Tatara Furnace

The *tatara* furnace reproduced here shows how smelting was performed around the turn of the twentieth century. A rectangular clay furnace stands in the center of the model, connected to bellows on each side by a set of bamboo tubes.

This replica depicts a late stage in the multi-day smelting process. A porous lump of iron and steel (*kerā*) has formed, as represented by the shiny gray mass at the bottom of the furnace. The initially thick clay walls of the furnace have mostly melted away, reacting with impurities in the molten iron to form a waste product called “slag.” Over the course of the smelting process, the slag slowly oozes out through holes at the base of the furnace, which can be seen on the opposite side of the model.

In contrast to the more recognizable man-powered bellows, the bellows in this replica are similar to those currently used at Nittōho Tatara. The moving parts are housed in a separate building, and air is sent to the *takadono* workshop through pipes.

The success of the smelting depends on creating specific chemical reactions inside the furnace, and these require a certain type of clay and a steady flow of oxygen to feed the flames. The importance of these elements is communicated in a common saying among ironworkers: “First, good clay. Second, good air. Third, a good foreman.”

(The furnace’s underground structure is described on the sign at the bottom of the stairs.)

上記解説文の仮訳（日本語訳）

たたら炉

ここに再現されたたたら炉は、20世紀初頭の製錬の様子を示している。模型の中央には長方形の土炉があり、左右のふいごは竹筒でつながれている。

このレプリカは、数日にわたる製錬プロセスの後期段階を描いている。多孔質の鉄と鋼の塊（ケラ）が形成され、炉の底にある光沢のある灰色の塊がそれを表している。当初は厚かった粘土壁はほとんど溶け出し、溶けた鉄の中の不純物と反応して、「スラグ」と呼ばれる廃棄物を形成している。製錬の過程で、スラグは炉底の穴からゆっくりとにじみ出てくるが、これは模型の反対側から見るができる。

人力で動くふいごとは対照的に、このレプリカのふいごは、現在日刀保たたらで使われているものとよく似ている。機械で動くふいごの可動部分は別の建物にあり、空気はパイプを通して高殿の作業場に送られる。

製錬が成功するかどうかは、炉の中で特定の化学反応を起こすかどうかにかかっており、そのためにはある種の粘土と、炎に供給するための安定した酸素の流れが必要だった。これらの要素の重要性は、鉄工職人の間でよく使われる格言に表れている：「第一に良い粘土。第二に、良い空気。第三に、良い村下」。

(炉の地下構造は階段下の看板に書かれている)

010-060

Yamata no Orochi Sculpture

鉄の道文化圏推進協議会

【タイトル】 奥出雲たたらと刀剣館 / 「大和大蛇」神話のモニュメント

【想定媒体】 その他（アプリQRコード）

できあがった英語解説文

Yamata no Orochi Sculpture

This sculpture is inspired by Yamata no Orochi, a mythological serpent with eight heads and eight tails. Created by Itō Takamichi (b. 1939), the stainless-steel sculpture was originally displayed at an international science and technology exposition held in Tsukuba (Ibaraki Prefecture) in 1985. It measures 19 meters long and 6.98 meters tall.

The legend of Yamata no Orochi appears in some of the oldest written records of Japan. In it, the Shinto deity Susanoo no Mikoto descends from the realm of heavenly deities and arrives at Mt. Sentsū (located around 8 kilometers to the east of this museum). He encounters a forlorn husband and wife, who lament that Yamata no Orochi will soon appear to eat their daughter. Susanoo no Mikoto slays the beast and discovers a sword hidden in one of its tails. The sword is one of the three sacred treasures of the imperial regalia of Japan. This story highlights the long-held association between the Okuizumo region and swordsmithing.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ヤマタノオロチの彫刻

八つの頭と八つの尾を持つ神話の大蛇「ヤマタノオロチ」をモチーフにした彫刻。1939年生まれの伊藤隆道が制作し、1985年につくば（茨城県）で開催された国際科学技術博覧会に出品された。全長19メートル、高さ6.98メートル。

八岐大蛇（やまたのおろち）の伝説は、日本最古の文献に登場する。そこでは、スサノノミコトが天界から降臨し、当館の東約8キロに位置する船通山に到着する。そこでスサノノミコトは、八岐大蛇が娘を食べに来ると嘆く夫婦に出会う。スサノノミコトは獣を退治し、その尾の中に剣が隠さ

れているを発見する。剣は日本の皇室の三種の神器の一つである。この物語は、奥出雲地方と刀鍛冶との古くからの結びつきを浮き彫りにしている。

地域番号	011	協議会名	やまぐち萩往還語り部の会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
011-001	萩往還① / やまぐち萩往還語り部の会案内所 (体験)		251～500ワード	看板 その他 (アプリ) Webページ
011-002	萩往還①/ やまぐち萩往還語り部の会案内所 (スポット)		250ワード以内	Webページ その他 (アプリ)
011-003	萩往還② / 瑠璃光寺五重塔		251～500ワード	Webページ その他 (アプリ)
011-004	萩往還②/ 香山公園		251～500ワード	Webページ その他 (アプリ)
011-005	萩往還③ / 天花坂口		251～500ワード	Webページ その他 (アプリ)
011-006	萩往還④ / 六軒茶屋		251～500ワード	Webページ その他 (アプリ)
011-007	萩往還⑤ / 板堂峠		250ワード以内	Webページ その他 (アプリ)
011-008	萩往還⑥ / 鱧石橋		250ワード以内	Webページ その他 (アプリ)
011-009	萩往還⑦ / 札の辻		250ワード以内	Webページ その他 (アプリ)
011-010	萩往還⑦ / 山口サビエル記念聖堂		251～500ワード	Webページ
011-011	萩往還⑦/ 常栄寺雪舟庭		251～500ワード	Webページ
011-012	萩往還⑦/ 明治維新と山口市		251～500ワード	Webページ
011-013	萩往還⑦/ 湯田温泉		251～500ワード	Webページ

011-001

Guided Walking Tours of the Hagi Okan

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還① / やまぐち萩往還語り部の会案内所 (体験)

【想定媒体】看板 / その他 (アプリ) / Webページ

できあがった英語解説文

Guided Walking Tours of the Hagi Okan

Walk sections of the historic Hagi Okan highway with a guide from the Hagi Okan Storytellers Association (Hagi Okan Kataribe no Kai). Tours can be fully customized for fitness level and interest, and typically include scenic, cultural, and historical sites such as bamboo groves, Shinto shrines, and Edo-period (1603–1867) merchant homes.

Guides introduce the history of the Hagi Okan against the backdrop of the Choshu domain (modern-day Yamaguchi Prefecture) and the politics of the Edo period. The four most popular routes cover individual sections of the 53-kilometer highway between Hagi in the north and Mitajiri in the south. They range between 2.5 and 12.5 kilometers and take from 2 to 4 hours to complete.

Route A starts in the castle town of Hagi and passes a museum dedicated to Yoshida Shoin (1830–1859), a samurai and scholar who helped lay the foundation for the Meiji Restoration of 1868. This historic event marked the end of the political authority of the shogunate and the restoration of sovereign power to the emperor. Route B connects the old towns of Akiragi and Sasanami, and includes an original stone paved section of the highway.

Sites along Route C include an area where the processions of the lords of the Choshu domain traveling to the capital in Edo (modern-day Tokyo) would rest on their journeys. It is a particularly scenic route along one of the steepest sections of the highway, on the edge of the present-day city of Yamaguchi. Route D runs through what is now the city of Hofu. It starts at Hofu Tenmangu, an ancient shrine founded in

the tenth century, and ends at Eiuonso, a villa near the port at Mitajiri. The lord of Choshu and his retinue stayed overnight at the villa, then continued their journey to Edo by boat as far as Osaka.

The Hagi Okan was developed by the Mori family, the daimyo of the Choshu domain, after the construction of Hagi Castle in 1604. The road connected the lands ruled by the Mori family and allowed transport and trade between the coasts of the Sea of Japan and the Seto Inland Sea. Exploring this historic route offers insight into the history of Yamaguchi Prefecture and the culture of the Edo period.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ガイドと行く萩往還ウォーキングツアー

萩往還語り部の会のガイドとともに歴史街道萩往還のいくつかの区間を歩きます。このツアーは体力や興味に合わせて自由に組み立てることができ、通常は竹林、神社、江戸時代（1603年-1867年）の商家などの景勝地、文化遺産、史跡が盛り込まれています。

ガイドが長州藩（現在の山口県）と江戸時代の政治を背景に、萩往還の歴史について紹介します。最も人気のある4つのコースは、北は萩から南は三田尻までをつなぐ53キロの街道の各区間を網羅しています。それぞれのコースは、2.5キロから12.5キロまでで、2時間から4時間かかります。

ルートAは萩の城下町からスタートし、1868年の明治維新の基礎を築く武士で教育者の吉田松陰（1830年-1859年）を記念した歴史館を通ります。この歴史的出来事は幕府の政治的権力の終焉や天皇への主権の回復を示しました。ルートBは明木と佐々並の古い街並みをつなぎ、この街道の昔のままの石畳の区間を通ります。

ルートC沿いには長州藩主が首都江戸（現在の東京）へ上洛するときに休憩した場所があります。これは、現在の山口市の端に位置する、街道の最も急こう配な区間のうちの1つに沿った特に風光明媚なルートです。ルートDは、現在の防府市を通ります。ルートDは10世紀に創建された古い神社である防府天満宮から始まり、三田尻港近くにある別邸、英雲荘で終わります。長州藩主とその従者は、この別邸に一泊し、江戸を目指して船で大阪まで旅を続けました。

萩往還は1604年に萩城が築城された後、長州藩藩主毛利家によって開発されました。萩往還は毛利家が統治する領土をつなぎ、日本海と瀬戸内海沿岸の間の輸送や取引を可能にしました。この歴史あるルートを探索すると、山口県の歴史や江戸時代の文化を知ることができます。

011-002

Hagi Okan—A Historic Highway

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還①/ やまぐち萩往還語り部の会案内所（スポット）

【想定媒体】Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Hagi Okan—A Historic Highway

Sections of a historic highway established in the early seventeenth century remain between the cities of Hagi, Yamaguchi, and Hofu in Yamaguchi Prefecture. Walking tours trace the Hagi Okan highway through town centers, rural farming communities, and along narrow stone paved paths over forested mountain passes. Exploring this route offers insight into the history of Yamaguchi Prefecture and the culture of the Edo period (1603–1867).

The highway was developed by the Mori family, the rulers of the Choshu domain (present-day Yamaguchi Prefecture) after the construction of Hagi Castle in 1604. The Hagi Okan road connected the lands ruled by the Mori family and improved transport and trade between the Sea of Japan and the Seto Inland Sea.

From 1635, the lords of Choshu spent alternate years in Hagi and the capital Edo (modern-day Tokyo) as part of the performance of alternate attendance (*sankinkotai*) enforced by the Tokugawa shogunate. They traveled with their retainers in large processions along the Hagi Okan from the castle in Hagi to Mitajiri, a port in the modern-day city of Hofu where they boarded boats for their onward journey. After residing in the capital for a year, they returned to Hagi.

The Hagi Okan is approximately 53 kilometers, and the highest point is Itado Pass (537 m). The 2.5-kilometer section of the highway from Tenge-sakaguchi in Yamaguchi City to Itado Pass on the border with Hagi City is particularly scenic and passes historical landmarks such as the sites of tea houses where people stopped to rest.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

萩往還—歴史街道

17世紀初頭に整備された歴史街道の一部が山口県萩市と山口県防府市の間に残っています。ウォーキングツアーでは萩往還をたどり、町の中心部や田舎の農村地帯を通り、森林に覆われた峠を越える狭い石畳の小道に沿って進みます。このルートを探索すると山口県の歴史と江戸時代(1603年-1867年)の文化を深く知ることができます。

この街道は1604年に萩城が築城された後、長州藩（現在の山口県）の統治者である毛利家によって開発されました。萩往還は毛利家が統治していた土地を結び、日本海と瀬戸内海の間交通と貿易を改善させました。

1635年から長州藩主は徳川幕府によって課された参勤交代の一環として萩と首都江戸（現在の東京）を隔年で行き来しました。彼らは家臣とともに萩城から萩往還に沿って大行列を組んで三田尻、現在の防府市の港まで旅し、そこで船に乗って江戸に向かいました。1年間都に滞在した後、彼らは萩に戻りました。

萩往還は約53キロメートルにわたり、最高地点は板堂峠(537m)です。山口市の天花坂口から萩市との境にある板堂峠までの約2.5キロメートルの区間は特に風光明媚で、人々が休憩するために立ち寄った茶屋跡などの史跡が点在しています。

011-003

Rurikoji Temple Five-Storied Pagoda

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還② / 瑠璃光寺五重塔

【想定媒体】Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Rurikoji Temple Five-Storied Pagoda

Rurikoji Pagoda is famed for its elegant appearance and robust structure. It was completed circa 1442 and has never toppled or been rebuilt. The pagoda was commissioned by Ouchi Morimi (1377–1431), the head of the Ouchi clan, the rulers of modern-day Yamaguchi Prefecture between the mid-fourteenth and mid-sixteenth centuries.

The five-storied pagoda has thatched *hiwadabuki* roofing, which uses multiple layers of cypress bark shingles to accentuate the curvature of its deep eaves. A large central pillar approximately 50 centimeters in diameter at its base forms the axis of the pagoda, providing stability to the structure. From the base to the top, each story is progressively smaller, contributing to the structure's balanced appearance. The pagoda is 31.2 meters high and stands out among the trees on the grounds of Kozan Park. It is a popular symbol of Yamaguchi, often photographed in early spring against a backdrop of plum blossoms, and in autumn surrounded by colorful foliage.

Ouchi Morimi commissioned the pagoda as a memorial to his older brother Yoshihiro (1356–1399), an influential warlord who expanded the clan's landholdings to include territories in present-day Wakayama and Fukuoka Prefectures. Construction took several decades, however, and Morimi died before the pagoda was completed. The building houses a wooden statue from the Heian period (794–1185) of Amida, the Buddha of Infinite Light, and a bronze statue of Ouchi Yoshihiro. While the interior of the pagoda is not open to the public, the statues are visible through the lattice doors.

Rurikoji Pagoda is a National Treasure. It is considered one of Japan's Three Greatest Pagodas alongside the five-storied pagodas of Horyuji Temple in Nara Prefecture and Daigoji Temple in Kyoto.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

瑠璃光寺五重塔

瑠璃光寺五重塔は優美な外観と堅牢な構造で有名です。1442年頃に完成し、一度も倒壊・再建されたことはありません。この塔は14世紀中頃から16世紀中頃にかけて現在の山口県を統治していた大内氏当主である大内盛見（1377年-1431年）によって建設されました。

五重塔は檜皮葺きで深い軒の曲面を強調するために檜皮の屋根板が何層も重ねられています。基部の直径約50センチメートルの大きな心柱が塔の軸となり構造を安定させています。基部から最上部に向かって各階が徐々に小さくなり、バランスの取れた外観を作り出しています。塔の高さは31.2メートルで香山公園の敷地内にある木々の中でひときわ目立っています。山口の人気のシンボルであり、早春には梅の花を背景に、秋には色とりどりの紅葉に囲まれる写真が撮られます。

大内盛見は現在の和歌山県と福岡県の領土を含むまで藩の領土を拡大した影響力のある軍事指導者である兄の義弘（1356年-1399年）の記念碑としてこの塔を建設しました。しかし建設には数十年を要し、塔が完成する前に盛見は亡くなりました。この塔には平安時代（794年-1185年）の阿弥陀仏の木像と大内義弘の銅像が安置されています。五重塔の内部は非公開ですが格子戸から仏像を眺めることができます。

瑠璃光寺五重塔は国宝です。奈良県の法隆寺と京都の醍醐寺にある五重塔と並んで日本三大五重塔の一つに数えられています。

011-004

Kozan Park

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還②/ 香山公園

【想定媒体】Webページ / その他 (アプリ)

できあがった英語解説文

Kozan Park

Kozan Park presents a microcosm of Yamaguchi's history from the fourteenth century onwards, in its statues, monuments, and historical structures associated with past rulers and influential figures. The grounds are planted with plum, cherry, and maple trees, and azalea and hydrangea shrubs, offering scenic views throughout the year.

Admission to the park is free of charge.

Statue of Sesshu

Near the entrance of the park there is a monument of Sesshu (1420–1506), a Zen Buddhist priest who was one of Japan's most prominent ink wash landscape painters. He resided intermittently for many years in Yamaguchi and had a studio in the town where he painted some of his most famous works. He is also believed to have designed the garden at nearby Joeiji Temple, which is renowned for its stone arrangements.

Rurikoji Temple Five-Storied Pagoda

Walking counterclockwise within the park brings visitors to Rurikoji Pagoda, one of the most eminent attractions in the park. The five-storied pagoda was commissioned by Ouchi Morimi (1377–1431), the head of the Ouchi clan, the rulers of modern-day Yamaguchi Prefecture between the mid-fourteenth and mid-sixteenth centuries. It was completed circa 1442 and has never toppled or been rebuilt. It is designated a National Treasure for its historical and cultural significance.

Rurikoji Temple and Ouchi Hiroyo on Horseback

The main hall of Rurikoji Temple is located behind the pagoda. The temple was

founded in 1471 and is dedicated to Yakushi Nyorai, the Buddha of medicine and healing. Near the temple is a statue of Ouchi Hiroyo (1326–1380) on horseback. He is credited with developing the Yamaguchi basin and laying the foundations for the town that would become the modern-day city of Yamaguchi.

Chinryutei and Rosando

The path continues to two historical buildings from the Edo period (1603–1867): Chinryutei, the outbuilding of a merchant house, and Rosando, a tea house, built by the thirteenth daimyo of the Choshu domain (modern-day Yamaguchi Prefecture). The buildings were used by anti-shogunate activists instrumental in bringing about the Meiji Restoration of 1868. This historic event marked the end of the political authority of the shogunate and the restoration of sovereign power to the emperor. Visitors can enter Chinryutei and climb the steep stairs to the second floor where clandestine meetings were held by important Choshu domain figures, such as Kido Takayoshi (1833–1877), who sought the restoration of rule under the emperor. Portraits of Kido and others are displayed inside the building.

Mori Family Burial Site

The Mori family replaced the Ouchi clan as the rulers of Yamaguchi from the seventeenth to nineteenth centuries. Mori Takachika (1819–1871), the thirteenth daimyo of the Choshu domain, his son Motonori (1839–1896), the last daimyo of the domain, and his grandson Motoakira (1865–1938) are buried in a family cemetery behind the Rosando tea house. Mori Takachika was a key player in the Meiji Restoration, allying the Choshu domain with the Satsuma (present-day Kagoshima Prefecture) and Tosa (present-day Kochi Prefecture) domains in the fight against the forces of the shogunate.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

香山公園

香山公園は14世紀以降の山口の歴史の縮図となっており、過去の統治者や有力者の像、記念碑、歴史的建造物があります。敷地内は梅、桜、カエデの木や、ツツジ、アジサイなどが植えられおり、一年を通して美しい景色が楽しめます。公園への入場料は無料です。

雪舟等楊像

公園の入り口近くに、日本の最も卓越した水墨風景画家の1人である禅僧、雪舟（1420年–1506年）の記念碑があります。雪舟は長年にわたり断続的に山口で過ごし、町に工房を構え、そこで雪舟の最も有名な作品のいくつかを描きました。また、近くの石組みで有名な常栄寺の庭を設計したと考えられています。

瑠璃光寺五重塔

公園内を反時計回りに歩いていくと、公園で最も名高い名所である瑠璃光寺五重塔にたどり着きます。この五重塔は、14世紀中頃から16世紀中頃まで現在の山口県を統治していた大内家当主、大内盛見（1377年–1431年）により建立されました。五重塔は1442年頃に完成し、一度も崩壊したり再建されていません。その歴史的・文化的重要性から国宝に指定されています。

瑠璃光寺と馬に跨った大内弘世

五重塔の後ろに瑠璃光寺の本堂があります。瑠璃光寺は1471年に建立され、薬と癒しの仏陀である薬師如来を祀っています。近くには馬に跨った大内弘世（1326年–1380年）の像があります。大内弘世は、山口盆地を開発し、現在の山口市となる町の基礎を築いた人物とされています。

枕流亭と露山堂

このルートは江戸時代（1603年–1867年）からある2つの歴史建造物、商家の別館である枕流亭と、長州藩（現在の山口県）の第13代大名が建てた茶室、露山堂へと続きます。これらの建物は、1868年の明治維新の実現に貢献した反幕府活動家によって利用されていました。この歴史的出来事は、幕府の政治的権力の終焉や天皇への主権の回復を示しました。枕流亭の中に入り、大政奉還を求めた木戸孝允（1833年–1877年）など長州藩の重要人物たちが密会した2階に上がることができます。建物の中には、木戸らの肖像画が展示されています。

毛利家墓所

17世紀から19世紀にかけて、大内家に代わって、毛利家が山口を統治するようになりました。露山堂の裏にある毛利家墓所には、長州藩第13代大名である毛利敬親（1819年–1871年）、長州藩最後の大名である、息子の元徳（1839年–1896年）、孫の元昭（1865年–1938年）が埋葬されています。毛利敬親は明治維新の立役者で、長州藩と薩摩藩（現在の鹿児島県）、土佐藩（現在の高知県）の間で盟約を結ばせて幕府軍と戦いました。

011-005

Tenge-sakaguchi

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還③ / 天花坂口

【想定媒体】Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Tenge-sakaguchi

Tenge-sakaguchi is the beginning of the steepest section of the historic Hagi Okan highway. The walk from Tenge-sakaguchi to Itado Pass via the Rokken-jaya Tea Houses site is one of the most popular along the Hagi Okan, with scenery of terraced fields and forested mountainsides. The route covers the highway for around 2.5 kilometers and takes about 2 hours to complete. Guides for tours of the old highway can be arranged through the Hagi Okan Storytellers Association (Hagi Okan Kataribe no Kai).

The Hagi Okan was developed by the Mori family, the rulers of the Choshu domain (present-day Yamaguchi Prefecture), after the construction of Hagi Castle in 1604. It connected the lands ruled by the Mori family for transport and trade between the Sea of Japan and the Seto Inland Sea.

From 1635, the lords of Choshu spent alternate years in Hagi and the capital Edo (modern-day Tokyo) as part of the practice of alternate attendance at the shogun's castle (*sankinkotai*) enforced by the Tokugawa shogunate. They traveled with their retainers in large processions along the Hagi Okan from the castle in Hagi to Mitajiri, a port in the modern-day city of Hofu, where they boarded boats for their onward journey. After residing in the capital for a year, they returned to Hagi.

These processions numbered around 1,000 members, and included retainers, bodyguards, and servants. Historical records indicate that the largest was made up of 1,663 people. The lord rode in a palanquin carried by four to six bearers. The highway

was typically 4 meters wide but narrowed in the mountains at places like Itado Pass.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

天花坂口坂

天花坂口坂は歴史街道萩往還のもっとも急な区間の始点です。天花坂口から六軒茶屋を經由して板堂峠までの散策路は、段々畑や森林に覆われた山々の美しい景色が楽しめる萩往還で最も人気のあるコースの1つです。このルートは、約2.5キロ続き、約2時間かかります。萩往還語り部の会を通じてガイドを手配することができます。

萩往還は1604年に萩城が築城された後、長州藩（現在の山口県）を統治していた毛利家により開発されました。萩往還は日本海と瀬戸内海沿岸の間の輸送や取引のために毛利家が統治する領土をつないだものです。

1635年以降、長州藩主は、徳川幕府より課された参勤交代の一環として、隔年で萩と首都江戸（現在の東京）に滞在しました。藩主は家臣を伴い、大行列を成して萩の城（萩城）から現在の防府市にある港、三田尻まで萩往還を進み、三田尻で船に乗り、旅を続けました。そして、首都江戸で1年過ごした後、萩に戻ってきました。

この行列は、家臣、護衛、使用人など、約1000人から成っていました。歴史的文献によると、行列は最大で1663名でした。藩主は、4人から6人の担ぎ手が担いだ籠に乗っていました。萩往還の道幅は通常4メートルありましたが、板堂峠などの山間部では幅が狭くなっていました。

011-006

Rokken-jaya Tea Houses Site

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還④ / 六軒茶屋

【想定媒体】Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Rokken-jaya Tea Houses Site

The Rokken-jaya Tea Houses were a place for travelers to rest on journeys between the old provinces of Suo and Nagato in the Choshu domain (modern-day Yamaguchi Prefecture). There were six farmhouses at Rokken-jaya (which means, literally, six tea houses), and they were the only houses for several miles on either side of the steep Itado mountain pass. The residents of these farmhouses accommodated travelers with a place to rest and served them refreshments.

In the early seventeenth century, the rulers of the Choshu domain, the Mori family, developed a highway between their residence at Hagi Castle, on the Sea of Japan coast, to Mitajiri, a port town on the Seto Inland Sea coast. The highway, known as the Hagi Okan, was used for transport and trade and by the lords of Choshu for their journeys to the capital Edo (modern-day Tokyo). From 1635, the lords spent alternate years in the capital as part of the practice of alternate attendance (*sankinkotai*) enforced by the Tokugawa shogunate. They traveled with their retainers in vast processions along the Hagi Okan to fulfill this obligation.

The Rokken-jaya became a designated rest area (*okagotateba*) for the lord and his entourage on journeys to and from Edo. There were six of these between Hagi and Mitajiri, and facilities were constructed for the lord and his highest-ranking retainers at each site. At the Rokken-jaya site, there is a partial reconstruction of a building used by the lord. In front of the entrance is a small, roofed structure with space to store two palanquins, or *kago*. The lord was carried in one of the palanquins by four to six bearers. The second palanquin was a spare.

The lord's entourage numbered around 1,000 members and included retainers, bodyguards, and servants. They carried many heavy items such as chests packed with clothes and other necessities. Historical records indicate that a large iron plate the size of a futon mattress was among the heaviest items transported. It is thought that this was placed under the lord's bedding to guard against attacks from beneath the flooring while he slept.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

六軒茶屋跡

六軒茶屋は長州藩（現在の山口県）の周防国と長門国の間を旅する旅人の休憩の場でした。昔、六軒茶屋（文字通り、6つの茶屋）には6軒の農家があり、急こう配の板堂峠では数キロの間で家があったのはここだけでした。そこで、この農家の住民が旅人に休憩の場を提供し、軽食を出していました。

17世紀の初めに、長州藩を統治していた毛利家により、日本海沿岸にある毛利家の居宅、萩城から瀬戸内海沿岸の港町である三田尻までつながる街道が開発されました。萩往還として知られるこの街道は、輸送や取引に使用され、また長州藩主が首都江戸（現在の東京）へ参勤交代で旅するときに利用していました。1635年以降、長州藩主は、徳川幕府より課された参勤交代の一環として、隔年で首都江戸に出向き、江戸で過ごしていました。藩主は、この義務を果たすため、家臣を伴い、大行列を成して、萩往還を旅しました。

六軒茶屋は、藩主とその従者が江戸を往復するときに利用する、指定の休憩場所（「籠建場」）でした。萩と三田尻の間には6つの籠建場があり、各場所には藩主とその最高位の家臣のための設備が建てられていました。六軒茶屋跡には、藩主が利用していた建物を一部再建したものが残っています。入り口正面には、2つの「籠」を置くための小さな屋根付きの場所があります。藩主は、4人から6人の担ぎ手が担いだ籠の一つに乗っていました。2つ目の籠は予備でした。

藩主の従者は、家臣、護衛、使用人など、約1,000人から成っていました。従者は、衣類やその他日用品が詰められた収納箱など、数多くの重い荷物を抱えていました。歴史的文献によると、その重い荷物の中には、敷布団ほどの大きさのある巨大な鉄板もありました。これは、藩主の布団の下に敷き、藩主が就寝中に床の下から攻撃されないよう守るためのものであると考えられています。

011-007

Itado Pass

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還⑤ / 板堂峠
【想定媒体】Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Itado Pass

Itado Pass is the highest point on the historic Hagi Okan highway between the cities of Hagi in the north of Yamaguchi Prefecture and Hofu in the south. It is cut into the ridge of a mountain at an elevation of 537 meters and is less than 4 meters wide at its narrowest point. A trail leads from the pass to the summit of Higashi Hobenzan (734 m) where climbers can take in panoramas of inland and coastal Yamaguchi. There is also a stone monument near the pass which marks the border between the historic provinces of Suo and Nagato.

The Hagi Okan was one of the main routes through modern-day Yamaguchi Prefecture between the seventeenth and nineteenth centuries. It was used by everyone, from daimyo lords and their retainers to samurai, merchants, and laborers. The journey south-to-north over the mountain pass in the direction of Hagi is especially challenging because of the steep rise in elevation and the 42 switchbacks that climb to the pass.

Miners from local communities used the pass to cross over the mountain to work at the Ichinosaka Silver Mine, controlled by the ruling Mori family. Miners prayed to return safely from their labors at a small worship hall built on the pass. *Itado* means “shingle-roofed hall,” and while it is no longer standing, the name of the pass signifies its importance to those who walked the Hagi Okan.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

板堂峠

板堂峠は山口県北部の萩市と南部の防府市を結ぶ歴史街道萩往還の最高地点にあたります。標高 537 メートルで尾根を切り開いており、最も狭い部分の幅は 4 メートルもありません。登山口は峠から東鳳凰山 (734 m) の頂上に通じており、そこから山口の内陸部と沿岸部のパノラマを眺めることができます。峠の近くには旧周防国と長門国の境界を示す石碑もあります。

萩往還は17 世紀から 19 世紀にかけて現在の山口県を通る主要ルートの 1 つでした。大名やその家臣から武士、商人、人夫まで幅広く利用されました。峠を越えて南から北に向かう萩方面への道は急勾配で、峠に至る42 か所の曲がり道があるため特に困難です。

地元の鉱夫はこの峠を利用して山を越え統治者である毛利家が管理する一の坂銀山で働いていました。鉱夫たちは峠に建てられた小さなお堂で仕事から無事に帰れるよう祈りました。板堂とは「こけら屋根の堂」を意味し、堂はもうそこに建っていませんが峠の名前は萩往還を歩いた人々にとってそのお堂が重要だったことを示しています。

011-008

Wanishi Bridge

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還⑥ / 鱈石橋

【想定媒体】Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Wanishi Bridge

Wanishi Bridge is a landmark on the Hagi Okan highway. The bridge spans the Fushino River and is named after a rock formation on the riverbank that was said to resemble a crocodile, *wani* in Japanese. When the water levels of the river were higher and the rocks partially submerged, the formation is said to have looked like a crocodile opening its mouth.

The Hagi Okan runs between the cities of Hagi in the north of Yamaguchi Prefecture and Hofu in the south, passing through the city center of Yamaguchi. The highway was developed in 1604 for transport and trade between the coasts of the Sea of Japan and the Seto Inland Sea, and to connect the lands ruled by the Mori family, the lords of the Choshu domain (modern-day Yamaguchi Prefecture).

Before Yamaguchi developed as a modern city, Wanishi Bridge stood outside the town. People crossed the bridge to embark on journeys along the Seto Inland Sea coast or return home from similar travels. It is probably also where townspeople saw off the lord of Choshu and his entourage on their journeys to the capital Edo (modern-day Tokyo) some 1,000 kilometers away. These journeys for alternate attendance at the shogun's castle (*sankinkotai*) were enforced by the Tokugawa shogunate.

The rock formation beside the bridge is popular with photographers, and in earlier times also inspired poetry. A monument in front of the formation displays a plaque engraved with a poem composed in the fourteenth century by a Ming dynasty emissary who visited the area en route to the capital in Kyoto.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鱈石橋

鱈石橋は萩往還の名所です。この橋は伏野川に架かっており、川岸の岩がワニに似ているといわれたことから名づけられました。川の水位が高く岩の一部が水没していた時にはワニが口を開けたように見えたと言われています。

萩往還は山口県北部の萩市と南部の防府市の間を走り、山口市の中心部を通ります。この街道は長州（現在の山口県）藩主である毛利家が日本海と瀬戸内海間の交通と貿易用に統治した土地を結ぶために 1604 年に開発されました。

山口が近代都市として発展する前、鱈石橋は町外れに架かっていました。人々はこの橋を渡って瀬戸内海岸に沿って旅に出たり、同様の旅行から帰国したりしました。また、約 1,000 キロ離れた首都江戸（現在の東京）へ向かう長州藩主とその側近たちを町民が見送ったであろう場所でもあります。これらの旅（参勤交代）は徳川幕府から命じられたものでした。

橋の横にある岩の造形は写真家に人気があり、昔は詩の題材にもなりました。岩の前の記念碑には、京の都に向かう途中でこの地域を訪れた明王朝の使者が 14 世紀に詠んだ詩が刻まれた銘板が掲げられています。

011-009

Fudanotsuji

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還⑦ / 札の辻

【想定媒体】Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Fudanotsuji

Fudanotsuji is a crossroads on the historic Hagi Okan highway, which runs between the cities of Hagi in the north of Yamaguchi Prefecture and Hofu in the south. It is where another old highway, the Sekishu Kaido, intersects the Hagi Okan. The Fudanotsuji crossroads was one of the busiest points on the Hagi Okan during the Edo period (1603–1867), with people traveling between provinces in present-day Yamaguchi and Shimane Prefectures. Official notices, including announcements, laws, and wanted person notifications were posted on a noticeboard called a *kosatsuba* at these crossroads.

Visitors traveling between the cities of Yamaguchi and Hagi can see a reconstruction of a *kosatsuba* at the beginning of the Hagi Okan highway, east of the Hagi Castle site.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

札の辻

札の辻は山口県北部の萩市と南部の防府市の間を走る歴史街道萩往還にある交差点です。ここでもう一つの旧街道である石州街道と萩往還が交差しています。江戸時代（1603年–1867年）には現在の山口県と島根県の間を行き来する人々が集まり、札の辻は萩往還で最も混雑する地点の1つでした。これらの交差点では高札場と呼ばれる掲示板に、告示、地域法規、指名手配者通知などの公告が掲示されていました。

山口市と萩市の間を旅行する観光客は、萩城跡の東、萩往還の始点にある復元された高札場を見ることができます。

011-010

St. Francis Xavier Memorial Church

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還⑦ / 山口サビエル記念聖堂

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

St. Francis Xavier Memorial Church

St. Francis Xavier Memorial Church preserves the legacy of Jesuit missionary Francis Xavier (1506–1552) who propagated Christianity in western Japan in the mid-sixteenth century. The church is modern in its design, with clean lines and a triangular form. The current building was constructed in 1998 after the original, built in 1952, was destroyed in a fire in 1991. The first floor is a museum dedicated to the life of Xavier and the development of Christianity in Japan. The chapel is on the second floor and has bold modernist stained-glass windows, some of which are almost floor-to-ceiling in height.

Francis Xavier arrived in present-day Kagoshima Prefecture in 1549 from Portuguese India. He began his missionary work in Kyushu, encouraging daimyo to convert to Catholicism along with their retainers and subjects. He visited what is today the city of Yamaguchi for two months in 1551 and met with the daimyo, Ouchi Yoshitaka (1507–1551). Yoshitaka permitted Francis Xavier to proselytize in his domain and granted him a temple, which Xavier repurposed as the first Christian church in Japan. During his two months in Yamaguchi, Francis Xavier is said to have baptized some 500 people.

Exhibits in the church introduce the life of Francis Xavier through paintings, maps, and other historical documents. They also explain the development of Christianity in Japan, from its introduction in the sixteenth century to its prohibition in the seventeenth, eighteenth, and nineteenth centuries. A gilded folding screen depicts Xavier's arrival in Japan and subsequent episodes during his time in the country. Artifacts including Buddhist-style stone lanterns with concealed Christian imagery

offer insights into the lives of Hidden Christians (*kakure kirishitan*) who maintained their faith in secrecy in isolated communities after the religion was outlawed.

There is an admission fee for the museum, and visitors may look around the chapel when services are not being held.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

サビエル記念聖堂

サビエル記念聖堂は16世紀半ばに西日本にキリスト教を広めたイエズス会修道士、フランシスコ・サビエル（1506年－1552年）の遺産を保存しています。この聖堂はすっきりとしたラインと三角形のフォルムを備えたモダンなデザインです。現在の建物は、1952年に建てられた元の建物が1991年の火災で焼失した後、1998年に建設されました。1階はサビエルの生涯と日本でのキリスト教の発展をテーマにした博物館です。礼拝堂は2階にあり、床から天井まで届く高さのものを含む大胆なモダニズムのステンドグラスの窓があります。

フランシスコ・サビエルは1549年にポルトガル領インドから現在の鹿児島県に到着しました。彼は九州で布教活動を開始し、家臣や臣下とともに大名にカトリックへの改宗を奨励しました。彼は1551年に現在の山口市を2か月間訪問し、大名である大内義隆（1507年－1551年）と会いました。義隆はフランシスコ・サビエルの領土内での布教を許可して寺院を与え、サビエルはそれを日本初のキリスト教会として再利用しました。フランシスコ・サビエルは山口に滞在した2か月間で約500人に洗礼を授けたとされています。

聖堂内の展示は、絵画、地図、その他の歴史的な文書を通じてフランシスコ・サビエルの生涯を紹介しています。また、16世紀の伝来から17、18、19世紀の禁止に至るまでの日本におけるキリスト教の発展についても説明しています。金箔の屏風にはサビエルの日本到着とその後の日本滞在中のエピソードが描かれています。隠れキリシタンの絵が描かれた仏教風の石灯籠などの工芸品は、宗教が非合法化された後、孤立したコミュニティで秘密裏に信仰を維持した隠れキリシタンの生活について説明しています。

博物館の入場料は有料で、礼拝が行われていない時間には礼拝堂を見学することができます。

011-011

Joeiji Temple Garden (Sesshutei)

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還⑦/ 常栄寺雪舟庭

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Joeiji Temple Garden (Sesshutei)

Sesshutei is a renowned strolling garden on the grounds of Joeiji Temple. It is famous for its *karesansui* dry landscape features which include stone arrangements representing islands, mountains, and waterfalls. The garden is believed to have been designed by Sesshu (1420–1506), a Zen Buddhist priest who was one of Japan’s most prominent ink wash landscape painters. Sesshu used strong lines and variations in shading to create a sense of depth in his landscapes, and the shapes, arrangement, and scale of the stones at Sesshutei impart a similar effect.

The garden is designed around a central pond similar in shape to the Chinese character for “heart.” Stones are arranged in the water to resemble islands in the shapes of a turtle and a crane, auspicious animals representing good fortune and longevity. Stones are also located around the pondside and in clusters across the gently undulating lawns that surround the pond. Trees are absent from the central grounds of Sesshutei, distinguishing it from typical strolling gardens. Their absence keeps the focus on the stone arrangements, which in turn add depth and enhance the perceived scale of the garden.

The extensive grounds include forested mountainsides and three additional ponds, one of which is a breeding ground for the forest green tree frog. The species is native to Japan and spawns in trees and plants overhanging water. Between April and July visitors can spot the frog’s foamy nests hanging from branches around Shimei Pond. A loop trail leads around the central garden and past Shimei Pond. It takes approximately 30 minutes to complete. Near the pond, a side trail leads up the mountainside to a worship hall dedicated to Bishamonten, one of the Four Heavenly Kings who guard

the cardinal directions of the world from evil.

There is a small fee for admission to the garden. On weekends and holidays, matcha is sometimes served in the teahouse beside the Main Hall. In autumn, parts of the garden are illuminated at dusk for visitors to enjoy the fall colors.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

常栄寺庭園

雪舟庭は常栄寺の境内にある有名な回遊式庭園です。島、山、滝を表す石組みのある枯山水で有名です。この庭園は日本で最も卓越した水墨山水画家の一人である禅僧、雪舟（1420年－1506年）によって設計されたと考えられています。雪舟は力強い線と様々な陰影を使って風景に奥行きを生み出しました。雪舟庭の石の形、配置、規模も同様の効果をもたらします。

庭園は「心」の字に似た形の池を中心に構成されています。幸運と長寿を表す縁起の良い動物である亀と鶴の形をした島を模した石が水中に配置されています。池の畔や池を囲む緩やかな起伏の芝生にも石が配置されています。雪舟庭の中央の敷地には木々がなく一般的な回遊式庭園とは異なります。木々がないことで石の配置に焦点が当てられ、その結果、庭園に深みが増し、より広く感じるようになっています。

広大な敷地には森林に覆われた山腹と3つの池があり、そのうちの1つはモリアオガエルの繁殖地になっています。このカエルは日本の在来種で水面に張り出した木や植物に産卵します。4月から7月にかけて紫明池周辺で枝にぶら下がっているカエルの泡状の巣を見つけることができます。中央庭園の周りを周回する遊歩道があり紫明池を通り過ぎます。1周するのに約30分かかります。池の近くの脇道は山腹を上って世界の四方を悪から守る四天王の1人である毘沙門天を祀る拝殿へ続いています。

庭園へは少額の入場料が必要です。土日祝日には本堂横の茶室で抹茶を提供することもあります。秋には夕暮れ時に庭園の一部がライトアップされ、紅葉を楽しむことができます。

011-012

The Meiji Restoration and the Choshu Domain

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還⑦/ 明治維新と山口市

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

The Meiji Restoration and the Choshu Domain

Daimyo, samurai, and anti-shogunate activists from the Choshu domain (modern-day Yamaguchi Prefecture) were instrumental in bringing about the Meiji Restoration of 1868. This historic event marked the end of rule under the Tokugawa shogunate and the restoration of sovereign power to the emperor. Significant political reforms took place in the years following the Restoration, and Japan began a process of modernization under the new Meiji government. Visitors can learn about this defining chapter of Japanese history and the influential figures that helped usher in the new era at sites throughout the city of Yamaguchi.

The Bakumatsu History Museum (also known as Jippotei Ishin Museum) explains the history of the Choshu domain and the events that set the domain on its path against the shogunate, from economic downturn and famine to wars with foreign powers and alliances with other powerful anti-shogunate domains. Displays include maps of key battles, detailed timelines, and video projection exhibits. There are also profiles of figures central to the politics of the era such as Mori Takachika (1819–1871), the thirteenth daimyo of the domain, and the Choshu Five, activists supporting the restoration of rule under the emperor who went on to shape the Meiji government. The museum is built on the site of a former soy sauce brewery, and its grounds contain historical buildings including Jippotei, an accommodation for Choshu officials in use in the 1860s.

Imperial loyalists gathered secretly at venues such as Jippotei to strategize and form alliances. An outbuilding known as Chinryutei has been preserved on the grounds of Kozan Park. The building was owned by a merchant family and is famous as the site

of covert meetings between loyalists from the Choshu and Satsuma (modern-day Kagoshima Prefecture) domains. Through their meetings at Chinryutei, the loyalists resolved to form an army and rise up against the shogunate. Another known clandestine meeting spot is Rosando, a tea house built by daimyo Mori Takachika, relocated from its original location to the grounds of Kozan Park.

The Bakumatsu History Museum has maps that include the main imperial loyalist-related sites in the city. Visitors taking part in guided walking tours of the historic Hagi Okan highway can customize their itinerary to include Meiji Restoration-related sites. These tours are available through the Hagi Okan Storytellers Association (Hagi Okan Kataribe no Kai).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

明治維新と長州藩

長州藩（現在の山口県）出身の大名、武士、反幕府活動家は、1868年の明治維新を進めていました。この歴史的出来事は徳川幕府の統治の終焉や天皇への主権の回復を示すものでした。明治維新後の数年の間に重要な政治改革が起こり、日本は新たな明治政府のもとで近代化のプロセスを開始しました。ここを訪れると、日本の歴史をはっきりさせるこの一連の出来事と山口の町じゅうに新しい時代の到来を告げる手助けをした有力者について学ぶことができます。

幕末歴史館（別名：十朋亭維新館）では、長州藩の歴史や経済の停滞と飢饉から外国勢力との戦争、その他強力な反幕府藩との盟約まで、長州藩を反幕府に導くことになった出来事についての説明がされています。重要な戦いのマップ、詳細な年表、映像プロジェクションなどの展示があります。長州藩第13代大名である毛利敬親（1819年–1871年）、天皇制の復古を支持し明治政府の形成を進めた活動家である長州五傑など、この時代の政治の中心人物のプロフィールも展示されています。幕末歴史館は醤油醸造所跡地に建てられており、その敷地内には1860年代に長州役人の宿泊施設として利用されていた十朋亭など、歴史的建造物があります。

勤皇の志士は戦略を練り、盟約を結ぶため、十朋亭などに密かに集い会談を行っていました。香山公園の敷地内に枕流亭として知られる建物が保存されています。この建物は商人が所有しており、長州藩と薩摩藩（現在の鹿児島県）出身の志士による密談が行われた場所として有名です。枕流亭での会談を通して、志士たちは軍を結成し幕府に対して反旗を翻すことを決意しました。もう1つのよく知られる密会の場として、大名毛利敬親が建て香山公園の敷地内に移転された露山堂があります。

幕末歴史館では、山口の町での主要な勤皇の志士に関連する場所が掲載されたマップを見ることができます。ガイドと行く歴史街道萩往還ウォーキングツアーに参加する場合、明治維新に関連する場所を行程の中に自由に組み入れることができます。これらのツアーは、萩往還語り部の会を通じて参加することができます。

011-013

Yuda Onsen

やまぐち萩往還語り部の会

【タイトル】萩往還⑦/ 湯田温泉

【想定媒体】Webページ

できあがった英語解説文

Yuda Onsen

The hot springs of Yuda Onsen date from the fifteenth century and are said to have been discovered by a white fox. Seven sources feed the baths of the Yuda Onsen district, in the city center of Yamaguchi. The soft, alkaline waters reportedly have restorative properties and are known for leaving the skin feeling smooth. Visitors can experience these rejuvenating waters at hotels, public footbaths, and hot spring cafes.

According to legend, a white fox with an injured paw was noticed soaking its leg in a pond on the grounds of a small temple. The fox returned day after day, and after a week its paw was healed. Townspeople were intrigued by the fox's recovery. They checked the pond and found the water to be warm. They dug into the bed of the pond to reveal a hot spring source and a statue of Yakushi Nyorai, the Buddha of healing and medicine. Over the centuries, Yuda Onsen became a popular hot spring town, bringing wealth and development to the area. White foxes have become synonymous with the hot springs and fox motifs are seen throughout the area, appearing on signs, as statues, and as latte art. Manhole covers in the hot spring district bear colored designs depicting scenes from the legend.

Most accommodations in Yuda Onsen have bathing facilities. Some of the oldest date from the Edo period (1603–1867) and have hosted famous historical figures such as Saigo Takamori (1828–1877), a leader in the overthrow of the Tokugawa shogunate. Baths are typically reserved for hotel guests, but some accommodations allow non-staying guests to use the facilities for a fee. Footbaths in the hot spring district are open to all and typically free of charge. There are seven locations in total, including Kitsune no Ashi Ato (literally, fox's footprint), a hot spring cafe and visitor center

where you can enjoy a coffee or try some local sake while soaking your feet for a small fee.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

湯田温泉

湯田温泉は、15世紀に始まった温泉であり、白狐が見つけたと言われています。山口の町の中心にある湯田温泉地区の温泉には、7つの源泉から温泉水が注がれています。アルカリ性の軟水には、傷や病気を治療する効果があるとされており、入浴後の肌をすべすべにするとして知られています。ホテル、公衆足浴場、温泉カフェでこの若返りの水を満喫することができます。

伝説によると、足先に傷を負った白狐が小さなお寺の境内にある池に足を浸けている姿が目撃されました。その狐は毎日やって来て、1週間すると足先の傷が治っていました。町の人たちはその狐の回復に興味をそそられました。池を確認してみると、池の水が温かいことが分かりました。そこで、池の底を掘り起こしてみると源泉が湧き出て、薬と癒しの仏陀である薬師如来の像が現れました。数百年をかけて湯田温泉は人気の温泉町になり、この地域に富と発展をもたらしました。白狐と言えばこの温泉を表すようになり、この地域一帯では狐のモチーフが用いられ、看板や、像、ラテアートとしてあちこちで見ることができます。湯田温泉地区にあるマンホールの蓋には、伝説のシーンを描いたデザインがカラーで描かれています。

湯田温泉内のほとんどの宿泊施設には入浴設備があります。最も古い設備のいくつかは江戸時代（1603年-1867年）から始まったものであり、徳川幕府打倒の指導者であった西郷隆盛（1828年-1877年）などの有名な歴史上の人物をもてなしてきました。通常、ホテルの宿泊客用となっていますが、いくつかの宿泊施設では宿泊客以外にも有料で入浴設備の利用を許可しています。湯田温泉地区の足湯は通常無料で、誰でも利用できるようになっています。温泉カフェ兼案内所「狐の足あと（文字通り、狐の足跡）」など合わせて7か所で、少額の料金で足を浸けながら、コーヒーを味わう、または地酒を楽しむことができます。

地域番号	012	協議会名	「西の都」日本遺産活性化協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
012-001	日本遺産「古代日本の「西の都」」認定ストーリー －（大宰府：西の都）		501～750ワード	パンフレット Webページ
012-002	太宰府天満宮		501～750ワード	パンフレット Webページ
012-003	南館跡（榎社）		251～500ワード	パンフレット Webページ
012-004	宝満山		250ワード以内	パンフレット Webページ
012-005	太宰府天満宮の伝統行事		251～500ワード	パンフレット Webページ
012-006	太宰府天満宮神幸行事		251～500ワード	パンフレット Webページ
012-007	水城跡		251～500ワード	パンフレット Webページ
012-008	大野城跡		251～500ワード	パンフレット Webページ
012-009	太宰府の梅		250ワード以内	パンフレット Webページ
012-010	太宰府天満宮本殿大改修		251～500ワード	パンフレット Webページ
012-011	菅公歴史館		751ワード以上	パンフレット Webページ
012-012	大野城跡		250ワード以内	パンフレット Webページ
012-013	水城跡		250ワード以内	パンフレット Webページ
012-014	牛頸須恵器窯跡		250ワード以内	パンフレット Webページ
012-015	ヘラ書き須恵器		250ワード以内	パンフレット Webページ
012-016	御笠の森		250ワード以内	パンフレット Webページ
012-017	善一田古墳群		250ワード以内	パンフレット Webページ

012-018	天拝山	251～500ワード	パンフレット Webページ
012-019	水城跡	251～500ワード	パンフレット Webページ
012-020	古代日本の「西の都」	251～500ワード	パンフレット Webページ
012-021	竈戸神社	250ワード以内	パンフレット Webページ
012-022	太宰府天満宮仮殿	250ワード以内	パンフレット Webページ

012-001

Dazaifu: The Western Capital

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】日本遺産「古代日本の「西の都」」認定ストーリー
(大宰府：西の都)

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Dazaifu: The Western Capital

Some 1,300 years ago, the city of Dazaifu in northern Kyushu was an administrative and cultural center second only to the imperial capital. Its proximity to the Asian continent made it the entry point for immigrants, merchants, clerics, and foreign dignitaries arriving from the Korean Peninsula and China. The culture they brought with them—including new political systems, technologies, and art—transformed Dazaifu from a small provincial settlement into a cosmopolitan city of between 20,000 and 30,000 residents. Arriving diplomats were welcomed at a lavish guesthouse, just as they were in the capital. Dazaifu also had imperial administrative offices, an elite academy, and a Buddhist temple that held the country’s first ceremony to inaugurate Buddhist priests. The city’s extensive bureaucracy managed the taxes, economy, and security for all of Kyushu. While the imperial capital changed locations several times between the eighth and late twelfth centuries, Dazaifu maintained its distinction as Japan’s “Western Capital” (*nishi no miyako*).

Early Cultural Exchange

In the fifth and sixth centuries, Japan saw a great influx of culture and technology. China was the dominant cultural and political force in East Asia at the time, and several kingdoms in the Korean Peninsula were comparatively advanced. The island of Kyushu experienced a constant exchange of people, ideas, and technology with these continental neighbors. This was especially true in the Fukuoka region centered around Hakata Bay, the chief port for ships arriving from East Asia. Excavations of several ancient sites in the Dazaifu area, such as the Zen’ichida Burial Mounds and the Ushikubi Sue Ware Kiln Ruins, have unearthed iron implements, weapons, and pottery that either originated in the Korean Peninsula or closely imitates continental styles. Both ironworking techniques and the know-how to create Sue ware (extremely hard,

blue-gray pottery) were imported and used to develop flourishing local industries.

Political Tensions and Fortification

Japan's involvement with the continent came at a cost when the country was drawn into the political struggles of its neighbors. Japan was on good political terms with Baekje (? CE–660 CE), one of the Korean kingdoms, and in 663 their united forces suffered a devastating military defeat by Tang China (618–907) and Silla (? CE–935 CE), another Korean kingdom. This loss spurred members of the imperial court, who feared a subsequent invasion, to order the construction of large-scale fortifications around the Dazaifu region. In 664, an enormous embankment called the Mizuki Fortress was built to block enemy access to Kyushu's interior, and in 665 two mountain fortresses were constructed on summits surrounding the narrow plain the Mizuki Fortress enclosed.

Establishment of the Western Capital

China never invaded, and fear of war gradually subsided. Diplomatic missions were dispatched to the Tang-dynasty capital to study its art, religion, and political structures, which were the international standard of the eighth century. When these envoys returned, they brought new sutras and forms of Buddhist thought, a complex bureaucratic system of government, and grid-based city planning that was quickly implemented to build the city of Dazaifu.

Construction of a new, grid-based city began in the early eighth century, around the time the new imperial capital at Nara (Heijō-kyō) was built along the same design. Dazaifu was finished shortly after the capital's completion in 710, and it occupied the middle of the present-day city of Dazaifu. It had an orderly layout with a wide central avenue and military stations, Buddhist temples, an academy for educating officials, and residences. The central avenue ran from north to south, starting at the main administration complex and connecting to roads that led to the city's southern entrance, Rajōmon Gate.

Administration and Culture

Dazaifu's political administration exerted considerable influence over the surrounding areas of Kyushu and fulfilled a number of administrative roles. Taxes and tribute to the

emperor were gathered and tallied in Dazaifu before being sent east to the capital. The government offices had facilities and officials responsible for making paper, dyeing cloth, caring for the sick, and repairing weapons, armor, and ships. They also oversaw food production, maintained fortresses and border security, and more. Dazaifu's school for civil officials enrolled around 200 students from across Kyushu, who came to study administration, mathematics, or medicine before returning home with their newly acquired expertise.

The city also was a focal point for international relations. Dazaifu's officials prepared elaborate welcomes for foreign diplomats to smooth the way in politics and trade. Delegations that arrived in Hakata Bay followed a road that led to the Mizuki Fortress's west gate—the official entrance to the city for foreign visitors. From there they entered the city and were housed at a guesthouse called the *Kyakukan*, where they were entertained with fine cuisine, tea, and musical performances. Dazaifu also attracted leading Buddhist priests and intellectuals from abroad. Art and culture flourished in Dazaifu as a result of their exchanges, and Chinese customs such as plum-blossom viewing and poetry composition gained prestige. The oldest extant collection of Japanese poetry, the eighth-century *Man'yōshū*, features numerous verses written in or about sites near Dazaifu. One of Dazaifu's provisional governors-general, Ōtomo no Tabito (665–731), held a plum-blossom party that produced the poem from which the current Japanese era name—*Reiwa*—is drawn.

A Lasting Legacy

Dazaifu's prominence continued until the end of the twelfth century. Around that time, ports grew in importance, and soon afterward the center of power shifted north toward Hakata Bay and what is now the city of Fukuoka. But even today, Dazaifu remains a site of cultural and religious significance. This is, in part, due to Dazaifu Tenmangū Shrine. Today, the shrine is head of some 10,000 shrines across Japan dedicated to Tenjin, the Shinto deity of learning, culture, and the arts. The festivals held at Dazaifu Tenmangū perpetuate many of the cultural activities and ceremonies once seen in Dazaifu and the ancient imperial court. The shrine also supports contemporary international art programs, thereby continuing Dazaifu's legacy of artistic refinement and cross-cultural exchange.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

太宰府：西の都

約1300年前、九州北部の太宰府の町は、帝都に次ぐ行政・文化の中心地であった。この地は、アジア大陸への近かったため朝鮮半島や中国からやってくる移民や商人、聖職者、外国の要人などの玄関口となった。新しい政治体制、技術、芸術など、彼らがもたらした文化は、太宰府を小さな地方の集落から、人口2万人から3万人の国際都市へと変貌させた。大宰府に到着した外交官は、都と同じように豪華な迎賓館で迎えられた。また、大宰府には国家の行政機関、上級役人向けの学校、国内初の仏教僧の就任式が行われたところを含む仏教寺院などがあつた。都市の広範な官僚機構は、九州全域の税収、経済、治安を統括していた。8世紀から12世紀後半にかけて、帝都は何度か遷都されたが、太宰府は日本の「西の都」としての地位を維持した。

初期の文化交流

5世紀から6世紀にかけて、日本には多くの文化や技術が流入した。中国は当時、東アジアで文化面でも政治面でも支配的な力を持っていたし、朝鮮半島のいくつかの王朝も比較的進んでいた。九州は、こうした大陸の近隣諸国と、人、思想、技術の絶え間ない交流を経験した。これは、東アジアからの船が到着する主要港であつた博多湾を中心とする福岡地方で特に顕著であつた。太宰府周辺のいくつかの古代遺跡、例えば善一田古墳群や牛頸須恵器窯跡などの発掘調査によって、朝鮮半島に起源を持つ、あるいは大陸の様式を忠実に模倣した鉄器や武具、土器が出土している。鉄工技術や須恵器（非常に硬い青灰色の陶器）を作るノウハウは、いずれも輸入され、盛んな地場産業の発展のために利用された。

政治的緊張と要塞化

日本における大陸との関わりは、近隣諸国の政治闘争に巻き込まれるという代償を伴った。日本は朝鮮王朝のひとつである百濟（～660年）と友好関係にあつたが、663年に両国の連合軍は、同じく朝鮮王朝の新羅（～935年）と中国の唐王朝（618-907年）に対して壊滅的な軍事的敗北を喫した。この敗北を受けて、侵略されることを恐れた朝廷は大宰府周辺に大規模な要塞の建設を命じた。664年、九州内部への敵のアクセスを遮断するため水城と呼ばれる巨大な堤防が築かれ、665年には、水城の内側の狭い平野を囲む山頂に2つの山城が築かれた。

西の都の成立

中国による侵略は起こらず、戦争への懸念は徐々に収束していった。8世紀の国際標準であつた唐の芸術、宗教、政治構造などを研究するために外交使節団が唐の都に派遣された。これらの使節が戻り、彼らによって新しい仏教経典や仏教思想の形式、複雑な官僚制の行政システム、早速大宰府造営に影響を与える碁盤目状の都市計画などがもたらされた。

新しい碁盤目状の都市の建設が始まったのは8世紀初頭で、奈良（平城京）の新しい都が同じ

設計に沿って建設された頃であった。太宰府は710年に奈良の都ができた後に間もなく完成し、現在の太宰府市の中央部を占めていた。広い中央大通りと軍事拠点、仏教寺院、役人を教育する養成所、住居などが整然と配置されていた。

それまでは博多湾沿岸にもっと小さな町があったが、水城のすぐ南にある要塞化された山間の盆地に移された。この新しい碁盤目状の都市の建設は、同様のデザインで奈良（平城京）に新しい都が建設される約20年前の689年頃に始まった。この大宰府の古代都市は、現在の太宰府市の中央部を占めていた。太宰府の都市は、広い中央の大通りや軍事拠点、仏教寺院、役人のための教育施設、住居などが整然と配置されていた。中央の大通りは南北に走り、主要な行政施設を起点に、街の南の入り口である羅城門に通じる道につながっていた。

行政と文化

大宰府政庁は、九州の周辺地域に大きな影響力を及ぼし、様々な行政的な役割を果たした。天皇に納める税や貢物は太宰府に集められ、集計された後、東の都に送られた。役所には、紙を漉き、布を染め、病人を看病し、武器や鎧や船を修理する施設とその責任者がいた。また、食糧生産や堡塁と国境の警備なども統括していた。大宰府の文官向けの学校には九州各地から約200人の学生が集まり、行政、数学、医学などを学んだ後、それぞれの地方に新しい専門知識を持ち帰った。

太宰府はまた、国際関係の中心地でもあった。太宰府の役人達は、政治や貿易を円滑に進めるため、入念な準備をして外国の外交官を歓迎した。博多湾に到着した外国の使節団は、外国人向けの太宰府への公式な玄関口である水城の西門に続く道を進んだ。そこから大宰府の町の中に至ると、客館と呼ばれる迎賓館に迎えられ、素晴らしい料理やお茶、演奏等でもてなされた。また、太宰府には外国から一流の僧侶や知識人も集まった。このような交流の結果、大宰府では芸術や文化が花開き、梅見や詩歌作りのような中国の風習が人気を博した。現存する日本最古の歌集『万葉集』（8世紀）には、太宰府近辺で詠まれた歌が数多く収められている。大宰権帥の一人であった大伴旅人（665-731）は、梅の宴を催し、現在の日本の年号「令和」の由来となった歌を詠んだ。

残された遺産

太宰府の隆盛は12世紀末まで続いた。その頃、港の重要性が増し、やがて権力の中心は博多湾や現在の福岡市にあたる地域へと北上していった。しかしそれでも太宰府は文化的・宗教的に重要な場所であり続けている。これは、太宰府天満宮の存在のおかげでもある。太宰府天満宮は、学問・文化・芸術の祭神である天神様を祀る全国約10,000社の総本社である。太宰府天満宮で開催される祭礼は、かつて大宰府や宮中で行われていた文化活動や式典の多くを受け継いだものである。また、現代の国際的なアートプログラムを支援することで、芸術の洗練と異文化交流という太宰府の遺産を受け継いでいる。

012-002

Dazaifu Tenmangū Shrine

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】太宰府天満宮

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Dazaifu Tenmangū Shrine

Dazaifu Tenmangū Shrine is one of Japan's most important Shinto shrines. It is the head shrine of more than 10,000 across the country dedicated to Tenjin, the deity of learning, culture, and the arts. Many visitors to Dazaifu Tenmangū are students and their families who come to pray to Tenjin before important examinations.

Tenjin is the deified spirit of the revered scholar, poet, and bureaucrat Sugawara Michizane (845–903). Born to a family of scholars in the imperial capital of Kyoto, Michizane excelled at his studies and grew up to become a renowned politician and scholar. Michizane became a beloved figure, famed for dazzling foreign delegations and even the emperor with his poetic compositions as well as improving the lives of impoverished farmers under his administration. However, jealous rivals conspired against him, resulting in Michizane's exile from the imperial court to Dazaifu. There, he was excluded from society, experienced terrible living conditions, and died just two years later.

The shrine's origin story tells that after Michizane's death, one of his retainers was transporting his remains in an oxcart for burial. Suddenly, the ox came to a halt and would go no further. Believing this to be a sign of Michizane's will, the retainer decided to bury him at that spot. Some years later, the emperor ordered shrines built to deify his spirit, including one erected in 919 at the site of Michizane's grave. This grew into Dazaifu Tenmangū Shrine.

The shrine precincts preserve many architectural and cultural treasures. Michizane

himself created or owned many of the artifacts housed in the shrine buildings and museums, including his calligraphy. Tenmangū's main sanctuary (*honden*) is known for its rich colors, elaborate carvings, and gracefully curved roof. The current building has stood for over 400 years and has been designated an Important Cultural Property.

Some of the shrine's other notable sites and artifacts include 11 sacred ox statues placed around the precincts; tranquil Shinji-ike Pond, shaped like the Japanese character for "heart," which visitors cross to enter the shrine's realm of the sacred; and the approximately 6,000 trees of more than 200 species of plum, which erupt in red and white blossoms between late January and early March. The plum was Michizane's favorite tree and its blossoms were the subject of many of his poems. According to legend, the tree from his garden in Kyoto could not bear to be without him, so it uprooted itself and followed him to Dazaifu as a *tobiume*, or "flying plum tree." This is the tree that stands directly to the right of the main sanctuary.

Today, Dazaifu Tenmangū receives over 10 million visitors a year and holds over 100 rituals annually. The largest yearly ritual is the Jinkō Event (*jinkōshiki*), where the spirit of Tenjin is carried in a portable shrine from the main sanctuary to the site of his former residence to spend a night. Dazaifu Tenmangū's rituals are notable for participants who dress in clothing from the Heian period (794–late 12th century), as well as for the rituals' emphasis on learning and the arts, including poetry recitations, calligraphy displays, and prayers for success on examinations.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

太宰府天満宮

太宰府天満宮は日本で最も重要な神社のひとつである。学問、文化、芸術の祭神である天神様を祀る、全国1万社以上の神社の総本社である。太宰府天満宮を訪れる人の多くは、重要な試験の前に天神様に祈りを捧げに来る学生達とその家族である。

天神様は、傑出した学者であり、詩人であり政治家でもあった菅原道真公（845-903）の神霊である。京の都の学者の家に生まれた道真公は、学問に秀で、高名な政治家及び学者となった。外国の使節や天皇でさえもその詩作で魅了したことや、彼の統治下で貧窮した農民達の生活を向上させたことといったことで名高く、道真公は崇敬を集める人物となった。しかし、彼を妬むライバ

ル達の陰謀により、道真公は朝廷から大宰府に左遷されてしまった。大宰府での道真公は社会から排除され、ひどい生活環境を経験し、わずか2年後に亡くなった。

天満宮の起源についての逸話は道真公の没後を語っており、従者の一人が道真公の遺体を埋葬のため牛車で運んでいたという。その牛車を引いていた牛は、突然止まって先に進もうとしなくなった。これは道真公の意志を示したものだと考えた従者は、道真公をその場所に葬ることにした。数年後、時の天皇は道真公の墓所に919年に建てられたものを含めて、道真公の霊を祀る祠の建立を命じた。これがやがて太宰府天満宮となった。

天満宮境内には多くの建築的または文化的に価値のあるものが残されている。天満宮の社殿や菅公歴史館に収められている品々には、道真公自身が制作したものや所有していたものが多数あり、その中には道真公の書も含まれている。天満宮の御本殿は、その豊かな色彩、精巧な彫り、ゆるやかに傾斜した屋根で知られている。現在の建物は400年以上の歴史を持ち、重要文化財に指定されている。

天満宮にある他の有名な箇所や事物としては、境内のあちこちにある11体の御神牛の像や、参拝者が神域に入るために渡る静かな「心」の字をかたどった心字池や、毎年1月の終わりから3月初旬にかけて赤や白の花を開く約6,000本になる200種以上の梅の木々などがある。梅は道真公が愛した木で、その花は度々彼の詩の題材になった。伝承によると、京都の道真公の家の庭にあった梅の木が、彼がいなくなったことに耐えかね、根を放って道真公の後を追って太宰府に「飛梅」としてやってきたという。御本殿に向かってすぐ右側にあるのがこの飛梅の木である。

現在、太宰府天満宮には年間1000万人以上の参拝客が訪れ、年間100以上の神事が行われている。毎年行われる最大の神事は神幸行事（神幸式）で、天神様の御霊が御本殿から天神様の旧居跡まで神輿に運ばれ、そこで一夜を過ごす式典である。太宰府天満宮の神事は、参加者が平安時代（794年～12世紀後半）の衣装を身にまとうことや、詩の朗読や書の展示や合格祈願など学問や芸術に重きを置いていることで知られている。

012-003

Enokisha Shrine

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】南館跡（榎社）

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Enokisha Shrine

Enokisha Shrine stands on the site where Sugawara Michizane (845–903) lived his final two years. Michizane was a celebrated poet and administrator who was later deified as Tenjin, the Shinto deity of learning, culture, and the arts. He is enshrined at Dazaifu Tenmangū Shrine, which was erected over his grave. Every year, a grand procession escorts Tenjin from Dazaifu Tenmangū’s main sanctuary to Enokisha for a visit. This late-September festival, called the Jinkō Event (*jinkōshiki*), is Dazaifu Tenmangū’s most important annual ritual. Tenjin is carried inside an ornate portable shrine called a *mikoshi*, and hundreds of participants clothed in Heian-period (794–late 12th century) attire accompany him on the three-hour procession to Enokisha.

In Michizane’s day, the site was occupied by the Nankan, a run-down residence for government officials. Despite Dazaifu’s relative importance as a center of trade, it was very far from the imperial capital and positions of political influence such as Michizane had previously held. When jealous rivals caused him to lose favor with the emperor, Michizane was demoted and exiled to Dazaifu, where he lived in hardship. In a collection of poems completed in 903, Michizane expresses the emptiness of his new life: confined to his residence, he can see nothing but the roof tiles of other government offices, and hear nothing but the tolling of a temple bell. However, legend tells that in the midst of his misery, an elderly woman named Jōmyōni showed him compassion by bringing mochi rice cakes skewered on the branches of a plum tree. Because of her kindness, a small shrine (*hokora*) dedicated to Jōmyōni stands behind Enokisha’s main hall. Part of the purpose of the Jinkō Event is for Tenjin to visit her spirit and express his gratitude.

When the Jinkō Event procession arrives at Enokisha, shrine parishioners carry Tenjin through the *torii* gate and set the *mikoshi* down on a stone stand just beyond. They offer prayers, then carry the *mikoshi* around the shrine's main hall to Jōmyōni's shrine. Once Tenjin has greeted her, the bearers carry his *mikoshi* back to the main hall and place it inside. To the south, on the summit of Mt. Tenpai, a bonfire called the "fires to welcome returning spirits" (*mukaebi*) is lit, and its light is visible from the shrine. Enokisha's hall serves as a temporary shelter for the deity, who passes the night at his former residence. City residents and visitors alike come to pray to Tenjin before the procession returns the next day to carry him back to Dazaifu Tenmangū.

When Michizane was demoted and sent to Dazaifu, only two of his young children could accompany him: his daughter Benihime and his son Kumamaro. A memorial shrine honoring Benihime stands next to the shrine dedicated to Jōmyōni. The grave of Kumamaro is located a short walk away.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

榎社

榎社は、菅原道真公（845-903）が最期の2年間を過ごした地にある。道真公は高名な詩人であると共に政治家でもあり、後に学問、文化、芸術の神である天神様として神格化された。道真公の墓所の上に造営された太宰府天満宮に、道真公は御祭神として祀られた。毎年、太宰府天満宮御本殿から榎木社まで天神様をお送りする大行列が開催される。神幸行事（神幸式）と呼ばれるこの9月下旬の祭礼は、太宰府天満宮の最も重要な年中行事である。天神様は豪華な神輿（みこし）の中に遷され、平安時代（794年～12世紀後半）の衣装をまとった数百人の参加者が、榎社まで約3時間の行列に供奉する。

道真公の時代、この地には南館という役人用の荒れ果てた邸宅があった。太宰府は貿易の中心地として比較的重要であったにもかかわらず、帝都からはとても遠く、かつて道真公が持っていたような政治的影響力を持つ地位もなかった。嫉妬深いライバル達のせいで天皇の寵愛を失った道真公は大宰府に左遷させられ、苦難の日々を送った。903年に完成した歌集の中で、道真公は新たな生活の虚しさを詠っている。住居に閉じこもり、他の役所の屋根瓦以外には何も見えず、近くの寺の鐘の音以外には何も聞こえない、という。しかし、そんな惨めな生活の中、浄妙尼という年老いた女性が、梅の枝に餅を串刺しにして持ってきて慈しんでくれたという伝説がある。彼女の厚意のため、榎社本殿の裏手には、この浄妙尼を祀る小さな祠（ほこら）がある。天神様が彼女の霊を訪ね、感謝の気持ちを伝えることが、神幸行事の目的の一つとされている。

神幸行事の行列が榎社に到着すると、神社の氏子の人々は天神様の御神輿を担いで鳥居をくぐり、その先の石台に神輿を置く。祈りを捧げた後、神輿を担いで御本殿を廻り、浄妙尼の祠に向かう。天神様が浄妙尼にご挨拶を済ませると、担ぎ手は神輿を御本殿に戻し、その中に納める。南側の天拝山の山頂では、「迎え火」と呼ばれるかがり火が焚かれ、その明かりが神社から見える。榎社殿は天神様の一時的な在所となり、天神様は元の住まいで夜を明かす。翌日、太宰府天満宮に天神様をお連れする行列が戻ってくる前に、住民や参拝客も天神様に祈りを捧げにやってくる。

道真公が大宰府に左遷されたとき、道真公の幼い子供のうち同行できたのは、娘の紅姫と息子の熊麻呂の2人だけだった。浄妙尼を祀る祠の隣には、紅姫を祀る供養祠がある。熊麻呂の墓は少し歩いたところにある。

012-004

Mt. Hōman

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】宝満山

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Mt. Hōman

Mt. Hōman (elev. 829 m) to the northeast of Dazaifu has been the site of prayers and rituals since ancient times. Distinctive rock formations on its summit made the mountain a sacred peak that once drew the worship of mountain ascetics, and now draws hikers seeking sweeping views of Dazaifu and Hakata Bay.

Mt. Hōman is thought to have been a site for Nara-period (710–794) border rituals—ceremonies intended to spiritually delineate and safeguard the realm. Viewed from the south, the mountain forms a near-perfect triangle; consequently, it has been revered as the dwelling place of deities since prehistoric times. This sacred character made Mt. Hōman the natural place to consecrate the country’s northwestern limit and seek the deities’ protection against invasion by forces both tangible and supernatural.

The region’s proximity to the Asian continent made Hakata Bay a favored port for ships traveling to and from China and the Korean Peninsula. Turbulent straits made the sea crossing very hazardous, and many envoys and other officials are said to have climbed Mt. Hōman to pray for a safe journey. One of them was Saichō (767–822), a priest who returned from his religious studies in China to found the Tendai school of Buddhism. Before departing, he is said to have carved a statue of Yakushi, the Medicine Buddha, and left it as an offering.

During the Kamakura period (late 12th century–1333), Dazaifu’s appointed officials (*kanjin*) lived and conducted political affairs in an administrative complex located at the foot of the mountain.

In the late thirteenth to mid-fourteenth centuries, Mt. Hōman became a pilgrimage site for practitioners of Shugendō, a syncretic religion blending elements of Buddhism, Shinto, Taoism, and mountain asceticism. Remote mountaintops, grottos, and waterfalls are particularly sacred locations in Shugendō, and the mountain is said to have had over 370 priests' residences. During the Edo Period (1603–1867), Hōman's head priest (*zasu*) lived in a particularly large dwelling close to the summit. Today, its tall stone walls and well-made stone steps still exist, a testament to the prestige of its occupant.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

宝満山

太宰府の北東に位置する宝満山（標高829m）は、古来より祈りと祭祀の場であった。山頂にある特徴的な岩によってこの山はかつて修験者の信仰を集めた霊峰であり、現在は太宰府市や博多湾を一望しにくる登山者で賑わっている。

宝満山は奈良時代（710～794年）、国土を精神的に定義し、守ることを目的とした国境儀礼の場であったと考えられている。南から見ると山はほぼ完全な三角形を形成しており、その形から、先史時代から神々が住む場所として崇められてきた。この神聖な特質から、宝満山は国の北西の限界を聖別し、物理的および超自然的な力による侵略から神々の守護を求めるための自然な場所となった。

この地域はアジア大陸に近接しており、博多湾は中国や朝鮮半島を往来する船にとって好都合な港であった。波乱に満ちた航路を行く船旅は非常に危険であり、多くの使節や商人や役人が航海の安全を祈願して宝満山に登った。中国留学から帰国し、天台宗を開いた僧侶の最澄（767-822）もその一人だ。最澄は出発前に医療の仏である薬師如来像を彫り、寄贈したと伝えられている。

鎌倉時代（12世紀後半～1333年）、太宰府に任命された官人（かんじん）は、山麓の行政施設に住み、政務を執った。

13世紀後半から14世紀半ばにかけて、宝満山は仏教、神道、道教、山岳信仰の要素が混ざり合って融合した信仰である修験道の修行者の巡礼地となった。修験道では、人里離れた山頂、岩窟、滝が特に神聖な場所とされ、山には370以上の僧坊があったと言われている。江戸時代（1603-1867）には、宝満山の山頂に近い、特に大きな住居に住職（座主）が住んでいた。現在も高い石垣と立派な石段が残っており、その住職の威光を物語っている。

012-005

Festivals and High Culture at Dazaifu Tenmangū Shrine

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】太宰府天満宮の伝統行事

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Festivals and High Culture at Dazaifu Tenmangū Shrine

Sugawara Michizane (845–903), a renowned scholar, poet, and administrator, is enshrined at Dazaifu Tenmangū Shrine as Tenjin, the Shinto deity of learning, culture, and the arts. Throughout the year, more than 100 events are held at Dazaifu Tenmangū to celebrate Tenjin and to gratify him through the cultural pursuits he enjoyed. Some of these festivals originated as courtly activities that were first brought to the region by officials from Kyoto when they were posted to Dazaifu. Although their practice has largely died out, these echoes of the Heian-period imperial court (794–late 12th century) are preserved as yearly events at Dazaifu Tenmangū.

Michizane was a passionate practitioner of many of the aristocratic arts and cultural pursuits of the Heian period. He admired the plum blossoms of early spring, composed and recited poetry, and celebrated the Tanabata star festival. Three of Dazaifu Tenmangū's traditional festivals pay tribute to these ancient pastimes: *Kyokusui no En* in spring, *Tanabata* in summer, and *Zangiku no En* in autumn.

Kyokusui no En (“ceremony of the winding stream”) is a poetry composition and recitation event held beneath the brightly colored plum blossoms. It was first celebrated in Dazaifu in 958. On the first Sunday of March, participants in Heian-period attire gather in one of the shrine's gardens to take part in a ceremony modeled after one held at the imperial court in Kyoto. After a traditional dance performance, poets line up along a stream in the garden for the main event: composing a *waka* poem on a strip of paper before a floating cup of sake reaches them from upstream.

Tanabata (“ceremony of the seventh evening”) is an annual festival celebrated throughout Japan on July 7. According to a legend imported from China, the deities Orihime and Hikoboshi fell in love but were forced to part. Afterward, the two were permitted to meet only on the seventh day of the seventh month. Michizane knew this legend well, and even composed poetry about it. At Dazaifu Tenmangū, thousands of colorful strips of paper inscribed with wishes are hung from branches, and the festivities include musical and dance performances by participants dressed in *yukata* robes.

Zangiku no En (“ceremony of the last chrysanthemums”) takes place in late November and is another ceremony once held at the imperial court. It was introduced to Dazaifu in memory of Michizane, who loved chrysanthemums. Participants drink sake infused with chrysanthemum (a symbol of longevity) before joining a calligraphy ceremony. Colorful potted chrysanthemums and the skillfully rendered works of calligraphy are offered to Tenjin as prayers for continued improvement.

Many of Dazaifu Tenmangū’s other festivals and events place a similar emphasis on learning and culture, such as the late-February *baikasai* (“plum blossom ceremony”), where shrine maidens (*miko*) dance with plum branches in hand. There is also the Special Prayer for Success on Examinations (*tokubetsu juken gōkaku kigan taisai*), where students pray for academic success on October 18—the date that Michizane passed the Heian period’s most challenging examination.

It is thanks to Dazaifu’s prominence as the Western Capital that high culture flourished so far from the imperial court, but it was Michizane and Dazaifu Tenmangū that ensured many cultural pastimes of the Heian court continue today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

太宰府天満宮の伝統行事

菅原道真（845-903）は伝説的な学者でも詩人でも政治家でもあり、太宰府天満宮に学問・文化・芸術の神様である天神として祀られている。年間を通して、太宰府天満宮では天神様をお祀りし、天神様が親しんだ文化を通じて感謝を伝えるため、100を越える祭礼が行われている。

道真公は、平安時代（794-1185）を代表するような様々な芸術的・文化的な活動に意欲的に取り組んだ人物であった。早春の梅を愛で、歌を詠み、七夕を祝った。こうした古代の取り組みに敬意を捧げたものとして、太宰府天満宮の3つの主要な祭礼である春の曲水宴、夏の七夕祭、秋の残菊宴がある。

曲水宴は、鮮やかに色付いた梅の下で歌を作って詠む行事であり、太宰府では1100年近く続いている。かつては京都御所で行われていた宮中行事で、3月の第一日曜日に平安時代の装束に身を包んだ参加者が神社の庭に集まって行事が行われる。伝統的な舞踊が披露された後、上流から盃が自分のところに流れてくる前に和歌を作って短冊に書く催しのため、歌詠み達は庭園の小川に沿って並ぶ。

七夕は毎年7月7日に日本全国で祝われる祭礼である。中国から伝わった伝承で、織姫と彦星は恋に落ちたが強制的に引き離された。その後、2人は7月7日にだけ会うことを許された。道真はこの伝承に通じており、詩にしたもある。太宰府天満宮では願い事を書いた何千枚もの色とりどりの短冊が枝に吊るされ、浴衣姿で音楽や踊りを楽しむ祭礼が催される。

11月下旬に行われる「残菊宴」も、かつて宮中で行われていた儀式である。菊の花を愛した道真公を偲んで太宰府に伝わった。参加者は長寿の象徴である菊の花を入れたお酒を飲んでから、墨書の儀に参加する。色とりどりの菊の鉢植えと巧みに描かれた書道作品は、その後もお供え物及びさらなる発展への祈願として天神様に捧げられる。

その他の太宰府天満宮の祭礼や行事でも、例えば梅の枝を手に巫女が舞う2月下旬の梅花祭（ばいかさい）など、学問や文化に重きを置いたものが多い。また、10月中旬には道真公が平安時代最難関の試験に合格した日に、受験生が学業成就を祈願する「特例合格祈願大祭」というものもある。

012-006

The Jinkō Event: Tenjin's Grand Procession

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】太宰府天満宮神幸行事

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

The Jinkō Event: Tenjin's Grand Procession

The Jinkō Event (*jinkōshiki*) is the most important annual event at Dazaifu Tenmangū Shrine. The Shinto deity Tenjin, who is the deified spirit of the renowned scholar, poet, and administrator Sugawara Michizane (845–903), is carried in an imposing procession from the shrine's main sanctuary to the site of Michizane's former residence. The festival is held to honor Tenjin, pray for national prosperity, and give thanks for the autumn harvest.

The procession begins on the evening before the autumn equinox. Tenjin's spirit is ritually transferred into an ornate portable shrine called a *mikoshi*. Bearers shoulder the *mikoshi* before transferring it to an elaborately decorated cart to be pulled across the city. The procession is accompanied by hundreds of participants clothed in Heian period (794–late 12th century) attire and the drums and bells of traditional Shinto music. Following the same path the procession has taken for more than 900 years, the procession travels 2.5 kilometers over the course of three hours to Enokisha Shrine. The shrine is located on the former site of the Nankan, a government residence where Michizane lived during his final years.

Once at Enokisha Shrine, Tenjin is carried to a small shrine (*hokora*) behind the main hall. This shrine is dedicated to Jōmyōni, an elderly woman who once helped Michizane in a time of need. Michizane lived in poverty in Dazaifu, but legend tells that Jōmyōni brought him mochi rice cakes skewered on the branch of a plum tree. For her kindness, Tenjin visits Jōmyōni each year to express his thanks. Then he is carried back to Enokisha's main hall, where his *mikoshi* remains for the night. The following afternoon, the procession walks the course in reverse, returning Tenjin to his sanctuary

at Dazaifu Tenmangū.

The Jinkō Event was initiated by Dazaifu's provisional governor-general in 1101 to mourn Michizane. Today, the festival captivates the entire city, and viewers crowd the streets to watch the spectacular procession. The festival also involves other sites around Dazaifu that are associated with Michizane, such as Mt. Tenpai, which Michizane once climbed to commune with the heavens. Before the procession begins, participants who will carry Tenjin's *mikoshi* collect purifying sand (*oshioi*) from a waterfall at the foot of the mountain. Fires lit on top of the mountain can be seen from Enokisha Shrine, where residents come to pray to Tenjin during his temporary stay.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

神幸行事

神幸行事（神幸式）は、太宰府天満宮の最も重要な年中行事である。偉大な学者であり詩人であり政治家でもあった菅原道真公（845-903）の御霊が神格化された天神様が、天満宮御本殿から道真公の旧居跡まで堂々たる行列でお送りする。天神様を祀り、国の繁栄を祈り、秋の収穫に感謝する祭りである。

行事は秋分の日の前夜から始まる。天神様の御霊を豪華な神輿に移す儀式が行われる。担ぎ手は神輿を肩に担ぎ、精巧な装飾が施された御車に移した後、その御車を引いて市中を巡る。平安時代（794年～12世紀後半）の装束に身を包んだ数百人の参加者や伝統的な神楽の太鼓や鐘が行列に伴う。神幸行事は900年以上も前から同じ道を辿り、3時間かけて榎社まで2.5キロを行進する。榎社は、道真公が晩年を過ごした役人邸宅である南館がかつてあった地にある。

榎社に着くと、天神様は御本殿の裏にある小さな祠（ほこら）に運ばれる。これは、かつて道真公が苦難されていたときに手を差し伸べた老女、浄妙尼を祀る祠である。道真公は太宰府で困窮した暮らしを送っていたが、浄妙尼が梅の枝に刺した餅を届けてくれたという逸話がある。その厚意に対して、天神様は毎年浄妙尼を訪問してお礼を伝える。その後、天神様は榎社の本殿に遷され、神輿はその場所に夜通し置かれる。翌日の午後、行列は前日と反対の経路で進み、天神様を太宰府天満宮にお送りする。

1101年、神幸行事は道真公を弔う目的で大宰権帥によって始められた。今日では、行事は太宰府市全域に及び、華やかな行列を見ようと多くの見物者で賑わう。また、道真公がかつて天に向かって祈るために登った天拝山など、太宰府周辺の道真公ゆかりの地も祭りの舞台となる。行事が

始まる前に、天神様の神輿を担ぐ参加者は山麓の滝で清めの砂（御汐井）を集める。山頂で焚かれる火は、天神様が一時滞在している間に住民が祈りを捧げに訪れる榎社から見る事ができる。

012-007

Mizuki Fortress Ruins

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】水城跡

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Mizuki Fortress Ruins

Mizuki Fortress was a 1.2-kilometer-long, 80-meter-wide defensive embankment built in 664. The imperial court ordered its construction to guard the Dazaifu area—and ultimately, all of Kyushu—against a potential invasion by China’s Tang dynasty (618–907). The massive wall was built to connect the ridgelines of two mountains south of Hakata Bay, thereby closing off the large plain that opened up farther south. The walls of Mizuki Fortress stood around 10 meters high. In front of the embankment, facing the bay, was a 60-meter-wide moat that exceeded the maximum range of archers of the day.

In 663, Japan and the remnants of the Korean kingdom of Baekje (? CE–660 CE) suffered a disastrous military defeat at the hands of China’s Tang dynasty and Silla (? CE–935 CE), another Korean kingdom. The loss spurred the imperial court to create large-scale fortifications south of Hakata Bay, which seemed the most likely landing place for foreign ships. This round of defensive infrastructure also saw the building of two mountain fortresses in 665, located on strategic peaks overlooking the plain: Ōnojō and Kijō Fortresses.

Mizuki Fortress was constructed using techniques brought from the Korean Peninsula. Groundwater and rivers such as the Mikasa River, which flowed through the center of the embankment site, made the terrain swampy. This meant that the base of the wall would sit upon soft, waterlogged soil that would not provide firm support. The ancient builders had a solution, however—they filled the lowest layers of earth with leaves and branches to prevent the embankment from sinking. Once a stable base was established, they erected wooden walls around the section to be filled. The planks retained the earth

and sediment that was poured in and then tamped down, layer by layer. Each layer was firmly packed before the next was added.

In the base of the wall, wooden culverts were put in place. On the south side, within the fortress, water from the surrounding area was diverted to fill a series of artificial ponds; it flowed from the ponds through the culverts, beneath the massive embankment, and into the moat. This clever use of water as a form of defense gave the fortress its name: “Mizuki” means “water castle.” The fortress had two gates, one in the east and one in the west. The eastern gate has never been excavated, but the walls on either side of the western gate were particularly fortified, built of stone blocks rather than earth.

There was no invasion from the continent, but Mizuki Fortress went on to serve a role in amicable diplomacy. In the early eighth century, the city of Dazaifu was built to the south, and the fortress acted as its northern wall. Foreign dignitaries visited Dazaifu before continuing east to the imperial capital, and they entered the city through the Mizuki Fortress’s west gate. Accordingly, all of the diplomats, imports, and culture that flowed into Dazaifu—and from there to the rest of the country—came through this gate. In this way, the fortress became the literal gateway to Japan, a role it fulfilled until the end of the eighth century, long after its defensive function had ended. As ports and marine trade grew in importance, however, the focus of activity shifted northward toward Hakata Bay.

Much of this ancient fortress still stands, although some sections are split by modern roads and railways. It can be seen up close in several local parks, or as a long line of trees visible from overlooks on Mt. Tenpai and Mt. Shiōji.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

水城跡

水城は、664年に築かれた長さ1.2キロ、幅80メートルの防衛のための土塁である。朝廷は、中国唐王朝（618-907）の侵略の脅威から太宰府地方、ひいては九州全域を守るために水城の建設を命じた。この巨大な土塁は、博多湾の南にある山の稜線を結ぶように築かれ、さらに南に広がる広大な平野を閉ざした。水城の土塁は高さ10メートルほどであった。湾に面した堤防の手前には、

当時の弓矢の射程を超える幅60メートルの濠があった。

663年、日本と朝鮮王朝百済（～660年）の残党は、中国の唐や同じく朝鮮王朝の新羅（～935年）に壊滅的な軍事的敗北を喫した。この敗戦を受けて、朝廷は外国船が最も上陸しやすいと思われた博多湾の南に大規模な要塞を築かせた。この一連の防衛インフラ整備で、665年に平野を見下ろす戦略的な峰に2つの山城が築かれた。大野城、基肄城である。

水城は朝鮮半島から伝わった技術で築かれた。地下水と、堤防敷地の中央を流れる御笠川などの河川によってあたりは湿地帯になっていた。このため、堤の基礎部分は、しっかりと支えることができない柔らかく湛水した土の上に置かれることになる。しかし、古代の建設者には解決策があった。最下層の土に木の葉や枝を埋め尽くすことで、土塁が沈むのを防いだのだ。安定した基盤ができると、埋め立てる部分の周囲に木の枠を設けた。この木板が中に溜められた土砂を留め、層ごとに踏み固めた。各層は、次の層が追加される前にしっかりと詰められた。

壁の土台部には、木製の暗渠が設置された。城の南側には、周囲からの水を分水して一連の人工池を作った。水は池から暗渠を通して巨大な堤防の下に流れ込み、濠に注いでいた。この巧みな水を利用した防衛方法が、「水城」の名前の由来となった。要塞には東と西に2つの門があった。東の門は発掘されていないが、西の門の両側の城壁は特に強固で、土ではなく石のブロックで造られていた。

大陸からの侵略はなかったが、水城はその後、友好外交の役割を果たした。8世紀初頭には、南に大宰府が建設され、水城はその北壁として機能した。外国の要人は東の帝都へと向かう前に太宰府を訪れ、水城の西門から太宰府に入った。したがって、太宰府に流入する外交、輸入品、文化は全てこの門から入り、全国各地へと行ったことになる。こうして水城は文字通り日本の玄関口となり、その役割は防衛的な役割が終わった後も長らく8世紀末まで続いた。しかし、港や海上貿易の重要性が増すにつれて、そうした外交や交易といった活動の中心は、北の博多湾へと移っていった。

現代の道路や線路によって分断されている部分もあるが、この古代の堡塁の多くは今も残っている。いくつかの地域の公園では間近に見学することができるほか、天拝山や四王寺山の展望台からは長い並木のラインの見た目で確認できる。

012-008

Ōnojō Fortress Ruins

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】大野城跡

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Ōnojō Fortress Ruins

Ōnojō Fortress was a large-scale fortification built in 665 on Mt. Shiōji, just north of Dazaifu. Eight kilometers of earthen and stone walls surrounded a central camp on the mountain's summit, which gave a vantage of ships approaching Hakata Bay. The imperial court ordered the construction of a fortress in this strategic position to defend the country against foreign invasion. Another followed that same year, but Ōnojō is the oldest known mountain fortress in Japan.

During the sixth and seventh centuries, Japan (called “Wa” at the time) maintained good relations with the Korean kingdom of Baekje (? CE–660 CE) and enjoyed a flourishing cultural exchange. Baekje's stability began to wane, however, and in 663, Japan and the remnants of Baekje suffered a disastrous military defeat at the hands of China's Tang dynasty (618–907) and Silla (? CE–935 CE), another Korean kingdom. At that time, Tang China was the most advanced civilization in Asia, and Japan faced significant technological and tactical disadvantages. The enemy had better steel weapons and an abundance of warhorses and crossbows, both of which were still rare in Japan; they also had superior warships.

The 663 loss spurred rulers in the court to create large-scale fortifications south of Hakata Bay, which seemed the most likely landing place for foreign ships. This round of defensive infrastructure also saw the building of Mizuki Fortress, a 1.2-kilometer-long fortified embankment between Hakata Bay and Dazaifu, as well as a second mountaintop fortification known as Kijō Fortress.

Ōnojō Fortress was constructed using the techniques and guidance of exiled nobles from Baekje, who patterned it after mountain fortresses in their own capital. Workers first flattened the ground, dug a pit, and erected wooden walls around the section to be filled. The planks retained the earth and sediment that was then poured in and tamped down, layer by layer. Most of the walls surrounding the fortress were also built with this hard-packed earth, but sections of stone wall between 3 and 8 meters in height guarded the valleys. Often springs or small rivers flowed through these valleys, so the walls had culverts or gaps in the rock to permit water flow. Excavators have found or uncovered 9 gates, some 70 buildings (primarily storehouses from the eighth century and later), and a central structure thought to have been a headquarters.

Ultimately there was no invasion, but Ōnojō Fortress was kept manned until around the tenth century. Its construction represented one of Japan's earliest efforts at a wide-reaching national defense policy. In addition, the use of continental building techniques to construct Ōnojō Fortress is just one of the many signs of cultural and technological exchange occurring in Dazaifu at that time.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大野城跡

大野城は、665年に大宰府のすぐ北にある四王寺山に築かれた大規模な要塞である。博多湾に近づく船を一望することができる山頂の陣屋を8キロに及ぶ土と石の壁が囲んでいた。朝廷は、外国の侵略から国を守るため、この戦略的要地に要塞の建設を命じた。すぐに他の山城が続くが、大野城は日本最古の山城である。

6世紀から7世紀にかけて、日本（当時は「倭」と呼ばれていた）は朝鮮半島の百済王朝（～660年）と友好関係にあり、文化的な交流を享受していた。しかし百済の政情は安定を欠いていき、663年に日本と百済の残党は、中国の唐（紀元前618～907年）と同じ朝鮮半島の新羅（～935年）の前に悲惨な軍事的敗北を喫した。当時、唐はアジアで最も先進的な文明国であり、日本は技術的にも戦術的にも大きなハンデを抱えていた。敵はより優れた鉄製の武具と、日本ではまだ珍しかった軍馬や弩を豊富に持ち、優れた軍船も持っていた。

663年の敗戦は、外国船が最もやって来そうな場所である大宰府周辺地帯に大規模な要塞を築くように宮廷の上位者達を駆り立てた。この頃の他の防衛インフラとしては、博多湾と太宰府の間に1.2キロの土塁を備えた水城や、2つ目の山城である基肄城などが見られる。

大野城は、百済から亡命してきた貴族の技術と指導によって築かれたもので、百済の都の山城を踏襲した。作業員はまず地面を平らにならし、穴を掘り、盛り土をする部分の周囲に木の板壁を設けた。土砂を注ぎ、一層ずつ踏み固めていったものを、この板が留めた。要塞を取り囲む城壁の大部分もこのような強く固めた土で築かれたが、谷間には高さ3メートルから8メートルの石垣が築かれた。谷に向かって流れる湧き水や小さな川がしばしばあったため、城壁には水を逃がすための暗渠や岩の隙間が設けられた。これまでに発掘調査によって9つの門、約70の建物（主に8世紀以降に建てられた倉庫）、本営だったと思われる中央の建造物が発見・発掘されている。

結局、侵攻はなかったが、大野城は10世紀頃まで有人であった。大野城の築城は、日本最初の広範囲に及ぶ国防政策の取り組みを代表するものであった。また、大野城の築城に大陸の建築技法が用いられたことは、当時の太宰府周辺で文化や技術の交流が行われたことを示す多くの痕跡のひとつである。

012-009

Plum Trees of Dazaifu

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】太宰府の梅

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Plum Trees of Dazaifu

Plum trees were introduced to Japan from China during the Nara period (710–794). They were brought to Dazaifu by officials from the imperial court—particularly Sugawara Michizane (845–903), a poet and scholar who loved plum blossoms. After Michizane’s death, he was enshrined at Dazaifu Tenmangū Shrine, and a plum blossom became the symbol of both the shrine and the greater city of Dazaifu.

In the ninth century, cultivating plum trees and hosting plum-blossom viewing parties were expressions of high culture, and Michizane was deeply devoted to them. Before leaving Kyoto for his exile in Dazaifu, Michizane composed a now-famous poem addressed to his garden’s plum tree:

kochi fukaba

nioi okoseyo

ume no hana

aruji nashi tote

haru na wasure so

Should the spring breeze blow,
Let it carry your scent to me,
my blossoming plum!
Even with your master gone,
never forget the spring.

According to legend, after Michizane's departure the tree could not bear to be without him. It uprooted itself and flew in a single night to be with him in Dazaifu, earning the name *tobiume*, or "flying plum tree." It is said that the large plum tree in front of the shrine's main sanctuary is this same tree. In a special June ceremony, priests and shrine maidens gather the plums it produces and use them to make a limited number of very special amulets that convey the blessings of Tenjin.

Another tale connecting Michizane to plum trees speaks of a time after his arrival in Dazaifu, when he was suffering from hunger. A kind old woman brought him mochi rice cakes skewered on a plum branch. Today, her kindness is remembered in the Dazaifu treat called *umegae* mochi. These rice-flour dumplings are filled with sweetened red bean paste, and the shape of a plum blossom is burned onto their surface.

The abundance of plum trees at Dazaifu Tenmangū is a gesture of love and respect for Tenjin.

Around 6,000 plum trees of some 200 varieties grow on the grounds, and from late January to early March, they fill the shrine's gardens and walks with blooms of red and white.

The shrine holds multiple festivals in celebration of plum trees, including the Plum Blossom Ceremony, or *baikasai*, where shrine maidens dance holding plum branches, and *Kyokusui no En*, a poetry composition ceremony held beneath the spring blossoms.

Today, the plum blossom is not only a symbol of Dazaifu Tenmangū—it is also the symbol of Dazaifu and Fukuoka Prefecture. In Dazaifu, plum trees are planted in the yards of neighborhood houses and have become an intrinsic part of the city's culture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

太宰府天満宮の梅

梅は、奈良時代（710-794）に中国から日本に伝わった。梅は朝廷の役人達によって大宰府にもたらされ、特に歌人でも学者でもあった菅原道真（845-903）公は梅の花を愛した。死後、

道真公は太宰府天満宮に祀られ、梅の花は天満宮と太宰府のシンボルとなった。

9世紀当時、梅を栽培し、観梅会を催すことは高尚な文化的営みであり、道真公はそれに深く傾倒していた。太宰府への左遷のため京都を去る前に、彼は庭の梅に宛てた有名な歌を詠んだ：

東風吹かば
匂いおこせよ
梅の花
主無しとて
春な忘れそ

春の風が吹いたら
香りを届けてほしい
花開く私の梅よ
主人が居なくなったからといっても
春が来ることを忘れるな

伝承によれば、道真公が去った後、この梅の木は道真公がいないことに耐えられなくなってしまった。根こそぎ一夜で道真公のいる太宰府へと飛んでいったことで「飛梅」と呼ばれるようになったという。太宰府天満宮の本殿前にある大きな梅の木は、この梅の木だと言われている。6月の特別な式典では、神職や巫女がこの梅の実を集め、天神様のご加護をもたらす特別なお守りを数量限定で作る。

道真公と梅にまつわるもうひとつの逸話に、道真公が太宰府に到着した後、飢えに苦しんでいた時のものである。その時、親切な老女が梅の枝に餅を刺して持ってきてくれた。今日、この老女の厚意は、梅ヶ枝餅という太宰府の名物に偲ばれている。餡が入った米粉の団子の表面に梅の花の形を焼き付けたものである。

太宰府天満宮の梅の木の多さは、天神様への敬愛の表れである。

境内には約200種6,000本の梅の木があり、1月下旬から3月上旬にかけて、庭や散歩道を紅白の花で彩る。

太宰府天満宮では、梅の枝を持って巫女が舞う「梅花祭」（ばいかさい）や、春の花の下で歌合が行われる「曲水の宴」（曲水の宴）など、梅にちなんだ祭りが数多く行われている。

現在、梅の花は太宰府天満宮のシンボルであるだけでなく、太宰府市や福岡県のシンボルでもある。太宰府市では、地域の家の庭先に梅の木が植えられており、街の文化の固有な部分となっている。

012-0010

Restoration of the Main Sanctuary

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】太宰府天満宮本殿大改修

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Restoration of the Main Sanctuary

In May 2023, full-scale renovations began on Dazaifu Tenmangū Shrine’s main sanctuary (*honden*) for the first time in 124 years. The work was launched in anticipation of large-scale festivities to be held in 2027—a year that will mark the 1,125th anniversary of the death of renowned poet and scholar Sugawara Michizane (845–903). Michizane is enshrined in the *honden* as Tenjin, the Shinto deity of learning, culture, and the arts. Over the centuries since his death, Dazaifu Tenmangū has upheld Michizane’s commitment to scholarship and artistic advancement, and this philosophy will guide the restoration process. Through the repairs, the shrine hopes to gain new knowledge about the sanctuary and transmit it to future generations.

Renovations to the main sanctuary include replacing its roof, re-lacquering its surfaces, and strengthening the structure against natural disasters. These are the most extensive repairs to the *honden* since it was last rebuilt, approximately 430 years ago. Architects, historians, and other researchers will analyze the condition of the roof and the structural integrity of the building, using historical techniques and materials to perform any necessary repairs.

The *honden* was built with the most advanced construction techniques of the sixteenth century. These complex methods are no longer employed in modern construction, so shrine renovations are an important opportunity to teach them to the next generation. For example, one of the areas targeted for repair is the *hiwada-buki* roof on the main sanctuary. Said to have originated over 1,300 years ago, the *hiwada-buki* technique uses layer upon layer of thin cypress bark to produce a surface that is durable, waterproof, and flexible enough to enable the sweeping curves of the roof. Veterans of

the *hiwada-buki* craft will work alongside younger people to pass on this and other traditional methods.

To prepare for the start of construction work, the spirit of Tenjin was relocated from the main sanctuary to a temporary hall (*kariden*). Major renovations necessitate a *kariden* out of consideration for the deity, who needs a proper dwelling in the interim. Also, workers cannot enter the sacred space where he resides. The transfer of Tenjin's spirit was performed at night, and priests obscured the route with curtains so that Tenjin could move in privacy between the buildings. Priests also removed the many treasures of the *honden*—objects dedicated to Tenjin over the centuries—to inspect them and perform repairs.

The work is scheduled to be completed in 2026, in advance of the upcoming festival known as the “Anniversary of Sugawara Michizane Grand Ceremony of Dazaifu Tenmangū.” This celebration is held at 25-year intervals in accordance with the number's religious significance: Michizane's birth and death both occurred on the twenty-fifth day of the month in the old lunar calendar. The Grand Ceremony, held to pray for the rejuvenation of Tenjin's divine power, is Dazaifu Tenmangū's most important ritual event.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

太宰府天満宮本殿大改修

2023年5月、太宰府天満宮御本殿の124年ぶりの本格的な改修工事が着手された。この大改修は、歌人としても学者としても高名な菅原道真公（845-903）の没後1,125回忌である2027年に催される式年大祭に向けて開始された。道真公は学問・文化・芸術の神様である天神様として本殿に祀られている。太宰府天満宮は道真公の没後から何世紀にも渡って、学問と芸術の発展に対する道真の意志を存続させてきており、その精神は今回の改修工事にも反映される。天満宮は、この修理を通じて得られた神様のお住まいになる場所に関する新たな見識を後世に伝えていきたいと考えている。

御本殿の改修には、屋根の葺き替え、表面の漆の塗り直し、自然災害に対する構造の強化などが含まれる。御本殿が最後に再建された約430年前以来で最も大規模な改修となる。建築家や歴史家や他の研究者によって、屋根の状態や建物の構造的健全性を分析し、伝統的な技術や

資材を使用して必要とされる改修が行われる。

現在の御本殿は16世紀の最先端の建築技術で以て建てられた。この複雑な工法は現代の建築では採用されていないため、天満宮の改修は次世代へとそうした工法を伝えていく重要な機会となっている。例えば、今回の改修対象の一つに御本殿の檜皮葺の屋根がある。1300年以上前に生まれたと言われる檜皮葺の技術は、薄い檜の皮を何層にも重ねて葺くやり方で、耐久性、防水性に優れ、屋根をカーブさせるのに必要な柔軟性が得られる。経験ある檜皮葺師は、こうした技術やその他の伝統手法を継承するため、弟子達と共に作業にあたる。

改修開始に先立って、天神様の御霊は本殿から一時的なお住まいである仮殿へと遷った。大規模な改修においては、改修期間中の神様の適切なお住まいとして仮殿が必須となる。また、作業員は天神様がいらっしゃる神聖な空間には立ち入ることはできないとされている。天神様が人目に触れず御本殿から仮殿へと遷れるよう間の通路を神職が幕で隠す中で、仮遷宮は夜間に執り行われた。また、何世紀にも渡って天神様に奉納されてきた多くの宝物も神職によって御本殿から移動され、点検と修理が行われた。

この大改修は、2026年に予定されている道真公を祀る式年大祭に先駆けて完了する予定である。式年大祭は25年毎に行われており、それは道真公の生誕と薨去がいずれも旧暦の月の25日に起こっており、宗教的な意味のある数字とされていることからきている。天神様の神威の発揚を祈るこの祭りは、太宰府天満宮の最も重要な神事である。

012-011

Kankō Historical Museum

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】菅公歴史館

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Kankō Historical Museum

Sugawara Michizane (845–903), sometimes known as Kankō, is enshrined at Dazaifu Tenmangū Shrine as Tenjin, the Shinto deity of learning, culture, and the arts. Sixteen displays of traditional Hakata dolls illustrate the story of Michizane’s remarkable life and death. There is also a wide variety of “Tenjin dolls” (*tenjin ningyō*) from across the country and artifacts from Dazaifu Tenmangū’s many rituals.

The Life of Sugawara Michizane in 16 Scenes

Hakata dolls (*hakata ningyō*) are unglazed ceramic dolls produced in the Hakata district of Fukuoka.. Their origins date back to the seventeenth century, and the dolls are known for their elegance and minutely sculpted detail. Those displayed here are dressed in finely tailored miniature kimono—a rarity even among Hakata dolls.

1. Plum Blossom Poem (849 CE, age 5)

Michizane was a talented student and poet as a child. In this scene, he is composing a waka, or classical Japanese poem, which was an extraordinary feat for his age. The poem reads:

*Utsukushi ya
beni no iro naru
ume no hana
ako ga kao ni mo
tsuketaku zo aru*

So beautiful,
the crimson hue
of the plum trees' bloom—
how I wish to adorn
my cheeks with it.

2. A Mother's Prayer (859 CE, age 15)

Michizane suffered from frail health, so every day his mother went to a local temple and prayed to Kannon, the bodhisattva of compassion. She asked that her son succeed in his studies and grow up strong, and her heartfelt prayers were answered.

3. Master of Pen and Sword (870 CE, age 26)

Because Michizane grew up in a family of scholars, his peers expected him to have little in the way of physical ability—but in fact, he was a skilled archer. Here, Michizane is participating in an archery competition and hitting the mark every time, achieving a perfect score.

4. Professor of Literature (877 CE, age 33)

In an era when Chinese language and culture was predominant in the imperial court, government offices were given to those who could prove their mastery of the Chinese classics. At the extremely young age of 26, Michizane passed the highest-level exam at the court's bureaucratic training institution, and at 33 he earned the top position of *monjo-hakase*, or "Professor of Literature." In this scene he is teaching students.

5. Poetic Diplomacy (883 CE, age 39)

Michizane sometimes met with foreign emissaries to entertain them and demonstrate Japan's cultural achievements. To welcome visitors from Balhae (a kingdom that once occupied northeastern China and the northern Korean Peninsula), Michizane skillfully composed and recited a poem in Chinese. His prowess left a lasting impression.

6. Compassionate Bureaucrat (886 CE, age 42)

Michizane was sent to administer distant Sanuki Province (now Kagawa Prefecture).

He sympathized with the impoverished peasants and put his administrative skills to work assisting the poor, eventually earning the respect of the people. His experiences in different regions of Japan enabled him to introduce government reforms. Here, Michizane is opening up the rice stores to distribute food in a time of drought.

7. Brocade of Autumn Leaves (898 CE, age 54)

On a fall trip with Emperor Uda (866–931), Michizane visited a shrine on Mt. Tamuke in Nara. There he composed a famous poem later selected as one of the hundred poems for the classic anthology *Hyakunin isshu*:

*kono tabi wa
nusa mo toriaezu
tamukeyama
momiji no nishiki
kami no manimani*

On this day's journey
I have even failed to bring
a gift of sacred streamers
to the Hill of Offering
a brocade of autumn leaves,
should the gods accept.

Here, Michizane follows as the emperor rides beneath the brilliant foliage.

8. The Emperor's Gift (900 CE, age 56)

Michizane wrote a poem called "Thoughts of Autumn" at a court poetry contest. Here, Emperor Daigo (885–930) is so impressed that he removes his own robe and gives the lavish garment to Michizane as a reward. This unusual gesture was a tribute to Michizane's extraordinary talent.

9. Demotion and Exile (901 CE, age 57)

Michizane was a highly successful government minister, but this brought him into

conflict with the Fujiwara family, which held considerable influence over the imperial court. Jealous rivals spread rumors to implicate Michizane in a conspiracy, leading the emperor to exile him from Kyoto to Dazaifu. In this scene Michizane hears that he is being demoted and expelled from the capital.

10. Farewell, Plum Blossoms (901 CE, age 57)

Plum trees were introduced from China and considered symbols of high culture. Michizane's fondness for them was well known, and before departing Kyoto he composed a sorrowful poem addressed to one of the plum trees in his garden:

*kochi fukaba
nioi okoseyo
ume no hana
aruji nashi tote
haru na wasure so*

Should the spring breeze blow,
let it carry your scent to me,
my blossoming plum!
Even with your master gone,
never forget the spring.

According to legend, after Michizane's departure the tree could not bear to be without him. It uprooted itself and flew to Dazaifu, earning the name *tobiume*, or "flying plum tree." It stands now in front of Dazaifu Tenmangū Shrine's main sanctuary, where it blooms each year. Some scholars also interpret the plum tree as a metaphor for Michizane's family, most of whom he left behind. In this scene, he is composing the plum-tree poem as his wife weeps.

11. Leaving the Capital (901 CE, age 57)

In this scene just outside of Kyoto, people along the roadway witness Michizane's departure (represented by the procession in the background). They are sorry to see him leave for distant Dazaifu, feeling that his banishment is unjust.

12. Parting at Dōmyōji Temple (901 CE, age 57)

On his way to Dazaifu, Michizane visited his aunt, a nun at Dōmyōji Temple in Kawachi Province (now Osaka Prefecture). Although the two had much to discuss, the emperor's men woke Michizane at dawn and forced him onward. Here, his aunt watches as he departs.

13. Arrival at Hakata Port (901 CE, age 57)

Only Michizane's son Kumamaro, his daughter Benihime, and one retainer were permitted to accompany him. After a long and exhausting journey, the small group finally arrives at the port in Hakata Bay. On the left, a fisherman coils a rope to make a seat for Michizane to rest.

14. Remembrance (902 CE, age 58)

In Dazaifu, Michizane took up residence in a dilapidated government residence called the Nankan, and other city officials were forbidden to speak with him. On the anniversary of the previous year's poetry contest (see Display 8), Michizane took out the robe he received from Emperor Daigo. Instead of feeling resentment, he composed a poem praying for the emperor's well-being and expressing his continuing devotion. In this scene, he gazes at the folded robe, head bowed.

15. Prayer on the Peak (902 CE, age 58)

Despite a terrible storm, Michizane climbed to the peak of Mt. Tenpai, approximately 5 kilometers southwest of Dazaifu Tenmangū, to plead his innocence to heaven. Here he is shown holding a *fuzue*, a staff used to offer letters to nobility and emperors (to avoid passing them directly). Michizane is using the *fuzue* to present his plea and praying amidst the thunder and lightning. In Kyoto, legends tell of disaster wrought upon the capital by Michizane's vengeful ghost, but Michizane bore the capital no ill will and instead often prayed for the welfare of country and emperor.

16. A Place of Repose (903 CE, age 59)

Michizane passed away at home, beset by illness brought on by poor living conditions. A retainer loaded his remains in an ox cart for transport, but soon after, the ox suddenly came to a halt and refused to go any farther. Michizane's retainer decided the

cow's refusal was a sign of his lord's will, and that he wished to be buried there. After interring him, the retainer built a shrine there. This is the origin of Dazaifu Tenmangū.

Tenjin Dolls

These miniature dolls of Michizane spread across the country as local souvenirs sold at shrines, and are said to have originated during the Muromachi period (1338–1573). Local artisans make Tenjin dolls with different materials and styles depending on their region of origin. They are made for a variety of purposes, ranging from offerings to children's toys.

Dazaifu Tenmangū Shrine Festivals

Over 100 rituals are held at Dazaifu Tenmangū throughout the year, including the annual Jinkō Event (*jinkōshiki*). In this autumn festival, Tenjin is carried from the main sanctuary to the site of his former residence to spend a night. Dazaifu Tenmangū's festivals are notable for Shinto priests and participants donning the traditional clothing of the Heian period (794–late 12th century). They also emphasize learning and the arts, including poetry recitations, calligraphy displays, and prayers for students' success in school examinations.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菅公歴史館

菅公として知られる菅原道真公（845-903）は、学問・文化・芸術の祭神である天神として太宰府天満宮に祀られている。伝統的な博多人形による16の展示は、道真公の数奇な生と死の物語を表現したものである。また、全国から集められた様々な「天神人形」や、太宰府天満宮での数々の式典で使われる工芸品等も展示されている。

菅原道真公の一生における16の場面

博多人形（はかたにんぎょう）とは、福岡の博多地区で作られる素焼きの人形である。その起源は17世紀にまで遡り、優雅で細部まで精巧に造形された人形として知られている。ここに展示されているのは、博多人形でも珍しい、仕立ての良いミニチュアの着物姿のものである。

1. 梅花の詩（849年、5歳）

道真公は幼少の頃には優れた詩の才能を発揮していた。このシーンでの彼は、その年齢では特筆

すべき出来の和歌を詠んでいる。内容は次の通りである：

うつくしや
紅の色なる
梅の花
あこが顔にも
つけたくぞある

とても美しい
紅色の梅の花
(その花で) 私の頬を飾ってみたい

2. 母の祈り (859年、15歳)

道真公は体が弱かったため、母君は毎日近所のお寺に行き、慈悲の菩薩である観音様に祈りを捧げていた。息子が学業に成功し、たくましく成長するようにと願ったところ、彼女の心からの祈りは聞き届けられた。

3. 文武両道 (870年、26歳)

道真公は学者の家系に育ったため、周囲の人々は彼を身体能力はあまり高くないと考えがちであった。が、実際には弓の名手であった。ここでは、道真公は弓射の大会に参加し、全射的中させて最高点を獲得している。

4. 文章博士 (877年、33歳)

漢語と中国文化が朝廷で主流だった時代、官職は中国古典に精通していることが認定された者に与えられた。道真公は26歳という異例の若さで、宮中の官吏養成機関の最高レベルの試験に合格し、33歳で最高位の "文章博士" の地位を得たのである。このシーンでの彼は学生たちを指導しているところだ。

5. 詩的外交 (883年、39歳)

道真公は、外国からの使者をもてなし、日本の文化的成果を披露することもあった。渤海（かつて中国東北部と朝鮮半島北部を支配していた王国）からの来訪者を歓迎するため、道真公は巧みな漢詩を作り、詠んだ。彼の能力は長く印象に残るものであったという。

6. 慈悲深い官吏 (886年、42歳)

道真公は遠く離れた讃岐国（現在の香川県）の統治に派遣された。貧しい農民達に同情し、その行政手腕を貧しい人々の支援に役立てたことで、彼はやがて人々から尊敬されるようになった。日本各地での経験は、彼が行政改革にあたる際に貢献することになる。ここでの道真公は、干ばつ時の食糧配給のために倉庫を開いている。

7. 紅葉の錦（898年、54歳）

宇多天皇（866-931）と秋の行幸に出かけた道真公は、奈良の手向山にある神社を訪れた。そこで詠んだ有名な歌は、後に百人一首にも選ばれた。

この旅は
ぬさも とりあえず
たむけやま
紅葉の錦
神のまにまに

この旅では、神様に捧げる幣を用意しそびれてしまった。
神様、もしよろしければ、手向の山の紅葉の錦をお受け取りください。

ここでは、鮮やかな紅葉の下で馬に乗る天皇に付き従う道真公の姿が描かれている。

8. 天皇からの下賜品（西暦900年、56歳）

道真は宮中の歌会で「秋の思ひ出」と呼ばれる歌を詠んだ。醍醐天皇（885-930）は感嘆し、褒美として自分の衣を脱いで道真に下賜された。この異例の振る舞いは、道真公の非凡な才能への賛辞であった。

9. 左遷（901年、57歳）

道真公は大臣として大成功を取めたが、そのため朝廷に大きな勢力を持つ藤原氏との間に問題が生じるようになっていた。道真公を妬むライバル達によって流された道真公が陰謀に加わったという噂により、天皇は道真公を京都から大宰府へと左遷させる。このシーンでは、道真公が都から左遷を告げられている。

10. さらば梅の花よ（901年、57歳）

梅は中国から伝来したもので、高貴な文化の象徴とされていた。道真公の梅好きはよく知られており、京都を去る前に、庭の梅の木に哀歌を詠んだという。

東風吹かば
匂いおこせよ
梅の花
主無しとて
春な忘れそ

春の風が吹いたら

香りを届けてほしい
花開く私の梅よ
主人が居なくなったからといっても
春が来ることを忘れるな

伝承によれば、道真公が去った後、この木は彼の不在に耐えられなくなった。そのため根こそぎ大宰府まで飛んでいき、「飛梅」と呼ばれるようになった。現在その梅は太宰府天満宮の本殿前にあり、毎年花を咲かせているという。また、この梅の木を、道真公が残していかざるを得なかった家族の比喩と解釈する学者もいる。この場面で道真公は、妻が泣く中、梅の歌を詠んでいる。

11. 都を去る（901年、57歳）

京都郊外のこの場面では、道真公の旅立ちを沿道の人々が見送っている（背景の行列がそれを表している）。道真公が遠く太宰府へ旅立つのを惜しむ人々は、道真公の追放は不当だと感じている。

12. 道明寺での別れ（901年、57歳）

道真公は大宰府に向かう途中、河内国（現在の大阪府内）の道明寺の尼である叔母を訪ねた。二人は多くを語り合ったが、天皇の使いが夜明けに道真公を起こし、強引に先へ進ませた。この場面は、叔母が道真公の出発を見送っているところだ。

13. 博多港到着（901年、57歳）

道真公に同行が許されたのは、息子の熊麻呂と娘の紅姫、そして弟子一人だけだった。長旅で疲れ果てた一行は、ようやく博多湾の港に到着する。左側では、漁師が縄を巻いて道真公が休めるよう席を作っている。

14. 追憶（西暦902年、58歳）

太宰府では、道真公は南館と呼ばれる荒れ果てた官舎に居を構え、他の大宰府役人は道真公と話すことを禁じられていた。前年の歌会から一周年になる日（展示8参照）、道真公は醍醐天皇から賜った衣を取り出した。道真公は恨むどころか、醍醐天皇の多幸を祈り、これからも献身に励む歌を詠んだ。このシーンでは、道真公は頭を下げながら畳まれた衣を見つめている。

15. 頂きでの祈り（西暦902年、58歳）

ひどい暴風雨にもかかわらず、道真公は天に向かって潔白を訴えるため、太宰府天満宮の南西約5キロにある天拝山の山頂に登った。この場面では、彼が貴族や天皇に文書を差し出すときに使う（直接手紙を渡さないようにするための）杖である「杖（ふづえ）」を持っているのがわかる。道真公は、雷鳴と稲妻の中で、その訴えを在した杖を用いており、祈りを捧げているのである。京都では、道真公の怨霊が都に災いをもたらしたという伝説があるが、道真公には都への悪い念などなく、むしろ国や天皇の安寧を祈ることが多かった。

16. 安息の地（903年、59歳）

道真公は劣悪な生活環境からくる病に冒され、自宅で息を引き取った。従者が遺体を牛車に積んで運んだが、道を半分ほど来たところでその牛が突然止まり、それ以上進まなくなった。道真公の従者は、牛が拒否したのは主君の意志の表れであり、主君はこの地に葬られることを望んだのだと判断した。道真公を埋葬した後、従者はそこに祠を建てた。これが太宰府天満宮の由来である。

天神人形

これらは室町時代（1338～1573年）に誕生したと言われる道真公のミニチュア人形で、神社で売られる地域の土産物として全国に広まった。地域の職人が作る天神人形は、その産地によって素材や作風が異なる。天神人形はお供え物としてのものから子供の玩具まで、さまざまな用途で作られている。

太宰府天満宮の祭礼

太宰府天満宮では、毎年行われる神幸行事（神幸式）をはじめ、年間を通して100を超える式典が行われる。秋の神幸式大祭では天神様は天満宮御本殿から道真公の旧居跡まで送られ、そこで一夜を過ごす。太宰府天満宮の祭礼は、神職や参加者が平安時代（794-12世紀後半）の伝統的な衣装を身にまとうことで知られる。また、学問や芸術にも重点が置かれており、詩の朗読や書道の披露、受験生の合格祈願などといったものもある。

012-012

Ōnojō Fortress Ruins

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】大野城跡

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Ōnojō Fortress Ruins

[表のキャプション]

Built in 665, this immense walled fortress once ringed the summit of Mt. Shiōji, north of Dazaifu. Along with a smaller fortification to the south, Ōnojō Fortress is Japan's oldest known mountain fortress. More than 1,350 years after its construction, large sections of the perimeter wall remain intact.

[裏の解説]

Ōnojō Fortress was conceived as one of several fortifications intended to guard the Hakata Bay area. In 663, the remnants of the Korean kingdom of Baekje (? CE–660 CE) and its Japanese allies had been defeated by the combined forces of Tang-dynasty China (618–907) and Silla (? CE–935 CE), another Korean kingdom. The loss spurred the Japanese imperial court, which was fearful of an invasion by rapidly expanding Tang, to order the construction of Mizuki Fortress in 664, then the mountain fortresses Ōnojō and Kijō in 665. Ōnojō Fortress was a vantage point from which to observe enemy ships heading toward Hakata Bay.

Unlike many later castles, Ōnojō Fortress never had a tall central keep or series of moats. At its center was a camp encircled by 8 kilometers of earthen and stone walls. Exiled nobles from Baekje oversaw the construction, patterning Ōnojō Fortress after mountain fortresses on the Korean Peninsula. They introduced construction techniques that allowed for the creation of stone walls up to 8 meters in height. Where Ōnojō's perimeter wall ran along ridgetops, it was built of rammed earth, but sections in the valleys were made of stone. Researchers have discovered the ruins of 9 gates and over 70 buildings, including storehouses and administrative headquarters in the central

camp. Ultimately there was no invasion, but Ōnojō Fortress was manned and functional until around the tenth century.

Many sections of both the earthen embankments and the stone walls survive. To see them, visitors can take one of the hiking trails from Ōnojō Sōgō Kōen (Madoka Park) or drive to the Shiōji Kenmin no Mori Center on the mountain and walk from there.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大野城跡

[表のキャプション]

665年に築城されたこの巨大な城郭は、かつて大宰府の北にある四王寺山の山頂を囲んでいた。大野城は、南の山にある小さな岩とともに、日本最古の山城である。築城から1350年以上経った後も、城壁の大部分は当時のまま残っている。

[裏の解説]

大野城は、博多湾の警備を目的としたいくつかの要塞のひとつとして構想された。663年、朝鮮半島の百済王朝（～660年）の残党と日本の同盟軍は、中国の唐（618年～907年）ともう一つの朝鮮半島の王朝である新羅（～935年）の連合軍に敗れた。急速に拡大する唐の侵略を恐れた日本の朝廷は、この敗戦の影響を受けて664年に水城、665年に大野城と基肄城の築城を命じた。大野城は、博多湾に向かう敵船を監視するのに適した見晴らしの良い場所であった。後世の多くの城郭とは異なり、大野城には高い天守閣や堀はなかった。その中心には、8キロに及ぶ土と石の壁に囲まれた陣屋があった。朝鮮半島の山城を模した大野城の築城は、百済からの亡命貴族達が監督した。高さ8メートルにも及ぶ石垣を築くための建築技術を、彼らが導入した。大野城の城壁は、尾根に沿う部分には土塁が築かれたが、谷間には石垣が築かれた。研究者によって、これまでに9つの門跡と倉庫や帷幕を含む70以上の建物が発見されている。結局、侵略はなかったが、大野城は10世紀頃まで有人要塞であり続けた。

土塁と石垣の双方とも、多くの部分が現存している。大野城総合公園（まどかパーク）からハイキングコースのひとつを行くか、それらを見学するには、山上の四王寺県民の森センターまで車で行き、そこから歩いていくのがよい。

012-013

Mizuki Fortress Ruins

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】水城跡

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Mizuki Fortress Ruins

[表のキャプション]

This 1.2-kilometer-long, heavily fortified earthen embankment was the first and only fortress of its kind. It was built in the mid-seventh century to defend Kyushu against foreign armies coming from Hakata Bay. Half a century later, it had become the Asian continent's gateway to Japan.

[裏の解説]

In 664, Japan's rulers feared an invasion from the Asian continent, and Hakata Bay seemed the most likely place for foreign ships to land. Just south of the bay was a large plain surrounded by mountains. If it could be fortified, this extremely defensible base would halt the advance of an invading army, effectively pinning it in the bay area.

To this end, the imperial court ordered the construction of a monumental barrier—an enormous earthen wall—to close the gap between two mountains south of the bay and block entry into the plain. Constructed using techniques from the Korean Peninsula, the Mizuki Fortress wall was 10 meters high. On its north side, the fortress had a 60-meter-wide moat that exceeded the maximum range of bows at the time. There were two gates, one to the east and one to the west. The western gate was reinforced with stone walls, and although the eastern one has not been excavated, it is presumed to have been the same. The earthen embankment was constructed of layer upon layer of soil, clay, and sand tamped down to form a solid, durable mound.

At that time, the Mikasa River flowed north to Hakata Bay through the center of where the new fortress was being built. Some research indicates that river water may

have been directed through channels lined with stones; water flowed over them and beneath the embankment to fill the moat. Water was also drawn from surrounding river valleys. This clever use of water as a form of defense gave the fortress its name: “Mizuki” means “water castle.”

After the fear of invasion faded, Mizuki Fortress became the city of Dazaifu’s northern wall. Beginning in the late seventh century, foreign dignitaries and merchants were received in Dazaifu before they traveled east to the imperial capital. They entered through the fortress’s west gate, making it the literal and symbolic gateway to Japan. On the opposite end, Japanese officials and other domestic visitors coming from Nara or Kyoto entered Dazaifu through the east gate. Mizuki Fortress acted as a gateway until the twelfth century, even after its defensive role had ended.

Today, large sections of the Mizuki Fortress embankment can still be seen in Dazaifu and Ōnojō. The ruins of the west gate are located a few minutes’ walk from Mizuki Yume Hiroba Park.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

水城跡

[表のキャプション]

全長1.2キロメートルに及ぶこの厳重な警備の土塁は、この種の要塞としては最初で唯一のものである。博多湾から押し寄せる外国の軍隊から九州を守るため、7世紀半ばに築かれた。半世紀が経つ頃には、アジア大陸から大宰府への玄関口となっていた。

[裏の解説]

664年、日本の統治者達はアジア大陸からの侵略を危惧しており、博多湾は外国船が上陸する可能性が最も高い場所と考えられていた。博多湾のすぐ南には、山に囲まれた広大な平野が広がっていた。もしここを要塞化することができれば、この極めて防御力の高い拠点で侵略軍の進軍を食い止め、湾岸地域に釘付けにすることができる。

この目的のため、朝廷は湾の南側にある2つの山の間を塞ぎ平野部への進入を阻止するための防壁として、過去に当地で例のなかったような巨大な土塁の建設を命じた。朝鮮半島から渡来した技術を駆使して築かれた水城は高さ10メートルの城壁であった。水城の北側には、当時の弓の最大射程距離を超える幅60メートルの濠があった。門が2つ、東と西にあった。西側の門は石垣で補強されており、東側のものは発掘されていないが、同じものだったと推定される。土塁は、土、粘

土、砂を何層にも積み重ねて固め、耐久性のある。

当時、御笠川は新たに砦が築かれようとしていた場所の中央を通り、博多湾へと北上していた。ある調査によると、川の水は石を敷き詰めた通り道流れ、その上を流れた水が堤防の下を流れて濠を満たしていたという。また、周囲の谷川からも水を引いていた。この巧みに水を利用した防衛体制が、この砦の名前である「水城」の由来となった。

侵略の恐れが薄れた後、水城は太宰府の北側の壁となった。7世紀後半から、外国の高官や商人達は、東の帝都に向かう前に太宰府で受付された。彼らは城の西門から入り、西門は文字どおり、象徴的な日本の玄関口であった。一方、奈良や京都から来た役人や国内の訪問者は、東門から太宰府に入った。防衛の役割を終えた後も、水城は12世紀頃まで、玄関口としての役割を果たした。

現在も太宰府市や大野城市では、水城の堤防の大部分を見ることができる。西門の跡は水城ゆめ広場から歩いて数分のところにある。

012-014

Ushikubi Sue Ware Kiln Ruins: Umegashira Kiln

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】牛頸須恵器窯跡

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Ushikubi Sue Ware Kiln Ruins: Umegashira Kiln

[表のキャプション]

Techniques for firing the extremely hard, ash-colored pottery known as Sue ware were brought from the Korean Peninsula in the fifth century. Production at Ushikubi began in the sixth century, and it became Kyushu's largest Sue-ware production site. One of the kilns has been preserved in situ to illustrate the process.

[裏の解説]

The ruins of over 600 ancient kilns have been discovered in the cities of Ōnojō, Kasuga, and Dazaifu, evidence of a once-thriving production center for Sue ware. Sue ware is a type of stoneware pottery introduced from Korea in the early fifth century. Production at the Ushikubi site was underway during the sixth century, and it expanded further in the eighth century as Dazaifu grew into a major city. To make Sue ware, craftsmen shaped clay on a potter's wheel, then fired it at high temperatures to create durable, unglazed vessels with a characteristic bluish-gray color. The Ushikubi kilns produced a variety of pieces, including ritual vessels, tableware, and roof tiles.

The kilns were earthen tunnels—some as long as 11 meters—constructed in a slope. The unfired pottery was arranged inside on stones or depressions scraped into the earth's surface. Below them, at the base of the slope, wood was piled inside the tunnel entrance. A fire was lit, and the burning wood produced intense heat and smoke that rose up through the tunnel, firing the pottery. At the top, one to six vents could be opened or closed to release smoke and regulate the heat. Once the kiln reached an appropriate temperature, its entrance was sealed. Temperatures inside the kilns could exceed 1,000 degrees Celsius, hot enough to maintain combustion even in the absence

of oxygen. It was this oxygen-free environment that produced Sue ware's characteristic gray color. (Pieces fired in the presence of oxygen turn red.)

Firing Sue ware consumed a large amount of wood, so artisans used a kiln only until they had exhausted all of the fuel in the area. Consequently, kilns were built farther and farther uphill in pursuit of lumber from the still-forested mountains. After a kiln fell out of use, it was usually abandoned as-is. Occasionally, however, it became the grave of the craftsman who had used it. In such cases, the artisans were buried inside the earthen tunnels with their personal belongings, which included iron swords and knives, arrowheads, ear adornments, and jars of red pigment.

One of the Ushikubi kilns, called the Umegashira Kiln Ruin, has been preserved largely intact and is open to visitors.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

牛頸須恵器窯跡

[表のキャプション]

須恵器と呼ばれる非常に硬い灰色をした陶器を焼く技術は、5世紀に朝鮮半島からもたらされた。牛頸での生産は6世紀に始まり、九州最大の須恵器生産地となった。窯のひとつは元の位置で保存されており、そこで製造工程を知ることができる。

[裏の解説]

大野城市、春日市、太宰府市では、かつて須恵器の産地として栄えたことを示す600以上の古窯跡が発見されている。須恵器は5世紀初めに朝鮮半島から伝わった炆器（粘土器）である。牛頸須恵器窯跡での生産は6世紀の間に始まり、8世紀には太宰府が大都市に成長するにつれてさらに拡大した。須恵器を作るため、職人は轆轤（ろくろ）で粘土を成形し、それから高温で焼成し、青みがかった灰色が特徴的な丈夫な素焼きの器とする。牛頸窯では、祭器や食器、瓦などさまざまなものが作られた。

窯は斜面に作られた土のトンネルで、長さは11メートルもある。石や地面を削った窪みの内側には、未焼成の陶器が並べられた。その下の、斜面の麓では、坑道の入り口に薪が積まれていた。火が焚かれ、燃えさかる薪の熱と煙が坑道内を上昇し、陶器を焼いた。上部には1～6個の通気口があり、開閉することで煙を放出し、熱を調整することができた。窯が適切な温度に達すると、窯の入り口は密閉された。窯の中の温度は摂氏1000度を超えることもあり、酸素がなくても燃焼を維持できるほど高温だった。須恵器の特徴である灰色は、この無酸素環境下で生みだされたものである

（酸素のある状態で焼かれたものは赤くなる）。

須恵器を焼くには大量の薪を消費するため、職人達は地域の薪を使い切ってしまうまで窯を使った。そのため、まだ森林の残る山の材木を求め、窯はどんどん遠くの丘上へと築かれるようになった。使われなくなった窯は、そのまま遺棄されることがほとんどだった。しかし時には、その窯を使っていた職人の墓となることもあった。その場合、職人は鉄剣や鉄刀、鏃（やじり）、耳飾り、赤色顔料の壺などの遺品とともに土坑内に埋葬された。

梅頭窯跡と呼ばれる牛頸窯のひとつは、ほぼそのままの形で保存されており、見学することができる。

012-015

Inscribed Sue Ware

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】ヘラ書き須恵器

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Inscribed Sue Ware

[表のキャプション]

As one of the largest producers of the valuable stoneware pottery known as Sue ware, the Ushikubi area paid its taxes to Dazaifu in the form of these vessels. Historical records mention this practice, but the tax notations inscribed on these pieces are physical proof, giving further insight into the taxation system of the eighth century.

[裏の解説]

Excavations at the Ushikubi Sue Ware Kiln Ruins have produced pieces of Sue ware inscribed with the taxpayer's name and town of residence, the year of remittance, and notations pertaining to tax amounts. Such vessels are called *heragaki sueki*, or "spatula-inscribed Sue ware," as the artisans used sharp-edged, wooden pottery spatulas to etch Chinese characters into the clay before firing.

The high-quality Sue vessels, with their smooth, less-porous surfaces, represented a major advance in Japanese ceramics. Sue ware craftsmen paid their taxes in pottery to Dazaifu officials, who collected and recorded them before sending the vessels on to the imperial capital.

The government offices at Dazaifu managed taxes in what is now Kyushu as a part of a wide-reaching administrative organization called the *ritsuryō* system: a series of legal codes implemented in the mid-seventh century in imitation of the rigorous political administration of Tang-dynasty China (618–907). The new codes established a Ministry of the Treasury that oversaw taxation of the provinces and tribute to the emperor. The discovery of *heragaki* Sue ware in Dazaifu is tangible evidence that this

system operated just as the records indicate.

The inscriptions on the vessels also hint at the cultural exchange that led to the development of Sue ware itself. Some of the makers' names recorded on the vessels are thought to be those of immigrants from the Korean Peninsula.

Heragaki Sue ware and many other artifacts uncovered in the area are on display at the Ōnojō Cocoro-no-furusato-kan City Museum.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ヘラ書き須恵器

[表のキャプション]

須恵器と呼ばれる貴重な炆器(粘土器)の一大生産地であった牛頸地域は、大宰府に須恵器を調として納めていた。史料にもこのような慣習が記されているが、そうした須恵器に刻まれた税額表記は物理的な証拠であり、8世紀の課税制度についてさらなる洞察を与えてくれる。

[裏の解説]

牛頸須恵器窯跡の発掘調査では、納税者の氏名や居住地、納税年、税の内容などを記した須恵器が出土している。こうした須恵器は「ヘラ書き須恵器」と呼ばれており、これは職人が焼成前に鋭利な木べらで粘土に漢字を刻み込んだことに由来する。

質の良い須恵器の表面は多孔質ではない滑らかなもので、日本の陶磁器における大きな進歩であった。須恵器職人達は、大宰府の役人に陶器で調を納め、役人はそれを徴収して記録し、帝都に送った。

大宰府の役所は、律令制と呼ばれる広範な行政組織の一部として、現在の九州地方の税を管理していた。律令制とは、7世紀半ばに中国唐代（618～907年）の厳格な統治制度を模倣して制定された一連の法律法規である。この新しい法制は、地方への課税と帝への朝貢を監督する大蔵省を設立した。太宰府でヘラ書き須恵器が発見されたことは、この制度が史料の通りに機能していたことを示す具体的な証拠である。

須恵器に刻まれた銘文は、須恵器そのものを発展させた文化交流も示唆している。須恵器に記されている作者名のいくつかは朝鮮半島からの渡来人のものと考えられている。大野城市心のふるさと館には、ヘラ書き須恵器をはじめとするこの地域で見つかった多くの出土品が展示されている。

012-016

Mikasa Forest

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】御笠の森

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Mikasa Forest

[表のキャプション]

This modest grove, once a larger forest, has an illustrious history. Linked to an empress, named in one of Japan's first written records, and the inspiration for a love poem written by a respected poet, Mikasa Forest is a tranquil place to connect with Dazaifu's distant past.

[裏の解説]

This forest's name, Mikasa no Mori, means "hat forest." It derives from a legend about Empress Jingū Kōgō (traditional dates 169–269). The empress was supposedly traveling near the forest when a sudden whirlwind blew her conical hat into the trees. This tale was recorded in the eighth-century historical chronicle *Nihon shoki*, one of Japan's oldest written records.

In the eighth century, officials traveling to and from the imperial capital in Nara passed through Mikasa Forest and admired its beauty and serenity. Some of them wrote poems mentioning it, among them Ōtomo no Momoyo, a high-ranking eighth-century official in the Dazaifu government. Momoyo's love poem is included in the *Man'yōshū*, the oldest surviving collection of Japanese poetry. In it, Momoyo proclaims his sincere devotion to his beloved:

omowanu o
omō to iwaba
ōno naru

*mikasa no mori no
kami shi shirasamu*

Were I to profess
a love I did not feel,
the spirit that dwells
in Ōno's Mikasa Wood
would surely know me false.

Today, Mikasa Forest is a quiet spot with a small shrine to Empress Jingū Kōgō and a large stone inscribed with Momoyo's poem.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

御笠の森

[表のキャプション]

かつて大きな森だったこのささやかな木立には由緒がある。日本最初の史記の一つに皇后に関してその名が記され、また崇敬された詩人が恋の詩を詠んだ場所である御笠の森は、太宰府の遠い過去とつながる静かな場所である。

[裏の解説]

この森の名前である御笠の森とは、"帽子の森"を意味する。神功皇后（伝承上の生没年は169-269年）の伝説に由来する。神功皇后がこの森の近くを旅していたとき、突然のつむじ風で円錐形の帽子が森のほうに飛ばされたという。この話は、日本最古の史料である8世紀の史記、日本書紀に記されている。

8世紀、奈良の都を行き来する役人たちは御笠の森を通り、その美しさと静けさに感嘆した。中には歌を詠みあげるものもあり、そうした人々のうちの一人、大伴百世（おおとものももよ）は8世紀の大宰府政庁の高官であった。百世の恋の歌は、現存する日本最古の歌集である『万葉集』に収められている。歌の中で、百世は最愛の人への誠実な献身を誓っている。

思はぬを
思ふと言はば

大野なる
御笠の森の
神し知らさむ

私が告白した愛が本心でないとしたら、
大野にある御笠の森に宿る神によって、
私の偽りはきっと見抜かれているだろう

現在、御笠の森は神功皇后を祀る小さな祠と、大伴百世の詩が刻まれた大きな石がある静かな
憩いの場となっている。

012-017

Zen'ichida Burial Mounds

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】善一田古墳群

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Zen'ichida Burial Mounds

[表のキャプション]

These *kofun*, or ancient burial mounds, date to the latter sixth through seventh centuries. The tombs were built for local ironworkers, whose profession made them high-ranking members of local society. Pottery from the Korean Peninsula was found in the tombs, indicating active trade and cultural exchange a century before Dazaifu's construction.

[裏の解説]

The Zen'ichida Burial Mounds were built in the latter sixth and seventh centuries—relatively late in the Kofun period (third to seventh century). Beginning in the mid-third century, burial mounds were constructed by the ruling elite of various regions across Japan as a display of wealth and power. By the time the Zen'ichida *kofun* were built, the practice had spread to lesser local elites. Researchers believe the oldest and largest mound at Zen'ichida (No. 18) belonged to a local chieftain.

The nine tombs preserved at Zen'ichida have a round, domed shape, which was common for *kofun* at this time. The innermost burial chambers have walls and ceilings that were made with stones, often massive ones weighing several tons. Because of the region's acidic soil, no bones or other remains have survived. However, the deceased were buried with their belongings, and many of these have been found. They include a number of iron objects—rare in Japan at the time—such as tools, swords, and horse tack (stirrups and bridle components). These discoveries give archaeologists glimpses into the lives of people at the time.

The technologies of ironworking and horseback riding had arrived through exchange with the Korean Peninsula. Clay vessels from the kingdom of Silla (? CE–935 CE) and even glass beads from what is now Iraq have been found, indicating extensive trade networks linking this society to continental Asia.

A total of 30 mounds have been found in this *kofun* group, two of which have never been excavated. The construction of *kofun* in the Dazaifu area (and across the country) is thought to have died out as society moved toward a centralized legal system and local rulers were under less pressure to display their authority.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

善一田古墳群

[表のキャプション]

これらの古墳は、6世紀後半から7世紀にかけてのものである。この古墳群は地域の鉄工職人のもので、その専門性によって地域社会の高位なメンバーであった。古墳からは朝鮮半島の土器が出土しており、大宰府が設置されるより1世紀前から活発な交易と文化的な交流が行われていたことが伺える。

[裏の解説]

善一田古墳は、古墳時代（3～7世紀）の比較的後期、6世紀後半から7世紀にかけて築造された。古墳は3世紀中頃から、日本各地の支配層によって、自らの富と権力を誇示するために築かれるようになった。善一田古墳が築造される頃には、その習慣はより劣る立場の地方有力者にまで広がっていた。研究者達は、善一田古墳の最古で最大の墳丘（No.18）は地域の首長のものだと考えている。

善一田に保存されている9基の古墳は、九州の古墳の特徴である丸いドーム型をしている。最奥部の埋葬室の壁や天井には石が使われており、その多くは数トンもある巨大なものであった。この地域は酸性土壌のため、骨や遺骨は残っていない。しかし、死者は遺品とともに埋葬され、その多くが発見されている。その中には、道具、刀剣、馬具（あぶみと手綱の部品）など、当時の日本では珍しい鉄製品も数多く含まれている。これらの発見は、考古学者に当時の人々の生活を垣間見せる。

鉄工や乗馬の技術は、朝鮮半島との交流によってもたらされたものであった。新羅王朝（～935年）の土器や、現在のイラクにあたる地域産のガラス玉も出土しており、この社会とアジア大陸を結ぶ広範な交易網があったことが伺える。

この古墳群からは合計30基の墳丘が発見されているが、そのうち2基は未発掘である。太宰府地

域（および全国）での古墳の築造は、社会が中央集権的な法体系に移行し、地方の支配者が権威を誇示する圧力を受けなくなったため、消滅したと考えられている。

012-018

Mt. Tenpai

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】天拝山

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Mt. Tenpai

Mt. Tenpai, in the city of Chikushino, is the site of several legends and events linked to the historical Sugawara Michizane and his deified spirit, Tenjin.

Mt. Tenpai (elev. 258 m) is deeply connected with Dazaifu Tenmangū Shrine and plays an important role in the shrine's legends and ceremonies. Dazaifu Tenmangū enshrines Sugawara Michizane (845–903), a renowned scholar, poet, and administrator who was deified as Tenjin, the Shinto deity of learning, culture, and the arts. In 901, Michizane was exiled from the imperial court in Kyoto due to false accusations from jealous rivals. He was sent to Dazaifu, where he lived a difficult life and died two years later. According to legend, during his exile Michizane climbed to the peak of Mt. Tenpai in a driving storm to plead his innocence before heaven.

Shitō Falls is a small waterfall at the base of Mt. Tenpai, and Michizane is said to have washed and purified himself there before climbing the mountain. When bathing, he laid his robes across the rock just left of the falls.

Mt. Tenpai is central Dazaifu Tenmangū's most important annual festival, the Jinkō Event (*jinkōshiki*). Before the ritual procession, participants collect purifying sand (*oshioi*) at Shitō Falls and return with it to the shrine. During the festival, residents of the Daimon district (at the foot of Mt. Tenpai) light bonfires called *mukaebi* (“fires to welcome returning spirits”) on the summit. Their light is intended as a greeting to Tenjin during his procession from Dazaifu Tenmangū to Enokisha Shrine, which stands where Michizane's residence once was.

The mountain has several other historical sites, including Gojisaku Tenmangū Shrine, believed to have been founded by Michizane himself, and Buzōji Temple, which dates to the Nara period (710–794) and is one of the oldest Buddhist temples in Kyushu. Stone monuments engraved with Michizane’s poetry (waka) line the trail up to the peak.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

天拝山

筑紫野市にある天拝山は、歴史上の人物である菅原道真公とその神霊である天神様にまつわるいくつかの伝承や出来事の舞台である。

天拝山（標高258m）は太宰府天満宮と深い関係があり、天満宮の伝承や祭礼の中で重要な役割を果たしている。太宰府天満宮は高名な学者であり、詩人であり、政治家でもあった菅原道真公（845-903）を祀っており、道真公は学問、文化、芸術の神である天神として神格化されている。道真公を嫉んだライバルからの讒言により、901年に京都の朝廷から左遷された。彼は太宰府に送られ、そこで困窮した生活を送り、2年後に亡くなった。伝承によると、左遷されていた時期、道真公は暴風雨の天拝山の頂に登り、天に向かって自身の無実を訴えたという。

紫藤の滝は天拝山の麓にある小さな滝で、道真公は山に登る前にそこで身を洗い清めたと言われている。滝行の際には、道真公は滝のすぐ左の岩に衣を横たえたという。

天拝山は、太宰府天満宮の最も重要な年中行事である神幸行事で中心となる地である。神幸行事の前に、参加者は紫藤の滝で清めの砂（お汐井）を集め、それを持って神社に戻る。式典の期間中、天拝山の麓にあたる大門地区の住民は、山頂で「むかえび」と呼ばれる篝火を焚く。この炎は、天神様が太宰府天満宮から道真公の邸宅があった榎社まで行く儀式の間、その御霊を迎えるためのものである。

天拝山には他にもいくつかの史跡があり、その中には道真公が創建したとされる御自作天満宮や、奈良時代に創建された九州最古の仏教寺院のひとつである武蔵寺などがある。山頂までの登山道には、道真公の和歌が刻まれた石碑が並んでいる。

012-019

Mizuki Fortress Ruins

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】水城跡

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Mizuki Fortress Ruins

The Shōmizuki (meaning “little Mizuki”) Fortresses were earthen fortifications built at roughly the same time as the main Mizuki Fortress, a 1.2-kilometer-long earthen embankment constructed in 664. In combination, the structures were intended to act as a giant wall preventing foreign armies from entering the plain that lay south of Hakata Bay, where Dazaifu would later be constructed.

The smaller-scale Mizuki Fortresses were built in the foothills west of the main Mizuki Fortress, and in comparison they were lower in height, shorter in length, and thinner in depth. Their function was to plug low-lying river valleys that might give access to an army trying to bypass the main Mizuki Fortress by going west. Today, the earth has been cleared and leveled by later developments, but in the seventh century the smaller Mizuki Fortresses were bordered on both ends by high valley walls.

Ōdoi Mizuki Fortress

Ōdoi Mizuki Fortress was built perpendicular to a river, with natural high ground rising on either side of the embankment. It was 110 meters long, with walls around 7 meters high. The north side, facing Hakata Bay, had a 40-meter-wide moat. Because of structural similarities in the water channels of this fortress and those of the main Mizuki Fortress, it is likely that both embankments were constructed as part of a unified plan of defense.

Tenjinyama Mizuki Fortress

Tenjinyama Mizuki Fortress was built the farthest from central Dazaifu, in what is today a residential neighborhood in the city of Kasuga. The fortress had walls 140-meters long and 5 meters high, but the width of its moat is unknown. The layered-earth construction of the walls left strata in the soil, and in some places these layers are exposed and easily visible from the street.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

小水城跡

小水城（「小さな水城」の意）は、664年に築かれた長さ1.2キロの土塁である主郭の水城とほぼ同時期に築かれた土塁である。併せて、博多湾の南に広がる平野部（間もなく大宰府が築かれる予定）への外敵の侵入を防ぐ大きな壁として機能することを意図したものである。

小規模な水城は、主郭の水城の西側の山裾に築かれ、主郭と比較すると低く、短く、幅も薄かった。その役割は、主郭の水城を西へ向かって迂回しようとする軍勢が出入りする可能性のある低地の河谷を塞ぐことであった。現在のこの地は後年の開発によって整地され平らになっているが、7世紀には小水城の両端は高い谷壁に囲まれていた。

大土居水城

大土居水城は川に垂直に築かれ、土塁の両側には自然の高台がそびえていた。その長さは110メートル、高さは7メートルほどであった。博多湾に面した北側には、幅40メートルの濠があった。大土居水城と主郭の水城の水路は構造的に類似していることから、両水城は一貫した防衛企図の一環として築かれたものと考えられる。

天神山水城

天神山水城は、太宰府の中心部から最も離れた堡塁で、現在では春日市の住宅地となっている地に築かれた。長さ140メートル、高さ5メートルほどであったが、濠の幅はわかっていない。何層にもなる土製の壁は地中に地層を残しており、その地層が露出して道路から容易に視認できる場所もある。

012-020

Dazaifu: The Western Capital

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】古代日本の「西の都」

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Dazaifu: The Western Capital

Some 1,300 years ago, the city of Dazaifu in northern Kyushu was an administrative and cultural center second only to the imperial capital. Far to the east, the imperial capital was moved from Asuka to Nara, then eventually to Heian (Kyoto) over several centuries, but Dazaifu persisted in its role as “capital of the West” (*nishi no miyako*).

Northern Kyushu’s transition from a regional hub to a place of national importance began around 663, when Japan suffered a military defeat on the Korean Peninsula. Fearing an invasion would follow, the imperial court ordered the construction of a series of large-scale fortifications to guard Hakata Bay, the chief port for ships coming from the Asian mainland. No invasion came, but in the early eighth century the city of Dazaifu was constructed in the newly fortified mountain basin to the south. Its layout was modeled on the sophisticated grid system of the Tang-dynasty capital of Chang’an, in China. A Japanese envoy who had visited Chang’an returned to Japan and drew up a similar plan for the imperial capital at Nara. He then designed Dazaifu along the same pattern.

When the new city was founded, Hakata Bay had been the entry point for foreign culture and technology for centuries. During the Nara period (710–794), this exchange reached its peak, and Dazaifu became the gateway through which foreign dignitaries, goods, and cultural influence poured into Japan. Arriving diplomats were welcomed at a lavish guesthouse, just as they were in the imperial capital. Dazaifu also had imperial administrative offices, a school for training administrators, and Buddhist temples founded in honor of imperial family members. Dazaifu’s extensive bureaucracy managed the taxes, economy, and security of most of Kyushu.

Former administration building sites, ancient temples, and other relics of the 1,300-year-old urban center can still be found throughout the present-day cities of Dazaifu, Chikushino, and Ōnojō, where the memory of this ancient western capital lives on.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西の都の背景

約1300年前、九州北部にある太宰府の町は、帝都に次ぐ行政・文化の中心地だった。遙か東方では、帝都が飛鳥から奈良、そして平安京へと数世紀にわたって変遷したが、太宰府は「西の都」としての役割を全うし続けた。

日本が朝鮮半島で敗戦を喫した663年頃から、九州北部は一地方の中心地から国家の重要拠点へと変わった。侵略を恐れた朝廷は、アジア大陸から来る船の主要な港である博多湾を守るため、一連の大規模な要塞の建設を命じた。侵略はなかったが、8世紀初頭、新たに要塞化された南の山間盆地に大宰府が建設された。その配置は、中国唐王朝の都、長安の洗練された碁盤の目状の構造を模したものだ。長安を視察した遣唐使が帰国後、奈良の都の構想を練った。その後、彼は太宰府の都市も同じ方式で設計した。新しい都市が建設された当時、博多湾は既に何世紀にもわたって外国の文化や技術の玄関口となっていた。奈良時代（710-794）、この交流はピークに達し、太宰府は外国の要人、物資、文化的影響が日本に流れ込む玄関口となった。到着した外交官は、帝都でされるのと同様に豪華な迎賓館で迎えられた。また、太宰府には国の行政機関、役人向けの学校、皇族を祀った仏教寺院もあった。大宰府の広範な官僚機構は、九州の大部分における税金、経済、治安を管理していた。

1300年前の都市にあったかつての行政庁舎、古寺、その他の遺構は、現在の太宰府市と筑紫野市、大野城市の至る所で見ることができ、この西の古都の記憶は今も息づいている。

012-021

Kamado Jinja Shrine

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】 竈戸神社

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Kamado Jinja Shrine

Kamado Jinja Shrine is dedicated to Tamayori Hime, the Shinto deity of *enmusubi*, or matchmaking. It has a lower shrine (*gegū*) at the base of Mt. Hōman and an upper shrine (*jōgū*) on the peak—a site of prayer for safe travels abroad since ancient times.

Although usually associated with love and marriage, *enmusubi* encompasses all positive human connections in love, friendship, and even work. In the Edo period (1603–1867), young men and women climbed Mt. Hōman with their parents on their sixteenth birthdays to pray—boys for worldly success, and girls for a good match in marriage. Today, most visitors who come to Kamado Jinja seek favor with Tamayori Hime in her role as a matchmaker. In addition to praying to the deity at the main sanctuary, worshippers can stand before a sacred tree called the Saikachi no Ki (“reunion tree”) to pray for reunions with loved ones. There are also two Aikei no Iwa (“love rocks”) positioned a short distance apart. Supposedly those who can make their way from one rock to the other with their eyes closed will find love. The Mizu Kagami (“water mirror”) grants wishes to those who stare at their reflections with a clear mind.

Some of those who visit Kamado Jinja are fans of the hit manga and anime series *Demon Slayer (Kimetsu no yaiba)*. From the late thirteenth to late nineteenth centuries, practitioners of Shugendō, or mountain asceticism, were active on Mt. Hōman, and the series protagonist, Tanjirō Kamado, shares a name with the shrine.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

竈門神社

竈門神社（かまどじんじゃ）は、縁結びの神様である玉依姫命（たまよりひめのみこと）を祀る神社である。宝満山のふもとには下宮、山頂に上宮があり、古来より外国への旅の安全を祈願してきた場所である。

縁結びとは、一般的には恋愛や結婚を連想させるが、恋愛、友情、さらには仕事など、人と人との積極的なつながりを包括するものである。江戸時代（1603-1867）には、若い男女は16歳の誕生日に両親と宝満山に登り、男子は立身出世を、女子は良縁を祈願した。現在、竈門神社を訪れる参拝者の多くは、玉依姫に縁結びをお祈りするために訪れている。御本殿で玉依姫に祈願することに加えて、「再会の木」と呼ばれる御神木の前に立ち、大切な人との再会を祈願することもできる。また、少し離れたところに2つの愛敬の岩がある。片方の岩からもう片方の岩まで目をつぶって進むことができれば、恋が実ると言われている。水鏡は、澄んだ心で自分自身の姿を見つめる者の願いを叶えてくれるという。

竈門神社を訪れる人の中には、漫画やアニメで大ヒットした『鬼滅の刃（きめつのやいば）』のファンもいる。13世紀後半から19世紀後半にかけて、宝満山では修験道の修行者が活動しており、この物語の主人公である竈門炭治郎は、この神社と同じ名前を持つ。

012-022

Temporary Hall

「西の都」日本遺産活性化協議会

【タイトル】太宰府天満宮仮殿

【想定媒体】パンフレット / Webページ

できあがった英語解説文

Temporary Hall

For three years, Dazaifu Tenmangū Shrine’s main sanctuary will undergo renovations. During this time, the enshrined deity Tenjin will reside in a temporary hall, known as the *kariden*. Tenjin is the deification of Sugawara Michizane (845–903), who was a leading scholar, poet, and politician of the Heian period (794–1185).

Major shrine restorations necessitate a *kariden* to give the deity a proper dwelling during repair work to the main sanctuary. Accordingly, many Shinto shrines erect temporary halls, but they are often simple and plainly constructed. Dazaifu Tenmangū’s stunning, modern *kariden* is thus a rare sight.

The *kariden*’s designer, award-winning architect Sou Fujimoto, is known for using unorthodox shapes and structures in his work. To create the *kariden*, he took inspiration from a poignant tale linked to Michizane’s exile. According to this tale, when the emperor banished Michizane to Dazaifu for a crime he did not commit, the scholar’s beloved plum tree missed him so much that it uprooted itself and flew all the way from Kyoto to Dazaifu. It became known as the *tobi ume*, or “flying plum tree.” In honor of this legend, Fujimoto designed the *kariden* with a “floating forest” on its roof. Sixty types of plants sprout from it, including plum trees that were selected from the almost 6,000 growing on the shrine grounds. Trees such as plum, cherry, maple, and camphor bloom or change colors throughout the year, creating a forest in constant transformation. Fujimoto also incorporated architectural features of the main sanctuary, such as a curved roof that seems to merge with the surrounding mountains.

While the interior furnishings and fixtures of the main sanctuary are undergoing restoration, the *kariden* needs new screens, curtains, and other decorative trappings. The shrine brought in fashion designer Maiko Kurogouchi, a frequent participant in Paris Fashion Week, to design some of them. Kurogouchi created a *mitobari* (the long curtain that demarcates the deity's sacred space) and two *kichō* (silk partitions used as decorative furnishings). Kurogouchi decorated her *mitobari* with a plum blossom pattern, a symbol of Dazaifu Tenmangū. For the *kichō*, she wove modern synthetic fibers together with traditionally dyed silk threads. The dyeing technique takes its color from plum blossoms and camphor branches collected on the shrine grounds.

These designs, which blend antiquity with the ultra-modern, embody the renowned creative spirit of Michizane—a man famed not only for his poetic prowess but also his forward-thinking administrative policies. The choice of leading designers like Fujimoto and Kurogouchi is, therefore, a tribute both to Tenjin's role as patron of the arts and to his progressive spirit.

Finished in May 2023, the *kariden* will stand at its current site for three years until restoration work on the main sanctuary is complete. At that point, the temporary hall will be dismantled, and the trees and greenery adorning it will be transplanted to the shrine grounds to live on into the future.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

太宰府天満宮仮殿

太宰府天満宮御本殿の大改修が行われている3年の間、祭神である天神様は特設の仮殿にお鎮まりになる。天神様は、平安時代(794年～1185年)の先端をいく学者であり詩人であり政治家でもあった菅原道真公が神格化されたものである。

御本殿の改修においては、その工事期間における神様のお住まいとして仮殿が必要とされる。そのため多くの神社は一時的な社殿を建てるが、大体の場合それらは簡素で単純な造りとなる。太宰府天満宮の現代的で印象的な仮殿は、それゆえに稀有な存在である。

この仮殿の設計をした藤本壮介氏は受賞歴のある建築家で、型通りではない形状と構造の作品

で知られている。仮殿を造るにあたって、彼は道真公の左遷に関する感動的なエピソードから着想を得た。天皇が無実の罪で道真公を大宰府に追放した際、彼の愛した梅が彼の不在を寂しく思い、京都から大宰府へと飛んで移動したというお話である。その梅は「飛梅」として知られるようになった。この伝承にちなんで、藤本氏は仮殿の屋根の上に「森が浮かんでいる」ようなデザインを施した。そこから芽吹く60種類の植物の中には、神社境内に生えている約6,000本の中から選ばれた梅の木も含まれている。ウメ、サクラ、カエデ、クスノキなどの木々は、一年を通して花を咲かせたり、色を変えたりして、常に変化し続ける森を作り出している。藤本氏はまた、周囲の山々に溶け込むように曲線を描く屋根など、御本殿の建築的特徴も取り入れた。

御本殿内部の調度品や備品は修復中だが、仮殿には新しい几帳や御帳などの装飾品が必要とされた。そこで、パリ・ファッション・ウィークにも度々参加しているファッションデザイナーの黒河内真衣子氏にデザインを依頼した。黒河内氏が手がけたのは、神様のいらっしゃる場所と人との空間を仕切る幕「御帳（みとばり）」と、装飾的な調度品として使われる2点の絹の間仕切り「几帳（きちょう）」である。御帳には太宰府天満宮の象徴である梅の花があしらわれている。几帳には、伝統的な染めの絹糸に現代の化学繊維を織り込んだ。染色技法は、境内で採れる梅の花や楠の枝から色をとる形で行われた。

古代と現代が融合したこれらのデザインは、詩的才能だけでなく、先進的な行政政策でも知られた道真公のクリエイティブ・スピリットを体現したものである。また、藤本氏や黒河内氏といった一流のクリエイターを起用したのは、芸術の祭神としての天神様に敬意を表してのことだ。

2023年5月に完成した仮殿は、御本殿の改修が完了するまでの3年間使用される。その時には仮殿は解体され、仮殿を飾る木々や緑は境内の森へ移植され、未来へと生き続けることになる。

地域番号	013	協議会名	山鹿市観光推進協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
013_001	八千代座		251-500	WEB
013_002	山鹿灯籠民芸館		251-500	WEB
013_003	大宮神社		251-500	看板
013_004	さくら湯		251-500	WEB
013_005	山鹿灯籠まつり		251-500	WEB
013_006	チブサン古墳		251-500	WEB
013_007	鞠智城		251-500	WEB
013_008	豊前街道の街並み		~250	看板
013_009	豊前街道の街並み		251-500	WEB
013_010	不動岩		~250	WEB
013_011	金剛乗寺		~250	WEB
013_012	熊本県立装飾古墳館		251-500	WEB

013-001

Yachiyoza Theater

山鹿市観光推進協議会

【タイトル】 八千代座

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Yachiyoza Theater

Gray roof tiles, a wooden frame, and white paneling make a striking contrast to the colorful interior of the Yachiyoza Theater, which has red lanterns hung around the box seats and vintage advertisements painted on the bold blue ceiling. A mercantile association established Yachiyoza in 1911, opening it as a playhouse for Kabuki drama.

The playhouse and its rise and fall

Yachiyoza became a fixture in Yamaga in the Taisho era (1912–1926), and its entertainment programming reflected the cultural tastes of the day. The theater hosted not only Kabuki but also silent film screenings, *naniwa-bushi* (Japanese narrative singing), and music recitals. Dance performances and athletic events such as martial arts tournaments were also held. The venue’s popularity began to decline in the decades following World War II as television came to dominate popular culture and became the primary source of entertainment.

Restoration and preservation

After the Yachiyoza Theater closed its doors in 1970, the building fell into disrepair and was nearly demolished. A grassroots movement to save and restore the theater emerged around 1980, led by a senior citizens’ association in conjunction with local youth groups. This community effort was successful in preserving the theater as an important piece of Yamaga’s history. In 1988, the Yachiyoza Theater was designated a National Important Cultural Property—the third playhouse in Japan to receive such a distinction.

Features of the playhouse

The physical features of Yachiyozza include a *hanamichi*, a walkway that allows actors to move between the stage and the back of the theater, and a *suppon*, a raisable platform for dramatic entrances near the audience. There is also a *mawari-butai*, a circular portion of the stage that can be manually rotated from underneath to effect scene changes. The current capacity of the theater is 700, although it accommodated audiences of well over 1,000 in its heyday.

The Yachiyozza Theater today

A full-scale renovation began in 1996 and was completed in 2001. A significant amount of the wood in the building is from the theater's original construction. Nowadays, the theater serves as a venue for Kabuki drama and a wide range of other performing arts. Local guides offer Japanese-language tours of the space with advance notice. The faithful restoration of the playhouse to its former glory demonstrates the pride Yamaga residents take in their cultural heritage.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

八千代座

外観の灰色の瓦、木枠、白い羽目板が、八千代座の色鮮やかな内部と非常に対照的である。中に入ると、柵席を取り囲むように赤い提灯が吊られ、鮮やかな青色の天井に年代物の広告が描かれている。1911年、商工組合が八千代座を建て、歌舞伎の芝居小屋として開館した。

芝居小屋とその盛衰

八千代座は、大正時代（1912-1926）に山鹿で定着し、その演目は当時の文化的嗜好を反映していた。八千代座では、歌舞伎だけでなく、無声映画「浪花節」（日本の語り歌）や、独奏会も催された。舞踊興行や、武道会などの競技イベントも開催された。第2次世界大戦から数十年がたち、テレビが人気文化よりも有利に転じ、主な娯楽源となり、その人気に陰りが見え始めた。

復興と保存

八千代座が1970年に閉館となった後、その建物は、荒廃し、取り壊し寸前の状態となった。1980年ごろ、八千代座を救い、復興しようとする草の根運動が、老人会と地元の若者たちにより始められた。この住民による活動により、山鹿の歴史の重要な一部として八千代座を保存することに成功した。1988年、八千代座は国の重要文化財に指定され、このような榮譽を受けた、日本

で3番目の芝居小屋となった。

芝居小屋の特徴

役者が舞台と舞台裏の間を移動する際の「花道」、劇中の入場のための観客近くのせり上がる演壇である「スッポン」などが八千代座の物理的特徴としてあげられる。その他、場面転換を効果的に行うために下から人力で廻すことができる舞台の円形部分である「廻り舞台」もある。最盛期では1,000人を超える観客を収容していた八千代座であったが、現在の収容人数は700人となっている。

今日の八千代座

1996年に大修復が始まり、2001年に完了した。建物の木造の大部分は元々の建築が残ったままとなっている。今では、八千代座は歌舞伎やその他舞台芸術の会場として役割を果たしている。事前に通知すれば、地元ガイドによる、日本語の見学ツアーを体験することができる。この芝居小屋がかつての全盛期の姿へと忠実に修復されたことは、山鹿の住民が自分たちの文化遺産の中に持っているプライドを表している。

013-002

Yamaga Lantern Folk Art Museum

山鹿市観光推進協議会

【タイトル】 山鹿灯籠民芸館

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Yamaga Lantern Folk Art Museum

The traditional paper lanterns known as *toro* are an integral part of Yamaga's history and culture, as well as a central motif that is visible around town. Visitors to the Yamaga Lantern Folk Art Museum can view *toro* and learn about the painstaking craftsmanship required to create them.

Ancient origins

The legendary Emperor Keiko of the first and second centuries CE is said to have visited the Kyushu region and encountered heavy fog as his procession traveled along the Kikuchi River. The people of Yamaga brought torches to aid his passage. This episode is commemorated in the annual Yamaga Lantern Festival, with *toro* representing the villagers' torches.

Technical aspects of Yamaga toro

The craft of making paper lanterns flourished in Yamaga due to the area's cultivation of paper mulberry plants, whose inner bark is used in the production of *washi* (traditional handmade paper). Artisans passed on their expertise in paper craft within local communities, sustaining the practice over generations. Yamaga's lightweight *toro* are constructed with numerous thin strips of *washi* paper and minor amounts of glue. During the Yamaga Lantern Festival in August, roughly a thousand women perform a synchronized dance wearing golden and silver-colored *toro* upon their heads.

Diverse forms, intensive craft

While the word "lantern" might conjure up a singular shape or form, Yamaga *toro*

actually encompass a wide variety of designs. The *toro* displayed at the museum include elaborate architectural models of real buildings such as the Yachiyoza Theater, the museum itself, and famous shrines and temples. There are also changing *toro* exhibits that reflect contemporary culture and society.

Larger *toro* take up to several months of meticulous work to create. Learning this specialized craft entails years of apprenticeship and intensive commitment, and there are fewer than 10 masters active in the lantern-making craft today.

A cultural archive in a historic building

The museum's exhibits include photographs, posters for the festival from years past, and tools used in lantern-making. They offer historical and technical context for the craft and the lanterns on display. There are also craft workshops for various ages and levels of experience, in which participants can make a *toro* to take home.

The Yamaga Lantern Folk Art Museum is located in a building that was constructed during the Taisho era (1912–1926) and formerly housed a bank. Many features of its Romanesque architecture and interior structure remain intact to this day. In 2002, the building was registered a Tangible Cultural Property.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

山鹿灯籠民芸館

「灯籠」として知られる伝統的な紙製の提灯は、山鹿の歴史や文化にとって不可欠な一部であり、町中で見ることができる中心的なモチーフである。山鹿灯籠民芸館を訪れる人々は、「灯籠」を鑑賞し、これを制作するために必要な丹精込めた職人技について学ぶことができる。

古来の起源

紀元後1世紀から2世紀の伝説の景行天皇が九州地方を訪ね、景行天皇の一行が菊池川沿いを進んでいるときに深い霧に出くわしたと言われている。行く手を阻まれた景行天皇を助けようと山鹿の人々が松明を掲げた。このエピソードを記念して、村民が掲げた松明を「灯籠」で表し、年に1回山鹿灯籠まつりが開催される。

山鹿「灯籠」の技術的側面

その内樹皮が「和紙」（伝統的な手漉き紙）の生産に使用されるカジノキがこの地域で栽培されていたことから、山鹿では紙製の提灯作りが盛んになった。職人たちは紙工芸の技能を地域住民の間で継承し、代々受け継いできた。山鹿の軽量の「灯籠」は、数多くの「和紙」の細長い紙切れと少量の糊を組み合わせで作られる。8月に開催される山鹿燈籠まつりでは、金「灯籠」や銀「灯籠」を頭にのせたおよそ1,000人の女性たちが、同時に踊りを舞う。

多岐にわたる形、徹底したものづくり

「提灯」と聞くと、1つの形状または形を思い起こすが、山鹿「灯籠」のデザインは多岐にわたる。山鹿灯籠民芸館で展示されている「灯籠」には、八千代座、山鹿灯籠民芸館、有名な神社仏閣など実際に存在する建物の精巧な建築模型もある。また、現代の文化や社会を反映した変わり種「灯籠」の展示も行われている。

大きな「燈籠」になると、数か月にも及ぶ細かい作業が必要となる。この専門的な工芸を習得するには、長年に及ぶ修練、徹底した取り組みが必要となるため、現在では、提灯作りにおいて活躍している師は10人不足となっている。

歴史的建物における文化アーカイブ

山鹿灯籠民芸館には、これまでの山鹿灯籠まつりの写真やポスター、提灯作りで使用される道具なども展示されている。これらにより、この工芸や展示されている提灯の歴史的・技術的背景が分かる。また、さまざまな年齢、経験レベルのための工芸ワークショップが行われており、参加者は「灯籠」を作り、持ち帰ることができる。

山鹿灯籠民芸館の建物は、大正時代（1912–1926）に建てられ、以前は銀行が入っていた。ロマネスク風建築と内部構造の多くの特徴が、今日まで原形を保ち続けている。2002年、この建物は、有形文化財として指定を受けた。

013-003

Omiya-jinja Shrine

山鹿市観光推進協議会

【タイトル】 大宮神社

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Omiya-jinja Shrine

Omiya Jinja Shrine is dedicated to the guardian deity of Mt. Aso and the legendary Emperor Keiko, who is said to have lived in the first and second centuries CE.

According to legend, the people of Yamaga brought torches to aid the emperor's passage along the Kikuchi River while he was on a pilgrimage to Kyushu. These torches eventually came to be represented by paper lanterns, which are now found throughout the city.

Omiya Jinja Shrine's main hall is the site of many important rituals of the annual Yamaga Lantern Festival in August, including the Agari Toro ceremony, which date from the Muromachi period (1336–1573).

Exhibits of the Lantern Hall

Yamaga *toro* lanterns are displayed year-round in the shrine's Lantern Hall (Toro-den). These include examples of the golden and silver-colored lanterns that female dancers wear on their heads during the festival as well as lanterns in the shape of scale-model shrines, castles, birdcages, and dolls. They are crafted entirely with *washi* paper (traditional handmade paper) and trace amounts of glue.

Each year, a new set of *toro* is crafted for the festival and offered to the deities of the shrine in the Agari Toro ceremony. The Lantern Hall exhibits the *toro* for one year, until the following festival. The facility also features a display of portraits of the Thirty-Six Immortals of Poetry by renowned court painter Tosa Mitsuoki (1617–1691). The famous poets were selected by nobleman and poet Fujiwara no Kinto (966–1041). To

preserve the condition of Tosa's work, the paintings themselves are in storage, and photographs are displayed in their place.

Around the shrine grounds

A number of smaller shrines are located behind the main hall on the Omiya Jinja grounds. These shrines are dedicated to Shinto deities of soil, maritime safety, and learning, among others. There are also dozens of stone monuments that enshrine the deity Sarutahiko Okami, the grandson of the sun goddess Amaterasu.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大宮神社

大宮神社では、阿蘇山と、紀元後1世紀から2世紀に生存していたと言われている伝説の景行天皇の守護神が祀られている。言い伝えによると、九州巡礼の際、景行天皇の一行が菊池川沿いを進んでいるときに行く手を阻まれた景行天皇を助けようと山鹿の人々が松明を掲げたと言われている。やがて、この松明を紙製の提灯で表すようになり、今では町のいたるところで提灯が見られようになっている。

「上がり燈籠」など、室町時代（1336–1573）を始まりとする、毎年8月に開催される山鹿灯籠まつりの重要な神事の多くは、大宮神社本殿で行われる。

燈籠殿の展示

山鹿「灯籠」は大宮神社燈籠殿で通年展示されている。山鹿「灯籠」には、山鹿灯籠まつりの際に女性の踊り手が頭にのせる金提灯や銀提灯、ならびに神社、城郭、鳥籠、人形の縮尺模型の提灯などもある。これらは、「和紙」（伝統的な手漉き紙）とわずかな糊のみで作られている。

毎年山鹿灯籠まつりのために新しい「灯籠」が作られ、「上がり燈籠」で、大宮神社の神々に奉納される。燈籠殿では、翌年の山鹿灯籠まつりまで1年間「灯籠」が展示される。また、この施設（燈籠殿）では、名高い宮廷画家である土佐光起（1617–1691）により描かれた三十六歌仙の肖像画が展示されている。貴族であり歌人でもあった藤原公任（966–1041）により有名な歌人が選ばれた。土佐の作品の状態を守るため、肖像画そのものは保存し、その代わりに写真を展示している。

神社境内周辺

大宮神社境内の本殿の後ろに小さな社が多くみられる。これらの社では、神道にかかわる、とりわけ

土地、海上交通、学問の神を祀っている。また、天照大御神の孫である猿田彦大神を祀る石碑が数十ある。

013-004

Sakura-yu

山鹿市観光推進協議会

【タイトル】 さくら湯

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Sakura-yu

The public bathhouse Sakura-yu is in many respects the heart and soul of Yamaga, with its antique elegance and centuries-old history of resilience and reinvention. Patrons purchase an entrance ticket from a vending machine and then soak in the hot-spring baths, the waters of which are alkaline and leave the skin feeling silky smooth.

Elite origins in the Edo period

Hosokawa Tadatoshi (1586–1641), daimyo lord of Higo Province (present-day Kumamoto Prefecture), was so fond of Yamaga’s hot springs that he had an *ochaya* teahouse built in 1640 at the site where Sakura-yu currently stands. *Ochaya* in the Edo period (1603–1867) were a type of leisure facility and lodging that catered exclusively to the ruling class. By the eighteenth century, several hot-spring inns were in operation in this part of Yamaga, including one that was accessible to the lower classes. A country-wide compendium of notable hot springs published in the late Edo period includes Yamaga, attesting to the long reputation of the waters that continue to feed Sakura-yu today.

A public bath reborn

The Hosokawa family *ochaya* was transformed following the Meiji Restoration of 1868. The Tokugawa shogunate had fallen, and sovereign power had been restored to the emperor. Widespread administrative reform followed, and the daimyo lords had to relinquish their domains. Local gentry Egami Tsunao (1827–1905) and Inoue Jinjuro (1833–1906) decided to devote considerable sums of money to convert the *ochaya* into a public bath for all of the town’s residents to enjoy. In 1872, the modern incarnation of Sakura-yu was born, and further expansions and renovations were made in the ensuing

decades.

Changing fortunes

Sakura-yu was tremendously popular from the late nineteenth century through into the mid-twentieth century when not every household had a bath. The bathhouse accommodated 4,500 visitors per day at its peak in the Showa period (1926–1989). In the 1970s, the neighborhood around Sakura-yu underwent significant redevelopment, and the bathhouse was rebuilt in a contemporary style.

The rehabilitation of the Yachiyoza Theater in the 1990s inspired local residents to restore Sakura-yu to its traditional wooden structure. Designers consulted photographs and other materials to faithfully recreate the building, even making use of a scale-model lantern of the original Sakura-yu. The bathhouse was reopened in 2012.

Today, Sakura-yu is the largest wood-construction hot-spring facility in Kyushu. There is an on-site archive of materials related to the history of Yamaga and Sakura-yu. The Edo-period-style architecture and atmosphere of the bathhouse demonstrate the deep respect Yamaga residents have for their history and local culture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

さくら湯

古風であり、優雅であり、また数百年の復活と再創造の歴史を持つ公衆浴場さくら湯は、多くの点で、山鹿の核であると考えることができる。入浴客は、まず自動販売機で入場券を購入してから、アルカリ泉質で入浴後の肌を絹のようにすべすべにする温泉に浸かる。

江戸時代における素晴らしい由来

肥後藩（現在の熊本県）の大名藩主であった細川忠利（1586–1641）が山鹿温泉を大変気に入り、1640年、現在さくら湯がある場所に「お茶屋」を造った。江戸時代（1603–1867）の「お茶屋」は、支配階級のみならずサービス提供を行う一種の娯楽施設・場所であった。18世紀まで、山鹿のこの地域では、低い階級でも利用することができたものを含み、数か所の温泉宿が営業されていた。江戸時代の終わりに出版された名温泉全国大要録に山鹿温泉も掲載されており、今日のさくら湯に受け継がれた温泉水が長きにわたって評判が良いことが分かる。

公衆浴場の復活

細川家「茶屋」は、1868年の明治維新後に姿を変えた。徳川幕府が終焉し、天皇に主権が回復された。その後、行政改革が広がりを見せると、大名藩主は自らの領土を手放さなければならなくなった。地元の名士である江上津直（1827-1905）と井上甚十郎（1833-1906）は、「お茶屋」を町中の住民すべてが楽しむことができるよう公衆浴場に改造するために多額の寄付をすることに決めた。1872年に現在の形のさくら湯が生まれ、続く数十年間にさらなる拡張や改修が行われた。

変わりゆく運命

すべての家庭にお風呂が備わっていなかった19世紀終わりから20世紀半ばにかけて、さくら湯は絶大な人気を誇っていた。昭和時代（1926-1989）の最盛期で、1日あたり4,500人の入浴客を収容した。1970年代になると、さくら湯の周辺で大規模な再開発が行われ、さくら湯は現代風に再建築された。

1990年代における八千代座の復興が刺激となり、地域住民はさくら湯をその伝統的な木造建造物に復元させようと思うようになった。設計者らは写真やその他の資料を参考にし、元のさくら湯の縮尺模型も活用し、忠実に建物を再創造した。そして、さくら湯は2012年に再開した。

今日では、さくら湯は九州最大級の木造温泉施設となっている。山鹿とさくら湯の歴史に関する資料の現地アーカイブが存在する。さくら湯の江戸式建築と雰囲気、山鹿の住民が自分たちの歴史と地元文化に関して持っている深い敬意を表している。

013-005

Yamaga Lantern Festival

山鹿市観光推進協議会

【タイトル】 山鹿灯籠まつり

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Yamaga Lantern Festival

One of Kumamoto Prefecture's largest summer events takes place in Yamaga and draws upwards of 100,000 visitors each year. On August 15 and 16, the Yamaga Lantern Festival commemorates the legendary Emperor Keiko, who is said to have ruled the country in the first and second centuries CE. According to legend, when the emperor's retinue was having difficulty traveling along the Kikuchi River, the villagers of Yamaga brought torches to aid his passage. The lantern festival pays homage to this event and deploys the motif of the *toro*, or traditional paper lantern, to thrilling effect.

Toro as art and ritual

The Yamaga *toro* include not only traditionally shaped paper lanterns but also more elaborate constructions, including those in the shape of castles, shrines, dolls, and other displays. The lanterns are lightweight, hollow, and made entirely with *washi* paper (traditional handmade paper). No wood or metal fittings are used. The specially trained craftspeople who make these lanterns are purified in a ritual at Omiya Jinja Shrine each April. They then begin to construct the large-scale *toro* to be offered at the shrine in the Agari Toro ceremony, the pinnacle of the festival.

A celebration felt year-round

On August 15, the first night of the Yamaga Lantern Festival, the newly made *toro* are brought out and exhibited around the town. The Toro Dance Preservation Society holds a performance on the grounds of Omiya Jinja Shrine, followed by more dances at other festival venues. The first night culminates in a fireworks display over the Kikuchi River.

On August 16, a ceremony on the banks of the Kikuchi River recalls the visit of Emperor Keiko in ancient times. A torchlight procession moves through the city until reaching the local elementary school. This is the setting for the Sennin Toro Odori (“Thousand-Person Lantern Dance”), a synchronized performance by roughly one thousand female dancers wearing golden and silver-colored lanterns on their heads. The women dance and sing in unison to the beating of *taiko* drums.

After the dance, the large-scale *toro* made by local artisans are transported to the shrine as part of the Agari Toro offering ceremony. These *toro* are then displayed at Omiya Jinja Shrine for a full year, until the next Yamaga Lantern Festival. The cultural significance of Yamaga *toro* was recognized in 2013, when the Ministry of Economy, Trade and Industry officially designated these lanterns a traditional craft of Japan.

Even though the lantern festival only lasts two nights, visitors to Yamaga can observe the craft of the *toro* and find artifacts of the celebration year-round at Omiya Jinja Shrine, the Yamaga Lantern Folk Art Museum, and other venues.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

山鹿灯籠まつり

熊本県最大級の夏のイベントの1つが山鹿で開催され、毎年10万人を超える人が訪れる。紀元後1世紀から2世紀にこの国を支配していたと言われていた景行天皇を記念して、8月15日と16日に、山鹿灯籠まつりが開催される。言い伝えによると、景行天皇の一行が菊池川沿いを進んでいるときに困っていると、景行天皇を助けようと山鹿の村民が松明を掲げた。灯籠まつりは、この出来事に敬意を表したものであり、「灯籠」または伝統的な紙製提灯のモチーフをわくわくするように効果的に使っている。

芸術、神事としての「灯籠」

山鹿「灯籠」には、伝統的な形をした紙製提灯だけでなく、城郭、神社、人形の形をしたものなど、より精巧な建造物や、その他展示もある。この提灯は軽量で、中が空洞になっており、和紙（伝統的な手漉き紙）のみで作られている。木や金具は使用されていない。これらの提灯を制作する特別な修練を積んだ職人は、毎年4月に大宮神社で行われる神事でお祓いを受ける。それから、山鹿灯籠まつりの頂点である「上がり燈籠」で大宮神社に奉納する大きな「灯籠」の制作に取り掛かる。

1年を通して感じられる祭事

8月15日、山鹿灯籠まつりの初日の夜に、新しく制作された「灯籠」が持ち出され、山鹿の町中で展示される。大宮神社境内で山鹿灯籠踊り保存会による踊りが披露され、これに続き、その他のおまつり会場でも踊りが繰り広げられる。初日の夜は、菊池川での花火で最高潮に達する。

8月16日、菊池川の河畔で執り行われる儀式により、古代に景行天皇が訪問されたことが思い出される。松明の行列が町中を練り歩き、地元の小学校に向かう。松明が到着すると、金提灯や銀提灯を頭にのせたおよそ1,000人の女性たちが同時に踊る「千人灯籠踊り」が始まる。女性たちが太鼓を打つ音に合わせて踊り、歌う。

踊りが終わると、「上がり燈籠」の一環として、地元の職人らが製作した大きな「灯籠」が大村神社に運ばれる。その後、これらの「灯籠」は、翌年の山鹿灯籠まつりまで大宮神社で通年展示される。山鹿「灯籠」は、その文化的重要性が2013年に認められ、経済産業省により、日本の伝統的工芸品に正式に指定された。

山鹿灯籠まつりは2日だけの開催となっているが、山鹿を訪れば、1年を通じて、大宮神社や山鹿灯籠民芸館やその他の会場で、「灯籠」づくりを見学し、祭事の産物と出会うことができる。

013-006

Chibusan Burial Mound

山鹿市観光推進協議会

【タイトル】チブサン古墳

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Chibusan Burial Mound

Colorful geometric patterns and a humanlike figure decorate the inner chambers of the Chibusan Burial Mound, which dates from the Kofun period (300–538 CE). The term *kofun* means “ancient burial mound” and refers to the tombs that were built for members of the ruling class during this time.

From the outside, the burial mound has the appearance of two small hills approximately 55 meters in length. It contains a burial chamber made of rocks stacked up to nearly 4 meters high.

Ancient symbols and colors

The burial chamber is built from large slabs of stone, measuring 2.3 meters in length, 0.9 meters in depth, and 1.45 meters in height. The slabs are painted with geometric patterns in vivid red, white, and black. The red color was applied using burnt soil rich in iron oxide, while clay and manganese were used for the white and black colors. Numerous triangular shapes immediately draw the eye; archaeologists believe these may have been intended to ward off evil spirits. Two white circles with black dots are painted in the center of the chamber wall. These shapes have been alternately explained as stars, mirrors, or breasts.

On the adjoining slab to the right is a humanlike figure with outstretched arms and what appears to be a crown on its head. Seven circles are painted in the space above it. Some believe these circles may represent the seven stars of the Big Dipper constellation.

Vestiges of history nearby

No bodies or artifacts are known to have been found in the chamber interior. A stone sculpture of a human figure measuring 150 centimeters high and 80 centimeters wide was discovered nearby, however. It was possibly placed there to protect the tomb. The original statue is held at the Tokyo National Museum, and a replica is displayed at the site of the mound.

The Chibusan Burial Mound is located less than 10 minutes to the west of Yamaga by car. The access road is narrow and large vehicles may not be able to easily reach the area. The outdoor site and an open-air re-creation of the inner chamber's sarcophagus can be visited at any time. However, advance reservations are required to visit the interior, and the innermost chamber of the mound can only be viewed through a window.

At a separate site nearby, there is a series of 61 chambers dug into a section of rocky hillside. These have been dubbed the Nabeta Caves. They also date to the Kofun period and may have served as tombs. For more about burial mounds, the Kumamoto Prefectural Decorated Tumulus Museum in Yamaga offers detailed information and extensive exhibitions about this cultural practice.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

チブサン古墳

色鮮やかな幾何学模様や人間のような形が、古墳時代（紀元後300–538）から始まったチブサン古墳の内室を装飾している。「古墳」とは、「古代の埋葬塚」を意味し、この時代に支配階級のために建てられた墓を指す。

この埋葬塚を外から見ると、全長約55メートルで、小さな丘が2つ並んでいるようである。埋葬塚には、4メートル近くまで岩が積み上げられてできた玄室がある。

古代のシンボル、色彩

玄室は巨大な石板で建てられており、その大きさは幅2.3メートル、奥行き0.9メートル、高さ1.45メートルにおよぶ。これらの石板は鮮やかな赤、白、黒で幾何学模様が描かれている。赤色には、酸化鉄が豊富な焼土が使われており、白色と黒色には、粘土とマンガンが使われている。たくさんの

三角形の形により、目が描かれている。考古学者は、これらは悪霊を避けることを意図していたのであろうと考えている。玄室の壁の中心には、2つの白い円と黒い点が描かれている。これらの形は、これまで代わる代わる、星、鏡または乳房であると説明されてきた。

右側の隣接する石板には、手をいっぱいに広げた人間のような形をしたものがあり、その頭には王冠のように見えるものがのっている。その上には、7つの円形が描かれている。これらの円形は北斗七星の7つの星を表していると考えられる者もいる。

近隣の歴史の痕跡

玄室の内部に遺体や出土品は見受けられなかったことが分かっている。しかしながら、人間の形をした、高さ150センチ、幅80センチの石像彫刻がこの近くで発見された。おそらく墓を守るためにそこに設置されたのであろう。実物は東京国立博物館が所蔵しており、この埋葬塚があった場所にはレプリカを展示している。

チブサン古墳は、山鹿の西方、車で10分足らずのところにある。アクセス道は狭く、大型車だと現地まで簡単にたどり着くことができない。外部と、内室の石棺の屋外再現物は、いつでも見学可能である。しかしながら、内部を見学する場合は事前の予約が必要となる。また、埋葬塚の一番奥の室は、窓越しの見学のみとなっている。

この近くの別の場所には、岩だらけの丘陵の斜面の一画に掘られた一続きになった61の室がある。これらは鍋田横穴と呼ばれている。これらも、古墳時代を始まりとし、墓としての役割をしていたであろう。埋葬塚について詳しく知りたい場合、山鹿の熊本県立装飾古墳館でこの文化的慣習についての詳細な情報、豊富な展示を見ることができる。

013-007

Kikuchi Castle

山鹿市観光推進協議会

【タイトル】 鞠智城

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Kikuchi Castle

Towers, storehouses, and other buildings have been reconstructed on the former site of Kikuchi Castle, a mountaintop fortress dating to the seventh century. The remains of 72 structures were discovered here through successive archaeological excavations, and these relics have provided the basis for the reconstructions. The vast site covers 55 hectares and is preserved as a park with beautiful natural scenery and walking paths.

Fortress for strategic defense

The original fortress was built in the seventh century during a time of tension and conflict between the Yamato state, based in Nara, and Silla, a kingdom part of present-day Korea, allied with Tang China. In that era, Dazaifu (in present-day Fukuoka Prefecture), 60 kilometers from the castle, was a major regional seat of power. Kikuchi was one of four castles built in northern Kyushu to protect Dazaifu. As the southernmost fortress, and therefore the farthest from a possible enemy attack, Kikuchi Castle played a supportive role to ensure the other castles had adequate food, weaponry, and fighters.

Notable buildings in the castle park

Today, the largest and most striking structure of the castle park is the Octagonal Drum Tower. It is believed to have served as a watchtower and a kind of belfry where drums were beaten at regular intervals to indicate the time. The tower measures 15.8 meters in height and has a tile roof weighing 76 tons. The nearby rice storehouse elevated on stilts is an example of the *azekura-zukuri* style of building, constructed of wooden members that are triangular in cross-section. This method of construction helps regulate the humidity of the storehouse's interior. Also nearby is the Itakura, an armory with a

thatched roof. Each of these structures offers an insight into the architecture and aesthetics of the Asuka period (592–710). Visitors may tour the exterior of each structure but are not allowed to enter.

Exploring history and nature

A visitor center called the Onkosouseikan has exhibitions about the castle and the history of the Kyushu region. Inside are architectural models of the castle structures, artifacts found on-site, and panels with detailed information about the features of Kikuchi Castle. The Onkosouseikan also has a theater where visitors can view an informational video about the castle and the Kikuchi River basin.

Walking paths lead to the various reconstructed buildings and to several outdoor observation decks, with vistas of the castle park area. The walking routes are suitable for all ages, though some of the longest take up to an hour to complete. The natural landscape of the castle park is attractive in any season, and particularly in fall, when the foliage changes color. Kikuchi Castle is located about 20 minutes by car from Yamaga. It is also accessible from the cities of Kumamoto and Fukuoka, which are approximately 60 and 90 minutes away by car, respectively.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鞠智城

7世紀を始まりとする山頂の要塞である鞠智城跡地に、楼、倉、その他の建物が復元されている。継続的な考古学的発掘調査によって、72の建造物の遺跡がここで発見され、これらの遺跡から、復元の基盤ができた。この55ヘクタールもの広大な場所は、美しい自然風景、散策路を伴う公園として保存されている。

戦略的防衛のための要塞

元の要塞は、7世紀に、奈良を拠点としていた大和国家朝廷と、唐と同盟関係にあった、現在の韓国の王国の部分であった新羅との間の緊迫と紛争の最中に建てられた。その時代、鞠智城から60キロのところにある大宰府（現在の福岡県）が地方権力の拠点であった。そこで、大宰府を守るため北九州に4つの城郭が建てられ、そのうちの1つが鞠智城であった。最南にある要塞、つまり敵の攻撃から最も遠い要塞として、鞠智城はその他の城に十分な食料、武器、兵士を補給する支援的役割を果たした。

城内公園の顕著な建物

今日における、城内公園の中で最も大きく目立つ建造物は、八角形鼓楼である。この鼓楼は、望楼であり、また一種の鐘楼の役割を果たしていたと考えられており、一定の間隔で太鼓を鳴らして時を知らせていた。この鼓楼は高さ15.8メートルで、重さ約76トンの瓦屋根が載っている。近くにある高床式の米倉は、断面が三角形をした木製の部材を使って、校倉造りで建てられている。この建築法は、倉の内部の湿度調節に役立つ。また、その近くには、茅葺き屋根の兵器庫である板倉もある。これらの建造物は飛鳥時代（592-710）の建築美学を理解する上での手掛かりとなる。ここを訪れる人々は、それぞれの建造物の外部を見学することはできるが、その中に入ることはできない。

歴史と自然を探訪する

温故創生館と呼ばれる案内所では、鞠智城や九州地方の歴史についての展示がある。中に入ると、城の構造の建築模型、現地で見つかった出土品、鞠智城の特徴に関する詳細情報が書かれたパネルが展示されている。温故創生館にはまた、鞠智城や菊池川流域についての情報ビデオを見られる映写室（イメージーションホール）がある。

散策路を行くと、復元されたさまざまな建物や、城内公園エリアの眺めを楽しむことができる屋外展望台が数台ある。散策ルートは全年齢層に適しているが、最長ルートのいくつかは最長1時間を要する。城内公園の自然風景はどんな季節でも魅力的であり、特に秋は、群葉の色が移りゆき、魅力的となる。鞠智城は、山鹿から車で約20分のところにある。また、熊本市や福岡市からもアクセスが良く、それぞれ車で約60分、約90分で行くことができる。

013-008

Buzen Kaido

山鹿市観光推進協議会

【タイトル】 豊前街道の街並み

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Buzen Kaido

The historic highway known as the Buzen Kaido passes many of Yamaga's major landmarks and attests to the city's vibrant past as a center of commerce and culture. The thoroughfare originally stretched from Kumamoto Castle in the south to the port of Kokura (present-day Kitakyushu City) in the north. In Yamaga, the Buzen Kaido runs from the banks of the Kikuchi River through the heart of town. Major local landmarks including the bathhouse Sakura-yu, the Yamaga Lantern Folk Art Museum, and the Yachiyoza Theater are located along its route.

The Kikuchi River was an important waterway for domestic trade during the Edo period (1603–1867), when rice grown in Kyushu was transported to Osaka via the river. Businesses related to rice production, such as sake breweries and rice cracker shops, flourished on the Buzen Kaido in Yamaga. Some of the shops still operating today were founded in the Edo period. The architecture and ambience of this street offer a glimpse of life in the local community centuries ago.

The Buzen Kaido is a bustling hub during citywide events like the Yamaga Lantern Festival in August. The historic storefronts are a reminder of the city's rich past, while the annual celebrations ensure the region's cultural heritage is passed on to future generations.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

豊前街道の街並み

豊前街道として知られる旧街道を行くと、山鹿の主要な歴史的建造物の多くがあり、商業と文化の中心としての町の活気に満ちた過去が分かる。元々、南は熊本城から、北は小倉港（現在の北九州市）まで本道が延びていた。山鹿では、豊前街道が菊池川の河畔から町の中心部を通り抜けている。豊前街道沿いには、公衆浴場さくら湯、山鹿灯籠民芸館、八千代座など地元の主要な歴史的建造物が立ち並んでいる。

菊池川は、江戸時代（1603-1867）の国内貿易にとって重要な水路であった。当時は、九州で収穫した米を大阪まで菊池川経由で運んでいた。山鹿の豊前街道では、造り酒屋や煎餅屋など米生産にかかわる商いが栄えた。江戸時代にできたいくつかのお店が今もなお営業している。通りの建築や雰囲気から、数百年も前の地域住民の暮らしぶりを垣間見ることができる。

8月に行われる山鹿灯籠まつりのような市全域規模のイベントの開催中、豊前街道は賑わいの中心となる。由緒ある店構えが町の豊かだった 過去を彷彿とさせる一方で、毎年行われる祭事によって、この地域の文化遺産が代々受け継がれていく。

013-009

Buzen Kaido

山鹿市観光推進協議会

【タイトル】 豊前街道の街並み

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Buzen Kaido

The historic highway known as the Buzen Kaido passes many of Yamaga's major landmarks and attests to the city's vibrant past as a center of commerce and culture. The thoroughfare originally stretched from Kumamoto Castle in the south to the port of Kokura (present-day Kitakyushu City) in the north. The Buzen Kaido flourished during the Edo period (1603–1867) due to the practice of *sankin-kotai*, a policy whereby regional daimyo lords were required to travel to the capital, Edo (present-day Tokyo), and reside there in alternate years. Yamaga was the first major stop on the route northward from the city of Kumamoto, and prospered as a result.

A main artery of history and culture

The Buzen Kaido in Yamaga runs from the banks of the Kikuchi River through the heart of town. Major local landmarks including the bathhouse Sakura-yu, the Yamaga Lantern Folk Art Museum, and the Yachiyoza Theater are located along its route. The Kikuchi River was an important waterway for domestic trade during the Edo period, when rice grown in Kyushu was transported to Osaka via the river. Businesses related to rice production, such as sake breweries and rice cracker shops, flourished on the Buzen Kaido in Yamaga. Some of the shops still operating today were founded in the Edo period. The architecture and ambience of this street offer a glimpse of life in the local community centuries ago.

Celebrations take center stage

The neighborhoods surrounding the Buzen Kaido are especially lively during annual festivals, as the street is a major thoroughfare for processions. At the Yamaga Onsen Festival in April, the Buzen Kaido is an exuberant spectacle of dance, *taiko* drumming,

and other performances. During the Yamaga Lantern Festival in August and the Yamaga Lantern Romance events in February, the streets are filled with hundreds of colorful lanterns, handmade umbrellas, and bamboo candle holders.

Rest and recreation on the Buzen Kaido

The Buzen Kaido has plenty of cafes and restaurants for lunch, dinner, or a midday snack. Some of the establishments here serve the local delicacy of *basashi* (thinly sliced raw horse meat). The hot springs at Sakura-yu, boutiques specializing in fermented food products, and stores selling traditional Japanese sweets (*wagashi*) are among the businesses that line the street.

Guided tours of the Buzen Kaido are available with advance booking. Some include rickshaw rides, others visit historic sites along the ancient highway such as Sakura-yu and the Yachiyoza Theater. There are also food-focused tours, where visitors can sample various rice-related products such as sake, miso, and rice crackers. For those interested in Yamaga's craft culture, interactive experiences and workshops at local boutiques offer lessons in how to make dolls, miniature lanterns, naturally dyed fabrics, and more.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

豊前街道の街並み

豊前街道として知られる旧街道を行くと、山鹿の主要な歴史的建造物の多くがあり、商業と文化の中心としての町の活気に満ちた過去が分かる。元々、南は熊本城から、北は小倉港（現在の北九州市）まで本道が延びていた。江戸時代（1603-1867）、地方の大名藩主を1年交替で首都である江戸（現在の東京）に向かわせ、江戸で住まわせる政策である「参勤交代」の実施のため、豊前街道は栄えた。山鹿は、熊本市から北に向かう道にある最初の主要な停留場であったために、繁栄することとなった。

歴史と文化の本道

山鹿では、豊前街道が菊池川の河畔から町の中心部を通り抜けている。豊前街道沿いには、公衆浴場さくら湯、山鹿灯籠民芸館、八千代座など地元の主要な歴史的建造物が立ち並んでいる。菊池川は、江戸時代（1603-1867）の国内貿易にとって重要な水路であった。当時は、九州で収穫した米を大阪まで菊池川経由で運んでいた。山鹿の豊前街道では、造り酒屋や煎餅屋など米生産にかかわる商いが栄えた。江戸時代にできたいくつかのお店が今もなお営業している。

通りの建築や雰囲気から、数百年も前の地域住民の暮らしぶりを垣間見ることができる。

祭事が脚光を浴びる

豊前街道は行列が通る本道となっているため、豊前街道の周辺は、毎年行われる祭りの開催中特に活気にあふれる。4月に開催される山鹿温泉祭では、豊前街道では、ダンス、「太鼓」の演奏、その他の上演など熱烈な光景が見られる。8月に開催される山鹿灯籠まつりや2月に開催される山鹿灯籠浪漫では、通りは、何百もの色鮮やかな提灯、手製の傘、竹製のろうそく立てで埋め尽くされる。

豊前街道での休憩・娯楽

豊前街道には、ランチ、ディナーまたは昼のおやつを楽しむことができる多くのカフェやレストランがある。ここにある施設のいくつかは、郷土料理の「馬刺し」（薄く切った生の馬肉）を提供している。さくら湯の温泉、発酵食品専門店、伝統的な日本のお菓子を販売する店（「和菓子屋」）なども、この通りに並んでいる。

事前に予約すれば、豊前街道のガイドツアーを体験することができる。人力車に乗って探訪するツアーや、さくら湯や八千代座など、昔の街道沿いに立ち並ぶ、歴史上有名な場所（旧跡）を訪ねるツアーがある。また、食べ物に絞ったツアーもあり、酒、味噌、煎餅などお米に関連する商品を味見することができる。山鹿のものづくり文化に興味があれば、地元専門店で開催されている相互体験やワークショップに参加して、人形、ミニ提灯、天然染織物などの作り方講習を受けることができる。

013-010

Fudo-gan

山鹿市観光推進協議会

【タイトル】 不動岩

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Fudo-gan

Three monoliths stand at different elevations on Mt. Kamou (389 m), forming an impressive tableau that can be seen from the surrounding countryside. These enormous stones are the Fudo-gan, named after the Buddhist deity Fudo Myo-o, also known as Acala. During the Heian period (794–1185), mountain ascetics worshiped and practiced austerities around the monoliths. A trail leads up the mountainside and around the Fudo-gan, passing a shrine dedicated to Fudo Myo-o.

The tallest of the Fudo-gan has a height of 80 meters and a base circumference of 100 meters. A close examination reveals the monoliths are actually composed of countless small rocks ranging from 5 millimeters to 50 centimeters in diameter. This rock is called gabbro and originally formed from hardened lava more than 500 million years ago in the Paleozoic era, before the existence of the Japanese archipelago. The gabbro became submerged in sea water, fragmenting and eroding over time into rounded pebbles and sand, which then consolidated into one large structure due to massive pressure.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

不動岩

蒲生山（389メートル）の異なる標高に3つの石柱がそびえ立っており、周囲の田園地帯から非常に印象的な情景を見ることができる。これらの巨大な石、不動岩は、仏教の神であり、また阿遮羅として知られる不動明王にちなんで名付けられた。平安時代（794–1185）に、山伏がこの石柱の周りで祈祷や修行を行っていた。道沿いに進んでいくと、山の斜面を登り、不動岩の周囲を

ぐるっと回り、不動明王が祀られた神社を通り過ぎる。

不動岩の一番高いところは80メートルの高さがあり、基部の周囲は100mある。よく見ると、直径5ミリから50センチほどの小さな石が無数にくっついて石柱を形作っているのがわかる。この岩は、斑れい岩と呼ばれ、元は、日本列島が存在する前の、5億年以上前の古生代に礫岩（硬化した溶岩）からできたものである。斑れい岩が海水に沈み、長い年月をかけて砕け、浸食され、丸い石や砂になり、強い圧力を受けて固まり、1つの巨大な構造物になった。

013-011

Kongojoji Temple

山鹿市観光推進協議会

【タイトル】 金剛乗寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Kongojoji Temple

A stone gate inscribed with Sanskrit characters leads to the tranquil grounds of Kongojoji. The temple dates from the ninth century and is said to be the oldest in Yamaga. It was established by Kukai (774–835), the founder of the Shingon school of Buddhism in Japan.

Kongojoji Temple is revered for a particular episode from its long and storied past. According to local lore, the hot springs of Yamaga dried up for a period of many months in the fifteenth century. Yumei Hoin, the temple's head priest at the time, prayed continuously for the restoration of the waters and built the town's Yakushi-do Hall during this time to honor Yakushi Nyorai, the Buddha of Healing.

It is said that the waters finally flowed again due to Yumei Hoin's diligent prayers. This event is celebrated in the Onsen Fukkatsu Festival every December. Kongojoji is also a venue for the Yamaga Lantern Romance events in February, during which colorful umbrellas and bamboo vessels are illuminated to create an ethereal atmosphere around town.

The term *kongo* refers to the vajra, a legendary Buddhist ritual implement that embodies the physical properties of a diamond and a thunderbolt and, by association, connotes a person's spiritual strength and wisdom. The name of Kongojoji Temple in this context suggests attaining enlightenment through Buddhist devotion.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

金剛乗寺

梵字が刻まれた石門を通ると、ひっそりとした金剛乗寺の境内に入る。金剛乗寺は9世紀を始まりとする寺院で、山鹿最古と言われている。日本の仏教真言宗の創始者である空海（774-835）により建てられた。

金剛乗寺は、はるか昔の歴史に名高い過去からの、特別なエピソードにより崇敬されている。地元で伝わるところによると、15世紀に山鹿の温泉が長きにわたり枯れ上がった。そこで、当時の金剛乗寺の住職であった宥明法印が温泉の復活を祈願し続け、この間に、癒しの仏陀である薬師如来をご本尊としてこの町の薬師堂を建てた。

宥明法印住職の勤勉な祈禱により、ついに再び温泉が湧き出たと言われている。この出来事を祝って、毎年12月に温泉復活感謝祭が開催される。また、金剛乗寺は、2月に開催される山鹿灯籠浪漫の会場になっており、山鹿灯籠浪漫の開催中は、色鮮やかな傘や竹製の容器にイルミネーションが施され、町中を幽玄な雰囲気包んでいる。

「金剛」とは、ダイヤモンドと雷挺の物理的特性を体現化した伝説上の仏教の法具である金剛杵を指し、これに関連して、人が持つ精神的な強さや賢明さを暗示する。この文脈における金剛乗寺の名称は、仏教信仰を通じて、悟りを開くことを示唆している。

013-012

Kumamoto Prefectural Decorated Tumulus Museum

山鹿市観光推進協議会

【タイトル】 熊本県立装飾古墳館

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Kumamoto Prefectural Decorated Tumulus Museum

Countless ancient burial mounds known as *kofun* remain extant across Japan. There are only around 700 decorated tumuli (*soshoku kofun*), however, 200 of which are located in Kumamoto Prefecture. Yamaga has a comprehensive museum dedicated to this unique cultural heritage of the Kofun period (300–538), named for the burial mounds constructed for members of the ruling class during this time.

Layout and structure of the museum

The Kumamoto Prefectural Decorated Tumulus Museum is a spacious two-floor museum designed by internationally renowned architect Tadao Ando. The permanent exhibition room on the museum's first floor introduces Kumamoto's archaeological sites and the artifacts found inside these decorated tombs. There is also an exhibition space with rotating thematic displays. The museum's reconstructions of the decorated tombs, its main attraction, are located on the basement floor.

A closer look at history

Some of the tomb chambers, like that of the Chibusan Burial Mound, are open to visitors, but others are closed to the public. The museum has painstakingly detailed reconstructions of the stone chambers found within 12 of the burial mounds located in Kumamoto Prefecture. These replicas can be viewed up close, with the aid of a remote-controlled camera for some of the inner chambers.

Explanatory texts in English and Japanese offer background information on the painted or carved patterns found within the tomb chambers. Many tombs, for example, feature

circular or mirror-like designs that may have served ritualistic purposes. Some have fragmented patterns of straight and curved lines similar to those found on shields and swords from the Kofun period. It is believed such patterns were meant to ward off evil spirits. There is also a screening room called the Imagination Hall, which shows educational films about the Kofun period and other eras in Japanese history.

An ancient landscape to explore

The museum is located approximately 10 minutes southwest of downtown Yamaga by car. A number of related attractions are within walking distance, such as the Iwabarū Tumuli, a group of 13 burial mounds, and the Yokoyama Tumulus. Tours of the Yokoyama site can be requested at the museum during operating hours.

Another nearby attraction is the Higo Ancient Forest. This picturesque park has a walkway lined with clusters of hydrangeas and a lotus pond with lotuses propagated from seeds that are over 2,000 years old. Visitors can enjoy a relaxing stroll here after steeping themselves in the ancient mysteries of Kumamoto's decorated tumuli.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

熊本県立装飾古墳館

「古墳」として知られる、古代の埋葬塚が今もなお日本中で無数に残っている。しかしながら、「装飾古墳」は約700基にすぎず、そのうちの200基は熊本県にある。山鹿には、古墳時代（300-538）に支配階級のために建てられた埋葬塚に因んで名付けられた、この時代におけるこの固有の文化遺産に特化した総合博物館（古墳館）がある。

博物館（古墳館）の設計と構造

熊本県立装飾古墳館は、世界的に有名な建築家である安藤忠雄により設計された、巨大な2階建て博物館である。1階の常設展示室では、熊本の遺跡やこれらの装飾墓の内部で見つかった出土品が紹介されている。また、回転式特集陳列を行う展示スペースがある。熊本県立装飾古墳館の一番の見どころである、これらの装飾墓の復元は、地階に設置されている。

歴史を近くで見る

チブサン古墳の玄室と同じく、いくつかの玄室は来訪者に公開されているが、一般公開されていないものもある。熊本県立装飾古墳館は、熊本県にある12基の埋葬塚の中で見つかった石室を苦

劣して精密に復元したものを所蔵している。これらのレプリカの内室のいくつかについては、リモートカメラを用いて間近で見ることができる。

英語と日本語による説明文により、玄室の内部で見つかった、描かれたまたは刻まれた模様についての背景情報が分かる。例えば、多くの墓は、儀式上の目的のためであったであろう円形または鏡の様なデザインを特徴としている。いくつかの墓には、古墳時代の盾や剣に見られるものと同じような、直線や曲線の断片化した模様がある。このような模様は、悪霊を避けることを意味していたと考えられている。また、イマジネーションホールと呼ばれる映写室があり、ここでは、古墳時代や日本の歴史におけるその他の時代についての教育映画を上映している。

古代の風景の探訪

熊本県立装飾古墳館は、山鹿の市街地の南西、車で約10分のところにある。13の埋葬塚群（古墳群）である岩原古墳、横山古墳など、関連する多くの観光名所が徒歩圏内にある。営業時間中であれば、熊本県立装飾古墳館で横山地区の見学ツアーを申し込むことができる。

この近くにはもう1か所、肥後古代の森という魅力的な場所がある。この絵画のように美しい公園には、アジサイが咲き乱れた遊歩道や、2千年以上前の種から繁殖した蓮のある池がある。ここを訪れた人々は、熊本の装飾古墳の古代の神秘に浸った後に、公園内をのんびりと散策することができる。

地域番号	014	協議会名	菊池市	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
014-001	菊池の松囃子（御松囃子御能）		250	Webページ
014-002	将軍木		250	Webページ
014-003	熊耳山正観寺		250	Webページ
014-004	菊池武光の墓		500	Webページ
014-005	円通寺の石門		250	Webページ
014-006	菊池武重の墓		250	Webページ
014-007	輪足山東福寺		250	Webページ
014-008	無量山西福寺		250	Webページ
014-009	手洗山南福寺		250	Webページ
014-010	袈裟尾山北福寺		250	Webページ
014-011	九儀山大琳寺		250	Webページ
014-012	菊池則隆の墓		250	Webページ
014-013	安国寺堂宇		250	Webページ
014-014	菊池政隆公墓		250	Webページ
014-015	菊池為邦・重朝の墓		250	Webページ
014-016	江月山玉祥寺		250	Webページ
014-017	菊池持朝の墓		250	Webページ
014-018	孔子堂跡		250	Webページ
014-019	隈部忠直の墓		250	Webページ
014-020	鳳儀山聖護寺		250	Webページ
014-021	亀尾城跡		250	Webページ
014-022	碧巖寺		250	Webページ
014-023	増永城跡		250	Webページ
014-024	台城跡		250	Webページ
014-025	菊池一族とは		751～	Webページ

014-001

Kikuchi Matsubayashi

菊池市

【タイトル】 菊池の松囃子（御松囃子御能）

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Kikuchi Matsubayashi

Kikuchi Matsubayashi is a performing art tradition that dates back more than six centuries, to a pivotal event in the Kikuchi warrior clan's history. It is considered a precursor of Noh theater, modeled on the performing arts enjoyed by the medieval aristocracy: dancing accompanied by singing and drums.

Matsubayashi was first presented as a celebratory New Year's performance at the Kikuchi clan's castle in 1349. The guest of honor on this occasion was the recently arrived imperial prince Kanenaga (also known as Kaneyoshi; 1329–1383), who had been sent to Kyushu to raise an army.

During this period, the imperial court split into two as the result of a power struggle, and the rival Northern and Southern courts vied for control of the country. Kanenaga, the son of the Southern Court's Emperor Godaigo (1288–1339), allied with the Kikuchi clan. In the following decade their forces brought all of Kyushu under Southern Court control, ushering in a golden age for the Kikuchi.

The Kikuchi clan's ascendancy proved short-lived, but Matsubayashi has endured largely unchanged to this day. The entertainments witnessed by Prince Kanenaga are reenacted by a local heritage association on a traditional stage in central Kikuchi every October 13 as part of the Kikuchi Shrine's autumn festival.

Kikuchi Matsubayashi has been designated an Intangible Folk Cultural Property, in

part because it exemplifies elements of Noh that predate the tradition's classical form, which was established by the playwrights Kan'ami and Zeami between the late 1300s and mid-1400s.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池の松囃子

菊池の松囃子は、菊池一族の歴史における重要な出来事に遡る、600年以上の伝統を持つ芸能である。中世の貴族が楽しんだ芸能に由来する能楽の初期型で、唄と太鼓を伴って舞う。

松囃子は、1349年に菊池一族の城で正月の祝賀行事として初めて上演された。この時の主賓は、九州へ拳兵のために派遣された皇子、懐良（かねなが）親王（菊池以外では「かねよし」と読む；1329-1383）であった。

この時代、朝廷は権力争いの結果二つに分裂し、対立する北朝と南朝が天下の覇権を争っていた。南朝の後醍醐天皇（1288～1339）の息子である懐良は、菊池一族と同盟を結んだ。その後約10年間で、彼らの勢力は九州全域を南朝の支配下に置き、菊池氏の黄金時代が到来した。

菊池氏の台頭は長くは続かなかったが、松囃子の伝統は今日までほとんど変わることなく続いている。毎年10月13日、菊池神社の秋の大祭の一環として、地元の保存会によって菊池市中心部の伝統的な舞台上で、懐良親王が目撃した芸能が再現される。

菊池の松囃子が無形民俗文化財に選択されているのは、1300年代後半から1400年代半ばにかけて観阿弥と世阿弥によって確立された能の古典的な形式よりも前の要素を例証しているためでもある。

014-002

Shogun Tree

菊池市

【タイトル】 将軍木

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Shogun Tree

The Shogun Tree is a giant *muku* tree (*Aphananthe aspera*) that is more than 600 years old. To the people of central Kikuchi, where it is located, this massive tree symbolizes Prince Kanenaga (also known as Kaneyoshi; 1329–1383), one of the most prominent figures in local history.

Kanenaga was the son of Emperor Godaigo (1288–1339), whose conflict with the Ashikaga shogunate led to a split in the imperial court. Godaigo's Southern Court and the Ashikaga-backed Northern Court fought for control of the country. Godaigo sent Kanenaga to Kyushu to build an alliance between the Southern Court and local warrior groups such as the Kikuchi clan.

Under the leadership of Kanenaga and his trusted general Kikuchi Takemitsu (1319–1373), the Southern alliance conquered all of Kyushu. Their control over the island proved fleeting, but as this period represents the height of the Kikuchi clan's political influence, Kanenaga remains a hero in local lore.

The Shogun Tree, named after Prince Kanenaga, is said to have been planted by Kanenaga himself or to have grown from a staff he stuck in the ground. The prince is enshrined as a deity at the nearby Kikuchi Shrine. Every year, on October 13, his spirit is ritually transferred to a small shrine beneath the tree's sprawling branches. A Matsubayashi performance, as witnessed by the prince during his lifetime, is then reenacted on a traditional stage opposite the tree. Spectators are not allowed to enter the area between the stage and the tree so as not to obstruct the prince's view.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

將軍木

將軍木は樹齡600年を超えるムクの巨木である。菊池市中心部にあり、地域の歴史上最も著名な人物の一人である懷良（かねなが）親王（「かねよし」とも；1329-1383）を象徴している。

懷良親王は後醍醐天皇（1288-1339）の皇子で、後醍醐が足利幕府と対立したため、朝廷は分裂した。後醍醐の南朝と足利を後ろ盾とする北朝が天下の覇権を争い、後醍醐は南朝と菊池氏などの地方武士団との同盟を築くため、懷良を九州に派遣した。

懷良と彼の信頼する武将菊池武光（1319-1373）の指揮の下、南朝方は九州全土を征服した。その支配は長く続かなかったが、この時期が菊池氏の政治的影響力の絶頂期であったため、懷良は今でも地元の英雄として語り継がれている。

懷良親王にちなんで名付けられた將軍木は、懷良自身が植えたとも、彼が地面に刺した杖から生えたとも言われている。皇子は近くの菊池神社の祭神として祀られている。毎年10月13日、皇子の霊はこの木の枝の下にある小さな祠に移される。そして、皇子が生前目撃した松囃子の芸能が、木の向かいにある伝統的な舞台上で披露される。観客は皇子の視界を遮らないよう、舞台と木の間に入り込むことは許されない。

014-003

Shokanji Temple

菊池市

【タイトル】熊耳山正観寺

【想定媒体】Webページ

できあがった英語解説文

Shokanji Temple

Shokanji Temple in central Kikuchi was the most important religious institution for the Kikuchi clan during the 1300s and 1400s, a period that marked the height of the clan's power and prosperity. The Rinzaï Zen temple was founded in 1344 by Kikuchi Takemitsu (1319–1373) immediately after he had been named the fifteenth head of the clan. Takemitsu is remembered as the most successful wartime Kikuchi leader; he was also an influential reformer.

Founding Shokanji was part of Takemitsu's efforts to establish his authority as leader. He went on to expand the clan's territory and influence until the alliance led by the Kikuchi controlled all of Kyushu. At home in the castle town of Waifu (now central Kikuchi), Takemitsu's reforms included creating the Kikuchi Gozan (Five Temples) system by placing five Zen temples in Waifu under his clan's protection. In return, these temples served the Kikuchi by performing various administrative and religious duties.

Shokanji was ranked above the Five Temples, a privileged position that allowed it to grow into one of the most influential temples in western Japan under the lordship of Takemitsu and his descendants. In the late 1300s the temple grounds included 14 halls, and the temple remained an important center for scholarship into the late 1400s.

Kikuchi Takemitsu was buried at Shokanji. His tomb was restored in the nineteenth century and is located near the main hall, in the opposite direction from the temple's modern-day cemetery.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

正観寺

菊池市の中心部にある正観寺は、菊池一族が繁栄した1300年代から1400年代にかけて、一族の最も重要な宗教施設であった。臨済宗の寺院は、菊池武光（1319-1373）が15代当主に就任した直後の1344年に創建された。武光は、戦時中に最も成功した菊池氏の指導者として、また影響力のある改革者として記憶されている。

正観寺の創建は、武光がリーダーとしての権威を確立するための努力の一環であった。その後、菊池氏率いる同盟が九州全域を支配するまで、武光は一族の領土と影響力を拡大していった。城下町の隈府（現在の菊池市中心部）を本拠とした武光の改革には、隈府にある5つの禅寺を一族の保護下に置く「菊池五山」制度の創設が含まれる。その見返りとして、これらの寺院は菊池氏に仕え、様々な行政的、宗教的任務を果たした。

正観寺は五山の上に位置付けられ、その特権的な地位によって、武光とその子孫の当主のもと、西日本で最も影響力のある寺院のひとつまで成長した。1300年代後半には、境内には14もの堂宇があり、1400年代後半まで寺は学問の重要な中心地であり続けた。

菊池武光は正観寺に葬られた。彼の墓は19世紀に修復され、本堂の近く、現在の寺の墓地とは反対方向にある。

014-004

Tomb of Kikuchi Takemitsu

菊池市

【タイトル】 菊池武光の墓

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Tomb of Kikuchi Takemitsu

Kikuchi Takemitsu (1319–1373) was the fifteenth head of the Kikuchi clan, its greatest war hero, and an influential reformer under whom the clan evolved from a local samurai group into the most powerful political force in Kyushu.

Troubled beginnings

When Takemitsu was 14 years old, his father, Taketoki (1292–1333), the twelfth leader of the clan and a sworn ally of Emperor Godaigo (1288–1339), was killed while leading a failed assault in Hakata (present-day Fukuoka) on forces loyal to the Kamakura shogunate, the warrior-led government that ruled Japan at the time. The Kamakura shogunate was toppled only months later, triggering a period of instability during which the imperial court and proponents of warrior rule vied for control of the country.

As a result of this power struggle, the imperial court split into two in 1336. The Kikuchi remained loyal to Godaigo, whose Southern Court was opposed by the warrior-backed Northern Court, but were defeated in several battles against the Northern forces. Two of Takemitsu's older brothers headed the Kikuchi clan after their father, but one died young and the other was forced to resign his position. By 1344, when Takemitsu's turn came to lead the clan, the Kikuchi were severely weakened and surrounded by enemies.

Takemitsu's rise

Takemitsu endeavored to bring the Kikuchi into a new era. To strengthen the Kikuchi

base of power, he carried out administrative reforms in the clan's heartland around the castle town of Waifu (now central Kikuchi). His policies included creating the Kikuchi Gozan (Five Temples) system by placing five Zen temples in Waifu under special protection. In return, these temples served the Kikuchi by performing various administrative, supervisory, and religious duties.

On the political front, Takemitsu joined forces with Prince Kanenaga (also known as Kaneyoshi; 1329–1383), the son of Emperor Godaigo, who had been sent to Kyushu to build an alliance between the Southern Court and local warrior groups. The backing of royalty allowed Takemitsu to expand his clan's territory and influence, and some 15 years after being named lord of the Kikuchi, he had assembled a powerful coalition from across Kyushu.

Conquest and collapse

In 1359, some 40,000 warriors led by Takemitsu and Prince Kanenaga defeated a force of around 60,000 Northern Court loyalists at the Battle of Chikugo River, near the present-day city of Kurume. This decisive victory allowed the Kikuchi-led alliance to take control of Kyushu and made Takemitsu perhaps the most powerful man on the island.

In the years following their victory, the Kikuchi set out to fortify their positions; however, a request from the Southern Court that the victorious Kyushu leaders visit the emperor in Yoshino (near Nara) ended in disaster. A fleet commanded by Takemitsu set sail from Kyushu but was intercepted and routed by a Northern force. The Northern side then dispatched a new general, the renowned strategist Imagawa Ryoshun (1326–1420), to deal with the threat in Kyushu.

In 1372, Ryoshun drove the Kikuchi-led forces from the Hakata region, and Takemitsu had no choice but to regroup further south. In 1373, as the Kikuchi were fortifying their positions around the Chikugo River, the site of their earlier triumph, Takemitsu suddenly died under unknown circumstances.

Left without its greatest general, the Southern force led by Prince Kanenaga was pushed ever deeper into Kyushu. Kanenaga's death in 1383 ended the Southern

resistance for good, and the Kikuchi were again confined to their ancestral lands around Waifu.

Takemitsu's tomb

Kikuchi Takemitsu was buried at Shokanji, a temple he had founded after becoming head of the clan. According to legend, the giant camphor tree towering over the tomb was planted during Takemitsu's funeral. The current headstone was erected in 1779 by wealthy Waifu residents and stands on a distinctive base in the shape of a Chinese mythological creature with the features of a turtle and a snake. This style was popularized among high-ranking samurai in Japan in the 1700s.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池武光の墓

菊池武光（1319-1373）は菊池氏の15代当主であり、一族最大の戦功者であり、同氏が地方の武士団から九州で最も強力な政治勢力へと発展した影響力のある改革者である。

苦難の始まり

武光が14歳のとき、後醍醐天皇（1288-1339）の盟友であった父・12代当主武時（1292-1333）が、博多（現在の福岡）で当時の日本を支配していた武家政権である鎌倉幕府の出先機関を襲撃して失敗し、戦死した。鎌倉幕府はわずか数ヵ月後に倒され、朝廷と武家支配の支持者が国の支配権をめぐる争う不安定な時代が始まった。

この権力闘争の結果、1336年に朝廷は2つに分裂した。菊池氏は後醍醐に忠誠を誓い、南朝は武士が支持する北朝に対抗したが、北朝軍との数度の戦いで敗れた。武光の2人の兄が父の後を継いで菊池氏を率いたが、1人は若くして亡くなり、もう1人は辞職を余儀なくされた。1344年、武光が一族を率いる番になったとき、菊池氏は弱体化し、敵に囲まれていた状態にあった。

武光の台頭

武光は菊池氏を新しい時代に導こうとした。一族の中心地であった隈府（現在の菊池市中心部）を中心に行政改革を行い、菊池勢力の基盤を固めた。彼の政策には、隈府の5つの禅寺を特別の保護下に置く菊池五山制度が含まれる。その見返りとして、これらの寺院は様々な行政、監督、宗教的任務を遂行することで菊池氏に仕えた。

政治面では、武光は後醍醐天皇の皇子である懐良（かねなが）親王（「かねよし」とも；1329-1383）と手を組んだ。懐良親王は、南朝と地元の武士団との同盟を築くために九州に派遣されていた。朝廷の支援により、武光は一族の領土と影響力を拡大し、菊池氏の当主となってから約15年後には、九州各地の武士団からなる強力な連合軍を結成した。

征服と崩壊

1359年、武光と懐良親王に率いられた約4万の武士が、現在の久留米市近郊にある筑後川の戦いで、約6万の北朝軍を破った。この決定的な勝利により、菊池同盟は九州全域を支配することになり、武光はおそらく九州で最も権力を持つ人物となった。

勝利後の数年間、菊池氏は陣地を固めようとしたが、南朝方から、勝利した九州の武士が（奈良付近の）吉野の天皇を訪問するよう要請があり、災いを招いた。武光が指揮する艦隊は九州から出航したが、北朝軍に迎撃され敗走した。また、北朝は九州の脅威に対処するため、新たな将軍として名高い戦略家、今川了俊（1326-1420）を派遣した。

了俊は1372年に菊池軍を博多周辺から追い出し、武光はさらに南で再編成するしかなかった。1373年、菊池勢が以前勝利を収めた筑後川周辺の陣地を固めていたとき、武光は突然、状況不明のまま死去した。

最強の将軍を失った、懐良親王率いる南朝軍は九州の奥深くまで攻め込まれた。1383年に懐良が死去するとその抵抗は終わりを告げ、菊池氏は再び祖先の土地である隈府周辺に閉じこもることになった。

武光の墓

菊池武光は当主となった後に創建した正観寺に葬られた。墓の上にそびえ立つ巨大なクスノキは、武光の葬儀の際に植えられたという伝説がある。現在の墓石は、1779年に隈府の裕福な住民によって建てられたもので、中国神話の亀と蛇を組み合わせた動物の形をした特徴的な台座の上に立っている。この様式は1700年代に日本の高級武士の間で広まった。

014-005

Entsuji Temple Park

菊池市

【タイトル】 円通寺の石門

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Entsuji Temple Park

Entsuji Temple Park in the village of Kyokushi, southeast of central Kikuchi, occupies the site of the former Entsuji Temple, once an influential religious institution under the protection of the Kikuchi clan. The temple is thought to have been established in Kyokushi by Kikuchi Noritaka, the founder of the Kikuchi clan, who had Entsuji relocated from Kyoto when he arrived in the Kikuchi region in 1070. In that period, Kyokushi was on the border of the Kikuchi clan's territory, and the temple may have played a role in defending the castle town of Waifu.

Entsuji grew into a major temple during the time of Kikuchi Takefusa (1245–1285), a heroic figure known for his role in repelling the Mongol invasions of Japan in 1274 and 1281. Takefusa granted Entsuji significant lands. The temple prospered until the sixteenth century, when the Kikuchi clan's influence waned, its territory was diminished, and the clan was eventually vanquished by rival warlords.

Local interest in Entsuji and Kikuchi clan history rose again in the 1800s, and the temple was restored between 1830 and 1844. The pond, temple hall, and stone gate in the present-day park were added at that time. The gate was built with red-tinged volcanic rock from Mt. Aso and is distinguished by its decorative roof with eaves that curve elegantly upwards. A rhododendron garden and a hillside trail dotted with statues of Buddhist deities are also part of the park. The deities mark shrines representing a miniature version of the famous 88-temple pilgrimage around the island of Shikoku.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

円通寺史跡公園

菊池市中心部の南東に位置する旭志の集落にある円通寺史跡公園は、かつて菊池氏の庇護を受けた有力な宗教施設であった円通寺の跡地を利用している。この寺は、菊池氏の創設者である菊池則隆が、1070年に菊池地方に到着した際に、円通寺を京都から移転させたことにより、この地に創建されたと考えられている。この時代、旭志は菊池氏の領地の境界線上にあり、円通寺は城下町である隈府の防衛に一役買っていたのかもしれない。

円通寺は、1274年と1281年の蒙古襲来を撃退したことで知られる英雄、菊池武房（1245-1285）の時代に大切な寺院に成長した。武房は円通寺に大きな寺領を与えた。寺は16世紀まで繁栄したが、菊池氏の影響力は衰え、領地は減少し、やがて敵対する武将たちによって征服された。

円通寺と菊池氏の歴史に対する地元の関心が再び高まったのは1800年代のことで、円通寺は1830年から1844年にかけて再興された。池、伽藍、そして現在の公園にある石造りの門が加えられたのはこの頃である。門は阿蘇山の赤味を帯びた火山岩で造られ、優雅な曲線を描く庇のある装飾的な屋根が特徴的である。シャクナゲ園と仏像が点在する丘陵の遊歩道も公園の一部である。この遊歩道は、有名な四国八十八ヶ所巡礼のミニチュア版である。

014-006

Tomb of Kikuchi Takeshige

菊池市

【タイトル】 菊池武重の墓

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Tomb of Kikuchi Takeshige

Kikuchi Takeshige (1307–1341) led the Kikuchi clan at a critical juncture in the clan's history and laid the foundations for its greatest period of prosperity.

Takeshige was made leader in 1333 under dramatic circumstances. After centuries of rule by the warrior class, tensions were brewing between the imperial court and the warrior-led Kamakura shogunate. The Kikuchi sided with the court. Seeking to push back against the power of the shogunate in Kyushu, Takeshige's father, Taketoki (1292–1333), assembled an alliance of local warrior groups and launched an assault on forces in Hakata (present-day Fukuoka) loyal to the shogunate. But just as the two sides were about to clash, several warlords in the alliance betrayed the Kikuchi.

Hopelessly outnumbered and facing certain death, Taketoki decided to go ahead with the attack, but sent his son home to rebuild the clan in his stead. The Kamakura shogunate was toppled only months later, and the victorious Emperor Godaigo (1288–1339) recognized Taketoki's bravery and loyalty posthumously by making Takeshige governor of Higo Province (present-day Kumamoto Prefecture).

While Takeshige remained in Kyoto to protect the emperor, he introduced reforms at home, including decision-making by consensus on key matters concerning the Kikuchi clan. This policy helped to unite the clan. Takeshige's decision to alter the clan's battlefield tactics by having warriors armed with spears attack in tight groups allowed the Kikuchi to fight several successful battles against enemies of the court.

Takeshige died of illness at 34, soon after the Kikuchi had been forced to submit to the rule of a new warrior-led government, the Ashikaga shogunate. The reforms carried out during Takeshige's leadership, however, later allowed his younger brother Takemitsu (1319–1373) to transform the clan into the most powerful warrior group in Kyushu.

Takeshige's tomb, rebuilt in 1816, stands in a small grove surrounded by rice fields between the hillside where Tofukuji Temple is located and the Kikuchi River. The base of the headstone is in the shape of a creature with the features of a turtle and a snake that was considered auspicious in Chinese mythology.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池武重の墓

菊池武重（1307-1341）は、菊池氏の歴史の重要な局面で当主となり、一族最大の繁栄の基礎を築いた。

武重は1333年、劇的な状況下で当主となった。数世紀にわたる武家支配の後、朝廷と武家主導の鎌倉幕府の間で内乱が勃発し、菊池氏は朝廷側についた。九州で幕府に打撃を与えようとした武重の父・武時（1292-1333）は、地域の武士団の同盟を結成し、博多（現在の福岡）で幕府の出先機関に攻撃を開始した。しかし、両陣営が激突しようとした矢先、同盟を結んでいた数人の武将が菊池氏を裏切った。

多勢に無勢で死と隣り合わせだった武時は、とにかく攻撃を決行することを決めたが、自分の代わりに一族を再興するために息子を故郷に送った。鎌倉幕府はわずか数ヶ月後に倒され、勝利した後醍醐天皇（1288-1339）は武時の勇気と忠誠を認め、武重を肥後国（現在の熊本県）守護とした。

武重は天皇を守るために京都に留まる一方、菊池氏に関する重要事項の合議による決定など、領内の改革を導入した。この政策は一族の結束を助けた。一方、武重は槍で武装した武士に密集して攻撃させるように一族の戦術の変更を決断し、菊池氏は朝廷の敵との戦いで成功を収めた。

武重は、菊池氏が新しい武家政権である足利幕府の支配に服することを余儀なくされた直後、34歳で病死した。しかし、武重の時代に行われた改革のお陰で、後に弟の武光（1319-1373）が一族を九州で最も強力な武士団へと変貌させることができた。

1816年に再建された武重の墓は、丘陵の東福寺と菊池川の間
の田んぼに囲まれた小さな木立の中にある。墓石の台座は中国の神話では縁起が良いとされていた、亀と蛇の特徴を組み合わせた動物の形をしている。

014-007

Kikuchi Gozan: Tofukuji Temple

菊池市

【タイトル】 輪足山東福寺

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Kikuchi Gozan: Tofukuji Temple

Tofukuji Temple looks out over the Tsuiji Ide irrigation canal and toward the Kikuchi River in the distance from a hillside perch just east of central Kikuchi. Its location holds special significance: during the medieval period, Tofukuji was the eastern temple in the Kikuchi Gozan (Five Temples), a group of Zen temples that enjoyed the protection of the Kikuchi clan in exchange for performing various administrative, supervisory, and religious duties. In the Gozan system, each temple was associated with a cardinal direction: north, south, east and west, with a central temple completing the group.

The Kikuchi Gozan were designated by Kikuchi Takemitsu (1319–1373), an influential reformer and skilled warrior under whom the clan reached the height of its power. When he selected these five temples for official status, Takemitsu was drawing on a tradition that began in China during the Southern Song dynasty (1127–1279) and was brought to Japan by the Kamakura shogunate (1185–1333). The purpose of the Kamakura Gozan system was both to promote Zen, the school of Buddhism favored by the Kamakura shoguns, and to incorporate its temples into the government bureaucracy, thereby strengthening the shogunate's control over the country and its people. The twin objectives of religious virtue and administrative benefits were also the motivations for Kikuchi Takemitsu's introduction of the Gozan system.

Tofukuji was one of the Kikuchi clan's ancestral temples, and its cemetery contains the tombs of several clan members. The temple's principal object of worship is a statue of the Thousand-Armed Kannon, which is accompanied by statues of the fierce guardian deities Fudo Myo-o and Bishamonten. The three statues have been

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池五山：東福寺

東福寺は、菊池市中心部の東に位置する丘の中腹から、築地（ついじ）井手（用水路）を見渡し、遠くに菊池川を望む。この場所には特別な意味がある：中世、東福寺は菊池五山の東の構成員であった。五山は菊池氏の様々な行政、監督、宗教的任務を果たす代わりに一族の庇護を受けた禅寺群であった。五山制度では、東西南北を代表する寺院が1つずつあり、中央の寺院とともに五山を構成していた。

菊池五山は菊池武光（1319-1373）によって指定された。武光は有力な改革者であり、一族が権力の絶頂に達した時の名士であった。彼は五つの寺を選定する際、南宋時代（1127-1279）の中国で始まり、鎌倉幕府（1185-1333）によって日本にもたらされた伝統に倣った。鎌倉五山制度の目的は、鎌倉幕府が最も好んだ仏教の宗派である禅を広めることと、その寺院を官僚機構に組み入れ、天下と民に対する幕府の統制を強化することであった。菊池武光が五山制度を導入したのも、宗教的な徳と行政的な利益という2つの目的があったからだと思える。

東福寺は菊池氏の菩提寺のひとつで、墓地には数人の同族の墓がある。東福寺の本尊は千手観音像で、不動明王と毘沙門天を従えている。この三つの像は熊本県の重要文化財に指定されている。

014-008

Kikuchi Gozan: Saifukuji Temple

菊池市

【タイトル】 無量山西福寺

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Kikuchi Gozan: Saifukuji Temple

Saifukuji Temple on the western side of the former castle town of Waifu was one of the Kikuchi Gozan (Five Temples): Zen temples that during the medieval period enjoyed the protection of the Kikuchi clan in exchange for performing various administrative, supervisory, and religious duties. Under the Gozan system, one temple guarded each of the four key points on the compass, with a central temple completing the quintet. Saifukuji was tasked with overseeing the west.

The Kikuchi Gozan were designated by Kikuchi Takemitsu (1319–1373), a reformer and successful strategist under whom the clan reached the height of its power. When he selected the Gozan, Takemitsu took after a tradition that began in China during the Southern Song dynasty (1127–1279) and was brought to Japan by the Kamakura shogunate (1185–1333). The purpose of the Kamakura Gozan system was both to promote Zen, the school of Buddhism favored by the Kamakura shoguns, and to incorporate Zen temples into the government bureaucracy, thereby strengthening the shogunate's control over the country and its people. The twin objectives of religious virtue and administrative benefits also motivated Kikuchi Takemitsu's introduction of the Gozan system.

The small cemetery behind the temple's main hall contains several tombstones and memorials thought to date back to the medieval period. Among these is a monument dedicated to Akahoshi Aritaka (d. 1333), a Kikuchi clan member who fought against the forces of Kublai Khan when the Mongol emperor attempted to invade Japan in 1274 and 1281.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池五山：西福寺

旧城下町・隈府の西側にある西福寺は、菊池五山のひとつである。これらの中世の禅寺は、さまざまな行政、監督、宗教的任務を果たす代わりに、菊池氏の保護を受けた。五山制度では、四方位をそれぞれ1つの寺が守り、中央の寺が5つの寺を完成させた。西福寺は西を守る役割を担っていた。

菊池五山は改革者であり戦略家でもあった、一族が最も繁栄した時代をもたらした菊池武光（1319-1373）によって指定された。五山を選定する際、武光は南宋時代（1127-1279）の中国で始まり、鎌倉幕府（1185-1333）によって日本にもたらされた伝統に倣った。鎌倉五山制度の目的は、幕府が最も好んだ仏教の宗派である禅を広めることと、その寺院を官僚機構に組み入れ、天下と民に対する幕府の統制を強化することであった。菊池武光が五山制度を導入したのも、宗教的な徳と行政的な利益という2つの目的があったからだと思える。

本堂の裏手にある小さな墓地には、中世のものと思われる墓石や供養塔がいくつかある。その中には、1274年と1281年にモンゴル皇帝が日本に侵攻しようとしたとき、フビライ・ハンの軍勢と戦った菊池一族の赤星有隆（1333年没）を祀る石塔がある。

014-009

Kikuchi Gozan: Nanpukuji Temple

菊池市

【タイトル】 手洗山南福寺

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Kikuchi Gozan: Nanpukuji Temple

In the medieval period, the site of Nanpukuji Temple was on the southern outskirts of the castle town of Waifu, near the Furuike fort used by the Kikuchi clan to keep watch over the region. The temple's strategic location may have played a role when Kikuchi Takemitsu (1319–1373) chose Nanpukuji as one of the Kikuchi Gozan (Five Temples), a group of Zen temples that enjoyed the protection of the Kikuchi clan in exchange for performing various administrative and religious duties. Except for one central temple, each of the Gozan oversaw one of the four points of the compass, and Nanpukuji was charged with supervision of the south.

Establishing the Gozan system was one of the many reforms Takemitsu implemented to restore the Kikuchi clan's standing after a period of political decline. By giving these five temples special status, Takemitsu was following a tradition that began in China during the Southern Song dynasty (1127–1279) and was brought to Japan by the Kamakura shogunate (1185–1333). The purpose of the Kamakura Gozan system was both to promote Zen, the school of Buddhism favored by the Kamakura shoguns, and to incorporate its temples into the government bureaucracy, thereby strengthening the shogunate's control over the country and its people. The twin objectives of religious virtue and administrative benefits were also the motivations for Takemitsu's introduction of the Gozan system to Kikuchi.

The principal object of worship at Nanpukuji today is a sixteenth-century wooden statue of Yakushi, the Buddha of medicine and healing.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池五山：南福寺

中世の南福寺は、城下町・隈府の南郊、菊池氏が周囲を見張るために築いた古池城の近くにあった。菊池武光（1319-1373）が菊池五山のひとつに南福寺を選んだのも、その立地の良さが関係していたのかもしれない。五山とは、菊池氏の庇護を受ける禅寺のことで、中央の一寺を除き、各五山が四方位の一つを統括し、南福寺は南を守る役割を担っていた。

五山制度の確立は、政治的に衰退していた菊池氏の地位を回復するために、武光が実施した数多くの改革のひとつであった。五つの寺院に特別な地位を与える際、彼は南宋時代（1127-1279）の中国で始まり、鎌倉幕府（1185-1333）によって日本にもたらされた伝統に倣った。鎌倉五山制度の目的は、鎌倉幕府が最も好んだ仏教の宗派である禅を広めることと、その寺院を官僚機構に組み込むことで、天下と民に対する幕府の統制を強化することであった。武光が菊池に五山制度を導入したのも、宗教的徳と行政的利益という二つの目的があったからだと想像できる。

現在の南福寺の本尊は16世紀の木造薬師如来像である。

014-010

Kikuchi Gozan: Hoppukuji Temple

菊池市

【タイトル】袈裟尾山北福寺

【想定媒体】Webページ

できあがった英語解説文

Kikuchi Gozan: Hoppukuji Temple

Hoppukuji Temple stands to the north of central Kikuchi, across the Hazama River from the former castle town of Waifu. The first temple on this site is thought to have been established in the ninth century, but the name Hoppukuji (“Northern Temple of Fortune”) dates to the time of Kikuchi Takemitsu (1319–1373), the fifteenth head of the Kikuchi clan.

Takemitsu is remembered as a reformer who ushered in the Kikuchi clan’s greatest period of prosperity. One of his key initiatives was designating the Kikuchi Gozan, five Zen temples that enjoyed the protection of the clan in exchange for performing various administrative, supervisory, and religious duties. One temple oversaw each of the four key points of the compass, with a central temple completing the quintet. Hoppukuji, as its name indicates, was made the guardian of the north.

The Gozan system originated in China during the Southern Song dynasty (1127–1279) and was brought to Japan by the Kamakura shogunate (1185–1333). In Japan, its purpose was both to promote Zen, the school of Buddhism favored by the Kamakura shoguns, and to incorporate Zen temples into the government bureaucracy, thereby strengthening the shogunate’s control over the country and its people. The twin objectives of religious virtue and administrative benefits also motivated Kikuchi Takemitsu’s adoption of the system.

Present-day Hoppukuji consists of a single hall, next to which stands a stone monument raised in 1335 to honor a fallen warrior of the Kikuchi clan. The memorial

is a *gorinto*, a five-part structure in which each differently shaped part symbolizes one of the five elements that are believed to constitute the universe. The shapes and their corresponding elements are a cube for earth, a sphere for water, a pyramid for fire, a hemisphere for air, and a jewel for void.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池五山：北福寺

菊池市中心部の北、かつての城下町であった隈府の対岸に、迫間川を挟んで北福寺がある。同じ敷地にある最初の寺は9世紀に創建されたと考えられているが、「北福寺」と呼ばれるようになったのは、菊池氏第15代当主の菊池武光（1319-1373）の時代からである。

武光は菊池氏最大の繁栄期をもたらした改革者として記憶されている。彼の重要なイニシアチブのひとつは、菊池五山を指定したことである。五つの禅寺は、さまざまな管理、監督、宗教的任務を果たす代わりに一族の保護を享受した。この制度では4つの寺がそれぞれ四方位の一つを守り、中央の寺が五山を完成させた。北福寺はその名の通り、北の守り神とされた。

五山制度は南宋時代（1127-1279）の中国で生まれ、鎌倉幕府（1185-1333）によって日本にもたらされた。日本では、鎌倉幕府が最も好んだ仏教の宗派である禅を広めることと、禅寺を官僚機構に組み込むことで、天下と民に対する幕府の統制を強化することが目的だった。宗教的な美徳と行政的な利益という2つの目的が、菊池武光がこの制度を採用した動機でもあったかもしれない。

現在の北福寺は一堂からなり、その隣には1335年に菊池一族の落武者を祀るために建てられた石塔がある。これは五輪塔で、宇宙を構成する五大元素を象徴する五つの部分からなる塔のことである。四角は地、球体は水、ピラミッドは火、半球は風、宝珠は空というように、それぞれの元素に対応する形をしている。

014-011

Kikuchi Gozan: Dairinji Temple

菊池市

【タイトル】 九儀山大琳寺

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Kikuchi Gozan: Dairinji Temple

Dairinji Temple was one of the most important religious institutions in the castle town of Waifu during the height of the Kikuchi clan's power. It was established by Kikuchi Takemitsu (1319–1373) in the middle of Waifu, on the site of an older temple, as part of Takemitsu's efforts to restore his clan's standing after a period of decline.

Takemitsu founded Dairinji and chose four other temples around the castle town—one in each cardinal direction—to make up the Kikuchi Gozan (Five Temples). The Kikuchi clan protected these temples, which were in turn expected to perform various administrative, supervisory, and religious duties for the clan.

In establishing the Gozan system, Takemitsu was drawing on a tradition that began in China during the Southern Song dynasty (1127–1279) and was brought to Japan by the Kamakura shogunate (1185–1333). The purpose of the Kamakura Gozan system was both to promote Zen, the school of Buddhism favored by the Kamakura shoguns, and to incorporate Zen temples into the government bureaucracy, thereby strengthening the shogunate's control over the country and its people. The twin objectives of religious virtue and administrative benefits were also what motivated Takemitsu's introduction of the Gozan system to Kikuchi.

The Kikuchi clan flourished under Takemitsu, becoming the most powerful warrior group in Kyushu, and remained a significant political and cultural force into the late 1400s. Dairinji was moved to its current site, some distance north from the original location, following a destructive typhoon in 1755.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池五山：大琳寺

大琳寺は、菊池氏全盛期の城下町・隈府で最も重要な宗教施設のひとつであった。菊池武光（1319-1373）により、衰退していた一族の地位を回復するための努力の一環として、古い寺院の跡地であった隈府の中心部に創建された。

武光は大琳寺を創建し、城下町周囲の四方位に四つの寺を選んで菊池五山とした。菊池氏はこれらの寺院を保護し、寺院は一族のために様々な管理、監督、宗教的任務を果たすことが期待された。

武光の五山指定は、南宋時代（1127-1279）の中国で始まり、鎌倉幕府（1185-1333）によって日本にもたらされた伝統に基づいている。鎌倉幕府の目的は、鎌倉幕府が最も好んだ仏教の宗派である禅を広めることと、その寺院を官僚機構に組み入れ、天下と民に対する幕府の統制を強化することであった。武光が菊池に五山制度を導入したのも、宗教的徳と行政的利益という二つの目的があったからだと想像できる。

菊池一族は武光のもとで繁栄し、九州で最も強力な武士集団となり、1400年代後半まで政治的にも文化的にも重要な力を持ち続けた。大琳寺は1755年の台風で破壊された後、元の場所から少し北に離れた現在地に移された。

014-012

Tomb of Kikuchi Noritaka

菊池市

【タイトル】 菊池則隆の墓

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Tomb of Kikuchi Noritaka

Kikuchi Noritaka was the founder of the Kikuchi clan. Most details of his life are unknown, but he is thought to have been a high-ranking court official who held a post at Dazaifu, the administrative center of Kyushu near the present-day city of Fukuoka. In 1070, Noritaka arrived in what is now the Kikuchi district, possibly to oversee an agricultural estate (*shoen*) owned by the court. Noritaka adopted the surname of Kikuchi and built a fortified compound on the river that was later given the same name, laying the foundations for the castle town of Waifu.

The Kikuchi district was a remote but thriving agricultural region, where rice cultivation flourished. Noritaka established his compound in the eastern part of these fertile plains, in a strategic location that allowed him and his descendants to control traffic on the Kikuchi River. Monopolizing trade on the river and selling crops grown on the surrounding plains allowed the Kikuchi clan to flourish, and the fort Noritaka built remained its headquarters until the late 1300s.

Noritaka's tomb stands on the site of this compound, on the grounds of which he is thought to have been buried. Constructed in 1818, it is a monument rather than an actual grave.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池則隆の墓

菊池則隆は菊池氏の祖。生涯の詳細は不明な点が多いが、九州の行政の中心地であった大宰府（現在の福岡近郊）に赴任した高官であったと考えられている。1070年、則隆は現在の菊池地方に到着し、宮廷が所有する農地「莊園」を監督することになったと考えられる。則隆は菊池姓を名乗り、のちに菊池川と呼ばれるようになった川沿いに居館を築き、城下町・隈府の基礎を築いた。

菊池地方は僻地ではあったが、稲作が盛んな農業地帯であった。則隆はこの肥沃な平野の東部に屋敷を構え、菊池川の交通を支配する戦略的な立地を確保した。川での取引を独占し、周辺の平野で栽培された作物を売ることによって菊池氏は繁栄し、則隆が築いた屋敷は1300年代後半まで一族の本拠地として使われた。

則隆の墓はこの屋敷の敷地だった場所にある。1818年に建設された現在の墓は、実際に遺骨が納められているのではなく、供養塔であると考えられる。

014-013

Ankokuji Temple

菊池市

【タイトル】安国寺堂宇

【想定媒体】Webページ

できあがった英語解説文

Ankokuji Temple

Ankokuji Temple is associated with some of the most difficult times in the history of the Kikuchi clan. The temple was established on the orders of Ashikaga Takauji (1305–1358), the founder and first shogun of the Ashikaga shogunate. In 1336, Takauji had emerged as the winner in a conflict between the imperial court and proponents of warrior rule, a civil war in which the Kikuchi clan had sided with the court but suffered a crushing defeat by Takauji’s forces.

In 1339, with his rule secure, Takauji ordered a “temple for the Peace of the Country” (Ankokuji) to be built in every province to comfort the souls of his vanquished rivals and all those who had died in the wars that had followed the fall of the Kamakura shogunate, the previous warrior-led government. In the Kikuchi-governed Higo Province (present-day Kumamoto Prefecture), an existing temple called Jushoji was chosen and renamed Ankokuji.

More than a century later, the temple became the site of another tragedy for the Kikuchi clan. Kikuchi Masataka (1491–1509), a former leader of the clan who had been deposed by his retainers, attempted to retake his rightful position but was defeated in battle. Masataka retreated to Ankokuji, where he committed ritual suicide before the temple was burned down by his enemies.

Ankokuji was rebuilt in 1515, and its main hall—the only building on the grounds today—dates to that year. The tomb of Kikuchi Masataka is located at the foot of a hill some distance behind the hall.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

安国寺

安国寺は菊池氏の歴史の中で最も困難な時代のいくつかに関連している。この寺は足利幕府の創始者であり初代将軍である足利尊氏（1305-1358）の命により創建された。1336年、尊氏は朝廷と武家支配の推進派との対立で勝者となった。この内戦で菊池氏は朝廷側についたが、尊氏の軍に大敗を喫した。

1339年、尊氏は自らの支配を確実なものとした上で、敗れたライバルたちや鎌倉幕府滅亡後の戦乱で亡くなった人々の霊を慰めるため、すべての国に安国寺を建立するよう命じた。菊池氏が治める肥後国（現在の熊本県）では、既存の寺である寿勝寺が選ばれ、安国寺と改名された。

それから100年以上後、この寺は菊池一族にとって新たな悲劇の舞台となった。家臣たちによって失脚させられた元当主の菊池政隆（1491-1509）は地位を奪還しようとしたが、戦いに敗れた。政隆は安国寺に退き、寺が敵に焼かれる前に自害した。

安国寺は1515年に再建され、現在境内にある唯一の建物である本堂はその年のものである。菊池政隆の墓は本堂から少し離れた裏山のふもとにある。

014-014

Tomb of Kikuchi Masataka

菊池市

【タイトル】 菊池政隆公墓

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Tomb of Kikuchi Masataka

The short life of Kikuchi Masataka (1491–1509) illustrates the weakened state of the Kikuchi clan in the 1500s. By Masataka’s time, several warlord-led families within the clan had gained enough power and influence to challenge the leadership directly. In 1505, the year after Masataka had been made head of the clan at the age of 13, his generals overthrew him and seized control, installing a local strongman named Aso Korenaga as clan leader.

Masataka and those who remained loyal to him left the castle town of Waifu to bide their time and raise an army capable of retaking command of the Kikuchi. Their attempt to do so in 1509 proved unsuccessful, and Masataka’s remaining force of 200 warriors retreated to the area around Ankokuji Temple. There the sides clashed again, and the defeated Masataka retreated to Ankokuji, where he committed suicide before the temple was burned down by Aso Korenaga’s warriors.

Internal conflicts and threats from rival warlords continued to weaken the Kikuchi in the decades following Masataka’s fall. The clan gradually lost its lands, and was then vanquished entirely in the mid-1500s.

Kikuchi Masataka’s tomb stands behind Ankokuji Temple. The current headstone was erected at some point during the Edo period (1603–1867), on a base in the shape of a *kifu*, a Chinese mythological creature with the features of a turtle and a snake that was considered auspicious. This style was popularized in Japan during the Edo period and was used on the graves of several Kikuchi lords when they were rebuilt in the 1700s

and 1800s.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池政隆の墓

菊池政隆（1491-1509）の短い生涯は、1500年代の菊池氏の弱体化を物語っている。政隆の時代までに、一族内のいくつかの武将が率いる集団が、直接指導者に異議を唱えるほどの権力と影響力を得ていた。政隆が13歳で当主になった翌年の1505年、家臣たちは彼を追放して実権を掌握し、地域の有力者である阿蘇家の阿蘇惟長を当主に据えた。

政隆と彼に忠誠を誓った者たちは城下町の隈府を去り、時を待って菊池氏の指揮権を取り戻すための軍を起こした。1509年、その試みは失敗に終わり、政隆の残存兵200人は安国寺周辺に退却した。そこで両者は再び衝突し、敗れた政隆は安国寺にこもり、阿蘇惟長の軍勢によって寺が焼き払われる前に自害した。

政隆が没落してからの数十年間、内紛や敵対する武将からの脅威は菊池氏の弱体化を続けた。一族は次第に領地を失い、1500年代半ばには完全に征服された。

菊池政隆の墓は安国寺の裏にある。現在の墓石は、江戸時代（1603年～1867年）のある時期に、中国神話で縁起が良いとされた亀と蛇の形をした亀趺（きふ）の台座の上に立てられたものである。この様式は江戸時代に日本で普及し、1700年代から1800年代にかけて菊池当主の墓が再建された際にも使用された。

014-015

Tombs of Kikuchi Tamekuni and Shigetomo

菊池市

【タイトル】 菊池為邦・重朝の墓

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Tombs of Kikuchi Tamekuni and Shigetomo

The tombs of Kikuchi Tamekuni (1430–1488) and his son Shigetomo (1449–1493) in the cemetery of Gyokushoji Temple stand as a reminder of a time when the Kikuchi clan successfully shifted its focus from political to cultural objectives.

When Tamekuni was made leader at age 15 after the death of his father, the Kikuchi clan's days of glory on the battlefield were long over, and even retaining its territory was proving challenging. Tamekuni chose to direct the clan's resources toward supporting local culture and providing education for samurai and townspeople, encouraging their intellectual and spiritual pursuits.

At age 36, Tamekuni retired as clan leader in favor of Shigetomo and dedicated himself to studying the *Blue Cliff Record*, a Chinese Chan (Zen) Buddhist text that was particularly influential among Japanese Zen scholars at the time. He also built Gyokushoji and planned for his own burial at the temple after his death.

Shigetomo continued his father's efforts to cultivate culture, and under his leadership Kikuchi became a regional hub for Buddhist and Confucian scholarship, where tea culture also flourished. Shigetomo built a hall dedicated to Confucius and commissioned images of the sage and his disciples to be placed in the building. A center of learning sprang up around this hall, and scholars traveled from as far away as Kyoto to discuss philosophy and religion in Kikuchi.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池為邦・重朝の墓

玉祥寺の墓地にある菊池為邦（1430-1488）とその子重朝（1449-1493）の墓は、菊池氏が政治的な目的から文化の振興へと首尾よく重心を移した時代の名残である。

父の死後、為邦が15歳で当主となったとき、菊池氏の戦場での栄光の日々はとうに終わりを告げ、残された領土を維持することさえ困難になっていた。為邦は、一族の力を地方文化の支援に向け、武士や町人に教育を施し、彼らの知的、精神的な探求を奨励することを選んだ。

36歳のとき、為邦は重朝に代わって当主を退き、当時日本の禅学者の間で特に大きな影響力を持っていた中国の禅宗書『碧巖録』の研究に専念した。また、玉祥寺を自信の菩提寺として建立した。

重朝は父の文化育成の努力を引き継ぎ、彼の指導の下、菊池は仏教や儒教の学問の中心地となり、茶の文化も花開いた。重朝は孔子を祀る堂を建て、孔子とその弟子たちの像を安置するよう命じた。この堂を中心に学問の中心地が形成され、学者たちは遠く京都から菊池に集まり、哲学や宗教について議論した。

014-016

Gyokushoji Temple

菊池市

【タイトル】 江月山玉祥寺

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Gyokushoji Temple

Gyokushoji Temple in northern Kikuchi is associated with a period of cultural blossoming that began under the rule of Kikuchi Tamekuni (1430–1488), the Kikuchi clan leader who founded the Soto Zen temple in 1452. With his clan’s political and martial strength in decline, Tamekuni turned to supporting local culture and providing education for samurai and townspeople, encouraging their intellectual and spiritual pursuits. Under the leadership of Tamekuni and his son Shigetomo (1449–1493), Kikuchi became a regional hub for Buddhist and Confucian scholarship, where poetry and tea culture also flourished.

Gyokushoji was built by Tamekuni to house his tomb, which is in the temple cemetery next to Shigetomo’s grave. The temple’s halls and other structures have been lost to fire and rebuilt several times, but a bronze temple bell that now hangs in the current main hall has survived through the centuries. Cast in 1496, it is presently used as a *densho*, a bell rung to announce worship services and during prayer. In the main hall, along the walls around the central altar sit 16 statues of *rakan* (arhats), or Buddhist devotees who have attained spiritual enlightenment. The temple’s principal deity is the bodhisattva Daiseishi, who represents wisdom.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

玉祥寺

菊池市北部にある玉祥寺は、1452年にこの曹洞宗の寺院を創建した菊池為邦（1430-1488）の統治下で始まった文化開花の時代と関連している。為邦は、一族の政治的な力が衰

退する中、地方文化の支援に目を向け、武士や町人に教育を施し、彼らの知的・精神的探求を奨励した。為邦とその息子重朝（1449-1493）の指導の下、菊池は仏教や儒教の学問の中心地となり、詩歌や茶の文化も花開いた。

玉祥寺は為邦によって菩提寺として建立され、その墓地には重朝の墓の隣に為邦の墓がある。寺のお堂やその他の建造物は火災で失われ、何度か再建されたが、現在の本堂に掲げられている銅製の梵鐘は、何世紀もの間、現存している。1496年に鑄造されたこの鐘は、現在、礼拝のお知らせや祈祷の合図のためなどに鳴らされる「殿鐘」として使われている。本堂の中央祭壇を囲む壁には、悟りを開いた16体の羅漢像が安置されている。寺の本尊は、知恵を象徴する大勢至菩薩である。

014-017

Tomb of Kikuchi Mochitomo

菊池市

【タイトル】 菊池持朝の墓

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Tomb of Kikuchi Mochitomo

Kikuchi Mochitomo (1409–1446), the nineteenth head of the Kikuchi clan, is remembered as a skilled diplomat who improved the clan’s relationships with its former enemies, the Ashikaga shoguns.

When Mochitomo became leader in 1431, around four decades had passed since the warrior-led Ashikaga shogunate had subjugated the Kikuchi-backed Southern Court, ending a civil conflict that had torn the imperial court in two and divided the warrior class. The clan’s political influence and martial power had diminished greatly, although the shogunate had allowed the Kikuchi to retain control of Higo Province (now Kumamoto Prefecture) after their defeat.

In Kyushu, the Kikuchi were engaged in local conflicts against the warlord-led Ouchi and Otomo families. When a succession dispute arose within the Otomo family, the side that had been denied leadership of the family allied with the Kikuchi. The Ashikaga shogunate was also unhappy with the Otomo, and Kikuchi Mochitomo struck a deal with the shogunate: the government would support a Kikuchi-led overthrow of the current Otomo warlord and reward Mochitomo with governorship of Chikugo Province (the southern part of today’s Fukuoka Prefecture), formerly held by the Otomo.

Mochitomo’s plan worked, and he governed both Higo and Chikugo until his death in 1446. The Otomo, however, would have their revenge half a century later, when they overwhelmed the Kikuchi and took over their ancestral homeland of Higo. Kikuchi

Mochitomo's tomb is on the grounds of Kozenji Temple.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池持朝の墓

菊池氏の第19代当主である菊池持朝（1409-1446）は、かつての敵であった足利将軍家との関係を改善した有能な外交官として記憶されている。

持朝が当主となった1431年、武家主導の足利幕府が菊池氏が支持する南朝を服従させ、朝廷を二分し武家階級を分裂させた内紛に終止符を打ってから約40年が経過していた。菊池氏の政治的影響力と武力は大きく低下したが、幕府は敗戦後、菊池氏に肥後国（現在の熊本県）の守護職を維持させた。

九州では、菊池氏は武将を中心とする大内氏や大友氏と対立していた。大友家の後継者争いが起こると、主導権を奪われた側が菊池氏に味方した。足利幕府もまた大友家に不満を抱いており、菊池持朝は幕府と取引をした。幕府は菊池主導の大友家打倒を支持し、持朝に大友家が保有する筑後国（現在の福岡県南部）の守護職を与えるというものだった。

持朝の計画は成功し、1446年に亡くなるまで肥後と筑後の両国の守護を務めた。しかしその半世紀後、大友氏は菊池氏を圧倒し、菊池氏の先祖伝来の地である肥後を占領し、復讐を果たすことになる。菊池持朝の墓は光善寺の境内にある。

014-018

Site of Koshido Hall

菊池市

【タイトル】 孔子堂跡

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Site of Koshido Hall

The Koshido was a hall dedicated to the Chinese philosopher Confucius that, during a time of cultural flourishing in Kikuchi, became a hub for Confucian and Buddhist scholarship as well as intellectual pursuits in general.

The hall was built in 1472 by Kikuchi Shigetomo (1449–1493), the head of the Kikuchi clan. Like his father and predecessor, Tamekuni (1430–1488), Shigetomo devoted himself to supporting local culture and providing education for samurai and townspeople. As a result, Kikuchi experienced a cultural golden age, when pastimes such as poetry and tea culture blossomed.

Koshido Hall was at the center of these currents. It is thought to have been a temple-like complex with several buildings, where members of the Kikuchi clan studied and scholars from as far away as Kyoto came to lecture and conduct discussions. One of these men of letters was the Buddhist priest Keian Genju (1427–1508), a leading authority on Zen and the Chinese classics who had spent several years studying at the Ming court in China.

Images of Confucius and his disciples held a place of honor inside the hall, which was also used for ceremonial rites to honor the Chinese sage. Most likely, the images were moved and reused after the Koshido was dismantled after the fall of the Kikuchi clan in the mid-1500s.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

孔子堂跡

孔子堂は、中国の哲学者である孔子を祀った堂で、菊池の文化が隆盛を極めていた時代には、儒学や仏教の学問だけでなく、知的探求全般の拠点となっていた。

堂は1472年、菊池当主の重朝（1449-1493）によって建てられた。重朝は、父であり先代の為邦（1430-1488）と同様、武士や町人への教育や地域文化の支援に力を注いだ。その結果、菊池は文化の黄金時代を迎え、詩歌や茶の湯などの娯楽が花開いた。

その流れの中心にあったのが孔子堂である。お寺に似た、いくつかの建物からなつたこの場所は菊池一族の学問所となり、遠く京都からも学者が集まり、講義や討論が行われた。禅と中国古典の権威で、中国の明の宮廷に数年間留学していた桂庵玄樹（1427-1508）もその一人である。

堂内には孔子とその弟子たちの像が安置され、孔子を祀る儀式にも使われた。これらの像は、1500年代半ばに菊池氏が滅亡し、孔子堂が解体された後、別の場所に移されて再利用されたと考えられている。

014-019

Tomb of Kumabe Tadanobu

菊池市

【タイトル】隈部忠直の墓

【想定媒体】Webページ

できあがった英語解説文

Tomb of Kumabe Tadanobu

Kumabe Tadanobu (d. 1494) was a samurai who served three generations of Kikuchi lords and played an important role in supporting their efforts to invigorate local culture. The Kumabe were one of the Kikuchi clan's three main retainer families. They had fought in support of the clan in numerous battles over the centuries, but Tadanobu made his greatest contribution in a time of peace. He was instrumental in building the Koshido, a hall dedicated to Confucius that, after its establishment in 1472, became a center for learning and culture, attracting scholars from as far away as Kyoto.

Tadanobu's influence in his time is underlined by the fact that he is the only Kikuchi retainer whose tomb has endured intact to the present. His tombstone is visible through a window from the small temple next to the grave. This shrine-like structure honors Tadanobu as a patron of scholarship and attracts visitors who come to pray for good luck before an important exam or other academic challenge.

記解説文の仮訳（日本語訳）

隈部忠直の墓

隈部忠直（1494年没）は、菊池当主三代に仕えた武士で、当主の地域文化活性化のために重要な役割を果たした。隈部氏は菊池氏の三大家老の一人で、何世紀にもわたって一族の一員として数々の戦いで戦ってきたが、忠直が最も貢献したのは平和な時代であった。彼は孔子を祀る孔子堂の建設に尽力し、1472年の設立後は学問と文化の中心地となり、遠く京都からも学者が集まるようになった。

忠直の影響力は、菊池家臣の中で唯一、墓が現在もそのまま残っているという事実からも明らかだ。彼の墓石は、墓の隣にある小さな寺から窓越しに見える。この神社にも似た建物は忠直を学問の神様として祀っており、重要な試験やその他の学問的挑戦の前に祈願する参拝者を集めている。

014-020

Shogoji Temple

菊池市

【タイトル】 鳳儀山聖護寺

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Shogoji Temple

Shogoji is a Soto Zen temple north of central Kikuchi that for a short time in the 1300s functioned as the spiritual anchor of the Kikuchi clan. The temple was established in 1338 by Kikuchi Takeshige (1307–1341), the thirteenth head of the clan, who was a devout practitioner of Zen.

Takeshige invited the Zen priest Daichi (1290–1367), a native of Higo Province (now Kumamoto Prefecture) who had studied in China for a decade, to serve as head priest of Shogoji. Daichi advised the lords of Kikuchi on spiritual matters at this secluded sanctuary high in the mountains, which took an entire day to reach on foot from the castle town of Waifu. He also tutored other members of the clan, including Takeshige's younger brother Takemitsu (1319–1373).

After Takemitsu assumed leadership of the Kikuchi in the mid-1340s, he chose to build a new temple called Shokanji in the castle town. He paid less attention to Shogoji, and Daichi eventually moved away. The temple in the mountains fell into disrepair and lay abandoned for more than 500 years, until a Zen priest from Nagasaki rebuilt it in the 1940s.

記解説文の仮訳（日本語訳）

聖護寺

聖護寺は菊池市中心部から北に位置する曹洞宗の寺院で、1300年代の一時期、菊池氏の精

神的な拠り所として機能していた。この寺は1338年、禅の信奉者であった第13代当主菊池武重（1307-1341）によって創建された。

武重は、肥後国（現熊本県）出身で10年間中国に留学していた禅僧、大智（1290-1367）を聖護寺の住職に招いた。大智は、城下町の隈府から徒歩で丸一日かかるこの山奥の聖地で、菊池当主の精神的な疑問に助言した。また、武重の弟の武光（1319-1373）を含む他の一族の指導も行った。

武光は1340年代半ばに菊池氏の主導権を握ると、城下町に正観寺という新しい寺を建てることにした。聖護寺にはあまり関心を示さなくなり、大智はやがて離れていった。山中の寺は荒廃し、1940年代に長崎の禅僧が再建するまで、500年以上も廃寺となっていた。

014-021

Site of Kameo Fort

菊池市

【タイトル】 亀尾城跡

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Site of Kameo Fort

The hilltop Kameo Fort southwest of central Kikuchi was one of more than a dozen medieval fortresses built by the Kikuchi clan to protect the castle town of Waifu. This fort occupied a strategic location on high ground between the Kikuchi River to the north and the Sakota River to the south. What the fort looked like in medieval times is unknown, but it is thought to have functioned mainly as a refuge and was probably not manned at all times.

In the 1370s, when the Kikuchi clan was fighting against the Ashikaga shogunate, the warrior-led central government, Kameo Fort fell into the hands of the Ashikaga general Imagawa Ryoshun (1326–1420). Ryoshun and his son are said to have amassed a force of more than 10,000 warriors at the fort to prepare for a final assault on the Kikuchi.

The site of Kameo Fort is now a park with views over the Kikuchi Plain toward the center of Kikuchi. Part of a dry moat and the site where the main compound once stood have been reconstructed. A Shinto shrine is located nearby.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

亀尾城跡

菊池市中心部の南西に位置する丘の上の亀尾城は、菊池氏が城下町・隈府を守るために築いた十数か所の中世城郭のひとつだった。この城は、北は菊池川、南は迫田川に挟まれた高台の要

衝にあった。中世の城がどのようなものであったかは不明だが、主に避難所として機能し、常時人がいたわけではなかったと思われる。

1370年代、菊池氏が武家主導の中央政権である足利幕府と戦っていた頃、亀尾城は足利軍を率いた今川了俊（1326-1420）の手に落ちた。了俊とその息子は菊池氏への最後の攻撃に備え、城に1万人以上の武士を駐在させたと言われている。

亀尾城跡は現在公園として整備され、菊池平野や菊池市中心部を見渡すことができる。空堀の一部と城の本丸があったと思われる区画が復元された。近くには神社もある。

014-022

Hekiganji Temple

菊池市

【タイトル】 碧巖寺

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Hekiganji Temple

Hekiganji (“Blue Cliff Temple”) is a Soto Zen temple named after the *Blue Cliff Record*, a twelfth-century Chinese Chan (Zen) Buddhist text. This book changed the life of Kikuchi Tamekuni (1430–1488), the twentieth head of the Kikuchi clan, who is remembered for bringing about a blossoming of intellectual life in Kikuchi. He was an eager advocate of local culture and encouraged the scholarly and spiritual pursuits of samurai and townspeople.

Tamekuni retired as clan leader at the age of 36 and withdrew to a hermitage at the foot of a hill outside the castle town of Waifu. There he dedicated himself to his true passion: studying the *Blue Cliff Record*, a collection of koan (stories, statements, and questions) that was particularly influential among Japanese Zen scholars at the time. After Tamekuni’s death, his retreat was turned into the Zen temple that became Hekiganji.

The temple grounds include a rock garden with a pond, reconstructed in 1996 in a style popular during the time of Tamekuni, as well as a monument to him that serves as a secondary tomb. Tamekuni’s main grave is at Gyokushoji Temple in northern Kikuchi.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

碧巖寺

碧巖寺（へきがんじ）は曹洞宗の寺院で、12世紀に書かれた中国の禅宗の語録『碧巖録』にち

なんで名づけられた。この書物は、菊池氏の第20代当主であった菊池為邦（1430-1488）の人生を大きく変えた。彼は地域文化の熱心な支持者であり、武士や町民の学問や精神的な探求を奨励した。

為邦は36歳で当主を引退し、城下町・隈府から離れた丘のふもとにある庵に引きこもった。そこで彼は、当時日本の禅学者の間で特に大きな影響力を持っていた公案（物語、問答、質問）の語録である『碧巖録』の研究に専念した。為邦の死後、彼の隠居所は碧巖寺となる禅寺となった。

境内には、1996年に為邦の時代に流行した様式で再建された池のある石庭や、第二の墓としての為邦の供養塔がある。為邦の本墓は菊池市北部の玉祥寺にある。

014-023

Site of Masunaga Fort

菊池市

【タイトル】 増永城跡

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Site of Masunaga Fort

Masunaga Fort was a medieval stronghold on the Hazama River west of the castle town of Waifu (now central Kikuchi). The fort was established in the twelfth century by Kikuchi Masataka, one of the sons of Kikuchi clan patriarch Noritaka, who built a compound with earthen walls on the site and took the surname Saigo (“Western Outpost”) after the location.

The fort is thought to have played a key role in overseeing traffic on the river and storing crops and other goods awaiting transport from Kikuchi, a thriving agricultural region. It was part of a network of fortresses built by the Kikuchi clan to protect Waifu. The river flooded frequently, however, which made the fort difficult to maintain.

All that remains of Masunaga Fort today is the site of an old well and some earthen fortifications. A memorial to Saigo Takamori (1828–1877) is also located here. Saigo was a leader in the Meiji Restoration of 1868, which ushered in the modernization of Japan. Local legend holds that the Saigo of Kikuchi were Takamori’s ancestors.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

増永城跡

増永城は城下町・隈府（現・菊池市中心部）の西、迫間川沿いにあった中世の城郭だった。菊池一族の創設者・則隆の子、菊池政隆が12世紀にこの地に土塁に囲まれた居館を築き、隈府との位置関係から西郷姓を名乗った。

城はその立地条件から、河川の交通を監視し、農業の盛んな菊池からの輸送を待つ農作物や物資を保管する重要な役割を果たしたと考えられている。菊池氏が隈府を守るために築いた要塞網の一部でもあった。しかし、川が頻繁に氾濫し、城を維持するのが大変だったのだ。

現在は、古い井戸跡と土塁の一部が残るのみである。また、城跡には日本の近代化のきっかけとなった1868年の明治維新の指導者、西郷隆盛（1828-1877）の記念碑がある。地元の伝承によれば、菊池の西郷は隆盛の先祖だという。

014-024

Site of Utena Fort

菊池市

【タイトル】 台城跡

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

Site of Utena Fort

Utena Fort, also known as Mizushima Fort, was one of more than a dozen medieval strongholds built by the Kikuchi clan to defend the castle town of Waifu. The fortress faced west on the edge of a plateau around 5 kilometers west of the clan's castle and had an unimpeded view far downstream along the Kikuchi River. This strategic location, along with the additional protection provided by the Uchida River directly beneath the hill, made Utena Fort extremely difficult to invade.

The most famous battle in the fort's history took place in 1375, when the Kikuchi clan was fighting against the Ashikaga shogunate, the warrior-led central government. The Kikuchi, who only a few years prior had controlled all of Kyushu, had been pushed back to their ancestral lands after successive setbacks at the hands of the Ashikaga general Imagawa Ryoshun (1326–1420).

Seeking to end Kikuchi resistance for good, Ryoshun brought tens of thousands of warriors to the Battle of Mizushima, but was defeated by a force of 2,000 under Kikuchi Taketomo (1363–1407), the newly appointed clan leader who was only 12 years old at the time. Taketomo's victory delayed Ryoshun's conquest of Kikuchi, which he nonetheless completed six years later.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

台城跡

水島城とも呼ばれる台城は、菊池一族が隈府の城下町を守るために築いた十数か所の中世城郭のひとつだった。菊池氏の居城から西に5キロほど離れた台地の端に位置し、西に面していたため、菊池川のはるか下流を一望することができた。この戦略的な立地に加え、丘の真下には内田川が流れていたため、台城の侵攻は困難を極めた。

城の歴史の中で最も有名な戦いは、1375年に菊池氏が武家主導の中央政権・足利幕府と戦ったときに起こった。ほんの数年前まで九州全土を支配していた菊池氏は、足利軍の将軍・今川了俊（1326-1420）の手によって次々と挫折し、先祖代々の土地に押し戻されていた。

菊池の抵抗に終止符を打つため、了俊は水島の戦いに数万の兵を引き連れたが、当時まだ12歳だった新任の当主、菊池武朝（1363-1407）の率いる約2,000人の軍勢に敗れた。武朝の勝利は了俊の菊池征伐を遅らせたが、6年後のその目的はついに果たされた。

014-025

The Kikuchi Clan

菊池市

【タイトル】 菊池一族とは

【想定媒体】 Webページ

できあがった英語解説文

The Kikuchi Clan

The Kikuchi clan was an influential samurai group that played a prominent political role in Kyushu throughout Japan's medieval period. At one point the Kikuchi rose to hold sway over events with countrywide consequences. The clan's headquarters was the castle town of Waifu, today the city of Kikuchi, where the legacy of their 500-year history remains evident even now, centuries after the Kikuchi were vanquished by rival warlords.

Where did the Kikuchi come from?

Many details of how and when the Kikuchi clan was established have been lost to history, but its founding has traditionally been dated to 1070. In that year, Noritaka, a high-ranking court official who held a post at Dazaifu, the administrative center of Kyushu near the present-day city of Fukuoka, is thought to have arrived in what is now the Kikuchi district. Noritaka adopted the surname of Kikuchi and built a fortified compound on the river that was later given the same name, laying the foundations for the castle town of Waifu.

The Kikuchi district was a remote but thriving agricultural region, where rice cultivation flourished. Noritaka and his descendants acquired great wealth by monopolizing trade on the Kikuchi River and selling crops grown on the surrounding plains, which they developed into some of the most productive farmland in the country.

Out of favor

In the late twelfth century, some 100 years after Noritaka's time, the Kikuchi were

drawn into a conflict that ushered in a new era in Japanese history. In the Genpei War (1180–1185), the Taira and Minamoto warrior clans, which had long vied for dominance over the imperial court, fought for control over Japan. Samurai families throughout the country were compelled to choose sides. The Kikuchi initially favored the Minamoto, but in the final stages of the war allied themselves with the beleaguered Taira, whose forces were composed mainly of warriors from Kyushu.

The Genpei War was won by the Minamoto, who subsequently established the Kamakura shogunate, the first warrior-controlled government to rule Japan. Based in the eastern part of the country and backed by forces from the same area, the new shogunate regarded the Kikuchi and other Kyushu-based clans, its former enemies, with suspicion.

The distrust between the Kikuchi and the shogunate lingered, and was exacerbated in the late thirteenth century. After subjugating Korea, the Mongol emperor Kublai Khan launched invasions of Japan in 1274 and 1281. The samurai set factional loyalties aside to repel the attackers, and the Kikuchi fought for the shogunate in several battles that helped the Japanese defeat the Mongols. Kikuchi Takefusa (1245–1285), the head of the clan at the time, was recognized for his battlefield heroics. After their victory over the invaders, the Kikuchi felt slighted by the shogunate's failure to reward them with the spoils of war, something expected by warriors who had served with distinction.

Into the spotlight

In the early fourteenth century, the Kamakura shogunate's hold on the country grew tenuous. While the shogunate expended resources on defending Japan against foreign foes, it faced difficulties controlling local warlords and the court. The most serious challenge to the shogunate came from the latter, as Emperor Godaigo (1288–1339) sensed an opportunity to wrest power from the warrior class.

Godaigo allied himself with warrior families discontented with Kamakura, including the Kikuchi, and in 1331 initiated a rebellion against the shogunate. In 1333, the Kikuchi banded together with several other Kyushu-based warrior groups to attack Hakata (present-day Fukuoka), the shogunate's main stronghold on the island. Just as

the assault was to go ahead, however, the Kikuchi were betrayed by local warriors in the alliance. Outnumbered and facing certain death, the clan's leader, Kikuchi Taketoki (1292–1333), ordered his son Takeshige (1307–1341) to return to Kikuchi before staging a desperate charge on the shogunate's forces.

Taketoki and his men were killed, but their cause prevailed. Mere months after the failed Kikuchi attack on Hakata, Kamakura fell to forces loyal to Godaigo and the shogunate was abolished. The victorious emperor rewarded the Kikuchi for their loyal service by making Takeshige governor (*shugo*) of Higo Province (present-day Kumamoto Prefecture), a prestigious post the Kikuchi would hold for nearly two centuries.

Loyalists of the Southern Court

Emperor Godaigo's efforts to restore direct rule by the court proved short-lived. His reforms sought a return to the aristocratic social and political system of the pre-Kamakura period, but this policy antagonized large swathes of the warrior class. In 1336, only three years after the fall of the Kamakura shogunate, former Kamakura general and one-time Godaigo ally Ashikaga Takauji (1305–1358) seized Kyoto and founded a warrior government of his own, the Ashikaga shogunate.

Takauji installed a new emperor to do his bidding and Godaigo fled the capital, setting up a rival court in Yoshino near present-day Nara, south of Kyoto. These events initiated the Nanbokucho or Northern and Southern Courts period, when the rival courts fought for control of the country.

The Kikuchi clan, like many other warrior families in Kyushu, remained loyal to the Southern Court. Emperor Godaigo viewed his supporters in Kyushu as key to retaking the country, and sent his young son, Prince Kanenaga (1329–1383; known as Kaneyoshi outside of Kikuchi), to the island to strengthen existing alliances and cultivate new ones.

Kanenaga arrived in Waifu in 1348 and met with the castle lord, Kikuchi Takemitsu (1319–1373). Their encounter marked the beginning of a partnership that ushered in the Kikuchi clan's greatest period of prosperity. Over the following decade, Kanenaga

and Takemitsu built up a formidable alliance of Kyushu-based warrior families that pushed back Northern Court loyalists throughout the island. These gains culminated in the famous Battle of Chikugo River in 1359, in which the Kikuchi decisively defeated a larger Northern force. By the end of the next year, Southern Court supporters led by the Kikuchi controlled all of Kyushu, and the alliance's headquarters was moved to Dazaifu, from where the Kikuchi patriarch Noritaka had set out some 300 years earlier.

In the years following their victory, the Kikuchi set out to fortify their positions; however, a request from the Southern Court that the victorious Kyushu samurai visit the emperor in Yoshino ended in disaster. A fleet commanded by Kikuchi Takemitsu set sail from Kyushu but was intercepted and routed by a Northern force, forcing Takemitsu to retreat to Dazaifu. The Ashikaga shogunate then dispatched a new general, the renowned strategist Imagawa Ryoshun (1326–1420), to deal with the threat in Kyushu.

Ryoshun drove the Kikuchi-led Southern force out of Dazaifu in 1372, and Takemitsu's death the following year dealt the Kikuchi another blow. Left without its greatest general, the Southern force led by Prince Kanenaga was pushed ever deeper into Kyushu. Kanenaga's death in 1383 ended their resistance for good, and the Kikuchi were again confined to ancestral lands around Waifu.

A cultural turn

The struggling Southern Court was defeated for good in 1392. Confident in victory, the Ashikaga shogunate allowed the weakened Kikuchi to retain control of Higo Province, but the clan's days of conquest and glory were over.

The lords of Waifu managed to improve their relationship with the shogunate, at one point winning favor to the extent that the head of the Kikuchi clan was appointed governor of both Higo and the adjacent Chikugo Province (the southern part of today's Fukuoka Prefecture). But rather than harbor any political ambitions, the Kikuchi turned their attention to cultural goals. Kikuchi Tamekuni (1430–1488), the twentieth head of the clan, and his son Shigetomo (1449–1493) expanded educational opportunities for samurai and townspeople and encouraged their intellectual and spiritual pursuits. Under their leadership, Kikuchi became a regional center for

Buddhist and Confucian scholarship.

Decline and fall

The Kikuchi clan's peaceful pursuits were upended by the country's slide into widespread regional conflict among rival warlords. By the late fifteenth century the Ashikaga shogunate, weakened by the rise of local warlord-led families, was losing control. The same dynamic, albeit on a smaller scale, was at work in Kikuchi. Retainer families that had long served the Kikuchi clan outgrew their masters and challenged their authority.

In 1504, these rebellious samurai overthrew the Kikuchi lord and replaced him with the head of one of the retainer families. In the mid-1500s, the Kikuchi lost their remaining lands to the rival Otomo clan. In 1554, the death of Kikuchi Yoshitake, the last head of the clan, ended the Kikuchi lineage.

New appreciation

In the 1800s, rising interest in local history and past glories returned the Kikuchi clan to the spotlight. Merchants, landowners, and other wealthy residents of Kikuchi financed the restoration and rebuilding of monuments and tombs with a connection to the clan.

New appreciation of the Kikuchi legacy on a national scale followed the Meiji Restoration of 1868, which returned political control to the emperor, ending almost seven centuries of warrior rule. The new government under Emperor Meiji (1852–1912) maintained that the emperors of the fourteenth-century Southern Court had been the legitimate holders of the court titles, and the Kikuchi clan, allies of the Southern Court, were held up as an example of the kind of loyalty to the sovereign expected under the new regime. Prominent Kikuchi lords were enshrined as deities at the newly established Kikuchi Shrine, built on the site of the clan's castle in Waifu.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

菊池一族

菊池一族は、日本の中世を通じて九州で重要な政治的役割を果たした有力な武士集団である。一時は全国の政治に影響を及ぼすほどの勢力を誇った。一族の本拠地は、現在の菊池市である城下町・隈府であり、菊池氏が敵対する武將に滅ぼされてから数世紀経った今でも、500年に及ぶ歴史の遺産が色濃く残っている。

菊池氏はどこから来たのか？

菊池一族がいつ、どのようにして成立したのか、多くの詳細は歴史から失われてしまったが、その成立は伝統的に1070年とされている。この年、九州の行政の中心地であった大宰府（現在の福岡近郊）に赴任していた高官、則隆が現在の菊池地方に到着したと考えられている。則隆は菊池姓を名乗り、後に菊池川となる川沿いに屋敷を構え、城下町・隈府の基礎を築いた。

菊池地方は僻地であったが、稲作が盛んな農業地帯であった。則隆とその子孫は菊池川での交易を独占し、日本有数の農地に発展させた周辺の平野部で栽培された作物を販売することで富を得た。

認められざる立場

則隆の時代から約100年後の12世紀後半、菊池氏は日本の歴史に新しい時代を切り開く争いに巻き込まれた。源平合戦（1180-1185）では、長らく朝廷の覇権を争ってきた平氏と源氏の武家が、天下の支配権をめぐる争った。全国の武家はどちらかを選ばざるを得なかった。菊池氏は当初源氏を支持していたが、戦争の最終段階では、主に九州の武士で構成されていた、苦境に立たされた平氏軍と同盟を結んだ。

源平合戦は源氏が勝利し、彼らはその後、日本で最初の武家政権である鎌倉幕府を設立した。鎌倉幕府は東日本を本拠地とし、同じ地域の勢力を後ろ盾として、かつての敵であった菊池氏をはじめとする九州の諸氏を疑いの目で見つめた。

菊池氏と幕府の間の不信は長引き、13世紀後半にはさらに悪化した。朝鮮を征服したモンゴル皇帝のフビライ・ハンは、1274年と1281年に日本への侵攻を開始した。日本の武士たちは派閥の忠誠を捨て、この侵略者を撃退するために戦った。当時の当主であった菊池武房（1245-1285）は、その戦場での勇猛さが特に称賛された。しかし菊池一族は、幕府が戦利で彼らに報いることをしなかったことに失望の念を抱いた。

脚光を浴びて

14世紀初頭、鎌倉幕府の支配力は弱くなっていった。幕府は外敵から日本を防衛するために資源を費やす一方で、地方の武將と朝廷を統制する難しさに直面していた。後醍醐天皇（1288-

1339) は朝廷に権力を取り戻す機会を察知した。

後醍醐は、菊池氏を含む幕府に不満を持つ武家と同盟を結び、1331年に幕府に対する乱を起こした。1333年、菊池氏は他の九州の武士団とともに、幕府の出先機関がある博多（現在の福岡）を攻撃した。しかしその矢先、菊池一族は同盟を組んだはずの武士に裏切られた。多勢に無勢で死を覚悟した当主菊池武時（1292-1333）は、息子の武重（1307-1341）に菊池に戻るよう命じ、幕府軍に決死の突撃を仕掛けた。

武時とその部下たちは戦死したが、彼らの大義は勝利した。菊池の博多攻め失敗からわずか数か月後、鎌倉は後醍醐側の軍勢に滅ぼされ、幕府は廃止された。勝利した天皇は菊池氏の忠誠に報いるため、武重を肥後国（現在の熊本県）守護とした。菊池氏はこの名誉ある役職を約200年間務めた。

南朝の忠臣たち

後醍醐天皇が朝廷による直接統治を復活させようとした努力は短命に終わった。天皇の改革は鎌倉時代以前の貴族社会と政治体制への回帰を目指したが、この政策は武士階級の大部分を敵に回した。鎌倉幕府が倒れてからわずか3年後の1336年、かつての鎌倉武将で後醍醐の盟友であった足利尊氏（1305-1358）が京都を占領し、新たな武家政権である足利幕府を創設した。

尊氏は自分の意のままに新しい天皇を立て、後醍醐は都から逃げ出し、京都の南、現在の奈良に近い吉野に対立する朝廷を作った。このような出来事から南北朝時代が始まり、対立する朝廷が国の支配権をめぐる争った。

菊池氏は九州の他の多くの武家と同様、南朝に忠誠を誓った。後醍醐天皇は、九州の支持者を天下奪還の鍵と考え、既存の同盟関係を強化し、新たな同盟関係を築くために、幼い皇子、懐良（かねなが）親王（1329-1383、菊池以外では「かねよし」と呼ばれる）を九州に派遣した。

懐良は1348年に隈府に到着し、城主の菊池武光（1319-1373）と会談した。この出会いが、菊池氏最大の繁栄期の幕開けとなった。それからの10年間、懐良と武光は九州を拠点とする武家による強力な同盟関係を築き上げ、九州全土で北朝派を押し返した。これらの成果は、1359年の有名な筑後川の戦いで頂点に達し、菊池氏は北方の大軍を決定的に破った。翌年末までに、菊池氏率いる南朝方の支持者は九州全域を支配するようになり、同盟の本部は、菊池氏の創設者である則隆が300年ほど前に出発した太宰府に移された。

勝利した後、菊池一族は守りを固めたが、南朝が勝利した九州の武士に吉野を訪問するよう要請したことが災いを招いた。菊池武光が率いる艦隊は九州から出帆したが、北朝軍に迎撃され、

敗走した。武光は太宰府に戻ったが、足利幕府は九州の脅威に対処するため、新たな軍将として名高い戦略家、今川了俊（1326-1420）を派遣した。

了俊は1372年に菊池氏率いる南朝軍を太宰府から追い出し、翌年の武光の死は菊池にさらなる打撃を与えた。最強の将軍を失った懐良公率いる南朝軍は、九州の奥深くまで押し込まれた。1383年に懐良が死ぬと、南朝方の抵抗は終わりを告げ、菊池氏は再び祖先の土地である隈府周辺に閉じこもることになった。

文化的転回

1392年、苦戦を強いられていた南朝方は敗北を喫した。勝利を確信した足利幕府は、弱体化した菊池氏に肥後国の守護職を維持させたが、一族の征服と栄光の時代は終わった。

その後菊池氏は幕府との関係を修復し、一時は、一族の当主が肥後国と隣接する筑後国（現在の福岡県南部）の守護に任命されるほど幕府の好意を得た。しかし、一族は政治的な野心を抱くよりも、文化的な目標に目を向けた。第20代当主の菊池為邦（1430-1488）と息子の重朝（1449-1493）は武士や町人の教育機会を拡大し、彼らの知的・精神的探求を奨励した。彼らの指導の下、菊池は仏教や儒教の学問の中心地となった。

衰退と没落

菊池一族の平和的な探求は、天下が武士団が対立する内乱状態に陥ったことによって覆された。15世紀後半になると、足利幕府は地方の武將を中心とした勢力の台頭によって弱体化し、支配力を失いつつあった。小規模ではあったが、同じ動きが菊池でも起こっていた。長らく菊池氏に仕えてきた家臣一族が主人を追い出し、その権威に挑戦したのだ。

1504年、これらの武士は菊池当主を倒し、家老の一人を当主にした。1500年代半ば、菊池氏は残りの領地をライバルの大友氏に奪われた。1554年、最後の当主であった菊池義武が死去し、菊池氏の家系は消滅した。

再評価

1800年代に入ると、地元の歴史や過去の栄光に関心が高まり、菊池一族に再び光が当たるようになった。商人や地主など、菊池に住む裕福な人々は一族ゆかりの碑や墓の修復や再建に資金を提供した。

全国的な規模で菊池の遺産が再評価されるようになったのは、1868年の明治維新の後である。明治維新は天皇の政治的支配権を回復し、約7世紀にわたる武家支配に終止符を打った。明

治天皇（1852～1912年）の新政府は14世紀の南朝の天皇が皇位の正当な保持者であるとし、南朝の盟主であった菊池一族は、新体制下で期待される君主への忠誠の模範として取り上げられた。著名な菊池当主は隈府にあった一族の居城の跡地に新しく建てられた菊池神社の祭神として祀られた。

地域番号	015	協議会名	阿蘇カルデラツーリズム推進協議会（多言語解説整備部会）	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
015-001	阿蘇神社 下宮と上宮 同一の目的を持つ二社		251～500	WEB
015-002	阿蘇山の神話		251～500	WEB
015-003	阿蘇神社の二つの役割 噴火を防ぎ収穫を応援する		251～500	WEB
015-004	阿蘇神社 国際的な名声を誇る神社		～250	パンフレット
015-005	阿蘇神社の神々 善と悪の二面性		～250	パンフレット
015-006	阿蘇神社の二つの役割 噴火を防ぎ豊穡をもたらす		～250	パンフレット
015-007	カルデラの起源にまつわる神話		～250	パンフレット
015-008	阿蘇神社の儀式と祭礼		～250	パンフレット
015-009	阿蘇山上神社：山の上の神社		～250	看板
015-010	阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院の歴史的背景		251～500	WEB
015-011	阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院の役割		251～500	WEB
015-012	阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院～恋人の聖地		251～500	WEB
015-013	阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院の歴史的背景		～250	パンフレット
015-014	阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院の役割		～250	パンフレット
015-015	阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院～恋人の聖地		～250	パンフレット
015-016	阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院 概要		～250	看板
015-017	火山信仰について @阿蘇山上広場		～250	看板
015-018	古坊中とは？		251～500	WEB
015-019	古坊中の歴史		251～500	WEB
015-020	古坊中とは？		～250	パンフレット
015-021	古坊中の歴史		～250	パンフレット

015-001

Aso Shrine: The Lower and Upper Shrines

Two shrines, one purpose

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】阿蘇神社 下宮と上宮 / 同一の目的を持つ二社

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Aso Shrine: The Lower and Upper Shrines

Two shrines, one purpose

Aso Shrine is believed to have been founded in 281 BCE. It consists of two shrines in two different locations. The lower shrine (*gegu*) is in the city of Aso on the caldera floor, while the upper shrine (*jogu*), officially named Asosanjo Jinja (literally, “Aso Mountaintop Shrine”), sits near the summit of Mt. Aso, a little more than a hundred meters below the volcanic crater. In both cases, the object of worship is the Mt. Aso crater itself.

The lower shrine has numerous well-preserved buildings dating from the 1830s and 1840s, several of which have been designated as Important Cultural Properties. The upper shrine was built a little later, toward the end of the nineteenth century, after the Meiji government’s forceful separation of Shinto and Buddhist deities resulted in the closure of the Buddhist temples near the crater that also practiced “volcano worship.” The present upper shrine is a single concrete building dating from 1958.

The purpose of volcano worship was to placate the deities thought to dwell within the volcano. As long as they felt respected and happy, it was believed the volcano would remain inactive; should they be angered, however, the volcano would erupt. Any volcanic eruption, even a minor one, had a major impact: the smoke and ash would damage crops, livestock, and human habitation.

Mt. Aso volcano worship first appears in 636 in the *Book of Sui*, an official history of

the Sui dynasty, rulers of China from 581 to 618. Further details about the process whereby Mt. Aso came to be regarded as divine are mentioned in the *Nihon Shoki* (Chronicles of Japan) and other Japanese historical texts from the eighth and ninth centuries.

Why did a provincial shrine almost 500 kilometers from the center of power in Kyoto attract so much attention, even internationally? The behavior of the volcano was believed not just to have negative effects in the Aso area, but to be a bad portent for the fate of Japan as a whole. The priests of Aso Shrine would monitor the state of the water at the bottom of the crater (the “divine spirit pond”) and alert the court in Kyoto to any change in its color, level, or behavior (vigorous bubbling, for example). If the water was thought to be behaving in a sinister way, the court would command other shrines around the country to pray diligently to prevent an eruption of Mt. Aso and the harm such an event would foreshadow for the country as a whole.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

阿蘇神社：下宮と上宮

同一の目的を持つ二社

阿蘇神社は紀元前281年に創建されたと考えられています。阿蘇神社は二つの異なる場所にある二社から成ります。下宮（the lower shrine）はカルデア底に広がる阿蘇市にあり、阿蘇山上神社（文字通り、「阿蘇山の上の神社」という意味）という正式名称を持つ上宮（the upper shrine）は、阿蘇山頂付近、噴火口からほんの百メートルちょっと下方に鎮座しています。二社はどちらも阿蘇山火口を御神体としています。

下宮には1830年代から40年代にかけて建てられた保存状態良好な建物が多数あり、そのうちのいくつかは重要文化財に指定されています。上宮はその少し後、19世紀の終わり頃、明治政府が強制的に神仏を分離し、火口付近にあった火山信仰を行っていたいくつかの仏教寺院が廃寺となった際に建立されました。現在の上宮は1958年建造のコンクリート造りの簡素な一棟の建物です。

火山信仰の目的は、火山の中に宿る神々をなだめることでした。神々が十分に尊敬されていると感じ満足している限り、火山は休止状態を続けますが、もし神々が怒れば火山は噴火します。たとえ小規模であっても、火山の噴火は農作物や家畜、人間の住居に噴煙や火山灰の被害という大きな影響をもたらしました。

阿蘇山の火山信仰についての最初の記述は、581年から618年まで中国を支配した隋王朝の正

史『隋書』（636年成立）に見られます。さらに、『日本書紀』など8、9世紀の日本の歴史書には、阿蘇山が神聖と見做されるようになった経緯が言及されています。

権力の中枢であった京都からほぼ500kmも離れた地方の神社が、なぜ外国にまでも注目されたのでしょうか。阿蘇の火山の挙動は、阿蘇地域だけでなく、日本全体の運命に悪影響を及ぼすと信じられていました。阿蘇神社の神職たちは、火口底の水（神霊池）の状態を監視し、その色や水位、様子（勢いよく泡立つなど）に変化があれば、京都の朝廷に報告しました。水が不吉な様子を見せているとみなされた場合、朝廷は阿蘇山の噴火とその噴火が予兆する国全体の災いを防ぐために、全国の神社に熱心に祈祷するよう命じました。

015-002

Myths of Mount Aso

Kicking the landscape into shape

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇山の神話

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Myths of Mount Aso

Kicking the landscape into shape

Twelve deities are enshrined in Aso Shrine. Of the 12, three are of particular importance: Takeiwatatsu no Mikoto, his wife Asotsuhime no Mikoto, and their grandchild Hikomiko no Kami.

Japanese deities have a good side and a bad side to their characters: they are responsible both for nature's bounty and for natural disasters. In the case of Mt. Aso, their good side is expressed in support for the bountiful rice harvests of the Aso caldera, while their bad side manifests in destructive volcanic eruptions.

In the distant past, the Aso caldera contained a lake. The caldera only became habitable and amenable to farming when part of its outer wall collapsed, letting all the water escape. Local myths attributed this transformation to the deity Takeiwatatsu no Mikoto. As the story goes, having first attempted and failed to kick a hole in the wall at Futae Pass, about halfway along the eastern side of the caldera, he moved south a little way and gave the wall a second mighty kick at Tateno. There he was more successful, and the water flowed out. (Tateno is the point where the Shirakawa and Kurokawa rivers converge and flow out of the caldera today.)

The name Tateno, which means “unable to stand up,” is said to come from the story that Takeiwatatsu no Mikoto lost his balance and fell over backward after his second kick. Because he drained the lake and made it possible for people to live and farm

inside the caldera, Takeiwatatsu no Mikoto is regarded as the “father of Aso” and the most important of the 12 deities associated with the volcano.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

阿蘇山の神話 蹴って地形を形成

阿蘇山には十二柱の神々が祀られています。その十二柱のうち、特に重要な三柱は、健甞龍命、その妻阿蘇都比咩命、そして彼らの孫の彦御子神です。

日本の神々は良い面と悪い面を併せ持ちます：彼らは自然の恵みと自然災害の両方の原因となります。阿蘇山の神々の場合、その良い面は阿蘇カルデラの豊かな稲作の恵みを支える形で表れ、悪い面は破壊的な火山の噴火として表れました。

遠い昔、阿蘇のカルデラには湖がありました。このカルデラに人が住み農作ができるようになったのは、カルデラの外壁の一部が崩れ、水がすべて流れ出した後のことでした。地元の神話では、この変容は健甞龍命によるものとされています。最初、カルデラ東側の中間あたりにある二重峠でカルデラ壁を蹴破って穴を開けようとして失敗した健甞龍命は、そこから少し南に移動し、立野で再びカルデラ壁に強烈な蹴りを入れました。ここではうまく穴を開けることができ、内部の水が流れ出しました。（立野は現在の白川と黒川が合流してカルデラから流れ出ている地点です。）

立野という地名は「立てない」という意味で、健甞龍命が二度目の蹴りの後、バランスを崩して後方へ倒れたことに由来するとされています。阿蘇の湖の水を抜いて人々がカルデラの内部で生活し農耕できるようにしたことから、健甞龍命は「阿蘇の父」とみなされており、この火山にまつわる十二柱の神々の中で最も重要な神とされています。

015-003

The Two Roles of Aso Shrine

Preventing eruptions and promoting the harvest

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇神社の二つの役割 / 噴火を防ぎ収穫を応援する

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Two Roles of Aso Shrine

Preventing eruptions and promoting the harvest

The rites and festivals performed at Aso Shrine serve two distinct functions: first, to prevent eruptions of the volcano, and second, to ensure bountiful rice harvests.

Let us look at eruption prevention first. Every year in early June, priests from Aso Shrine conduct a “crater-calming ritual” (*kako chinsai*). Approaching the rim of the largest crater, they chant a Shinto prayer and fling three wooden wands decorated with white zigzag paper streamers down into the crater. (The three wands are offerings to the three main volcano deities: Takeiwatatsu no Mikoto, his wife Asotsuhime no Mikoto, and their grandchild Hikomiko no Kami.)

The annual harvest comes around with much greater regularity than volcanic eruptions, so the shrine conducts many more rites and festivals related to rice growing than to crater calming. These correspond to the cycle of the seasons. Spring is when the rice is planted. Summer is when the rice grows, but also when it is most likely to suffer from too much or too little rain, excessive heat, or insect damage. Autumn is when the harvest is brought in and the deities are thanked for their bounty. (This explains why most Japanese festivals take place in the autumn.)

Following this cycle, in March Aso Shrine holds a “fire-swinging” festival (Hifuri-Shinji), when torches made of reeds are swung around to celebrate the marriage of Kunitatsu no Mikoto, one of the shrine’s 12 deities, to his wife, represented by the

branches of a sacred tree brought from another shrine in Aso. Their union is believed to lead to a good harvest.

The aim of the Onda Festival, held at the end of July, is the same: to pray for a good harvest. Since the rice is already well developed by this time of year, local people take the shrine deities out on a roughly five-kilometer tour of inspection through the paddies in four portable shrines. The shrine priests follow the portable shrines on horseback. Fourteen *unari* – women dressed from head to foot in white, their faces concealed, bear food offerings for the deities on their heads. After them come three local boys carrying stick figures topped with the heads of a man, a woman, and an ox; these figures together represent the productive power of labor. Spectators toss ripening ears of rice at the portable shrines; the more ears that stick to the shrines' roofs, the better the harvest is expected to be.

In late September, the “festival of the fruit of the field” (Tanomi-sai) takes place to give thanks for the rice harvest. A display of horseback archery, held on the approach road to the lower shrine, is dedicated to the deities of the shrine. Other Aso Shrine branch shrines in the caldera have their own smaller festivals with specific agricultural aims, such as fending off strong winds or frost.

In recognition of their cultural significance, Aso's agricultural festivals were designated an Important Intangible Folk-Cultural Property by the Agency for Cultural Affairs in 1982.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

阿蘇神社の二つの役割 噴火を防ぎ収穫を応援する

阿蘇神社で行われる儀式や祭礼には二つの明確な役割があります：一つ目は阿蘇山の噴火を防ぐこと、二つ目は豊穡を確保することです。

まず、火山噴火の防止についてみてみましょう。毎年6月上旬、阿蘇神社の神職たちは「火口鎮祭」を執り行います。神職たちは一番大きな火口の縁に近づき、祝詞を唱え、ジグザグに切られた

白い紙の垂れ飾りがついた棒三本を火口に投げ入れます（これら三本の棒は、この火山の主要な三神である健甞龍命、その妻阿蘇都比咩命、そして彼らの孫の彦御子神に捧げるものです。）

火山の噴火よりも収穫の時期の方が規則的に訪れるため、神社では火口の鎮静化よりも米作りに関連した儀式や祭りを数多く行っています。これらの儀式や祭りは季節のサイクルにあわせて行われます。春は田植えの時期。夏は稲が育つ時期ですが、多すぎたり少なすぎたりする雨量や猛暑、虫害に見舞われやすい時期でもあります。秋は収穫を迎え、豊穰をもたらした神々が感謝される時期です。（日本の祭りのほとんどが秋に行われるのはこのためです）。

このサイクルに続き、阿蘇神社では3月に、茅でできた松明を振り回して、この神社の十二祭神に数えられる国龍命と、阿蘇の別の神社から持ってこられたご神木の枝として表されたその妻との結婚を祝う「火振り神事」が行われます。二神の婚姻は豊穰をもたらすとされています。

7月末に行われるおんだ祭りの目的も同様で、豊穰を祈願することです。この時期にはすでに稲が成長しているため、地元の人々は神社の祭神たちを4基の神輿に乗せ、約5kmにわたって田んぼを見てまわります。神輿には、馬に乗った神職たちが続きます。顔を隠し頭から足まで白装束に身を包んだ「宇奈利」と呼ばれる14人の女性たちは頭上に神々へ捧げる食物を運びます。その後ろは、男・女・雄牛の頭の人形を乗せた棒を持った三人の村の少年たちです；この三人形は一式で労働生産の力を表現します。観客は神輿に稲穂を投げつけます；稲穂が神輿の屋根にたくさんつくほど豊作となります。

9月下旬には、米の収穫に感謝を捧げる「田実祭（田の実りの祭り）」が行われます。下宮の参道では流鏝馬が奉納されます。カルデラにある阿蘇神社の分社ではそれぞれ、強風や霜を防ぐなど非常に具体的な農業に関する目的に沿った独自の小さな祭りが行われます。

その文化的重要性を認められ、阿蘇の農耕祭事は1982年に文化庁から重要無形民俗文化財に指定されました。

015-004

Aso Shrine

A shrine with an international reputation

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇神社 / 国際的な名声を誇る神社

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Aso Shrine

A shrine with an international reputation

Aso Shrine is believed to have been founded in 281 BCE. Today it consists of two shrines: the lower shrine (*gegu*) in the city of Aso on the floor of the Mt. Aso caldera, and the upper shrine (*jogu*) located near the summit of the mountain, a little more than 100 meters below the volcanic crater. The official name of the upper shrine is Asosanjo Jinja, literally “Aso Mountaintop Shrine.” In both cases, the object of worship is the crater of Mt. Aso itself.

The lower shrine consists of numerous well-preserved buildings from the 1830s and 1840s, several of which have been designated as Important Cultural Properties. The upper shrine was built a little later, toward the end of the nineteenth century. The present upper shrine is a single modest concrete building dating from 1958.

The purpose of volcano worship was to placate the deities of the volcano. If they were happy, the volcano would remain dormant; but if they were displeased, the volcano would erupt. Even minor volcanic eruptions could cause severe damage to crops, livestock, and human dwellings.

Mt. Aso volcano worship first receives mention in 636 in the *Book of Sui*, an official history of the Chinese Sui dynasty. Further details about how Mt. Aso came to be regarded as divine appear in multiple Japanese historical texts from the eighth and ninth centuries.

This provincial shrine far from the capital of Kyoto merited so much attention because the behavior of the volcano was believed to foreshadow the fate of Japan as a whole. The priests of Aso Shrine would scrutinize the water at the bottom of the crater

and report any change to the court. If the change was interpreted as a sinister portent, the court would command other shrines around the country to pray diligently to fend off an eruption and broader national harm.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

阿蘇神社

国際的な名声を誇る神社

阿蘇神社は紀元前281年に創建されたと考えられています。現在、阿蘇神社は二社から成ります：カルデア底に広がる阿蘇市にある下宮（the lower shrine）と、阿蘇山の山頂、噴火口からほんの百数十メートル下方に位置する上宮（the upper shrine）です。上宮の正式名称は、文字通り「阿蘇山の上の神社」という意味の「阿蘇山上神社」です。どちらの神社も阿蘇山火口を御神体としています。

下宮には1830年代から40年代にかけて建てられた保存状態良好な建物が多数あり、そのうちのいくつかは重要文化財に指定されています。上宮はその少し後、19世紀の終わり頃に建立されました。現在の上宮は1958年建造のコンクリート造りの簡素な一棟の建物です。

火山信仰の目的は、火山の神々をなだめることでした。神々が満足していれば火山には何も起こりません；しかし、もし神々が不機嫌であれば火山は噴火します。たとえ小規模であっても、火山の噴火は農作物や家畜、人間の住居に深刻な被害をもたらす可能性がありました。

阿蘇山の火山信仰についての最初の記述は、中国・隋王朝の正史『隋書』（636年成立）に見られます。また、阿蘇山が神聖とみなされるようになった経緯は8、9世紀に書かれた日本の文献にも登場します。

天皇が住まう都・京都から遠く離れたこの地方の神社がこのように大きな注目を集めたのは、阿蘇の火山の挙動が日本全体の運命を予兆するとされていたためでした。阿蘇神社の神職たちは、火口底の水の状態を綿密に監視し、そのいかなる変化も朝廷に報告しました。その変化が凶兆と解釈された場合、朝廷は阿蘇山の噴火と国全体の災いを防ぐために、全国の神社に熱心に祈祷するよう命じました。

015-005

The Deities of Aso Shrine

Two sides: One benign, one malign

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇神社の神々 / 善と悪の二面性

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

The Deities of Aso Shrine

Two sides: One benign, one malign

Twelve deities are enshrined in Aso Shrine. Of the 12, three are of particular importance: Takeiwatatsu no Mikoto, his wife Asotsuhime no Mikoto, and their grandchild Hikomiko no Kami.

Japanese deities typically have a good side and a bad side: they are responsible both for nature's bounty and for natural disasters. In the case of the deities of Mt. Aso, their good side is expressed in the bountiful rice harvests of the Aso caldera, while their bad side takes the form of destructive volcanic eruptions.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

阿蘇神社の神々

善と悪の二面性

阿蘇神社には、十二柱の神々が祀られています。その十二柱のうち、特に重要な三柱は、健甕龍命、その妻阿蘇都比咩命、そして彼らの孫の彦御子神です。

日本の神々は大抵良い面と悪い面を併せ持ちます：彼らは自然の恵みと自然災害の両方の原因となります。阿蘇山の神々の場合、その良い面は阿蘇カルデラの豊かな稲作の恵みを支える形で表れ、悪い面は破壊的な火山の噴火として表れました。

015-006

The Two Roles of Aso Shrine

Preventing eruptions and ushering in good harvests 阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇神社の二つの役割 / 噴火を防ぎ豊穡をもたらす

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

The Two Roles of Aso Shrine

Preventing eruptions and ushering in good harvests

The rites and festivals performed at Aso Shrine serve two distinct functions: first, to prevent eruption of the volcano, and second, to ensure bountiful rice harvests.

The two roles are interconnected, since the smoke and ash from even a small eruption could damage crops, livestock, and dwellings over a considerable distance. And since volcanic eruptions often last for months at a time, the cumulative damage can be very serious.

The annual harvest comes around with much greater regularity than volcanic eruptions, so the shrine conducts many more rites and festivals related to growing rice than to calming the crater.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

阿蘇神社の二つの役割

噴火を防ぎ豊穡をもたらす

阿蘇神社で行われる儀式や祭礼には二つの明確な役割があります：一つ目は阿蘇山の噴火を防ぐこと、二つ目は豊穡を確保することです。

この二つの役割は相互に結びついています；なぜなら、たとえ小さな噴火であっても、かなりの範囲にわたって農作物や家畜、住居が噴煙や火山灰の被害を受ける可能性があるためです。しかも、火山の噴火は多くの場合一度に数か月も続くので、累積した被害は非常に深刻なものになり得ます。

火山の噴火よりも収穫の時期の方がずっと定期的に訪れたため、神社では火口の鎮静化よりも米作りに関連した儀式や祭りを数多く行っています。

015-007

The Origin Myth of the Caldera
Kicking the landscape into shape

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 カルデラの起源にまつわる神話

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

The Origin Myth of the Caldera

Kicking the landscape into shape

In the distant past, the Aso caldera contained a lake. The caldera only became habitable and amenable to farming when part of its outer wall collapsed, allowing the lake water to flow out. According to local myths, the collapse was the work of the deity Takeiwatatsu no Mikoto, who first attempted and failed to kick down the wall at Futae Pass, about halfway along the eastern side of the caldera. A little further south, at Tateno, he gave the wall a second mighty kick, and there he was more successful. The wall crumbled, the waters flowed out, and the caldera was drained.

The place where the Shirakawa and Kurokawa rivers converge and flow out of the caldera today is called Tateno. This name (which means “unable to stand up”) is said to derive from the story that Takeiwatatsu no Mikoto lost his balance and fell over after his second kick. By draining the lake, Takeiwatatsu no Mikoto made it possible for people to live and farm inside the caldera. For this reason, he is regarded as the “father of Aso” and the most important of the 12 deities associated with the Mt. Aso volcano.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

カルデラの起源にまつわる神話

蹴って地形を形成

遠い昔、阿蘇のカルデラは湖を擁していました。このカルデラに人が住み農作ができるようになったのは、カルデラの外壁の一部が崩れ、湖の水が流れ出した後のことでした。地元の神話では、この変

容は健磐龍命という神によるものとされています：最初、彼はカルデラ東側の中間あたりにある二重峠でカルデラ壁を蹴破って穴を開けようとしていました。さらに、そこから少し南の立野で再びカルデラ壁に強烈な蹴りを入れ、うまく穴を開けることができました。カルデラ壁が崩壊すると、水が流れ出しカルデラは排水されました。

現在の白川と黒川が合流してカルデラから流れ出ている地点は現在立野と呼ばれています。この地名（「立てない」という意味）は、健磐龍命が二度目の蹴りの後、バランスを崩して転んだことに由来するとされています。湖の水を抜くことで、健磐龍命は人々がカルデラの内部で生活し農耕できるようにしました。そのため、健磐龍命は「阿蘇の父」とみなされており、阿蘇山にまつわる十二柱の神々の中で最も重要な神とされています。

015-008

Rites and Festivals of Aso Shrine

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇神社の儀式と祭礼

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Rites and Festivals of Aso Shrine

The major festivals of Aso Shrine correspond to the seasons of the agricultural cycle: planting the rice in spring; fending off drought, excessive rain, excessive heat, and insect damage in summer; and thanking the deities after the harvest in autumn. In 1982, in recognition of their cultural significance, Aso's agricultural festivals were designated an Important Intangible Folk-Cultural Property by the Agency for Cultural Affairs.

The shrine holds a “fire-swinging” festival (Hifuri-Shinji) in March, when torches made of reeds are swung around to celebrate the marriage of one of the shrine's 12 deities to his wife (who is represented by the branches of a sacred tree brought from another local shrine). Their union is believed to usher in a good harvest.

The Onda Festival at the end of July is also dedicated to prayer for a good harvest. The shrine deities are taken on a tour of the local rice paddies in four portable shrines accompanied by the shrine priests on horseback, 14 women (known as *unari*) dressed from head to foot in white and bearing food offerings on their heads, and three local boys carrying stick figures topped with the heads of a man, a woman, and an ox. Spectators throw ripening ears of rice at the portable shrines. The more ears that stick onto the shrines' roofs, the better the harvest will be.

In late September, the “festival of the fruit of the field” (Tanomi-sai) is held to celebrate the rice harvest. A display of horseback archery is dedicated to the deities.

In addition to rites focused specifically on agriculture, priests from Aso Shrine conduct a “crater-calming ritual” every year in early June. They chant a Shinto prayer and fling three wooden wands decorated with paper streamers down into the crater of the volcano as offerings to the three deities of Mt. Aso.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

阿蘇神社の儀式と祭礼

阿蘇神社の主な祭礼は農耕サイクルの季節に応じたものです：春は田植え、夏は旱魃や過剰な降雨、猛暑、虫害の回避、秋は収穫後の神々への感謝が行われます。1982年、その文化的重要性を反映し、阿蘇の農耕祭事は文化庁から重要無形民俗文化財に指定されました。

阿蘇神社が3月に開催する「火振り神事」では、茅の松明を振り回し、この神社の十二祭神の一柱とその妻（地域の別の神社から持ってきたご神木の枝で表されます）との結婚を祝います。二神の婚姻は豊穰をもたらすとされています。

7月末に行われるおんだ祭りも、豊穰祈願の祭礼です。神社の祭神たちが4基の神輿に担がれ、馬に乗った神職たち、頭から足まで白装束に身を包んで頭上に神々へ捧げる食物を運ぶ14人の女性たち（宇奈利）、男・女・雄牛の頭を乗せた棒を持った三人の村の少年たちを伴って地域の田んぼを見てまわります。観客は神輿に稲穂を投げつけます。稲穂が神輿の屋根にたくさんつくほど豊作となります。

9月下旬には、米の収穫を祝う「田実祭（田の実りの祭り）」が行われます。この祭りでは流鏝馬が奉納されます。

農耕に特化した祭礼に加え、阿蘇神社の神職たちは毎年6月上旬、「火口鎮祭」を執り行います。神職たちは祝詞を唱え、白い紙の垂れ飾りがついた棒三本を阿蘇山の三神への供物として阿蘇山火口に投げ入れます。

015-009

Asosanjo Jinja: The Shrine on the Mountaintop

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇山上神社 : 山の上の神社

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Asosanjo Jinja: The Shrine on the Mountaintop

Aso Shrine was founded more than 2,000 years ago, in 281 BCE. It consists of two shrines: the lower shrine (*gegu*) on the caldera floor in the city of Aso, and this, the upper shrine (*jogu*), a little more than 100 meters below the volcano crater. The crater itself is the object of worship. The official name of this upper shrine is Asosanjo Jinja, literally “Aso Mountaintop Shrine.” The present building, which was damaged in the eruptions that accompanied the 2016 Kumamoto earthquakes, is a concrete structure built in 1958.

The primary purpose of Aso Shrine was to keep the volcano deities happy so that Mt. Aso would not erupt and harm local crops, livestock, and people. The shrine priests would inspect the pond at the bottom of the crater, which represented the “mood” of the deities, and inform the court in Kyoto of any changes. If the water was seen to be behaving in a way that augured ill for Aso and for the country (an eruption was regarded as an omen of nationwide catastrophe), other shrines around Japan would be ordered to pray hard to prevent an eruption. Historically, the volcano worship at Mt. Aso was so important that it was mentioned in a seventh-century Chinese history book, as well as Japanese chronicles written in succeeding centuries.

Volcano worship continues to this day, with the crater-calming ritual conducted at the shrine every year in early June. The priests chant a Shinto prayer and fling wooden wands decorated with white zigzag paper streamers into the crater as offerings to the deities.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

阿蘇山上神社 : 山の上の神社

阿蘇神社は二千年以上前の紀元前281年に創建されました。阿蘇神社は二社から成ります：カルデラ底に広がる阿蘇市にある下宮（the lower shrine）と、阿蘇山火口からほんの百数十メートル下方にあるこの上宮（the upper shrine）です。火口そのものが神社の御神体とされています。上宮の正式名称は、文字通り「阿蘇山の上の神社」という意味の阿蘇山上神社です。2016年の熊本地震に伴う噴火で損傷した現在の社殿は、1958年に建造されたコンクリート造の建物です。

阿蘇神社の主な目的は、阿蘇山が噴火して地域の農作物や家畜、人々に被害が及ばないように、火山の神々の機嫌を良好に保つことでした。阿蘇神社の神職たちは、阿蘇山の神々の「気分」を表す火口底の池の様子を点検し、何か異変があれば京都の朝廷に報告しました。池の水が阿蘇や国にとって不吉な動きをしている（噴火は国難の前兆とされていました）と見なされると、全国の神社は噴火を防ぐために懸命に祈祷するよう命じられました。歴史的に、阿蘇神社は非常に重要な役割を担っており、7世紀の中国の歴史書や8世紀以降の日本の歳時記もこの神社について言及したほどでした。

火山信仰は今日にも継承されており、毎年6月上旬、阿蘇神社では火口鎮祭が執り行われます。神職たちは祝詞を唱え、ジグザグに切られた白い紙の垂れ飾りがついた棒三本を神々への供物として火口に投げ入れます。

015-010

Saigandenji Temple

Historical center of ascetic practice

阿蘇カルデアツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院の歴史的背景

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Saigandenji Temple

Historical center of ascetic practice

Saigandenji Temple, with around 1,300 years of history, is one of the oldest temples in Kyushu. It is said to have been founded by a monk from India named Saiei in 726. The modest structure now in place dates from August 2022. It replaced a somewhat larger 1890 structure that was badly damaged in the Kumamoto earthquakes and accompanying eruptions of Mt. Aso in 2016.

The temple has been battered not only by natural disasters, but also by the tides of human history. For many centuries, it was a center of volcano worship (*kazan shinko*), a place of pilgrimage for courting couples, and the focus of a sprawling complex of almost 100 rustic temples and huts occupied by mountain ascetics. At the start of the Meiji era (1868–1912), Japan’s new nationalist government sought to forcibly separate Buddhism and Shinto, treating Buddhism as an unwelcome foreign import despite the close association of the two traditions for centuries. Saigandenji Temple, which worshipped both the Eleven-faced Kannon, a Buddhist bodhisattva, and Takeiwatatsu no Mikoto, the Shinto deity of the volcano, was shut down and its monks were dispersed. Saigandenji was moved off the mountain and down to modern-day Aso City in 1871. However, after the anti-Buddhist fervor of the Meiji era gradually lost momentum, the mountaintop temple was rebuilt in 1890 to serve the many pilgrims who still wished to worship there.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西巖殿寺

歴史的な修験道の拠点

約1300年の歴史を持つ西巖殿寺は、九州で最も古い寺のひとつです。この寺は、インドからやってきた最栄（704-760）という僧侶によって726年に創建されました。現在の簡素な建物は2022年8月に建てられました。この建物は、1890年に建造されたこれよりいくぶん大きかった前身の建物が2016年の熊本地震とそれに伴う阿蘇山の火山活動によってひどく損傷したため建て替えられたものです。

西巖殿寺は自然災害だけでなく、人間の歴史の潮流にも翻弄されてきました。何世紀もの間、この寺は火山信仰の拠点であり、恋人たちの参詣地であり、また百近くもの素朴な寺院や修験者たちの住居が密集する場所の中核でした。明治時代（1868-1912）の初め、日本の新しい国家主義政府は、仏教を外国から輸入された望ましくないものとして敵視し、仏教と神道を強制的に分離しようとしてきました。仏教の菩薩である十一面観音と神道の火山の神である健甞龍命の両方を祀る西巖殿寺は廃寺となり、僧侶たちは散り散りになりました。西巖殿寺は1871年に山上から現在の阿蘇市内に移されました。しかし、明治政府の反仏教運動が次第に勢いを失ったことから、山上の寺院は1890年に再建され、そこで参拝することを望んでいた多くの参詣者を迎えるようになりました。

015-011

The Role of Saigandenji Temple

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院の役割

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Role of Saigandenji Temple

Saigandenji Temple may appear modest from the outside, but it has been playing an important role in the life of the Aso region for well over 1,000 years. Even now, every morning, the chief priest of the main temple of Saigandenji in the city of Aso ascends the mountain to beat the drum and chant sutras for the Buddhist bodhisattva known as the Eleven-faced Kannon.

The main purpose of this ritual is to prevent Mt. Aso from erupting. The smoke and ash the volcano spews into the sky damage the rice growing in the caldera, harm the cows grazing on the hillsides, and pollute the drinking water supply for animals and humans alike.

The chief priest also asks Kannon to answer the prayers of visitors to the temple. These prayers are written on the colorful strips of cloth hanging in bunches at the temple entrance. The different colors represent specific themes: white to ward off danger, yellow for prosperity in business, green for passing examinations, purple for recovering from an illness, and red for luck in love.

One unique ritual that survives at the main Saigandenji branch down at the base of Mt. Aso is fire walking (*hiwatari-shinji*). Every spring, the temple monks walk across a pathway several meters long consisting of the burning embers of branches and *goma-gi*, flat pieces of wood inscribed with prayers. (Lay participants are permitted to walk across the hot embers afterward, once the fire has safely died down.)

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西巖殿寺の役割

一見簡素に見えるものの、西巖殿寺は千年以上前から阿蘇地域の暮らしに重要な役割を果たしてきました。現在も、阿蘇市内にある西巖殿寺の本院の住職は毎朝山を登ってここを訪れ、一般に「慈悲の女神」として知られる十一面観音のために鼓を打ちお経を上げています。

この儀式の主な目的は阿蘇山の噴火を防ぐことです。阿蘇山が噴出する煙や灰は、カルデラで栽培されている稲や山腹で草を食む牛に危害を与え、動物や人間の飲み水の水源を汚染します。

また、住職は観音に参拝者の願い事に応えてくれるようお願いします。これらの願い事は、寺院の入り口に束になって吊るされた色とりどりの細長い布に書かれています。それぞれの色は特定のテーマを表しています：白は厄除け、黄色は商売繁盛、緑は試験合格、紫は病気回復、赤は恋愛成就です。

阿蘇山麓の西巖殿寺本院に残るユニークな儀式のひとつが、火渡り神事です。毎年春、寺の僧侶たちは、枝や「護摩木」という祈りが書かれた平らな木片からなる長さ数メートルの燃える道を歩いて渡ります。（信者は火が安全に静まった後にのみ、熱い燃えさしの上を渡ることが許されます）。

015-012

The Temple of Love, Past and Present

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院～恋人の聖地

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Temple of Love, Past and Present

Just to the left of Saigandenji Temple is a lava-rock path known as the Shakyogabashi (“bridge of sutra copying”). The name refers to the practice of transcribing phrases from Buddhist sutras onto stones and burying them as a form of prayer. Before a road to the crater was built, the Shakyogabashi was the main route leading there, although only monks and priests were actually permitted to go all the way up to the sacred heart of the volcano. Ordinary people would have to stop at a barrier after about 150 meters. Many of the visitors were young couples, who would make a pilgrimage to the place in a pre-marriage practice called *ondakesan-mairi*.

Only those who were pure of heart and physically clean could walk upon this path. The patterns on the lava rock resemble the underside of a snake. To people of impure heart, the path supposedly looked like an enormous serpent, frightening them and preventing them from going any further up the mountain.

Ondakesan-mairi pilgrims came to the temple on the spring and autumn equinoxes. Until the late 1860s, they would be guided up the mountain by the ascetics who lived on the open ground to the west of the temple. Although the ascetics were evicted when the Meiji government turned against Buddhism, labeling it an unwelcome foreign import and forcibly separating it from home-grown Shintoism, pilgrims continued coming in great numbers. There are reports from the Taisho era (1912–1926) of long lines of women in red kimonos resembling a row of red spider lilies as they made their way up the mountain.

Marriage and romantic ties (*enmusubi*) have long been a key theme of Saigandenji. In a modern take on the same idea, the temple won designation as an official “Lovers’ Sanctuary” (meaning a romantic spot perfect for proposing marriage) in 2011. (There are around 140 Lovers’ Sanctuaries in Japan; a nonprofit organization launched the project in 2006 in a bid to help revitalize outlying regions of the country and boost the low birthrate.)

The old temple once contained a metal sculpture of a horse, but it was melted down for the war effort in 1940. In November 2022, the horse was replaced with a seated and rather contented-looking red granite cow. Because metal is too easily damaged by sulfurous gases and acid rain, the explanatory panel on the sculpture’s plinth is made of Arita-ware porcelain. Visitors are encouraged to pat the cow and make a wish.

As a result of the Kumamoto earthquakes in 2016 and the prolonged volcanic activity that followed, the Mt. Aso cable car was permanently closed, and this part of the mountain remained off limits for six years. While visitor numbers are still far below their former levels, the chief priest of Saigandenji has expressed hope that these recent initiatives will give more people a reason to visit.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

今昔の愛の寺

西巖殿寺のすぐ左手には、「写経ケ橋（bridge of sutra copying）」と呼ばれる溶岩の道があります。この名は、仏教の經典の一節を石に書き写し、それを埋めて祈る写経という風習にちなんだものです。道路が整備される前は、写経ケ橋は火口へ登るための主要な道でしたが、実際に火山の神聖な中心部まで登ることが許されていたのは僧侶や神職だけでした。一般の人々は、150メートルほど登ったところにある関所までしか行けませんでした。参詣者の多くは、「オンダケサンマイリ」と呼ばれる婚前の慣習のためにこの場所に詣でる若いカップルでした。

この道を歩けるのは、心身が清浄な人だけでした。溶岩の模様は蛇の腹に似ています。心が清らかで無い人には、この道が山中への行く手を阻む恐ろしい巨大な蛇のように見えたと言われています。

オンダケサンマイリをする人々は、春と秋の彼岸にこの寺に訪れました。1860年代後半まで、参詣者たちは寺の西側の開けた場所に住む修験者たちに案内されて山を登っていました。こうした修験者たちは、明治政府が仏教を外国から流入した好ましくないものとして排斥した際に退去させられ

ましたが、その後も絶えずたくさんの参詣者が訪れました。大正時代（1912-1926）の記録には、彼岸花のような赤い着物を着た女性たちが長い列をなして山を登っていく様子が残されています。

縁結び（結婚と恋愛のご縁）は、古くから西巖殿寺の重要なテーマでした。このテーマの現代的なアプローチとして、西巖殿寺は2011年に公式の「恋人の聖地」（プロポーズにぴったりのロマンチックな場所という意味）の認定を受けました。（日本には約140ヶ所の恋人の聖地があります；ある非営利組織が日本の地方活性化と少子化の一環として2006年にこのプロジェクトを立ち上げました。）

この古い寺には、かつて金属製の馬の彫像がありましたが、これは1940年に戦争のための供出で溶かされてしまいました。2022年11月、この馬に代わって、阿蘇山のシンボルであるあか牛がどこか満足そうな様子で座っている像が置かれました。金属は亜硫酸ガスや酸性雨の影響を受けやすいため、台座の説明板は有田焼の陶製です。参拝の際には、ぜひこの牛を撫でて願い事をしてみてください。

2016年の熊本地震とその後の長引く火山活動の結果、阿蘇山ロープウェイは廃止となり、ロープウェイの運行地域は6年間立ち入り禁止とされました。参拝者数は未だ以前の水準をはるかに下回っているものの、西巖殿寺はこうした近年の取り組みが、より多くの人を訪れるきっかけになることを願っています。

015-013

Saigandenji Temple: A Short History

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院の歴史的背景

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Saigandenji Temple: A Short History

With a roughly 1,300-year history, Saigandenji is one of the oldest temples in Kyushu. It is said to have been established in 726 by a monk from India named Saiei. The current small structure, which dates from August 2022, replaced a larger 1890 building that was badly damaged by the 2016 Kumamoto earthquakes and the volcanic activity that followed them.

The temple has been battered by the tides of human history as well as by natural disasters. It was once a thriving center of volcano worship (*kazan shinko*), a place of pilgrimage for courting couples, and the focus of a complex of rustic temples and hermitages occupied by mountain ascetics. At the start of the Meiji era (1868–1912), however, the new nationalist government decided to forcibly separate Buddhism and Shintoism, treating the former as an unwelcome foreign import. It forced the closure of the temple because both the Eleven-faced Kannon (a Buddhist bodhisattva) and Takeiwatatsu no Mikoto (the Shinto deity of the mountain) were worshipped there. The main temple was transferred to the town of Aso in 1871. As anti-Buddhist fervor gradually faded over time, however, the mountaintop temple was rebuilt in 1890 to serve pilgrims.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西巖殿寺：歴史の概説

約1300年の歴史を持つ西巖殿寺は、九州で最も古い寺のひとつです。この寺は、インドから来た最栄（704-760）という僧侶によって726年に創建されたとされます。2022年8月に建てられた現在の小さな建物は、2016年の熊本地震とそれに伴う阿蘇山の火山活動によってひどく損傷した1890年建造のより大きな建物を建て替えたものです。

西巖殿寺は自然災害だけでなく、人間の歴史の潮流にも翻弄されてきました。この寺はかつて繁栄を誇った火山信仰の拠点であり、恋人たちの参詣地であり、また素朴な寺院や修験者たちの庵が密集する場所の中核でもありました。しかし、明治時代（1868-1912）の初め、新しい国家主義政府は、仏教を外国から輸入された望ましくないものとししました。西巖殿寺は十一面観音（仏教の菩薩）と健甞龍命（神道の火山の神）の両方を祀っていたため、廃寺となりました。寺の本堂は1871年に阿蘇の町に移されました。しかし、明治政府の反仏教運動は次第に勢いを失い、山上の寺院は参詣者を迎えるために1890年に再建されました。

015-014

The Role of Saigandenji Temple

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院の役割

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

The Role of Saigandenji Temple

Saigandenji Temple has played an important role in the life of the Aso region for well over 1,000 years. Even now, every morning, the chief monk of the main Saigandenji branch in the city of Aso ascends the mountain to chant sutras for the temple's principal object of worship, the Eleven-faced Kannon.

The purpose of this ritual is to prevent Mt. Aso from erupting. The smoke and ash the volcano spews into the sky damage the rice in the paddies, harm the cows grazing on the hillsides, and pollute the drinking water.

In addition, the chief priest entreats Kannon to answer the prayers of visitors to the temple. These prayers are written on the cloth strips hanging in bunches at the temple entrance. Each color represents a different theme: white to ward off danger, yellow for prosperity in business, green for passing examinations, purple for recovery from sickness, and red for luck in love.

One unique ritual that survives at the main temple of Saigandenji in Aso City is fire walking (*hiwatari-shinji*). Every spring, the temple monks walk across a flaming pathway several meters long consisting of the burning embers of branches and *goma-gi*, flat pieces of wood inscribed with prayers.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西巖殿寺の役割

西巖殿寺は千年をゆうに超える昔から阿蘇地域の暮らしに重要な役割を果たしてきました。現在も、阿蘇市にある西巖殿寺の本院の住職は毎朝山を登ってここを訪れ、本尊である十一面観音にお経を上げています。

この儀式の目的は阿蘇山の噴火を防ぐことです。阿蘇山が噴出する煙や灰は、田んぼの稲や山腹で草を食む牛に危害を与え、飲用水を汚染します。

また、住職は観音に参拝者の願い事に応じてくれるようお願いします。これらの願い事は、寺院の入り口に束になって吊るされた色とりどりの細長い布に書かれています。それぞれの色は特定のテーマを表しています：白は厄除け、黄色は商売繁盛、緑は試験合格、紫は病気回復、赤は恋愛成就です。

阿蘇市の西巖殿寺本院に残るユニークな儀式のひとつが、火渡り神事です。毎年春、寺の僧侶たちは、枝や「護摩木」という祈りが書かれた平らな木片からなる長さ数メートルの燃える道を歩いて渡ります。

015-015

The Temple of Love, Past and Present

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院～恋人の聖地

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

The Temple of Love, Past and Present

Just to the left of Saigandenji Temple is a lava-rock path known as the Shakyogabashi (“bridge of sutra copying”). Before the modern road was built, the Shakyogabashi was the main route up to the crater. Only monks and priests were allowed to go all the way up to the top; ordinary people were stopped by a barrier after some 150 meters. As a pre-marriage tradition, many young couples would visit the place in a practice known as *ondakesan-mairi*.

Ondakesan-mairi pilgrims came to the temple on the spring and autumn equinoxes. Until the late 1860s, the mountain ascetics who lived in great numbers on the open ground to the west of the temple would guide the pilgrims up the mountain. But even after the ascetics had been evicted and Saigandenji closed in 1871 by government edict, the pilgrims continued to come. Reports from the Taisho era (1912–1926) describe long lines of women in red kimonos making their way up the mountain, looking from a distance like a row of red spider lilies.

Marriage and romantic ties (*enmusubi*) have long been a key theme of Saigandenji.

In a modern take on the same idea, the temple was designated an official “Lovers’ Sanctuary” (meaning a romantic spot perfect for proposing marriage) in 2011. The statue of a seated cow was installed in November 2022. Visitors are encouraged to make a wish as they pat it.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

今昔の愛の寺

西巖殿寺のすぐ左手には、「写経ケ橋 (bridge of sutra copying) 」と呼ばれる溶岩の道があります。この道路が整備される前は、写経ケ橋は火口へ登るための主要な道でした。僧侶や神職だけが火山の神聖な中心部まで登ることを許されていました；一般の人々は、150メートルほど登ったところにある関所までしか行けませんでした。「オンダケサンマイリ」と呼ばれる婚前の慣習として、多くの若いカップルがこの場所を詣でました。

オンダケサンマイリをする人々は、春と秋の彼岸にこの寺に訪れました。1860年代後半まで、寺の西側の開けた場所に数多く住んでいた修験者たちが参詣者たちの登山を先導していました。とはいえ、1871年に明治政府によって修験者たちが退去させられ西巖殿寺が廃寺とされた後も、参詣者は絶えませんでした。大正時代（1912-1926）の記録には、赤い着物を着た女性たちが長い列をなして山を登っていく、遠くから見るとさながら彼岸花の一筋のような様子が伝えられています。

縁結び（結婚と恋愛のご縁）は、古くから西巖殿寺の重要なテーマでした。このテーマの現代的なアプローチとして、西巖殿寺は2011年に公式の「恋人の聖地」（プロポーズにぴったりのロマンチックな場所という意味）の認定を受けました。座っている牛の像は、2022年に設置されました。参拝の際には、ぜひこの牛を撫でながら願い事をしてみてください。

015-016

Saigandenji Temple

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 阿蘇山本堂西巖殿寺奥之院 概要

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Saigandenji Temple

This temple is one of the oldest in all of Kyushu. It is said to have been founded in 726 by a monk from India named Saiei. In 1871, the temple was closed down and moved to the foot of the mountain because the new and strongly nationalist Meiji government declared its disapproval of Buddhism as a foreign import and wanted to draw a clear line between Buddhism and Shinto, which had become intertwined over the centuries.

The temple was rebuilt in 1890 in response to demand from pilgrims. That structure stood here until it was badly damaged by the 2016 Kumamoto earthquakes and the volcanic activity that followed. The present building dates from August 2022.

The deity of the temple is the Buddhist bodhisattva known as the Eleven-faced Kannon. However, the primary goal of the sutras that the monks chant is to discourage Mt. Aso's sacred crater from erupting. Volcanic eruptions are harmful to the entire Aso caldera, polluting the drinking water, damaging the rice crops, and poisoning the grass that cattle graze on.

The stone path behind the temple used to be the only route up to the crater. Only clergy were allowed to climb all the way to the top; ordinary people had to stop at a barrier around 150 meters up. There, courting couples would pledge their troth prior to marriage in a tradition that flourished until the Taisho era (1912–1926).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西巖殿寺

この寺は、九州全土で最も古い寺のひとつです。インドからやって来た最栄（704-760）という僧侶によって726年に創建されたとされます。1871年、西巖殿寺は廃寺となり、山の麓に移されまし

た：新たに発足した非常に国家主義的な明治政府は、仏教を外国から輸入された望ましくないものとして否定し、過去数百年にわたって密接に結びついていた仏教と神道をはっきりと分離させたがったためです。

この寺は参拝者たちの要望に応じて1890年に再建されました。その建物は、2016年の熊本地震とそれに伴う阿蘇山の火山活動によってひどく損傷するまでここに立っていました。現在の建物は2022年8月に建造されたものです。

西巖殿寺の本尊は、十一面観音と呼ばれる仏教の菩薩です。しかし、この寺の僧侶たちが唱えるお経の第一の目的は、阿蘇山の神聖な火口の噴火を阻止することです。阿蘇山の噴火は飲料水を汚染したり、稲に害を与えたり、牧草を毒して牛に流産させたりと、阿蘇カルデラ全体に多大な被害を及ぼします。

寺の裏手にある石の道は、かつて火口へと登る唯一の経路でした。聖職者だけが頂上まで登ることを許されており、一般の人々は150メートルほど登ったところにある関所までしか行けませんでした。大正時代（1912-1926）までは、そこで、恋人たちが婚前の契りを交わすという風習が、盛んに行われていました。

015-017

Volcano Worship (*Kazan Shinko*)

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 火山信仰について @阿蘇山上広場

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Volcano Worship (*Kazan Shinko*)

The two buildings in front of you are Saigandenji Temple (on the left) and Asosanjo Jinja, the upper shrine of Aso Shrine (behind and to the right). Despite their small size and modernity – the temple building dates from 2022 and the shrine from 1958 – their origins extend far back in time. The shrine was supposedly founded in 281 BCE in the reign of Korei, Japan’s legendary seventh emperor, while the temple was founded in 726 CE. At both places, the focus of worship is the crater of Mt. Aso. Originally a part of Japanese folk belief, volcano worship was absorbed into both Shinto and Buddhism. For many centuries, mountain ascetics lived and prayed in this area, and pilgrims visited in large numbers.

The primary goal of the shrine’s Shinto priests and the temple’s Buddhist monks was the same: to pray to Takeiwatatsu no Mikoto, the volcano deity, keep him in a good mood, and stop him and his fellow volcano-dwelling deities from erupting. This was not merely to prevent physical damage to nearby crops, livestock, and dwellings, but also to avoid the calamity to the country that the eruption of Mt. Aso was believed to portend.

Even today, the chief priest ascends daily from the main branch of Saigandenji at the base of Mt. Aso to chant sutras and pray for the volcano to remain dormant. Meanwhile, the priests from the lower Aso Shrine come up every June to conduct a “crater-calming ceremony” in which they flatter and pray to the volcano deities, flinging wooden wands decorated with white zigzag paper streamers into the crater as offerings.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

火山信仰

目の前にある2つの建物は、西巖殿寺(左)と阿蘇神社の上宮である阿蘇山上神社（後方右）です。建物は小さくて新しい（寺のお堂は2022年、神社の社殿は1958年に建てられました）ものの、その由緒は遠い昔にさかのぼります。阿蘇山上神社は紀元前281年、日本の神話に登場する第七代孝霊天皇の時代に創建されたとされており、西巖殿寺は726年に創建されました。どちらも信仰の中心となっているのは阿蘇山の火口です。もともと日本の民間信仰の一部であった火山信仰は、神道と仏教の両方に取り入れられました。何世紀もの間、この地域には修験者たちが住んで祈りを捧げ、大勢の参詣者が訪れました。

阿蘇山上神社の神職たちと西巖殿寺の僧侶たちの主な目的は同じで、阿蘇山の神である健甞龍命に祈りを捧げ、その機嫌を良好に保ち、彼と仲間の神々が噴火を起こすのを防ぐことでした。これは単に周辺の農作物や家畜、住居への物理的な被害を防ぐためだけでなく、阿蘇山の噴火が予兆するとされていた国全体の災厄を回避するためでもありました。

現在も、阿蘇山麓にある西巖殿寺本院の住職は毎日ここに来てお経を唱え、阿蘇山の静穏を祈っています。一方、阿蘇神社の下宮の神職たちは、毎年6月に、火山の神々におもねって祈りを捧げ、ジグザグに切られた白い紙の垂れ飾りがついた棒を供物として火口に投げ入れる「火口鎮めの儀式」を行います。

015-018

What Was the Furubochu?

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 古坊中とは？

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

What Was the Furubochu?

Saigandenji Temple is said to have been founded in 726 by a monk from India named Saiei. Over time, the temple became a major center for volcano worship and for mountain asceticism. By the fourteenth or fifteenth century, several hundred *yamabushi* mountain ascetics had taken possession of the relatively flat stretch of land extending to the west of the temple and had developed it under the patronage of the powerful local Aso clan. This loose community of ascetics and monks became known as the Furubochu. *Bochu* means “an assemblage of monks,” while the prefix *furū* means “old.”

The land occupied by the Furubochu was subdivided into 92 plots, some as small as 100 square meters, some as large as 1,000. The hundreds of *yamabushi* who lived here erected 37 substantial wooden temples and 51 smaller, simpler thatch huts. They would spend their days practicing self-discipline via meditation, fasting, and sutra chanting; inspecting the pond inside the crater to get an idea of the mood of the deities; and guiding pilgrims to the highest permitted point for laypeople, who would worship the crater from afar.

Small stone pagodas were found here in the 1960s when a farmer bulldozed the area to make it easier to graze his cows. In the 2000s, Watanabe Kazunori, a professor of vulcanology at Kumamoto University, conducted some preliminary excavations. He discovered burnt pampas grass roof thatching from *yamabushi* huts, as well as wooden pillars from the temple buildings.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

古坊中とは何だったのか

西巖殿寺は、726年にインドから来た最栄という僧によって創建されたとされます。時とともに、この寺は火山信仰と修験道の主要な拠点となりました。14～15世紀になると、数百人の山伏たちが寺の西側に広がる比較的平坦な土地を占有し、この地域で大きな力を持っていた阿蘇氏の庇護のもとで発展させるようになりました。この山伏と僧侶の緩やかな共同体は、古坊中として知られるようになりました。坊中とは「僧の集まり」、「古」という接頭語は「古い」という意味です。

古坊中は92の区画に分けられており、それらの区画には100平方メートルの小さなものから1,000平方メートルの大きなものまでありました。ここに住んでいた数百人の山伏は、37の立派な木造寺院と51の小さくて簡素な茅葺きの小屋を建てました。彼らは日々、瞑想や断食、読経などの修行に励んだり、火口内の池を観察して神々の気分を探ったり、参詣者が火口を遥拝できるように彼らを一般の人に許された最も高い地点まで案内したりしていました。

1960年代、ある農家が牛を放牧しやすくするためにこの地域を整備していたところ、小さな石塔がいくつか発見されました。2000年代には、熊本大学の火山学者・渡辺一徳教授が予備的な発掘調査を実施しました。その結果、山伏の小屋の屋根葺き材だった焼けたススキや寺の建物の木柱が発見されました。

015-019

History of the Furubochu

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 古坊中の歴史

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

History of the Furubochu

The Furubochu flourished from the late twelfth century until the sixteenth century. As the rival Otomo and Shimazu clans battled for control of Kyushu in the late sixteenth century, the lives of the monks and mountain ascetics here were disrupted. By the late sixteenth century, they had all but abandoned the mountain.

In 1588, warlord Toyotomi Hideyoshi awarded control of Higo Province (modern-day Kumamoto Prefecture) to Kato Kiyomasa (1562–1611) as a reward for helping him defeat the Shimazu clan and pacify Kyushu. In 1599, Kiyomasa secured Hideyoshi's permission to resurrect the complex of buildings in the town of Aso and recall the monks and ascetics who had lived and worshipped there. This new *bochu* was given the name of Fumoto-bochu (“assemblage of monks at the foot of the mountain”) to distinguish it from the original, by then defunct Furubochu (“old assemblage of monks”) on the mountaintop. Even after Kiyomasa's son fell out of favor with the shogun and was forced into exile in 1632, the Hosokawa family, which took over the control of Higo Province, continued to patronize and protect the Fumoto-bochu.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

古坊中の歴史

古坊中は12世紀後半から16世紀にかけて栄えました。16世紀後期、敵対関係にあった大友氏と島津氏が九州の支配権をめぐる争いと、ここでの修行僧や山伏の生活は妨げられました。16世紀後半には、彼らのほとんどが山を去りました。

1588年、戦国武将・豊臣秀吉は、島津氏討伐と九州平定の褒美として、加藤清正（1562-1611）に肥後国（現在の熊本県）の支配権を与えました。1599年、清正は秀吉から許可を得て、阿蘇の町の坊中を復興し、以前そこに住んでいた僧侶や修行僧を呼び戻しました。山頂にあった古坊中（「古い僧の集まり」の意）と区別するために、この新たな坊中は麓坊中（「山の麓にある僧の集まり」の意）と名付けられました。清正の子が将軍の不興を買い、1632年に流刑に処せられた後も、肥後国の領主となった細川家は麓坊中を庇護し続けました。

015-020

What Was the Furubochu?

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 古坊中とは？

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

What Was the Furubochu?

Saigandenji Temple is said to have been founded in 726 by a monk from India named Saiei. Over time, the temple became established as a major center for volcano worship and mountain asceticism. By the fourteenth or fifteenth century, several hundred *yamabushi* mountain ascetics occupied the relatively flat stretch of land extending west of the temple, which was divided into 92 plots of differing sizes. They are said to have constructed 37 substantial wooden temples and 51 simple thatch huts there. This loose community of ascetics and monks became known as the Furubochu. *Bochu* means “an assemblage of monks,” while the prefix *furū* means “old.”

The ascetics would spend their days meditating, fasting, and chanting sutras; inspecting the pond inside the crater for signs of the volcano deities’ moods and intentions; and guiding pilgrims to the highest permitted point, where they would worship the crater from afar.

Small stone pagodas were found here in the 1960s when a farmer bulldozed the area to make it easier to graze his cows. In the 2000s, Watanabe Kazunori, a professor of vulcanology at Kumamoto University, conducted some preliminary excavations. He discovered burnt pampas grass roof thatching from *yamabushi* huts, as well as wooden pillars from the temple buildings.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

古坊中とは何だったのか

西巖殿寺は、インドから来た最栄という僧によって726年に創建されたとされます。時とともに、この寺は火山信仰と修験道の主要な拠点として確立されました。14～15世紀になると、数百人の山

伏たちが寺の西側に広がる様々な広さの92区画に分けられた比較的平坦な土地を占有するようになっていました。彼らはそこに37の立派な木造寺院と51の小さくて簡素な茅葺きの小屋を建てたと伝えられています。この山伏と僧侶の緩やかな共同体は、古坊中として知られるようになりました。坊中とは「僧の集まり」、「古」という接頭語は「古い」という意味です。

修行者たちは日々、瞑想や断食、読経に励んだり、火口内の池を観察して神々の気分や意向を探ったり、参詣者が火口を遥拝できるように彼らを一般の人に許された最も高い地点まで案内したりしていました。

1960年代、ある農家が牛を放牧しやすくするためにこの地域を整備していたところ、小さな石塔がいくつか発見されました。2000年代には、熊本大学の火山学者・渡辺一徳教授が予備的な発掘調査を実施しました。その結果、山伏の小屋の屋根葺き材だった焼けたススキや寺の建物の木柱が発見されました。

015-021

History of the Furubochu

阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

【タイトル】 古坊中の歴史

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

History of the Furubochu

A community of monks and ascetics who occupied a complex of temples and huts, the Furubochu flourished from the late twelfth century until the sixteenth century. But as rival local clans battled for control of Kyushu, life became increasingly dangerous even on this remote mountaintop during the Tensho era (1573–1592). By the late sixteenth century, the buildings were all but abandoned.

In 1588, warlord Toyotomi Hideyoshi awarded Kato Kiyomasa (1562–1611) control of Higo Province (modern-day Kumamoto Prefecture) to thank him for his help in defeating the Shimazu clan and pacifying Kyushu. Eleven years later, in 1599, Kiyomasa secured Hideyoshi's permission to revive the *bochu* in the town of Aso and recall the monks and hermits who had lived and worshipped there. This new complex was given the name of Fumoto-bochu (“assemblage of monks at the foot of the mountain”) to distinguish it from the original mountaintop Furubochu (“old assemblage of monks”). The Hosokawa family, who took over Higo Province following the exile of Kiyomasa's disgraced son in 1632, continued to patronize and protect the Fumoto-bochu.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

古坊中の歴史

寺院と修行者の小屋からなる古坊中は、12世紀後半から16世紀まで栄えました。しかし、天正年間（1573-1592）に九州の支配権をめぐる敵対する地元の氏族が争うようになると、この人里離れた山上でさえ、生活は徐々に危険になっていきました。16世紀後半には、建物はすっかり閑散としていました。

1588年、戦国武将・豊臣秀吉は、加藤清正（1562-1611）の島津氏討伐と九州平定における武功に報いるため、彼に肥後国（現在の熊本県）の支配権を与えました。11年後の1599年、清正は秀吉の許可を得て、阿蘇の町の坊中を復興し、以前そこで暮らし礼拝を行っていた僧侶や修行僧を呼び戻しました。山上にあった古坊中（「古い僧の集まり」の意）と区別するために、この新たな坊中は麓坊中（「山の麓にある僧の集まり」の意）と名付けられました。1632年に清正の息子が失態のために流刑に処せられた後に肥後国の領主となった細川家も、麓坊中を庇護し続けました。

地域番号	016	協議会名	竹田市多言語解説協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
016-001	史跡岡城跡（国指定史跡） / 岡城跡		250	Webページ パンフレット その他（アプリ）
016-002	竹田市歴史文化館 / 竹田市歴史文化館		250	Webページ パンフレット その他（アプリ）
016-003	竹田市歴史文化館 / 重要文化財「銅鐘」 （サンチャゴの鐘）		500	Webページ パンフレット その他（アプリ）
016-004	史跡旧竹田荘（国指定史跡） / 旧竹田荘		250	Webページ パンフレット その他（アプリ）
016-005	史跡旧竹田荘（国指定史跡） / 田能村竹田		250	Webページ パンフレット その他（アプリ）
016-006	瀧廉太郎記念館 / 瀧廉太郎旧宅		250	Webページ パンフレット その他（アプリ）
016-007	瀧廉太郎記念館 / 瀧廉太郎		250	Webページ パンフレット その他（アプリ）
016-008	佐藤義美記念館 / 佐藤義美記念館		250	Webページ その他（アプリ）
016-009	竹田温泉花水月 / 竹田温泉花水月		250	Webページ パンフレット その他（アプリ）
016-010	竹田市城下町交流プラザ / 竹田市城下町交流プラザ		250	Webページ その他（アプリ）
016-011	西光寺 / 西光寺		250	Webページ その他（アプリ）
016-012	願成院 / 重要文化財「願成院本堂（愛染堂）」		250	Webページ その他（アプリ）
016-013	扇森稻荷神社 / 扇森稻荷神社		250	Webページ その他（アプリ）

016-014	白水ダム / 重要文化財「白水溜池堰堤水利施設」	250	Webページ その他（アプリ）
016-015	豊後竹田駅 / 豊後竹田駅	250	Webページ その他（アプリ）
016-016	竹田市 / 城下町の街並み	250	Webページ その他（アプリ）
016-017	ごとう姫だるま工房 / 姫だるま	250	Webページ パンフレット その他（アプリ）

016-001

Oka Castle Ruins

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】史跡岡城跡（国指定史跡） / 岡城跡

【想定媒体】Webページ / パンフレット / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Oka Castle Ruins

The Oka Castle Ruins site overlooks the city of Taketa from its location on a flattened hilltop. A castle has stood on this site more than 800 years, and the formidable stone ramparts that line the steep hillsides and remains of towering walls that once defended the castle from attack offer glimpses of Edo-period (1603–1867) castle architecture. The Kuju mountain range, as well as Mt. Sobo and the active volcano Mt. Aso, are visible from the top of the site.

It is believed a structure was first built on the hill in 1185 to hide Minamoto no Yoshitsune (1159–1189), a hero of the Genpei War (1180–1185). This civil war between the Minamoto and Taira clans led to the establishment of the Kamakura shogunate, the first warrior-led government to rule Japan. A permanent castle was constructed in the fourteenth century by the Shiga family, which governed the area for the Otomo warrior family.

In 1593, to punish the Shiga family for having failed in an invasion of the Korean peninsula, Toyotomi Hideyoshi (1537–1598), the de facto ruler of Japan at the time, ordered them to leave Oka Castle. The Shiga were replaced by the Nakagawa family, which relocated from what is now Hyogo Prefecture in central Japan. The Nakagawa remained at Oka Castle for 277 years until 1874, when the fortress was demolished in the wake of the Meiji Restoration, with which warrior rule came to an end and a new government embarked on modernization of the country.

Many of the fortifications constructed by the Nakagawa family remain at the site.

These include several imposing stone walls along the path to the summit. Embedded in some of these walls are giant flattened stones called *kagami-ishi* (“mirror stones”), which were placed there as displays of power. Even in its ruined form, the site has remained influential—it inspired renowned composer Taki Rentaro (1879–1903), who spent part of his childhood in Taketa, to write his most famous song, *Kojo no tsuki* (The Moon over the Ruined Castle). Today, a statue of Taki stands at the site.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

岡城跡

岡城跡は、竹田市街を見下ろす小高い丘の上にあり、800年以上の歴史を誇る。険しい山腹に立ち並ぶ手強い石垣群や、かつて城を攻撃から守っていた城壁の跡から、江戸時代（1603～1867年）の特徴的な城郭建築を垣間見ることができる。山頂からはくじゅう連山や祖母山、活火山である阿蘇山を望むことができる。

源平合戦（1180-1185）の英雄、源義経（1159-1189）をかくまうために、1185年にこの丘に建造物が建てられたのが始まりとされている。源氏と平氏の争いは日本最初の武家政権である鎌倉幕府の設立につながった。14世紀に、大友氏の領であった地域を監督していた志賀氏によって常設の城が築かれた。

1593年、朝鮮半島への侵攻に失敗した罰として、志賀家は事実上の日本の支配者である豊臣秀吉（1537-1598）によって岡城からの退去を命じられた。志賀家に代わって中川家が現在の兵庫県から移り住んだ。中川氏は277年間岡城に居城を構えたが、武家支配を終わらせ、新政府が日本の近代化を開始した明治維新の影響を受け、岡城は1874年に取り壊された。

岡城には中川家が築いた城郭の多くが残っている。その中には、山頂への道沿いにある堂々たる石垣が代表的である。石垣の一部には「鏡石」と呼ばれる、権力の象徴であった巨大な平らな石が埋め込まれている。跡となった今でも、この遺跡は影響力を持ち続けている。幼少期を竹田で過ごした有名な作曲家、瀧廉太郎（1879-1903）は、岡城にインスパイアされて代表曲「荒城の月」を作曲したとされている。現在、この場所には瀧の銅像も立っている。

016-002

Taketa History and Culture Museum

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 竹田市歴史文化館 / 竹田市歴史文化館

【想定媒体】 Webページ / パンフレット / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Taketa History and Culture Museum

The history and present-day culture of Taketa are the focus of this moderately sized museum, which doubles as a guidance center for Oka Castle and also hosts art exhibitions.

Most of the museum is dedicated to the history of Oka Castle. A film projected onto one of the walls brings the castle’s past to life, and exhibits offer a deep dive into topics such as the construction of the stronghold’s towering stone ramparts and other defenses. A scale model of the Oka Castle Ruins gives an overview of the site, which extends across a flat-topped hill high above the city.

Other displays highlight notable historical figures with links to Taketa, including composer Taki Rentaro (1879–1903), children’s book author and lyricist Sato Yoshimi (1905–1968), and painter Tanomura Chikuden (1777–1835). Regular exhibitions of art with a connection to Taketa are held in the Citizen’s Gallery.

The museum building was reconstructed in 2020 and designed by renowned architect Kuma Kengo. The structure blends in with its surroundings, and the architecture includes several references to the city of Taketa: the ornamental bamboo on the building’s exterior is sourced from Taketa—the name means “bamboo field”—and other parts of Oita Prefecture, while the flooring of the approach to the main entrance contains pieces of roof tile from the demolished Oka Castle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

竹田市歴史文化館

竹田の歴史と現在の文化の両方が、このほどよい大きさの博物館で紹介されている。その建物は岡城のガイダンスセンターを兼ねており、美術展も開催されている。

館内の大部分は岡城の歴史に捧げられている。壁一面に映し出される映像は岡城の往時を偲ばせる。関連展示では、岡城のそびえ立つ石垣やその他の防御施設の建設など、城の歴史について深く掘り下げることができる。岡城跡の縮尺模型は、市街地を見下ろす高台の平坦な丘に広がる場所をわかりやすく表現している。

その他にも、作曲家の瀧廉太郎（1879-1903）、絵本作家・作詞家の佐藤義美（1905-1968）、画家の田能村竹田（1777-1835）など、竹田にゆかりのある著名な歴史上の人物が紹介されている。竹田にゆかりのある美術品の展覧会は、市民ギャラリーで定期的に行われている。

2020年に改築された博物館の建物は有名な建築家の隈研吾によって設計された。周囲の環境に溶け込むことを意図しており、その建築には竹田の街に関するいくつかの言及が含まれている。建物の外側に飾られている竹は、竹田市をはじめとする大分県内の木材が使われており、玄関へ続く通路の床には取り壊された岡城の瓦が使われている。

016-003

A Mysterious Bell and the Story of Christianity in Taketa 竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 竹田市歴史文化館 / 重要文化財「銅鐘」（サンチャゴの鐘）

【想定媒体】 Webページ / パンフレット / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

A Mysterious Bell and the Story of Christianity in Taketa

There is a sense of mystery about the Santiago Hospital Bell, which is encased in a glass box inside a darkened room of the Taketa History and Culture Museum. While the name of the hospital and the year of production—1612—are engraved on the 108-kilogram bell, subtler signs tell more of the story of this enigmatic piece of metalwork. The two distinct lines stretching around the bell suggest it was cast in three parts. This method was traditionally used when casting Buddhist bells in Japan.

The Santiago Hospital was a Christian medical facility in the city of Nagasaki, where the religion took hold in the late sixteenth and early seventeenth centuries. Records show the hospital was expanded in 1612, and the bell was likely cast for that occasion.

Around the same time, however, Christians in Japan began to be considered a threat by the government and faced increasing persecution. In one of the most infamous incidents, 26 Catholics were executed by crucifixion in Nagasaki in 1597. As the crackdown policies continued, the Santiago Hospital was forced to close down in 1614.

How the Santiago Hospital Bell made its way from Nagasaki to Taketa is unclear, but what is known is that it was hidden in Oka Castle, above the town. Decades before the Santiago Hospital closed, Taketa had become known as a safe haven for Christians under the governorship of daimyo lord Shiga Chikayoshi (1566–1660), who converted to the religion and took the name Don Paulo.

The Shiga family was forced to leave Taketa in 1593, and the Nakagawa family replaced them as lords of Oka Castle. The Nakagawa initially adopted a policy of leniency toward Christians; crackdowns on the religion gradually intensified, however, and many believers were punished.

Since the sixteenth century, many legends and rumors have been told about Taketa's Christian population. One of these stories concerns a cave at the end of Bukeyashiki-dori (Samurai Residence Street) in the old town. As the cave's walls appear to have been carved and decorated to resemble a church, the site is rumored to have been a former Christian place of worship.

Oka Castle was demolished in 1874 in the wake of the Meiji Restoration, which ended warrior rule and sparked the modernization of the country. At this time, the Santiago Hospital Bell was moved to Nakagawa Shrine, the Nakagawa family's private site of worship, where it was discovered before being put on display in the Taketa History and Culture Museum.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

謎の鐘と竹田のキリシタン歴史

竹田市歴史文化館内の暗い部屋にあるガラスの箱に収められたサンチャゴ病院の鐘は、謎めいた雰囲気を出している。重さ108キロの鐘には、病院名と1612年という製造年が刻まれているが、それ以外のあまり目立たないサインが、この不思議な金属工芸品のストーリーを語っている。鐘の周囲に伸びる2本の明瞭な線は、鐘が3つの部分に分かれて鑄造されたことを示唆している。この方法は、日本で梵鐘を鑄造する際に伝統的に用いられてきた。

サンチャゴ病院は、16世紀後半から17世紀初頭にかけてキリスト教が定着した長崎のキリスト教医療施設だった。記録によると、病院は1612年に増築されており、この鐘はこの機会に鑄造された可能性が高い。

しかし同じ頃、日本のキリスト教徒は政府から脅威とみなされるようになり、迫害が強まった。最も悪名高い事件のひとつは、1597年に長崎で起こった26人のカトリック信者の磔刑である。弾圧政策が続く中、サンチャゴ病院は1614年に閉鎖を余儀なくされた。

サンチャゴ病院の鐘がどのようにして長崎から竹田まで運ばれたのかは不明だが、わかっているのは、町の上にある岡城に隠されていたということだ。病院が閉鎖される数十年前から、竹田は改宗した大名、ドン・パウロという洗礼名を得た志賀親次（1566-1660）の統治下でキリシタンの安住の地として知られるようになっていた。

志賀家が1593年に岡城を去らなければならなかった後、新たに岡城主となったのは中川家である。中川家は、当初はキリシタンに寛大な政策を続けたが、次第にキリシタンに対する取締りは厳しくなり、多くのキリシタンが苦難の道を歩んだ。

竹田にはキリシタンにまつわるたくさんの伝承が残る。武家屋敷通りの奥にたたずむ「キリシタン洞窟礼拝堂」もその一つで、岩壁に教会を思わせる洞窟が掘られ、キリスト教の礼拝堂ではないかと考えられてきた。

岡城は1874年、武家支配を終わらせ、日本の近代化のきっかけとなった明治維新の後に取り壊された。この時、サンチャゴの鐘は中川家の神社である中川神社に移された。そこで見つかり、現在は竹田市歴史文化館で展示されている。

016-004

Former Residence of Tanomura Chikuden

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 史跡旧竹田荘（国指定史跡） / 旧竹田荘
【想定媒体】 Webページ / パンフレット / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Former Residence of Tanomura Chikuden

Tanomura Chikuden (1777–1835) was an influential artist who practiced the Nanga style of painting, in which works also feature a poem and calligraphy. The house where he was born is preserved as a museum that showcases his work and replicates the atmosphere in which he created his art.

Chikuden’s former residence is on a hill above the Taketa History and Culture Museum and is accessible via an elevator from the museum. One of the two buildings on the site is dedicated to the display of hanging scrolls by Chikuden and other painters from the local area. Chikuden’s work in the Nanga style, which flourished during his time, inspired many local painters to follow in his footsteps. This eventually led to a separate artistic movement known as Bungo Nanga, named after Bungo Province (now Oita Prefecture).

The other building is the preserved house in which Chikuden was born, an Edo-period (1603–1867) home with tatami flooring and shoji panels. Chikuden spent most of his life in Taketa and created many pieces of art in and around the traditional wooden structure, which was renovated in 1808.

Chikuden’s works are distinguished by their depiction of familiar landscapes, which differed from the imaginary worlds often evoked by other Nanga artists. When looking out over the town from the second floor of Chikuden’s former home, one may notice similarities between the surroundings and the landscapes in his art.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧竹田荘

田能村竹田(1777-1835)は、詩・書・画の三位一体による南画を実践した画家である。竹田の生家は、彼の作品を展示する美術館として保存され、彼が作品を制作した雰囲気再現している。

竹田の生家は竹田歴史文化館の裏の高台にあり、歴史文化館からエレベーターで上がることができる。敷地内にある2棟の建物のうち1棟は竹田や地元の画家の掛軸を展示している。竹田は同時代に盛んだった南画に影響を受けており、彼の作品に触発された地元の画家たちが竹田に影響を受けた。その結果、豊後国（現在の大分県）にちなんで「豊後南画」と呼ばれる独立した芸術運動が生まれた。

もうひとつの建物は、畳や障子のある江戸時代（1603-1867）の竹田の生家を保存したものだ。竹田で生涯の大半を過ごした竹田は、1808年に改築された伝統的な木造建築の中や周辺で多くの作品を制作した。

竹田の作品の特徴は他の南画家たちが描くような夢の世界とは異なり、身近な風景を描いている。旧宅の2階からは町を見渡すことができる。竹田（たけた）の風景は竹田（ちくでん）の絵の風景と良く似ていることがわかる。

016-005

Tanomura Chikuden

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 史跡旧竹田荘（国指定史跡） / 田能村竹田

【想定媒体】 Webページ / パンフレット / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Tanomura Chikuden

Tanomura Chikuden (1777–1835) was born in what is now the city of Taketa and went on to become one of the most influential Japanese painters of his time. His work, which appeared mainly on hanging scrolls, remains sought after today.

Chikuden was born into a family of doctors but was unable to practice medicine due to poor health. Instead, he devoted himself to the study of Chinese poetry and painting. He taught Confucianism in Taketa schools until the age of 37, after which he focused solely on his painting, traveling around the country to interact with other artists.

Chikuden worked in the Nanga style of painting, in which an artwork was made up of three parts: a Chinese poem, calligraphy, and a painting. These works appeared mainly on hanging scrolls displayed in the tokonoma alcove, a feature of guest rooms in the homes of the upper class of the time.

Chikuden stands out from his peers in details such as his soft and delicate brush strokes. He painted scenes that resembled those found in his hometown of Taketa, in a way similar to the Nanga style's custom of depicting fictional landscapes.

These differences ultimately led to the emergence of a new Nanga movement known as Bungo Nanga, named after Bungo Province (now Oita Prefecture). Chikuden passed down his ideas to his disciples, who developed them further after their master's death. Bungo Nanga painting remained vigorous until the 1930s.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

田能村竹田

田能村竹田（1777-1835）は現在竹田市である地域に生まれ、当時最も影響力のあった日本画家の一人となった。主に掛け軸に描かれた彼の作品は、今でも高い人気を誇っている。

竹田は医者之家に生まれたが、不健康のため医業を営むことはできなかった。その代わり、漢詩と絵画の研究に力を注いだ。37歳まで竹田で儒学を教え、その後は画業に専念し、全国を旅して画家たちと交流した。

竹田は漢詩、書、画の三部構成からなる南画を実践した。この作品は主に、当時の上流階級の家の客間などにあった床の間に飾られる掛け軸に描かれた。

竹田は、独自の柔らかで繊細な筆致などで他の画家と一線を画している。故郷の竹田に似た風景を描き、虚構の風景を描く南画と似た作風を実施した。

この違いが、豊後国（現在の大分県）にちなんで「豊後南画」と呼ばれる新たな南画運動の誕生につながった。竹田はその思想を弟子たちに伝え、弟子たちは師の死後、その思想をさらに発展させた。豊後南画は1930年代まで流行した。

016-006

Taki Rentaro Memorial Museum

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 瀧廉太郎記念館 / 瀧廉太郎旧宅

【想定媒体】 Webページ / パンフレット / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Taki Rentaro Memorial Museum

Taki Rentaro (1879–1903) lived to be only 23 years old but remains among the important composers in the history of modern Japanese music. He spent two and a half years of his short life in Taketa, and this museum seeks to recreate the environment that inspired his work.

Taki was born in Tokyo and moved around the country several times in his childhood due to his father's job with the government. When Rentaro was 12 years old, his father became governor of what is now Taketa, and the family moved into a house assigned to the district governor. This building has been reconstructed as the Taki Rentaro Memorial Museum.

The house provides a glimpse into life during the Meiji era (1868–1912), with Western items displayed in traditional-style rooms with tatami flooring, shoji sliding panels, and a traditional Japanese garden. Display panels tell the story of Taki Rentaro and the history behind many of his compositions. During his time in Taketa, Taki learned how to play the piano in a local school not far from the Oka Castle Ruins. It was this site that inspired what is perhaps his most famous piece of music, *Kojo no tsuki* (The Moon over the Ruined Castle). Handwritten sheet music for several of Taki's compositions are exhibited at the museum.

Taki graduated from the Tokyo Music School in 1901 and in the same year moved to Leipzig, Germany, to continue his studies. There, he fell seriously ill with tuberculosis, and he returned to Japan after only one year. The museum displays include letters

written by Taki during his final years in the city of Oita, where he died.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

瀧廉太郎記念館

瀧廉太郎（1879-1903）はわずか23歳の生涯を閉じたが、日本の近代音楽史において重要な作曲家の一人である。その短い生涯のうち2年半を竹田で過ごした瀧の作品にインスピレーションを与えた環境を再現したのが、このミュージアムである。

瀧は東京で生まれ、幼少期は父親の役所勤めの関係で全国を転々としていた。廉太郎が12歳の時、父親が現在の竹田市を含む地域の知事となり、一家は知事に割り当てられた家に移り住んだ。この建物は瀧廉太郎記念館として再建された。

畳敷き、障子、伝統的な日本庭園に西洋の品々が展示され、明治時代（1868-1912）の生活を垣間見ることができる。展示パネルは、瀧廉太郎の物語と、彼の多くの作品の背景にある歴史を物語っている。竹田滞在中、瀧は岡城跡からほど近い地元の学校でピアノの手ほどきを受けた。おそらく彼の最も有名な曲であろう『荒城の月』は、この岡城跡からインスピレーションを得て作曲されたと考えられる。記念館には瀧が作曲したいくつかの曲の手書きの楽譜が展示されている。

瀧は1901年に東京音楽学校を卒業し、同年ドイツのライプツィヒに留学した。そこで結核の大病を患い、わずか1年で帰国した。館内には、瀧が晩年を過ごした大分市での手紙も展示されている。

016-007

Taki Rentaro

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 瀧廉太郎記念館 / 瀧廉太郎

【想定媒体】 Webページ / パンフレット / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Taki Rentaro

Taki Rentaro (1879–1903) is noted as among the influential composers of modern Japanese music. He was the first to write music in Japan using Western techniques, and his most prominent works are still cherished today.

Taki Rentaro was born in Tokyo and moved around the country several times in his childhood due to his father's job with the government. One of the most influential periods of his life started when his father was appointed governor of what is now Taketa. Rentaro lived in the town for two and half years between the ages of 12 and 15 and learned how to play the piano in school. This school was near the Oka Castle Ruins, the site said to have inspired *Kojo no tsuki* (The Moon over the Ruined Castle), one of Taki's best-known compositions.

Taki graduated from the Tokyo Music School in 1901 and soon after traveled to Leipzig, Germany to continue his studies. However, he contracted tuberculosis in Leipzig and fell seriously ill. He returned to Japan and spent his final years in the city of Oita, where he passed away at only 23 years of age.

Taki's adoption of Western techniques sparked a revolution in Japanese music. *Kojo no tsuki* has been featured in school textbooks for more than a century, and pieces such as *Oshogatsu* (New Year's Celebration) and *Hana* (Flower) also remain popular to this day.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

瀧廉太郎

瀧廉太郎（1879-1903）は、日本の近代音楽史上最も影響力のある作曲家の一人として知られている。日本で初めて西洋音楽の技法を使って作曲し、その代表的な作品は現在でも聴かれている。

瀧廉太郎は東京生まれ、幼少期は父親の役所勤めの関係で全国を転々としていた。父親が現在の竹田市を含む地域の知事に任命された時から、彼の人生において特に影響が強かった時期が訪れた。廉太郎は12歳から15歳までの2年半をこの町で過ごし、学校でピアノを習った。この学校は、瀧の代表作のひとつである「荒城の月」のモチーフになったといわれる岡城跡の近くにあった。

瀧は1901年に東京音楽学校を卒業し、その後ドイツのライプツィヒに留学した。しかし、ライプツィヒで結核を患い、重病となる。帰国後は大分市で晩年を過ごし、わずか23歳でこの世を去った。

西洋の奏法を取り入れた瀧は、日本の音楽に革命を起こした。「荒城の月」は100年以上にわたって学校の教科書に掲載され、「お正月」や「花」などの曲も今日まで親しまれている。

016-008

Sato Yoshimi Memorial Museum

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 佐藤義美記念館 / 佐藤義美記念館

【想定媒体】 Webページ / その他 (アプリ)

できあがった英語解説文

Sato Yoshimi Memorial Museum

Sato Yoshimi (1905–1968) was a prolific children’s author and lyricist who produced more than 3,000 works during his lifetime. This museum in Sato’s hometown of Taketa is modeled on his house in Zushi, Kanagawa Prefecture, where he spent his later years. Displayed inside are examples of his work and many of his favorite items, including jazz records and Western clothing, which offer a glimpse into Sato’s lifestyle, especially in the years following World War II.

Sato was born in Taketa in 1905, but his family moved to Kagoshima when he was seven. He returned to Taketa at age 14 for another year before moving to Yokohama. He would spend the rest of his life there and in Tokyo, attending Waseda University. Sato was heavily influenced by Western literature, including the works of T. S. Elliot and W. H. Auden. His early writing ranged from children’s songs to modern poetry, and he produced various works on anti-war themes. In 1930s and 1940s Japan, such views were treated with suspicion, and Sato’s writing was banned during World War II.

After the war, Sato dedicated himself to writing for children. He had always enjoyed this genre the most, and he often spoke about his desire to elevate the art of children’s literature. During this phase of his life, he wrote his best-known work, a song titled *Inu no omawari-san* (Dog Policeman), which tells the story of a furry police officer who finds a lost kitten. The song remains popular today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

佐藤義美記念館

佐藤義美（1905-1968）は、生涯に3,000点以上の作品を発表した多作な児童文学者・作詞家である。佐藤の故郷である竹田市にあるこの美術館は、晩年を過ごした神奈川県逗子市の自宅をモデルにしている。館内には作品のほか、ジャズのレコードや西洋の衣類など、佐藤の愛用品が数多く展示されており、特に第二次世界大戦後の佐藤のライフスタイルを垣間見ることができる。

佐藤は1905年に竹田で生まれたが、7歳の時に一家で鹿児島に移り住んだ。14歳で竹田に戻り、さらに1年過ごした後、横浜に移り住んだ。その後、東京の早稲田大学で学ぶ。T.S.エリオットやW.H.オーデンなど西洋文学の影響を強く受けた。初期の著作は童謡から現代詩まで幅広く、反戦をテーマにした作品も発表した。1930年代から40年代にかけての日本ではこのような意見は疑惑の目で扱われ、第二次世界大戦中、佐藤の作品は禁止された。

戦後、佐藤は児童文学に専念した。彼は常にこのジャンルを最も楽しんでおり、児童文学の芸術性を高めたいという願望をしばしば口にしていた。代表作『犬のおまわりさん』は、迷子の子猫を救う毛むくじらの警察官の物語である。この歌は今日でも人気がある。

016-009

Taketa Onsen Hanamizuki

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 竹田温泉花水月 / 竹田温泉花水月

【想定媒体】 Webページ / パンフレット / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Taketa Onsen Hanamizuki

The Taketa Onsen Hanamizuki complex on the edge of the former castle town of Taketa consists of a hot-spring bathhouse and a gift shop.

Hot springs, including at nearby Nagayu Onsen, have long been enjoyed by the people of Taketa, but Hanamizuki was the first bathing facility in the immediate vicinity of the former castle town when it opened in 2001. Its traditional-style architecture was inspired by the city's history, including its local industry. For instance, a small waterfall in the baths is shaped like the Hokusui Dam, a heritage-listed structure located outside central Taketa.

The bathhouse is on the second floor, while the first floor houses a shop selling a variety of local souvenirs. These include food products made with *kabosu*, a citrus fruit that resembles a lime. Saffron is another noteworthy souvenir; around 80 percent of the saffron produced in Japan comes from Taketa.

Taketa Onsen Hanamizuki is also the place to buy the Castle Town Passport, a ticket that includes discounted entry to five major attractions in Taketa, including the bathhouse, the Oka Castle Ruins, and the Taketa History and Culture Museum. It is valid for two days and costs ¥800 for adults and ¥500 for children of elementary or junior high school age.

Outside the main entrance of Taketa Onsen Hanamizuki is a free foot bath where

visitors can soothe tired toes on weekends between noon and 5:00 p.m.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

竹田温泉花水月

竹田の旧城下町のすぐ近くにある竹田温泉花水月は浴場とお土産店から成る施設です。

近くの長湯温泉を含め、竹田の人々には古くから温泉が親しまれてきたが、2001年にオープンした「花水月」は、かつての城下町のすぐ近くで最初の入浴施設となった。その伝統風の建築様式は産業遺産を含む竹田市の歴史にインスパイアされている。例えば、浴場内の小さな滝は、竹田市中心部の郊外にある遺産登録建造物である白水ダムの形をしている。

浴場は2階にあり、1階は土産物の販売スペースになっている。竹田市の特産品であるライムに似た柑橘類のかぼすを使った食品などだ。サフランもお土産として販売され、日本のサフランの約80%は竹田で生産されているからだ。

竹田温泉花水月で買うことができる城下町パスポートは、浴場、岡城跡、竹田歴史文化館など、竹田の5つの主要な観光スポットに割引料金で入場できるチケットである。2日間有効で、大人800円、小中学生500円。

竹田温泉花水月の正面玄関の外には無料の足湯があり、週末の正午から午後5時までの間、疲れた足を休めることができる。

016-010

Taketa Castle Town Plaza

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 竹田市城下町交流プラザ / 竹田市城下町交流プラザ
【想定媒体】 Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Taketa Castle Town Plaza

This structure in the center of Taketa was designed by Kuma Kengo, the architect of buildings such as the Japan National Stadium in Tokyo and the V&A Dundee design museum in Scotland. The exterior of Taketa Castle Town Plaza is decorated with bamboo poles, a material chosen in reference to the name of the city, which means “bamboo field.”

The Plaza is primarily a community center. Its outdoor deck is often used for concerts, while festivals with food trucks and stalls as well as events such as temporary “beer gardens” are held in the parking lot. A bus stop is also part of the complex.

The Plaza was built in 2020 as part of a project that also included the renovation of the Taketa History and Culture Museum, also designed by Kuma Kengo. The eye-catching use of bamboo creates a visual harmony between the two buildings.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

竹田市城下町交流プラザ

竹田市の中心部にあるこの建築物は、東京の日本国立競技場やスコットランドのV&Aダンディー・デザイン・ミュージアムなどを手がけた建築家、隈研吾によって設計された。竹田市城下町交流プラザの外観は竹竿で飾られている。“竹田 ”という市名にちなんでこの素材が選ばれた。

プラザは主にコミュニティセンターとして利用されている。屋外デッキではコンサートが開かれ、駐車場

では屋台やビアガーデンなどのイベントが開催される。バス停も複合施設の一部である。

このプラザは2020年、竹田歴史文化館の改修を含むプロジェクトの一環として建設され、隈研吾が両方の設計を担当した。建築家は竹を人目を引くように使うことで、2つの建物の視覚的な調和を実現した。

016-011

Saikoji Temple

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 西光寺 / 西光寺

【想定媒体】 Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Saikoji Temple

Saikoji is the oldest temple in the former castle town of Taketa and has played an important role in the city's history. Its present grounds encompass a main temple building, a gate, and a bell tower, in addition to a graveyard that extends across a hill overlooking the city.

Saikoji is an ancestral temple of the Nakagawa family, which governed what is now Taketa during the Edo period (1603–1867). The family came from Hyogo Prefecture in central Japan, which is where Saikoji was originally located. When the Nakagawa relocated to Taketa in the late sixteenth century on the orders of Toyotomi Hideyoshi (1537–1598), the de facto ruler of Japan at the time, the temple was also moved. Saikoji was initially located within the castle town, near where the city library stands today, but it was moved to its current site on the edge of town in 1679.

The current main building has a number of distinctive features. On the second floor are small windows that served as defensive ports through which arrows and bullets could be fired. The main building is not open to the public, but the grounds can be viewed freely. Both the gate and bell tower are original structures from the late seventeenth century.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西光寺

西光寺は竹田の旧城下町の最古の寺院で、市の歴史において重要な役割を果たしてきた。現在の境内には本堂、山門、鐘楼のほか、市街地を見下ろす丘の上に墓地が広がっている。

西光寺は江戸時代（1603～1867年）に現在の竹田市を治めていた中川家の菩提寺である。中川家は兵庫県出身で、西光寺ももともとそこにあった。16世紀後半、当時の日本の事実上の支配者であった豊臣秀吉（1537-1598）の命により中川家が竹田に移った際、寺も移された。西光寺は当初、城下町の中（現在の図書館の近く）に建てられましたが、1679年に町はずれの現在の場所に移された。

現在の本堂にはいくつかの興味深い特徴がある。2階には小さな窓があり、そこから矢や鉄砲を放つことができた。本堂は一般公開されていないが、境内は自由に見学できる。門と鐘楼はどちらも17世紀後半に建てられた建築物である。

016-012

Aizendo Hall

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 願成院 / 重要文化財「願成院本堂（愛染堂）」

【想定媒体】 Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Aizendo Hall

Aizendo Hall was built in 1635, making it the oldest wooden structure in Taketa. It began as part of a temple called Daishoin, but in 1874 it was converted into the new main hall of Ganjoin Temple, the principal site of worship at Oka Castle. Ganjoin was relocated to the hilltop site of Aizendo Hall after the castle was demolished.

The square structure is an intriguing example of temple architecture from the early Edo period (1603–1867). Distinctive features include an overhanging tent roof, which is supported by an intricate construction of interlocking wooden brackets. Faces are carved into the pieces at the corners of the roof, the edges of which are held up by sculptures of small demon-like creatures called *jaki*.

Aizendo is thought to be beneficial for matchmaking; the temple's main deity, Aizen Myo-o, is believed to control love, marriage, and household harmony.

The interior walls of Aizendo are decorated with murals depicting heavenly beings such as the *tennyo*, celestial figures that lead the dead to paradise. Due to the delicate nature of these seventeenth-century murals, the hall is only open to the public twice a year, in spring and autumn. Aizendo has been designated an Important Cultural Property.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

愛染堂

愛染堂は1635年に建てられた竹田市最古の木造建築物である。もともと大勝院という寺の一部でしたが、岡城が廃城となった後、城にあった願成院が1874年にこの丘の上に移転してきて、愛染堂が願成院の本堂となった。

当初は岡城の最も重要な寺であった願成寺の本堂であったが、岡城が取り壊された後、1874年に現在の丘の上に移築された。

方形の建物は、江戸時代（1603-1867）初期の寺院建築の興味深い例である。特徴的なのは、張り出した宝形造の屋根で、複雑に組み合わされた木片で支えられている。屋根の四隅には顔が彫られ、その縁はジャキと呼ばれる小さな鬼のような生き物の彫刻で支えられている。

愛染堂の本尊である愛染明王は、恋愛、結婚、家庭円満を司ると信じられているため、このお堂は縁結びのスポットとして人気がある。

愛染堂の内壁は、死者を極楽浄土に導く天使のような「天女」など、仏教の天国を描いた壁画で飾られている。17世紀に描かれた壁画はデリケートなため、一般公開は春と秋の年2回のみ。愛染堂は重要文化財に指定されている。

016-013

Ogimori Inari Shrine

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 扇森稲荷神社 / 扇森稲荷神社

【想定媒体】 Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Ogimori Inari Shrine

Ogimori Inari Shrine is the largest Shinto shrine in Taketa and one of the most prominent Inari shrines in Kyushu. The Inari deity is associated with rice cultivation and believed to ensure an abundant harvest and protect the local community. As is customary at many Inari shrines, the approach to the shrine encompasses a succession of bright red torii gates donated by devotees. Statues of foxes, believed to be the messengers of the Inari deity, can be seen in many sizes throughout the grounds.

There has been a shrine on the site since 1616, when Nakagawa Hisamori (1594–1653), the lord of the Oka domain (now the area around Taketa), established a small hillside sanctuary. The present-day shrine took shape in the mid-1800s, when Hisamori's descendant Hisaaki (1820–1889) governed the Oka domain. It is said that Hisaaki dreamed of Inari warning him about assassins ahead of a journey to Edo (now Tokyo), and he built Ogimori Inari out of gratitude to the deity.

The shrine is particularly busy during the first few days of the new year, when worshippers from throughout Kyushu visit to pray for success and protection in the year ahead. Visiting Ogimori Inari at other times of the year is a more peaceful experience, and sweeping views over Taketa can be enjoyed from the top of the stone staircase leading up to the shrine.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

扇森稲荷神社

扇森稲荷神社は竹田市最大の神社であり、九州でも有数の稲荷神社である。稲荷神は稲作に関連しており、豊作をもたらし、地域社会を守護すると信じられている。多くの稲荷神社の慣例として、扇森稲荷は信者から寄進された朱色の鳥居をくぐって参拝する。境内には稲荷の使いとされる大小さまざまな狐の像がある。

1616年、岡藩主中川久盛（1594-1653）が小さな山腹の祠を設けて以来、この地に神社があった。現在の神社は、久盛の子孫である久昭（1820-1889）が岡藩を治めていた1800年代半ばに形作られた。久昭が江戸への旅立ちの際、稲荷の夢を見て刺客を知らせたことから、神への感謝を込めて扇森稲荷を建立したと伝えられている。

新年を迎える数日間は、九州各地から一年の成功と守護を祈願する参拝者で賑わう。それ以外の季節に扇森稲荷を訪れると、より穏やかな気持ちになれる。神社に続く石段の上からは、竹田の町を一望することができる。

016-014

Hakusui Dam

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 白水ダム / 重要文化財「白水溜池堰堤水利施設」

【想定媒体】 Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Hakusui Dam

The Hakusui Dam was built along the Ono River in 1938 to solve irrigation issues that had long hampered farming in Taketa. Erosion had caused local rivers to flow in ravines from which it was difficult to draw water, and farmers had to undertake the arduous task of maintaining irrigation canals between the rivers' distant upper reaches and their fields. The dam rectified these problems and still helps maintain a steady water supply for farms. The dam's sole purpose is irrigation—at 14 meters high and just under 90 meters wide, it is much smaller and more intricate than most dams used to generate electricity.

Curves and steps on the edges of the dam control the speed of the water to prevent erosion farther down the river. As the water flows over the center of the structure, it appears white—hence the name Hakusui, or “white water.” Due to its ingenious engineering and aesthetic beauty, the dam has been designated an Important Cultural Property.

The most popular time to visit the dam is in autumn, when the seasonal foliage colors the surrounding hillsides shades of red and yellow. The peaceful sight and sound of the dam's flowing water can be enjoyed from an open area near the parking lot. Note that the dam is about a 30-minute drive from central Taketa and cannot be reached by public transport.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

白水ダム

白水ダムは1938年、竹田の農家を長年悩まされてきた水供給の問題を解決するために、大野川沿いに建設された。浸食により川底が深く、近くの川から田畑に水を引くのは困難であったため、遠くの上流部から水路により水を引いてくる必要があった。ダムはこれらの問題を解決し、現在でも農場に安定した水を供給するのに役立っている。灌漑のみを目的としているダムは高さ14メートル、幅90メートル弱で、発電に使われるダムよりもはるかに小さく、巧妙に作られている。

ダムの縁にはカーブや段差があり、水の流速をコントロールして川下への浸食を防いでいる。水が構造物の中央を流れるとき、白く見えることから「白水」と呼ばれるようになった。その独創的な技術と景観美から、ダムは重要文化財に指定されている。

ダムを訪れるのは、周囲の山肌を赤や黄色に染める紅葉の季節に合わせた秋が多い。駐車場近くの広場からは、穏やかな水の流れと音を楽しむことができる。白水ダムは竹田市中心部から車で約30分かかり、公共交通機関では行けないので注意が必要だ。

016-015

Welcome to Taketa

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 豊後竹田駅 / 豊後竹田駅

【想定媒体】 Webページ /その他 (アプリ)

できあがった英語解説文

Welcome to Taketa

The city of Taketa, in Kyushu's Oita Prefecture, lies in a valley at the foot of the Sobo and Kuju mountain ranges, to the east of the vast Mt. Aso caldera. It takes just over an hour by train from the city of Oita to reach Bungo-Taketa Station, which is situated at the edge of what was once a prosperous castle town. From Beppu, the trip by rail to Taketa takes about an hour and a half.

The history of Taketa is closely linked with the former site of Oka Castle. A fortress was first built on the site between the Inaba and Ono Rivers in the late 1100s, and a permanent castle was constructed in the 1590s. Towering stone ramparts and gates remain today atop this hill overlooking the city.

The castle town of Taketa was developed from the 1590s to the 1660s, and its layout has remained mostly unchanged since then. Narrow streets lead to historic sites such as Saikoji Temple and Aizendo Hall, which was built in 1635 and is now the oldest wooden structure in Taketa.

Taketa is moving with the times, as exemplified by the renovation of Bungo-Taketa Station to mark its 100th anniversary in 2024. The station's tourist information center provides guidance in English in addition to rental bicycles, luggage storage, and free wi-fi.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

竹田へようこそ

九州の大分県にある竹田市は、広大な阿蘇カルデラの東側、祖母山とくじゅう山脈の麓の谷間に位置する。大分市内から、かつて城下町として栄えた竹田の端に位置する豊後竹田駅までは電車で1時間強。別府から竹田までは鉄道で約1時間半。

竹田の歴史は、今は廃墟となった岡城と密接に結びついている。1100年代後半に要塞が築かれたのが始まりで、1590年代には恒久的な城が築かれた。稲葉川と大野川に挟まれた街を見下ろす丘の上に、そびえ立つ石垣や城門が今も残っている。

竹田の城下町は1590年代から1660年代にかけて開発され、そのレイアウトはそれ以来ほとんど変わっていない。西光寺や1635年に建てられ、現在竹田で最古の木造建築物である愛染堂などの史跡へと続く細い道が魅力的。

2024年に開業100周年を迎えた豊後竹田駅の改修工事に代表されるように、竹田は時代とともに歩んでいる。駅構内の観光案内所ではレンタサイクル、荷物預かり所、無料Wi-Fiのほか、英語での案内も行っている。

016-016

Taketa Castle Town

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 竹田市 / 城下町の街並み

【想定媒体】 Webページ / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Taketa Castle Town

Walking through Taketa means following in the footsteps of the people who lived there more than 400 years ago. The layout of the former castle town is almost unchanged from the original plan imagined by Nakagawa Hideshige (1570–1612), the first lord of the Oka domain (modern-day Taketa).

The town developed below Oka Castle, a stronghold built on the flattened top of a hill. The first fortress on the hill was established in the twelfth century, but when the Nakagawa family began governing the domain in 1594, they constructed a stone castle of their own and began planning the castle town that would become Taketa. At its center were merchant houses, while samurai lived in the hilly outskirts.

In addition to the general shape of the town, many buildings have survived from the time when the Nakagawa family governed. Homes, storehouses, and other buildings from the 1800s line the streets, and fine residences built for the warrior class can be viewed along Bukeyashiki-dori (Samurai Residence Street) on the southern edge of town. Other noteworthy historic structures include the former homes of painter Tanomura Chikuden (1777–1835) and composer Taki Rentaro (1879–1903).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

竹田の城下町

竹田を歩くということは、400年以上前の人々の足跡をたどるということだ。旧城下町の配置は、岡

藩（現在の竹田市）の初代藩主であった中川秀成（1570-1612）が構想した当初の計画からほとんど変わっていない。

竹田は丘の頂上を平らにして築かれた岡城の下に開発された。丘の上に最初に城が築かれたのは12世紀だが、1594年に中川家が藩政を執り始めると、自ら石造りの城を築き、竹田となる城下町の計画を始めた。中心部には商家が立ち並び、郊外の丘陵地帯には武士が住んでいた。

町並みの大まかな形だけでなく、中川家が竹田を治めていた頃の建物も数多く残っている。町の通りにはいくつかの1800年代の家屋、土蔵、その他の建物をみることができ、南端の武家屋敷通りには武家階級の住居が立ち並ぶ。その他、画家・田能村竹田（1777-1835）や作曲家・瀧廉太郎（1879-1903）の旧宅など、歴史的建造物も多い。

016-017

Hime Daruma

竹田市多言語解説協議会

【タイトル】 ごとう姫だるま工房 / 姫だるま

【想定媒体】 Webページ / パンフレット / その他（アプリ）

できあがった英語解説文

Hime Daruma

Visitors walking around Taketa are bound to notice gently smiling red and white dolls in shops, restaurants, and even Bungo-Taketa Station. These Hime Daruma dolls are unique to Taketa and have become a distinctive part of the city's culture. Daruma dolls, considered talismans for good luck, are common throughout Japan. Most of these dolls are male, whereas the Hime Daruma are female. They date back to the Edo period (1603–1867) and were traditionally tossed into houses to celebrate New Year.

Hime Daruma have a rounded and weighted base that enables them to always right themselves when pushed over. For this reason, they were formerly called *okiagari* (“stand-up”) dolls, which was also what people would shout when the dolls were flung into homes. They symbolize the belief that a person can always get up after a failure, and Hime Daruma embodied both family happiness and prosperity in business.

Hime Daruma fell out of fashion in the first half of the 1900s but were revived in the 1950s by a local resident named Goto Tsuneto, who thought the resolute dolls would be the perfect symbol for Japan's recovery from the destruction of World War II. Today, the dolls are made to order by the Goto family, who still reside in the city. Hime Daruma are often given as gifts to new businesses to wish them success.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

姫だるま

竹田市を訪れると、商店や飲食店、さらには豊後竹田駅構内でも、優しく微笑む紅白のだるまが目にとまるはずだ。この「姫だるま」は竹田独特のもので、町の文化の一部となっている。縁起物とされるだるまは日本全国にあるが、そのほとんどが男性であるのに対し、姫だるまは女性だ。その歴史は江戸時代（1603-1867）にさかのぼり、新年を祝うために家に投げ込まれる伝統的なものだった。

姫だるまは台座が丸く重みがあるため押し倒すことができず、叩いてもすぐに元に戻る。そのため、かつては「起き上がり」とも呼ばれ、家に投げ込まれた際には「起き上がり」と叫ばれた。姫だるまは失敗しても必ず立ち直れるという信念の象徴であり、家庭円満や商売繁盛の象徴でもあった。

姫だるまの伝統は1900年代前半に廃れたが、1950年代に竹田市の後藤恒人によって復活した。後藤は、この「諦めない」だるまが日本の戦後復興の象徴としてぴったりだと考えた。現在、姫だるまは竹田市在住の後藤家によりオーダーメイドで作られている。新事業の成功を祈願して贈られることが多い。

地域番号	031	協議会名	皇居三の丸尚蔵館	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
031-001	三の丸尚蔵館の概要（パンフ用）		250	パンフ
031-002	春日権現験記絵（パンフ用）		300	パンフ
031-003	キャプション		150	パンフ
031-004	三の丸尚蔵館の概要（ウェブ用）		600	ウェブ
031-005	春日権現験記絵第1巻の第2段の場面解説		100	施設内展示
031-006	春日権現験記絵第1巻の第3段の場面解説		100	施設内展示
031-007	春日権現験記絵第12巻の第1段&第2段の場面解説		100	施設内展示
031-008	春日権現験記絵第12巻の第3段の場面解説		100	施設内展示
031-009	春日権現験記絵第19巻の第1段の場面解説		100	施設内展示
031-010	春日権現験記絵第19巻の第2段の場面解説		100	施設内展示
031-011	蒙古襲来絵詞の第5紙から第8紙（季長、生の松原の石築地の前を通過する）場面解説		100	施設内展示
031-012	蒙古襲来絵詞の第9紙から第12紙（季長の兵船、生の松原から鷹島に向かう）場面解説		100	施設内展示
031-013	蒙古襲来絵詞の第18紙から第20紙（鎮西御家人の兵船、敵船に向かう）場面解説		100	施設内展示
031-014	蒙古襲来絵詞の第21紙から第27紙（季長、敵船に乗り込み蒙古兵を討取る）場面解説		100	施設内展示

031-001

Treasures of the Imperial Family: Sannomaru Shozokan

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】 三の丸尚蔵館の概要（パンフ用）

【想定媒体】 パンフ

できあがった英語解説文

Treasures of the Imperial Family: Sannomaru Shozokan

Opened in 1993, the Museum of the Imperial Collections Sannomaru Shozokan contains thousands of priceless artworks that were passed down over centuries by the Imperial Family. The museum's collection ranges from calligraphy, handscrolls, and folding screens to sculptures, ceramics, and swords. Items and artwork used by Emperor Showa (1901–1989) and some of his siblings are also part of the collection. Most pieces are displayed only for a limited time to protect them from light and humidity. Conservation is an ongoing challenge, as many of the pieces are made from wood, paper, or silk and are extremely fragile.

Sannomaru Shozokan has no permanent exhibits; rather, the artwork on display is frequently rotated. Even so, fewer than half of the pieces in the Shozokan's collection have been shown to the public—leaving thousands of never-before-seen treasures awaiting their turn. No two exhibitions are the same, and visitors may never see the same artwork twice.

The museum is currently undergoing renovations that are due to finish in 2026. Part of the new museum building was completed and opened to the public in 2023. The new Shozokan is designed to echo the style of the Imperial Palace, blending modern simplicity with traditional architectural elements, such as diamond-patterned motifs, the verdigris of the copper roofs, and decorative chains that funnel rainwater from the eaves.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

皇室の宝物：三の丸尚蔵館

1993年に開館した三の丸尚蔵館には、何世紀にもわたって皇室が受け継いできた日本で最も貴重な傑作があります。博物館のコレクションは、書道、絵巻物、屏風から彫刻、陶器、刀にまで及びます。昭和天皇(1901-1989)と彼の兄弟姉妹がお使いになられた品もコレクションの一部です。ほとんどの作品は、光や湿気から保護するために限られた時間だけ展示されています。保存と修復は、多くの作品が木、紙、または絹で作られており、非常に壊れやすいため、継続的な課題です。

三の丸尚蔵館には常設展示はありません。むしろ、展示されている作品は頻繁に入れ替わります。それでも、一般に公開されてきたのは尚蔵館のコレクションの半分未満であり、これまでに見たことのない何千もの宝物が順番を待っています。展示内容が全く同じということはなく、訪問者は同じ作品を2回見ることはないかもしれません。

博物館は新たな施設の建設が進められており、2023年に一部開館し、2026年に全館開館を予定しています。新しい尚蔵館は、皇居のスタイルを反映して設計されており、モダンなシンプルさと、ダイヤモンド模様の装飾、緑青の屋根、軒からの雨水を導く装飾的な鎖などの伝統的な建築要素をブレンドしています。

031-002

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity (Kasuga Gongen Genki-e)

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】春日権現験記絵（パンフ用）

【想定媒体】パンフ

できあがった英語解説文

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity (Kasuga Gongen Genki-e)

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, or the *Kasuga Scrolls*, is a set of fourteenth-century handscrolls (*emaki*) depicting stories of the five deities that are collectively known as the Kasuga Gongen. *Emaki* depict stories through a combination of pictures and text that is revealed from right to left as the scroll is unrolled. *Illustrated Miracles of the Kasuga Deity* contains a wide range of genre stories from religious episodes to historical tales brimming with action, adventure, and miraculous events. The aristocrat Saionji Kinhira (1264–1315) commissioned the scrolls as an offering to the deities of Kasuga Taisha Shrine in Nara, and they were completed around 1309.

Kinhira was the head of the Saionji family, which was a branch of the powerful and aristocratic Fujiwara family. In the beginning of the fourteenth century, Kinhira became involved in a dispute with Retired Emperor Gouda (1267–1324), and his position in the imperial court became unstable, culminating in his dismissal in January of 1306. Two months later, however, he had regained his courtly position, and in 1309 he was promoted to Minister of the Left (in practice, the most powerful role in the courtly bureaucracy). Kinhira's good fortune at court after the near destruction of his political career instilled in him a deep sense of gratitude and inspired him to commission this set of splendid scrolls for Kasuga Taisha, the patron shrine of the Fujiwara family.

The *Kasuga Scrolls* are considered to be a masterpiece of the *emaki* medium. The court artist Takashina Takakane (dates unknown) undertook the painting of *Illustrated Miracles of the Kasuga Deity*, producing 20 scrolls of stories describing the miracles associated with the Kasuga deities. As befit a religious offering, the scrolls were painted on silk instead of paper. In addition, they are exceptionally large and are difficult to unroll by hand. This was not an issue, however, as the scrolls were

dedicated to Kasuga Taisha and were never meant to be read regularly.

Since the *Kasuga Scrolls* were rarely opened, they are remarkably well preserved, retaining their original vivid colors. Takakane's paintings are lauded for their remarkable detail and faithful rendering of architecture. From light snow dusting autumn forests at the turn of the season to a humorous depiction of a man tossing out foul-tasting food, the scrolls reveal charming surprises and a reverence for the commonplace minutiae of life.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

春日大社の伝説

春日権現の伝説、または春日巻物は、総称して春日権現として知られている5つの神の物語を描いた14世紀の手巻(絵巻)のセットです。絵巻は、絵巻物を広げると右から左に現れる絵とテキストの組み合わせで物語を描きます。春日権現の伝説には、アクションや冒険譚から宗教的なエピソードや歴史物語まで、幅広いジャンルの物語が含まれています。貴族の西園寺公衡(1264-1315)が奈良の春日大社への供物として依頼し、1309年頃に完成しました。

公衡は、強力で貴族的な藤原家の支流であった西園寺家の当主でした。14世紀初頭、公衡は後宇多天皇(1267-1324)との論争に巻き込まれ、朝廷での地位が不安定になり、1306年1月に解任されました。しかし、2か月後、彼は宮廷の地位を取り戻し、1309年に左大臣に昇進しました(実際には、宮廷での最高職)。彼が政治的地位から転落した後の、宮廷での公衡の幸運は、彼に深い感謝の気持ちを植え付け、藤原家の氏社である春日大社に献上するこの素晴らしい巻物を依頼するに至りました。

春日絵巻は、絵巻の傑作と見なされています。宮廷画家の高階隆兼(生没年不詳)が春日権現験記絵の制作を担当し、春日の神々の奇跡に関するさまざまなストーリーの巻物を20巻制作しました。宗教的な供物にふさわしいように、巻物は紙の代わりに絹に描かれました。さらに、巻物は非常に大きいため、手で広げるのが難しくなりました。しかし、巻物は春日大社に捧げられており、定期的に読むことを意図したものではなかったため、これは問題ではありませんでした。

春日権現験記絵はめったに開かれなかったため、その内容は驚くほどよく保存され、元の鮮やかな色彩を保っています。隆兼の絵は、細部にまでわたり忠実に描かれた建築物に定評があります。季節の変わり目に秋の森に軽い雪が舞う様子や、まずい食べ物を捨てる男たちのユーモラスな描写など、巻物は魅力的な驚きと、人生のありふれた日常への畏敬の念を明らかにします。

031-003

Captions

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】 キャプション

【想定媒体】 パンフ

できあがった英語解説文

Captions



(Max 20 Words)

Two-tiered lacquer box that originally held the *Kasuga Scrolls*. The lid is decorated with wisteria flowers, the crest of the Fujiwara family.



(Max 10 Words)

Example of Takashina Takakane's skill in depicting architecture (scroll 1).



(Max 10 Words)

Portrait of Saionji Kinhira, who commissioned the *Kasuga Scrolls*.

What is the Kasuga Deity?

The Kasuga Deity, also known as Kasuga Daimyojin or Kasuga Gongen, refers to both the five deities of Kasuga Taisha Shrine and a single divine entity made up of the five. In their separate forms, the deities are: Takemikazuchi no Mikoto, Futsunushi no Mikoto, Ame no Koyane no Mikoto, Himegami, and Ame no Oshikumone no Mikoto. The deer that can be seen around Nara are considered to be the divine messengers of the Kasuga Deity.

2 Proposals for the Pamphlet's Title

A Masterpiece of Devotion: *Illustrated Miracles of the Kasuga Deity*

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity: A Vibrant Glimpse into the Mundane and Miraculous

上記解説文の仮訳（日本語訳）

キャプションの仮訳

1. 春日権現験記絵 収納時の姿（修理前）：10~20 words

漆箱は元々春日権現験記絵を保管していました。蓋は藤原家の象徴である藤の花で飾られています。

2. 春日権現験記絵 巻一第三段（部分図）：10 words

高階隆兼の建築物描写の腕前を示す例（巻一）。

3. 春日権現験記絵 発願者・西園寺公衡の肖像：10 words

春日権現験記絵の発願者である西園寺公衡の肖像。

春日権現の説明

春日権現は春日大社に祀られており、5つの別々の神々と、春日大明神と呼ばれる包括的な一つの神を指します。春日大明神を構成する神々は、建御雷之命（たけみかづちのみこと）、経津主命（ ）、天児屋命（あめのこやねのみこと）、比売神（ひめがみ）、天押雲根命（あめのおしくもねのみこと）です。奈良周辺で見かける鹿は、春日権現の神使とされています。

Pamphlet Title (2案)

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity: A Vibrant Glimpse into the Mundane and Miraculous

春日権現験記絵：ありふれた日常と奇跡に満ちた、生き生きとした瞬間

A Masterpiece of Devotion: *Illustrated Miracles of the Kasuga Deity*

信仰の傑作：春日権現験記絵

031-004

Treasures of the Imperial Family: Sannomaru Shozokan

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】 三の丸尚蔵館の概要（ウェブ用）

【想定媒体】 パンフ

できあがった英語解説文

Treasures of the Imperial Family: Sannomaru Shozokan

Passed down over generations by members of the Imperial Family, many of the items at the Museum of the Imperial Collections Sannomaru Shozokan rank among Japan's most valuable masterpieces. The museum's collection ranges from calligraphy, handscrolls, and folding screens to sculptures, ceramics, and swords.

The museum was first established within the grounds of the Imperial Palace in 1989, when the Imperial Family donated approximately 6,500 pieces of art to the government following the passing of Emperor Showa (1901–1989). It was opened to the public in 1993. Additional gifts from Prince Chichibu, Empress Kojun, Prince Takamatsu, and Prince Mikasa have since expanded the museum's collection. Many of these pieces are made from perishable materials such as wood, paper, or silk. Because age has made them extremely fragile, most pieces are put on display only for a limited time.

Fewer than half of the pieces in the Shozokan's collection have been shown to the public—leaving thousands of never-before-seen treasures awaiting their turn. Each exhibition thus becomes a unique experience that calls to mind the Japanese concept of *ichigo ichie*. Often translated as “a once-in-a-lifetime encounter,” *ichigo ichie* refers to life's fleeting, unrepeatable moments. Because no two exhibitions are the same, visitors may never see the same artwork twice.

The collection can be split up into three main categories: pre-1868 artworks, post-1868

Japanese artworks, and post-1868 non-Japanese artworks. The pre-1868 portion of the collection contains works of art that date to at least the fourth century BCE, but many of the pieces were obtained during the Edo period (1603–1867), when Japan was ruled by the Tokugawa shogunate. With the restoration of the emperor’s political power in 1868, the Imperial Family commissioned many works of art as part of an effort to modernize the nation. The new Japanese state was also gifted many items from other countries as it expanded diplomatic relations after more than 200 years of isolation.

The Shozokan is located within the larger Imperial Palace grounds, which encompass what was once Edo Castle, the seat of power for the Tokugawa shogunate. After the end of the shogunate in 1868, the emperor was restored to power and moved from Kyoto to the new capital, Tokyo, taking up residence in Edo Castle. Many locations within the modern Imperial Palace retain names from the castle’s original structures, including Sannomaru Shozokan. The museum was built within what was once Edo Castle’s *sannomaru*, or third bailey, the area bordered by the castle’s outermost fortified wall.

The renovated museum was designed to echo the style of the Imperial Palace. The new building blends modern simplicity with traditional architectural elements, such as diamond-patterned motifs on the walls, the verdigris of the copper roofs, and decorative chains that funnel rainwater from the eaves.

The Shozokan shares with the public a trove of art that went largely unseen for centuries. Following the death of Emperor Showa and the beginning of the Heisei era in 1989, the Imperial Family made special effort to become closer to the general populace. The founding of the Shozokan was a significant step. The museum’s large collection provides a record of the history and aesthetic tastes of Japan’s Imperial Family and stands as a monument to their central role in the arts for over a millennium. The same works of art that delighted an emperor’s eye a thousand years ago may now be seen by everyone in Sannomaru Shozokan.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

皇室の宝物：三の丸尚蔵館

数世紀にわたって皇室の一族によって受け継がれてきた三の丸尚蔵館の多くのアイテムは、日本で最も貴重な傑作の中に数えられます。この美術館のコレクションには、書道、巻物、屏風から彫刻、陶器、刀にまで及びます。

美術館は最初に皇居の敷地内に1989年に設立されました。その際、昭和天皇の崩御を受けて、皇室から約6,500点の美術品が国に寄贈されました。1993年に一般公開されました。秩父宮妃、香純皇后、高松宮妃、三笠宮妃からの追加の贈り物は、それ以来、博物館のコレクションを拡大しました。これらの多くは木材、紙、絹などの傷みやすい素材で作られており、非常に壊れやすいですそのため、多くの作品は限られた期間のみ展示されます。

一般公開されてきたのは、尚蔵館のコレクションの作品の半分未満であり、これまでに見たことのない何千もの宝物が順番を待っています。その結果、三の丸での各展示は、日本のことわざ「一期一会」を思い起こさせるユニークな体験となります。このことわざは「一生に一度の出会い」と訳され、つかの間の人生の繰り返せない瞬間、特に卓越した芸術との出会いの貴重さを表しています。三の丸での展示は全く同一のものはありませんし、訪れる人々は同じ作品を見ることはないかもしれません。

コレクションは、1868年以前の作品、1868年以降の日本の作品、1868年以降の日本以外の作品の3つの主要なカテゴリに分けることができます。1868年以前制作の作品群には少なくとも紀元前4世紀にさかのぼる芸術作品が含まれていますが、多数の作品は徳川幕府に支配された江戸時代(1603–1867)に手に入れられたものです。1868年に天皇が政治的実権を取り戻したとき、皇室は国の近代化の一環として多くの芸術作品を依頼しました。新しい日本の国家はまた、200年以上の鎖国の後に外交関係を拡大したため、他の国から多くのアイテムを贈られました。

尚蔵館は、徳川幕府(1603–1867)の権力の座であった江戸城を含む、より大きな皇居の敷地内にあります。1868年の幕府の倒壊後、天皇は京都から新たな首都である東京へ移り、江戸城に居を構えました。現代の皇居内の多くの場所は、かつての城の構造物からの名前を引き継いでおり、その中に三の丸尚蔵館も含まれます。博物館は、かつて江戸城の三ノ丸、つまり城の最も外側の要塞壁に隣接するエリアに建てられました。

改装された博物館は、現在の宮殿のスタイルを反映するように設計されました。新しい建物は、モダンなシンプルさと、ダイヤモンド模様の装飾、緑青の屋根、軒からの雨水を導く装飾的な鎖などの伝統的な建築要素とを組み合わせています。

尚蔵館は、何世紀にもわたってほとんど見られなかった芸術の山を一般の人々と共有しています。昭和天皇が崩御され1989年に平成時代が始まり、皇室は一般の人々に近づくために特別な努力をしました。尚蔵館の創設は大事な一歩でした。この美術館の大規模なコレクションは、日本の皇室の歴史と芸術的嗜好の記録を提供し、千年以上にわたって芸術において彼らが中心的な役

割を果たした象徴となっています。千年前に天皇の目を楽ませたのと同じ芸術作品を、今日では三の丸尚蔵館の誰もが見ることもできるかもしれません。

031-005

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, Volume 1 Scene 2

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】春日権現験記絵第1巻の第2段の場面解説

【想定媒体】施設内展示

できあがった英語解説文

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, Volume 1 Scene 2

The aristocrat Fujiwara no Mitsuhiro meets a mysterious noblewoman in a bamboo grove near the Yamato River. She is wearing numerous layers of robes, like those worn by high-ranking women of the court. The noblewoman tells Mitsuhiro that the spot where she is sitting will bring fortune and prosperity to the Fujiwara clan. She then reveals herself to be Himegami, the fourth and only female deity of Kasuga Taisha Shrine. Mitsuhiro, believing her words, constructs a new residence at the place where Himegami appeared.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

『春日権現験記絵』（第1巻 第二段）

貴族藤原光弘は、大和河の近くの竹の森で謎の貴婦人に出会う。彼女は、宮廷の高位の女性が着ているような、何層もの衣服を着ています。貴婦人は光弘に対して、彼女が座っている場所が藤原一族に幸運と繁栄をもたらすと告げる。そして、彼女は自身が春日大社の第四神で唯一の女性の神である比売神だと明らかにする。光弘は比売神の言葉を信じ、比売神が現れた場所に家族のための新しい家を建てる。

031-006

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, Volume 1 Scene 3

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】春日権現験記絵第1巻の第3段の場面解説

【想定媒体】施設内展示

できあがった英語解説文

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, Volume 1 Scene 3

Time generally flows from right to left in illustrated handscrolls, but this unusual composition presents two scenes in reverse chronological order. The events depicted on the left side of the illustration occur first: Fujiwara no Yoshikane, who is living in the house built by his ancestor Mitsuhiro, meets Himegami in a dream. Himegami again appears as a noblewoman, and she informs Yoshikane that the bamboo beside his house is the source of the Fujiwara clan's prosperity. Yoshikane vows to never cut the bamboo and commissions the construction of a shrine in gratitude for Himegami's message. The right-hand side of the illustration depicts the builders at work. This scene is lauded for its accurate and detailed depictions of contemporary construction techniques.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

『春日権現験記絵』（第1巻 第三段）

絵巻物では通常、時間は右から左に流れますが、この異例の挿絵は逆の年代順で2つの場面を示しています。挿絵の左側が最初に起こる出来事です：藤原吉兼は、先祖の光弘によって建てられた家に住んでおり、夢の中で比売神に出会います。比売神は再び貴婦人として現れ、彼女は家のそばの竹は藤原家の繁栄の源であると言います。吉兼は絶対に竹を切らないと近い、感謝の気持ちから、吉兼は春日大社の建設を依頼します。これは挿絵の右側に描かれています。この挿絵は、細部の詳細さと当時の建設技術の正確な描写によって注目されています。

031-007

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, Volume 12 Scenes 1 & 2

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】春日権現験記絵第12巻の第1段&第2段の場面解説

【想定媒体】施設内展示

できあがった英語解説文

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, Volume 12 Scenes 1 & 2

Zoshun (1104–1180), the head monk of Kofukuji Temple, is dreaming. In the dream, he sees the first deity of Kasuga Taisha Shrine, Takemikazuchi, stepping out of a palanquin. At the time, Kofukuji and Kasuga Taisha were closely interlinked, as they served as the family temple and tutelary shrine of the Fujiwara clan, respectively. Takemikazuchi scolds Zoshun for never visiting Kasuga Taisha, and Zoshun, though he initially tries to defend himself, grows remorseful. Later, in Scene 2, four deer appear in the doorway at Kofukuji to listen as Zoshun recites Buddhist sutras, implying that Zoshun has followed Takemikazuchi's instructions. Deer are considered divine envoys of the five Kasuga deities, and their presence in the scene indicates Zoshun has gained the deities' approval.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

『春日権現験記絵』（第12巻 第一段、第二段）

興福寺の住職、蔵俊（1104–1180）が夢を見えています。その夢の中で、彼は春日大明神の第1の神、タケミカツチが籠から出てくる様子を見ます。この時期、興福寺と春日大社は相互対応関係にあり、共に藤原家の氏神を祀っていました。タケミカツチは、蔵俊が春日大社を訪れていないことを叱責し、蔵俊は最初に弁解を試みますが、後に悔い改めます。シーン2では、4頭の鹿が興福寺の入口に現れて蔵俊が仏教経典を唱える様子を聞いており、これは蔵俊がタケミカツチの指示に従ったことを示唆しています。鹿は春日大社の5柱の神の使いとされ、この場面での彼らの存在は、蔵俊への神々の承認を示しています。

031-008

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, Volume 12 Scene 3

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】春日権現験記絵第12巻の第3段の場面解説

【想定媒体】施設内展示

できあがった英語解説文

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, Volume 12 Scene 3

This scene depicts the dream of Echin (1118–1169), a devout monk from Todaiji Temple who visited Kasuga Taisha Shrine every day. In his dream, Echin sees the third deity of Kasuga Taisha appearing as the bodhisattva Jizo riding in an oxcart. The cart is followed by yellow-robed divine attendants and a number of deer, emphasizing the animals' connection with the Kasuga deities. As Jizo passes through the sacred torii shrine gate, he tells Echin that Echin's devotion has been sufficient, and that he is temporarily leaving to give aid to others elsewhere, implying his later return. Stylized mist, a common pictorial device in illustrated handscrolls, gathers around the trees, adding depth to the scene.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

『春日権現験記絵』（第12巻 第三段）

この場面では、東大寺から訪れる熱心な僧、恵珍（1118–1169）の夢が描かれています。彼は毎日春日大社を訪れていました。彼の夢の中で、恵珍は春日大明神の第3の神、地蔵菩薩としての姿をしたものを見ます。地蔵菩薩は牛車に乗っています。牛車の後ろには黄色い袈裟を着た神聖なる供奉者や多くの鹿が続いており、これによって動物たちと春日大明神との関連性が強調されています。地蔵菩薩が神聖な鳥居を通り抜けるとき、彼は恵珍に、恵珍の献身は十分であり、一時的に他のところへ発つが、最終的には戻ることが約束すると告げています。絵巻物でよく見られる絵画の手法である霞（かすみ）が木々の周りに集まり、シーンに奥行きを加えています。

031-009

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, Volume 19 Scene 1

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】春日権現験記絵第19巻の第1段の場面解説

【想定媒体】施設内展示

できあがった英語解説文

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, Volume 19 Scene 1

This sprawling landscape of late-autumn trees powdered with the first snows of winter represents the sacred dwelling place of the Kasuga deities. The scene occurs immediately after bandits steal fourteen sacred mirrors from Kasuga Taisha Shrine and is thought to portray the silent rage of the gods. It functions as a quiet pause before the shocking violence that immediately follows, as warrior monks from Kofukuji Temple attack the bandits and recover three of the stolen mirrors. The monks' involvement emphasizes the spiritual relationship between Kofukuji and Kasuga Taisha, the family temple and tutelary shrine of the Fujiwara clan, respectively.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

『春日権現験記絵』（第19巻 第一段）

冬の最初の雪で覆われた木々の広がる晩秋の風景は、春日大明神の住まう神聖な場所を表しています。この場面は、盗賊たちが春日大社から14の神聖な鏡を盗んだ直後に現れ、このイメージは神々の静かな怒りを描いているとされています。また、すぐに後に続く戦いの前に静かな一時の休息の場面であり、興福寺の武僧たちが盗賊たちを襲撃し、盗まれた鏡のうち3つを取り戻す場面へと展開します。僧侶たちの援助は、藤原氏の氏神を祀る興福寺と春日大社の精神的な関係を強調しています。

031-010

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, Volume 19 Scene 2

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】春日権現験記絵第19巻の第2段の場面解説

【想定媒体】施設内展示

できあがった英語解説文

Illustrated Miracles of the Kasuga Deity, Volume 19 Scene 2

Here the story returns to a scene of tranquility, in stark contrast to the violence of the prior battle. A rainbow appears over a small Buddhist hall in Tokiwa in what is now northwestern Nara Prefecture. Curious passersby gather around the hall. Inside, they discover a bag hanging over the altar and open it to find three more of the sacred mirrors. A note attached to the bag claims the mirrors were stolen by Masayasu no Kaja of Ryofukuji Temple. The passersby take the bag of mirrors and set out to entrust them to the monks at Konshoji Temple.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

『春日権現験記絵』（第19巻 第二段）

ここでは、前の戦闘場面とは対照的に、平穏な場面に物語が戻ります。現在の奈良県北西部にある常葉の小さな仏堂の上に虹が現れ、好奇心旺盛な通行人たちを引き寄せます。中に入ると、彼らは祭壇の上にぶら下がっている3つの神聖な鏡を含む袋を見つけます。袋に添付されたメモによると、鏡は良福寺の政安冠者によって盗まれました。通行人は鏡の袋を取り、金勝寺の僧侶に託そうとしました。

031-011

Illustrated Account of the Mongol Invasions, Volume 2 Sections 5 through 8

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】 蒙古襲来絵詞の第5紙から第8紙（季長、生の松原の石築地の前を通過する） 場面解説

【想定媒体】 施設内展示

できあがった英語解説文

Illustrated Account of the Mongol Invasions, Volume 2 Sections 5 through 8

The warrior Takezaki Suenaga (b. 1246) from Higo Province (now Kumamoto Prefecture in Kyushu), marches with his retinue past Kikuchi Takefusa (1245–1285), a powerful warrior from the same province, who is sitting on a defensive wall with his men. As Suenaga passes the wall, he calls upon Takefusa to bear witness to his valor in the imminent clash with the invading Mongols. The Mongols invaded Japan in 1274 and again in 1281. One of Suenaga's men holds a boat hook, foreshadowing the naval battle soon to come. The names of notable figures are written above their heads, and Suenaga's name is written in red.

The scrolls were likely commissioned by Suenaga to be an illustrated historical record of his valor and bravery in battle against the Mongols. The scrolls are notable for their contemporary depictions of the invasion, particularly in the detailed renderings of the armor and horses of the warriors.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

『蒙古襲来絵詞』第2巻 第5紙～第8紙

竹崎季長（1246年生まれ）は肥後国（現在の九州熊本県）出身の武士であり、彼の従者と共に、同地域出身の強力な武士である菊池武房（1245–1285）とその部下たちが防御壁に座っている前を通り過ぎながら進軍しています。季長が壁を通るとき、侵略するモンゴル軍との差し迫った戦いで、彼の勇敢さを証言するよう武房に伝えています。モンゴルは1274年と1281年に日本へ侵攻しました。季長の従者の1人がボートフックを持っているのが見え、まもなく行われる海戦を予告しています。重要なキャラクターの名前は、各人の頭上に書かれており、季長の名前は赤いインクで書かれています。

この絵巻物は、モンゴルとの戦いにおける彼の勇気の歴史的記録として、未永が依頼した可能性があります。巻物は、特に戦士の鎧と馬の詳細な描写など、当時の侵略の描写として注目に値します。

031-012

Illustrated Account of the Mongol Invasions, Volume 2 Sections 9 through 12

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】 蒙古襲来絵詞の第9紙から第12紙（季長の兵船、生の松原から鷹島に向かう）場面解説

【想定媒体】 施設内展示

できあがった英語解説文

Illustrated Account of the Mongol Invasions, Volume 2 Sections 9 through 12

Suenaga's men leave Ikinomatsubara for Mikuriya to meet the invading Mongol fleet. The warriors sit in front, identifiable by their armor, while boatmen row in the back. Notice the variety of facial expressions within this small group. Stylized clouds of mist are a common pictorial device in illustrated handscrolls and are used to add depth to the scene. Suenaga has already sailed ahead, impatient to reach the Mongol forces. His absence from the scene suggests the part of the illustration where he appears has been lost. The missing portion may not have been lost to damage, however, as particularly striking sections of handscrolls were occasionally cut out and reframed on hanging scrolls as independent works of art.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

『蒙古襲来絵詞』第2巻 第9紙～第12紙

季長の従者たちは、生の松原を出て御厨に向かい、侵略するモンゴル軍と対面します。武士たちは前に座り、鎧で識別される一方、船頭たちは後ろで漕ぎます。この小さなグループ内にはさまざまな表情が見られることに注目してください。絵巻物で一般的な絵画の手法である霞の雲が、シーンに奥行きを加えています。季長はこの船にはおらず、早くモンゴル軍に到達したいとしばれを切らし、すでに先に出航しています。彼の不在は、彼が登場するはずの巻物の一部が失われたことを示唆しています。しかし、欠けている部分は、絵巻の特に印象的な部分を切り取り、掛け軸などとして再額装する事があったため、損傷によって失われた訳ではない可能性があります。

031-013

Illustrated Account of the Mongol Invasions, Volume 2 Sections 18 through 20

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】 蒙古襲来絵詞の第18紙から第20紙（鎮西御家人の兵船、敵船に向かう） 場面解説

【想定媒体】 施設内展示

できあがった英語解説文

Illustrated Account of the Mongol Invasions, Volume 2 Sections 18 through 20

This scene depicts groups of warriors in boats rowing out to meet the invading Mongol fleet. Takezaki Suenaga (b. 1246), the primary figure in the narrative, is not depicted as he has already sailed ahead according to the text. The lack of a scene showing Suenaga in a boat headed towards the Mongol fleet suggests that the section of the volume that included his ship has been lost. Notice the considerable attention to detail given to the armor and facial expressions of the warriors.

The handscrolls were likely commissioned by Suenaga to be an illustrated historical record of his valor and bravery in battle against the Mongols. Made only a few years after the actual Mongol invasions, the illustrations are an invaluable contemporaneous record of the battle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

『蒙古襲来絵詞』第2巻 第18紙～第20紙

この場面では、ボートに乗った武士たちが、侵略するモンゴル軍に向かって航海している様子が描かれています。巻物の中心的人物である武士、竹崎季長（1246生まれ）は描かれておらず、詞によると、すでに前方に漕いで行っています。この場面や他の船の場面での季長の不在は、彼の船を含む巻物の一部が失われたことを示唆しています。武士たちの鎧や顔の表情の細部に相当な注意が払われていることに注目してください。

この絵巻物は、モンゴルとの戦いにおける彼の勇気の歴史的記録として、未永が依頼した可能性があります。この巻物は、モンゴル侵攻のわずか数年後に制作されたため、この絵は、貴重な当時の戦いの記録でもあります。

031-014

Illustrated Account of the Mongol Invasions, Volume 2 Sections 21 through 27

皇居三の丸尚蔵館

【タイトル】 蒙古襲来絵詞の第21紙から第27紙（季長、敵船に乗り込み蒙古兵を討取る） 場面解説

【想定媒体】 施設内展示

できあがった英語解説文

Illustrated Account of the Mongol Invasions, Volume 2 Sections 21 through 27

Having reached the Mongol fleet, Suenaga charges onto an enemy ship and grapples with a Mongol general as his fellow warriors climb onto the ship after him. Suenaga had boarded a faster ship instead of waiting for his own troops (who had departed late). In his haste, he had left without donning all his armor. To protect his head, Suenaga has taken one of the greaves from his legs and tied it on as a substitute helmet. Here you can see the greave falling from his head during the skirmish. This scene provides a realistic depiction of events during the battle, including the design of the Mongol ships and their naval tactics.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

『蒙古襲来絵詞』第2巻 第21紙～第27紙

モンゴル軍に到達した季長は、モンゴルの船に突撃し、敵将と組み合う中、仲間も彼の後に続いて船に乗り込んでいます。季長は自身の部隊を待つ代わりに（彼の部隊は遅れて出発した）、速度のある他の船に乗り込みました。急を要していたことから、鎧をすべて着用せずに出発しました。頭を守るために、季長は足の甲冑を一つ外して代わりに兜として縛りました。ここで、戦闘中にその甲冑が彼の頭から落ちるのが見えます。この場面では、モンゴルの船のデザインや戦術を含む、戦いの写実的な描写を見ることができます。